

一般国道 18 号（坂城更埴バイパス）

埋蔵文化財発掘調査報告書 3

—千曲市内その 3—

ひがしじょう
東 條 遺 跡 ほか

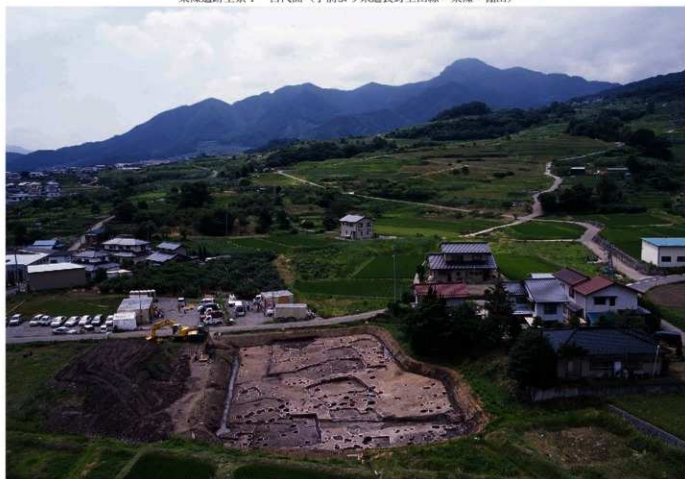
《本文編》

2012.3

国土交通省関東地方整備局
長野県埋蔵文化財センター



東條遺跡全景1 古代面（手前より県道長野上田線・東條・棚田）



東條遺跡全景2 古代面（手前より東條・棚田・冠着山）



東條遺跡 古代 SB10・SB15 (完掘)



東條遺跡 古代 SB39 出土土器 (7世紀)



東條遺跡全景3 中世面（東條・棚田・冠着山・右端は県道狭捨停車場線）



東條遺跡全景4 中世面（手前より東條・県道長野上田線・千曲川）



東條遺跡 中世 SX15 (検出)



SX03 (手前)・SX04 (奥) の完掘



SK1741の完掘



刀子と漆器皿の出土



鶴丸紋の漆椀



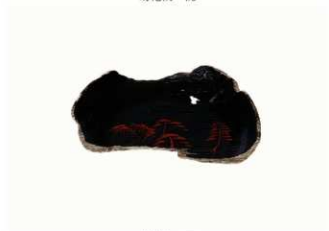
東條遺跡中世面出土漆器（碗・皿・櫛）



菊花紋・碗



秋草紋・碗



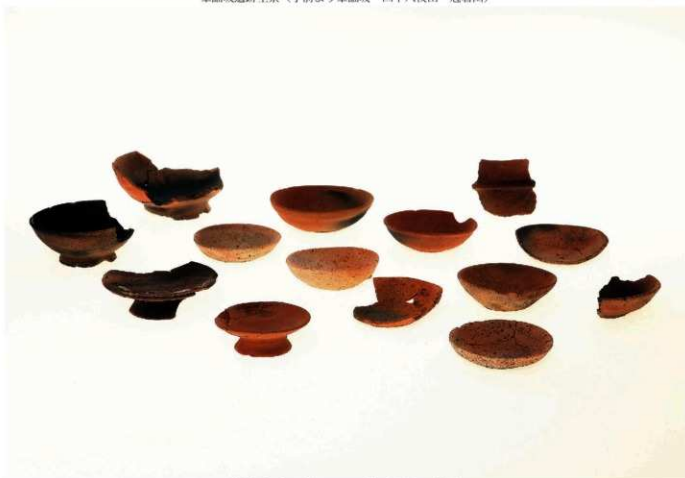
松林紋・皿



秋草紋・皿



峯舘坂遺跡全景（手前より峯舘坂・四十八枚田・冠着山）



峯舘坂遺跡 古代 SB18 出土土器（10世紀）



八幡道跡群遠景（道路建設状況、奥は稲荷山～篠ノ井方面）



東中曽根道跡・西中曽根道跡遠景（四十八枚田と中曽根道跡）



東中曾根遺跡全景



西中曾根遺跡全景（東中曾根・宝鏡沢川・西中曾根）

はじめに

長野県千曲市は、県都長野と東信そして中信地域との結節点にあたります。市の中心部には千曲川が北流し、これに沿って上信越自動車道や長野新幹線、しなの鉄道、篠ノ井線など、多くの幹線が南北に通過する交通の要衝であります。なかでも国道18号線は、東北信を結ぶ大動脈ですが、近年の交通量増加に伴う交通渋滞に悩まされています。国土交通省は、こうした交通障害の緩和策として、上田市から長野市にいたる国道バイパス建設を計画しました。本書は、その一部である坂城更埴バイパスの建設に伴って実施された埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の記録保存の措置に関わる発掘調査報告書です。

発掘調査した遺跡は、千曲川の左岸域に位置し、佐野川により形成された扇状地上に展開する八幡遺跡群（北稲付遺跡、中道遺跡、大道遺跡、社宮司遺跡）と宮川遺跡、さらには嫉捨土石流堆積物により造られた台地端部に立地する峯謡坂遺跡、西中曾根遺跡、東中曾根遺跡、東條遺跡であります。これら遺跡の所在する「八幡」の地は、古代延喜式神名帳に記載される武水別神社（通称お八幡さま）を中心に発達した門前町であり、田毎の月で知られる名勝嫉捨の麓に広がる肥沃な田園地帯でもあります。今回の調査で、八幡遺跡群が古代更級郡の郡衙関連遺跡であることが再確認され、これについては平成18年度に発掘調査報告書をまとめました。つづく東條遺跡ほかの遺跡群の調査では、弥生時代後期から室町時代にかけての集落遺跡を発掘し、「八幡」の地域史を説明できる最良の考古学的資料を得ることができました。とくに東條遺跡は、更級郡衙の運営を支えた古代の集落遺跡として、また中世の街道とされる一本松街道の街道筋、武水別神社の門前に発達した中世の集落遺跡として、今日まで続く「八幡」地区の歴史を解明するに、極めて重要な発見となりました。調査内容の詳細は本書をご覧くださいと思いますが、この成果が広く「さらしなの里」さらには長野県の歴史解明の一助となれば、これにすぐる喜びはありません。

最後に、発掘作業から本報告書刊行にいたるまで、深いご理解とご協力をいただきました国土交通省関東地方整備局、千曲市、千曲市教育委員会、長野県教育委員会をはじめとする関係機関、地元地権者や関係者の皆さま方に対しまして、厚く御礼を申し上げます。

例 言

1. 本書は国道18号坂城更埴バイパス線建設事業にかかわる長野県千曲市所在の峯誦坂遺跡、西中曾根遺跡、東中曾根遺跡、東條遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国土交通省関東地方整備局長野国道事務所の委託を受けた財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施したものである。
3. 遺跡の概要は、県埋蔵文化財センター『年報』22～27を始め、第1章第2節(4)「資料の報告と公開」に示す機会等で行ってきた。内容において本書と違いのある場合は、本書をもって正式見解とする。
4. 本書の図版に使用した地図は、千曲市都市計画図(1:25000)、千曲市遺跡分布図(1:20000)、国土地理院発行の地形図「稲荷山」(1:25000)である。
5. 発掘業務は現場設備等請負契約を川中島建設株式会社・中信建設株式会社・更埴建設株式会社と行ったほか、現地測量等を株式会社アイシーほか第1章第2節2(1)に記した機関と委託契約を行い実施した。
6. 整理業務に関わる出土品の実測(木製品)及び理化学分析は、大成エンジニアリング株式会社及び株式会社パレオ・ラボほか第1章第2節3(1)に示した機関と委託契約を行い実施した。
7. 発掘調査を通して、招へい指導をお願いした諸先生の氏名並びにその内容に関しては、第1章第2節2(1)D、3(1)Dに記述してある。また県埋蔵文化財センターでの発掘体制(P6～P7)及び整理体制(P12～P13)、調査の実施経過等についても第2節に記してある。指導者並びに関係者の官職・所属等は当時のものを記載した。
8. 発掘調査から報告書の刊行まで、以下の機関より協力と助言、指導を頂きました。
国土交通省長野国道事務所 同所笹平出張所 千曲市役所建設部建設課 西部沖土地改良区
奈良文化財研究所 長野県教育委員会文化財・生涯学習課 長野県立歴史館 千曲市教育委員会生涯学習文化財課
9. 本書は本文編1冊、図版編1冊、DVD1枚、附図4枚で構成される。添付のDVDには、各遺跡の遺物観察表と遺構観察表(SKのみ)、科学分析報告書、本書全体のPDFファイルが含まれる。
10. 本書で報告した資料及び記録類一式は、平成23年度まで長野県埋蔵文化財センターが保管し、以後長野県立歴史館に移管し保存する予定である。

凡例

1. 記述・表記の仕方

記録保存の対象となった遺跡については「〇〇遺跡の調査」と表記し、調査対象遺跡の範囲確認については「〇〇遺跡隣接地または〇〇地籍」の調査と表記した。記録保存の内容は、調査期間・調査面積（実面積）・調査担当を記し、立地と調査結果を記述する形式とした。さらに遺構と遺物の概要を示し、遺跡の総括を小結として末尾に記述した。

堆積層位の説明は各遺跡ごとに基本土層をⅠ、Ⅱ・・・で表し、遺構の埋土を1、2・・・で表した。

出土遺物の表記は、添付 DVD 内の遺物観察表中に示した属性観察のほかに、観察留意点を記述した。遺物の分類基準は、土器は2000年県埋蔵文化財センター「第4章時期区分」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書28 更埴条里・屋代遺跡群』に基づき、時期区分（Piii）と凡例の器種分類図（Piv）のように一部変更して行った。木製品の分類は1996年奈良文化財研究所『木器集成図録 近畿原始篇』に基づく。

2. 掲載図の表示の仕方

1) 遺構図

遺構図面に関しては原因修正を経た後にデジタルトレースを行った。

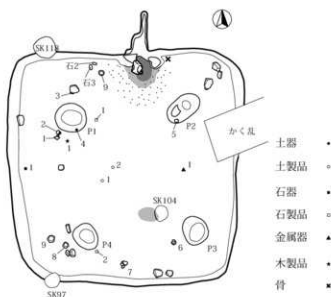
縮尺は、土層柱状図1:40 竪穴住居跡1:60 掘立柱建物跡1:60 1:80 土坑ほか1:40 1:60である。凡例は以下のようなものである。

遺構図

- …… 焼土(K20%)
- …… 火床(K40%)
- …… 炭・灰分布
- …… かく乱(割付全体図)

遺物図

- …… 黒色土器
- 断面塗 …… 須恵器
- …… 赤彩
- …… 木製品欠損
- …… 炭化



使用ソフトはAdobe Illustrator10。上場線を1pt、下場線を0.25ptで描いた。破線は推定線、1点破線は範囲線として使用した。ピットはP～で表した。網掛は火床、焼土や炭化物の分布に用いた。遺構図中の出土遺物は、土器（～）、石器（石～）、木製品（木～）、骨（骨～）で、「～」は取り上げ番号を意味する。単なる礫はSとする。また竪穴住居跡の埋土の記載は柱穴やカマドの記載と別に観察したため、遺構図中の層位番号が同じ表記となっている。参照・活用の折には留意願いたい。土坑等で文中に記載のないすべての遺構属性は添付DVD内に収録してある。ただし整理時に土坑から掘立柱建物跡に組みかえたものがあり、これについては、掘立柱建物跡のピットとして掲載したので土坑観察表中にはない。遺構・遺物の取り扱いの際には気をつけて頂きたい。

2) 遺物図

遺物図面類は、土器・金属器等の実測図を1/2でトレースし、デジタル化した後、網掛・断面塗りを行っ

歴史時代	時期区分	主な特徴	時期区分の対比 (層代遺跡群)
飛鳥時代	7C前半	食膳具の中心は非ロクロ土師器(環・高環・鉢類)で、須恵器は環H類と環蓋H類のみが存在する。貯蔵具に須恵器の甕類があり、煮沸具は土師器の長胴甕と球胴甕、甕がある。	(古墳9期)
	7C後半	食膳具の主体は非ロクロ土師器(環・高環・鉢類)である。須恵器環A類(へら切り・箱形)と環蓋A類が登場し、須恵器環H類・環蓋H類と共存する。貯蔵具、煮沸具とも前時期を継承する。	(古代1期前半)
奈良時代	7C終末 ～ 8C前半	食膳具に須恵器環B類と環蓋B類が登場し、須恵器環H類、環蓋A類とH類は消滅する。合わせて非ロクロ土師器(環・高環・鉢類)が消滅に向かう。須恵器環A類はへら切り手法のみが存在する。貯蔵具では須恵器の壘瓶と甕が消滅し、平瓶に型式変化が起こる。煮沸具では土師器長胴甕のケズリとナデ成形の例が消滅傾向に向かう。	(1期後半・2期)
	8C後半	食膳具では須恵器環A類に糸切り難し手法が現れ、へら切り手法を凌駕していく。須恵器高盤や鉢類が消滅に向かう。新たにロクロ成形の黒色土器A類の環類が出現する。貯蔵具では須恵器甕D類(凸形付四耳甕)や長頸瓶が現れ、煮沸具ではケズリ成形手法の砲弾形の甕や器壁が薄い武蔵型の甕が登場する。	(3期・4期)
平安時代前期	9C前半	食膳具では須恵器環A類が糸切り難し手法のみとなり、軟質のものが次第に主体を占めていく。須恵器環B類と環蓋B類は消滅に向かう。新たに灰軸陶器の椀・皿類が登場し、黒色土器A類さらにはB類の椀・皿類も現れる。灰軸は黒径14号・90号型式がある。貯蔵具では須恵器瓶類が消滅していき、灰軸陶器の瓶類や甕、まれに黒色土器B類の瓶が登場する。煮沸具では鍋やロクロ成形の小甕が登場する。	(6期)
	9C後半	食膳具は須恵器環A類が消滅に向かい、新たにロクロ成形の土師器環A類・椀・皿類が登場する。黒色土器が主体を占め、鉢や盤なども現れる。灰軸陶器に耳皿が出現し、光が丘1号型式が加わる。貯蔵具では須恵器の横瓶や小甕が消滅に向かい、灰軸陶器の平瓶が姿を消していく。煮沸具では武蔵型の甕が消滅に向かう。	(8期)
	10C前半	食膳具は土師器が主体となり、環A類(口径12cm～13cmのA1類が次第に小形化していく)と盤B類が中心を占める。黒色土器環A類と皿類、耳皿は消滅に向かう。灰軸陶器には大原2号型式が加わる。貯蔵具では須恵器甕A類や灰軸陶器広口の瓶、壘甕を残し大半が姿を消す。煮沸具ではハケ調整の甕A類が消滅に向かい、砲弾形の甕とロクロ成形の小甕のみとなる。	(9期)
後期	10C後半	食膳具では土師器環A類に明確な法量分化が現れる。小形化したA1類(口径10cm前後)にA2類(口径15cm前後)が加わる。椀や盤B類にも大小があり、高盤が登場する。黒色土器は皿類が消滅に向かい、椀の大小がある。灰軸陶器には虎渓山1号型式、丸石2号型式がある。貯蔵具では灰軸陶器広口の瓶、壘甕のみが現れる。煮沸具では砲弾形の甕が消滅に向かい、新たに羽釜と羽付き甕が登場する。	(12期・13期)
	11C	食膳具は土師器が中心で、環A1類は器高を縮め皿様に変化していく。黒色土器の椀類は消滅へ向かう。灰軸陶器は明和27号型式、西坂1号型式がある。山茶碗への移行期であり、輸入陶磁器(白磁)が登場する。貯蔵具は灰軸陶器の壘甕、広口の瓶が消滅に向かう。煮沸具は羽釜と羽付き甕が存続する。	(15期)

古代の時期区分と土器の主な特徴

た。すべての遺物は、1:4掲載を原則とし、適宜1:2 1:3 1:6を用いた。柱材など規模の大きな資料は1:8で示したのものもある。木製品は委託実測を中心にを行いそれらはすべてデジタルトレースとした。網掛や土器断面の塗りつぶしは焼き物の種類を示し、赤彩土器、黒色土器、須恵器などを表現した。また炭化物、木製品の欠損などにも同様な表現を用いた。

3) 掲載写真について

写真は調査区の全景、調査状況、土層の状況、また遺構の検出状況、遺物出土状況、断面、完掘状況を可能な限り掲載した。遺物写真は集合、個別写真ともに委託撮影し、遺構内出土資料のうち、実測図掲載個体のおよそ7割程度を使用し、遺構外についてもほぼ同様に扱った。

なお、写真はフィルムからの直接取り込みによりデジタル化し、印刷サイズ400dpiを保持するように統一した。使用ソフトはAdobe社Photoshop CS3を用いた。

金銅具
和刀工銅器



環形器



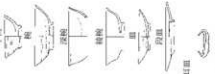
黑色土器A
灰土



黑色土器B
灰土



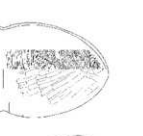
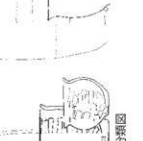
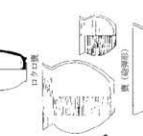
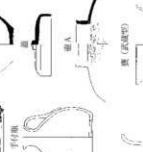
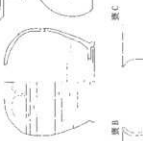
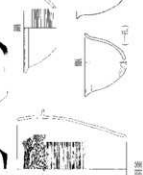
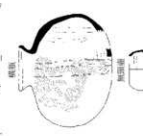
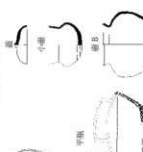
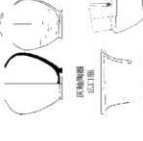
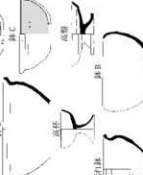
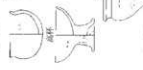
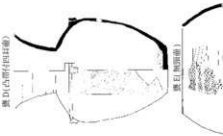
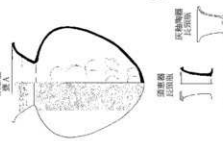
灰陶 (厚胎) 陶器



土器器
灰土



折腹具



古代の土器 器種分類図

本文目次

巻頭図版

はじめに

例言

凡例

本文目次

本文編 挿図目次

本文編 挿表目次

図版編 挿図目次

図版編 写真目次

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 道路建設事業と埋蔵文化財保護の対策	3
1. 一般国道18号線(篠ノ井-上田間)の改築事業の概要	3
2. 埋蔵文化財の保護措置に至る経過	3
第2節 記録保存の措置	4
1. 経過概要	4
2. 発掘作業	4
3. 整理作業	10
4. 発掘調査報告書の作成	16
第2章 発掘調査の概要	17
第1節 峯謡坂遺跡の調査	19
1. 調査の概要	21
2. 遺跡の概要	21
3. 遺構と遺物	22
4. 小結	51
5. 自然科学分析	54
第2節 西中曽根遺跡の調査	69
1. 調査の概要	71
2. 遺跡の概要	71
3. 遺構と遺物	72
4. 小結	79
第3節 東中曽根遺跡の調査	83
1. 調査の概要	85
2. 遺跡の概要	85
3. 遺構と遺物	86
4. 小結	97
※付) 外西川原遺跡(B地区)	99
第4節 東條遺跡の調査	103
1. 調査の概要	105

2.	遺跡の概要	105
3.	遺構と遺物 (古代)	107
4.	小 結 (古代)	174
5.	遺構と遺物 (中世)	178
6.	小 結 (中世)	218
7.	自然科学分析	229
第5節	遺跡範囲の確認調査概要	263
1.	外西川原遺跡隣接地	264
2.	八日市場地籍	264
3.	北田・蛭坪地籍	265
第3章	発掘調査の成果	267
第1節	遺跡を取り巻く環境	269
1.	自然環境	269
2.	歴史環境	272
第2節	遺跡からみた地域の歴史	277
1.	古代的社会の形成	279
2.	古代社会の成立	288
3.	古代社会の展開	295
4.	古代社会の終焉	304
5.	中世社会の形成	310
6.	中世社会の成立	312
7.	中世社会の展開	317
8.	中世社会の終焉	320
第4章	成果の活用と展望	323
第1節	成果の公開、報告と展示	325
1.	公開の必要性	325
2.	公開の手法	325
3.	公開の実践	326
4.	公開の概要	327
第2節	成果の利活用、まちづくり	329
1.	文化立国 (文化立県) をめざして	329
2.	歴史文化基本構想と地域活性化	329
3.	歴史・文化的まちづくりにむけて	332

抄 録
奥 付

本文編挿図目次

第 1 図	記録基準杭等の呼称	5	第 16 図	東條遺跡古墳時代Ⅴ期の集落	281
第 2 図	峯語坂遺跡 土層柱状図	22	第 17 図	東條遺跡の古代Ⅰ期の集落	285
第 3 図	峯語坂遺跡 人骨写真	59	第 18 図	峯語坂遺跡の古代Ⅰ期の集落	287
第 4 図	西中曾根遺跡 土層柱状図	72	第 19 図	東條遺跡の古代Ⅱ期の集落	289
第 5 図	東中曾根遺跡 土層柱状図	86	第 20 図	東條遺跡の古代Ⅲ期の集落	293
第 6 図	外西川原遺跡 (B 地区)	100	第 21 図	東條遺跡の古代Ⅳ期の集落	297
第 7 図	東條遺跡 土層柱状図	106	第 22 図	峯語坂遺跡の古代Ⅳ期の集落	299
第 8 図	東條遺跡 木簡	226	第 23 図	東條遺跡の古代Ⅴ期の集落	301
第 9 図	東條遺跡 烏帽子	227	第 24 図	峯語坂遺跡の古代Ⅴ期の集落	303
第 10 図	東條遺跡出土の獣骨 1	238	第 25 図	峯語坂遺跡の古代Ⅵ期の集落	305
第 11 図	東條遺跡出土の獣骨 2	239	第 26 図	峯語坂遺跡の古代Ⅶ期の集落	307
第 12 図	東條遺跡出土の獣骨 3	240	第 27 図	東條遺跡中世第 2 検出面の集落	315
第 13 図	高尾山山系 (川西地区) の地質略図	270	第 28 図	東條遺跡中世第 1 検出面の集落	319
第 14 図	千曲市 川西地区の遺跡の位置	273	第 29 図	「歴史・文化的風致」を構成すると 考えられる主な要素と空間	334
第 15 図	古代更級郡内の主な遺跡の位置	280			

本文編挿表目次

第 1 表	埋蔵文化財発掘調査の受託費等	3	第 16 表	東條遺跡 木製品製品別樹種一覧	231
第 2 表	峯語坂遺跡出土人骨の歯の計測値と 比較資料	57	第 17 表	東條遺跡 人骨・獣骨類一覧表	235
第 3 表	峯語坂遺跡 獣骨観察表	60	第 18 表	東條遺跡 土器観察表 (古代)	241
第 4 表	峯語坂遺跡 土器観察表	62	第 19 表	東條遺跡 土器観察表 (中世)	248
第 5 表	峯語坂遺跡 土製品観察表	66	第 20 表	東條遺跡 土製品観察表 (古代)	251
第 6 表	峯語坂遺跡 石器観察表	67	第 21 表	東條遺跡 土製品観察表 (中世)	251
第 7 表	峯語坂遺跡 金属器観察表	68	第 22 表	東條遺跡 羽口 ¹ 体観察表 (古代)	251
第 8 表	西中曾根遺跡 土器観察表	81	第 23 表	東條遺跡 羽口 ¹ 体観察表 (中世)	252
第 9 表	西中曾根遺跡 土製品観察表	82	第 24 表	東條遺跡 石器観察表 (古代)	252
第 10 表	西中曾根遺跡 石器観察表	82	第 25 表	東條遺跡 石器観察表 (中世)	253
第 11 表	西中曾根遺跡 金属器観察表	82	第 26 表	東條遺跡 金属器観察表 (古代)	254
第 12 表	東中曾根遺跡 土器観察表	101	第 27 表	東條遺跡 金属器観察表 (中世)	254
第 13 表	東中曾根遺跡 土製品観察表	102	第 28 表	東條遺跡 銭貨観察表 (中世)	255
第 14 表	東中曾根遺跡 石器観察表	102	第 29 表	東條遺跡 木器観察表 (古代)	256
第 15 表	東中曾根遺跡 金属器観察表	102	第 30 表	東條遺跡 木器観察表 (中世)	257
			第 31 表	千曲市 川西地区の遺跡の年代	274

図版編挿図目次

第 1 図	坂城更埴バイパス路線図と発掘調査範囲	3	第 32 図	SK09 SK10 SK37	38
第 2 図	発掘調査範囲と検出遺構図	5	第 33 図	SK74 SK76 SK81 SK187 SK235 SF01... ..	39
第 3 図	峯語坂遺跡調査範囲図	9	第 34 図	SM01 SM02 SM03 SM04 SM05 SM06... ..	40
第 4 図	峯語坂遺跡遺構全体図	10	第 35 図	SH01・02・03・04・05	41
第 5 図	峯語坂遺跡遺構全体図(割図)	11	第 36 図	SX01・02・03・04・05 SX14 SX15	42
第 6 図	割付図 XU-13・14・18・19・23・24	12	第 37 図	土器-1(SB02 SB03 SB04 SB05 SB06 SB08 SB09 SB10)	43
第 7 図	割付図 XU-14・15・19・20・24・25 XV-11・16・21	13	第 38 図	土器-2(SB11 SB12 SB13)	44
第 8 図	割付図 XV-11・12・13・16・17・18・21・ 22・23	14	第 39 図	土器-3(SB14 SB17 SB18 SB19 SB20)	45
第 9 図	割付図 XV-07・08・09・12・13・14・17・ 18・19・22・23・24	15	第 40 図	土器-4(SB21 SB22)	46
第 10 図	割付図 XV-09・10・14・15・19・20・24・ 25 XW-11・16・21	16	第 41 図	土器-5(SB24 SB25 SB26 SB27 ST01 SK04)	47
第 11 図	割付図 XU-24・25 XV-21 XI A-05 XI B-01・06	17	第 42 図	土器-6(SK08 SK09 SK10)	48
第 12 図	割付図 X V-21・22・23 XI B-01・02・ 03・06・07・08・11・12・13	18	第 43 図	土器-7(SK35 SK37 SK39 SK43 SK74 SK76 SK78 SK81 SK126 SK150 SK199 SM06 SD02)	49
第 13 図	割付図 XV-17・18・19・22・23・24 XI B-02・03・04・07・08・09	19	第 44 図	土器-8(SK187 SK235 SH03 SH04 SH05 SD02)	50
第 14 図	割付図 XV-19・20・24・25 XW-16・21 XI B-04・05・09・10 XI C-01・06	20	第 45 図	土器-9(遺構外)土製品(SB11 SB13 SB18 SD02)	51
第 15 図	割付図 XW-16・17・21・22・23 XI C-01・02・03・06・07・08	21	第 46 図	石器・石製品-1(SB02 SB04 SB05 SB09 SB10 SB11 SB12 SB14 SB15 SB17)	52
第 16 図	割付図(上) XI C-03・04・05・08・09 割付図(下) XI B-12・13・14・17・18	22	第 47 図	石器・石製品-2(SK09 SK35 SK137 SK187 SD02 SH05 遺構外)	53
第 17 図	SB01 SB02	23	第 48 図	金属製品-1(SB06 SB12 SK08 SK10 SK76)	54
第 18 図	SB02	24	第 49 図	金属製品-2(SD02)	55
第 19 図	SB03・04 SB04	25	第 50 図	西中曽根遺跡調査範囲図	81
第 20 図	SB05 SB06	26	第 51 図	西中曽根遺跡遺構全体図	82
第 21 図	SB08 SB09	27	第 52 図	西中曽根遺跡遺構全体図(割図)	83
第 22 図	SB10 SB11	28	第 53 図	割付図(上) XII K-15・20 L-11・16 割付図(下) XII L-21・22 Q-01・02	84
第 23 図	SB12・19	29	第 54 図	割付図 XII R-21・22・23 W-01・02・03 ・06・07・08	85
第 24 図	SB13 SB16	30	第 55 図	割付図(上) XII W-04・05・09・10 割付図(下) XII V-10・15・20 W-06・11 ・16	86
第 25 図	SB14	31	第 56 図	割付図 XII W-12・13・16・17・18・19	87
第 26 図	SB15 SB17	32	第 57 図	SB01・03 SB04	88
第 27 図	SB18 SB20	33	第 58 図	SB02 SB05	89
第 28 図	SB21・22・27	34	第 59 図	ST01 ST02	90
第 29 図	SB21 SB27	35	第 60 図	SK01 SK20 SK35 SD03・04	91
第 30 図	SB23・24・25 SB26	36			
第 31 図	ST01	37			

第 61 図	土器-1(SB01)	92	第 94 図	土器-6(SD02 SD03)	133
第 62 図	土器-2(SB01)	93	第 95 図	石器・石製品 (SB02 SB07 SB08 SD01 SD02 SD03) 土製品 (SB05) 金属製品 (遺構外)	134
第 63 図	土器-3(SB02 SB03 SB04 SK01 SK20)	94	第 96 図	東條遺跡調査範囲図	147
第 64 図	土器-4(SK35 SD01 遺構外)	95	第 97 図	東條遺跡古代遺構全体図-1	148
第 65 図	石器・石製品 (SB01 SB02 SK39 SD01 遺構外) 金属製品 (遺構外)	96	第 98 図	東條遺跡古代遺構全体図-2	149
第 66 図	東中曽根遺跡調査範囲図	105	第 99 図	東條遺跡古代遺構全体図 (割図)-1	150
第 67 図	東中曽根遺跡遺構全体図	106	第 100 図	東條遺跡古代遺構全体図 (割図)-2	151
第 68 図	東中曽根遺跡遺構全体図 (割図)	107	第 101 図	古代割付図 XVII C-03-04-08-09-13-14-17-18-19	152
第 69 図	割付図 XII X-23-24-25 X III D-02-03-04-05-08-09-10	108	第 102 図	古代割付図 XVII C-09-10-14-15-19-20 D-06-11-16	153
第 70 図	割付図 XIII D-08-09-10-13-14-15	109	第 103 図	古代割付図 XVII C-16-17-18-21-22-23 H-02-03-07-08	154
第 71 図	割付図 (上) XII Y-17-18-19-22-23-24 割付図 (下) XIII E-07-08	110	第 104 図	古代割付図 XVII C-18-19-20-23-24-25 H-03-04-05-08-09-10	155
第 72 図	割付図 (上) XII Y-18-19-20-23-24-25 割付図 (下) XII Y-24-25 X III E-05 XIV U-21 XVA-01	111	第 105 図	古代割付図 XVII C-20-25 D-21-22 H-05-10 I-01-02	156
第 73 図	割付図 XIV U-16-17-21-22-23 XVA-01-02-03-07-08	112	第 106 図	古代割付図 XVII G-25 H-06-07-11-12-16-17-21	157
第 74 図	割付図 XIV U-23-24-25 XVA-03-04-05-08-09-10	113	第 107 図	古代割付図 XVII H-07-08-09-12-13-14-17-18	158
第 75 図	割付図 XIII E-04-05-09-10-13-14-15	114	第 108 図	古代割付図 (上) XVII G-19-20-24-25 H-21 古代割付図 (下) XVII H-09-10-14-15	159
第 76 図	割付図 XIII E-05-10-15-20 XVA-06-07-11-12-16-17	115	第 109 図	古代割付図 XVII D-21-22 I-02-03-07-08	160
第 77 図	割付図 XVA-02-03-04-07-08-09-12-13-14-17-18-19	116	第 110 図	古代割付図 XVII D-20-24-25 I-03-04-05-08-09-10	161
第 78 図	割付図 XVA-09-10-14-15-19-20 B-06-11-16	117	第 111 図	古代割付図 (上) XVII D-14-15-19-20 古代割付図 (下) XVII E-11-12-16-17	162
第 79 図	割付図 XVA-20-25 B-06-07-11-12-16-17-21-22	118	第 112 図	古代割付図 XVII D-14-19-20-24-25 E-16-21 I-04-05 J-01	163
第 80 図	SB01 SB02-03	119	第 113 図	古代割付図 XVII D-15-20-25 E-11-12-13-16-17-18-21-22-23 I-05 J-01-02-03	164
第 81 図	SB05	120	第 114 図	古代割付図 XVII I-04-05-09-10-14-15 J-01-06-11	165
第 82 図	SB06	121	第 115 図	古代割付図 XVII J-01-02-03-06-07-08-11-12-13	166
第 83 図	SB07	122	第 116 図	古代割付図 XVII E-09-12-13-14-17-18-19-22-23-24	167
第 84 図	SB08 SB09-10	123	第 117 図	古代割付図 XVII E-09-10-14-15-19-	
第 85 図	SB11 SB12-14 SB13	124			
第 86 図	ST01 ST02	125			
第 87 図	ST03 ST04	126			
第 88 図	SK31 SK138 SD04 SD06 SD08	127			
第 89 図	土器-1(SB03 SB05)	128			
第 90 図	土器-2(SB05)	129			
第 91 図	土器-3(SB05 SB06 SB07 SB08)	130			
第 92 図	土器-4(SB08 SB09 SB10 ST01 SK31 SK138 土器集中 I・II)	131			
第 93 図	土器-5(SD01)	132			

	20·24·25 XIXA-11·16·21	168	第152图	SB54	203
第118图	古代割付图 XIX A-11·12·13·16·17·18·21·22·23	169	第153图	SB56 SB57 SB58	204
第119图	古代割付图(上) XVII E-22·23·24 J-02·03·04·07·08·09 古代割付图(下) XIX A-25 B-21·22	170	第154图	SB59 SB60 SB61	205
第120图	古代割付图 XVII E-18·19·20·23·24·25 XVII J-03·04·05·09·10	171	第155图	SB62 SB63	206
第121图	古代割付图 XVII E-20·25 J-05·10 XIXA-16·17·21·22 F-01·02·06	172	第156图	SB64 SB65	207
第122图	古代割付图 XIX A-09·10·14·15·19·20·24·25 B-06·11·16·21	173	第157图	SB66 SB68	208
第123图	古代割付图 XIX A-10·15·20·25 B-06·07·11·12·16·17·21·22	174	第158图	SB67 SB69	209
第124图	古代割付图 XIX B-07·08·12·13·14·17·18·19·22·23	175	第159图	SB70·71	210
第125图	古代割付图 XIX C-01·02·03·06·07·08·11·12·13·18	176	第160图	SB72 SB75	211
第126图	古代割付图 XIX C-02·03·04·07·08·09·12·13·14·18·19	177	第161图	SB73·74	212
第127图	古代割付图 XIX B-24·25 G-04·05·09·10·14·15 H-06	178	第162图	SB78	213
第128图	SB01 SB02 SB03	179	第163图	ST01 ST02	214
第129图	SB04 SB05 SB06 SB07	180	第164图	ST03 ST04	215
第130图	SB08 SB09	181	第165图	ST05 ST06	216
第131图	SB10·15 SB11	182	第166图	ST07 ST08	217
第132图	SB12 SB13 SB14	183	第167图	ST09 ST10	218
第133图	SB16	184	第168图	ST11 ST17·18	219
第134图	SB16 SB17	185	第169图	ST20 ST27	220
第135图	SB18 SB19	186	第170图	ST31 ST33	221
第136图	SB20 SB21	187	第171图	ST34 ST35	222
第137图	SB22·23	188	第172图	ST36 ST39·41	223
第138图	SB24 SB25 SB26	189	第173图	ST40 ST42	224
第139图	SB27 SB28	190	第174图	ST43 ST44·45	225
第140图	SB29·34	191	第175图	ST46 ST47 ST48	226
第141图	SB30	192	第176图	ST49 ST50	227
第142图	SB31 SB32 SB33	193	第177图	ST51 ST52	228
第143图	SB35 SB36	194	第178图	ST53 ST54	229
第144图	SB39 SB46 SB47	195	第179图	SK85 SK615 SK2902 SK3051 SM02 SM03	230
第145图	SB40 SB41·42	196	第180图	SQ01 SQ02 SQ03·04 SQ05 SF01 SF17 SF18 SF19 SF21 SD09 SD10 SD32 SD33 SD36 SD37	231
第146图	SB44·45	197	第181图	土器-1(SB01 SB03 SB04)	232
第147图	SB48·51	198	第182图	土器-2(SB05 SB06 SB07 SB08 SB09 SB10 SB11 SB12 SB13 SB14)	233
第148图	SB49	199	第183图	土器-3(SB16 SB17 SB18)	234
第149图	SB50 SB55	200	第184图	土器-4(SB18)	235
第150图	SB52·53·76·77-1	201	第185图	土器-5(SB19 SB20 SB21 SB22)	236
第151图	SB52·53·76·77-2	202	第186图	土器-6(SB23 SB24 SB26 SB28 SB29 SB30 SB31 SB32)	237
			第187图	土器-7(SB33 SB35 SB36 SB39)	238
			第188图	土器-8(SB39)	239
			第189图	土器-9(SB39 SB40 SB42 SB44 SB45)	240
			第190图	土器-10(SB46 SB48 SB49 SB51)	241
			第191图	土器-11(SB53 SB54 SB55 SB56 SB57)	

	SB58 SB59 SB60) ……………	242	第215图	中世検出面割付图 XVII C-18・19・20・23・24・25 ……………	310
第192图	土器-12(SB62 SB63 SB64 SB65 SB66) ……………	243	第216图	中世検出面割付图 XVII H-04・08・09・10・13・14・18・19 ……………	311
第193图	土器-13(SB67 SB68 SB69 SB70 SB71) ……………	244	第217图	中世検出面割付图 XVII H-04・05・09・10・14・15 ……………	312
第194图	土器-14(SB72 SB73 SB74 SB75 SB76 SB77) ……………	245	第218图	東條遺跡中世第1検出面遺構全体图…	313
第195图	土器-15(ST02 ST04 ST06 ST07 ST17 ST18 SK85 SK199 SK377 SK378 SK579 SK615 SK627 SK665 SK2902 SK2965 SK3000 SK3026 SQ01 SQ02 SQ05) ……	246	第219图	東條遺跡中世第1検出面遺構全体图(割图)……………	314
第196图	土器-16(SQ05 SF19 SD01 SD02) ……	247	第220图	中世第1検出面割付图 XVII B-12・13・17・18・22・23 ……………	315
第197图	土器-17(SD02 SD03 SD04)……………	248	第221图	中世第1検出面割付图 XVII B-18・23・24・25 G-03・04・05・08・09・10 ……	316
第198图	土器-18(SD04 SD05 SD10 遺構外) ……	249	第222图	中世第1検出面割付图 XVII B-23 G-01・02・03・06・07・08・11・12・13…	317
第199图	土器-19(遺構外) ……………	250	第223图	中世第1検出面割付图 XVII G-03・04・05・08・09・10・13・14 ……………	318
第200图	石器・石製品-1(SB05 SB08 SB09 SB10 SB16 SB17 SB18 SB19) ……………	251	第224图	中世第1検出面割付图 XVII B-25 C-21 G-05・10 H-01・02・06・07・11・12 ……	319
第201图	石器・石製品-2(SB21 SB22 SB23 SB29) ……………	252	第225图	中世第1検出面割付图 XVII G-16・17・21・22 ……………	320
第202图	石器・石製品-3(SB35 SB36 SB39 SB42 SB46 SB52 SB53 SB54 SB58 SB63 SB70 SB73 ST11 SK262 SK511) ……………	253	第226图	中世第1検出面割付图 XVII C-24・25 D-21 H-04・05 I-01 ……………	321
第203图	石器・石製品-4(SD02 SD03 SD04 遺構外) 土製品-1(SB39 SB48 SB54 SB55 SB66 SB74 ST06 ST07 SK41 SK250 SK400 SK2649 SF19) ……………	254	第227图	中世第1検出面割付图 XVII I-01・02・06・07・08・11・12・13 ……………	322
第204图	土製品-2(SD02 SD03 SD04 遺構外) ……	255	第228图	中世第1検出面割付图 XVII B-18・19・23・24・25 G-03・04・05 ……………	323
第205图	金属製品(SB21 SB35 SB39 SB52 SB53 SB54 SB67 SB76 SB78 ST06 遺構外) 木製品(SK85 SK714) ……………	256	第229图	東條遺跡中世第2検出面遺構全体图…	324
第206图	東條遺跡中世遺構全体图 ……………	301	第230图	東條遺跡中世第2検出面遺構全体图(割图)……………	325
第207图	東條遺跡中世検出面遺構全体图 ……………	302	第231图	中世第2検出面割付图 XVII B-22・23・24 G-02・03・04・07・08・09 ……………	326
第208图	東條遺跡中世検出面遺構全体图(割图) ……………	303	第232图	中世第2検出面割付图 XVII B-18・19・23・24・25 G-03・04・05・08・09 ……	327
第209图	中世検出面割付图 XVII B-05・10・15 C-01・02・06・07・11・12 ……………	304	第233图	中世第2検出面割付图 XVII G-02・03・04・07・08・09・12・13・14 ……………	328
第210图	中世検出面割付图 XVII C-01・02・03・06・07・08・11・12・13 ……………	305	第234图	中世第2検出面割付图 XVII G-07・08・09・12・13・14・17・18・19 ……………	329
第211图	中世検出面割付图 XVII C-03・04・05・08・09・10・13・14・15 ……………	306	第235图	中世第2検出面割付图 XVII C-21 H-01・02・03・06・07・08 ……………	330
第212图	中世検出面割付图 XVII C-05・10・15・20 D-01・06・11・12・16・17 ……………	307	第236图	中世第2検出面割付图 XVII G-15・20 H-06・07・08・11・12・13・16・17 ……	331
第213图	中世検出面割付图 XVII B-14・15・19・20 C-11・16・21 ……………	308	第237图	東條遺跡近世検出面遺構全体图-1 ……	332
第214图	中世検出面割付图 XVII C-11・12・13・14・16・17・18・19・21・22・23・24 ……	309	第238图	東條遺跡近世検出面遺構全体图-2 ……	333
			第239图	東條遺跡近世検出面遺構全体图-1(割图)……………	334

第240图	東條遺跡近世検出面遺構全体図-2 (割図)……………	335	SD12-1 SD12-2 SD13 SD14 SD34 SK790 SK809 SK960 SK968 SK844 SK1020 SK1030 SK2334) ……	364	
第241图	近世割付図(上) XVII B-01・02・06・07 近世割付図(下) XVII B-04・09 ……	336	第270图	土器-2(SK1000 SK1030 SK1082 SK 1088 SK1123 SK1663 SK1679 SK1741 SK1779 SK1794 SK1814 SK2081 SK2120 SK2197 SK2331 SK2507 SK2517 SK2648 SK2649 SK2651 SK2662 SH05 SH06 SH12) ……	365
第242图	近世割付図 XVII B-05・10・15 C-01・06 ・07・11・12・17 ……	337	第271图	土器-3(SX01 SX03 SX04 SX05 SX13 SX15 SF06 SLO1 遺構外) ……	366
第243图	近世割付図(上) XVII C-14・15 近世割付図(下) XVII I-08・09・14 ……	338	第272图	土器-4(遺構外)……………	367
第244图	近世割付図 XVII G-06・07・11・12 ……	339	第273图	土器-5(遺構外)……………	368
第245图	近世割付図 XVII G-14・15・19・20・25 H-11・12・16・17・21 ……	340	第274图	土器-6(遺構外) ……	369
第246图	近世割付図 XVII H-03・07・08・11・12・ 13・16・17 ……	341	第275图	石器-1(SK1666 SK1667 SK1735 SK1741 SK1814 SK1886 SK1936 SK2131 SK2744 SK2745 SK2758 SK2770 SH13 遺構外) ……	370
第247图	近世割付図 XIX B-06・11・12・13・14 ……	342	第276图	石器-2(SK1145 SK1288 SX03 SX11 ST21 ST38 遺構外) ……	371
第248图	ST12 ST14 ST22 ST24……………	343	第277图	石器-3(SH08 SD12-2 SD24 遺構外) ……	372
第249图	ST21 ……	344	第278图	羽口・炉体・土製品(SK1884 SH05 遺 構外) ……	373
第250图	ST23 ST25 ……	345	第279图	金属-1(ST37 ST38 SK1778 SK2014 SK2177 SK2216 SK2311 SK2315 SK2329 SK2744 遺構外) ……	374
第251图	ST26 ST55 ……	346	第280图	金属-2(SLO1 SX13 SH12 SH13 SH15 遺構外) ……	375
第252图	ST37・SH16・17・SD30・31 ……	347	第281图	金属-3(SK767 遺構外)……………	376
第253图	ST38・SH18・SD28・SK2187・2188 ……	348	第282图	銭貨-1(ST37 SK1826 SK1878 SK1970 SK2215 SH15 遺構外)……………	377
第254图	ST38・SH18 ……	349	第283图	銭貨-2(SK1001 SH05 SH06 SX05 SX12 SD12 SD13 遺構外) ……	378
第255图	SK844 SK1021 SK1105 SK1111 SK1123 ・1400 SK1399 SK1420 ……	350	第284图	銭貨-3(遺構外)……………	379
第256图	SK1679・SH13 SK1680 SK1741 SK1814 ……………	351	第285图	木器-1(SK1704 SK1706 SK1726 SK 1741 SK1844 SK1886 SK2315) ……	380
第257图	SK1886 SK2222 SK2315 SK2744 SK2745 SK2197 ……	352	第286图	木器-2(SK2315 SK2744 SK2745) ……	381
第258图	SX03・04 SX05 SX08 ……	353	第287图	木器-3(ST12 ST55 SK741 SK744 SK 749 SK758 SK760 SK774 SK777) ……	382
第259图	SX11 SX12 SX14 ……	354	第288图	木器-4(ST55 SK778 SK780 SK781 SK 785 SK786 SK791 SK802 SK803 SK813 SK814 SK815 SK821 SK822 SK825 SK828) ……	383
第260图	SX13 SX15……………	355	第289图	木器-5(SK829 SK844 SK875 SK925) ……………	384
第261图	SA01 SA02 SA03 ……	356	第290图	木器-6(SK880 SK887 SK923 SK934 ……………)	
第262图	SH02・03 SH02(下) SH04 SH05 SH06 SH07 ……	357			
第263图	SH11・SD22・SK1299・1238・1239 ……………	358			
第264图	SH11・SD22・SK1299・1238・1239 SH08 SH09 SH10 SH14 ……	359			
第265图	SF02・03 SF05 SF06・07・08 SF09 SF11 SF16 ……	360			
第266图	SD11 SD12-1 SD12-2 SD12 SD13 SD14 SD15 SD16 SD18 SD21 SD24 SD29 SD34 SD35……………	361			
第267图	SD12 杭列……………	362			
第268图	SM01 SD01 SD17 SD20 SLO1 SX01 SX09 SX17 SH12 SH15 ……	363			
第269图	土器-1(ST13 ST21 ST37 ST38 SD12 ……………)				

	SK940 SK951 SK963 SK970 SK974		SK1388 SK1389 SK1396 SK1402) …	392
	SK1100 SK1111 SK1145) ……………	385	第298図 木器-14(SK1400 SK1401) ……………	393
第291図	木器-7(SK1123 SK1147 SK1175		第299図 木器-15(SK1406 SK1420 SK1605 SK	
	SK1178 SK1192 SK1196) ……………	386	1632 SA01 SA02 SD12) ……………	394
第292図	木器-8(SK1123) ……………	387	第300図 木器-16(SD12) ……………	395
第293図	木器-9(SK1123) ……………	388	第301図 木器-17(SD12 SD13 SD14) ……………	396
第294図	木器-10(SK1123) ……………	389	第302図 木器-18(SD13 SD22 SD24 XVII C区) ……	397
第295図	木器-11(SK1199 SK1316 SK1317 SK		第303図 木器-19(XVII C区) ……………	398
	1320 SK1322 SK1324 SK1328 SK1329		第304図 木器-20(XVII C区) ……………	399
	SK1331 SK1337) ……………	390	第305図 木器-21(XVII C区) ……………	400
第296図	木器-12(SK1334 SK1339 SK1340 SK		第306図 木器-22(XVII C区) ……………	401
	1343 SK1346 SK1347 SK1349 SK1350		第307図 木器-23(XVII C区) ……………	402
	SK1351 SK1355 SK1360) ……………	391	第308図 木器-24(XVII C区) ……………	403
第297図	木器-13(SK1356 SK1357 SK1363 SK		第309図 木器-25(XVII C区 XVII D区 XVII H区	
	1364 SK1367 SK1370 SK1375 SK1378		XVI W区) ……………	404

写真目次

PL 1	峯謡坂遺跡遺構写真1 ……………	57	PL 29	東中曽根遺跡遺構写真1 ……………	135
PL 2	峯謡坂遺跡遺構写真2 ……………	58	PL 30	東中曽根遺跡遺構写真2 ……………	136
PL 3	峯謡坂遺跡遺構写真3 ……………	59	PL 31	東中曽根遺跡遺構写真3 ……………	137
PL 4	峯謡坂遺跡遺構写真4 ……………	60	PL 32	東中曽根遺跡遺構写真4 ……………	138
PL 5	峯謡坂遺跡遺構写真5 ……………	61	PL 33	東中曽根遺跡遺構写真5 ……………	139
PL 6	峯謡坂遺跡遺構写真6 ……………	62	PL 34	東中曽根遺跡遺物写真1 ……………	140
PL 7	峯謡坂遺跡遺構写真7 ……………	63	PL 35	東中曽根遺跡遺物写真2 ……………	141
PL 8	峯謡坂遺跡遺構写真8 ……………	64	PL 36	東中曽根遺跡遺物写真3 ……………	142
PL 9	峯謡坂遺跡遺構写真9 ……………	65	PL 37	東中曽根遺跡遺物写真4 ……………	143
PL 10	峯謡坂遺跡遺構写真10 ……………	66	PL 38	東中曽根遺跡遺物写真5 ……………	144
PL 11	峯謡坂遺跡遺構写真11 ……………	67	PL 39	東條遺跡 古代遺構写真1 ……………	257
PL 12	峯謡坂遺跡遺構写真12 ……………	68	PL 40	東條遺跡 古代遺構写真2 ……………	258
PL 13	峯謡坂遺跡遺構写真13 ……………	69	PL 41	東條遺跡 古代遺構写真3 ……………	259
PL 14	峯謡坂遺跡遺物写真1 ……………	70	PL 42	東條遺跡 古代遺構写真4 ……………	260
PL 15	峯謡坂遺跡遺物写真2 ……………	71	PL 43	東條遺跡 古代遺構写真5 ……………	261
PL 16	峯謡坂遺跡遺物写真3 ……………	72	PL 44	東條遺跡 古代遺構写真6 ……………	262
PL 17	峯謡坂遺跡遺物写真4 ……………	73	PL 45	東條遺跡 古代遺構写真7 ……………	263
PL 18	峯謡坂遺跡遺物写真5 ……………	74	PL 46	東條遺跡 古代遺構写真8 ……………	264
PL 19	峯謡坂遺跡遺物写真6 ……………	75	PL 47	東條遺跡 古代遺構写真9 ……………	265
PL 20	峯謡坂遺跡遺物写真7 ……………	76	PL 48	東條遺跡 古代遺構写真10 ……………	266
PL 21	峯謡坂遺跡遺物写真8 ……………	77	PL 49	東條遺跡 古代遺構写真11 ……………	267
PL 22	峯謡坂遺跡遺物写真9 ……………	78	PL 50	東條遺跡 古代遺構写真12 ……………	268
PL 23	西中曽根遺跡遺構写真1 ……………	97	PL 51	東條遺跡 古代遺構写真13 ……………	269
PL 24	西中曽根遺跡遺構写真2 ……………	98	PL 52	東條遺跡 古代遺構写真14 ……………	270
PL 25	西中曽根遺跡遺構写真3 ……………	99	PL 53	東條遺跡 古代遺構写真15 ……………	271
PL 26	西中曽根遺跡遺物写真1 ……………	100	PL 54	東條遺跡 古代遺構写真16 ……………	272
PL 27	西中曽根遺跡遺物写真2 ……………	101	PL 55	東條遺跡 古代遺構写真17 ……………	273
PL 28	西中曽根遺跡遺物写真3 ……………	102	PL 56	東條遺跡 古代遺構写真18 ……………	274

PL 57	東條遺跡 古代遺構写真 19	275	PL 87	東條遺跡 中世遺構写真 7	411
PL 58	東條遺跡 古代遺構写真 20	276	PL 88	東條遺跡 中世遺構写真 8	412
PL 59	東條遺跡 古代遺構写真 21	277	PL 89	東條遺跡 中世遺構写真 9	413
PL 60	東條遺跡 古代遺構写真 22	278	PL 90	東條遺跡 中世遺構写真 10	414
PL 61	東條遺跡 古代遺構写真 23	279	PL 91	東條遺跡 中世遺構写真 11	415
PL 62	東條遺跡 古代遺構写真 24	280	PL 92	東條遺跡 中世遺構写真 12	416
PL 63	東條遺跡 古代遺構写真 25	281	PL 93	東條遺跡 中世遺構写真 13	417
PL 64	東條遺跡 古代遺構写真 26	282	PL 94	東條遺跡 中世遺構写真 14	418
PL 65	東條遺跡 古代遺構写真 27	283	PL 95	東條遺跡 中世遺構写真 15	419
PL 66	東條遺跡 古代遺構写真 28	284	PL 96	東條遺跡 中世遺構写真 16	420
PL 67	東條遺跡 古代遺構写真 29	285	PL 97	東條遺跡 中世遺構写真 17	421
PL 68	東條遺跡 古代遺物写真 1	286	PL 98	東條遺跡 中世遺構写真 18	422
PL 69	東條遺跡 古代遺物写真 2	287	PL 99	東條遺跡 中世遺構写真 19	423
PL 70	東條遺跡 古代遺物写真 3	288	PL 100	東條遺跡 中世遺構写真 20	424
PL 71	東條遺跡 古代遺物写真 4	289	PL 101	東條遺跡 中世遺構写真 21	425
PL 72	東條遺跡 古代遺物写真 5	290	PL 102	東條遺跡 中世遺構写真 22	426
PL 73	東條遺跡 古代遺物写真 6	291	PL 103	東條遺跡 中世遺構写真 23	427
PL 74	東條遺跡 古代遺物写真 7	292	PL 104	東條遺跡 中世遺構写真 24	428
PL 75	東條遺跡 古代遺物写真 8	293	PL 105	東條遺跡 中世遺物写真 1	429
PL 76	東條遺跡 古代遺物写真 9	294	PL 106	東條遺跡 中世遺物写真 2	430
PL 77	東條遺跡 古代遺物写真 10	295	PL 107	東條遺跡 中世遺物写真 3	431
PL 78	東條遺跡 古代遺物写真 11	296	PL 108	東條遺跡 中世遺物写真 4	432
PL 79	東條遺跡 古代遺物写真 12	297	PL 109	東條遺跡 中世遺物写真 5	433
PL 80	東條遺跡 古代遺物写真 13	298	PL 110	東條遺跡 中世遺物写真 6	434
PL 81	東條遺跡 中世遺構写真 1	405	PL 111	東條遺跡 中世遺物写真 7	435
PL 82	東條遺跡 中世遺構写真 2	406	PL 112	東條遺跡 中世遺物写真 8	436
PL 83	東條遺跡 中世遺構写真 3	407	PL 113	東條遺跡 中世遺物写真 9	437
PL 84	東條遺跡 中世遺構写真 4	408	PL 114	東條遺跡 中世遺物写真 10	438
PL 85	東條遺跡 中世遺構写真 5	409	PL 115	東條遺跡 中世遺物写真 11	439
PL 86	東條遺跡 中世遺構写真 6	410			

第1章 発掘調査の経過

第1節 道路建設事業と 埋蔵文化財保護の対策

第2節 記録保存の措置



第1章 発掘調査の経過

第1節 道路建設事業と埋蔵文化財保護の対策

1. 一般国道18号線（篠ノ井—上田間）の改築事業の概要

一般国道18号線は、群馬県高崎市から新潟県上越市に至る総延長220kmの主要幹線道路で、全長の約半分（114kmの区間）を経過地である長野県が占めている。坂城更埴バイパスの建設は、主に千曲市杭瀬下交差点付近の交通渋滞を緩和する目的で、平成9年度に全長19.0kmの内の約3.0km（第2工区）の事業化が図られた。事業計画は、第2工区を前半部分と後半部分に分けて施工し、前半の千曲市稲荷山地区佐野川橋梁から八幡地区宮川橋梁までの1.5kmを平成17年12月に完了し、後半の宮川橋梁から県道77号線（篠ノ井—上田線）までを平成20年3月に供用開始とした。なお事業経過の詳細は、2006年刊行の発掘調査報告書（註1）に記述してある。

2. 埋蔵文化財の保護措置に至る経過

坂城更埴バイパス建設に係る工事対象用地内の埋蔵文化財包蔵地の保護措置の決定と発掘調査に至る経過は、2006年刊行の発掘調査報告書（註1）にまとめてある。本報告は、第2工区後半部分に関する記録保存の措置についてであり、家詔坂遺跡（千曲市遺跡番号105）、西中曾根遺跡（番号106）、東中曾根遺跡（番号89）、東條遺跡（番号118）を対象としている。ここでは、平成12年以降の発掘調査の実施に関わる事業協定の経過のみを示しておく。

○一般国道18号（坂城更埴バイパス）改築事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定

甲) 建設省関東地方建設局（現国土交通省関東地方整備局） 乙) 長野県教育委員会
丙) 財団法人長野県文化振興事業団

- ・平成12年6月1日 3者協定の締結
- ・平成17年3月31日 3者協定の内容変更
- ・平成21年2月27日 3者協定の内容変更

註1) 2006.3『一般国道18号（坂城更埴バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書1—千曲市内その1—社宮司遺跡ほか』
国土交通省関東地方整備局 長野県埋蔵文化財センター

第1表 埋蔵文化財発掘調査の受託費等

	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度
発掘遺跡	東中曾根遺跡ほか 八幡遺跡群・残件	家詔坂遺跡ほか	家詔坂遺跡ほか	東條遺跡ほか	東條遺跡ほか	東條遺跡ほか				
発掘面積	16.317	3,960	3,450	1,200	4,350	5,700				
試掘面積	22.561									
整理遺跡		社宮司遺跡ほか	社宮司遺跡ほか	報告書刊行			東條遺跡ほか	東條遺跡ほか	東條遺跡ほか	東條遺跡ほか 報告書刊行
受託費	14,957,710	93,030,052	81,289,212	42,623,282	72,243,256	81,561,328	35,960,438	41,378,272	39,517,000	4,979,000 (見込み額)

第2節 記録保存の措置

1. 経過概要

坂城更埴バイパスの建設は、交通渋滞の緩和を目的としたことから、事業の早期完了が望まれ、事業対象用地の取得と埋蔵文化財の記録保存の措置が併行して進められた。また埋蔵文化財の発掘調査は、用地取得の進捗状況に合わせ、より合理的な計画が模索され、発掘調査と整理作業を、単一年度内に変動的に組み込む手法で、間断なく保護業務を遂行することとなった。その結果、調査対象地を広域にかつ一括して調査する手法がとれず、調査期間も長期にわたり、調査担当者の一元化が難しいなど、必ずしも保存の措置として最善の状況を作り出せなかったが、保存措置の大枠は、第2工区内の北（前半部分）と南（後半部分）に分けて捉まえることで、概ね固定的な調査地と調査体制を維持しつつ、概略以下のように実施することができた。なお、記録保存の対象となった「周知の埋蔵文化財包蔵地」内での実施経過は、本書第2章内の各節にて個別に詳述する。

(1) 発掘作業と整理作業

第2工区前半部分内に所在する八幡遺跡群（千曲市遺跡記号85）ほかの記録保存の措置

発掘作業：平成12年6月1日より平成15年3月31日

整理作業：平成15年4月1日より平成18年3月31日（第2工区後半部分の発掘作業と併行）

報告書刊行：平成18年（2006）3月31日

『一般国道18号（坂城更埴バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書1—千曲市内その1—社宮司遺跡ほか』
国土交通省関東地方整備局 長野県埋蔵文化財センター

第2工区後半部分内に所在する峯誦坂遺跡ほか（千曲市遺跡記号105ほか）の記録保存の措置

発掘作業：平成14年4月1日より平成20年3月31日

（平成17年7月まで第2工区前半部分の整理作業と併行）

整理作業：平成20年4月1日より平成24年3月31日

報告書刊行：本書で平成24年（2012）3月21日に刊行予定

『一般国道18号（坂城更埴バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書3—千曲市内その3—東條遺跡ほか』
国土交通省関東地方整備局 長野県埋蔵文化財センター

2. 発掘作業

(1) 発掘と記録の方法

A. 記録基準区の設定

遺跡の記録用基準区（グリッド）を国家座標に従い設定する。国土地理院の定める平面直角座標系の原点（ $X = 0.000$ $Y = 0.000$ 長野県第Ⅷ系・等級区分3級）を基点に、200倍の数値を選んで調査範囲内のX軸・Y軸の測量基準線を設け、これから200m×200mの基準区（大々地区）を設定し、これを40m×40mの区画（大地区）に分割する。大々地区は発掘対象範囲の北から南へⅠ～Ⅷとローマ字表記し、大々地区の中に25区画入る大地区については、北西から南東方向へ順次A～Yのアルファベット記号を与えて呼称する。大地区は、さらに8m×8mごとの区画（中地区）に分割し、やはり北西から南東に向けて1から25の算用数字で表記する（第1図）。つまり、中地区をⅧR18区、小地区をⅧR9-M05区のように呼称する。この中地区の呼称法が、調査区内の割付平面図（縮尺1:20）を作成する基準であり、単位である。

基準杭の設定並びに絶対高の算出は測量業者に委託し実施した。

- ▼ 大々地区 (200m) : I・II・III…VII…
 大地区 (40m) : A・B…R…

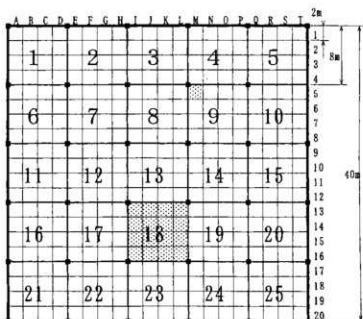
A	B	C	D	E
F	G	H	I	J
K	L	M	N	O
P	Q	R	S	T
U	V	W	X	Y

200m
40m

呼称例

中地区 (8 m) : VIR18

小地区 (2 m) : VIR9-M05



第1図 記録基準杭等の呼称

平成14年度	(株) アイシー	[東條遺跡ほか]
平成15年度	(株) 写真測図研究所	[東條遺跡ほか]
平成16年度	(株) 写真測図研究所	[峯読坂遺跡と西中曽根遺跡]
平成17年度	日本空間情報株式会社	[東條遺跡]
平成18年度	(株) 新日本航業	[東條遺跡]
	(株) 写真測図研究所	[峯読坂遺跡]
平成19年度	(株) 地図測量	[東條遺跡]

B. 遺跡 (遺構) の名称と遺跡 (遺構) 記号

遺跡の名称は、遺跡台帳に掲載された遺跡名に基づき、それを表す記号はアルファベット3文字の表記で行う。表記法は、長野県域全体を9地区に分割し、北から南へローマ字符号する。千曲市該当区域は「B」で、それを頭文字に、次の2文字は遺跡のローマ字表記、例えば「東條 HIGASHIJO」の「HJ」を付加して「BHJ」とする。調査では、遺物への注記を始め、遺構・遺物の実測図に至るまで、すべてに「BHJ」の略号を用い、例外はない。

遺構についても遺跡記号と同様の観点から、その性格や発見状況により分類化した記号を用いる。記号は、当センター作成の『発掘調査の方針と手順』に規定されたものを原則使用する。

- ・SB (竪穴住居跡・竪穴建物跡・竪穴状遺構など) は、本来は人間の生活痕跡、ことに恒常的な起居の痕跡を認める遺構の認定を目的とするが、調査段階では、便宜的に遺構の規模を目安として呼称していく。およそ一辺の大きさが200cm以上ある方形または円形状の落ち込み。
- ・SK (土坑) は、人間の生活痕跡の内、起居以外に起因する遺構の認定を目的とするが、多くの場合は、認定根拠に乏しく、一辺200cm以下の方形あるいは円形状の落ち込みで、ほかの遺構との関連性が認められない単独例を一括する。これには土器の焼成遺構や粘土等採掘坑、井戸や貯蔵穴、ゴミ穴、便所、墓などが含まれるが、特に用途が墓と確定できた場合にはSM (土壇) の記号を用いる。SKと類似した遺構には、落ち込み (掘り込み) を伴わない焼土あるいは礫の集中がありSF (焼土跡)、SH (集石跡) と呼称する。また土器や石器の集中はSQとし、極端に不整形な落ち込みには、SXの記号を冠し、遺構として取り扱う。

- ・ST（掘立柱建物跡・礎石立建物跡）は、高床式建物と考えられる遺構の認定を目的とする。SKと認定した落ち込みが規則的な配置、尺取りをもって認められた場合に呼称する。
- ・SDは、細長い溝状を呈する落ち込みを指す。

なお、今回の調査では、遺構記号の後に付加した番号、例えばSB01等は、対象地内の遺跡単位で個別に使用しており、番号のみでは遺跡と位置を判別できない。遺跡記号と合わせ読むことで、その所在は理解される。BHJSB01は、東條遺跡第1号竪穴住居（建物）跡と同意である。

C. 遺構の発掘法と記録法

遺構と認定した落ち込みは、推定される性格に基づき、発掘法を勘案して進める。遺構番号は、検出・発見順に符号し、発掘年次が違って、番号は連番としている。なお、発掘記録とは、図面と写真、所見記述等からなる。発掘の方法は第2工区前半部分にあたる八幡遺跡群と同様に実施しているので、詳細については2006年発掘調査報告書の第2章第3節（註1）に譲る。

D. 発掘の指導

- ・地形・地質について

平成16年7月15日 赤羽貞幸氏（信州大学）峯誦坂遺跡ほかの地形・地質に関する指導

- ・中世の遺構について

平成18年12月16日 井原今朝男氏（国立歴史民俗博物館）中世史に関する指導

平成19年6月25日 小野正敏氏（国立歴史民俗博物館）東條遺跡中世遺構・遺物の指導

6月26日 宮本長二郎氏（元東北芸術工科大学）東條遺跡の中世遺構調査に関する指導

(2) 発掘の体制と期間

平成14年度体制

所 長：深瀬弘夫 副所長（兼管理部長）：原 聖 管理部長補佐：田中照幸
調査部長：小林秀夫 調査第2課長：土屋 積
調査研究員：町田勝則 豊田義之 伊藤友久 寺内貴美子 青木一男 西 香子 太田秀保
（青木以下3名、5月まで）

平成15年度体制

所 長：深瀬弘夫 副所長（兼管理部長）：原 聖 管理部長補佐：上原 貞
調査部長：市澤英利 調査第2課長：平林 彰
調査研究員：豊田義幸 寺内貴美子（4月） 町田勝則（7月まで※） 石上周蔵（6月より）

平成16年度体制

所 長：小沢将夫 副所長（兼管理部長）：藤岡俊文 管理部長補佐：上原 貞
調査部長：市澤英利 調査第2課長：平林 彰
調査研究員：河西克造 山崎まゆみ

平成17年度体制

所 長：仁科松男 副所長（兼管理部長）：根岸誠司 管理部長補佐：上原 貞
調査部長：市澤英利 調査第2課長：平林 彰
調査研究員：小林秀行 町田勝則（※）

平成18年度体制

所 長：仁科松男 副所長（兼管理部長）：根岸誠司
調査部長：市澤英利 調査第2課長：平林 彰
主任調査研究員：岡村秀雄 調査研究員：小林秀行 山崎まゆみ

平成19年度体制

所 長：仁科松男 副所長(兼管理部長)：根岸誠司

調査部長：平林 彰 調査第1課長：上田典男

主任調査研究員：岡村秀雄 調査研究員：小林秀行 市川桂子

(※)第2工区前半部分整理作業と兼務

発掘補助員(平成15年度から19年度)

岩崎鷹男 宮崎米雄 松林深水 松本晃 柳沢悦子 小松よね 今井節夫 宇都宮義久 池内なつ子
 中沢幸 岡部つる子 田尻勝 清水七郎 西野入金己 牛澤政子 金澤義昭 原田禎二 坂田良人
 祢津春美 松林宣男 塚田徳雄 石浦光子 岡藤清流 宮本幸江 今井せつ子 小林英子 西澤京子
 南沢順造 石浦市郎 市村桂子 白井高喜 清水満 清水嘉弘 小林多雅二郎 中島勝雄 米沢須美子
 大内秀子 大田節子 吉沢福治 酒井節子 植野早苗 山崎静枝 原田美峰子 山崎忠 山崎みす江
 小林健郎 朝倉清之 風間夏枝 今井和男 池田豊一 西澤たか子 長澤雄一郎 坂田由宇司 宮坂寿美子
 松林貴子 斉藤いづみ 鳥田米子 三浦正美 中村成志 中山健次 藪一義 西澤貞雄 小林哲三
 高橋元一 岩淵玲子 小野喜代子 高橋貫二 峯村静代 清水幸子 高松美法 中澤克子 鳥羽仁美
 西島典子 宮澤理恵子 望月勝二 鈴岡てる子 滝沢久子 半田純子 木ノ瀬勝男 山崎みな子
 宇賀村節子 松本眞行 南澤恵吾 倉島由美子 黒田清男 小林作蔵 水沢邦久

(3) 発掘日誌抄

平成14年度

14年度は、第2工区前半部分の宮川遺跡以北の調査も併行して実施した。その成果はすでに報告済みであり、ここでは本書に所収する遺跡の調査にしぼり、発掘経過を以下に列記する。

- 4月1日 14年度事業締結(国間整道工第285号、国土交通省関東地方整備局、以下長野国道)
- 4月9日 国交省と現地確認協議
- 4月22日 西中曽根遺跡・東條遺跡の表土掘削・発掘開始
- 4月26日 現場プレハブ等周辺施設の設置・準備(東中曽根と東條遺跡内2箇所)
- 5月9日 東中曽根遺跡の表土掘削・発掘開始
- 6月1日 八幡公民館「さわやか教室」東中曽根遺跡見学会(60人参加)
- 6月6日 出土品の洗浄・注記作業併行実施
- 8月1日 東條遺跡空撮・測量等
- 8月8日 八幡上町地区PTA・育成会の現場見学(児童ほか20人参加)
- 8月21日 東中曽根遺跡・西中曽根遺跡の空撮・測量等
- 9月18日 西中曽根遺跡(高位部)発掘終了
- 10月15日 外西川原地籍の範囲確認調査
- 10月28日 東中曽根遺跡の空撮・測量等
- 11月25日 東條遺跡(H14)発掘終了
- 11月29日 第2工区前半部分(宮川遺跡以北八幡遺跡群)の発掘完全終了
- 12月5日 14年度調査終了報告及び15年度事業分につき協議(長野国道)



八幡上町地区育成会見学

- 12月10・11日 西中曽根遺跡(西側斜面・低位部)の範囲確認調査
- 12月12～16日 八日市場地籍の範囲確認調査
- 12月16日 東中曽根遺跡発掘終了(完全終了)
- 12月18～20日 峯誦坂遺跡(北側斜面)の範囲確認調査
20日14年度調査地の現状復帰と立会い
- 3月末まで、冬期間基礎整理作業

平成15年度

- 4月1日 15年度事業締結(国間整道工第281号、国土交通省関東地方整備局)
- 4月10日 現地確認協議(長野国道)
- 4月14日 現場プレハブ等周辺施設の設置・準備(東條遺跡内)
- 4月17日 東條遺跡(H15)の表土掘削・発掘開始
- 6月26・30日 現地協議(長野国道)
峯誦坂遺跡の調査について



西中曽根遺跡の発掘

- 7月2日 更埴市（現千曲市）建設課視察 10人
- 7月8日 峯諏坂遺跡の表土掘削・発掘開始
- 7月25日 東條遺跡（H15）発掘終了
- 8月21日 馬骨ほか獣骨出土（SD02）
- 9月16・17日 桜井秀雄氏（獨協大）峯諏坂遺跡出土獣骨に関する招へい指導
- 9月30日 峯諏坂遺跡空撮・測量等
- 10月10日 峯諏坂遺跡（H15）発掘終了
- 1月26日 平成16年度事業協議（長野国道・県教育委員会）
- 3月末まで第2工区前半部分（宮川遺跡以北の八幡遺跡群の本格整理及び冬期間基礎整理作業



峯諏坂遺跡の発掘

平成16年度

- 4月1日 16年度事業締結（国間整道工第305号、国土交通省関東地方整備局）
- 4月13日 峯諏坂遺跡の表土掘削・発掘開始
- 5月12日 現地協議（長野国道）
- 6月11日 現地協議（長野国道・県教委）
用地取得状況と今後の調査について
- 6月15日 千曲市教育委員会文化財係の視察
- 6月26日 峯諏坂遺跡現地説明会（75人参加）
県立歴史館の勾玉づくり教室の実施
- 6月29日 西中曽根遺跡（低位部）発掘開始
- 7月14日 現地協議（長野国道・県教委）
峯諏坂遺跡の調査状況と西中曽根遺跡の追加調査について

- 7月15日 赤羽貞幸氏（信州大）峯諏坂遺跡ほかの地形・地質に関する招へい指導
- 7月29日 千曲市（旧上山町）文化財調査委員6人が遺跡見学
- 8月2日 千曲市立治田小学校6年生、遺跡見学
- 8月17日 峯諏坂遺跡（H16）発掘終了、西中曽根遺跡（低位部）発掘終了（完全終了）
- 12月21日 現地協議（長野国道・県教委）
17年度事業及び協定の見直しについて
- 3月末まで峯諏坂遺跡ほかの基礎整理作業
- 3月31日 協定変更
調査区間及び調査期間等の変更。完了日を平成21年3月31日とする。



治田小学校6年生発掘体験

平成17年度

- 4月1日 17年度事業締結（国間整道工第276号、国土交通省関東地方整備局）
- 7月末まで 第2工区前半部分の宮川遺跡以北の本格整理
- 8月18日 現場プレハブ等周辺施設の設置・準備（東條遺跡内）
- 8月30日 東條遺跡（八日市場地籍）発掘開始
- 9月13日 千曲市教育委員会文化財係視察
- 10月13日 現地協議（長野国道）
調査の進捗状況と今後の調査について
- 12月9日 東條遺跡（H17）発掘終了
- 12月13日 現地協議（長野国道・県教委）
用地取得状況と次年度の調査について
- 3月3日 平成18年度事業協議1（長野国道）
- 3月22日 平成18年度事業協議2（長野国道）
- 3月末まで、冬期間基礎整理作業

平成18年度

- 4月1日 18年度事業締結（国間整道工第302号、国土交通省関東地方整備局）
- 4月12日 現地確認協議（長野国道）
- 5月1日 東條遺跡（八日市場地籍）発掘開始



八幡小学校6年発掘体験

- 5月26日 千曲市立八幡小学校6年生遺跡見学
 7月27日 茂原信生氏（京都大学霊長類研究所）東條遺跡の出土骨に関し招へい指導
 千曲市教育委員会文化財係視察
 7月29日 東條遺跡現地説明会（77名参加）
 8月1～3日 県立篠ノ井高校生就業体験発掘
 8月9日 東條遺跡の空撮・測量等
 9月12日 現地協議（長野国道）
 東條遺跡・峯詔坂遺跡の調査について
 9月12日 現地協議（長野国道）
 東條遺跡・峯詔坂遺跡の調査について
 9月28日 現地協議（長野国道・県教育委員会）
 東條遺跡・峯詔坂遺跡の調査について
 10月10日 峯詔坂遺跡の発掘開始
 10月25日 峯詔坂遺跡の発掘終了（完全終了）
 11月14日 東條遺跡の空撮・測量等
 11月21日 中世面より「蘇民将来符」木簡が出土
 11月29日 信濃国分寺資料館長の視察
 12月15日 東條遺跡（H18）発掘終了
 18年度調査地の現況復帰と立会い
 12月16日 井原今朝男氏（国立歴史民俗博物館）中世遺構調査結果に関する指導
 2月14日 東中曽根遺跡内にて法面として残された部分の

工事立会を実施

- 3月8・9日 山田昌久氏（首都大学東京）東條遺跡出土の木製品に関し招へい指導
 3月末まで、冬期間基礎整理作業

平成19年度

- 4月1日 19年度事業締結（国間整道工第285号、国土交通省関東地方整備局）
 4月16日 東條遺跡の表土掘削・発掘開始
 4月24日 現地協議（長野国道）
 東條遺跡の調査について
 5月10日 現地協議（長野国道）
 東條遺跡内の道路改良工事について
 6月10日 現地協議（長野国道）
 新県道長野上田線の改良工事について
 6月11・21日 千曲市教育委員会文化財係視察
 6月12日 東條遺跡の空撮・測量等
 6月24日 東條遺跡現地説明会（97人参加）
 6月25日 小野正敏氏（国立歴史民俗博物館）東條遺跡の中世遺構に関し招へい指導
 6月26日 宮本長二郎氏（元東北芸術工科大学）東條遺跡の中世遺構に関し招へい指導
 7月31日 長野市立篠ノ井西中学生職場体験発掘
 8月23日 現地協議（長野国道・県教育委員会）
 東條遺跡内の新設下水道工事について
 10月24日 東條遺跡の空撮・測量等
 10月30・31日 八日市場地籍仮設道路設置に伴う工事立会
 11月5・8日 八日市場地籍道路工事（水道管理設等）に伴う工事立会
 11月30日 東條遺跡発掘終了（完全終了）
 12月18日 東條遺跡内の水道管理設に関わる工事立会調査の実施
 12月26日 東條遺跡内の電柱移設に関わる工事立会調査の実施
 3月末まで、冬期間基礎整理作業



東條遺跡の井戸跡発掘



東條遺跡の竪穴住居跡発掘

(4) 発掘の公開

①平成14年度

- ・6月1日、東中曽根遺跡にて、八幡公民館「さわやか教室」歴史学習会及び遺跡見学会が実施される。好天に恵まれ、公民館役員と地区の子供たち60人の参加があった。
- ・8月8日、東中曽根遺跡・西中曽根遺跡にて、八幡上町地区PTA・育成会の遺跡見学会が実施される。子供たちは熱心に調査研究員の説明を聞きました。児童ほか20人の参加があった。

②平成16年度

- ・6月26日、峯諺坂遺跡現地説明会を実施する。長野県立歴史館の出前教室(勾玉づくり)を併設し、好天にも恵まれ75人の参加があった。

③平成18年度

- ・7月29日、東條遺跡現地説明会を実施する。午後は多少降雨があったが、77人もの参加があった。

④平成19年度

- ・6月24日、東條遺跡現地説明会を実施する。地元の方々を中心に97人もの参加があった。

3. 整理作業

(1) 記録類の整理方法

発掘記録の3種類(図面・写真・所見記述)は、整理作業の後、各台帳類(図面台帳・遺構台帳・遺物台帳・写真台帳)とともに収納・保管する。整理の方法は、第2工区前半部分の八幡遺跡群と同様に実施することを原則としたが、発掘及び整理担当者の複数化によって、多少異なって実施された部分もある。整理方針の骨格は、2006年発掘調査報告書第2章第3節(註1)に負い、ここではそれと違った部分について記す。

A. 記録図面類

整理方針は、基礎的な図面修正作業の後、公開または報告書掲載用に2次的な図面を作成することとしていたが、本書に収録した遺跡については、大部分がそれを実施していない。また、これに伴い遺構の個別平面図も、従来は遺物出土状況図・遺構完掘図、さらにはカマドの遺物出土状況図・完掘図等に分けた別図(紙面)を作成していたが、本書に関わる遺跡では、発掘段階の図面のみが1次図面(原図)として保管されることになる。このこと主な理由は、紙面として作成していた2次図面をデジタル化した点にあり、デジタル情報の上では、上記の欠落した2次図面を操作して引き出すことが可能である。ただし報告書の作成においては、掲載紙面の分量等を勘案し、複数の情報が盛り込まれた1次図面(原図)のデータをそのまま、あますところなく呈示した。煩雑の感否めないが、掲載内容を研究目的で活用する場合には、デジタル化し保管された情報を操作する必要がある。

B. 写真類

写真は発掘年次別・遺跡別に収納することを原則とするが、今回の整理作業においては、カラーリバーサルを遺構ごと(SBやSKなどのまとまり)に収納し直している。したがって、35mmのモノクロ写真シートとリバーサルシートは対応していない。報告書刊行後の保管・活用の利便性を配慮しての措置である。

C. 所見等の記述類

発掘を担当した調査研究員(または調査員等)は、遺構調査の経過や判断根拠を、所見として遺構単位に「所見カード」として残すことになっている。第2工区後半部分の発掘は、発掘の迅速性と記録の方法を模索しながら実施したこともあり、必ずしも均質化された「所見カード」となっていない。報告書に掲載した調査経過や観察、所見の事項は、そうした「所見カード」を報告者が判読して記述したが、十分な記載に至らなかった部分もある。事実と反しない範囲で可能な限り記述し、判断のつかない部分については原則として加筆・除筆を行っていない。

D. 遺物類

遺物の整理作業は、洗浄→遺物台帳作成→注記→分類・属性記録→接合・復元→実測→写真撮影の手順で実施した。なお「洗浄」から「注記」までは、大部分を各年度の基礎整理（冬期整理）期間内に実施し、写真撮影は平成21年度に（有）田中写真館ルックス、平成22年度に西澤印刷（株）に業務委託した。デジタル撮影を基本に、解像度400dpiを保持して撮影した。また特別な個体や集合写真に関しては、デジタル撮影のほかに6×7センチのリバーサルフィルムにて撮影を行っている。出土遺物の理化学的な分析は、以下に示した内容で実施し、該当する遺跡の末尾に分析の概要と結果を記述し、分析内容の詳細を本書添付のDVD内に収録している。

土 器

出土土器の接合は、遺構ごと、遺構外は中地区ごとに実施、重複関係にある遺構あるいは独特な器形・胎土を示す例については、遺構間等で接合作業を行った。復元は、原則として「補強復元」に留め、実測・図化に耐えられることを目的とし、展示用復元は特に実施していない。ただし平成22年度に報告書刊行を見据えて整理計画を検討し直した結果、22年度は遺構内出土土器を中心に最小限の接合を行い、復元に関しても図化・写真撮影に支障をきたす資料のみに留めることにした。このため、接合・復元の程度に若干の粗差が生じたが、報告内容には影響していない。分類・選別は、出土したすべての土器を、焼き物の種類（非ロクロ土器・ロクロ土器・黒色土器A・B・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器等）に分類し、器の部位と重量、出土点数を記録した。これについても、遺構外出土資料に関して1点1点の分類と記録化はできていない。また黒色土器と非ロクロ土器の判別に関し、平成21年度は、それらを区別せず「内黒」と表記しており、時期差を判別する研究目的で、それらの出土点数等を2次的に利用する場合には十分な注意が必要である。

石器・金属製品・土製品・木製品は、出土資料1点ごとに管理番号（年次別・種類別）を付けて観察し、その結果は本書添付のDVDに「出土遺物観察表」として収録してある。整理手順上、同一個体であっても個別に登録がなされており、同一個体を識別するには、観察表の備考欄にある「2点-1」、「2点-2」などの記述を参照する必要がある。個体資料の登録は、年次ごととし、「2」で始まるものは2002年度発掘、「6」で始まるものは2006年度発掘のように記号化し、石器には末尾に「S」を、土製品には「D」を、金属製品には「M」を付けている。また木製品に限り、年次記号の前に「J」漆器、「P」板材、「K」杭、「T」火付け具、「C」木屑、「W」木器類などの種類名を記号として付けた。たとえば「J5003」は、「漆器・2005年度発掘・登録番号3」を意味する。

石 器

石器石材は、大部分を報告書執筆者が肉眼で鑑定した。判別の難しい資料は、信州大学 原山智氏より教示を得て鑑定を進めた。なお石材の理化学分析は、峯舘坂遺跡出土の磨製石斧と岩石片、東條遺跡出土の黒曜石剥片等に関し、平成14年度（株）パレオ・ラボに業務委託して蛍光X線分析を行った。

木製品

木製品は、発掘で取り上げた後、1点ごとに登録・保管してある。仮保管はコンテナやタッパーに水漬けし、年に2回の水換えを実施している。樹種の鑑定は、平成18・20年度（株）パレオ・ラボ、平成19年度パリオサーヴェイ、平成21年度（株）古環境研究所に業務委託し、図化等の記録作業は、平成20年度と21年度に大成エンジニアリング（株）へ委託して実施した。なお、木製品の種類判別や取扱いに関しては、首都大学東京 山田昌久氏より指導を受けて進めた。

- ・平成18年3月8・9日 山田昌久氏、東條遺跡出土木製品に関わる指導
- ・平成20年12月2・3日 山田昌久氏、東條遺跡出土木製品に関わる指導

金属製品

金属製品は、図化等記録作業に入る前に、県立歴史館にてX線撮影し、遺存状況を確認したうえで、実測や計測を実施した。

人骨及び獣骨

峯謡坂遺跡の獣骨の取り扱いに関しては、獨協医科大学 桜井秀雄氏より指導を受けて進めた。

・平成15年9月16・17日 桜井秀雄氏、峯謡坂遺跡の獣骨の取り扱いに関する指導

峯謡坂遺跡ほかの人骨・獣骨に関して、京都大学霊長類研究所 茂原信生氏と共同研究を実施し、以後報告書作成まで指導を受けて進めた。

・平成18年7月27日 茂原信生氏、東條遺跡出土骨に関わる指導

・平成21年1月29日 茂原信生氏、東條遺跡出土骨類に関わる鑑定等指導

・平成22年11月30日 茂原信生氏、東條遺跡ほか出土骨類に関わる鑑定等指導

年代測定

放射性炭素年代測定（AMS法）は、峯謡坂遺跡で主に土壌墓跡の年代を、東條遺跡では2面検出した中世遺構の年代を推定する目的で行った。平成15年度、平成16年度、平成18年度、平成20年度に（株）加速器分析研究所に業務委託した。

珪藻・花粉・プラント・オパール等の分析

峯謡坂遺跡で検出した埋没流路もしくは埋没した湿地状の遺構と考えられるSD02の性格を追究するため、平成16年度に（株）パレオ・ラボに分析委託して実施した。

漆器分析

東條遺跡の中世検出面にて出土した漆器製品に関し、製造法を追究する目的で、漆の塗膜数等を判別した。平成18年度パレオ・ラボに委託して実施。なお東條遺跡出土漆器類15点に関しては、記録保存のための応急的な措置を（株）吉田生物研究所に委託して実施した。

E. 遺構・遺跡等

遺跡の歴史的な意義をまとめるため、学識経験者の招へい等を行い学術的な指導・助言を受けた。

・平成20年7月24日 栃木県埋蔵文化財センターより中世遺構に関わる助言

・ 埼玉県川越市教育委員会より中世出土木製品に関わる助言

・平成21年2月3日 宮本長二郎氏（元東北芸術工科大学）東條遺跡の中世遺構に関し指導

・ 3月4日 井原今朝男氏（国立歴史民俗博物館）東條遺跡周辺の中世史に関して指導

・平成22年3月2日 宮本長二郎氏（元東北芸術工科大学）東條遺跡の中世遺構に関し指導

・ 11月10日 広島県立歴史博物館（草戸千軒町遺跡調査関連）より中世遺構に関わる助言

（2）整理の体制と期間

平成20年度体制：遺構図面等の修正とデジタルトレース。出土遺物の観察・接合、木製品の実測

所 長：仁科松男 副所長（兼管理部長）：丑山修一

調査部長：平林 彰 調査第1課長：上田典男

主任調査研究員：岡村秀雄（9月より） 調査研究員：小林秀行 市川桂子

平成21年度体制：遺構図面等のデジタルトレース。遺物の観察・接合・実測、土器以外のトレース

所 長：仁科松男 副所長（兼管理部長）：阿部精一

調査部長：平林 彰 調査第1課長：上田典男

主任調査研究員：岡村秀雄 調査研究員：市川桂子

平成22年度体制：遺構図面等のデジタルトレースと修正。遺物の観察・接合・実測、土器のトレース。

報告書原稿の作成と図版等の版組 報告書印刷用の編集（委託）

所 長：窪田久雄 副所長（兼管理部長）：阿部精一

調査部長：大竹憲昭 調査第1課長：上田典男

主任調査研究員：町田勝則 調査研究員：市川桂子

平成23年度体制：報告書印刷用の編集（委託）。報告書の印刷。遺物・記録類の収納、保管換えの準備

所 長：窪田久雄 副所長（兼管理部長）：阿部精一 管理課長：窪田秀樹

調査部長：大竹憲昭 調査第2課長：岡村秀雄 主任調査研究員：町田勝則（H24.1のみ）

整理補助員（平成20年度から23年度）

大内秀子 坂田恵美子 松本眞行 山下千幸 宮澤理恵子 阿部高子 池田豊一 石田多美子

市川ちず子 大林久美子 倉島由美子 小池美香 近藤朋子 中村智恵子 西島典子 小林知子

柳原澄子 山上知也 山崎みな子

（3）整理日誌抄

平成20年度

- 4月1日 20年度事業締結（国関整道工第257号、国土交通省関東地方整備局）
東條遺跡（中世面）遺構全体図修正
- 4月30日 東條遺跡（中世面）遺構個別図修正
- 5月15日 東條遺跡出土木製品の洗浄
- 6月2日 東條遺跡土坑（SK）計測表作成
- 6月13日 木製品の洗浄終了。観察台帳作成
- 8月8日 東條遺跡土坑（SK）計測表作成終了
- 8月20日 峯詔坂遺跡の遺構図修正
- 9月1日 東中曽根遺跡の遺構図面修正
- 9月2日 東中曽根遺跡土坑（SK）計測表作成
- 9月16日 東中曽根遺跡の遺構図面修正終了
- 9月19日 西中曽根遺跡出土土器の接合
- 9月22日 東條遺跡（中世面）出土土器観察
- 10月17日 峯詔坂遺跡の遺構図修正終了
- 10月20日 西中曽根遺跡出土土器の接合中断
各遺跡の図面デジタルトレース開始
- 10月24日 西中曽根遺跡・峯詔坂遺跡の遺構図面トレース委託
- 10月21日 東中曽根遺跡出土土器の接合
- 11月7日 東條遺跡出土木製品観察台帳作成終了
- 12月2・3日 山田昌久氏（首都大学東京）東條遺跡出土木製品に関し招へい指導
- 12月18日 協議（長野国道）
21年度以降の事業及び協定の見直しについて
- 12月22日 西中曽根遺跡出土土器の接合再開
- 12月25日 西中曽根遺跡出土土器の接合終了
東中曽根遺跡出土土器の接合中断
東條遺跡（中世面）出土土器観察終了
- 1月7日 東中曽根遺跡出土土器の補強復元
各遺跡出土石器類の観察・台帳作成
- 1月16日 東條遺跡出土木製品の委託実測1

- 1月27日 東條遺跡出土骨類の観察
- 1月29日 茂原信生氏（京都大学霊長類研究所）東條遺跡出土骨類の鑑定
- 2月3日 宮本長二郎氏（元東北芸術工科大学）東條遺跡の中世遺構に関し指導
- 2月13日 各遺跡出土石器類の観察中断
- 2月16日 各遺跡出土金属製品の観察・台帳作成
- 2月27日 協定変更
調査区間及び調査期間等の変更。完了日を平成24年3月31日とする。



遺構図面のデジタルトレース

- 3月4日 井原今朝男氏（国立歴史民俗博物館）東條遺跡周辺の中世史に関して指導
- 3月19日 東條遺跡出土木製品の委託実測終了

平成21年度

- 4月1日 21年度事業締結（国関整道工第281号、国土交通省関東地方整備局）
- 4月13日 東條遺跡（古代面）出土土器観察・接合
東條遺跡（古代面）土器の補強復元
各遺跡の図面デジタルトレース継続
各遺跡出土石器類の実測・台帳作成

第1章 発掘調査の経過

- 5月13日 西中曽根遺跡土器の補強復元
 5月19日 峯詔坂遺跡、西中曽根遺跡、東中曽根遺跡出土
 石器実測終了
 6月3日 西中曽根遺跡土器の補強復元終了
 6月17日 東中曽根遺跡土器の補強復元
 7月27日 各遺跡出土土製品の实測・トレス・台帳作成
 7月31日 峯詔坂遺跡、西中曽根遺跡、東中曽根遺跡出土
 石器トレス
 8月10日 東條遺跡出土石器実測終了
 8月18日 東條遺跡出土木製品の委託実測2
 9月28日 各遺跡出土土製品のトレス終了・台帳作成中断
 10月1日 峯詔坂遺跡出土土器の観察・接合
 11月11日 峯詔坂遺跡出土土器の補強復元開始
 11月13日 東條遺跡（古代面）土器の補強復元中断
 11月16日 東條遺跡中世漆器の応急処置委託
 11月17日 東中曽根遺跡土器実測開始
 11月26日 西中曽根遺跡土器実測終了
 12月2～11日 各遺跡出土の金属製品X線撮影
 12月4日 東中曽根遺跡土器接合・復元の中断
 峯詔坂遺跡土器接合・復元の中断
 12月16日 東中曽根遺跡土器実測中断
 東條遺跡土器実測開始



出土遺物の集計等

- 12月17日 東條遺跡出土木製品の委託実測終了
 1月21日 東條遺跡木製品の樹種鑑定委託
 1月25日 各遺跡出土金属製品実測・トレス
 2月25日～3月3日 各遺跡出土木製品・石器の写真撮影（委託）
 3月2日 宮本長二郎氏（元東北芸術工科大学）東條遺跡
 の中世遺構に関して指導
 3月3日 東條遺跡中世漆器応急処置委託終了
 3月4日 東條遺跡木製品の樹種鑑定委託終了

平成22年度

- 4月1日 22年度事業締結（国開整道工第264号、国土
 交通省関東地方整備局）
 4月5日 整理業務の計画修正
 接合・補強復元は最小限に留め、観察表・実測

等は遺構内を中心に行う

- 4月6日 各遺跡の図面デジタルトレス継続
 4月7日 東中曽根遺跡の原稿執筆
 4月12日 東中曽根遺跡の土器観察・復元等再開
 東中曽根遺跡遺構図修正、東條遺跡土器実測再開
 4月14日 東中曽根遺跡土器実測
 4月23日 東中曽根遺跡遺構図修正終了
 東中曽根遺跡原稿・総括終了
 東中曽根遺跡報告用仮図版作成
 5月6日 東條遺跡、峯詔坂遺跡遺構図修正
 西中曽根遺跡の原稿執筆
 5月7日 東中曽根遺跡の土器観察・復元等終了
 5月11日 東條遺跡（古代）の土器観察・復元等再開
 5月24日 東中曽根遺跡の土器実測終了
 5月28日 西中曽根遺跡の原稿終了
 西中曽根遺跡報告用仮図版作成
 6月2日 東條遺跡の原稿執筆
 6月10日 東條遺跡（古代）の土器観察・台帳終了
 6月15日 東條遺跡（古代）土器の補強復元終了
 6月16日 峯詔坂遺跡の土器観察・接合復元再開
 6月25日 東條遺跡（古代）の土器実測終了
 6月28日 峯詔坂遺跡の土器実測
 7月23日 峯詔坂遺跡の土器観察・台帳作成終了
 7月30日 峯詔坂遺跡の補強復元終了
 8月2日 峯詔坂遺跡の土器実測終了
 西中曽根遺跡出土土器トレス
 8月3日 東條遺跡（中世）遺構図修正終了
 8月12日 東中曽根遺跡出土土器トレス
 8月17日 西中曽根・東中曽根遺跡土器トレス終了
 東條遺跡、峯詔坂遺跡遺構外土器実測
 8月18日 東條遺跡（古代）出土土器トレス
 8月20日 峯詔坂遺跡出土土器トレス
 8月27日 東條遺跡及び、峯詔坂遺跡遺構外土器実測終了
 9月6日 峯詔坂遺跡の報告用仮図版の作成
 東條遺跡（古代）出土土器トレス終了
 東條遺跡（中世）出土土器実測
 9月7日 峯詔坂遺跡出土土器トレス終了
 9月13日 東條遺跡（古代）の報告用仮図版の作成
 9月21日 西中曽根遺跡土器の観察・台帳作成
 各遺跡の遺構写真仮図版の作成
 峯詔坂遺跡の原稿執筆
 9月22日 東條遺跡（古代）原稿執筆終了
 9月28日 各遺跡出土遺物の仮図版作成
 西中曽根遺跡土器の観察・台帳終了
 10月8日 西中曽根遺跡の総括執筆・終了
 10月12日 東條遺跡（中世）出土土器トレス
 東條遺跡（古代）総括執筆

- 10月22日 東條遺跡（中世）出土土器トレス終了
 11月1日 報告用遺物観察表の作成
 11月12日 東條遺跡（古代）報告用版図版終了
 東條遺跡（古代）総括執筆終了
 11月29日～12月17日
 各遺跡出土土器の写真撮影（委託）
 11月30日 茂原信生氏（京都大学霊長類研究所）東條遺跡
 出土骨類の鑑定・観察
 12月3日 峯認坂遺跡の原稿終了・総括の執筆
 12月15日 東條（古代）、峯認坂遺跡遺構図修正終了
 峯認坂遺跡の報告用版図版終了
 12月16日 峯認坂遺跡の総括執筆終了
 12月22日 範囲確認の原稿・図版等作成・終了
 12月27日 報告書刊行前の編集委託開始
 編集用素材の提出
 1月4日 報告書（1章ほか）執筆
 東條遺跡（中世）原稿執筆
 編集委託素材の提出準備ほか
 1月11日 全出土遺物の観察表の補足・修正
 報告用CDの素材作成
 2月1日 編集図版の校正開始
 2月7日 全遺構の観察表の補足・修正
 報告用CDの素材作成

- 2月10日 報告書（1章ほか）執筆終了
 2月14日 東條遺跡（中世）総括執筆
 2月16日 編集原稿の校正開始
 2月25日 東條遺跡（中世）執筆終了
 3月10日 図版編の校正終了
 3月18日 本文編の校正終了、編集業務の完了

平成23年度

- 9月9日 平成24年度分編集委託開始
 12月18日 報告書刊行前の編集委託完了
 1月4日 出土遺物・記録類の保管換え準備
 1月27日 印刷業務委託の開始
 3月21日 印刷完了。発送業務完了。



校正等の編集作業

(4) 資料の報告と公開

報告：

- ①平成18年1月5日 報道機関への情報提供「蘇民将来符」木簡
 取材：信濃毎日新聞社 毎日新聞社 産経新聞社 共同通信社 読売新聞社
 朝日新聞社 更埴新聞社 週刊上田新聞社 東信ジャーナル NHK（日本放送協会）信越放送株式会社 長野放送 上田ケーブルテレビ
 1月27日 県下最古の「蘇民将来符」週刊上田第928号
 ②平成19年6月24日 「千曲市東條遺跡の調査と蘇民将来符」上田市民講座
 12月2日 「蘇民将来符」第29回木簡学会研究集会報告 木簡研究第29号
 ③平成20年4月5日 「発掘から見える中世の社会」長野県立歴史館 ふれあい歴史講座
 公開：
 ①平成19年1月 上田市立信濃国分寺資料館 『新春 蘇民将来符展』
 ②平成20年4月 千曲市森將軍塚古墳館 『千曲市の遺跡と遺物—よみがえる千曲市の古代』
 資料貸出：
 ①平成18年6月 (株)新人物往来社「東條遺跡出土の漆器」写真『中世都市研究12号
 中世のなかの』
 ②平成19年8月 同上「東條遺跡出土の蘇民将来符」木簡の写真『都市をつなぐ中世史研究13』
 ③平成20年1月 長野県立歴史館「蘇民将来符」木簡の赤外線写真『ブックレット14号』
 5月 倉澤正幸「蘇民将来符の呪符木簡の一考察」『千曲』137号
 6月 千曲市教育委員会「東條遺跡航空写真ほか」『城捨棚田の文化的景観歴史的
 調査報告書』

8月 (株)新人物往来社「東條遺跡出土の笹塔婆」写真『開発と災害—中世の都市研究14』

4. 発掘調査報告書の作成

(1) 方針

記録保存は、開発事業に伴い失われてしまう遺跡の内容を、文字どおり記録に留めて保存する行為である。我々が持つ現代科学の眼をもってしても、ありのままの遺跡の姿をあますことなく記録して、保存・継承していくことは不可能に近い。しかしながら、いつの時も許容されうる最大限の時間と経費をかけて、前向きに、そして真摯に発掘調査を行っている。発掘記録は、図と写真、文字によって具体化されるが、その記録すべてを報告書として掲載することは物理的に難しい。発掘調査報告書の骨子は、記録保存した情報の種類や中身が適切に整理されているか、そして記録保存した遺跡の歴史的な意義や重要性が、現状の研究レベルに見合った評価となっているのか、この2つの柱をバランスよくまとめあげることが望まれる。現状の文化的施策の中において、発掘調査報告書は、永遠に消滅してしまった遺跡を文化遺産として未来に引き継いでゆく唯一の手段と考えられる。

(2) 編集

報告書の体裁及び刊行計画は、平成20年度に決定し整理作業を進めてきた。記録保存の内容は、その対象となった遺跡ごとにまとめられることが、内容を一見して理解しやすいと考えられる。しかしながら、平成22年度に至り、作業の進捗状況を斟酌し整理計画を見直した結果、遺跡ごとの掲載ではあるが、記録保存の提示手法を、2つに分けることにした。ひとつは図面や写真等の記録類を図版編とし、もう一方の調査所見や評価等の記述を本文編とした。図版編と本文編の編集の骨子は以下のとおりである。

- 図版編 : 遺構図は平面図(出土遺物や炭化物等の表示含む)と断面図、土層観察を掲載。SBとST、SMに関しては全遺構を取り上げ、SKやSF等は選択して掲載した。遺構写真もこれに準ずる。遺物図は実測図を遺跡・遺構ごとに作成。遺構の所属時期や性格を追究できる資料を中心とするが、それ以外の資料も可能な限り掲載し「遺構内より出土した資料の全容」を理解できることを主旨とした。遺物写真は図化した資料の7割程度を掲載できるようにした。
- 本文編 : 遺構記述は掲載した図面に沿うように所見を記述している。所見は前述したように、発掘記録としての「所見カード」をもとに報告者がまとめた。出土遺物の記述は、作成した遺物図に沿って観察し記述している。なお掲載遺物に関しては、法量等の属性を観察表として文章の末尾に載せた。また考古学的な評価に関しては、各遺跡文章の最後に、遺構・遺物のまとめを「小結」として掲載し、歴史的な意義については、成果として別に章立てし、第3章としてある。

添付DVD : 図版編・本文編ともPDFファイルで収録。今回の調査で記録保存されたデータの内、すべての土坑の計測表とすべての出土遺物観察表(土器に関しては遺構内のみ)を掲載してある。

※本書の編集組版の作業は、平成22年度・23年度(有)アルケリーサーチに業務委託して実施した。

(3) 執筆

本書は、主任調査研究員町田勝則と調査研究員市川桂子が執筆し、第2章第4節東條遺跡(中世)遺物と時期、中世の小結を岡村秀雄が執筆した。なお、報告書全体を通して、調査第1課長上田典男・調査第2課長岡村秀雄が助言し、調査部長大竹憲昭が全体を校閲した。

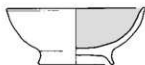
なお、本文編第2章第1節2案諏訪遺跡出土人骨に関しては、京都大学名誉教授茂原信生氏より玉稿を賜っている。記して謝意を申し上げる。

第2章 発掘調査の概要

- (1) 峯謡坂遺跡の調査
- (2) 西中曽根遺跡の調査
- (3) 東中曽根遺跡の調査
- (4) 東條遺跡の調査
- (5) 遺跡範囲の確認調査概要



(1) 峯謡坂遺跡の調査



- 遺跡の種類 : 集落遺跡、墓跡
- 主な時代 : 古墳時代終末 (7世紀後半)
平安時代前半 (9世紀～10世紀)
- △他の時代 : 弥生時代前期末・後期後半
- 遺跡の性格 :
 - ・弥生時代 (前期末・後期後半) は墓跡。
 - ・古墳時代後期終末に集落がつくられ、奈良時代の開始前に集落は移動する。
 - ・平安時代前半に再び集落がつくられ、11世紀前半には姿を消す。

(1) 峯謡坂遺跡の調査

1. 調査の概要

(1) 調査期間

- 本発掘調査・・・①平成15年7月8日～10月10日
 ②平成16年4月13日～8月17日
 ③平成18年10月10日～10月25日
 (試掘調査：北側斜面部：平成14年12月18日)

(2) 調査面積

5,190 m²

(3) 調査担当

- 本発掘調査・・・①石上周蔵 豊田義幸
 ②河西克造 山崎まゆみ
 ③岡村秀雄
 (試掘調査：豊田義幸 寺内貴美子 町田勝則)

2. 遺跡の概要

(1) 立地

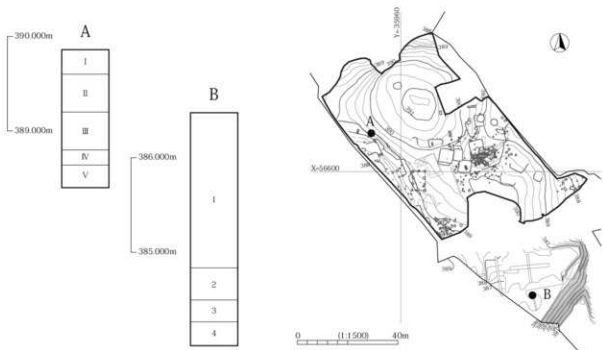
峯謡坂遺跡は長野盆地南部の千曲市八幡峰地区に位置する。三峯山(1131.3m)の山体崩落による地滑り性の土石流堆積物で形成された押し出し地形の末端部で、標高388m～391mにある。遺跡の北側を流れる宮川付近からは比高20mと佐野川扇状地上の八幡遺跡群からは一段高い位置にある。基盤となる土石流堆積物は古期挾捨土石流堆積物(13,550±400年前¹⁴C)に属し、鮮新世の三峯火山岩や中新世の桑原火山岩の安山岩溶岩や火山角礫岩などの角礫を多く含む。基質は泥を主とする。

(2) a 遺跡の範囲と調査区

峯謡坂遺跡は、弥生時代から平安時代の集落遺跡として千曲市遺跡分布図(105)に登載され、既知の調査事例はない。遺跡の周知化は、字切り図に示された謡坂地籍に相当し、一部は峰地籍を含む。道路新設事業は、周知化された遺跡範囲のほぼ中央部分が記録保存の対象となり、現況では宅地・畑地、リング畑となっている。発掘は用地取得とともに随時進められ、3回(本発掘調査①次から③次)にわたり実施した。①次に台地頂部及び北側斜面地を、②次で台地頂部を引き続き実施し、③次に台地頂部の残件と南側斜面地を実施した。北側斜面地と南側斜面地については、試掘調査の結果、遺構・遺物は存在しないと判断された。

b 基本層序(第2図)

調査時の現況は畑もしくは宅地である。調査の結果、基本層序(A地点)を以下のとおり確認した。Ⅰ層は耕作土である。Ⅱ層は10Y4/3にぶい黄褐色土で径5～15cm大の角礫を多く含む。Ⅲ層は10YR3/3暗褐色細粒砂質粘質土で径5～10cm大の礫を含む。弥生時代から平安時代の遺物包含層である。Ⅳ層は10YR3/2黒褐色土で径3～20cm大の礫を含む。Ⅴ層は10YR3/4暗褐色土で礫を含む。南側斜面地(B地点)の層序は以下のとおりで、トレンチ調査の結果、遺物包含層は確認されなかった。1層は客土。2層は10YR3/3暗褐色土で上部は耕作土、下部はアズキ～卵大礫を含みしまりよい。3層は7.5Y4/3～4/6褐色土でアズキ大の礫、白色ブロック砂、砂粒を含む。粘性あり、しまりよい。2次堆積土である。4層は風化礫を多く含む礫層である。



第2図 峯岡遺跡 土層柱状図

(3) 調査結果

発掘調査の結果、弥生時代前期末から中期初頭の土坑（あるいは土坑群）、弥生後期の土坑（土器棺墓跡）、古墳時代の終末から平安時代の集落跡（土壇墓群を含む）を確認した。記録保存した遺構は、竪穴住居跡 26 軒、掘立柱建物跡 1 棟、溝跡 2 本、土坑 237 基、土壇墓 6 基、焼土跡 1 基、集石跡 19 基（災害復旧遺構 14 を含む）、遺物集中 1 箇所、出土遺物には土器コンテナ 110 箱・土製品 42 点、石器 808 点（碎片含む）、金属製品 202 点、人骨ほぼ 6 体分、動物骨 135 点がある。集落遺跡としての位置は、7 世紀後半に設営、奈良時代の断絶を経て、9 世紀から 10 世紀後半まで存続が確認できる。

3. 遺構と遺物

①竪穴住居跡（SB）

SB01（第17図 P L2）

位置：X I C - 02・03

検出：砂礫まじりの黄褐色土上面にて黒色土の落ち込みを確認した。その大きさや形状から竪穴住居跡を想定し調査に入る。結果、北側の掘り込みラインは判然としないうもの、カマド跡と考えられる焼土の集中、床面と考えられる硬化面を認めたことから SB01 と認定する。

規模：残存長 330cm × 幅 380cm、深さ -7cm、N66° W、隅丸方形。

埋土：検出面が床面に近いため埋没土の全体を確認することはできないが、残存した埋没土は黒褐色土の単純堆積であった。

構造：カマド部に袖や煙道等を確認することはできなかったが、燃焼部に焼土の堆積が認められた。床面は南側の半分程度が硬化していた。柱穴は 5 基を確認したが、主柱穴の判断はできなかった。

遺物出土状況：埋没土中から土器小破片が出土した。

遺物：図示可能な大形破片はない。

時期：不明。出土土器の種類では、床面上の遺物として黒色土器 A 類の坏と土師器囊形土器の小破片がある。本跡の時期決定を行える資料はほとんどないため、埋没土に含まれる黒色土器 A 類から、その出現する古代Ⅲ期（8 世紀代）以降に位置づけられるのか。

SB02 (第17・18図、第37図、第46図 P L 2・14)

位置：XIC-01、XIB-05、XW-21、XV-25

検出：砂礫まじりの黄褐色土上面にて黒色土の落ち込みを確認した。大きさ・形状から竪穴住居跡を想定。北側の掘り込みラインは判然としなが、カマド跡と考えられる焼土の集中を認めたことからSB02と付号し調査に入る。

規模：残存長(750cm×560cm)、深さ-15cm、N66°W、隅丸方形。

埋土：3層の埋没土が交差堆積する。

構造：確認時にはSB01同様に北側プランの確認ができなかった。検出面が低く、埋没土はわずかに10cmほどであることから、北側部分は耕作等により破壊を受けた可能性がある。西側にカマドを確認したが、袖部の検出はできなかった。燃焼部及び煙道、煙出し部を検出した。床面は硬化した平坦面であり、貼り床は認められない。また検出状況を十分に加味しなければならないが、埋没土調査中に多くの柱穴状の落ち込みを発見した。切り合い関係は確認できなかったことから、そのすべてを本跡のPitとして調査したが、本跡に伴わない遺構も混在する可能性がある。たとえばPit19・Pit42・Pit45・Pit46・Pit2・Pit33・(Pit26)・Pit38・Pit37・Pit7・Pit12・Pit11・Pit10・Pit32・Pit34、あるいはPit4・Pit5・Pit6・Pit8・Pit28・Pit24、またはPit18・Pit39・Pit20・Pit40・Pit1・Pit30・Pit14・Pit7・Pit36・Pit12などを、別の建物跡として検討する余地もあるが、基礎整理時にも明確には判断できなかった。

遺物出土状況：土器小破片の出土が多い。床面より土師器や黒色土器の環類破片が比較的多く出土している。

遺物：第37図1と2は須恵器環A類。1はPit2とPit12出土の接合例で1/2程度の個体。外面にはロクロ成形痕を明瞭に留める。口径14.0cm、器高3.7cmが測られる。2はNo.6とNo.14の接合例で1/2程度残存する破損個体(以下、単に○/○個体と表記)。軟質で胎土内に絹雲母を含む。3は黒色土器A類の環。底部は糸切り離し手法、外面にはロクロ成形痕を留め、ていねいな作りで仕上げられている。No.2の出土。4は黒色土器B類の椀、ほぼ完形個体。内外面ともていねいなミガキ調整仕上げ。No.1の出土。5はPit3No.1の土師器環A類。2/3個体で底部付近はヘラケズリ成形し、底部は糸切り離し後、静止ヘラケズリ。6は灰軸陶器の椀、口縁部破片。口径16.0cmが測られる。7はカマド出土の土師器甕の口縁部破片。ロクロ成形痕の残る砲弾型の甕で、口縁部付近に赤色塗彩様に赤みがかったが、肉眼では皮膜なのか否かの判断はできなかった。第46図1は黒曜石製の有茎式石鐮。No.2出土で0.6gが量られる。

時期：須恵器の環A類が残ること。土師器環類が出現していること。黒色土器A・B類の存在から、古代V期前後と考えられる。しかしながら、カマド出土の甕はⅢ期・Ⅳ期に多用される形態であり、出土遺物には時期的な混在が視られる。埋没土中の出土遺物は多量で、それらには複数の時期が予想されることから時期決定は少し難しい。上述した要素から古代V期前後(9世紀後半ころ)と判断しておきたい。

SB03 (第19図、第37図 P L 14)

位置：XV-18

検出：当該地区では東西方向に向けて帯状に広がる大規模な黒褐色土の落ち込みを確認した。調査時に、それを埋没流路SD01として推定し、埋没土を掘り下げる調査に入ったところ、色調の違う黒褐色土のさらなる落ち込みを確認した。別の遺構の存在が想定されたので精査したところ、方形を予想させるプランの一部をつかむことができた。確認状況から竪穴住居跡3軒が重複すると予想し、切り合い関係を把握すべく埋没土の掘り下げをおこなった結果、SB12とSB11をSB04が破壊することが分かった。またSB04はSB03(本跡)に破壊されると考えて調査を進めたが、最終的に判断はできなかった。

規模：長軸（200cm）×短軸（335cm）、深さ-12cm、N83°W、隅丸方形。

埋土：黒褐色土の単純堆積である。

構造：カマドは確認できなかった。床面はやや硬い平坦面をそれと認定した。Pitは北西コーナーよりに1基確認したに留まる。

遺物出土状況：埋没土中から10～20cmほどの大きさの礫が出土した。これとともに土器小破片が出土し、床面からは黒色土器A類や須恵器環類の破片が出土している。

遺物：第37図8は黒色土器Aの環A類。口径13.5cm、器高5.1cmが測られる。No.1の出土。

時期：黒色土器A類と須恵器環類の存在から、古代V期（9世紀後半）ころの構築と考えられるか。

S B O 4（第19図、第37図、第46図 P L 2, 14, 21）

位置：XVII V-18・23

検出：SB03同様に、当該地区に広がる黒褐色土の落ち込みを認め、竪穴住居跡3軒の重複を確認した。切り合い関係を把握すべく埋没土の調査を行った結果、SB12とSB11を本跡が破壊している可能性が高いと判断できたが、厳密に断定はできなかった。またSB03には北側を破壊されていると観られたが、判断はつかず、出土遺物によれば本跡より新しいと考えるべきかもしれない。

規模：長軸465cm×短軸380cm、深さ-45cm、隅丸方形？

構造：カマドは西側壁のほぼ中央部分に認められた。袖部は不明瞭であったが、その芯材と思われる礫が散在して確認できた。火床と考えられる焼土は明瞭に残り、燃焼部と推定できたが、煙道は確認できなかった。柱穴は4基を検出したが、主柱穴か否かは判断がつかなかった。東南コーナーよりに確認したPit3は長楕円形で深さ51cmが測られる大形の土坑である。

遺物出土状況：埋没土中から10～20cmほどの礫が数多く出土した。これとともに土器小破片が出土している。

遺物：第37図9～11は非ロクロ土器の環類。底部付近はケズリ成形し、口縁部及び内面はていねいにミガキ調整されている。9は口径10.6cm、器高3.7cm、平丸底。No.1の出土。10はNo.8出土で丸底。口縁部はていねいに横ナデで仕上げられている。11は口径14.1cm、器高4.5cm、内面はていねいにミガキ仕上げられ、底部は平底化している。埋没土中の出土。12は底部を回転ヘラ切りした須恵器環A類。口径11.2cm、器高3.6cmが測られる。埋没土中の出土。13は内面黒色処理した高環の脚部破片。14は土師器の長胴甕、口縁部の破片。No.9の出土。第46図2は平基の黒曜石製石鏝。側辺は鋸歯状に仕上げられ、表裏には摩耗状の痕跡が観られる。No.1出土。3は打製石錐。形態から石錐としたが、表裏面の剥離は平坦で錐身の製作法としてはあまり見かけない。紡錘形の石鏝の一種とも考えられる。No.2出土でチャート製。4は石鏝の未製品か。表皮のある黒曜石材で先端部に平坦剥離を施している。床面直上の出土。5は剥片。両極剥離痕が観察でき、楔状の石器である可能性もある。側辺には細かな剥離痕跡が観られるが、使用痕跡ではないと考えられる。埋没土出土。6は打製の石包丁状の石器。両側辺には表裏ともほとんど剥離加工は施されていない。褐色の凝灰岩材。7は棒状の敲石。長軸の端部に敲打の痕跡が残る。硬質な安山岩材で369.3gが量られる。8は角柱状の砥石。四面砥石であるが、砥面は7面が形成される。中粒の砂岩材でNo.3の出土。

時期：非ロクロ土器の環類、ヘラ切り離し手法の須恵器環類の存在から、古代I期（7世紀後半）を推定できるか。SB03及びSB12・SB19との重複関係を考慮すると古代I期でも、その末から古代II期ころにかけてと判断できるか。

S B O 5（第20図、第37図、第46図 P L 3, 21）

位置：XW-21・22、IXC-01・02

検出：砂礫まじりの黄褐色土上面にて黒色土の落ち込みを確認した。大きさ・形状から竪穴住居跡を想定。北側の掘り込みラインは判然としなない。

規模：長軸 600cm × 短軸 490cm、深さ - 26cm、隅丸方形？

埋土：黒褐色土の単純堆積である。

構造：カマドは確認できなかった。柱穴は 13 基を確認し、Pit12・Pit13・Pit2・Pit8 が支柱穴か。床面は硬化した平坦面である。

遺物出土状況：埋没土中より土器破片が出土した。また南壁よりの床面近くより、こも網石と考えられる棒状礫が一括して出土した（PL3）。

遺物：第 37 図 15 は外面底部をケズリ成形し、口縁部及び内面をていねいにミガキ調整した高坏の坏部破片。No.4 出土。16 は須恵器甕の底部破片。埋没土中の出土。第 46 図 10 は扁平片刃石斧。10.2cm × 6.8cm × 1.9cm、258.6g が測られる。側面の面取りは不明瞭で、2 次的に再使用された形跡がある。閃緑岩材で No.1 の出土。

時期：不明。遺構の遺存状況が悪く、出土遺物も小破片のため時期決定は難しい。Pit2 からは黒色土器 B 類と考えられる小破片があり、その出現期である古代Ⅳ期（9 世紀前半）以降に所属すると判断できるか。

SB06（第 20 図、第 37 図、第 48 図 PL 3, 14）

位置：XV-15・20、W-11・16

検出：砂礫まじりの黄褐色土上面にて不整形に広がる黒色土の落ち込みを確認した。大形の遺構を想定し調査に入る。その結果、北側にカマドと考えられる焼土及び袖部芯材と推定される礫の集中を確認したことから竪穴住居跡と認定した。

規模：長軸 580cm × 短軸 355cm、深さ - 32cm、隅丸方形か。

埋土：2 層の堆積。

構造：カマドはプランの北側に確認した。遺構の全体像は、西側の大半がすでに削平を受けていたことから不明瞭でカマド位置も確定できない。燃焼部と推定される部分に焼土の堆積、炭化物の散布、骨片の出土がある。またその周囲には 20cm ~ 30cm ほどの礫が散在しており、袖部の確認はないが、芯材の可能性がある。柱穴は 6 基を確認した。いずれも掘り込みの浅い - 15cm 程度の Pit であり、支柱穴の特定はできない。床面は特に硬化は認められず、平坦な面をそれと認定する。

遺物出土状況：埋没土中より土器破片及び小礫が出土した。

遺物：第 37 図 17 ~ 20 は黒色土器 A 類の坏 A 類。17 は体部下半を回転ケズリ成形し、口縁部は強い横方向のナデ仕上げ。器厚があり、ぼつりしている。内面はていねいなミガキ調整。No.1 の出土。18 は底部付近にケズリ成形を残し、上半はロクロナデ成形。口径 19.8cm、器高 5.1cm が測られる。No.3 出土。19 は体部外面に回転ケズリ成形を施し、口縁部のみ強く横方向にナデ成形している。20 は底部回転糸切り離し手法により、外面はロクロ成形仕上げで部分的にミガキ調整が施される深い碗形の坏。No.7・16・18、床面の接合資料。21 は須恵器短頸壺の蓋 1/2 破片。体部の大半をケズリ成形している。No.8・11・22・27・28 の接合資料。22 と 23 は回転糸切り離し手法による須恵器の坏 A 類。22 は口径 13.6cm、器高 4.0cm が測られる。No.13・19、埋没土の接合資料。23 は口径 12.8cm、器高 3.5cm、底部径 5.3cm。カマド内 No.1・2 の接合資料。24 は黒色土器 B 類の短頸壺、口縁部破片。口径は約 4.0cm。埋没土中の出土。25 と 26 は土師器の甕。25 は No.8・11 の接合資料で、体部外面カキメ調整の小型甕。口径 10.0cm、器高は 9.7cm が測られる。26 はロクロ成形の甕形土器。体部は使用に伴うと考えられる被熱により表面が剥落する。No.6・9・10・14・17・20・23・24・25 の接合資料。第 48 図 1 は鉄釘で 12.1cm × 2.9cm、57g が測られる。

時期：黒色土器 A 類の坏、さらには須恵器坏 A 類の諸特徴から古代Ⅳ期（9 世紀代）と考えられる。

SB08 (第21図、第37図 P L 3, 14)

位置: XV-14・15

検出: 砂礫まじりの黄褐色土上面にて、SK10と重複する方形に広がる黒色土の落ち込みを確認した。大きさと形状により竪穴住居跡2軒の重複を想定、SB07・SB08と仮称して調査を継続した。結果、本跡の1軒のみが存在すると判断しSB07は遺構ではないと判断した。また本跡はSK10に破壊されている。

規模: 長軸505cm×短軸420cm、深さ-20cm、隅丸方形。

埋土: 黒褐色土の単純堆積。

構造: カマドと考えられる施設をプランの北側で確認したが、その大部分がSK10により破壊されており、全体の状況は不明。本跡の北側プランの外側にカマド部の残骸が認められたが、煙道は確認できなかった。柱穴は1基のみで、それもSK10に破壊された残存部のみであった。南及び西側に幅15cm、深さ-15cmほどの周溝を検出したが、床面に硬化は認められなかった。砂礫層のやや平坦な面を床面と認定した。

遺物出土状況: 埋没土中からは、ほとんど土器破片は出土していない。

遺物: 第37図27・28は黒色土器A類の環。27は内面にていねいなミガキ調整で黒光りしている。口径13.9cm、器高3.2cmが測られ、皿型状。体部下半はケズリ成形仕上げである。埋没土出土。28はやや深さのある椀形で、体部外面にロクロ成形痕を留め底部及びその付近を回転ケズリ成形している。口径15.9cm、器高4.4cm。29は黒色土器A類の鉢形土器。口径は21.0cmほどで口縁部は受け口様に作られている。内面はていねいな作りで光沢を帯びている。埋没土出土。30は須恵器環A類。体部外面にロクロ成形痕を残し、底部糸切り離し手法、口径12.0cm、器高3.8cmが測られる。埋没土出土。31は土師器のロクロ成形の甕、口縁部破片。埋没土中の出土。32は緑釉陶器の椀形土器。底部はボタン状にケズリ出されている。京都産の可能性があり9世紀ごろの所産か。

時期: 不明。本跡を破壊するSK10が古代Ⅲ期末(8世紀末～9世紀初頭)と考えられることから、それよりも古いと判断できるか。第37図に示した出土遺物は、いずれも埋没土中の出土であり、土器の特徴から判断してSK10に関連する遺物の可能性も考えられるか。

SB09 (第21図、第37図、第46図 P L 4, 14)

位置: XV-14・19

検出: 砂礫まじりの黄褐色土上面にて、SK43・SK37ほかと重複して広がる黒色土の落ち込みを確認した。大形の遺構ないしは竪穴状遺構を想定し調査に入る。

規模: 長軸600cm×短軸375cm、深さ-12cm、隅丸方形か。

埋土: 炭化物量の多い黒褐色土の堆積であり、褐色ブロックが混入し人為的な埋戻しの可能性もある。

構造: カマドは確認できない。本跡とは複数の土坑(SK36・37・39・40・43)が重複関係にある。この中で、SK37は段状の構造で本跡に伴う可能性が示唆される。柱穴は9基確認したが、別の建物が重複していた可能性もある。特に径が30cm～40cmある柱穴(Pit1・6・7など)は、いずれも20cm以上の深さがある。床面は砂礫層の平坦な面をそれと認定した。

遺物出土状況: 床面直上の遺物はほとんどなく、埋没土中から土器破片が出土した。

遺物: 第37図33は黒色土器A類の椀形土器。高台は高く、内面には「×」印の暗文がある。口径14.2cm、器高5.7cmが測られる。34～36は土師器の環。いずれも口径10cm未満の小型。34はNo.9出土、35はNo.3の出土であり、36はNo.4の出土例。37と38は灰釉陶器の椀の口縁部及び底部破片。37は口径16.0cmが測られる。埋没土出土。第46図11は手持ち砥石。

1/2程度の残片であるが、中央部分は端部の1/2程度まで使用減りしている。凝灰岩材。

時期：口径10cm未満の土師器環及び黒色土器A類の深椀などの特徴から、古代Ⅶ期（10世紀後半）ころと考えられる。

SB10（第22図、第37図、第46図 P L 4, 14）

位置：X V - 20

検出：砂礫まじりの黄褐色土上面にて、不整形ながら方形に広がる黒色土の落ち込みを確認する。規模及び形状から竪穴状の遺構を想定し調査に入る。

規模：長軸（340cm）×短軸280cm、深さ-8cm、隅丸方形。

埋土：2層の堆積。

構造：カマドは本跡の北側ほぼ中央部に認められた。砂質土を主体とする袖部と焼土・炭化物の分布する燃焼部がある。カマドの両脇には径80cm～100cm規模の土坑状のPitがある。掘り込みは浅く、Pit1が19cm、Pit2が15cmである。東南コーナーよりも同様なPit3がある。本跡は確認面が低く、南西側についてはほとんど確認がとれなかった。床面は砂礫層の平坦面をそれと認定した。

遺物出土状況：遺物は極めて少なく、床面からは土師器の甕小破片がわずかに出土した。

遺物：第37図39は黒色土器A類の深身の環で1/3程度の個体。埋没土の出土。40は縄文時代晩期末の水式土器。浅鉢の口縁部破片で埋没土中より出土。第46図9は黒曜石製の石礫未製品。表裏面の風化が著しく、ほかの石器とは異質である。

時期：不明。時期決定のできる資料がないが、埋没土中の黒色土器の特徴は古代Ⅳ期（9世紀前半）相当である。

SB11（第22図、第38図、第45・46図 P L 4, 15, 21）

位置：X V - 23・24、X I B - 03・04

検出：当該地区に広がる黒褐色土の落ち込みを認め、竪穴住居跡の重複を推定した。切り合い関係を把握すべく埋没土の調査を行った結果、本跡の北西コーナー部分をSB04が破壊していることが分かった。

規模：長軸615cm×短軸495cm、深さ-42cm、隅丸方形。

埋土：黒褐色土の単純堆積。

構造：カマドは本跡の西側ほぼ中央部に認められた。袖部は粘質土を主体に構築されており、天井等は壊れて残存していない。煙道及び煙出し部分は明瞭に残る。燃焼部は非常によく焼けた火床で焼土が遺存していた。南側を中心に周溝があり、カマド北の西壁、さらには北壁に沿って部分的に認められた。柱穴は11基を確認し、この内の4基（Pit1～Pit4）が主柱穴と考えられる。いずれの柱穴も掘り直しと観られる重複があるので、建物全体の建て替えが行われた可能性もある。柱間は220cmが測られる。床面は砂礫層の平坦面を認定した。

遺物出土状況：床面から浮いた状態で土器の小破片が出土した。

遺物：第38図1～4は非口クロ土師器の環類。1はNo.26で床面出土資料。外面底部付近をヘラケズリ成形し、内面は良好にミガキ調整している。底部は平底部を形成し木葉痕がある。口径12.4cmが測られる。2はNo.2とNo.4出土の接合例。底部はヘラケズリ成形し内外面ともにミガキ調整がなされている。3は体部上半までケズリ成形痕を留める例でNo.26の出土。口径10.8cm、底部には線刻が観られる。4はNo.9出土で口径15.2cmが測られる。口縁部及び内面はていねいにミガキ調整し、体部下半はケズリ成形の後、粗くミガキ調整を行っている。底部には木葉痕のほかに「×」と観られる線刻がある。5はNo.30の高環。脚部端を欠失するがほぼ



SB11 出土の土器集合

完全な個体。坏部は深い椀形で内外面をミガキ調整し、脚部は縦方向のケズリ成形後にミガキ調整がある。6は内面を黒色処理した小型の甕。体部外面は縦方向に細かな工具でハケ調整し、底部はミガキ調整仕上げされている。作りは甕に似る。口径14.0cm、器高10.3cmが測られる。7は縦方向のハケ調整の後に粗いミガキ調整を施す球胴の甕。内面は横方向にいいねいにミガキ調整仕上げされている。No.15・16・17の接合資料。8と9は須恵器の坏蓋。8は小さな返しのある形態で径14.8cm。埋没土1層の出土。体部外面1/3程度をケズリ成形した後、ナデ仕上げされている。9も埋没土出土で、返しは直、つまみ部は扁平で体部は全体をナデ成形している。10と11は底部静止ヘラ起こしの須恵器坏A類。10はNo.1と埋没土の接合例で、やや軟質。底部に「×」の刻目がある。11は外面にロクロ成形痕を留め、底部の切り離しはやや雑である。No.20とNo.21の接合例。第46図12は黒曜石製の凹基無茎式鐵。片一方の脚部を欠損する。現存で0.4gが量られる。13は敲石。棒状の礫素材で長軸の両端を使用している。安山岩材。14は細粒砂岩製の砥石。四面砥石で砥面は5面ある。また表裏には凹部が1箇所ずつ認められる。No.7の出土で2200gが量られる。第45図20は土製紡錘車で表面はいいねいにミガキ調整仕上げされている。径7.2cm、厚さ4.7cm、282g、No.37の出土。

時 期：非ロクロ土師器の坏A類が主体で、これに高坏、ミガキ調整の球胴甕がある。静止ヘラ起こしの須恵器坏A類が存在しており、これらの特色から、古代1期後半（7世紀後半ころ）と考えられるか。

SB12（第23図、第38図、第46図、第48図 P L 4, 15, 21）

位 置：XV-17・18・22・23

検 出：当該地区に広がる黒褐色土の落ち込みを精査した結果、竪穴住居跡の重複を確認した。2003年度の調査では、本跡の大半が調査区外へ伸びていたため、次年度の用地取得をまって本格的な遺構調査を実施した。本跡がSB04のカマドを破壊するとの所見を得たことから、SB04よりも新しいと判断できた。また南側にSB19が重複して存在し、本跡がSB19を破壊すると判断した。

規 模：長軸（565cm）×短軸530cm、深さ-35cm、隅丸方形。

埋 土：2層の堆積。

構 造：カマドは本跡西側のほぼ中央部に認められた。煙道は確認できず、地山削り出しと考えられる袖の一部、そして燃焼部を確認した。焼土及び炭化物の分布があり径20cm前後の角礫が散在していた。カマドの袖部芯材と考えられるか。柱穴は10基を確認したが主柱穴の判断はつかなかった。カマド左側（南側）に大形の土坑（Pit10）を確認したが、タライ状で埋没土内より複数の土器破片が出土した。床面は砂礫層の地山を平坦にして利用しており、硬化面や貼り床などは確認できなかった。

遺物出土状況：床面から浮いた状態で土器の小破片が出土した。

遺 物：第38図12～22はすべて底部系切り離しの須恵器の坏A類。12は口径13.7cm、器高4.2cmが測られる。Pit7の出土。13はPit3のNo.1出土で底部径6.5cm。14はNo.5出土でほぼ完形の個体。口径12.0cm、器高3.5cm、底部内径6.0cmが測られる。15はNo.31出土。16はNo.30と埋没土出土の接合個体で、口径12.0cm、底部径5.8cmで軟質。17はNo.27出土の1/2個体。18はNo.14と埋没土出土破片の接合例。口径12.7cmが測られる。19はNo.67の出土で、口径13.0cm、底部径6.2cmが測られる。20は外面に墨書「□」（判読不能）がある。21はNo.37出土の軟質須恵器。口径13.0cm、器高3.8cm、底部径5.5cmが測られる。22はNo.7出土。23は須恵器坏B類のほぼ完形に近い個体で良好な作り。No.44とNo.45及び埋没土の接合資料。口径14.1cm、器高4.2cmが測られる。24は須恵器の坏蓋B、ほぼ完全な個体。No.9の出土。返しは直だが、外面に一本の沈線を施すことで外反になる。つまみ部は扁平で体部外面は1/2程度をケズリ成形している。25～27は黒色土器A類。25は底部外面にケズリ成形を残し、内面は横方向のていねいなミガキ調整。口径15.3cm、器高5.0cmが測られる。No.32の出土。26も25とほぼ同様な特徴を持ち、口径14.5cm、器高3.7cmの皿形。27は椀形土器の底部破片でNo.2の出土。28と29は内面黒色処理したミニチュア土器。29はロクロ使用の可能性もある均整な作りで杯形の土器。底部には「へ（ひとぼしら・やね）」に「井」の合わせ字あるいは「高床式倉庫の絵か？」に似た線刻がある。No.42出土。30は黒色土器Aもしくは土師器の坏。口縁部を欠失し推定口径は10.7cmほどか。No.1の出土。31は土師器の高盤の盤部破片。非常に緻密で良質、No.3の出土。32は須恵器短頸壺の口縁部破片か。埋没土中出土。33は須恵器長頸壺の肩部破片。No.28出土。34は緑軸陶器の椀。口縁部の破片と底部破片。埋没土出土。内面に花柄が線刻される。第46図24は脚部が長く全体形が鎌形の凹基無茎式鎌。No.1の出土でチャート製。25は有茎式鎌で全体は五角形状。安山岩材（下呂石に似る）。No.2の出土。26は軽石製品。裏面は使用により摩耗し、表面には穿孔状の凹みがある。Pit7より出土。27は安山岩製の置き砥石。表面は使用により摩耗している。No.70の出土。第48図2と3は鉄鏃。2は11.5cm×1.2cm、18.2g、3は7.4cm×1.2cm、27.2gが測られる。4は鉄製の環。長さ2.4cm、厚さ1.1cmが測られる。

時 期：底部系切り離し手法の須恵器坏類が主体を占め、底部内径6.0cm内に主体がある。これに黒色土器A類の坏、さらには椀の存在から、古代Ⅳ期（9世紀代）と考えられる。30の坏底部は土師器の可能性のあるNo.1出土の資料で、古代Ⅳ期終末ないしはⅤ期まで下るか。

SB13（第24図、第38図、第45図 P.L.5, 15, 21）

位 置：XV-20・25

検 出：当該地区に広域にわたる黒褐色土の落ち込みを確認し遺構等の存在を想定して精査を行った。V-19を中心とした範囲に堅穴住居跡と考えられる2軒（SB10・SB14）相当のプランを認め、さらにそれらの南側に複数の土坑状の遺構が重複していることが判明した。調査を進めると、そ

これらの遺構と重なるようにやや方形に広がる落ち込みラインを認めたので、それを竪穴状遺構と想定し調査する。SB14 との切り合い関係は不明である。

規模：長軸（430cm）×短軸（420cm）、深さ-35cm、隅丸方形か。

埋土：4層の堆積。

構造：カマドは確認できなかったが、東側ラインの南コーナーより焼土の集中が見られた。遺跡全体の中で、東側カマドは1例も存在しないことから、カマドの残骸と考えるのは少々難しいか。柱穴は3基を確認したが、いずれも南側コーナーよりであり、主柱穴の判断はつかなかった。本跡には複数の土坑（SK106・SK128 など）や集石跡（SX9・SX10 など）が重複し、確認時には多くの礫が出土している。

遺物出土状況：確認時、拳大の礫が多量に出土し、その礫に混じる状態で土器破片がある。灰軸陶器の破片類が比較的多く、床面には緑軸陶器の椀底部の破片も出土している。

遺物：第38図35は黒色土器B類の皿、3/4個体。内外面ともに良好にミガキ調整されている。口径12.1cmが測られる。No.1の出土。36は灰軸陶器の耳皿。Pit1出土。37は緑軸陶器の椀底部破片で床面出土。被熱を受けている。38は灰軸陶器の椀でハケ塗り手法。口唇は折縁状で、高台は三日月形。口径17.3cm、器高5.5cmが測られる。Pit3出土。39～42は灰軸陶器の長頸壺。39は頸部の破片でNo.2の出土。40・41は広口の口縁部破片。42は体部1/2程度の個体。第45図21は土錘で34.4gが量られる。

時期：床面から緑軸陶器の椀の破片が出土している。黒色土器皿Bは古代IV期以降に出現し、灰軸陶器の耳皿は古代V期以降に出現する傾向がある。灰軸陶器の椀類がハケ塗り手法であることと考え合わせ、本跡は概ね古代V期（9世紀後半）ころと判断できるか。



SB13 出土の土器集合

SB14 (第25図、第39図、第46図 P L 5, 16, 21)

位置: XV-19・20・24・25

検出: 当該地区に広がる黒褐色土の落ち込みを確認し精査した結果、不安定ながら方形状に広がる落ち込みラインを認め、竪穴住居跡を想定し調査に入る。本跡は多くの土坑と重複関係にあり、SK08・SK09・SK88・SK104・SK105に破壊される。SK08とSK118との切り合い関係は不明である。

規模: 長軸 650cm × 短軸 555cm、深さ -58cm、隅丸方形。

埋土: 3層の堆積。

構造: カマドは北側の壁のほぼ中央部分に確認した。袖部は粘質土で作られ、両袖部分には径 20cm 大の礫が出土したことから、芯材が礫であった可能性は高い。また煙道の脇部分には礫が埋め込まれていた。燃焼部は明瞭で、火床はよく焼けており焼土と炭化物の分布が認められた。柱穴は 6 基を確認したが、Pit1 と Pit2、Pit3 が主柱穴との所見である。

遺物出土状況: 埋没土中より拳大の礫が多量に出土し、その礫に混じる状態で土器破片が出土した。滑石製の管玉は床面より出土している。

遺物: 第39図1～4は非ロクロ土師器の環。1は完形に近い個体で底部はやや平底化した丸底。内外面ともに良好にミガキ調整されている。No.18の出土。2～4は法量の小さな類型で、底部外面付近はヘラケズリ成形し、内外面とも良好にミガキ調整されている。3はほぼ完全な個体で、口径 7.8cm、器高 3.5cm が測られる。No.15・19の接合資料。2も3とほぼ同様な資料であるが、体部の外面に稜が形成され有段となる形態。埋没土中の出土。4は口径 5.2cm、器高 2.9cm と小ぶりだが、底部の作出は明らかな平底。埋没土中の出土。5と6は非ロクロ土師器の鉢形土器。5は口縁部がほぼ直行し、口径 13.8cm が測られる。No.12の出土。6はNo.9と埋没土の接合資料で、口縁部は緩やかに外反し底部はやや丸底の形態。7は土師器の甔と考えられる口縁部破片。内外面はていねいにミガキ調整されていることから甔と考えたが、現存する形態は長胴甔に近い。No.7の出土。8は土師器ハケ調整の甔、底部破片。No.22出土。9と10は須恵器の环蓋。9はNo.20出土で、つまみ部がやや扁平な作り。10はつまみ部が宝珠状でNo.1の出土。11は内面に小さな返しのある环蓋の体部破片。埋没土中の出土。12～15は須恵器環A類。12は底部回転ヘラケズリ手法で、口径 10.2cm、器高 3.7cm が測られる。No.29出土。13もほぼ同形態で、口径 9.2cm、器高 2.8cm。14は焼成が堅緻で口径 11.4cm が測られる。No.25の出土。15はNo.28出土で、底部は切り離し後、蕁状の植物質工具でナデ消し調整がある。口径 13.8cm、器高 3.8cm。同様な底部調整は図示していないが取上No.2の資料にも視られる。16は須恵器環B類。No.11とNo.16の出土で、第39図14と同質の焼成である。口径 15.0cm、器高 4.5cm が測られる。17は須恵器のこね鉢と考えられる器種の底部破片。糸切り離し手法で、底部径は 9.3cm。破損後に周辺部の破断面を打ち欠き成形しているように観察される。No.21出土。18は須恵器の短頸甔、口縁部破片。口径 5.0cm が測られる。埋没土中の出土。19は筒形土器。内面には幅 1.0cm 強の輪積みの痕跡を明瞭に残し、外面はていねいにハケ・ナデ調整し輪積み痕跡を消している。口径は 7.8cm。第46図15は凹基の無茎式甔。黒曜石製で、ぼつたりした感じの作りである。埋没土3層出土。16は黒曜石製の縦長剥片の側面に片面より剥離加工で刃付けを施した小形の刃器。4.5cm × 2.7cm × 8.0cm、8.7g が測られる。17は緑色岩材の磨製石斧、刃部破片。基部敲打成形の伐採石斧である。18と19は打製石斧。ともに凝灰岩材で基部を欠損している。18は側面に節理面を留め、全体をしゃもじ形に仕上げる例で床面出土。19はNo.2出土で刃部には明瞭な摩耗痕が観られる。20は扁平な礫の長軸端部をタガネ状に使



SB14 出土の土器集合

用した敲石。安山岩材で埋没土3層の出土。21は大形で扁平棒状の素材を使用した敲石で一方の端部が使用により剥落している。No.5の出土で安山岩材。

時期：非ロクロ土師器の坏と須恵器ヘラ切り調整の坏A類が主体であること、内面に返しのある須恵器坏蓋の残存があり、須恵器坏B類の登場が認められる点から、古代I期の後半（7世紀末）相当と判断される。

SB15（第26図、第46図）

位置：X1B-12・13

検出：円形または不整形に広がる土坑状の落ち込みを確認した。数多くの遺構が存在することが予想されたため精査した結果、北側に直線状のプランを認めることができた。規模から竪穴状遺構の一部と考えられたが、大半は土坑状の落ち込みと重複しているため、全体をつかむことはできなかった。確認状況から竪穴住居跡であるか否かの確認は得られなかった。

規模：長軸（485cm）×短軸（420cm）、深さ-8cm、形状不明。

埋土：2層の堆積。

構造：カマドは確認できなかった。本跡の北西部コーナーよりに固結した焼土を検出、同様な焼土塊は南側の土坑密集域にも確認できた。床面は不明瞭で確定できなかった。調査所見ではSK211・SK216・SK217が本跡の主柱穴と推定するが、遺構の全体像が定まらず、SKとして提示する。

遺物出土状況：埋没土がほとんど遺存しておらず、複数の土坑との重複を考えると、本跡に伴う遺物の特定も難しい状況であった。

遺物：埋没土中ではあるが、黒色土器A類そしてB類の出土がある。第46図22は扁平片刃石斧の刃部破片。玄武岩材か？

時期：不明。出土遺物から、黒色土器B類の出現する古代IV期（9世紀前半）以降の可能性がある。

SB16（第24図 P L 5）

位置：X1B-12

検出：当該地区に広がる黒褐色土の落ち込みを確認し精査した結果、調査区西端にて方形を予想させる落ち込みの一部を確認した。落ち込みの大半は調査区外に伸びており、遺構の性格をつかみがないが、予想される形状とその規模から竪穴住居跡を想定して調査を行う。

規模：長軸（345cm）×短軸（125cm）、深さ-35cm、形状不明。

埋土：4層の堆積。

構造：カマド、周溝、柱穴等は確認できなかった。床面は地山を掘り込んでいる。

遺物：出土遺物はほとんどない。

時期：不明。

SB17（第26図、第39図、第46図 P L 5, 16）

位置：X V - 17・18

検出：現耕作にともなう破壊が著しいが、かろうじて北側半分程度が残っていた。黒褐色土の落ち込みの形状が不整形であるが、大きさから竪穴状の遺構と判断し調査を行った。埋没土の調査中に土城墓を1基（SM16）確認した。

規模：長軸（570cm）×短軸（305cm）、深さ-30cm、形状不明。

埋土：5層の堆積。

構造：カマドは確認できなかったが、焼土の塊を2か所で確認できた。埋没土中には径20～30cm大の礫が集中して出土。周溝及び柱穴は確認できなかった。床面は不明瞭で硬化面等は確認できていない。

遺物出土状況：本跡の北西コーナー部分に土器破片が集中して出土した。

遺物：第39図20・21は黒色土器A類の環。いずれも底部径は小さく、糸切り難手法である。20はNo.1出土で、21はNo.2出土。22・23は埋没土出土の土師器環、1/2程度の破損個体。22は口径12.6cm、器高4.2cmが測られる。内外面に赤彩状の付着がある。23は口径8.8cm、器高2.2cmが測られ、やや後出的な土師器か。24～26は灰軸陶器。24は椀形で口径13.6cm、ハケ塗り。25は皿の口縁部破片。口径13.2cm、26は底部の破片。第46図23は手持ち砥石。凝灰岩材で中央部分は使用減りしている。No.17の出土。

時期：黒色土器A類の環を中心とし、埋没土中ながら土師器の環及び灰軸陶器の出土がある。時期決定のできる資料は少ないが、概ね古代V期前後（9世紀後半）ころと考えられるか。

SB18（第27図、第39図、第45図 P L 5, 16, 21）

位置：X V - 16

検出：調査区北よりの当該地区は遺構分布が疎となる。不整形に広がる落ち込みが2か所で確認でき、それぞれ落ち込みの規模が大きく、東側をSB17、西側をSB18と仮称し調査に入る。形状から竪穴状遺構と考えたが南及び西側の大半は削平されており、全体はつかめていない。

規模：長軸（260cm）×短軸（210cm）、深さ-6.5cm、形状不明。

埋土：黒褐色土の単純堆積。

構造：カマドは確認できなかったが、本跡の東側の壁付近に焼土の塊を確認した。袖・煙道等は認められなかった。柱穴は6基確認しているが、その用途は不明である。Pit2は埋没土中に本跡より古いと考えられる遺物があり、別の遺構である可能性も考えられる。床面は不明瞭であった。また礫を配列したような遺構を確認しており、所見では土城墓の可能性が指摘されている。

出土状況：埋没土中で、礫とまじりあって土器破片が出土した。

遺物：第39図27～29は黒色土器A類の椀。27は口径11.0cm、器高5.1cmが測られる。内面はていねいにミガキ調整されている。口縁部外面に煤あるいはタール状の付着物があり、底部の高

台内には刻書「一」がある。No.10の出土。28と29は内面に暗紋のある椀。28は独鈷状の模様を2つ重ねたような暗紋である。底部破片でNo.1・2・4・5の接合個体。29も28同様な暗紋を持ち、口径14.6cm、器高6.0cmが測られる大形品。No.26・28ほかの接合例。30から40は土師器環類。30は口径9.2cm、器高2.5cmが測られる完形個体でNo.17出土。31は口径9.1cm、器高2.1cmの完形個体でPit1のNo.5出土。32は口径9.4cm、器高3.0cmが測られる完形個体でPit1のNo.3出土。33は口径9.8cm、器高3.1cmの完形個体でNo.15の出土。34は口径10.0cm、器高2.8cmを推定する1/5個体でNo.14出土。35は口径10.2cm、器高3.1cmを推定する1/2個体で埋没土中の出土。胎土・焼成ともほか資料と異質であり、別時期もしくは別遺構からの混入の可能性もある。36は口径9.9cm、器高2.5cmが測られる2/3個体でNo.18とNo.20の接合資料。37は口径9.9cmが測られ、胴下半を欠失する例で埋没土出土。38は口径10.2cm、器高3.0cmが測られる完形個体でNo.11の出土。39は口径10.2cm、器高3.0cmが測られる1/2個体でNo.21と埋没土の接合資料。40は口径11.7cm、器高3.6cmの完形個体でNo.4の出土。41は埋没土出土の灰軸陶器の椀、口縁部の破片。つけ掛け手法で、口径17.0cmが測られる。42と43は土師器の盤B類。42は口径10.9cm、器高3.4cmが測られるほぼ完全な個体。No.18と埋没土の接合資料。43は口径8.5cm、器高3.2cmの完形個体。No.12の出土。44は土師器の羽釜口縁部破片。羽状の掛け部より下位で口縁部を接合した製作法で口径18.0cmが測られる。No.19の出土。45はロクロ成形の甕、口縁部破片。Pit2出土。46はロクロ成形の小型甕、口縁部破片。No.25の出土。47は瓦の小破片。平瓦の破片と考えられ、外側には明瞭な布目が観られる。第45図22は土鍾で片方の端部を欠失している。

時期：土師器の環類に、口径9.0cm～9.5cm、器高2.0cm～2.5cmが測られる形態（AⅢ類）が出現し、環AⅡ類との法量分化が始まる特徴がある。また1点ではあるが羽釜が出土し、その出現期を加味して古代Ⅷ期（10世紀後半）以降と判断できる。

SB19（第23図、第39図 P L 4）

位置：XV-17・18・22・23

検出：SB12の確認時に、これと重複する竅穴住居跡の存在を確認した。精査の結果、全体のプランをつかむことはできたが、本跡の大半はSB12に破壊されていた。

規模：長軸（515cm）×短軸（110cm）、深さ-7cm、隅丸方形か。

埋土：黒色土の単純堆積。

構造：ほとんど残存部分がなく不明。SB12と同じ軸線で構築されていた可能性があり、時間差はあまりないと所見がある。床面は砂礫層の地山を平坦に加工し利用している。

遺物：ほとんど出土していない。第39図48は須恵器の環、口縁部破片。No.2出土。

時期：切り合い関係からSB12よりは古いと判断できる。

SB20（第27図、第39図 P L 5）

位置：XI B-06・07、11・12

検出：当該地区に広がる黒褐色土の落ち込みを確認し、精査した結果、調査区西端にてコーナーがあり方形形状を予想させるSB16とほぼ同様な落ち込みを確認した。落ち込みの大半は調査区外に伸びており、遺構の性格をつかみがたいが、予想される形状から竅穴遺構を想定し調査に入る。

規模：長軸（500cm）×短軸（155cm）、深さ-20cm、形状不明。

埋土：黒褐色土の単純堆積。

構造：カマド、周溝、柱穴等は確認できなかった。床面は地山を掘り込んでいる。

遺物：出土遺物はほとんどない。第39図49は灰軸陶器の小皿、1/2個体。No.1の出土。

時期：不明。図示した資料のほかに、埋没土中より須恵器杯の破片2点と土師器の甕破片が1点出土している。灰軸陶器の出現する古代Ⅳ期（9世紀前半）以後か。

SB21（第28図、第29図、第40図 P L 6, 17）

位置：XU-19・20・24・25

検出：当該地区に広がる黒褐色土の落ち込みを確認し、その北側を精査した結果、幅10mにわたり、さらなる黒色土の落ち込みを確認した。複数の遺構が重複していることが予想されたため精査したところ、方形状に広がる竪穴住居跡と考えられるプランを2軒（SB22及びSB27）確認する。その北東側にも不明瞭ながら、さらにもう1軒を調査中に確認し、それをSB21として調査する。

規模：長軸（150cm）×短軸475cm、深さ-38cm、N49°E、隅丸方形か。

埋土：黒色土の単純堆積。

構造：SM05の土層断面観察から本跡がSB22を破壊していたと結論づけた。調査はSB22と同時に掘り進め、当初SB22が本跡を破壊していたと誤認したため、本跡の南側の大部分はプランをつかむことはできずに掘り下げてしまった。結果、北東側の辺とカマドのみを記録した。カマドは地山の削り出しによる袖部と焼土の堆積した状況の燃焼部を確認した。燃焼部には拳大の礫と土器破片が散乱していた。

遺物：第40図1～6は土師器の杯A類で底部回転糸切り難し手法。1は口径11.6cm、器高3.6cmが測られる完形個体でNo.9の出土。2は口径12.2cmが測られるほぼ完形の個体で口縁端部を横ナテ強調した作り。No.33の出土。3も2とほぼ同形態でNo.30の出土。4は口径12.6cmが測られる2/3程度の個体でNo.25出土。5は口径12.5cm、器高3.7cm、良質な胎土と焼成良好な例でカマドの出土。6は口径11.6cmが測られるNo.18出土資料。7～15は黒色土器A類の杯。7は口径12.3cmが測られるほぼ完全な個体でNo.2出土。8は口径12.2cm、器高3.9cm、底部径5.0cm。8と11及び14とも内面に「大」の字状の暗紋がある。11は口径12.1cm、器高4.1cmが測られる例で、カマド出土例。14は口径13.0cm、器高4.6cmでNo.31出土。9は口径16.6cm、器高5.5cmが測られる大形のタイプで底部回転ヘラケズリ。内面には放射状の暗紋がある。10は口径12.4cmが測られ、内面にはぐるぐる模様様の暗紋がある。12と13は内面に「※」状の暗紋がある。12はNo.26出土、13はNo.5出土。15は内面に刻書のある底部破片。埋没土出土。16は黒色土器A類の碗。口径12.4cmが測られ、高台は厚くぼつてりした作りである。No.29の出土。17は口径16.2cm、器高6.7cmが測られる大形の深碗で、外面には墨書「□」（判読不能）がある。内面は放射状のていねいなミガキ調整がなされている。18～20は土師器の碗。18は口径12.4cm、器高4.8cmが測られる小碗、3/4個体。内外面ともていねいにミガキ調整された優品でNo.24出土。19は口径14.6cm、器高5.9cmが測られる。高台のつくりはしっかり作り、黒色土器の形態である。No.7の出土。20は口径14.3cm、器高5.2cmでNo.6の出土。胎土や焼成は洗練された作りである。21は黒色土器B類の小壺。埋没土中の出土。22は須恵器の短頸壺、胴上半の破片。取手は4箇所に貼りつけられている。No.12・15・34・35の接合個体。23と24は灰軸陶器。23は大形の蓋で体部外面は2/3程度を回転ケズリ調整している。つまみ部は扁平でNo.10の出土。24は碗の底部破片。三日月形の高台。No.27の出土。

時期：土師器の杯及び碗が一定程度あるが、量的に黒色土器を凌駕するものではない。黒色土器A類は杯及び碗があり、ミガキ調整は暗紋様に残る程度のものが中心で、内面の黒色処理が抜けた例も加わる。須恵器は埋没土内からごく微量に出土しているに留まる。以上の要素から、本跡は古代Ⅴ期の後半ないしはⅥ期（9世紀末～10世紀前半）に相当するか。



SB21 出土の土器集合

SB22 (第28図、第40図 PL 6, 17)

位置：XU-19・20・24・25

検出：当該地区に幅10mほどに広がる黒褐色土の落ち込みを確認し、複数の遺構が重複することを予想し精査。その結果、方形状に広がる竪穴住居跡と考えられるプランを2軒確認し、本跡とそれを破壊する1軒をSB27として調査した。

規模：長軸(760cm)×短軸(565cm)、深さ-40cm、隅丸方形か。

埋土：黒色土の単純堆積。

構造：カマドは確認できなかったが、南東部分に焼土と炭化物の分布する範囲を確認した。柱穴は3基(Pit1～3)を確認し、それらが本跡の主柱穴と考えられる。床面は地山を利用した平坦面である。

遺物出土状況：埋没土中に多量の土器小破片が含まれていた。

遺物：第40図25～28は黒色土器A類の環。25は口径15.1cm、器高5.4cmが測られる。底部は回転糸切り離し手法。埋没土中の出土。26と27は25とほぼ同形態で、27には内面に放射状の暗紋がある。いずれも埋没土出土。28は外面に墨書「□」が確認できるが、破片資料のため判読はできない。29は黒色土器A類の碗。外面に刻書がある。刻書「□」は文字と考えられるが判読はできない。1/3程度の個体で高台は欠損している。30～35は灰軸陶器。30はハケ塗り手法の段皿。31は碗の底部破片、32は小碗の底部破片でいずれも三日月形の高台。33は壺の肩部小破片。内面には朱墨痕がある。34は長頸壺の頸部破片でNo.2の出土。35は長頸壺の底部、34と同一の個体か。36は緑軸陶器、稜碗の体部破片。埋没土中の出土。37は灰軸陶器の壺、体部破片。

時期：黒色土器A類の碗と環、これに灰軸陶器の碗や皿が伴う点から、古代Ⅳ期(9世紀代)の様相である。SB21(V期相当)及びSB27(Ⅳ期末)に破壊されることから、Ⅳ期の前半(9世紀前半)ころに該当するか。



SB22 出土の土器集合

SB23 (第30図 PL6)

位置：XU-25、V-21

検出：当該地区に幅10mほどに広がる黒褐色土の落ち込みを確認した。確認当初、自然流路(SD02)の埋没土として調査を進めたが、B-01側にて直線的な落ち込みラインを確認したため、別な遺構の存在を予想し精査する。結果、確認した直線的な落ち込みラインよりも、さらに西側にもう一つの落ち込みラインを認めた。この落ち込みは自然流路(SD02)の埋没土1層とは区別できる土層であり、全体の形状は不明瞭ながら、その規模から竪穴状遺構を推定し調査する。本跡をSB23と仮称し、西側の遺構をSB24とした。埋没土1層(SB23の埋没土)の有無から、本跡がSB24を破壊すると判断した。

規模：長軸(720cm)×短軸(150cm)、深さ-43cm、隅丸方形か。

埋土：4層の堆積。

構造：カマド、柱穴、周溝等の施設は確認できなかった。床面も不明瞭である。

遺物出土状況：埋没土中に多量の土器小破片が含まれていた。

遺物：図示できる程度の資料はない。

時期：埋没土中より黒色土器A類の杯やB類の椀の破片が出土し、これに須恵器杯や甕破片が伴出している。また調査所見では、SB24とSB25を破壊して構築していると判断しており、少なくとも古代V期(9世紀後半)以後の可能性が高い。

SB24 (第30図、第41図 PL6, 18)

位置：XU-25、V-21、A-05、B-01

検出：当該地区にて幅10mほどに広がる黒褐色土の落ち込みを確認した。自然流路(SD02)の埋没土として調査を進めたが、B-01側にて竪穴状遺構と考えられるSB23を検出、さらに西側にもう一つの落ち込みラインを認めた。全体の形状は不明瞭ながら、その規模から竪穴状遺構を推定し

SB24として調査した。SB23の埋没土は自然流路(SD02)の埋没土1層であり、平面プランで確認した本跡には、この1層が堆積していないことから、SB23により破壊されていたと推定した。

規模：長軸(495cm)×短軸(250cm)、深さ-18cm、N66°E、隅丸方形か。

埋土：黒褐色土の単純堆積。

構造：カマドは東側の壁より認められた。壁に被熱痕跡があり固結した焼土の堆積がある。火床の直上には、焼土と炭の混合した層が堆積しており、火床周辺部にはカマド袖部の芯材と考えられる礫が散在して出土した。煙道部分はSB23に破壊されたものと考えられる。柱穴、周溝は確認できなかったが、所見ではSK243及びSK246が本跡に伴う可能性を示唆する。床面は地山面をそのまま使用したと考えられる。

遺物出土状況：埋没土中に多量の土器小破片が含まれていた。

遺物：第41図1は黒色土器A類の椀。1/2個体で、口径12.8cm、器高5.1cmが測られる。カマド内の出土。2と3は黒色土器B類。2は坏A類の底部破片で埋没土の出土。3は椀の2/3個体。口径10.0cm、器高4.2cmが測られる小椀。埋没土出土。4は土師器の鉢形土器。口径28.2cmの大形例で口縁部内面に鋸歯文が一周している。

時期：時期決定の根拠は希薄であるが、カマドから黒色土器A類の椀が出土していることから、その出現する古代IV期(9世紀代)以降と考えられる。埋没土中から出土した黒色土器B類の小椀を積極的に評価すれば、その組成が明瞭となるV期(9世紀後半)前後が妥当となるか。遺構の重複関係から、SB23に破壊されると判断できる。

SB25(第30図、第41図 P L 6, 18)

位置：X V - 25

検出：SB23及びSB24の調査中に、これら2軒と色調の違う落ち込み土を確認した。確認状況から竪穴状遺構を想定し調査する。土層断面の観察からSB24の北側プランが垂直に立ち上がるように認められ、SB24に本跡は破壊されると判断した。SB23とSB24の切り合いの判断と同様に、自然流路(SD02)の埋没土がSB23・SB24・SB25に同一に認められたことから、本跡もSB23に破壊されていたものと判断したが、切り合い関係は不明である。

規模：長軸(360cm)×短軸(185cm)、深さ-14cm、N11°E。

埋土：確認時、埋没土は確認できなかったので不明。

構造：カマドは袖と火床を確認したことから、北側の壁に付設されたものと考えられる。ただし本跡の全体プランが不明瞭であることから、北壁での位置については不明。やや東よりか？柱穴、周溝は確認できず、床面も不明瞭。

遺物出土状況：埋没土中より土器小破片が出土した。

遺物：第41図5は黒色土器A類の坏1/2個体。内面良好にミガキ調整されるが黒色処理は脱色している。口径13.6cmが測られNo.2の出土。6と7は須恵器坏蓋。6はNo.23出土の完形個体。つまみ部は扁平で体部外面は1/2程度をケズリ調整する。返しは厚く内傾し全体に焼成時の変形が認められる。7はNo.24出土のほぼ完全な個体。つまみ部は扁平で体部外面のケズリ調整は1/3程度である。8は灰軸陶器の椀底部破片。高台は高く残存部から推定するとハケ塗り手法か。No.1の出土。9は灰軸陶器の小椀2/3個体。表面の劣化が著しいが、つけ掛け手法と観られるか。No.26出土。10は土師器ロウロ成形の甕、口縁部の破片。カマドの出土でNo.39。11は体部下半をケズリ成形し、上半部をミガキ調整する甕で1/2個体。No.28・30・33出土の接合個体。

時期：須恵器の坏蓋と灰軸陶器の存在から、古代IV期(9世紀代)ころと考えられるか。ただし第41図9が大原1号窯以降だとすれば古代V期以後の遺物も含まれ、所属時期が若干下ることになるか。

SB26 (第30図、第41図 P L 6, 18)

位置: XU-25

検出: 当該地区に広がる黒褐色土の落ち込みを確認し、埋没土の調査中に30cm～40cmほどの礫集中と固結した焼土、炭化物の分布範囲を確認した。状況から竪穴住居跡のカマドの可能性が高いと判断できたが、時すでに遅く、全体像を把握することはできなかった。結果、カマド想定部分のみの記録保存となった。

規模: 不明。 埋土: 不明。

構造: カマド部分は焼土塊と炭化物の分布があり、焼土塊には支脚石が原位置のまま出土した。大形の礫はカマド袖部の芯材と考えられる。

遺物出土状況: カマド周辺から出土した土器破片を本跡に所属する土器と判定した。緑軸陶器破片、金属製品の出土がある。

遺物: 第41図12は土師器の環。口径13.6cm、器高4.0cmが測られる。No.4の出土。13は土師器の甕口縁部破片で、内外面ともていねいにナデ調整されている。埋没土中の出土。14は口縁部を横ナデ手法で調整し、体部下半は斜め方向のケズリ成形で仕上げられる、ほぼ完全形になる甕。No.1～3・8・13の接合個体。

時期: 土師器環類の出現があるが、黒色土器A類の比率が高く、また須恵器環類破片も少なくないなどの傾向から、古代V期(9世紀後半)ころの可能性が高い。

SB27 (第28図、第41図 P L 6, 18)

位置: XU-24

検出: 当該地区に幅10mほどに広がる黒褐色土の落ち込みを確認し、複数の遺構が重複することを予想し精査する。その結果、方形状に広がる竪穴住居跡と考えられるプランを2軒(SB21・SB22)確認した。SB22はさらに別の遺構と重複関係にあり、落ち込みの形状が方形であったことから、それに竪穴住居跡を想定し調査した。本跡がSB22を破壊する。

規模: 長軸(305cm)×短軸(295cm)、深さ-25cm、N64.5°E、隅丸方形か。

埋土: 黒色土の単純堆積。

構造: カマドは北東側にその残骸と思われる固結した焼土塊と炭化物の分布を確認した。床面は地山を利用した平坦面であり、直上に炭化物の分布が濃密に認められたが、炭化材は確認できなかった。土坑状の柱穴が1基確認でき、埋没土内から黒色土器の環類2点、須恵器環1点、須恵器壺1点がほぼ完形で出土した。壺内からは微細な骨片が出土し、カエル等小動物の骨と鑑定されている。

遺物出土状況: カマド周辺及び床面近くから、土器破片が比較的多く出土した。

遺物: 第41図15～18は黒色土器A類の椀。15は内面黒色処理が脱色した資料で、縦方向のミガキ調整が顕著に認められる。口径12.0cm、器高3.9cm、カマドNo.9の出土。16・17も15とほぼ同法量。16は埋没土中の出土で、17はPit1のNo.3出土の完形品。18は口径12.4cm、器高4.6cmが測られる完形品で、内面は良好にミガキ調整されている。Pit1No.1の出土。19は黒色土器A類の皿、完形品でカマドNo.11出土。口径12.4cm、器高3.3cmが測られる。20は軟質の須恵器環A類の完形個体。Pit1のNo.4出土で、17・18と共伴。外面に墨書「□」があるが判読できない。21と22は灰軸陶器。21はハケ塗り手法で仕上げられた椀で1/3程度の破損個体。口径15.6cm、器高5.6cmが測られる。カマドNo.8の出土。22は段皿でハケ塗り手法。口径17.6cm、器高2.2cmが測られる。埋没土内出土。23と24は須恵器の短頸壺。23は口唇部をつまみあげ状に作り出す。カマドNo.13の出土。24は口径11.7cm、器高24.6cmが測られる大形例。Pit1のNo.2出土の完形個体。



SB27 出土の土器集合

時期：食膳具には黒色土器A類の椀と皿が主体を占め、須恵器をほとんど伴わない。20の須恵器環A類は軟質例である。灰軸陶器にはハケ塗り手法の椀と段皿がある。これらの特徴から、古代Ⅳ期(9世紀代)と考えられるが、黒色土器の製作手法に土師器的な要素が認められることから、Ⅳ期終末からⅤ期(9世紀終末)に近いのか。

②掘立柱建物跡(S T)

ST01(第31図、第41図 P L 6, 18)

位置：X I B - 01・02

検出：砂礫まじりの黄褐色土上面にて、黒色土の落ち込みを確認する。

規模：長軸(305cm)×短軸(295cm)、深さ-25cm、N64.5° E、隅丸方形か。

埋土：黒色土の単純堆積。

構造：2間×3間。

遺物：第41図25は須恵器環A類の底部破片。底部糸切り離し手法による。底部径は7.0cmが測られる。

Pit2埋没土内出土。26は灰軸陶器の皿、底部破片と考えられる。部分的な観察であるが、ハケ塗り手法と観られる。Pit10出土。

時期：不明。本跡と他の遺構との位置関係から古代Ⅰ期相当か。

③土坑(S K)

SK04(第13図、第41図 P L 18)

位置：X I B - 04

規模：平面形態はほぼ円形。径20cm、深さ-24cm。

構造：断面は砲弾形。

埋土：黒褐色砂質粘土の単純堆積。

遺物：第41図27は埋没土の中位から出土した土師器の椀。体部外面にはロクロ成形痕を明瞭に留める。

口径 14.0cm、器高 6.0cm が測られる。

時期：古代Ⅳ期以降

SK08（第14図、第42図、第48図 P L 19）

位置：XV-19・24

規模：平面形態はやや不整形な楕円形。長軸 2m74cm × 短軸 1m50cm、深さ-14cm。

構造：断面は浅いタライ状。

埋土：1層は黒褐色土。2層は焼土まじりの暗褐色の細粒砂質土。

遺物：第42図1は灰軸陶器の長頸壺の胴部破片。2は四耳壺の胴部上半の破片。ともに埋没土中の出土。

第48図5は鉄製の槌あるいは斧か？長さ 27.4cm、重さ 3540g。6～8は頭部折り曲げ式の鉄釘。

9と10は鉄製の曲板で4箇所に留め穴がある。9はNo.4出土で 26.9g、10はNo.3の出土で 40.7g が量られる。

時期：古代Ⅳ期以降か。

SK09（第14図、第32図、第42図、第47図 P L 7, 19）

位置：XV-19・20

規模：平面形態は円形。長軸 1m50cm × 短軸 1m40cm、深さ-60cm。

埋土：黒褐色砂質土を基調とする3層の堆積。

構造：断面はタライ状。検出時に拳大の礫が集中して出土。

遺物出土状況：埋没土上層にて拳大から径 20cm 大の礫とともに土器片が出土した。

遺物：第42図3は須恵器の甕形土器。大形品の口縁部破片で No.4・10・32～35の接合例。第47

図1は加工痕のある剥片。表裏面に平坦剥離を施し石鏃または石錐を製作するものと考えられる。黒曜石製。

時期：古代か。

SK10（第10図、第32図、第42図、第48図 P L 7, 19）

位置：XV-14・15

規模：平面形態は円形。長軸 1m70cm × 短軸 1m40cm、深さ-1m60cm。

埋土：黒褐色粘質土を基調とする4層の堆積。

構造：断面はロウト状。埋没土下層の4層を中心に土器が出土した。

遺物：第42図4～6は須恵器の坏A類。4は口径 13.0cm、器高 4.0cm が測られ糸切り離し手法で No.9の出土。5はNo.24出土の完形例で外面にはロクロ成形痕を明瞭に留める。口径 14.0cm、器高 4.0cm、底部内径 6.5cm が測られる。6は軟質で No.3の出土。1/2 個体。7～9は須恵器の坏B類。7は小型品で埋没土上層（1～2層）の出土。8はNo.19出土で、口径 15.0cm が測られる。9はNo.2の出土資料で、口径 15.0cm、器高 6.0cm が測られる。10～15は黒色土器A類の坏。10はNo.6出土で口径 12.0cm が測られる。11は口径 13.0cm、器高 3.0cm が測られる皿形に近い坏。No.23の出土。12と13も11と同様な個体である。12はNo.13とNo.16の接合資料で、13はNo.18の出土。14は口径 17.0cm の大形で深身の坏、No.22の出土。15も14と同様な資料で1/2 個体。16と17は黒色土器B類。16は小碗で、17は皿である。18は須恵器の鉢。埋没土下層出土。19は黒色土器A類の坏蓋。外面は1/2程度ケズリ成形し、内面はていねいにミガキ調整されている。かえし部はやや直。埋没土下層（4層）の出土。20は19と同様な作りの黒色土器A類の蓋で口径 26.0cm が測られる。埋没土下層（4層）の出土。21と22は土師器の小甕。21はロクロ成形痕を留める例で4層の出土。22はカキメ調整の甕



SK10出土の土器集合

でNo.13の出土。23と24は土師器の高盤で口縁部と脚部の破片。25と26は須恵器長頸壺。25はNo.1、26は4層の出土。27は灰釉陶器の短頸壺、大形の個体で口縁部の破片。埋没土下層(4層)の出土。第48図11は鉄釘であろうか。

時期：黒色土器A類の坏が主体で、これに須恵器坏類が共伴する事例。黒色土器B類の椀や皿が登場している点から古代Ⅳ期(9世紀前半代)と判断できるか。

SK35(第10図、第43図、第47図 P L 7, 19, 22)

位置：XV-15

規模：平面形態は円形。長軸1m80cm×短軸1m70cm、深さ-70cm。

構造：断面はロウト状。調査所見では井戸跡とするが、遺構の性格認定の根拠は薄い。

遺物：第43図1と2は軟質須恵器の坏A類。1は口径13.0cm、器高4.0cmが測られ、糸切り離し手法で埋没土中の出土。2は1とほぼ同様な製作手法で作られた坏の口縁部破片。破損し全体は不明だが、体部外面に「山」の字の墨書がある。3は土師器坏A類の1/3程度の個体。口径11.0cm、器高2.5cmが測られる。非常に硬質な焼成である。4は土師器盤の脚部破片。5は四耳壺の体部。No.1の出土。第47図2は黒曜石製で両極剥離痕のある剥片。3は黒曜石製の石核。表裏に自然面が残り、表面に数回の剥離痕がある。8.5gが量られる。

時期：軟質の須恵器坏が残存し、土師器の坏、そして盤の存在から古代Ⅴ期(9世紀後半)と考えられるか。

SK37(第10図、第32図、第43図 P L 7, 20)

位置：XV-14・19

規模：平面形態は不整形。長軸1m10cm×短軸90cm、深さ-57cm。

埋土：暗褐色の砂質土を基調とする1層の単純堆積。埋没土中には小礫が混じる。

構造：断面はタライ状でやや不整形。埋没土上を中心に土器が集中して出土した。

遺物：第43図6~12は土師器の坏A類。6は口径9.0cm、器高3.0cm、底部径4.0cmが測られ、糸切り離し手法でNo.4の出土。7は口径10.0cm、器高2.7cm、底部径5.0cmが測られNo.8の出土。8も7とほぼ同様な法量の例でNo.3の出土。9は6とほぼ同形態の例でNo.6の出土。10~12は7とほぼ同形態の完形個体。10はNo.10、11はNo.2、12はNo.11の出土。13と14は土師器の盤で、ともにほぼ完形の個体。13は口径13.0cm、器高6.0cm、高台高1.7cmが測



SK37 出土の土器集合

られる。口縁部は外側に強く開く形態で外面にはロクロ成形痕を留める。No.1 出土。14 も 13 とほぼ同形態の No.9 出土。

時期：口径 10.0cm 程度の土師器環 A 類に主体があり、これに土師器の盤が伴う。黒色土器 A 類の破片がわずかに加わり、土師器羽釜と観られる胴部の小破片が埋没土中にある。古代VI期の末（10世紀後半）～VII期（10世紀末）と考えられるか。

SK39（第10図、第43図）

位置：XV-14

規模：平面形態は円形。長軸 1m30cm × 短軸 96cm、深さ-10cm。

構造：断面は浅いタライ状。

遺物出土状況：埋没土中より拳大の礫少量とともに土器片が出土。

遺物：第43図15は口径13.0cm、器高3.8cmが測られる土師器の環で、埋没土中の出土。

時期：埋没土の資料のみが存在し、図示した土師器の環と黒色土器A類の環口縁部破片は、ともに古代V期（9世紀後半代）の所産と考えられる。本土坑は、それ以降の構築となろうか。

SK43（第10図、第43図 P L 7）

位置：XV-14

規模：平面形態は円形。長軸 1m70cm × 短軸 1m5cm、深さ-24cm。

構造：断面は浅いタライ状。

遺物出土状況：検出時に拳大から径20cm大の礫が多量に出土し、これに混じり土器片が出土。

遺物：第43図16は口径10.0cm、器高3.0cm、底部径4.0cmが測られる土師器の環。胎土中には赤褐色の粒子を中量程度混入する。埋没土中の出土。

時期：埋没土の資料を中心とし、土師器の碗（取上No.2）、盤（取上No.1）、環（取上No.4）の出土がある。それらは古代V期（9世紀後半代）の所産と考えられ、構築はそれ以後となるか。

SK74（第9図、第33図、第43図 P L 8, 20）

位置：XV-18

規模：平面形態は円形。長軸 52cm × 短軸 45cm、深さ-27cm。

構造：断面はロウト状で遺構検出時に長頸壺を確認した。

遺物：第43図17は須恵器の長頸壺の胴部で、検出時にすでに頸部を欠損してしまっていた。

時期：本土坑に伴う壺の特徴は、肩がなだらかに垂下する形態であることから、古代V期（9世紀後半代）ころと考えられる。

SK76（第9図、第33図、第43図、第48図 P L 8, 22）

位置：XV-18

規模：平面形態は不整形。長軸95cm×短軸（50cm）、深さ-29cm。

構造：断面はタライ状。

埋土：黒褐色砂質土を基調とする3層の堆積。

遺物：第43図18と19は土師器の坏A類。18は口径11.0cm、器高3.0cm、底部径4.0cmが測られる。No.1の出土。19は口径12.0cm、器高3.5cm、底部径5.5cmが測られる。No.2出土。第48図12は雁股式の鉄鏝。19.6cm×11.0cm、41.9gが測られる。13は鉄製の鋤先。袋状の装着部を持つ例で、21.6cm×（15.4cm）×2.0cm、482.8g。

時期：本土坑に伴う土師器の坏は、口径11.0cm～12.0cm台であり、概ね古代VI期（10世紀前半代）と考えられる。

SK78（第9図、第43図）

位置：XV-18

規模：平面形態は円形。長軸66cm×短軸60cm、深さ-35cm。

構造：断面はロウト形。

埋土：黒褐色土の単純堆積。

遺物：第43図20は口径12.0cm、器高3.5cm、底部径5.0cmが測られる。

時期：図示した資料ほかは、いずれも埋没土中の出土であり、本土坑の時期決定は難しい。土師器环の特徴は、古代VI期（10世紀前半代）ころと考えられるので、それ以降の構築となるか。

SK81（第9図、第33図、第43図 P L 8, 20）

位置：XV-18

規模：平面形態は不整形円形。長軸65cm×短軸65cm、深さ-20cm。

構造：断面はタライ状。

埋土：黒褐色砂質土を基調とする2層の堆積で炭化物粒子を混入する。

遺物：第43図21は土師器の坏A類。口径12.0cm、器高3.5cm、底部径4.5cmが測られる。ほぼ完全な個体でNo.2の出土。22は土師器の碗の高台部。No.1の出土。

時期：埋没下層の土師器や碗から、概ね古代V期～VI期（9世紀後半～10世紀前半）と考えられる。

SK126（第10図、第43図 P L 20）

位置：XV-25

規模：平面形態は円形。長軸1m30cm×短軸73cm、深さ-40cm。

構造：断面は有段のタライ状。平面及び断面の形状から南側に別の土坑が重複する可能性もあるが、調査所見では同一のものと判断している。

埋土：黒褐色砂質土の単純堆積。

遺物：第43図23は、No.1出土の須恵器坏A類。ヘラ切り離し手法。焼成時までに全体が紡錘形に歪み変形している。

時期：図示した坏は製作上、古い手法だが、同様に埋没土から出土している土器には、黒色土器A類及びB類があり、本土坑の所属時期は古代IV期以降である可能性が高いか。

SK137 (第10図、第47図 P L 8, 22)

位置: XW-16

遺物: 第47図4はヒスイ製の勾玉で、本跡の埋没土中より出土。13.7gが量られる。

SK150 (第16図、第43図)

位置: XI B-13

規模: 平面形態は円形。長軸90cm×短軸86cm、深さ-45cm。

構造: 断面は深さのあるタライ状。

遺物: 第43図24は、埋没土出土の軟質の須恵器環A類。口径14.0cmが測られる。

時期: 図示した環以外に、埋没土中より黒色土器A類の破片がある。本土坑の所属時期は古代IV期以降の可能性が高いか。

SK199 (第13図、第43図)

位置: XI B-03

規模: 平面形態は不整形円形。長軸1m×(短軸74cm)、深さ-24cm。

構造: 断面はタライ状と考えられるが、西側がかく乱により破壊されている。

遺物出土状況: 北西側の壁よりの埋没土中より、ほぼ完全に近い土師器環が1点出土。

遺物: 第43図25は土師器環A類。口径12.0cmが測られる。

時期: 図示した環以外に、埋没土中より須恵器環や黒色土器A類の破片がある。本土坑の所属時期は古代IV期以降の可能性が高いか。

SK187 (第33図、第44図、第47図 P L 8, 20, 22)

位置: XI B-14・15

規模: 平面形態は不整形円形。長軸1m12cm×短軸98cm、深さ-18cm。

構造: 断面はタライ状。

埋土: 黒褐色土を基調とする3層の堆積。1層には炭化物・焼土粒子を混入する。

遺物出土状況: ほぼ完形となる個体(第44図1)のほか、土器小破片、黒曜石の剥片が埋没土中より出土した。また1の土器直下からクルミを中心とする炭化物が比較的多く出土している。



SK187 出土の土器と黒曜石等の石屑

遺物：第44図1は弥生時代前期末（縄文時代晩期終末）あるいは弥生時代中期初頭と考えられる深鉢形土器。口縁部に小突起が3単位つき、口唇部はやや角頭状で、胴部半ばに最大径がある。器面の調整は、最終的にナデ仕上げがなされるが、成形後には工具による条痕状のケズリ調整が施されているらしい。2・3は条痕調整の壺頸部破片。4は条の細かな例で壺または深鉢の体部であろうか。第47図5は加工痕ある剥片。平坦剥離が表裏に施され鋭角な先端部を作出している点から、石鏃未製品が想定できるか。6は凝灰岩材の加工痕ある剥片で、加工の特徴から打製石斧関連の資料である可能性が高い。7は扁平片刃石斧の胴部破片であろうか。凝灰岩材か？8は黒色頁岩材（茶褐色）の縦長剥片。No.7の出土で42.1gが量られる。

時期：出土遺物は、弥生前期末から中期初頭期に所属する土器破片であることから、本土坑の時期は、該期と考えられるか。土坑内の出土炭化材を用いた炭素年代測定（AMS法）の結果は354 ± 40年BC及び364 ± 40年BCの値を得ている。

SK235（第7図、第33図、第44図 P L 8, 20）

位置：XU-20

規模：平面形態は不整形円形。長軸76cm×短軸74cm、深さ-14cm。

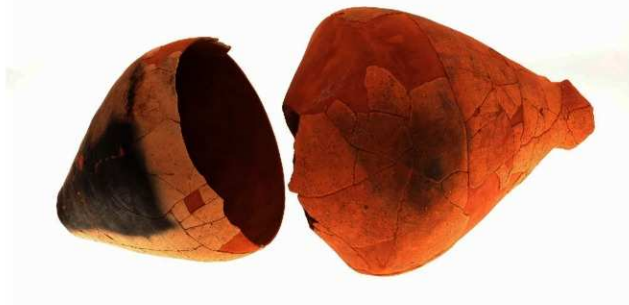
構造：断面はタライ状。

埋土：黒褐色土の堆積。検出はSD02の調査中であり、確認はやや不明瞭であった。土坑からは壺と甕が出土し、土坑の大きさも、これに一致したものとなっている。

遺物出土状況：壺は口縁部と底部を欠き、甕は胴部上半を欠いている。調査所見では2つとも口を北西方向に向け、壺の底部に甕が重なるような位置関係で出土したが、これらが合わさるように埋められていたかは、検出状況からは推定できなかった。検出時、土器の上面は陥没した状態であった。

遺物：第44図5は赤彩のある壺。頸部に波状文が施され、空間部を設けて、以下に櫛歯の横線文がある。空間部には豆粒状の添付文がある。6は櫛歯波状文の甕形土器。

時期：出土土器の特徴から、弥生時代後期中～後半の土坑と考えられる。



SK235 出土の土器箱

④土壌墓 (SM)

SM01 (第13図、第14図、第34図 P L 9)

位置: X I B-4

検出: 砂礫まじりの黄褐色土上面にて、黒色土の落ち込みを確認した。その大きさや形状から土坑を想定し調査に入る。

規模: 長軸 114cm × 短軸 100cm、深さ-30cm、N47° W、不整形円状。

埋土: 黒褐色土の単純堆積。褐色土のブロック、炭化物粒子を混入する。

構造: 素掘りの土坑で、遺骸は左向き側臥屈葬姿勢で埋葬されていた。遺骸の背面側には人頭大の礫が列状に検出され石組の施設が予想されたが、同大の礫は人骨の上面からも2個発見され、墓壇の構築に伴い少なくとも遺骸を埋置した後に礫が配されたことが分かった。

人骨の特徴: 成人の男性。

遺物出土状況: 副葬品は確認できなかったが、埋没土内より須恵器環 A 類の破片 2 点、黒色土器環 A 類の破片 2 点、土師器の坏及び甕の破片が各 1 点出土している。

時期: 埋没土中の資料ではあるが、土師器の坏破片が出土したことから、古代 V 期以降である可能性が高い。

SM02 (第6図、第34図 P L 9)

位置: X U-13・18

検出: SD02 内の黒褐色土の落ち込みを調査中に遺骸を発見した。発見が遅れたことにより、掘り込みの深さや埋没土の観察などは明確にできなかった。

規模: 長軸 170cm × 短軸 58cm、深さ-6cm、N19° E、隅丸長方形。

埋土: 黒褐色の砂質粘土の単純堆積と思われる。炭化物粒子を混入する。

構造: 素掘りの土坑と考えられ、遺骸は仰臥伸展葬と考えられるが、頭骨は右向きである。

人骨の特徴: 成人、性別不明。

遺物出土状況: 副葬品や出土遺物は確認できなかった。本遺骸の周囲より馬骨が散在して出土している。

時期: 不明。古代の可能性が高い。

SM03 (第11図、第34図 P L 9)

位置: X I A-5

検出: SD02 内の黒褐色土の落ち込みを調査中に、遺骸を 2 箇所で見つけた。発見が遅れたことにより掘り込みの深さや埋没土の観察などは明確にできなかった。北側の 1 体を SM04 とし、南側の 1 体を SM03 とする。

規模: 不明、遺骸の主軸は N20° E。

埋土: 不明だが、SD02 と同質の黒褐色土の単純堆積と思われる。

構造: 素掘りの土坑の可能性が高い。遺骸は左向き側臥屈葬姿勢。

人骨の特徴: 成人の女性。

遺物出土状況: 副葬品や出土遺物は確認できなかった。

時期: 古代の可能性が高い。人骨片を用いた炭素年代測定 (AMS 法) の結果は 786 ± 40 年 (8 ~ 9 世紀) である。

SM04 (第11図、第34図 P L 9)

位置: X I A-5

検出: SD02 内の黒褐色土の落ち込みを調査中に、SM03 とともに発見した。発見が遅れたことにより、掘り込みの深さや埋没土の観察などは明確にできなかった。

規模：不明。遺骸の主軸はSM03とほぼ同じ方向と思われるが頭骨のみで判然としない。

埋土：不明だがSD02と同質の黒褐色シルト。

構造：素掘りの土坑の可能性が高い。遺骸は頭骨のみを検出したため、埋葬姿勢は不明。人骨の遺存状況は極めて悪い。

人骨の特徴：子供、性別不明。

遺物出土状況：副葬品や出土遺物は確認できなかった。

時期：不明。古代の可能性が高い。

SM05（第7図、第34図 P L 9）

位置：XU-19

検出：SD02内の黒褐色土の落ち込みを調査中に、SB21及びSB22とともに発見した。

規模：長軸160cm×短軸70cm、深さ不明、N31°W、やや歪な隅丸長方形。

埋土：黒褐色土の単純堆積と思われる。

構造：素掘りの土坑で遺骸は仰臥伸展葬と考えられるか。

人骨の特徴：成人、性別不明。

遺物出土状況：副葬品や出土遺物は確認できなかった。

時期：検出状況の所見では、SB21の埋没過程に本墓塚が掘られた可能性を示唆することから、古代V期以降と考えられる。人骨片を用いた炭素年代測定(AMS法)の結果は、1156±40年(12世紀)である。

SM06（第8図、第34図、第43図 P L 10）

位置：XV-17

検出：SB17の調査中に、長方形に広がる暗褐色土の落ち込みを確認した。SB17を破壊する別遺構と判断できたので土坑(旧SK210)として調査に入る。結果、人骨の出土を確認したことから土塚墓と判断した。

規模：長軸130cm×短軸45cm、深さ-22cm、ほぼ真北、やや歪な隅丸長方形。

埋土：暗褐色土の単純堆積と思われる。炭化物粒子を混入する。

構造：素掘りの土坑で、遺骸は仰臥伸展葬の可能性が考えられるか。

人骨の特徴：成人、性別不明。

遺物出土状況：副葬品は確認できなかった。埋没土中より土器片が出土している。

遺物：第43図26は灰釉陶器の椀、口縁部の破片。No.1の出土。27は灰釉陶器の長頸壺の底部破片。

時期：図示した資料以外に、埋没土中より黒色土器A類、須恵器環頸の破片がある。検出状況の所見では、SB21の埋没過程に本墓塚が掘られた可能性を示唆していることも合わせ考えると、古代V期以降か。人骨片を用いた炭素年代測定(AMS法)の結果は1536±30年(16世紀)である。

⑤集石跡(SH)

SH01～SH05（第10図、第14図、第35図、第44図、第47図 P L 11, 22）

位置：XV-20・24・25

規模：5m50cm×3mの範囲に拳大の礫が集中して出土した。その範囲の中は、幾つかの礫集中にまとまるように覗かれたので、1m～2m四方を便宜的にまとめてSH01～SH05とした。

構造：掘り込み面は確認できず、礫が集中している。SB13及びSB14との切り合い関係は不明だが、SK79にはSH04は破壊される。

遺物出土状況：礫中より弥生前期の土器破片が出土している。

遺物：第44図7は条痕文の壺形土器、口縁部の破片。口縁には粘土紐貼り付けの凸帯が1条ある。SH03のNo.5。8は壺口縁部の破片。口縁は折り返し状に比厚し、風化が著しいが単節の原体が横位方向に施されている。SH04のNo.2の出土。9は外面ミガキ調整の鉢形土器口縁部の破片。横位方向のミガキ調整と径0.5cmの一穴がある。SH04の出土。10はSH05のNo.1の土器で深鉢形の土器か。口縁部には横沈線が走り、口唇近くは斜め方向の沈線が施されている。第47図23はSH05出土の打製石斧。先端部に使用による摩耗痕がある。9.0cm×4.1cm×1.3cm、54.3g、凝灰岩材。

時期：出土土器は、SH03の埋没土に黒色土器の小破片が1点、SH05に黒色土器と須恵器の小破片が各2点あるのみで、ほとんどが弥生前期の資料である。古代土器は、おそらくSB13及びSB14よりの混入と考えられるので、本跡は弥生時代前期に属する可能性が高いと判断できるか。

⑥復旧痕跡（SX）

SX01～SX05、SX14、SX15（第13・14図、第36図 P L 12, 13）

位置：XV-23・24・25、XI B-23、XV-12

検出：表土層を除去し、遺構検出を実施した際、粒径10cm前後の角礫が長方形に集中する箇所が認められた。礫の集中は東西方向に6箇所が規則的に配置され、まるで土壇墓のように観られた。SX14から西へSX01と仮称したが、SX01とSX02はSB11を、SX03はSK124を破壊し、結果的には、すべての遺構をこれらSXが破壊していることが判明した。本遺跡では中世の出土遺物がないことから、近世あるいはそれ以後の構築物である可能性が高いと判断できた。同様なSXはほぼ同一軸線上に広がり、SX09やSX10などが検出できた。以下、規模や構造等の特徴は、SX01に代表させて記述する。

規模：長さ160cm×幅80cm、深さ-65cm。

埋土：底部付近には粒径10cm～20cm前後の礫を中心に、上部には拳程度の礫を充填させる。

構造：素掘後に礫を充填させる。土砂の埋め込みはないように観られた。

遺物出土状況：特になし。

性格：本跡のような遺構は、災害等の復旧に伴う竪穴状掘り込みとして、すでに茅野市御社宮司遺跡等に報告例がある。時期的には18世紀から19世紀と判断されている。本遺跡地には水田耕作の痕跡はないが、以下に記すSD01やSD02など、土砂の押し出し痕跡が認められることから、当該のSXも、災害等に関わる復旧痕跡の可能性を考慮することができるか。

参考）河西克造 2009『一般国道20号改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 御社宮司遺跡 中村・外垣外遺跡』長野県埋蔵文化財センター

佐藤貴司 2007「宝永噴火」国立科学博物館ニュース第464号

⑦溝跡（SD）

SD02（第6・7図、第11・12図、第43～45図、第47図、第49図 P L 10, 11, 20, 21, 22）

位置：XU-12～14・18・19周辺

埋土：黒褐色土の堆積。

遺物：第43図28と29は黒色土器A類の環。28は口径12.0cmが測られる環の口縁部破片。体部には逆位で墨書「今」か？が書かれている。29は口径12.0cm、器高4.5cmが測られる。内面はていねいにミガキ調整されているが、黒色処理は消失している。30は黒色土器A類の椀。口径13.0cm、器高4.5cmで内面は良好にミガキ調整され黒光りしている。31と32は黒色土器B類の皿。31は風化著しく高台を欠失している。32は内外面とも良好なミガキ調整で黒光りする。口縁内面は舌状で有段となる。33は土師器の環、小破片。口径8.0cm、器高1.7cmが測られる。

34はこね鉢の口縁部破片か。35は須恵器短頸壺の蓋。口径16.0cm。36は須恵器环蓋。つまみ部は扁平で返しは直。37と38は内面を黒色処理した片口の鉢。39と40は緑釉陶器。39は皿で口縁は折縁状に緩やかに外傾する形態。口径は15.0cmが測られる。40は稜碗の口縁部破片。41は灰釉陶器の椀底部破片で、高台は断面三日月形。底部内面に刻書「□」があるが判読できない。第44図11と12は灰釉陶器の皿。11は漬け掛け手法で口径13.0cmが測られる。12はハケ塗り手法で高台は三日月形。口径は15.0cmが測られる。13は12と同様な製作手法による段皿。14は碗の1/2程度の個体。ハケ塗り手法だが胎土が褐色である。15は灰釉陶器の小瓶。口縁部を欠損している。16は円面硯。17は須恵器の壺G類、体部破片。18は布目瓦。第47図9と10は凹基無茎式鐵。9は基部が山形に抉られた形状で黒曜石製。10は赤色の碧玉製で、長さ1.5cm、重さ0.3gが測られる。No.3の出土。11～13は有茎式石鐵。11と12は凹基式で黒曜石製。13は緑色のチャート材で凸基式。No.2出土。14は白玉。緑色の碧玉製で0.1g。15は加工痕のある剥片で製作手法から石鐵関連の資料と考えられる。16は両極刺離痕のある剥片、黒曜石材。17は磨製石包丁でNo.7の出土。杏仁形で2穴式、凝灰岩製である。18は打製石斧。無斑品質の安山岩か。先端部には使用による摩耗痕が観られる。No.10の出土。19は緑色岩材の磨製石斧。基部は敲打痕跡を残し、刃部のみ入念に研磨している。長さ12.5cm、重さ266.8gが測られる完形品。20と21は敲石。21は棒状で1/2程度を欠損する。端部に敲打痕のある安山岩材。22は軽石製の砥石残欠。手持ちの四面砥石である。埋没土の出土。第49図1～9は鉄釘。10～14は鉄製の刀子。12と13は柄の部分である。15と16は鉄製の鏃。17は馬具の金具と考えられる。No.17の出土。18は板状の鉄片で526gが量られる。No.20の出土。19と20は青銅製品であるが、道具の種類を推測できない状態である。19はNo.6、20はNo.22の出土である。第45図23～29は土鍾。23は67.7gでNo.14出土。24は46.9g、25は縦方向に1/2欠損する例、26は36.3g、27は80.9g、28は85.3gで一部わずかに欠損、29も一部をわずかに欠損し37.9gが量られる。

時期：不明

⑧遺構外出土遺物

遺物：第45図1は縄文時代晩期水式土器の鉢、口縁部破片。2は弥生後期、箱清水式の鉢形土器1/2破損個体。赤彩が施されているが、外面は風化により不明瞭。2穴が対となる穿孔がある。3も箱清水式の小形の甕形土器。4はハケ調整の甕底部破片。5は非ロクロ土師器の坏で2/3個体。底部は丸底でケズリ成形。6は須恵器坏A類の坏1/2個体。底部ヘラケズリ成形で口径10.0cm。7は須恵器坏B類で、口径10.0cmが測られる。8は須恵器坏A類で、外面にロクロ成形痕を留める。底部糸切り離し手法で、底部に墨書「山」がある。9と10は黒色土器A類の坏。9は底部及び底部付近を回転ヘラケズリ成形した資料で、焼成良好で硬質感がある。10は底部糸切り離し手法で体部はナデ調整している。11と12は黒色土器B類の皿B。11は口径13.0cmほどで口唇が立ち上がる形状。12は内外面とも良好にミガキ調整され黒光りしている。内面は有段。13は黒色処理のなされていない皿で、内面良好にミガキ調整され、外面は底部及び底部付近をケズリ成形する。14～16は灰釉陶器の椀。14と15は漬け掛け手法により、16はハケ塗り手法である。17～19は灰釉陶器。17は長頸壺の口、18は広口壺の口縁部で、19は底部の破片である。第47図24は凹基の無茎式鐵で、基部に装着用と考えられる研磨の施された部分磨製品である。黒曜石製。25は平基の無茎式鐵で黒曜石製。26は黒曜石製の柳葉鏃。27は剥片を素材とした石鏃状の大形刃器。裏面には自然面を大きく残す。凝灰岩材か？28は凝灰岩材の縦長状剥片。29は凹石。

4. 小 結

峯謡坂遺跡は、高雄山山塊の東麓、千曲川に向けて押し出された焼捨土石流堆積物（土石流台地とも呼ばれる）の末端、標高381m～391mに位置する。遺跡の形成は、弥生時代前期末～中期初頭に造られた墓域が初現で、弥生時代後期後半にも墓地としての利用がある。集落遺跡としての形成は7世紀終末に開始されるが短期間で終息し、奈良時代には集落は確認できない。平安時代に入り再び設営が開始され、集落の産絶は平安後期の11世紀前半と考えられる。出土遺物（土器）から判断される遺構それぞれの所属時期及び段階は、古代Ⅰ期（屋代遺跡群の古代Ⅰ期後半 註2）、古代Ⅳ期（屋代の6期・7期）、古代Ⅴ期（屋代の8期）、古代Ⅵ期（屋代の9期～11期）、古代Ⅶ期（屋代の12期・13期）である。各時期の概ねの時代観は以下のとおりである。

弥生時代前期末～弥生時代中期初頭（紀元前2世紀～）、弥生時代後期中～後半（2世紀）

古代Ⅰ期（7世紀後半）、古代Ⅳ期（9世紀前半）、古代Ⅴ期（9世紀後半）、古代Ⅵ期（10世紀前半）、

古代Ⅶ期（10世紀後半）

A. 集落の構造について

遺構の多くは、掘り込み面上部までの削平を受けており、全体形が不明な例がいくつかある。調査区中央に1箇所（SD01）と北西側に1箇所（SD02）、凹地状の黒褐色土の堆積があり、特にこの部分では遺構の検出が困難で、切り合い関係等が明確ではない例もある。

①遺構数と推定された所属時期

- 弥生時代前期末～中期初頭・土坑1基（土器棺SK187）。このほか、SK187と同一箇所（XIB-12・13）で検出した土坑群の中には、該期の墓域が含まれている可能性が高い。
- 弥生時代後期中～後半・・・土坑1基（土器棺SK235）
- 古代Ⅰ期・・・・・・・・・竪穴住居跡4軒（SB04・SB08・SB11・SB14）、掘立柱建物跡1棟（ST01）
- 古代Ⅳ期・・・・・・・・・竪穴住居跡5軒（SB05・SB06・SB12・SB22・SB25）該期の可能性高い例（SB10・SB19）、土坑2基（SK10・SK126）該期の可能性高い例（SK04・SK08）、土壇墓（SM03）該期の可能性高い例（SM04）
- 古代Ⅴ期・・・・・・・・・竪穴住居跡5軒（SB02・SB13・SB17・SB24・SB27）該期の可能性が高い例3軒（SB03・SB20・SB26）、土坑4基（SK35・SK39・SK43・SK74）
- 古代Ⅵ期・・・・・・・・・竪穴住居跡2軒（SB21・SB23）、土坑2基（SK76・SK81）
- 古代Ⅶ期・・・・・・・・・竪穴住居跡2軒（SB09・SB18）、土坑2基（SK37・SK78）、土壇墓（SM05）該期の可能性高い例（SM02・SM06?）
- 不明・・・・・・・・・竪穴住居跡3軒（SB01・SB15・SB16）、土坑225基、土壇墓（SM01）、溝跡2本、焼土跡1基、集石跡19基

②集落の構造解釈

○弥生時代前期末～中期初頭：（紀元前2世紀～1世紀ころ）

【時期区分のポイント：口縁部に山形の小突起のあるミガキ調整の深鉢形土器】

該期は居住施設等の検出はなく、土坑がまとめて発見された。この土坑群の時間的な位置付けは、出土遺物がなく不明だが、唯一、出土遺物が伴うSK187をもとに概要を考える。SK187は大きさ1m規模

の不整形（確認後の深さは20cm程度）で坑内からは深鉢形土器1点と多量の石屑類、木の実状の炭化物が出土した。深鉢形土器は、ほぼ完全な個体に近いが底部の一部を残し欠失している。接合破片がないことから、土坑内に埋設した段階で、すでに打ち欠かれていた可能性が高い。伴出した条痕調整の壺形土器の破片は、いずれも東海地方の系統をひく在地の製作品と考えられる。石屑類には、黒曜石と凝灰岩の2種の石材があり、剥片と破片が混在している。埋没土内からは、クルマ外殻状の炭化物の出土があり、炭素年代測定の結果から、紀元前4世紀ころ（354±40年BPと364±40年BP）の値を得ている。単体の深鉢形土器と石屑類の出土から、何らかの施設であることは疑いのないところであるが、墓跡としての認定には状況証拠に不足がある。本報告書では周辺で検出された土坑群の存在も視野に、墓跡としての性格付けを想定しておいたが、ほかの土坑群が同一の時期であり、同じ性格である所見はない。今後、類例の追跡を含め検討していくべき研究課題である。

○弥生時代後期中～後半：（2世紀～3世紀前半ころ）

【時期区分のポイント：櫛描による羽状文をもつ壺形土器と甕形土器】

該期も弥生前期と同様に、居住施設等の検出はなく、土坑が発見されたに留まる。ただし該期の場合には土坑群を形成せず、単独で1基のみを検出した。土坑の大きさは80cm前後の円形状（確認時の深さは14cm程度）で弥生後期中ごろから後半に位置づけることのできる壺形土器と甕形土器が2点出土している。壺は口縁部と底部を欠き、甕は胴部上半を欠失する。状況から土器棺墓の可能性が高いと考えられるが、人骨等は確認できていない。尾根状の端部に1基のみ単独で存在する墓跡は、東條遺跡や西川原遺跡等の当該期の集落遺跡との関係、さらには該期の葬送を考える上で重要な資料である。

○古代Ⅰ期：飛鳥時代（7世紀後半ころ）

【時期区分のポイント：古代型の須恵器環類の出現する段階】

峯誦坂遺跡の集落は、発掘対象地内で見られる限り7世紀後半に集落が形成されたと考えてよい。該期には古代型の須恵器環類の生産が開始されているが、本遺跡では在地製作の非口クロ土師器に中心がある。検出状況が良好ではないが、SB14が該期の特徴をよく表している。須恵器環A環類に加えて環B類の登場がある。調査区のほぼ中央付近に3～4軒が存在し、いずれも一辺5mを越す中型例で、大型例は確認されなかった。カマドは北向きが主体か。

○古代Ⅳ期：平安時代（9世紀前半）

【ポイント：黒色土器A類に高台付きの椀や皿が出現し、黒色土器B類や灰陶陶器が登場する段階】

古代Ⅰ期に形成された集落は、Ⅱ期以降100年間あまりにわたり集落が断絶する。須恵器環A類は糸切り離し手法のみとなり、黒色土器B類の椀や皿が出現する段階に再び集落が形成される。灰陶陶器の出土はあまり多くはない。住居跡はSB12を中心に、東と西にまとまりがあり、中型規模の住居跡に小型の住居跡（SB10）が加わっている。また土壇墓が発掘区の西側境の付近で検出され、炭素年代測定結果によると、土壇墓（SM03）は786±40年の値を示している。近接して検出されたSM04も該期に所属するものと考えれば、2基が存在したことになる。SM03は成人女性、SM04は子供の遺骸であった。

○古代Ⅴ期：平安時代（9世紀後半）

【ポイント：須恵器環類が消滅傾向に向かい、土師器環類が登場する段階】

須恵器環が消滅傾向に向かい土師器環や椀類が登場するが、土師器製食膳具の出土量は、さほど多くはなく、黒色土器A類の環が主体である。本遺跡ではSB17やSB27に好例がある。該期の特徴は、前時期とほぼ同一場所に同数程度の住居が再建される点で、時代を異にしながらも継続的な集落の形成が伺える。SB05からSB02へ、SB12からSB17へ、SB22からSB27へ、SB25からSB24へと西側に向けて移るものと判断できる。住居跡の規模には、一辺6m以上の大形住居跡（SB02）、中型例（SB17・SB24）、小型

例（SB03）などがある。古代Ⅵ期（10世紀前半）との関わりについては、出土遺物の検討から明確に時期比定することはできなかったが、住居跡の切り合い関係等から判断して、集落跡の時間的な推移を考えた。厳密な評価としての時期決定については検討課題としておきたい。6基検出した土壌墓は、炭素年代測定の結果、古代Ⅳ期あるいはⅦ期に振り分けられ、SM01のみが時期不明となった。該期に所属するものであるか否かは判断がつかないが、可能性のひとつとして考えておきたい。ただしSM01は1基のみ離れた場所に存在している点、取り扱いに注意する必要がある。

○古代Ⅵ期：平安時代（9世紀終末～10世紀前半）

【ポイント：須恵器環類が消滅し、土師器環類が食膳具の主体となる段階】

須恵器環が消滅し、食膳具では黒色土器環にかわり土師器の環や椀類が主体となる。黒色土器には暗紋をもつ例が目立つ。本遺跡では前述したように、明確な時期区分が難しい状況にあり、SB21、SB23の2軒に、その可能性を求めた。前時期とほぼ同一場所に再建された例として、SB21（SB27から）とSB23（SB24から）があり、いずれも東側に向けて移っている。

○古代Ⅶ期：平安時代（10世紀後半～）

【ポイント：土師器環の法量分化と黒色土器A類の環が消失する段階】

黒色土器環A類が消滅し、土師器環に2つの法量が現れる。口径10cm前後の例と13cm前後例である。土師器製食膳具の数量が増大し、黒色土器を凌駕する。またSB18では盤B類と羽釜が出土し、その登場が分かる。発掘区内では、住居跡2軒（SB09・SB18）と土坑2基（SK37・SK78）を確認している。SM06はⅤ期のSB17を破壊し、SM05はⅥ期のSB21を破壊して造られていることから、これらの墓壇群は古代Ⅴ期及び古代Ⅶ期のはじめころに所属する可能性が高い。しかしながら人骨の炭素年代測定の結果は、SM05で1156±40年（12世紀）、SM06で1536±30年（16世紀）の値を示し該期よりもさらに新しい。古代Ⅶ期以降に設営された集落遺跡が存在するか否かは、今回の発掘区内だけでは判断できないが、ひとつの可能性として、居住地区を違えて存在していることを考えておくべきか。

註2) 2000年『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書28－更埴市内その6－更埴条里遺跡・屋代遺跡群－総論編－』
日本道路公団名古屋建設局 長野県教育委員会 長野県埋蔵文化財センター

5. 自然科学分析

SD02埋没土の花粉分析・珪藻分析・プラントオパール分析

1. 目的

SD02は降雨等による一時的な土砂の押し出しと考えられ、時期は出土遺物より平安時代と考えられる。花粉分析を行い遺構周辺の当時の古植生についての復元、珪藻分析を行い堆積環境の復元、プラントオパール分析を行い稲作の有無やイネ科の植生についての検討を試みた。

2. 分析地点

SD02のトレンチ3近接地点西壁より採取された7試料である。

資料1：1層 10YR3/3 暗褐色シルト 細礫を多く含む 炭化物を少量含む 締りよい

資料2：2層 7.5YR3/2 黒褐色シルト 細礫を全体に含む 炭化物を少量含む 締りよい

資料3：5層 10YR3/3 暗褐色シルト 細礫を全体に含む 径3cmの垂角礫、炭化物を少量含む 締りよい

資料4：6層 10YR2/2 黒褐色シルト層上部 細礫を全体に含む 径10cmの垂角礫、炭化物を多く含む

資料5：6層 10YR2/2 黒褐色シルト層下部 細礫を全体に含む 径10cmの垂角礫、炭化物を多く含む

資料6：10層 10YR2/2 黒褐色シルト層上部 褐色土を含む 硬く締まる

資料7：10層 10YR2/2 黒褐色シルト層下部 褐色土を含む 硬く締まる

3. 花粉化石の特徴

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉13、草本花粉17、形態分類を含めたシダ植物胞子4の総計34である。検鏡の結果、検出個数および検出分類群数ともに少なく、特に樹木花粉は少ない。1層2層3層については全検出数が100以下なので参考程度であるが、その中でも2層はマツ属複雑管束亜属(ニヨウマツ類)が比較的多く検出されている。コナラ属コナラ亜属とクルミ属は上部試料で出現率上げている。草本類では下部試料でイネ科が多産している。中央部でアカザ科ーヒユ科がやや高い出現率を示す。タンポポ亜科は20～30%を示し、ヨモギ属は上部2試料でやや出現率を上げている。その他カヤツリグサ科は10%前後得られ、保存状態も悪く1個体のみであるが、ソバ属やベニバナ属が観察された。

4. 珪藻化石群集の特徴

検出された珪藻化石は44分類群19属31種1亜種である。これらの珪藻種から設定された環境指標群は5種群であり、出現状況より2つの珪藻帯に区分された。

I帯(10層下部)：検出された珪藻殻が少ないながらも陸域環境を示す珪藻種が確認されている。よって陸域環境と考えられる。

II帯(10層上部～1層)：堆積物1g中の珪藻殻数は $4.14 \times 10^4 \sim 1.75 \times 10^5$ 個、完形殻の出現率は約37～53%となる。II帯はI帯と同様に陸域指標種の *Hantzschia amphioxys* が特徴的に優占する。しかしI帯と異なり1g中の珪藻殻数が多い。よってII帯の堆積環境はジメジメとした陸域環境であったと考えられる。

5. プラント・オパール分析

10層下部の試料を除き、イネ科のプラント・オパールは大量に検出された。通常稲作の検証として1g当たり5000個という目安があるが、本遺構では200,000個と異常な数値を示す。原因は不明だがSD02からは土器片も多量に検出されており、稲藁の廃棄の場所であった可能性もある。

6. 小結

SD02とその周辺の古環境を推定する。SD02は比較的乾いた環境であったと推測される。低い部分にはヨシ属(ヨシ)が生育し、土手を中心にウシクサ族(ススキ、チガヤなど)やネザサ節型のササ類(ケネザサやゴキダケなど)などのイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科ーヒユ科、ヨモギ属、タンポポ亜科、

シダ植物などの雑草類が生育していた。さらにクワ科、ナデシコ科、キンボウゲ科、アブラナ科などもみられたであろう。また樹木類ではクルミ属やハンノキ族が生育していたと推測する。遺構周辺の森林植生については樹木花粉が少ないので検討しづらいが、SD02が形成された初期の時期はコナラ亜属を主体とした落葉広葉樹林が成立していたと推測され、その下草としてチマキザサやチシマザサなどのクマザサ類が生育していたであろう。その後人間の活発な活動により落葉広葉樹林は縮小したと推測され、跡地にニヨウマツ類やコナラ亜属の二次林が形成されたとみられる。またウシクサ族やネザサ節型のササ類も侵入したことが考えられる。なおイネのプラント・オパールの大量検出から、遺跡周辺において稲作が行われていた可能性があり、ソバやペニバナの栽培も推察される。

年代測定

1. 目的

遺構の年代の参考にするために、墓SM03 SM05 SM06(旧SK210)から出土した人骨とSK187から出土した炭化物を用い年代測定を行った。

2. 分析結果

得られた¹⁴C年代は以下のとおりである。また暦年較正年代を計算し、時期を示した。SM03から出土した人骨(IAAA-41566)が 1220 ± 40 yrBPで、平安時代初め頃に相当する。SM05から出土した人骨(IAAA-41568)が 850 ± 30 yrBPで、平安時代終わり頃に相当する。SM06(旧SK210)から出土した人骨(IAAA-41569)が 470 ± 30 yrBPで、戦国時代中頃に相当する。SK187から出土した炭化物(IAAA-41570)が 2370 ± 40 yrBP、炭化物(IAAA-41571)が 2360 ± 40 yrBPで、いずれも弥生時代に相当する。

3. 小結

発掘調査から古代の土壌墓としたSMの年代測定値結果にはばらつきがみられる。SK187は出土遺物から縄文終末から弥生前期ととらえており、年代測定結果とは一致する。

獣骨の鑑定

獣骨の出土点数は135点で、そのうち77点の種名が判明した(第3表)。SD02は多くの骨、歯が出土した。ウマ・ウマ?の骨が12点、歯が25点、ウシ・ウシ?の骨が3点、歯が19点、シカの骨が5点、歯が7点であった。確実に同一個体と分かる遺体は少ないので、何個体であったかは分からない。他には竪穴住居跡の埋土や土坑からもウマ、シカ、イノシシの骨や歯が出土している。SB04のカマドからは、種部位ともに不明であるが焼骨が出土した。

峯謡坂遺跡（千曲市）出土人骨

茂原信生*1・姉崎智子*2

1) はじめに

峯謡坂遺跡は長野県千曲市にある遺跡で、平成15年から18年にかけて、長野県埋蔵文化財センターによって発掘・調査された。本報告はその際出土した人骨に関するものである。この人骨の属する年代は古代のものと考えられている。

骨の計測方法は馬場（1993）に従い、歯の計測方法は藤田（1943）、乳歯の計測方法は杉山・黒須（1964）にしたがった。

2) 出土人骨の特徴

どの個体の保存状態もあまりよくない。歯冠は比較的残っているものの、頭蓋骨や四肢骨で形態が観察できるものは少ない。遺構順に記載する。

① SM01 成人 男性（写真1～4）

頭蓋骨

前頭骨、左右側頭骨、左右頭頂骨、後頭骨、左右上顎骨、左右下顎骨が残存する。乳様突起は比較的大きい。

歯

第2大臼歯まで萌出が完了しており、第2大臼歯はエナメルがわずかに咬耗している。第3大臼歯は、左上顎骨歯槽内でのみ確認されたが、かなり矮小化していた（近遠心径7.3mm）。第3大臼歯は、下顎骨では先天的な欠歯のようである。上顎小臼歯の頰側（外側）に歯石がみとめられる。また、右上顎第2大臼歯にはエナメル質減形成がみとめられた。

四肢骨

左右肩甲骨、左右鎖骨、左右上腕骨、左右尺骨、左右橈骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、左右足根骨、椎骨が残存する。大腿骨の骨端は残存していたが、そのほかの部位では、骨端が欠損するものが多い。寛骨の大坐骨切痕は鋭角で、この個体は男性と推定される。大腿骨の最大長は推定で約391mmで、藤井（1960）の身長推定式を用いると151.5センチである。直接同時代のものと比較するデータはないが、平本（1977）による古墳時代の日本人男性の推定身長は平均値163.06cmより小さく、鎌倉時代人男性の平均値159.00cmに比べてもかなり低い身長である。

② SM02 成人 性別不明

残存するのは遊離歯のみである。上顎では、右第1、第2切歯、右犬歯、左第1小臼歯、左右第2小臼歯、左右第1、第2大臼歯がみとめられた。下顎では、左第1切歯、左第2小臼歯、左右第1、第2大臼歯、左第3大臼歯が残存する。第3大臼歯の萌出は完了しており、象牙質の露出もみとめられる。成人であろう。

③ SM03 成人 女性（写真5・6）

頭蓋骨

前頭骨、頭頂骨、側頭骨、後頭骨、左右上顎骨、左右下顎骨が残存している。眉間隆起の発達は弱く、乳様突起は若干大きい。オトガイはあまり発達していないことから、女性であると思われる。

歯

第2大臼歯まで萌出完了している。第3大臼歯は欠歯であると思われる。第1、第2大臼歯の咬耗はかなり進行していることから成人であると推定される。

第2表 峯謡坂遺跡出土人骨の歯の計測値と比較資料（単位はmm）

遺構	上顎歯					下顎歯					
	SM01	SM02	SM05	現代日本人 (樺田 1959)		SM01	SM02	SM03	SM05	現代日本人 (樺田 1959)	
	♂ 右	不明 右	♀ 左	♂	♀	♂ 右	不明 左	♀ 右	♂ 左	♂	♀
第1切歯 (I1)	近遠心径	9.1	7.9	9.31	8.67	8.55			6.92	5.48	5.47
	頬舌径	7.27		8.16	7.35	7.28			6.86	5.88	5.77
第2切歯 (I2)	近遠心径	7.19	6.74	7.48	7.13	7.05			5.98	6.2	6.11
	頬舌径	6.08		7.09	6.62	6.51				6.43	6.3
犬歯 (C)	近遠心径	7.46	7.88	9.05	7.94	7.71		6.79	8.21	7.07	6.68
	頬舌径	7.81	8.91	8.7	8.52	8.13		6.93	7.97	8.14	7.5
第1小白歯 (P1)	近遠心径	7.01		7.34	7.38	7.37		7.07	7.95	7.31	7.19
	頬舌径	8.95		10.39	9.59	9.43		7.29	8.41	8.06	7.77
第2小白歯 (P2)	近遠心径	6.11	7.42	8.15	7.02	6.94		7.04	7	7.87	7.42
	頬舌径	8.39	10.33	10.61	9.41	9.23		8.43	7.52	9.12	8.53
第1大白歯 (M1)	近遠心径	11.23		11.56	10.68	10.47	12.13	11.85	11.63	12.04	11.72
	頬舌径	12.39		12.5	11.75	11.4	10.57	11.46	11.33	12.09	10.89
第2大白歯 (M2)	近遠心径	10		11.55	9.91	9.74	11.59	12.61	9.84	11.86	11.3
	頬舌径	11.53		12.39	11.85	11.31	9.89	11.02	11.63	10.53	10.2
第3大白歯 (M3)	近遠心径				8.94	8.86		12.19		9.86	10.96
	頬舌径				10.79	10.5		11.24	10.41	10.28	10.02

四肢骨

肩甲骨の一部、左上腕骨骨幹部、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨が残存する。大腿骨の後面の粗線の発達は弱く、骨幹部は直線的である。寛骨の保存状態は不良だが、左右寛骨の大坐骨切痕の形状はやや開いていることから、女性と推定される。大腿骨は骨端が破損しているので正確な最大長は不明だが、推定で約370mm前後となる。藤井(1960)の推定式から計算される推定身長は143.9cmで、平本(1977)の報告している鎌倉時代の女性の平均値144.90cmや古墳時代の女性の平均値151.53cmよりもかなり小さい。

④ SM04 子供 性別不明

頭蓋骨と歯のみが残存する。前頭骨、頭頂骨、側頭骨、後頭骨、上顎骨の一部がみとめられた。第2乳白歯の萌出が完了し、第1大白歯は未萌出であることから、6歳以下の子供と推定される。

⑤ SM05 成人 男性 (写真7・8)

頭蓋骨

右側頭骨、上顎骨一部、左右下顎骨が残存する。

歯

遊離歯は、上顎左右第1、第2切歯、左右犬歯、左右第1、第2小白歯、左右第1大白歯、右第2大白歯がみとめられた。上顎骨には左第2大白歯が植立する。第3大白歯は欠歯のようである。下顎骨では、左右第1、第2切歯、左右犬歯、左第1小白歯、左右第2小白歯、左右第1大白歯、左第2大白歯、左右第3大白歯が植立する。上顎では第2大白歯の萌出が完了し、下顎では第3大白歯が前方に傾斜して植立している。また、下顎の左第1小白歯が外側にむかって傾斜して植立している。大白歯の咬耗は比較的進行していることから、成人と推定される。

四肢骨

上腕骨骨幹部、尺骨骨幹部、橈骨骨幹部、左右大腿骨、左右脛骨が残存する。大腿骨の粗線は比較的良く発達しており、がっしりとしていることから男性だと思われる。大腿骨は骨端が破損しているが、推定最大長は約430mmであり、藤井(1960)の男性の身長推定式を用いると161.1cmとなり、古墳時代人男性の平均値163.06cmや鎌倉時代人男性の平均値159.00cm平本(1977)とほぼ同大である。

⑥ SM06 (旧SK210) 成人 性別不明

頭骨のみが残存する。左右頭頂骨と左側頭骨がみとめられた。矢状縫合の癒合は内側、外側ともに完了していることから成人と推定される。

3) まとめ

この峯舘坂遺跡から出土した人骨は、6体で、うち1体は幼児、他は成人と考えられ、男性2体、女性1体、他の2体は性別不明である。身長は低めであるが、歯は比較的大きめである。

この人骨は平成23年度まで長野県埋蔵文化財センターに保管し、以後長野県立歴史館に移管し保存される予定である。

1：京都大学名誉教授、*2：群馬県立博物館

参考文献

- 馬場悠男（1993）：人骨計測法。雄山閣 人類学講座別巻1；Pp. 359。
藤井 明（1960）：四肢長骨の長さとの身長との関係に就て。順天堂体育学部紀要，3；49-61。
権田和良（1959）：歯の大きさの性差について。人類学雑誌，43（1）；151-163。
平本憲助（1977）：日本人身長の時代的变化。自然科学と博物館，44（4）；169-172。
杉山兼也・黒須一夫（1964）：乳歯の計測基準について。小児歯科学誌，2（1）；1-8。

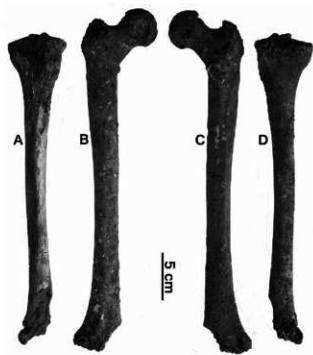


写真1 SM01 出土人骨の右下肢骨
A 脛骨前面 B: 大腿骨前面 C: 大腿骨後面 D: 脛骨後面

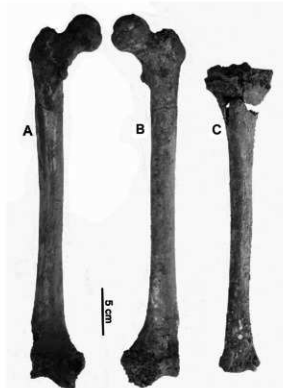


写真2 SM01 出土人骨の左下肢骨
A: 大腿骨後面 B: 大腿骨前面 C: 脛骨前面

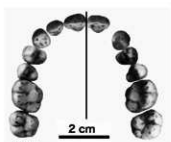


写真3

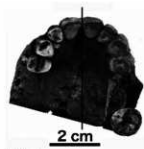


写真5



写真7

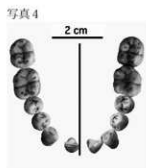


写真4



写真6



写真8

中央の線は正中を示す(写真3～8まで共通)

写真3 SM01 出土人骨の上顎歯咬合面

写真4 SM01 出土人骨の下顎歯咬合面

写真5 SM03 出土人骨の上顎歯咬合面

写真6 SM03 出土人骨の下顎歯咬合面

写真7 SM05 出土人骨の上顎歯咬合面

写真8 SM05 出土人骨の下顎歯咬合面

第3図 峯謡坂遺跡 人骨写真

第2章 発掘調査の概要

第3表 峯謡坂遺跡 獣骨観察表

遺構名	取上りNo	地区	層位	種名	骨名	部位名	左右	歯	上下	歯種	状態	鑑定コメント
		X V24-J		不明	骨	不明	不明				破片	
		X U18-d	検出面	不明	歯	臼歯	不明	不明			破片	
S802			カマド内	不明	骨	四肢骨片	不明				破片	焼骨
S806	骨No 1	X V15-P		シカ?	骨	肋骨片	不明				破片	大きさと形からシカと判断
S806	骨No 2	X V15-P		シカ?	骨	肋骨片	不明				破片	
S806	骨No 3	X V15-P		シカ?	骨	肋骨片	不明				破片	
S806	骨No 4	X V15-P		シカ?	骨	肋骨片	不明				破片	
	骨No 1	X U18-d	検出面	不明	骨	不明	不明				破片	切歯あり
	骨No 2	X U18-d	検出面	ウマ	歯	臼歯	不明	不明			破片	
	骨No 3	X U18-d	検出面	ウマ	歯	臼歯	左	上		P4	ほぼ完形	
S802			床直	不明	骨	不明	不明				破片	
S811			埋土	シカ	骨	中足骨近位端	左				破片	
SK10				シカ	歯	臼歯	不明	不明			破片	
SK10				シカ	歯	臼歯	不明	不明			破片	
S804			埋土	不明	骨	頭蓋骨中頭骨耳腔?	右?				破片	小型獣の耳腔か
S804	骨No 3		カマド内	シカ	骨	椎骨骨幹	不明				破片	
S804	骨No 5		カマド内	不明	骨	不明	不明				破片	焼骨
S804	骨No 6		カマド内	不明	骨	不明	不明				破片	焼骨
S804	骨No 8		カマド内	イノシシ	骨	指骨(基節骨)	不明				破片	焼骨
S804	骨No 9		カマド内	不明	骨	不明	不明				破片	焼骨
S804	骨No 10		カマド内	シカ	骨	指骨(中節骨)	不明				破片	焼骨
S804			カマド	不明	骨	指骨?	不明				破片	焼骨
S804			カマド(ペルト)	シカ	骨	指骨(末節骨)	不明				完形	焼骨
S804			カマド内	不明	骨	不明	不明				破片	焼骨
S811			埋土	不明	骨	不明	不明				破片	焼骨
		X V25-o	検出面	不明	骨	不明	不明				破片	焼骨
	骨No 1	X W11		不明	骨	不明	不明				破片	
SD02	No 4		2層	ウマ	骨	四肢骨片	不明				破片	
SD02	No 5		2層	シカ	歯	臼歯	不明	不明		不明	破片	
SD02	No 6		2層	ウマ	骨	四肢骨片	不明				破片	
SD02	No 7		2層	ウマ	歯	臼歯	右	上		P4?	ほぼ完形	
SD02	No 8		2層	ウマ	歯	臼歯	不明	上		不明	破片	
SD02	No 9		2層	不明	骨	不明	不明				破片	
SD02	No 10		2層	ウマ	歯	臼歯	右	下		不明	破片	
SD02	No 11-1		2層	ウシ	歯	臼歯	右	上		M1	破片	
SD02	No 11-2		2層	ウシ	歯	臼歯	右	上		M2	ほぼ完形	
SD02	No 12		2層	ウマ	骨・歯	下顎体、下顎歯	右	下		M1-M3 歯根	成獣	
SD02	No 13		2層	ウマ	歯	臼歯	右	上		M2	完形	50-1~50-5まで同一個体
SD02	No 13			ウマ	歯	臼歯	右	上		P4?	完形	同一個体
SD02	No 13			ウマ	歯	臼歯	左	上		M2	完形	同一個体
SD02	No 13			ウマ	歯	臼歯	左	上		P4?	完形	同一個体
SD02	No 13			ウマ	歯	臼歯	左	上		M3?	破片	同一個体
SD02	No 13			ウマ	歯	臼歯	左	上		P4	ほぼ完形	
SD02	No 13			ウマ?	骨	四肢骨片	不明				破片	
SD02	No 13			ウシ?	歯	臼歯	不明	不明		不明	破片	
SD02	No 13			ウシ?	歯	臼歯	不明	不明		不明	破片	
SD02	No 13			ウシ?	歯	臼歯	不明	不明		不明	破片	
SD02	No 13			ウシ?	歯	臼歯	不明	不明		不明	破片	
SD02	No 13			ウシ?	歯	臼歯	不明	不明		不明	破片	
SD02	No 13			ウマ	歯	臼歯	不明	上		不明	破片	
SD02	No 14	2層		ウシ	歯	臼歯	左	上		M1	完形	
SD02	No 15	2層		ウマ?	骨	大腿骨?骨幹	不明				破片	
SD02	No 16	2層		ウマ?	骨	四肢骨片	不明				破片	
SD02	No 17	2層		ウマ?	骨	四肢骨片	不明				破片	
SD02	No 18	2層		ウマ	歯	臼歯	右	下		P4	完形	若い個体
SD02	No 19-1	2層		ウマ?	骨	四肢骨片	不明				破片	
SD02	No 19-2	2層		不明	骨	不明	不明				破片	
SD02	No 20	2層		ウシ	骨	中手骨骨幹	右				破片	
SD02	No 23	2層		ウマ	骨	上腕骨骨幹	右				破片	
SD02	No 24	2層		ウマ?	骨	寛骨(肋骨)	左				破片	
SD02	No 26	2層		不明	骨	四肢骨片	不明				破片	
SD02	No 27-1	2層		不明	骨	不明	不明				破片	
SD02	No 27-2	2層		不明	骨	不明	不明				破片	
SD02	No 28-1	2層		ウシ	歯	臼歯	右	下		M1, M2	完形	2本
SD02	No 28-2	2層		ウシ	歯	臼歯	左	下		M2	破片	
SD02	No 29-1	2層		ウシ	歯	臼歯	右	上		M2	ほぼ完形	
SD02	No 29-2	2層		ウシ	歯	臼歯	右	上		不明	破片	

通称名	取上げNo	地区	層位	種名	骨名	部位名	左右	歯上下	歯種	状態	鑑定コメント
SD02	No 29-3		2層	ウシ	歯	臼歯	右	上	M3	ほぼ完形	
SD02	No 29-4		2層	不明	骨	四肢骨片	不明			破片	
SD02	No 30-2		2層	不明	骨	不明	不明			破片	
SD02	No 30-3		2層	不明	骨・歯	不明	不明	不明		破片	
SD02	No 31		2層	不明	骨	不明	不明			破片	
SD02	No 32-1		2層	不明	骨	不明	不明			破片	
SD02	No 34		2層	ウシ	歯	臼歯	右	上		不明	破片
SD02	No 35		2層	不明	骨	四肢骨片	不明			破片	
SD02	No 36		2層	不明	骨	不明	不明			破片	
SD02	No 37		2層	ウシ	歯	臼歯	左	上	M2、M3	ほぼ完形	
SD02	No 38		2層	不明	骨	不明	不明			破片	残骨?
SD02	No 39		2層	不明	歯	臼歯	不明	不明		不明	破片
SD02	No 40		2層	ウマ	骨	脛骨骨幹	左			破片	
SD02	No 41		2層	ウシ?	骨	上脛骨遠位半	左			破片	
SD02	No 42		2層	シカ	骨	足根骨距骨	左			破片	
SD02	No 43-1		2層	ウマ	歯	臼歯	左	上		不明	破片
SD02	No 44		2層	不明	骨	不明	不明			破片	
SD02	No 45		2層	ウシ?	歯	臼歯	右	上	P4	破片	
SD02	No 46		2層	ウマ	歯	臼歯?	左	上	P2?	破片	
SD02	No 47		2層	不明	歯	臼歯	不明	不明		不明	破片
SD02	No 48		2層	ウマ	歯	切歯	左	上	I1	ほぼ完形	
SD02	No 49		2層	ウシ	歯	臼歯	左	上	P3	ほぼ完形	
SD02	No 50		2層	不明	骨	不明	不明			破片	
SD02	No 1			不明	骨	不明	不明			破片	
SD02	No 2			不明	骨	四肢骨片	不明			破片	
SD02	No 3			シカ	歯	臼歯	右	上	P4	破片	
SD02	No 4			不明	骨	不明	不明			破片	
SD02	No 6			シカ	骨	中手骨骨幹	右			破片	
SD02	No 7			不明	骨	不明	不明			破片	
SD02	No 8			シカ	骨・歯	下顎骨・臼歯	左	下	P2-M2	完形	成獣
SD02	No 8			シカ	歯	臼歯	左	上	M1	完形	
SD02	No 9			ウマ	骨	中足骨遠位部欠	右			破片	
SD02	No 11			不明	骨	不明	不明			破片	
SD02	No 12			不明	骨	不明	不明			破片	
SD02	No 13			不明	骨	不明	不明			破片	
SD02	No 14			シカ	骨	角	不明			破片	
SD02	No 15			不明	骨	四肢骨片	不明			破片	
SD02	No 16			不明	骨	不明	不明			破片	
SD02	No 17			不明	骨	不明	不明			破片	
SD02	No 18			シカ	歯	臼歯	不明	不明		不明	破片
SD02	No 20			シカ	歯	臼歯	不明	不明		不明	破片
SD02	No 21			シカ	歯	臼歯	不明	不明		不明	破片
SD02	No 22			不明	骨	四肢骨片	不明			破片	
SD02	No 24			不明	骨	四肢骨片	不明			破片	
SD02	No 28			ウシ	歯	臼歯	不明	不明		不明	破片
SD02	No 29			不明	骨	不明	不明			破片	
SD02	No 31			不明	骨	不明	不明			破片	
SD02	No 32			不明	骨	不明	不明			破片	
SD02	No 33			不明	歯	不明	不明	不明		不明	破片
SD02	No 35			不明	骨	四肢骨片	不明			破片	
SD02	No 36			不明	骨	四肢骨片	不明			破片	
SD02	No 39			シカ	骨	上脛骨遠位部	右			破片	
SD02	No 40			不明	骨	不明	不明			破片	
SD02	No 41			ウシ	骨	大腿骨遠位半	右			破片	
SD02	No 42			不明	骨	四肢骨片	不明			破片	
SD02	No 43			不明	骨	四肢骨片	不明			破片	
SD02			TR7	不明	骨	四肢骨片	不明			破片	
SD02			No 9の下	シカ	歯	臼歯	左	上	M1	ほぼ完形	
SD02				不明	骨	四肢骨片	不明			破片	骨加工品
SD02	X A05			不明	骨	四肢骨片	不明			破片	残骨
SD02	XI B01			黒色土	ヒト	骨	頭蓋骨	不明		破片	残骨(頭蓋冠の一部)
SD02				検出面	不明	骨	不明	不明		破片	残骨
S818	No 1			ウマ	歯	臼歯	右	下	M1	ほぼ完形	
S822 or S827		調査区壁		ウマ	歯	臼歯	左	上	M2	ほぼ完形	
S827	No 2内		P1	不明	骨	肋骨	右			破片	小動物の肋骨
SK187				不明	骨	不明	不明			破片	
SK197				シカ	歯	臼歯	不明	上		不明	破片
SM03	XI A05		人骨下	ウマ	骨	横骨遠位部欠	左			破片	

第2章 発掘調査の概要

第4表 峯認坂遺跡 土器観察表

図版No	写真No	遺構名	取り上げ No	器種	部位	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面色調	備考	
第37図1			S802 P1・P12	須恵器環A	口縁部～底部	40%	<14.0>	<6.5>	3.7	5YR5/2 灰褐		
第37図2	PL14	S802	No 6・14	須恵器環A	口縁部～底部	50%	<13.5>	<6.0>	3.8	7.5YR6/4 に近い橙		
第37図3	PL14	S802	No 2	黒色土器A 坏	口縁部～底部	70%	14.2	6.9	4.6	7.5YR7/6 橙		
第37図4	PL14	S802	No 1	黒色土器B 碗	口縁部～底部	70%	11.2	5.3	5.1	5YR1/7/1 黒		
第37図5	PL14	S802 P3	No 1	土師器環A	口縁部～底部	80%	12.5	5.1	4.5	5YR7/4 に近い橙		
第37図6	PL14	S802		灰釉陶器椀	口縁部	10%	<16.0>	—	(1.1)	2.5Y6/2 灰黄		
第37図7	PL14	S802 カマド		土師器甕	口縁部	10%	<22.3>	—	(9.6)	2.5YR5/4 に近い赤褐		
第37図8	PL14	S803	No 1	黒色土器A 坏	口縁部～底部	30%	<13.5>	5.0	5.1	7.5YR6/6 橙		
第37図9	PL14	S804	No 1	非07土師器環	口縁部～底部	90%	<10.6>	4.5	3.7	7.5YR7/4 に近い橙		
第37図10		S804	No 8	非07土師器環	口縁部～底部	30%	<10.6>	—	(5.3)	5YR6/6 橙		
第37図11		S804 埋土		非07土師器環	口縁部～底部	30%	<14.1>	4.0	4.5	7.5YR6/4 に近い橙		
第37図12	PL14	S804 埋土		須恵器環A	口縁部～底部	30%	<11.2>	<6.0>	3.6	10YR5/1 褐灰		
第37図13		S804		高坏	胴部	30%	<11.2>	<7.6>	(4.3)	7.5YR6/6 橙		
第37図14		S804	No 9	土師器長胴甕	口縁部	10%	<18.7>	—	(7.5)	10YR7/4 に近い黄褐		
第37図15		S805	No 4	高坏	口縁部～胴部	20%	<13.4>	—	4.2	5YR6/6 橙		
第37図16		S805 埋土		須恵器甕	底部	10%	—	<14.5>	5.3	5YR2/1 黒褐		
第37図17	PL14	S806	No 1	黒色土器A 坏	口縁部～底部	80%	13.3	5.9	4.0	7.5YR7/4 に近い橙		
第37図18	PL14	S806	No 3	黒色土器A 坏	口縁部～底部	60%	19.8	6.1	5.1	7.5YR7/4 に近い橙		
第37図19	PL14	S806		黒色土器A 坏	口縁部～底部	80%	16.1	6.5	6.3	7.5YR7/6 橙		
第37図20	PL14	S806	No 7・ 16・18	黒色土器A 坏	口縁部～底部	40%	<16.0>	6.8	5.9	7.5YR7/6 橙		
第37図21	PL14	S806	No 8・11・ 22・27・28	須恵器短頸甕	体部	70%	<16.4>	—	4.8	10Y6/1 灰		
第37図22		S806	No 13・19	須恵器環A	口縁部～底部	30%	<13.6>	<6.0>	4.0	5Y6/1 灰		
第37図23	PL14	S806 カマド内	No 1・2	須恵器環A	口縁部～底部	70%	12.8	5.3	3.5	10B6/4/1 暗青灰		
第37図24	PL14	S806 埋土		黒色土器B 短頸甕	口縁部～胴部	10%	<4.0>	—	(2.3)	7.5YR1/7/1 黒		
第37図25	PL14	S806	No 8・11	土師器甕	口縁部～底部	80%	10.0	5.1	9.7	2.5YR5/6 明赤褐		
第37図26	PL14	S806	No 6・9・ 10・14・17・ 20・23・ 24・25	土師器甕	口縁部～底部	50%	17.5	<6.7>	18.1	5YR6/4 に近い橙		
第37図27	PL14	S808 埋土		黒色土器A 坏	口縁部～底部	50%	<13.9>	6.0	3.2	7.5YR8/4 浅黄橙		
第37図28	PL14	S808 埋土		黒色土器A 坏	口縁部～底部	30%	<15.9>	<7.0>	4.4	10YR8/1 灰白		
第37図29		S808 埋土		黒色土器A 鉢	口縁部～底部	30%	<21.0>	—	(8.3)	7.5YR7/4 に近い橙		
第37図30	PL14	S808 埋土		須恵器環A	口縁部～底部	60%	<12.0>	7.0	3.8	10Y5/1 灰		
第37図31	PL14	S808 埋土		土師器甕	口縁部～胴部	10%	<15.9>	—	(6.0)	7.5YR7/3 に近い橙		
第37図32	PL14	S808		緑釉陶器椀	口縁部 底部	20%	<9.4>	<7.0>	—	7.5YR2/2 灰白	・京都産の可能性有り	
第37図33	PL14	S809		黒色土器A 碗	口縁部～底部	30%	<14.2>	<7.5>	5.7	5YR6/6 橙	・暗文有り	
第37図34	PL14	S809	No 9	土師器環	口縁部～底部	30%	<9.6>	4.3	2.6	5YR6/8 橙		
第37図35	PL14	S809	No 3	土師器環	口縁部～底部	30%	ほぼ完形	9.4	4.6	2.6	7.5YR8/4 浅黄橙	
第37図36	PL14	S809	No 4	土師器環	口縁部～底部	30%	ほぼ完形	9.9	4.5	2.5	7.5YR8/4 浅黄橙	
第37図37	PL14	S809 埋土		灰釉陶器椀	口縁部～胴部	10%	<16.0>	—	(3.7)	10YR6/1 褐灰		
第37図38	PL14	S809 埋土		灰釉陶器椀	底部	10%	—	<6.0>	(2.1)	N7/ 灰白		
第37図39	PL14	S810 埋土		黒色土器A 坏	口縁部～底部	30%	<11.7>	<5.2>	5.0	7.5YR7/6 橙		
第37図40	PL14	S810 埋土		鉢	口縁部	10%	—	—	—	7.5YR5/3 に近い橙	・縄文晩期・赤式土器	
第38図1	PL15	S811	No 26	非07土師器環	口縁部～底部	40%	<12.4>	4.4	4.2	2.5YR5/8 明赤褐		
第38図2	PL15	S811	No 2・4	非07土師器環	口縁部～底部	30%	<14.2>	<4.7>	5.7	5YR6/6 橙		
第38図3	PL15	S811	No 26	非07土師器環	口縁部～底部	50%	10.8	3.2	3.3	5YR7/6 橙		
第38図4		S811	No 9	非07土師器環	口縁部～底部	30%	<15.2>	5.0	5.2	7.5YR6/6 橙	・刻線「x」有り	
第38図5	PL15	S811	No 30	高坏	坏部～胴部	70%	13.4	—	(11.4)	5YR6/6 橙		
第38図6	PL15	S811		小型甕	口縁部～底部	20%	<14.0>	—	(10.3)	2.5YR5/6 明赤褐		
第38図7	PL15	S811	No 15・ 16・17	土師器甕	口縁部～胴部	40%	16.2	—	(20.5)	2.5YR4/8 赤褐		
第38図8		S811 埋土1層		須恵器環蓋	体部	20%	<14.8>	—	(2.8)	N6/ 灰		
第38図9	PL15	S811 埋土		須恵器環蓋	体部	50%	12.8	—	2.9	5P82/1 青黒		
第38図10	PL15	S811	No 1	須恵器環A	口縁部～底部	70%	12.6	7.0	4.8	7.5Y7/1 灰白	・刻目「x」有り	
第38図11	PL15	S811	No 20・21	須恵器環A	口縁部～底部	70%	<13.2>	—	3.9	2.5YR4/2 灰赤		
第38図12	PL15	S812 P7		須恵器環A	口縁部～底部	90%	<13.7>	(6.0)	(4.2)	10YR4/1 褐灰		
第38図13	PL15	S812 P3	No 1	須恵器環A	口縁部～底部	70%	13.4	6.5	3.9	10GY4/1 暗緑灰		
第38図14	PL15	S812	No 5	須恵器環A	口縁部～底部	30%	ほぼ完形	12.0	6.0	3.5	5Y5/1 灰	
第38図15	PL15	S812	No 31	須恵器環A	口縁部～底部	70%	<12.0>	5.4	3.8	N4/ 灰		
第38図16	PL15	S812	No 30	須恵器環A	口縁部～底部	50%	12.0	5.8	3.3	2.5Y6/3 に近い黄		
第38図17		S812	No 27	須恵器環A	口縁部～底部	50%	<12.7>	<6.2>	3.7	5Y5/1 灰		

図版No	写真No	遺構名	取り上げ No	器種	部位	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面色調	備考	
第38図18	S812	No 14	須恵器環A	口縁部～底部	完形	12.7	5.8	4.0	7.5Y6/1灰			
第38図19	S812	No 67	須恵器環A	口縁部～底部	40%	<13.0>	6.2	3.8	2.5GY5/1 判7-7 灰			
第38図20	PL15	S812	須恵器環A	口縁部～胴部	10%	—	—	—	10YR5/3 にぶい黄褐		・墨書有り	
第38図21	PL15	S812	No 37	須恵器環A	口縁部～底部	50%	<13.0>	5.5	3.8	7.5Y4/1灰		
第38図22	S812	No 7	須恵器環A	口縁部～底部	50%	<11.6>	<5.8>	4.1	7.5Y6/1灰			
第38図23	PL15	S812	No 44・45	須恵器環B	口縁部～底部	90%	14.1	9.5	4.2	5Y4/1灰		
第38図24	PL15	S812	No 9	須恵器環B 蓋	体部	完形	15.0	—	3.2	10YR4/1 褐灰		
第38図25	PL15	S812	No 32	黒色土器A 環	口縁部～底部	60%	<14.5>	<6.6>	5.0	7.5YR8/3 浅黄橙		
第38図26	S812	No 2	黒色土器A 環	口縁部～底部	30%	<14.5>	<6.5>	3.7	10YR8/3 浅黄橙			
第38図27	PL15	S812	No 2	黒色土器輪	底面	30%	—	7.7	(2.9)	5YR6/6 橙		
第38図28	PL15	S812	ニッパ土器	口縁部～底部	20%	4.7	2.0	2.4	7.5YR7/4 にぶい橙			
第38図29	PL15	S812	No 42	ニッパ土器環	口縁部～底部	完形	9.1	5.6	2.9	7.5YR7/4 にぶい橙		・刻書有り
第38図30	PL15	S812	No 1	黒色土器A 環	口縁部～底部	40%	<10.7>	<6.6>	3.5	7.5YR6/4 にぶい橙		
第38図31	PL15	S812	No 3	土師器盤	口縁部	10%	<31.9>	—	5.8	7.5YR7/3 にぶい橙		
第38図32	PL15	S812 埋土	須恵器短頸壺	口縁部	10%	<7.3>	—	(1.3)	5Y6/1 灰			
第38図33	S812	No 28	須恵器長頸壺	胴部	10%	—	—	(3.8)	5R6/1 赤灰			
第38図34	PL15	S812 埋土	埴輪陶器輪	口縁部 底部	20%	<16.6>	7.3	—	5Y8/2 灰白		・花柄線刻有り	
第38図35	PL15	S813	No 1	黒色土器B 皿	口縁部～底部	60%	<12.1>	6.1	2.7	N2/ 黒		
第38図36	PL15	S813 P1	灰釉陶器耳皿	口縁部	30%	<5.5>	<4.5>	2.9	5Y7/1 灰白			
第38図37	PL15	S813 灰面	灰釉陶器輪	底部	10%	—	<7.2>	(2.1)	7.5Y7/1 灰白			
第38図38	PL15	S813 P3	灰釉陶器輪	口縁部～底部	40%	<17.3>	<8.2>	(5.5)	2.5Y5/1 黄灰			
第38図39	PL15	S813	No 2	灰釉陶器長頸壺	胴部	10%	—	—	(3.2)	N7/ 灰白		
第38図40	PL15	S813	灰釉陶器長頸壺	口縁部	10%	<15.4>	—	(1.8)	N7/ 灰白			
第38図41	PL15	S813	灰釉陶器長頸壺	口縁部	20%	17.2	—	(6.2)	5Y6/1 灰			
第38図42	PL15	S813	灰釉陶器長頸壺	口縁部～底部	50%	—	<8.2>	<17.9>	N7/ 灰白			
第39図1	PL16	S814	No 18	非印土師器杯	口縁部～底部	90%	11.7	5.0	4.4	7.5YR7/6 橙		
第39図2	PL16	S814	非印土師器杯	口縁部～底部	40%	<7.0>	<3.4>	3.0	7.5YR7/3 にぶい橙			
第39図3	PL16	S814 埋土	非印土師器杯	口縁部～底部	90%	7.8	—	3.5	10YR6/4 にぶい黄褐			
第39図4	PL16	S814 埋土	非印土師器杯	口縁部～底部	40%	<5.2>	<3.9>	2.9	10YR6/3 にぶい黄褐			
第39図5	S814	No 12	非印土師器鉢	口縁部～胴部	20%	<13.8>	—	(6.2)	7.5YR6/6 橙			
第39図6	PL16	S814	No 9	非印土師器鉢	口縁部～底部	30%	<14.6>	5.0	14.0	5YR6/4 にぶい橙		
第39図7	PL16	S814	No 7	土師器瓶	口縁部～胴部	10%	<19.6>	—	(10.4)	5YR6/8 橙		
第39図8	PL16	S814	No 22	土師器壺	胴部～底部	40%	—	9.0	(13.2)	7.5YR7/4 にぶい橙		
第39図9	S814	No 20	須恵器環蓋	体部	30%	—	—	(3.6)	5Y4/1 灰			
第39図10	S814	No 1	須恵器環蓋	体部	30%	—	—	(3.4)	5G4/1 判7-7 灰			
第39図11	S814 埋土	須恵器環蓋	体部	20%	<16.8>	—	—	(2.7)	N 4/ 灰			
第39図12	PL16	S814	No 29	須恵器環A	口縁部～底部	30%	<10.2>	<6.7>	3.7	10Y4/1 灰		
第39図13	PL16	S814	須恵器環A	口縁部～底部	60%	9.2	4.7	2.8	5G5/1 判7-7 灰			
第39図14	S814	No 25	須恵器環A	口縁部～底部	20%	<11.4>	<7.6>	3.7	N4/ 灰			
第39図15	PL16	S814	No 28	須恵器環A	口縁部～底部	90%	13.8	6.0	3.8	5G6/1 判7-7 灰		
第39図16	PL16	S814	No 11・16	須恵器環B	口縁部～底部	60%	<15.0>	<8.8>	4.5	N 3/ 褐灰		
第39図17	PL16	S814	No 21	須恵器こね鉢	底部	20%	—	9.3	(3.2)	2.5Y6/3 にぶい黄		
第39図18	PL16	S814 埋土	須恵器短頸壺	口縁部～胴部	30%	<5.0>	—	(4.6)	10B6/4/1 暗黄灰			
第39図19	PL16	S814	筒形土器	口縁部～底部	10%	7.8	—	(7.3)	10YR6/4 にぶい黄褐			
第39図20	PL16	S817	No 1	黒色土器A 環	口縁部～底部	80%	13.0	4.8	4.5	7.5YR6/6 橙		
第39図21	PL16	S817	No 2	黒色土器A 環	口縁部～底部	80%	12.0	4.3	4.5	10YR5/3 にぶい黄褐		
第39図22	PL16	S817 埋土	土師器杯	口縁部～底部	20%	<12.6>	<6.0>	4.2	10R5/8 赤			
第39図23	PL16	S817 埋土	土師器杯	口縁部～底部	20%	<8.8>	<5.6>	2.2	10YR7/3 にぶい黄褐			
第39図24	PL16	S817	灰釉陶器輪	口縁部～底部	10%	<13.6>	<4.8>	3.9	7.5Y7/1 灰白			
第39図25	PL16	S817	灰釉陶器皿	口縁部～胴部	10%	<13.2>	—	(1.9)	7.5Y7/1 灰白			
第39図26	PL16	S817	灰釉陶器	底部	10%	—	<6.0>	(1.3)	7.5Y7/1 灰白			
第39図27	PL16	S818	No 10	黒色土器A 碗	口縁部～底部	90%	11.0	5.8	5.1	10YR7/3 にぶい黄褐		・刻書「一」有り
第39図28	PL16	S818	No 1・2・4・5	黒色土器A 碗	胴部～底部	30%	—	8.0	(3.3)	7.5YR7/4 にぶい橙		・縮文「独結様様」有り
第39図29	PL16	S818	No 26・28	黒色土器A 碗	口縁部～底部	60%	<14.6>	7.9	6.0	5YR7/4 にぶい橙		
第39図30	PL16	S818	No 17	土師器杯	口縁部～底部	完形	9.2	4.2	2.5	10YR8/ 3 浅黄橙		
第39図31	PL16	S818 P1	No 5	土師器杯	口縁部～底部	完形	9.1	4.2	2.1	7.5YR8/3 浅黄橙		
第39図32	PL16	S818 P1	No 3	土師器杯	口縁部～底部	完形	9.4	3.9	3.0	10YR7/ 3 にぶい黄褐		
第39図33	PL16	S818	No 15	土師器杯	口縁部～底部	完形	9.8	4.5	3.1	7.5YR8/2 灰白		
第39図34	PL16	S818	No 14	土師器杯	口縁部～底部	30%	<10.0>	<4.2>	2.8	7.5YR7/ 3 にぶい橙		
第39図35	PL16	S818 埋土	土師器杯	口縁部～底部	40%	<10.2>	<5.0>	3.1	7.5YR6/4 にぶい橙			
第39図36	PL16	S818	No 18・20	土師器杯	口縁部～底部	60%	<9.9>	3.2	2.5	10YR7/4 にぶい黄褐		
第39図37	PL16	S818 埋土	土師器杯	口縁部～胴部	50%	9.9	—	(2.3)	7.5YR7/6 橙			
第39図38	PL16	S818	No 11	土師器杯	口縁部～底部	ほぼ完形	10.2	4.3	3.0	5YR7/6 橙		
第39図39	PL16	S818	No 21	土師器杯	口縁部～底部	60%	<10.2>	4.2	3.0	5YR7/6 橙		
第39図40	PL16	S818	No 4	土師器杯	口縁部～底部	完形	11.7	4.9	3.6	7.5YR6/6 橙		
第39図41	PL16	S818 埋土	灰釉陶器輪	口縁部～胴部	10%	<17.0>	—	(5.0)	5Y7/1 灰白			
第39図42	PL16	S818	No 18	土師器盤B	口縁部～底部	60%	10.9	<5.8>	3.4	10YR6/4 にぶい黄褐		
第39図43	PL16	S818	No 12	土師器盤B	口縁部～底部	ほぼ完形	8.5	5.1	3.2	7.5YR7/4 にぶい橙		

第2章 発掘調査の概要

図版No	写真No	遺構名	取り上げ No	器種	部位	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面色調	備考
第39図44	PL16	S818	No 19	土師器羽釜	口縁部～胴部	10%	<18.0>	—	(7.0)	5YR6/6 橙	
第39図45	PL16	S818 P2		土師器甕	口縁部～胴部	10%	<22.7>	—	(6.8)	5YR6/6 橙	
第39図46	PL16	S818	No 25	小型壺	口縁部～胴部	10%	<13.7>	—	5.4	5YR5.6 明赤褐	
第39図47	PL16	S818		瓦	—	—	—	—	—	10YR6/1 褐灰	
第39図48		S819	No 2	須恵器杯	口縁部～胴部	20%	<14.3>	—	(3.3)	10Y4/1 灰	
第39図49	PL16	S820	No 1	灰釉陶器小皿	口縁部～底部	60%	<8.3>	3.6	2.3	5Y7/1 灰白	
第40図1	PL17	S821	No 9	土師器杯A	口縁部～底部	先形	11.6	4.2	3.6	10YR8/4 浅黄橙	
第40図2	PL17	S821	No 33	土師器杯A	口縁部～底部	90%	12.2	4.4	3.7	7.5YR6/4 にぶい橙	
第40図3	PL17	S821	No 30	土師器杯A	口縁部～底部	80%	12.5	5.0	3.6	7.5YR7/6 橙	
第40図4	PL17	S821	No 25	土師器杯A	口縁部～底部	70%	12.6	5.7	4.0	7.5YR6/4 にぶい橙	
第40図5	PL17	S821	No 18	土師器杯A	口縁部～底部	50%	12.5	5.4	3.7	5YR5.6 明赤褐	
第40図6	PL17	S821	No 18	土師器杯A	口縁部～底部	70%	11.6	<4.9>	3.8	5YR5.4 にぶい赤褐	
第40図7	PL17	S821	No 2	黒色土器A 杯	口縁部～底部	ほぼ先形	12.3	5.0	3.8	7.5YR7/4 にぶい橙	
第40図8	PL17	S821		黒色土器A 杯	口縁部～底部	ほぼ先形	12.2	5.0	3.9	5YR6/6 橙	・暗文「大」有り
第40図9	PL17	S821		黒色土器A 杯	口縁部～底部	60%	<16.6>	6.0	5.5	7.5YR7/6 橙	・暗文「放射状」有り
第40図10	PL17	S821		黒色土器A 杯	口縁部～底部	40%	<12.4>	4.4	4.0	7.5YR3/2 黒褐	・暗文「渦巻」有り
第40図11	PL17	S821		黒色土器A 杯	口縁部～底部	60%	12.1	5.4	4.1	7.5YR6/6 橙	・暗文「大」有り
第40図12	PL17	S821	No 26	黒色土器A 杯	口縁部～底部	30%	<12.4>	5.0	3.8	7.5YR7/6 橙	・暗文「*」有り
第40図13	PL17	S821	No 5	黒色土器A 杯	口縁部～底部	60%	<12.6>	5.2	3.9	5YR6/6 橙	・暗文「*」有り
第40図14	PL17	S821	No 31	黒色土器A 杯	口縁部～底部	80%	13.0	4.6	4.6	7.5YR5.6 明褐	・暗文「大」有り
第40図15		S821 埋土		黒色土器A 杯	胴部～底部	10%	—	5.0	(1.6)	7.5YR4/2 灰褐	・刻書有り
第40図16	PL17	S821	No 29	黒色土器A 碗	口縁部～底部	80%	12.4	6.0	4.8	5YR7/6 橙	
第40図17	PL17	S821		黒色土器A 碗	口縁部～底部	60%	16.2	8.4	6.7	7.5YR7/4 にぶい橙	・墨書有り
第40図18	PL17	S821	No 24	土師器甕	口縁部～底部	50%	<12.4>	6.5	4.8	7.5YR6/6 橙	
第40図19	PL17	S821	No 7	土師器碗	口縁部～底部	40%	<14.6>	7.7	5.9	7.5YR6/6 橙	
第40図20	PL17	S821	No 6	土師器碗	口縁部～底部	60%	<14.3>	7.4	5.2	5YR5.6 明赤褐	
第40図21	PL17	S821 埋土		黒色土器B 小壺	口縁部～胴部	40%	<3.8>	—	(4.1)	7.5YR 1/2 1 黒	
第40図22	PL17	S821	No.12・15・34・35	須恵器短頸壺	口縁部～胴部	10%	<11.7>	—	(9.1)	N 6/ 灰	
第40図23	PL17	S821	No 10	灰釉陶器蓋	体部	40%	—	—	(4.0)	10Y6/1 灰	
第40図24	PL17	S821	No 27	灰釉陶器杯	胴部～底部	20%	—	<6.4>	(3.0)	N 7/ 灰白	
第40図25	PL17	S822 埋土		黒色土器A 杯	口縁部～底部	30%	<15.1>	<5.8>	5.4	5YR6/8 橙	
第40図26		S822 埋土		黒色土器A 杯	口縁部～底部	40%	<15.2>	<6.5>	5.1	7.5YR6/8 橙	
第40図27	PL17	S822 埋土		黒色土器A 杯	口縁部～底部	50%	<15.0>	6.5	5.5	2.5YR5.4 にぶい赤褐	・暗文有り
第40図28		S822		黒色土器A 杯	底部	20%	—	6.0	(1.9)	5YR6/6 橙	・墨書有り
第40図29	PL17	S822		黒色土器A 碗	口縁部～底部	20%	<15.9>	—	4.2	7.5YR4/3 褐	・刻書有り
第40図30	PL17	S822		灰釉陶器段皿	口縁部～底部	30%	<13.3>	<6.8>	(3.0)	5R 7/1 明赤灰	
第40図31	PL17	S822		灰釉陶器杯	胴部～底部	10%	—	<7.9>	(3.0)	2.5Y7/ 1 灰白	
第40図32	PL17	S822		灰釉陶器杯	底部	20%	—	<4.3>	(2.0)	2.5Y7/ 1 灰白	
第40図33		S822		灰釉陶器壺	胴部	10%	—	—	(1.5)	2.5GY8/1 灰白	
第40図34	PL17	S822	No 2	灰釉陶器長頸壺	頸部	10%	—	—	(7.0)	10Y6/1 灰	
第40図35	PL17	S822		灰釉陶器長頸壺	底部	10%	—	6.1	3.7	5R 7/1 明赤灰	
第40図36	PL17	S822 埋土		緑釉陶器杯	底部	10%	—	—	(1.1)	7.5Y5/3 4/7 灰	
第40図37	PL17	S822		灰釉陶器壺	胴部	20%	—	—	(19.2)	N 7/ 灰白	
第41図1	PL18	S824 カマド		黒色土器A 碗	口縁部～底部	50%	<12.8>	6.5	5.1	5YR6/6 橙	
第41図2	PL18	S824 埋土		黒色土器A 杯	底部	20%	—	<5.0>	(1.5)	N 3/ 埋灰	
第41図3	PL18	S824 埋土		黒色土器B 碗	口縁部～底部	60%	10.0	5.7	4.2	N 2/ 黒	
第41図4	PL18	S824		土師器鉢	口縁部～胴部	10%	<28.2>	—	(6.9)	5YR4/6 赤褐	
第41図5	PL18	S825	No 2	黒色土器A 杯	口縁部～底部	40%	<13.6>	<6.4>	4.2	7.5YR7/6 橙	
第41図6	PL18	S825	No 23	須恵器杯蓋	体部	ほぼ先形	13.2	—	4.0	5BG5/1 青灰	
第41図7	PL18	S825	No 24	須恵器杯蓋	体部	90%	14.4	—	3.2	5GY5/1 4/7 灰	
第41図8	PL18	S825	No 1	灰釉陶器杯	胴部～底部	20%	—	8.0	(2.6)	2.5YR2 灰白	
第41図9	PL18	S825	No 26	灰釉陶器杯	口縁部～底部	50%	10.6	5.0	4.4	10Y7/1 灰白	
第41図10		S825 カマド	No 39	土師器甕	口縁部～胴部	10%	<24.6>	—	(7.5)	5YR6/6 橙	
第41図11	PL18	S825	No 28・30・33	土師器甕	口縁部～胴部	20%	<13.4>	—	(21.1)	5YR5/4 にぶい赤褐	
第41図12	PL18	S826	No 4	土師器杯	口縁部～底部	70%	13.6	5.0	4.0	5YR5/4 にぶい赤褐	
第41図13	PL18	S826 埋土		土師器甕	口縁部～胴部	10%	<12.5>	—	(6.8)	7.5YR6/4 にぶい橙	
第41図14	PL18	S826	No.1～3・8・13	土師器甕	口縁部～底部	60%	25.2	6.7	26.7	5YR4/6 赤褐	
第41図15	PL18	S827 カマド	No 9	黒色土器A 碗	口縁部～底部	90%	12.0	5.7	3.9	10YR6/4 にぶい黄褐	
第41図16	PL18	S827 埋土		黒色土器A 碗	口縁部～底部	80%	12.0	4.8	4.0	5YR5.6 明赤褐	
第41図17	PL18	S827 P1	No 3	黒色土器A 碗	口縁部～底部	先形	12.0	5.5	4.3	7.5YR5/3 にぶい橙	
第41図18	PL18	S827 P1	No 1	黒色土器A 碗	口縁部～底部	90%	12.4	6.0	4.6	7.5YR6/6 橙	
第41図19	PL18	S827 カマド	No 11	黒色土器A 皿	口縁部～底部	先形	12.4	6.0	3.3	2.5YR5.6 明赤褐	
第41図20	PL18	S827 P1	No 4	須恵器杯A	口縁部～底部	先形	12.4	6.0	3.8	5Y6/1 灰	・墨書有り

第1節 家語坂遺跡の調査

図版No	写真No	遺構名	取り上げ No	器種	部位	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面色調	備考	
第41図21	PL18	S827 カマド	No 8	灰陶器椀	口縁部～底部	30%	<15.6>	7.0	5.6	7.5Y8/1 灰白		
第41図22	PL18	S827埋土		灰陶器段皿	口縁部～底部	10%	<17.6>	8.0	2.2	10Y7/1 灰白		
第41図23	PL18	S827 カマド	No 13	須恵器短頸壺	口縁部～胴部	10%	11.6	—	(7.0)	5G5/1 緑灰		
第41図24	PL18	S827 P1	No 2	須恵器短頸壺	口縁部～底部	先形	11.7	10.3	24.6	5G7/1 明灰-7 灰		
第41図25	PL18	ST01 P2		須恵器杯 A	胴部～底部	20%	—	(7.0)	(2.2)	10Y6/1 灰		
第41図26	PL18	ST01 P10		灰陶器皿	底部	10%	—	—	(1.5)	5Y8/1 灰白		
第41図27	PL18	SK04埋土		土師器椀	口縁部～底部	80%	<14.0>	7.2	6.0	7.5Y8/4 にふい橙		
第42図1	PL19	SK08埋土		灰陶器長頸壺	胴部～底部	20%	—	9.5	12.0	N7/ 灰白		
第42図2	PL19	SK08埋土		須恵器四耳壺	頸部～胴部	20%	—	—	(15.9)	N3/ 暗灰		
第42図3	PL19	SK09	No4・10- 32～35	須恵器鉢	口縁部～胴部	10%	<29.2>	—	—	(19.0)	N4/ 灰	
第42図4	PL19	SK10	No 9	須恵器杯 A	口縁部～底部	90%	13.0	5.2	4.0	5Y3/1 粉-7 黒		
第42図5	PL19	SK10	No 24	須恵器杯 A	口縁部～底部	ほぼ先形	14.0	6.5	4.0	5Y6/1 灰		
第42図6	PL19	SK10	No 3	須恵器杯 A	口縁部～底部	60%	<13.1>	5.5	4.1	10YR7/2 にふい黄橙		
第42図7		SK10埋土 1～2層		須恵器杯 B	胴部～底部	60%	—	5.5	(3.0)	10Y5/1 灰		
第42図8	PL19	SK10	No 19	須恵器杯 B	口縁部～底部	25%	<15.0>	(11.1)	(4.1)	N4/ 灰		
第42図9	SK10	No 2	須恵器杯 B	口縁部～底部	30%	<15.0>	<8.5>	6.0	10YR4/1 褐灰			
第42図10	PL19	SK10	No 6	黒色土器 A 杯	口縁部～底部	30%	<12.0>	5.9	4.4	7.5YR8/4 浅黄橙		
第42図11	PL19	SK10	No 23	黒色土器 A 杯	口縁部～底部	70%	13.0	5.0	3.0	10YR8/3 浅黄橙		
第42図12	PL19	SK10	No.13・16	黒色土器 A 杯	口縁部～底部	80%	14.5	7.2	3.0	10YR8/1 灰白		
第42図13	SK10	No 18	黒色土器 A 杯	口縁部～底部	50%	<15.0>	7.0	2.4	10YR8/2 灰白			
第42図14	PL19	SK10	No 22	黒色土器 A 杯	口縁部～底部	60%	<17.0>	7.0	5.2	7.5YR8/4 浅黄橙		
第42図15	PL19	SK10		黒色土器 A 杯	口縁部～底部	30%	<16.2>	7.2	5.5	10YR8/3 浅黄橙		
第42図16	PL19	SK10		黒色土器 B 碗	口縁部～底部	50%	<12.3>	6.7	4.7	10YR1.7/1 黒		
第42図17		SK10		黒色土器 B 皿	口縁部～底部	80%	11.8	6.2	2.2	10YR1.7/1 黒		
第42図18	PL19	SK10埋土 土下層		須恵器鉢	口縁部～胴部	30%	<27.0>	—	(12.7)	10Y6/2 粉-7 灰		
第42図19	PL19	SK10埋土 下層4層		黒色土器杯蓋	体部	20%	<13.5>	—	4.1	7.5YR8/4 浅黄橙		
第42図20		SK10埋土 下層4層		黒色土器 A 杯蓋	体部	10%	<26.0>	—	(4.8)	7.5YR8/3 浅黄橙		
第42図21	PL19	SK10 4層		土師器鉢	口縁部～胴部	20%	<15.1>	—	(7.5)	7.5YR8/4 浅黄橙		
第42図22	PL19	SK10	No 13	土師器鉢	口縁部～底部	60%	<12.4>	7.0	13.8	5YR6/6 橙		
第42図23	SK10			土師器高盤	口縁部	10%	<25.8>	—	(5.3)	7.5YR8/4 浅黄橙		
第42図24	SK10			土師器高盤	胴部	10%	—	<23.0>	(5.1)	7.5YR8/4 浅黄橙		
第42図25	PL19	SK10	No 1	須恵器長頸壺	口縁部～頸部	10%	8.2	—	(8.7)	10Y7/1 灰白		
第42図26	PL19	SK10 4層		須恵器長頸壺	胴部～底部	60%	—	<8.2>	(15.3)	10B6/4/1 暗黄灰		
第42図27		SK10埋土 下層4層		灰陶器短頸壺	口縁部～胴部	10%	<14.0>	—	(5.0)	7.5Y7/1 灰白		
第43図1	PL19	SK35埋土		須恵器杯 A	口縁部～底部	50%	<13.0>	<6.0>	4.0	5Y7/1 灰白		
第43図2	SK35			須恵器杯 A	口縁部～胴部	10%	<13.2>	—	(3.6)	N7/ 灰白	・墨書「山」有り	
第43図3	SK35			土師器杯 A	口縁部～底部	20%	<11.0>	5.0	2.5	7.5YR6/6 橙		
第43図4	SK35			土師器盤	胴部	10%	—	—	(4.6)	5YR7/8 橙		
第43図5	PL19	SK35	No 1	四耳壺	頸部～胴部	20%	—	—	(17.0)	7.5R4/2 灰赤		
第43図6	SK37	No 4	土師器杯 A	口縁部～底部	70%	<9.0>	4.0	3.0	5YR6/8 橙			
第43図7	PL20	SK37	No 8	土師器杯 A	口縁部～底部	90%	10.0	5.0	2.7	5YR6/6 橙		
第43図8	PL20	SK37	No 3	土師器杯 A	口縁部～底部	90%	9.9	4.5	3.0	5YR6/8 橙		
第43図9	SK37	No 6	土師器杯 A	口縁部～底部	80%	9.4	4.0	2.9	2.5YR6/6 橙			
第43図10	PL20	SK37	No 10	土師器杯 A	口縁部～底部	先形	9.6	4.5	2.8	7.5YR7/4 浅黄橙		
第43図11	PL20	SK37	No 2	土師器杯 A	口縁部～底部	先形	9.6	4.1	2.9	2.5YR6/6 橙		
第43図12	PL20	SK37	No 11	土師器杯 A	口縁部～底部	先形	10.0	5.0	2.3	7.5YR7/4 にふい橙		
第43図13	PL20	SK37	No 1	土師器盤	口縁部～底部	90%	13.0	7.8	6.0	5YR7/4 にふい橙		
第43図14	PL20	SK37	No 9	土師器盤	口縁部～底部	50%	13.2	8.0	5.8	5YR7/6 橙		
第43図15	SK39埋土			土師器杯	口縁部～底部	30%	<13.0>	<5.0>	3.8	5YR5/3 にふい赤橙		
第43図16	SK43埋土			土師器杯	口縁部～底部	40%	<10.0>	4.0	3.0	5YR6/6 橙		
第43図17	PL20	SK74		須恵器長頸壺	胴部～底部	50%	—	6.6	(13.0)	2.5Y6/2 灰黄		
第43図18	SK76	No 1	土師器杯 A	口縁部～底部	50%	11.0	4.0	3.0	5YR6/6 橙			
第43図19	SK76	No 2	土師器杯 A	口縁部～底部	50%	<12.0>	5.5	3.5	5YR4/4 にふい赤橙			
第43図20	SK78埋土			土師器杯 A	口縁部～底部	30%	<12.0>	<5.0>	3.5	7.5YR5/2 灰褐		
第43図21	PL20	SK81	No 2	土師器杯 A	口縁部～底部	80%	12.0	4.5	3.5	5YR6/8 橙		
第43図22	SK81	No 1	土師器椀	高台部	20%	—	7.5	(2.6)	(5YR5/6 明赤橙)			
第43図23	PL20	SK126	No 1	須恵器杯 A	口縁部～底部	80%	12.5	2.2	4.1	N4/ 灰		
第43図24	SK150埋土			須恵器杯 A	口縁部～底部	70%	14.0	6.4	3.8	7.5Y5/1 灰		
第43図25	SK199			土師器杯 A	口縁部～底部	70%	12.0	5.0	3.4	5YR5/8 明赤橙		
第43図26	SM06	No 1	灰陶器椀	口縁部～胴部	10%	<15.0>	—	(5.5)	5YR7/1 灰白			
第43図27	SM06			灰陶器長頸壺	底部	10%	—	<9.9>	(3.5)	N7/ 灰白		
第43図28	SD02			黒色土器 A 杯	口縁部～胴部	20%	<12.0>	—	(4.0)	7.5YR7/4 にふい橙	・墨書「今」有り	

第2章 発掘調査の概要

図版No	写真No	遺構名	取り上げNo	器種	部位	残存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面色調	備考
第43図29	SD02			黒色土器A 杯	口縁部～底部	80%	12.0	5.2	4.5	10YR7/4 にぶい黄橙	
第43図30	SD02			黒色土器A 陶	口縁部～底部	80%	13.0	6.3	4.5	7.5YR6/6 橙	
第43図31	SD02			黒色土器B 皿	口縁部～底部	30%	<12.6>	—	(2.5)	10YR5/3 にぶい黄褐	
第43図32	SD02			黒色土器B 皿	口縁部～胴部	30%	<14.8>	—	(2.4)	N1.5/ 黒	
第43図33	SD02			土師器杯	口縁部～底部	10%	<8.0>	<6.8>	1.7	7.5YR8/4 にぶい橙	
第43図34	SD02			こね鉢	口縁部	10%	<26.2>	—	(6.2)	7.5YR7/6 橙	
第43図35	PL20	SD02		須惠器短頸蓋	体部	70%	<16.0>	—	5.3	N3/ 暗灰	
第43図36	SD02			須惠器坏蓋	体部	60%	16.5	—	3.4	7.5YR6/3 にぶい褐	
第43図37	PL20	SD02		片口鉢	胴部～底部	40%	—	6.7	(8.2)	10YR5/4 にぶい黄褐	
第43図38	SD02			片口鉢	口縁部～底部	40%	<20.7>	<8.0>	(11.3)	7.5YR7/4 にぶい橙	
第43図39	PL20	SD02		緑釉陶器皿	口縁部～底部	30%	<15.0>	(7.0)	3.1	10Y4/2 判-7 灰	
第43図40	SD02			緑釉陶器椀	口縁部～胴部	10%	<14.8>	—	(4.3)	5Y8/2 灰白	
第43図41	SD02			灰釉陶器椀	底部～高台	10%	—	8.0	(1.1)	5YR6/1 灰	・刻書有り
第44図1	PL20	SK187 埋土		深鉢	口縁部～底部	90%	15.5	—	18.5	7.5YR7/4 にぶい橙	・共生前期～中期初
第44図2	SK187			壺	頸部	10%	—	—	—	—	・条痕文
第44図3	SK187			壺	頸部	10%	—	—	—	10YR7/3 にぶい黄橙	・条痕文
第44図4	SK187			壺	胴部	10%	—	—	—	7.5YR6/4 にぶい橙	・条痕文・深鉢?
第44図5	PL20	SK235		壺	胴部	70%	<13.0>	—	(50.4)	2.5YR6/6 橙	・共生後期(土器群)
第44図6	PL20	SK235		壺	胴部～底部	40%	—	9.0	(34.0)	10YR7/4 にぶい黄褐	・共生後期(土器群)
第44図7	SH03	No 5		鉢	口縁部	10%	—	—	—	7.5YR5/4 にぶい黄橙	・共生前期
第44図8	SH04	No 2		鉢	口縁部	10%	—	—	—	10YR7/3 にぶい黄橙	・共生前期
第44図9	SH04			鉢	口縁部	10%	—	—	—	10YR7/3 にぶい黄橙	・共生前期
第44図10	SH05	No 1		深鉢	口縁部	10%	—	—	—	7.5YR5/4 にぶい褐	・共生前期～中期初
第44図11	SD02			灰釉陶器皿	口縁部～底部	20%	<13.0>	<7.2>	2.8	2.5Y7/2 灰黄	
第44図12	PL20	SD02		灰釉陶器皿	口縁部～底部	80%	15.0	6.5	3.0	5Y7/1 灰白	
第44図13	PL20	SD02		灰釉陶器段皿	胴部～底部	10%	—	<9.0>	(2.8)	7.5Y6/2 灰判-7	
第44図14	PL20	SD02		灰釉陶器椀	口縁部～底部	20%	<17.3>	<8.0>	6.4	10YR7/3 にぶい黄橙	
第44図15	SD02			灰釉陶器小瓶	胴部	30%	—	—	(6.3)	7.5Y7/1 灰白	
第44図16	PL20	SD02		円面磁	底部	30%	<14.8>	—	(3.8)	5R3/1 暗赤灰	
第44図17	PL20	SD02		須惠器壺G	胴部～底部	60%	—	<4.4>	(11.2)	10G4/1 暗緑灰	
第44図18	PL20	SD02		布目瓦	—	—	—	—	—	2.5Y6/2 灰黄	
第45図1	X V25			鉢	口縁部	10%	—	—	(3.9)	10YR7/4 にぶい黄橙	・縄文晩期 糸式土器
第45図2	XI C01			鉢	口縁部～底部	50%	<11.9>	<5.3>	5.6	10R5/6 赤	・共生後期 箱清水土器
第45図3	X V20			壺	口縁部～胴部	10%	<11.8>	—	(11.0)	7.5YR4/4 橙	・共生後期 箱清水土器
第45図4	XI C05			土師器鉢	胴部～底部	30%	—	—	(5.4)	10YR7/2 にぶい黄橙	
第45図5	X V25			非功土師器杯	口縁部～底部	60%	<11.6>	—	3.9	7.5YR7/4 にぶい橙	
第45図6	X V25			須惠器杯A	口縁部～底部	30%	<10.0>	—	4.0	N5/ 灰	
第45図7	X V25			須惠器杯B	口縁部～胴部	30%	<10.0>	<6.6>	4.2	10YR/1 褐灰	
第45図8	X V24			須惠器杯A	口縁部～底部	30%	<14.0>	<6.5>	3.6	7.5Y6/1 灰	・墨書「山」有り
第45図9	X V25			黒色土器A 杯	口縁部～底部	30%	<12.0>	<6.0>	4.8	10YR8/2 灰白	
第45図10	X V18			黒色土器A 杯	口縁部～底部	50%	<13.4>	6.1	3.9	7.5YR7/4 にぶい橙	
第45図11	X V25			黒色土器B 皿	口縁部～底部	10%	<13.0>	<9.8>	2.0	10YR1.7/1 黒	
第45図12	X V19			黒色土器B 皿	口縁部	10%	<14.0>	—	(1.4)	10YR2/1 黒	
第45図13	X V19			皿	口縁部～底部	30%	<13.7>	<7.0>	1.9	7.5YR8/2 灰白	
第45図14	X V25			灰釉陶器椀	口縁部～胴部	10%	<14.0>	—	(3.7)	7.5Y7/1 灰白	
第45図15	X V18			灰釉陶器椀	底部	10%	—	7.1	(1.9)	10YR8/3 淺黄橙	
第45図16	X V15			灰釉陶器椀	底部	10%	—	7.4	(2.4)	10Y7/1 灰白	
第45図17	X V24			灰釉陶器長頸壺	口縁部	10%	<4.8>	—	(3.7)	10Y6/2 判-7 灰	
第45図18	X V25			灰釉陶器広口壺	口縁部	10%	<11.0>	—	(3.9)	N7/ 灰白	
第45図19	X V25			灰釉陶器壺	胴部～底部	10%	—	<9.2>	(3.6)	N8/ 灰白	

第5表 釜居坂遺跡 土製品観察表

図版No	写真No	遺構名	取上げNo	遺物名称	材質	長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重さ(g)	備考
第45図20	PL21	SB11	No 37	紡錘車	土	7.2	7.1	4.7	282.0	
第45図21	PL21	SB13	No 3	土鐘	土	2.3	2.6	6.3	34.4	
第45図22	PL21	SB18	P2	土鐘	土	2.4	2.5	5.6	27.2	
第45図23	PL21	SD02	No 14	土鐘	土	3.3	3.3	6.1	67.7	
第45図24	PL21	SD02	TR1 と 2 の間	土鐘	土	3.0	3.1	5.9	46.9	
第45図25	PL21	SD02	サブトレンチ下層	土鐘	土	2.1	3.6	6.6	40.8	
第45図26	PL21	SD02	サブトレンチ下層	土鐘	土	2.2	2.5	6.7	36.3	
第45図27	PL21	SD02	黒色土2	土鐘	土	3.0	3.2	9.2	80.9	
第45図28	PL21	SD02	TR1 と 2 の間?	土鐘	土	3.5	3.7	7.2	85.3	
第45図29	PL21	SD02		土鐘	土	2.3	2.5	7.6	37.9	

第6表 峯謡坂遺跡 石器観察表

図版No	写真No	遺構名	取上げNo	遺物名称	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	高さ (mm)	重さ (g)	備考
第46図1	S802	埋土	石器No2	石鏝	黒曜石	19.5	10.5	4.3	0.6	・打製
第46図2	S804	東西トレンチ	石器No1	石鏝	黒曜石	18.2	14.0	3.5	0.5	・打製
第46図3	S804	トレンチ埋土	石きりNo2	打製石鏝	チャート	19.2	6.0	3.0	0.5	
第46図4	S804	床面		石鏝未製品	黒曜石	30.8	18.0	6.2	2.7	
第46図5	S804	埋土		削片	黒曜石	28.5	20.5	11.5	5.7	・2点-2
第46図6	PL21	S804 埋土		石包丁	凝灰岩	103.5	50.0	17.5	88.2	
第46図7	PL21	S804	No4	觚石	安山岩	138.0	55.0	33.0	369.3	
第46図8	PL21	S804	No3	砥石	砂岩	147.0	67.0	62.0	822.3	・中粒砂岩
第46図9		S810		石鏝未製品	黒曜石	21.8	20.5	3.2	1.1	
第46図10	PL21	S805	石器No1	磨製石斧	閃緑岩	102.0	68.0	19.0	258.6	
第46図11		S809 埋土		砥石	凝灰岩	50.0	46.0	21.3	59.5	
第46図12		S811 南側ベルト内	石器No2	石鏝	黒曜石	16.0	12.0	3.5	0.4	・打製
第46図13	PL21	S811	No4	觚石	安山岩	146.0	65.5	50.0	565.2	
第46図14	PL21	S811	No7	砥石	細粒砂岩	256.0	100.0	76.0	2200.0	・細粒砂岩
第46図15		S814 3層		石鏝	黒曜石	23.4	21.0	7.2	2.3	・2点-2
第46図16		S814 3層		小形刃器	黒曜石	45.0	27.0	8.0	8.7	・2点-1
第46図17	PL21	S814 埋土		磨製石斧	緑色岩	72.5	41.3	12.3	53.4	
第46図18	PL21	S814 床面		打製石斧	凝灰岩	99.1	67.2	16.0	143.5	
第46図19	PL21	S814	No2	打製石斧	凝灰岩	143.0	83.9	32.0	427.0	
第46図20	PL21	S814 3層		觚石	安山岩	110.0	69.0	30.0	295.7	
第46図21	PL21	S814	No5	觚石	安山岩	174.0	81.0	42.0	768.1	
第46図22		S815 埋土		觚片刃石斧	玄武岩?	39.5	30.0	9.1	18.2	
第46図23		S817	No17	砥石	凝灰岩	110.0	54.0	34.0	225.5	
第46図24		S812 埋土上面	No1	石鏝	チャート	19.0	16.0	3.0	0.5	・打製
第46図25		S812	No2	石鏝	安山岩	29.0	16.0	9.4	2.1	・打製・下呂石に似てる
第46図26		S812 Pit7		觚石	輝石	71.5	46.1	31.8	31.7	
第46図27	PL21	S812	No70	砥石	安山岩	230.0	133.0	97.0	3600.0	
第47図1		SK09		両楯刺磨痕 削片	黒曜石	20.0	10.3	3.5	0.8	
第47図2		SK35 埋土		削片	黒曜石	21.2	18.7	6.5	2.3	・3点-3
第47図3	PL22	SK35 埋土		石核	黒曜石	35.3	22.6	11.2	8.5	・3点-1
第47図4	PL22	SK137	No17	勾玉	ヒスイ	3.1	2.2	1.3	13.7	
第47図5		SK187 土器下		石鏝未製品	黒曜石	15.0	13.0	3.0	0.4	・11点-8チップ多数
第47図6	PL22	SK187	石No2	削片	凝灰岩	61.0	58.0	14.4	56.1	
第47図7		SK187	石No3	扁平片刃石斧	凝灰岩?	41.0	39.0	10.8	16.2	
第47図8	PL22	SK187	石No7	削片	黒色頁岩	64.2	41.3	22.0	42.1	・茶褐色
第47図9		SD02	石器No5	石鏝	黒曜石	22.0	16.0	4.5	1.0	・打製
第47図10		SD02 TR6	石器No3	石鏝	碧玉	15.0	11.0	3.1	0.3	・打製
第47図11		SD02		石鏝	黒曜石	20.0	16.0	3.0	0.8	・打製
第47図12		SD02	石器No9	石鏝	黒曜石	22.0	15.0	3.3	0.9	・打製
第47図13		SD02	石器No2	石鏝	チャート	32.0	15.0	5.0	1.9	・打製
第47図14		SD02	石器No6	白玉	碧玉	6.0	6.0	2.7	0.1	
第47図15		SD02	石器No1	加工痕削片	黒曜石	18.0	14.0	5.0	1.2	
第47図16		SD02 TR1と2の間		両楯刺磨痕 削片	黒曜石	32.0	16.0	7.6	4.5	
第47図17	PL22	SD02	石器No7	磨製石包丁	凝灰岩	69.2	57.0	7.9	41.6	
第47図18	PL22	SD02	石器No10	打製石斧	安山岩	94.1	42.2	19.2	93.9	
第47図19	PL22	SD02	石器No8	磨製石斧	緑色岩	125.0	52.0	28.2	266.8	
第47図20	PL22	SD02 TR2と5の間		觚石	安山岩	124.0	58.0	34.0	398.0	・4点-1
第47図21	PL22	SD02 黒色土1		觚石	安山岩	107.0	65.0	53.0	650.0	・残存率1/2
第47図22		SD02 黒色土2		砥石	輝石	55.5	48.0	36.3	27.9	・2点-1
第47図23	PL22	SH05		打製石斧	凝灰岩	90.0	41.0	13.0	54.3	
第47図24		XI C09 検出面		石鏝	黒曜石	4.4	4.0	1.8	0.3	・打製
第47図25		X U 18		石鏝	黒曜石	7.0	3.0	2.7	0.5	・打製
第47図26		X V25 - c トレンチ内		石鏝	黒曜石	24.0	10.0	2.8	0.6	・打製・柳葉形
第47図27	PL22	X V20 トレンチ		大形刃器	凝灰岩?	119.0	47.0	19.0	13.7	
第47図28	PL22	X V24 - a 検出面		削片	凝灰岩	89.7	36.0	20.0	52.1	
第47図29	PL22	X V25 黒色土層 縄文		凹石	花崗閃岩	93.0	80.0	43.6	449.1	

第2章 発掘調査の概要

第7表 峯謡坂遺跡 金属器観察表

図版No	写真No	遺構名	取上げNo	遺物名称	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	高さ (mm)	重さ (g)	備考
第48図1		S806		釘	鉄	121.0	29.0	27.0	57.0	
第48図2		S812	No 5	鉄鏝	鉄	115.0	12.0	9.0	18.2	・4点-1
第48図3		S812	No 4	鉄鏝	鉄	74.0	31.0	12.0	27.2	・2点-1
第48図4		S812	No 1	鏝	鉄	24.0	19.0	11.0	5.1	
第48図5		SK08	No 1	斧か棒	鉄	274.0	112.0	72.0	3540.0	
第48図6		SK08	No 5	釘	鉄	55.0	29.0	16.0	13.5	
第48図7		SK08		釘	鉄	72.0	4.0	4.0	4.5	
第48図8		SK08	No 2	釘	鉄	116.0	32.0	22.0	68.3	
第48図9		SK08	No 4	曲板	鉄	64.0	33.0	14.0	26.9	・4箇所に留め穴
第48図10		SK08	No 3	曲板	鉄	65.0	36.0	22.0	40.7	
第48図11		SK10 4層		釘	鉄	104.0	7.0	7.0	10.0	
第48図12		SK76 埋土		鉄鏝	鉄	196.0	110.0	120.0	41.9	・離脱式
第48図13	PL22	SK76 埋土	No 1	鉄鏝	鉄	216.0	(154.0)	20.0	482.8	
第49図1		SD02	No 15	釘	鉄	90.0	11.0	11.0	21.3	
第49図2		SD02	No 23	釘	鉄	103.0	8.0	8.0	23.8	
第49図3		SD02	No 30	釘	鉄	110.0	9.0	9.0	10.9	
第49図4		SD02	No 29	釘	鉄	102.0	9.0	7.0	14.5	
第49図5		SD02	No 31	釘	鉄	85.0	7.0	8.0	11.7	・2点-1
第49図6		SD02 TR3	No 28	釘	鉄	72.0	9.0	7.0	8.9	
第49図7		SD02	No 7	釘	鉄	26.0 ~ 58.0	8.0 ~ 17.0	3.0 ~ 8.0	2.7 ~ 3.6	・3点-1
第49図8		SD02	No 26	釘	鉄	64.0	14.0	13.0	13.4	
第49図9		SD02	No 19	釘	鉄	51.0	7.0	9.0	15.4	
第49図10		SD02	No 14	刀子	鉄	26.0 ~ 94.0	21.0 ~ 22.0	11.0 ~ 13.0	6.0 ~ 27.7	・6点-1
第49図11		SD02	No 21	刀子	鉄	119.0	24.0	15.0	36.5	・4点-1
第49図12		SD02	No 33	刀子	鉄	83.0	13.0	5.0	8.1	・柄
第49図13		SD02 サブトレンチ	No 37	刀子	鉄	87.0	15.0	15.0	20.1	・柄・4点-1
第49図14		SD02	No 18	刀子	鉄	119.0	33.0	14.0	52.2	・2点-1
第49図15		SD02 TR4内	No 10	鉄鏝	鉄	80.0	33.0	18.0	42.1	
第49図16		SD02	No 32	鉄鏝	鉄	76.0	10.0	10.0	18.4	
第49図17		SD02	No 17	馬具	青銅	52.0	35.0	7.0	20.4	
第49図18		SD02 TR4内	No 20	金属	鉄	155.0	120.0	55.0	526.0	・B72 塗布(土付き)・4点-1
第49図19		SD02	No 6	金属	青銅	33.0 ~ 39.0	20.0	10.0 ~ 12.0	6.6 ~ 11.3	・2点-1
第49図20		SD02	No 22	金属	青銅	59.0	35.0	2.0	17.4	

(2) 西中曾根遺跡の調査



- 遺跡の種類：集落遺跡、墓跡
- 主な時代：古墳時代前期末～中期初頭
(4世紀末～5世紀前半)
- △他の時代：弥生時代後期終末～古墳前期初頭
- 遺跡の性格：
 - ・弥生時代(後期終末～)は墓跡。
 - ・古墳時代前期終末ころに集落がつくられ、中期初頭まで続き、その後に姿を消す。

(2) 西中曾根遺跡の調査

1. 調査の概要

(1) 調査期間

本発掘調査・・・平成14年4月22日～9月18日

・・・平成16年6月29日～8月17日

(試掘調査：平成13年12月20日、平成14年12月10日・11日)

(2) 調査面積

4,401㎡

(3) 調査担当

本発掘調査・・・①寺内貴美子 豊田義幸(7月まで東條遺跡兼務)

②河西克造 山崎まゆみ

(試掘調査：町田勝則 上田典男(H13のみ))

2. 遺跡の概要

(1) 立地

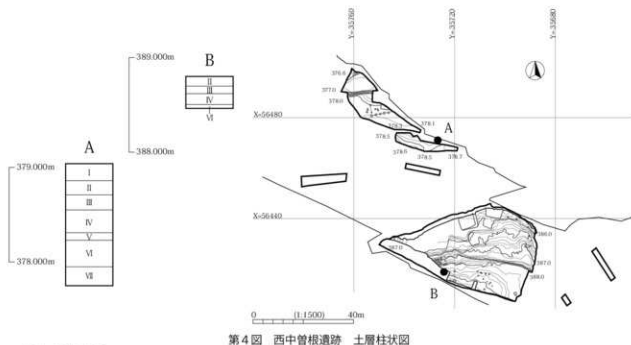
西中曾根遺跡は長野盆地南部の千曲市八幡に位置する。千曲高原面をつくる旧崩積土(約10万年前)の再移動による土石流堆積物で形成された押し出し地形の末端部で、標高376m～393mにある。千曲高原面を開析している谷頭を頂点として北東方向に扇状に広がり、遺跡の北部を流れる宮川付近からは比高10mと佐野川扇状地上の八幡遺跡群からは一段高い位置にある。基盤となる土石流堆積物は新期峽捨土石流堆積物(3,250±260年前¹⁴C)に属し、淘汰の悪い安山岩(三峯火山岩)の垂角礫から垂円礫を多量に含み、基質は砂質の泥や粘土である。

(2) a 遺跡の範囲と調査区

西中曾根遺跡は、弥生時代から平安時代にかけての集落遺跡として千曲市遺跡分布図(106)に記載され、既知の調査事例はない。遺跡周知化の範囲は、字切り図に示された西中曾根地籍の中央部(全体の1/3程度)、標高393mが測られる台地の先端部にあたる。今回の道路新設事業においては、周知化された範囲のほぼ中央部分が記録保存の対象となった。現況の遺跡地は階段状に整地された畑地であり、旧地形は大幅に改変されている。調査区外壁の崩落や土砂の流失に配慮し、安全带及び安全勾配を確保した調査区を設定し発掘を行った。遺跡北側に広がる低地部(水田地)は、試掘の結果、遺構・遺物は存在しないと判断された。

b 基本層序(第4図)

調査時の現況は畑または水田である。調査の結果、基本層序を以下のとおり確認した。低位部(A地区)調査の379m付近では、Ⅰ層は盛土。Ⅱ層は10YR3/2黒褐色土で現耕作土(畑)である。Ⅲ層からⅤ層は10YR3/1～2/3黒色～黒褐色土で旧耕作土(水田)である。Ⅵ層は10YR2/1黒色粘質土で小礫や細粒砂を含み、粘性は強い。遺物包含層である。Ⅶ層は10YR1.7/1黒色砂質粘土で人頭大の礫や地山の細粒砂を30%含む。粘性は強い。ⅩⅡQグリッドには分布しているが、高位部(B地区)では確認されない。Ⅷ層は黄褐色粘土質シルトで、礫を含む。粘性は強い。地山である。高位部調査の389m付近では、Ⅰ層は盛土。Ⅱ層は10YR3/3暗褐色粘質土で表土である。Ⅲ層は10YR4/1褐灰色粘質土で旧耕作土(水田)である。Ⅳ層は10YR4/4褐色土粘質土で礫を含む。Ⅴ層は10YR3/4暗褐色粘質土である。Ⅵ層は10YR3/1黒褐色土で遺物包含層である。



第4図 西中曾根遺跡 土層柱状図

(3) 調査結果

発掘調査の結果、古墳時代前期末から中期初頭に編年することのできる集落跡を確認した。記録保存した遺構は、竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡2棟、溝跡3本、土坑45基で、出土遺物には土器コンテナ69箱・土製品1点、石器32点、金属製品20点がある。遺物には古墳時代前期初頭に位置づけることのできる土器が一定量あり、調査区外に該当時期の遺構が存在する可能性もある。前期初頭は、善光寺平の古墳時代の土器編年で示す1段階（3世紀中ごろ）にあたり、長野市石川条里遺跡（註3）での古墳1期1段階の末から2段階にかけて、千曲市屋代遺跡群（註2）での古墳1期末から2期に該当するものと考えられる。竪穴住居跡等、明瞭な遺構が存在し、本跡の中心となる時期は石川条里遺跡での古墳II期3段階、屋代遺跡群での3期末から4期にほぼ該当する。まさに古墳時代前期の終末から中期の幕開けの時期にあたる。この間、集落の存続した期間はおよそ50年以内と見積もることができる。集落の構造的な評価、出土遺物の詳細に関しては、4. 小結に記す。

3. 遺構と遺物

①竪穴住居跡（SB）

SB01（第57図、第61・62図、第65図 P L 23, 26～28）

位置：X II W - 01・02, R - 21

検出：SB03を破壊している。土層観察用のトレンチを設定し、土層断面を観察した結果、SB01の方が新しいと判断できた。北端は遺跡廃絶後の地形改変のため、検出できなかった。

規模：平面形態はほぼ方形と推定。主軸はN69°E、長軸5.68m。

構造：埋没土に類似した土を床とする。壁はほぼ垂直に立ちあがり、周溝は認められない。Pit6が位置や規模から主柱穴と考えられる。ほかに22基の柱穴を確認したが、SB03に所属するものも含まれている可能性が大きい。出入口は不明。焼土、炭化物が比較的まとまってみられる箇所があるが、炉とするには規模が小さく、量も少ない。

埋土：黒褐色粘質土の単層。

遺物出土状況：埋没土下半部から床面にかけて破片が多く出土した。特に南西部に多い。完成品は少ない。

埋没土中から管玉や小型丸底土器が出土している。またPit13の底面付近から土製勾玉が出土。

遺物：第61図1～7は小型丸底土器（埴）。口縁部と胴部径がほぼ等しく、胴部高が口縁部高と等し

いか、それを上回る形態が中心である。底部の成形はケズリ後にナデ整形。1は№9出土の完形個体。胴部下半が下膨れ状で形態はタンポ状。また底部内面にはヘラ調整痕を明瞭に留める。2は№96出土の胴下半の個体。最大径が胴のやや上半部にある。3は口縁部よりも胴下半のほうが大きな形態。底部外面にはわずかにケズリ成形痕を留めるが、全体をていねいなナデ整形で仕上げている。埋没土中の出土。4は№31出土。2とほぼ同様な形態で口縁部を欠損している。内面には輪積み痕と指頭による成形痕跡が残っている。5は4とほぼ同様な形態。胴部下半の資料で埋没土中の出土。6は大きく外側に開く口縁部の破片で、外面には縦方向のミガキ調整が施されている。Pit11より出土。7はやや大きい丸底の土器で、接合はしないが同一個体と考えられる口縁部破片がある。内面には輪積痕を明瞭に残し、胴部下半はケズリ調整で仕上げられている。No.85出土。8は小型丸底で鉢形状の形態。口縁部高はほとんどなく、外側に開口している。胴部下半は丸底に仕上げられ、内外面ともミガキ調整のようなていねいなナデ調整が施されている。No.77出土。9～11は脚部が直線的に開口し、器形全体がツツミ状となる大形の器台。高坏と類別すべきかもしれないが、形態的特徴から器台とした。9はNo.109と110の接合個体で完形。坏部外面はわずかながら有段を意識した作りとなっている。風化が著しく、調整等は観察できない。10はNo.125出土の脚部。11はNo.114・115・117・118の接合個体でほぼ完形。坏部は下半部と上半部を内傾に接合して作られ、有段的な効果となるが、縦方向のミガキ調整により平滑なつくりで仕上げられている。12～19は有段で屈折脚の和泉式の高坏。12は坏部が緩やかに開く形態で、外面の稜は明瞭ではない。埋没土中の出土。13はNo.12出土資料で、脚部端を欠損している。風化が激しく、調整の観察はできない。14はNo.58ほかの接合資料で脚部破片。15と16は12とほぼ同様な形態を呈する坏部破片。15はNo.37出土、16はNo.27出土である。17の外面には縦方向のミガキ調整が顕著である。18は有段部が極めて意識的に作り出された形態で、口縁部は強く外反している。No.4の出土で脚部を欠失し風化が著しい。19はNo.122・133ほかの接合資料で口縁部の破片。外面は縦方向にいていねいなミガキ調整がなされている。20・21、第62図1～12は甕形土器。20は口縁部がくの字形に強く外反する形態で底部を欠損している。全体にていねいな作りで、器厚は薄く、内面には幅1.5cmのハケ調整が横方向に施されている。No.38・47・107の出土。21は底部を欠損した球脚状の形態。器壁は厚く、外面はハケ調整・ナデ仕上げされている。No.38・40・50・98・107・109の出土で、破片は20とほぼ重なって出土している。第62図1は球脚の甕の口縁部破片。口唇部が外削ぎ様で角頭状となる。胎土は緻密で焼成も良好。外面のハケ調整もよく残り、目のこまかな工具を用いていることが観察できる。ほかの甕形土器とは風化度合いが違っている。埋没土の出土。2～5は第61図20と同様な形態の甕。2はNo.95と埋没土の接合資料で、3と同一個体と観られる。3はNo.57・59と埋没土の接合資料。4はNo.20の出土で、ハケ調整痕を比較的良好に残している。5は床面出土資料とNo.107・108の接合個体で、胴部を欠損している。6～9は21と同様な形態。6はNo.62・75の接合資料で口縁部破片。7はNo.62出土の小型の甕で口縁部の破片。8はNo.45と47の接合個体で胴部を欠損している。ハケ調整の後、全体をナデで仕上げている。9はNo.38・39・107・116・118・119ほか出土の接合個体。口縁部はやや直立気味で、口唇は緩やかにつまみ上げて作られている。胴部過半は縦方向のハケ調整が観察できる。10～12は甕形土器の胴部。10はNo.116出土で口縁部を欠損する。やや長胴化し卵形に近い形態で、底部は丸底である。外面はハケ調整の後、全体をナデ仕上げている。11はNo.63・66・67・102ほかの接合資料で、口縁部を欠失している。底部は小さな平底。第61図

21と同様な作りである。12はNo.11出土。ハケ調整の後、全体をていねいにナデ仕上げしている。胴部上半を欠失。13は一穴の有孔鉢（甌形土器）。14は有段口縁の甌形土器。第65図1～3は打製石鏃である。すべて凹基無茎式鏃で、1と2は黒曜石材、3はチャート材である。縄文時代のものか。4は黒曜石材の石核。打面の転移は90度で、主剥離面には2～3枚の剥片剥離が認められる。5はチャート材の小形刃器か。図の右側には細かな剥離が連続して観られる。6は特殊磨石の1/2欠損例で安山岩材。特殊な型式の石器であり、所属時期は縄文時代早期と観られるか。7は土製の勾玉。外面に赤色粉が付着している。大きさは4.5cm、18.2gが測られる。8は滑石製の小玉で、9・10は管玉。9は滑石製で2.7cm×0.45cm、0.9g。10は緑色凝灰岩製で4.15cm×1.2cm、8.8g。

時期：小型丸底土器は明確に残存（第61図1～6）するものの、小型器台が欠落している。丸底土器の特徴は、口縁部が胴部とほぼ同程度の大きさ、もしくは小さくなる形態である。高環はすべて有段で屈折脚（第61図12～19）であり、外観がツツミ状に近い大型の器台形土器がこれに加わる。裏は球胴で小さな平底、ハケ調整後に全面をナデ仕上げする特徴（第62図11・12）がある。また胴部がやや長胴化し、丸底の形態（第62図10）が出現している。これらの諸特徴から、古墳時代中期初頭（5世紀初頭～前半）にほぼ該当すると考えられる。

S B O 2（第58図、第63図、第65図 P L 24, 27, 28）

位置：XⅡR-22・23

検出：北端は遺跡廃絶後の地形変更のため、検出できなかった。

規模：平面形態はほぼ方形と推定。主軸はN80°W、長軸6.28m。

構造：地山の黄褐色土を床とする明確な硬化部分を確認した。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁に沿って幅約30cmの溝溝が認められる。Pit1、Pit2が主柱穴と推定できる。出入り口は不明。南東隅のPit3では、土器がつぶれた状態で出土し、掘り込みの規模から推定して貯蔵穴のような施設と考えられる。また床面には、焼土、炭化物の集中している箇所が認められ、東西方向に走る溝を1本検出した。その位置関係から間仕切りのような施設の可能性がある。

埋土：黒褐色粘質土。混入物によって2層に分けた。礫が非常に多く、特に下部には人頭大の礫を多く含む。南壁際では地山の黄褐色土のブロックの混入がやや目立った。

遺物出土状況：埋没土上部から土器破片の出土が多い。下部になるほど少なくなり、床直上にはほとんど出土しない。また北東部の埋没土上部より管玉が1点出土している。

遺物：第63図1は高環もしくは小型器台の脚部で体部に穴が4つ穿たれている。遺存状況が悪く調整等の観察はできない。埋没土の出土。2は有段の高環形土器。脚部は緩やかに外側に屈折する形態。埋没土出土。3・4は甕形土器。いずれも風化が著しく、外面の観察は難しい。3は口縁部の破片で、胴部の器壁は薄い作りである。埋没土中の出土。4は口縁が強く外反する形態の口縁部小破片。外面には指頭による圧痕が観られる。台付き甕の口縁の可能性もある。Pit2の出土。5～7は台付き甕。5はPit3のNo.1出土の台付き甕。接合はしないが同一個体と考えられる胴下半部がある。口縁部は強く外反し、外面には縦方向及び斜め方向のハケ調整がていねいに施され、内面はさらにナデによる調整仕上げがなされている。6は5と同様な作りの脚台部の破片。No.2の出土。7と8はS字状の口縁をもつ甕の口縁部小破片。埋没土の出土で、ともにほぼ同様な形態である。第65図11は鉄石英製の管玉。長さ1.85cm×0.3cm、2.5gが測られる。

時期：出土遺物には若干の時期差のある資料が含まれている。小型丸底土器の好例はないが、脚部に穴のある小型の器台（第63図1）がある。また図示していないが、外面をハケ調整するくの字状口

緑の甕があり、S字状口縁の台付き甕（第63図7）に大形で直口口縁の台付き甕（第63図5・6）が加わる。さらには有段の高環も存在している。これらを考慮すると、本跡は概ね古墳時代前期末から中期初頭（4世紀末～5世紀初頭）に所属するものと考えられる。

SB03（第57図、第63図 P L 23, 27）

位置：X II W - 01・02, R - 21・22

検出：SB01に破壊される。北端は遺跡廃絶後の地形改変のため検出できなかった。

規模：平面形態は方形か？SB01と重なり大半が破壊されている。主軸はN75° E。

構造：壁はほぼ垂直に立ち上がる。南東部から東壁に沿って幅約20cmの周溝が認められる。SB01の柱穴として調査したものの中には、本来はSB03に属するものもあると思われるが、その判別はできなかった。出入口、貯蔵穴、炉などは不明。

埋土：黒褐色粘質土の単層。壁際は地山の黄褐色土の細かいブロックの混入がやや多くみられた。

遺物出土状況：埋没土中から多く出土した。

遺物：第63図9～13は高環の脚部。9と10は脚部が「ハ」の字状に開く形態。9の脚裾には沈線様に凹線が一条巡り、有段状となっている。No.8出土。10は内面に輪積み痕を明瞭に留め、径0.5cmの1孔が穿たれている。11と12は棒状に近い形態の脚部破片。11はNo.1出土、12はNo.2出土。13は環部で、口縁部は外傾に接合されている。内面はていねいにナデ成形し平滑化するが、外面の接合部分は意識的に粗雑に残し、有段化している。口縁部は縦方向のハケ調整とナデで仕上げられている。胎土から在地の製作と考えられる。No.4出土。14は有段高環の環部破片。胎土は微密で混入物もほとんどない。環部に口縁を内傾に乗せるように接合し、段部が際立つ良好な作りである。異系統の土器で埋没土よりの出土。図示していないが、丸底で冚形状の小型壺胴部破片1/3個体があり、外面は斜めのハケ調整ナデ仕上げである。No.5の出土。

時期：有段の高環の存在とその形態の多様化、小型丸底土器や小型器台、台付甕等が消滅方向にあると考えると、本跡は古墳時代中期前半（5世紀前半）にあたる。しかしながら、本跡はSB01に破壊されていることから、その時期、古墳時代中期初頭（5世紀初頭～前半）よりも古いことは確実であり、出土遺物には混在も予想される。屈折脚の高環脚部破片（第63図11・12）などは古い様相であり、これらが本跡に所属する資料であろうか。前期前半に位置づけるだけの積極的な根拠は見当たらないことから、SB01と差ほど時期差のない段階、SB02とほぼ同様な時期と考えて、古墳時代前期末から中期初頭（4世紀末～5世紀初頭）と判断しておきたい。

SB04（第57図、第63図 P L 24, 27）

位置：X II K - 15・20, L - 11

検出：土層断面で確認された。北西部分の大半は近現代の水田造成のため壊されて検出できなかった。ST01と重複し、検出状況からSB04の方が古いと判断できた。

規模：平面形態はほぼ方形と推定。主軸はN57° E。

構造：地山の黄褐色土を床とする。南西隅は平坦であるが細かな凹凸や地山の礫の露出がみられ、Pit1から北端に向かい傾斜する。壁は明瞭に確認できた南西側でほぼ垂直に立ち上がる。南西側壁に沿って幅約10cmの周溝がある。Pit1はSB04に伴うものと考えられる。P2ほか直径約20cmの柱穴は本跡に伴わない可能性もある。出入口、貯蔵穴、炉は不明。

埋土：黒褐色粘質土の単層。

遺物出土状況：埋没土から須恵器が出土。Pit1の西側からは手づくね土器が出土している。

遺物：第63図15は手づくね様の小型の丸底土器。底部はケズリ調整されている。口縁部は欠失するが、胴部よりも口縁部高の高い形態となるか。No.1出土。16は埋没土中より出土した須恵器環A類

の口縁部小破片。底部の切り離し手法は欠損のため観察できない。本跡の時期決定等には直接関連はないと考えられる遺物である。

時期：須恵器の混在もあり、本跡の所属時期は不明である。手づくね様の小型丸底土器（第63図15）の出土を積極的に評価すると、古墳時代前期（3世紀後半から4世紀代）と推定できるか。

S B 0 5（第58図 P L 24）

位置：X II L-22

検出：北東部分の大半は調査区外のため調査できていない。ST01との切り合い関係は不明。

規模：平面形態はほぼ方形と推定。主軸はN87°W。

構造：地山を床面とし、全体的にほぼ平坦だが、細かな凹凸や地山の礫の露出が所々に見られる。壁は明瞭に確認されたが、耕作により上部は削平されている。南壁に沿って幅約10～15cmの狭い周溝がある。掘り方を検出できたが、柱穴、出入口、貯蔵穴、炉は確認できなかった。

埋土：黒褐色粘質土の単層。

遺物出土状況：埋土中より土器小破片が出土している。

時期：時期不明。

②掘立柱建物跡（ST）

ST 0 1（第59図 P L 24）

位置：X II K-15、L-11

規模：確認された柱穴が2基のため、全体の規模形状は不明である。近現代の水田造成で削平された調査区北端側と東側調査区外に柱穴が続いていたと想定され、東西方向に長軸をもつ建物と考えられる。柱間は約1m50cmが測られる。

形態：柱穴の平面形態は方形で、断面観察より柱痕が確認された。

遺物：出土遺物はなし。

時期：古墳時代か。

ST 0 2（第59図 P L 24）

位置：X II L-21・22

規模：7基の柱穴を確認した。長軸の北東側は近現代の水田造成で削平されて消失している。

形態：東西方向に長軸をもつ。検出した柱穴から考えると、現況で1間×5間（400cm×850cm）と長大である。Pit3とPit6には礎石であろうか、板状の石が出土している。

遺物：出土遺物はなし。

時期：古墳時代か。

③土坑（SK）

SK 0 1（第60図、第63図 P L 24、27）

位置：X II W-18・19

規模：平面形態はやや不整形な楕円形。長軸98cm、短軸85cm、深さ21cm。

埋土：黒褐色粘質土。焼土粒子、地山の黄褐色土粒子を少量含む。埋土中には人頭大の礫、底部には小礫を確認した。

構造：断面は浅いタライ状。土器の出土状況から、墓などの機能を考えることができるか。

遺物出土状況：甕形土器の大形破片ほかが多出している。

遺物：第63図17・18は甕形土器。ともに大形品で胴張りの形態。外面は幅1.5cmほどの櫛歯状の工具で波状文及び横線文を施す。17の頸部には上下2段に重ねて横線文を描いている。No.4・6・8の出土。18は口縁外面に縦方向のハケ調整を施し、その後、同じ工具を用いて櫛歯波状文

と頸部の横線文を描いている。口縁部と胴部はやや角度をもって接合する。No.10・11・15～17・20～25・29 出土の接合資料。

時期：弥生時代後期後半（5段階相当か）

SK20（第60図、第63図 P L 25, 28）

位置：XⅡV-15, W-11

規模：平面形態は楕円形。長軸69cm、短軸50cm、深さ-19cm。

埋土：黒褐色粘質土。地山のにぶい黄褐色土粒子を含む。

構造：タライ状の断面で掘り込みは浅い。

遺物出土状況：検出時に赤彩された土器の破片が集中して出土した。

遺物：第63図19は椀形高環の坏部破片。内外面赤色塗彩される。

時期：弥生時代後期。

SK35（第60図、第64図 P L 25, 28）

位置：XⅡV-20, W-16

規模：平面形態は楕円形。長軸106cm、短軸92cm、深さ-37cm。

埋土：黒褐色粘質土。地山のにぶい黄褐色土の含有差で3層に分層した。

構造：断面形はロウト状である。

遺物出土状況：南壁側の中段に土器破片が集中して出土した。

遺物：第64図1は器台の受け部。受け部は有段状に屈折して口縁が外反する。胎土は密微で精錬された作りであることから外来系であろうか。2は壺の口縁部破片。口唇の端部は面取り様で角頭状を呈する。3と4は甕形土器。3は口縁が「くの字」状に強く外反する球胴形の甕。4は外面に横方向のハケ調整がある。No.1 出土。

時期：有段の器台とハケ調整で「くの字」口縁をもつ球胴甕の存在から、本跡は古墳時代前期前半（3世紀代）と考えられるか。

④溝跡（SD）

SD01（第51図、第64・65図 P L 25, 28）

位置：XⅡV-04・05・09・10, W-01

検出：表土を削除した結果、調査区を南北に長く伸びる黒色土の落ち込みを確認した。慎重に埋没土を掘り下げたが、複数の遺構が重なりあったような状況は見られず、溝状の遺構あるいは土砂の押し出し、埋没流路等を想定し調査を行った。

規模：長さ約20m×幅約7m。

構造：埋没土は単純な自然堆積であり、人工的な掘削痕跡が認められない。調査状況から判断して降雨等に起因する一時的な流路（土砂の押し出し）である可能性を考えておく。

遺物出土状況：埋土中より、小さな土器片（弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて）が大量に出土した。大半の破片は全体が軽度で磨耗しているが、流水の激しい押し出し等の結果とは考えられない。一時的な流路であっても遺物の大きな流下はなかったものと考えられる。

遺物：第64図5は器台の脚部。裾部がスカート状に広がる形態で1孔がある。焼成良好でXⅡV-05より出土している。6～8は高環。6は有段高環の坏部破片。外面は横方向のナデ調整仕上げ。7は脚部片。6・7ともにXⅡV-05の出土。8は脚部が「ハの字」形に開く形態の有段高環で、XⅡV-09の出土。9は口縁部が外反する鉢で2/3程度の破片個体。丸底で底部はケズリ成形している。内外面とも風化が激しい。XⅡV-09出土。10と11は甕の口縁部破片。

11はNo.18の出土。第65図13は黒曜石材の凹基無茎式鎌。14は珪質の凝灰岩材で主剥離面側に研磨痕がある。剥片の縁部には剥離加工が認められることから、石器製作の途中品であろう。器種は判別できない。15は凹石。やや多孔質の安山岩材で、表面にはロウト状の大きな凹みがあり、裏面にはアバタ状の敲打部が観察できる。

時期：図示した器台や屈折脚の有段高環などの存在から、古墳時代前期前半（4世紀前後）と考えられるが、埋没流路の可能性から遺物は数時期のものが混在する。

SD03（第60図 P.L.25）

位置：XⅡV-15

規模：幅約15cm、深さ約5cm。東西方向に伸びて東端でやや北に曲がる。西端は調査区外に伸びるため全体の規模は不明である。

埋土：黒褐色粘質土の単層。

構造：隣接遺構にSK21～SK31、SD04がある。現地形において段々畑の畑間の傾斜地に位置するため、上面を削平されてしまった竪穴住居跡の残骸部分の可能性も考えられる。

遺物出土状況：図示できる程度の遺物の出土はない。

時期：不明。

SD04（第60図 P.L.25）

位置：XⅡV-15

規模：幅約45cm、深さ約20cm。西端は調査区外にのびるため全体の規模は不明である。

埋土：黒褐色粘質土の単層。

構造：隣接遺構にSK21～SK31、SD03がある。検出状況はSD03とほぼ同様である。

遺物出土状況：図示できる程度の遺物の出土はない。

時期：不明。

⑤遺構外出土遺物

位置：XⅡV-15、旧SD02及びSD01検出面を含む（第64・65図、P.L.28）

出土遺物：第64図12～15は屈折脚の高環。12は図示した正面と裏面に穴が穿たれている。XⅡV-08の出土。13は有段で脚部が「ハの字」形に開く形態。14と15は脚部破片。14は脚部折部分内面に接合痕を明瞭に留めている。XⅡV-09出土。15はXⅡV-08出土。16～21までは甕形土器の口縁部。16は内外面に細かなハケ調整がなされ、さらに口縁の内面はミガキ仕上げされている。台付き甕であろうか。XⅡV-08の出土。17～19は口縁部が強く外反する「く」の字の口縁部破片。17は外面がやや幅太のハケ調整が施されている。口縁「く」の字に外反し、口唇部が外折する形態。外面には細かなハケ調整が施されている。20はナデ調整の小型の甕形土器。体部下半を欠失するがハケ調整が施されているようである。21は折り返し口縁の甕形土器で口縁部の小破片である。22・23は有段口縁の甕形土器口縁部の破片。22は口唇部が外削状に仕上げられている。23は厚手の口縁部で、有段部は外傾に接合している。口縁の反りが強く傾く形態で古墳時代前期の古手か。内面はよくミガキ調整されている。24は甕の口縁部破片。風化が激しいが外面にハケ調整がわずかに認められる。25は須恵器高環の脚部破片。XⅡV-10、検出面の出土。26は須恵器環B類。底部は回転ヘラケズリ手法で、高台は低く外面接地である。検出面近くより出土。27・28は弥生時代後期の土器。27は台付き甕の口縁部破片。XⅡV-09の出土。28は甕形土器の頸部破片。第65図16は1穴式の磨製石包丁完形品。刃部は片刃で使用による摩耗が著しい。頁岩材か。8.5cm×3.25cm×0.8cm、重さ34.3gが

測られる。17は磨製石包丁の未製品と観られるが研磨痕跡はない。頁岩材で半欠品、XⅡV-09出土。18は片側に原礫面を残す大形の刃器と考えられる。小型の打製石斧の可能性もあるが、図の左側側面が機能部と考えたい。19は有溝の石錘。敲打により溝を作出している。安山岩材で207.4g、XⅡV-08出土。20は打欠の石錘でXⅡV-08の出土。安山岩材で242gが量られる。21～23は鉄製の刀子と考えられ、いずれも欠損例である。21はXⅡV-10の出土、22と23はトレンチよりの出土例である。

4. 小 結

西中曽根遺跡は、高雄山山塊の東麓、千曲川に向けて押し出された娵捨土石流堆積物上の末端に位置する。標高388.5mほどの丘陵状先端の高位部と376.6mの低位部からなる。古墳時代前期末から中期初頭に中心をもつ集落遺跡である。出土遺物（土器）から判断される所属時期の段階は、古墳時代前期初頭にあたる古墳1期1段階（註2）と、前期末から中期初頭の古墳2期3段階にほぼ相当している。長野市石川糸里遺跡の中心的時期である古墳2期2段階は本遺跡で確認できないことから、竪穴住居跡を中核とする居住空間の形成が古墳2期3段階に限られて設置されたものと考えられる。調査区内で確認された遺構は、住居跡が5軒、掘立柱建物跡が2棟、溝跡3本、土坑45基がある。

A. 集落の構造について

遺構は掘り方深度の深いものを除き、大部分が近現代の可耕地化により削平を受け、遺存状態は良好ではない。数少ない竪穴住居跡も、その大半が部分的な検出に留まり、全体の形状をつかむことのできる例は皆無である。このような状況下で遺跡の歴史的な評価を与えることは極めて困難であり、記録保存した限定的な資料より、集落像の概要をまとめるに留めたい。

①遺構数と推定された所属時期

- 弥生後期後半・・・・・・・・土坑2基（SK01・SK20）
- 古墳時代前期初頭・・・・・・・・土坑1基（SK35）
- 古墳時代前期末～中期初頭・竪穴住居跡4軒（SB01～SB04）
- 不明・・・・・・・・竪穴住居跡1軒（SB05）、掘立柱建物跡2棟（ST01・ST02）、土坑42基

②集落の構造解釈

- 弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭

長野盆地を中心とした善光寺平南部の弥生式土器編年は、後期を5段階から6段階に区分している（註4）。西中曽根遺跡で検出した遺構・遺物は、出土土器の特徴より後期の5段階前後と判断できる。遺構は土坑が2基（SK01・SK20）検出されたのみで、住居跡はまったく確認できていない。遺物も土坑内の出土を除くと出土数は極めて少ない。居住施設を伴う該期の集落遺跡は、宝録沢川を隔てた東側対岸の東中曽根遺跡で確認されている。宝録沢川は川底との比高差が3～4mほどあるV字状の深い沢ではあるが、川幅は5～6mほどで、簡易な架橋で渡河は十分可能となる。本跡で検出した土坑が、東中曽根遺跡の居住区に関連した施設である可能性は高い。東中曽根遺跡の集落機能の一端を担う、何らかの機能が、これらの土坑であると考えたい。土坑の規模や形状から、貯蔵穴あるいは墓穴等の施設を想定できるか。SK01からは大形の甕の胴部上半が2点（第63図17と18）出土しており、これを土器棺の残骸と考えると、墓跡の可能性がある。

弥生時代後期の様子は、古墳前期初頭にも当てはめて考えることができる。該期の遺構も土坑（SK35）が1基のみ検出されている。ハケ調整の球胴甕（第64図4）や小型の器台（第64図1）がある。深さのあるサラダボール形の土坑で、やはり施設の機能としては、貯蔵穴や墓穴等を想定できるか。ただし、本跡の東に位置する東中曽根遺跡の調査区内にも、該期の居住施設は確認できていないので、今回の記録

保存の対象地外にその存在する可能性がある。

○古墳時代前期末から中期初頭

遺跡は丘陵先端の高位部と低地付近の低位部に位置し、埋蔵文化財包蔵地としては連続している。本跡で確認された竪穴住居跡5軒（SB05は不明扱いではあるが）は、すべてが古墳時代前期末から中期初頭に所属すると考えられるが、住居跡間に重複関係があり、少なくとも2段階にわたる時間差を想定する必要がある。しかしながら、前述した遺構の遺存状況等の諸条件により、この段階差を時期差として明確に位置づけることはできなかった。低位部で検出した掘立柱建物跡の所属時期も不明で、ST02がSB04を破壊して構築されていること、ST01とSB05にも切り合い関係が存在することから、竪穴住居跡と掘立柱建物跡との関係においても構築段階の差はある。極少量の遺構内出土資料を補完する目的で、調査区内出土遺物も検討した結果、調査区全体の出土遺物の中心的時期は、古墳時代前期末から中期初頭、石川条里遺跡の古墳時代2期3段階、屋代遺跡群の古墳時代3期末から4期にほぼ該当している。良好な出土資料のあるSB01の所属年代は、概ね古墳時代中期初頭（5世紀初頭～前半）と判断できるので、これに破壊されたSB03はそれ以前の4世紀末～5世紀初頭ころ、古墳時代中期に限りなく近い時期と考えられる。SB02及びSB04は、出土土器の特徴よりSB03と同じ段階と判断できるか。時期決定の難しいSB05は、SB03あるいはSB01のいずれかと同時期である可能性が高い。ST01はSB04（4世紀末～5世紀初頭）よりも後出の可能性があり、やはりSB01と同じ時期ないしはそれ以降である。ST01とST02の時期は古墳時代以外の古代に所属する可能性がまったくないわけではなく、掘立柱建物跡の位置付けには注意が必要である。

以上の思考経過から、西中曽根遺跡で検出された遺構をもとに集落跡を捉えてみると、4世紀末～5世紀初頭に2～3棟の竪穴住居が、ひとつの生活の単位を構成し、それが高位部に1か所、低位部に1か所（このほかに数単位が存在する可能性もあるが）設置されて、集落を構成したものと考えられる。その後、さほどの時期を経ることなく5世紀初頭～前半の時期に、高位部において住居が継続し、低位部には倉庫（掘立柱建物）が構築されたと考えられることができるか。あるいは低位部にある倉庫の設置段階に時期差を設けて、各時期に1棟ずつの倉庫の配置を考えてみることも可能である。いずれにしても、今回の発掘調査で記録保存された西中曽根遺跡は、生産的共同体の単位を構成する最小の生活単位を確認したに留まり、共同体単位的全貌を推測するまでには至らなかった。同じ遺跡包蔵地内で括られた高位部と低位部の生活の単位は、果たして同一の共同体単位として捉えてよいのか。居住地の立地的な差異を現代的な視覚で同一視するには少々違和感が残る。このことは、次節で述べる東中曽根遺跡と外西川原遺跡（註5）との関係においても課題のひとつであり、当該地域の遺跡構造を評価する上での重要な研究課題である。

註3) 1977年『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15 - 長野市内その3 - 石川条里遺跡』日本道路公団名古屋建設局 長野県教育委員会（財）長野県埋蔵文化財センター

4) 1999年 99シンポジウム『長野県の弥生土器編年』長野県考古学会 弥生部会

5) 1990年『外西川原遺跡』更埴市教育委員会

第8表 西中曽根遺跡 土器観察表

図版No	写真No	遺構名	取り上げNo	器種	部位	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面色調	備考
第61図1	PL26	S801	No.9	小型丸底	口縁部～底部	ほぼ完形	8.0	—	7.6	7.5YR7/3にぶい橙	
第61図2	PL26	S801	No.96	小型丸底	頸部～底部	70%	—	1.7	(5.3)	5YR6/6橙	
第61図3	PL26	S801		小型丸底	口縁部～底部	50%	<7.6>	—	9.7	7.5YR6/4にぶい橙	
第61図4	PL26	S801	No.31	小型丸底	頸部～底部	40%	—	—	(6.3)	5YR7/4にぶい橙	
第61図5	PL26	S801		小型丸底	頸部～底部	40%	—	—	(6.7)	10R5/8赤	
第61図6		S801		小型丸底	口縁部	10%	11.4	—	(4.2)	2.5YR5/6明赤橙	
第61図7	PL26	S801	No.85	小型丸底	胴部～底部	40%	—	—	(10.2)	7.5YR7/3にぶい橙	
第61図8	PL26	S801	No.77	鉢	口縁部～底部	80%	<8.9>	—	6.1	5YR6/4にぶい橙	
第61図9	PL26	S801	No.109・110	器台	坯部～裾部	ほぼ完形	14.0	11.6	11.7	7.5YR8/4浅黄橙	
第61図10	PL26	S801	No.125	器台	脚部～裾部	脚部ほぼ完形	—	11.4	(6.8)	7.5YR7/2明褐灰	
第61図11	PL26	S801	No.114・115・117・118	器台	坯部～裾部	70%	<18.5>	13.5	13.8	2.5YR6/6橙	
第61図12	PL26	S801		高坏	坯部～裾部	40%	<19.6>	<13.4>	<14.2>	2.5YR6/6橙	
第61図13	PL26	S801	No.12	高坏	坯部～脚部	40%	<19.0>	—	(14.5)	7.5YR7/3にぶい橙	
第61図14	PL26	S801	No.58	高坏	脚部～裾部	脚部80%	—	<14.4>	(8.9)	7.5YR7/3にぶい橙	
第61図15		S801	No.37	高坏	坯部	坯部70%	17.8	—	(4.7)	7.5YR7/3にぶい橙	
第61図16		S801	No.27	高坏	坯部	坯部80%	18.4	—	(4.2)	7.5YR8/4浅黄橙	
第61図17	PL26	S801		高坏	坯部～脚部	70%	18.8	—	(14.3)	5YR6/6橙	
第61図18	PL26	S801	No.4	高坏	坯部	坯部60%	18.9	—	(4.9)	5YR6/6橙	
第61図19		S801	No.122・133	高坏	坯部	坯部20%	<21.4>	—	(5.3)	5YR7/4にぶい橙	
第61図20	PL26	S801	No.38・47・107	甕	口縁部～胴部	60%	16.2	—	(24.8)	7.5YR7/3にぶい橙	
第61図21	PL26	S801	No.38・40・50・98・107・109	甕	口縁部～胴部	40%	<16.8>	—	(27.3)	7.5YR7/4にぶい橙	
第62図1		S801		甕	口縁部～胴部	10%	<15.0>	—	(7.4)	5YR6/6橙	
第62図2		S801	No.95	甕	口縁部	10%	<16.6>	—	(3.6)	5YR5/6明赤橙	
第62図3		S801	No.57・59	甕	胴部～底部	10%	—	5.2	(7.0)	5YR6/6橙	
第62図4	PL26	S801	No.20	甕	口縁部～胴部	10%	15.6	—	(8.2)	2.5YR6/6橙	
第62図5		S801	No.107・108	甕	口縁部～胴部	10%	19.2	—	(5.7)	5YR6/6橙	
第62図6	PL26	S801	No.62・75	甕	口縁部～胴部	10%	<16.6>	—	(5.5)	5YR6/4にぶい橙	
第62図7		S801	No.62	甕	口縁部～胴部	10%	<12.8>	—	(8.0)	10YR8/3浅黄橙	
第62図8	PL27	S801	No.45・47	甕	口縁部～胴部	10%	<17.0>	—	(12.4)	5YR5/6明赤橙	
第62図9	PL27	S801	No.38・39・107・116・118・119	甕	口縁部～胴部	30%	<16.6>	—	(20.2)	5YR6/4にぶい橙	
第62図10	PL27	S801	No.116	甕	胴部～底部	30%	—	—	(19.2)	7.5YR6/3にぶい橙	
第62図11		S801	No.63・66・67・102	甕	胴部～底部	30%	—	4.7	(24.6)	2.5YR5/4にぶい赤橙	
第62図12	PL27	S801	No.11	甕	胴部～底部	20%	—	4.0	(12.8)	7.5YR6/4にぶい橙	
第62図13		S801		有孔鉢	底部	10%	—	<7.4>	(3.0)	5YR5/3にぶい赤橙	
第62図14		S801		壺	口縁部～胴部	10%	<20.2>	—	(6.8)	5YR7/6橙	
第63図1	PL27	S802		高坏	脚部～裾部	脚部50%	—	12.0	(6.2)	2.5YR6/4にぶい橙	器台?
第63図2		S802		高坏	坯部	坯部30%	<16.8>	—	(6.4)	5YR6/4にぶい橙	
第63図3	PL27	S802		甕	口縁部～胴部	10%	<12.8>	—	(10.0)	7.5YR7/4にぶい橙	
第63図4	PL27	S802 P2		甕	口縁部～胴部	10%	<11.6>	—	(3.8)	2.5YR5/4にぶい赤橙	
第63図5	PL27	S802 P2	No.1	台付き甕	口縁部～胴部	10%	<15.2>	—	(5.8)	5YR5/3にぶい赤橙	
第63図6	PL27	S802	No.2	台付き甕	脚部～裾部	脚部90%	—	9.0	(4.3)	5YR6/6橙	
第63図7	PL27	S802		台付き甕	口縁部～胴部	20%	<10.6>	—	(3.7)	7.5YR7/4にぶい橙	
第63図8		S802		甕	口縁部～胴部	10%	<11.8>	—	(3.4)	10YR7/4にぶい黄橙	
第63図9	PL27	S803	No.8	高坏	脚部	脚部50%	—	—	(10.3)	7.5YR7/3にぶい橙	
第63図10	PL27	S803		高坏	脚部	脚部70%	—	—	(7.6)	7.5YR6/6橙	
第63図11		S803	No.1	高坏	脚部	脚部70%	—	—	(9.0)	7.5YR6/6橙	
第63図12		S803	No.2	高坏	坯部～脚部	脚部40%	—	—	(9.0)	2.5YR5/8明赤橙	
第63図13		S803	No.4	高坏	坯部	坯部30%	<17.8>	—	(7.4)	7.5YR8/4浅黄橙	
第63図14		S803	No.5	高坏	坯部	坯部10%	<22.0>	—	(3.9)	5YR6/6橙	
第63図15	PL27	S804	No.1	手づくわ小型丸底	胴部～底部	80%	—	—	(3.7)	7.5YR7/6橙	
第63図16		S804		須恵器坏	口縁部～底部	10%	<11.8>	<7.6>	2.5	N7/灰白	
第63図17	PL27	SK01	No.4・6・8	甕	口縁部～胴部	10%	<27.4>	—	(17.7)	7.5YR6/4にぶい橙	
第63図18	PL27	SK01	No.10・11・15・16・17・20～25・29	甕	口縁部～胴部	40%	<25.4>	—	(30.2)	7.5YR6/4にぶい橙	
第63図19	PL28	SK20		高坏	口縁部～胴部	10%	<21.4>	—	(8.3)	2.5YR6/6橙	
第64図1	PL28	SK35		器台	受部	40%	<10.8>	—	(2.7)	5YR7/6橙	
第64図2		SK35		甕	口縁部	10%	<14.6>	—	(4.3)	5YR6/6橙	

第2章 発掘調査の概要

図版No	写真No	遺構名	取り上げNo	器種	部位	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面色調	備考
第64図3	PL28 SK35			甕	口縁部～胴部	10%	<16.4>	—	(5.5)	5YR7/3 にぶい橙	
第64図4	PL28 SK35	No 1		甕	口縁部～底部	50%	14.8	8.6	24.8	5YR5/6 明赤褐	
第64図5	SD01			器台	脚部～裾部	脚部40%	—	—	(8.2)	5YR7/6 橙	
第64図6	SD01			高坏	坏部	坏部50%	<15.4>	—	(4.0)	5YR7/6 橙	
第64図7	SD01			高坏	脚部	脚部60%	—	—	(8.6)	5YR6/6 橙	
第64図8	SD01			高坏	坏部～脚部	40%	<16.4>	—	(10.0)	5YR7/6 橙	
第64図9	PL28 SD01			鉢	口縁部～底部	30%	<11.6>	—	8.0	5YR6/6 橙	
第64図10	SD01			甕	口縁部～胴部	10%	<13.8>	—	(6.2)	5YR6/6 橙	
第64図11	SD01	No 18		甕	口縁部～胴部	10%	<16.8>	—	(5.3)	7.5YR7/4 にぶい橙	
第64図12	XI V08			高坏	坏部～脚部	60%	—	—	(8.9)	5YR6/6 橙	
第64図13	PL28 XI V08			高坏	坏部～脚部	20%	—	—	(9.2)	5YR7/6 橙	
第64図14	XI V09			高坏	脚部～裾部	20%	—	(14.0)	(3.9)	5YR6/6 橙	
第64図15	XI V08			高坏	脚部～裾部	10%	—	<11.4>	(3.6)	5YR6/4 にぶい橙	
第64図16	XI V08			甕	口縁部～胴部	10%	<14.8>	—	(4.9)	5YR5/4 にぶい赤褐	
第64図17	XI W10			甕	口縁部～胴部	10%	<18.4>	—	(6.8)	5YR7/6 橙	
第64図18	XI W10			甕	口縁部～胴部	10%	<16.2>	—	(7.0)	5YR6/6 橙	
第64図19	XI W10			甕	口縁部～胴部	10%	<15.4>	—	(5.0)	5YR6/4 にぶい橙	
第64図20	PL28 XI W10			甕	口縁部～胴部	10%	<10.8>	—	(5.2)	7.5YR7/4 にぶい橙	
第64図21	PL28 XI W10			甕	口縁部	10%	<12.8>	—	(3.3)	7.5YR7/3 にぶい橙	
第64図22	XI W10			甕	口縁部	10%	<21.0>	—	(5.7)	5YR7/6 橙	
第64図23	PL28 XI W10			甕	口縁部	10%	<23.2>	—	(5.0)	7.5YR6/6 橙	
第64図24	XI W10			甕	口縁部～胴部	10%	<15.4>	—	(6.3)	5YR6/6 橙	
第64図25	PL28 XI W10			須恵器高坏	脚部～裾部	10%	—	<10.4>	(2.1)	5G2/1 緑黒	
第64図26	PL28 XI V09			須恵器坏 B	胴部～高台	40%	—	<8.5>	(3.1)	N 7/0 灰白	
第64図27	XI V09			台付き甕	口縁部～胴部	10%	<12.4>	—	(5.0)	5YR6/3 にぶい橙	
第64図28	XI V09			甕	胴部	10%	—	—	(11.3)	5YR6/3 にぶい橙	

第9表 西中曽根遺跡 土製品観察表

図版No	写真No	遺構名	取上げNo	遺物名称	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	高さ (mm)	重さ (g)	備考
第65図7	PL28 S801 P13			勾玉	土	45.0	18.0	21.0	18.2	

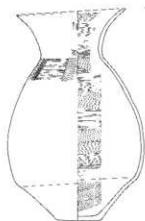
第10表 西中曽根遺跡 石器観察表

図版No	写真No	遺構名	取上げNo	遺物名称	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	高さ (mm)	重さ (g)	備考	
第65図1	PL28 S801	トレンチ (SE)		石鏃	黒曜石	29.0	17.0	5.0	1.9	・打製	
第65図2	PL28 S801		石器No 2	石鏃	黒曜石	20.0	15.0	4.5	0.9	・打製	
第65図3	PL28 XI W01 (NW)	S801 覆土		石器No 1	石鏃	チャート	17.5	8.0	3.0	0.4	・打製
第65図4	PL28 XI W01 (NW)	S801 覆土			石核	黒曜石	32.0	25.0	16.0	8.7	
第65図5	PL28 S801	トレンチ (SE)		刃鏃	チャート	60.0	42.0	10.8	32.2		
第65図6	PL28 S801	トレンチ (SW)		特殊磨石	安山岩	98.0	69.0	49.0	482.9		
第65図8	PL28 S801	埋土 (NE)		白玉	滑石?	5.0	5.0	1.0	—		
第65図9	PL28 S801	トレンチ (SE)		碧玉	滑石	27.0	4.5	4.0	0.9		
第65図10	PL28 S801	床下	No 7	碧玉	緑色凝灰岩	41.5	12.0	12.0	8.8	・No 1 と接合	
第65図11	PL28 S802	埋土 (NE)		碧玉	鉄石炭	18.5	3.0	2.5	2.5		
第65図12	PL28 SK39	2段目		砥石	安山岩	112.0	75.0	35.0	461.6		
第65図13	PL28 XI V05	SD01 埋土		石鏃	黒曜石	24.0	16.5	3.0	0.8	・打製	
第65図14	PL28 XI V09	SD01 検出面		不明	珪質凝灰岩	83.5	42.5	13.0	57.1		
第65図15	PL28 XI V09	SD01 検出面	No 1	凹石	安山岩	139.0	107.0	64.0	952.0		
第65図16	PL28 XI V09	包含層		磨製石包丁	頁岩	85.0	32.5	8.0	34.3		
第65図17	PL28 XI V09	6層		磨製石包丁	頁岩	102.0	50.5	16.0	123.2	・未製品	
第65図18	PL28 3段目	6層黒色土		刃鏃	珪岩	106.5	47.0	19.5	72.2		
第65図19	PL28 XI V08	包含層		石鏃	安山岩	68.5	65.0	44.0	207.4		
第65図20	PL28 XI V08	包含層		石鏃	安山岩	89.0	87.0	24.0	242.0		

第11表 西中曽根遺跡 金属器観察表

図版No	写真No	遺構名	取上げNo	遺物名称	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	高さ (mm)	重さ (g)	備考
第65図21	XI V10	検出面		刀子	鉄	31.0	24.6	7.0	7.7	・2点-1
第65図22	トレンチ (SE)	破片		刀子	鉄	35.5	23.6	10.0	16.9	・大1・中2・小13・細多数
第65図23	トレンチ (SE)			刀子	鉄	39.0	21.0	8.0	6.9	・2点-2

(3) 東中曾根遺跡の調査



- 遺跡の種類：集落遺跡
- 主な時代：弥生時代後期後半～終末（2世紀後半～）
古墳時代前期前半（～3世紀）
- 遺跡の性格：
 - ・弥生時代後期後半に集落がつくられ、古墳時代前期前半には、居住域を移して集落が営まれる。

(3) 東中曽根遺跡の調査

1. 調査の概要

(1) 調査期間

本発掘調査・・・平成14年4月22日～12月16日

(試掘調査：平成13年12月20日、工事立会調査：平成19年2月14日)

(2) 調査面積

5,146㎡

(3) 調査担当

本発掘調査・・・寺内貴美子 豊田義幸

(試掘調査：町田勝則 上田典男、工事立会調査：岡村秀雄 小林秀行)

2. 遺跡の概要

(1) 立地

東中曽根遺跡は長野盆地南部の千曲市八幡に位置する。千曲高原面をつくる旧崩積土(約10万年前)の再移動による土石流堆積物で形成された押し出し地形の末端部で、標高381m～399mにある。千曲高原面を開析している谷頭を頂点として北東方向に扇状に広がり、遺跡の北側を流れる宮川付近からは比高10mと佐野川扇状地上の八幡遺跡群からは一段高い位置にある。基盤となる土石流堆積物は新期挾捨土石流堆積物(3,250±260年前¹⁴C)に属し、淘汰の悪い安山岩(三峯火山岩)の垂円礫から垂円礫を多量に含み、基質は砂質の泥や粘土である。

(2) a 遺跡の範囲と調査区

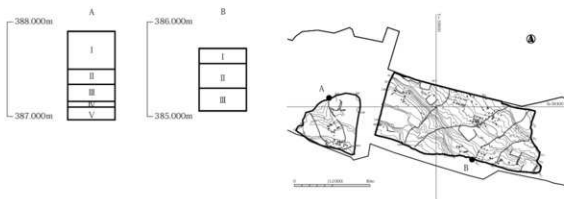
東中曽根遺跡は、古墳時代から平安時代の集落遺跡として千曲市遺跡分布図(89)に記載され、既知の調査事例はない(※附)。遺跡周知化の範囲は、字切り図に示された東中曽根地籍の北側1/2程度で、今回の道路新設事業で周知化された範囲の中央部分が記録保存の対象となった。しかしながら、遺跡現況は階段状に整地された畑地であり、旧地形は大幅に変更されている。発掘に伴う調査区壁の崩落や土砂の流失に配慮し、安全帯及び安全勾配を確保し調査を行った。

b 基本層序(第5図)

調査時の現況は畑もしくは水田である。調査の結果、基本層序を以下のとおり確認した。Ⅰ層は10YR5/2 灰黄褐色土で現耕作土である。Ⅱ層は10YR3/3 暗褐色土で旧耕作土である。Ⅲ層は10YR2/2～4/4 黒褐色～褐色の砂質粘土で、礫を多く含む場所もある。遺物包含層である。Ⅳ層は10YR3/4 暗褐色土で、Ⅲ層とⅤ層の漸移層である。Ⅴ層は10YR4/3 にぶい黄褐色土で地山となる。

(3) 調査結果

発掘の結果、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半にかけての集落跡を確認した。記録保存した遺構は、竪穴住居跡13軒、掘立柱建物跡4棟、溝跡7本、土坑135基で、出土遺物は土器コンテナ111箱・土製品1点、石器68点、金属製品48点がある。調査の結果、集落は概ね2つの時期に区分して考えることができた。ひとつは弥生時代後期後半で善光寺平の弥生式土器編年が示す5段階(2世紀ころ)にあたる。もうひとつは弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭、善光寺平の弥生後期土器の6段階ないしは古墳時代1期の1段階(3世紀ころ)である。まさに弥生時代の終わりから古墳時代の幕開けの時期に該当している。この間はおよそ50年から100年と見積もることができ、それぞれの集落の時期は長くて50年ぐらいいったと判断できる。出土土器の様相及び集落の構造的な評価に関しては、4. 小結に記す。



第5図 東中曽根遺跡 土層柱状図

3. 遺構と遺物

① 竪穴住居跡 (SB)

SB01 (第80図 P L 30)

位置: XⅢD-14・15

検出: SD02の検出を進めたところ、それと類似するが色調等が若干異なる黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みの形状が方形状を呈することから、住居跡を想定し調査に入る。

規模: 隅丸長方形か?

埋土: 2層に区分でき、上層の1層は黒褐色土、2層は床下の土層で明黄褐色土。

構造: 東側の約半分程度は、遺跡廃絶後の耕地化により削平を受け消失している。このため、竪跡や主柱穴数等、不明な部分がある。壁高は10cmほどが遺存し、床面はやや不明瞭。柱穴は11基が確認でき、Pit2及びPit3が主柱穴と考えられる。Pit7～10は断面を図示していないが、いずれも深さが浅く、-3cm～-7cm程度である。

遺物出土状況: 床面より弥生土器と考えられる小破片が少量出土した。

遺物: 時期決定できる遺物がほとんどないため、所属時期は不明。

時期: 不明(他の遺構の所属時期から推定して、弥生時代後期～古墳時代前期ころか)。

SB02 (第80図、第95図 P L 30, 38)

位置: XⅡX-23・24、XⅢD-03・04

検出: 表土掘削の後、方形状に広がると観られる黒褐色土の落ち込みを確認、住居跡を想定し調査に入る。結果、方形状の落ち込みの西側は、遺跡廃絶後と考えられるかく乱により大きく破壊され、東側の遺存箇所は大小2つの遺構が重複していることが判明した。大きな遺構を本跡SB02とし、小さなものをSB03と仮称し調査に入る。

規模: 隅丸方形か?

埋土: 埋没土は黒褐色土1層の単純堆積。2層は床下の土層で明黄褐色土。

構造: 北西側の大半が耕地化により削平を受け消失している。竪跡や主柱穴数等は不明。壁高は10cmほどが遺存。床面は東側に貼床面がわずかに残る。柱穴は6基を確認し、Pit3及びPit5を主柱穴として調査した。本跡がSB03を破壊して構築されている。

遺物出土状況: 床面より弥生土器と考えられる破片が少量出土した。

遺物: 時期決定できる遺物がほとんどないため、所属時期は不明。ただし住居跡の重複関係からSB03よりも新しいと判断できる。第95図1は珪質岩の磨石。石槌様で長軸の下面を利用したものと考えられる。機能面は鏡面のようにツルツルし光沢がある。

時期: 不明(SB03との切り合い関係から、弥生時代後期～古墳時代前期の可能性が高い)。

SB03 (第80図、第89図 P L 30, 34)

位置：XⅡX-23・24、XⅢD-3・4

検出：SB02と同時に確認した。重複関係があることから土層観察を先行して行った結果、本跡をSB02が破壊していることが解った。SB02を完掘した後、本跡の調査に入る。

規模：隅丸方形か？

埋土：黒褐色土の単純堆積。

構造：西側の大部分はSB02により破壊される。このために、Pit2～4は全体の半分程度が残り、周溝は東側部分がわずかに残るに留まる。床面は比較的礫の混入が多く、東側に貼り床と考えられる硬化面が認められた。確認した柱穴は6基あるが、主柱穴は不明。

遺物出土状況：Pit5は確認時に人頭大の礫を検出し、これを取り除くと高坪（第89図1）が破片の状態までとまって出土した。

遺物：床面近くより古墳時代前期の壺形土器破片及び弥生時代後期の壺形土器、甕形土器の破片が出土した。第89図1は弥生後期の椀形口縁の高環形土器で、ほぼ完全になる個体。脚が短く裾部が外にやや開く形態。Pit5のNo.1の礫下部から出土した。

時期：高環の特徴から弥生後期後半（4段階～6段階）ころと考えられる。ただし床面出土の壺形土器には弥生以後、古墳時代前期前半ころに比定できる資料があり、所属時期に開きがある。弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭と考えておく。

SB05 (第81図、第89～91図、第95図 P L 30, 34～36)

位置：XVA-15・20、B-11・16

検出：調査区の北西端にて黒褐色土の落ち込みを確認した。その状況から竪穴式の住居跡を想定し調査に入る。確認時、北側の約2/3程度は遺跡廃絶後のかく乱により破壊されていた。

規模：隅丸方形？

埋土：7層に分層した。すべて粘質土シルトの黒褐色土である。5層には炭化物を含む。

構造：北側の2/3程度が削平を受け消失している。このため、炉跡や主柱穴数等は不明である。南側の壁高は65cmが測られ、東側に周溝を伴う。床面には、南西個所に炭化物が散布していた。Pit1とPit2が主柱穴と考えられる。

遺物出土状況：遺物は埋没土2層に多く、5層での炭化物量は多い。南東隅より弥生後期の壺がつぶれた状態で出土した。

遺物：第89図2は直口口縁の大甕、胴部上半の欠損資料。幅1.0cmほどの櫛歯状工具を用い口縁部に波状文を4～5周巡らしている。麤状文は左回りに施文されている。No.2の出土。3は2と同形の底部破片でNo.15の出土。4は口縁部がすぼまる壺形に近い形状の甕で、No.34とNo.35、埋没土の接合資料。5はやや受け口状に内傾する口縁の甕。外面の風化が著しく、麤状文の観察は難しい。6と7は台付き甕と考えられる。6は台部を欠失している。No.10とNo.14の出土。8と9は外面赤色塗彩した壺。8は底部の破片で、No.34とNo.35及び埋没土出土の接合資料。9は直口口縁の壺で、ほぼ完形に近い個体。第90図1～4（1/8で掲載）は直口口縁の大形壺で、いずれも完全な形に接合できた。1は口縁部が緩やかに直行し、胴部がやや球胴に張り出す形態。頸部に6単位のT字文が施されている。外面は風化により赤彩は色落ちし確認が難しい。No.34～36と床面及び埋没土出土の接合資料。2は胴部と底部の屈曲が目立たず、長胴化したような形態である。No.17・21・24・34・35と埋没土の接合資料。3はNo.24・29・35・36と埋没土の接合資料。4はNo.32・35～37と埋没土の接合資料。第91図1は片口の鉢形土器

でピッチャー形を呈する。No.7の出土。2は一穴式の甕。直口の鉢形。No.44と埋没土の接合資料。3は蓋。外面は縦方向にでないミガキ調整がなされている。上部につりさげ用と考えられる一穴がある。No.20出土。4と5は有段口縁の大形の高環。4は口唇部が強く反りかえり、後期段階でも形態上はやや後出的な様相か。No.35と埋没土出土の接合例。5は埋没土出土。6は高環の脚部破片で、接合はできないが5と同一の個体か。第95図16は大形の土鍾でNo.42出土。143gが量られる。

このほか、埋没土中の土器小破片を接合した結果、甕形土器2個体が復元できた。写真上の個体は最大径が胴部のやや上半にあり、肩の張らない形態。幅0.9cmほどの櫛歯状の工具で波状文を施し、その後に頸部に簾状の横走文を巡らせる。止めは4単位となる。器高30cm、口径22.5cmが測られる。写真下も上とほぼ同様な形態である。幅1.2cmほどの櫛歯状の工具で口縁部から胴部上半に波状文を施し、その後、頸部に簾状の横走文を止めは4単位で巡らせる。器高46cm、口径27cmが測られる。

時期：本跡には焼した痕跡を思わせる炭化物層が認められることから、出土遺物の大部分は住居廃絶後に廃棄された可能性が高い。遺物の出土位置と床面はさほどの間層を挟まない点から、廃絶後の経過時間は少ないものと考えられる。このことを踏まえ、本跡の予想される所属時期は、弥生時代後期の後半（善光寺平の弥生後期編年の5段階）に相当すると考えられる。

S B O 6（第82図、第91図 P L 30, 36）

位置：X V B - 16・17・21・22

検出：調査区の東端にて黒褐色土の落ち込みを確認する。その広がり大きさ・形状から竪穴住居跡等の大形の遺構を想定し調査に入る。結果、竪穴住居跡との判断に至ったが、北側は大きく削平され、南側は調査区外に及んでいるため全体形は不明である。

規模：隅丸長方形？

埋土：7層に分層した。いずれも基調は10YR3/1の黒褐色土である。

構造：西側壁の立ち上がり、周溝のみが明瞭。北側及び東側は削平を受けて遺存状況は極めて悪い。Pit1、Pit2及びPit8が主柱穴か。また南北方向の溝とSD04及びSD07に破壊されている。複数の柱穴が存在することから、掘立柱建物跡が重複している可能性がある。

遺物出土状況：遺物は破片資料が中心で数は少ない。

遺物：第91図7は壺口縁部の破片。表面の風化は著しく、器面調整や簾状文など判読が難しい。No.2出土。8は甕の底部破片。埋没土中の出土。9は高環の脚部。坏部を欠失し全体の器高は不明だが、裾部はあまり広からず、高さのある脚と考えられる。7の壺に反して、赤彩の残りは良好。No.8出土。10は小型の甕もしくは埴形土器の口縁部破片。No.6出土。11は器台の脚部。受け部と裾部を欠損している。脚には円形の穴が4箇所に穿たれ、全体は受け部内面も含め赤彩されている。No.1の出土。

時期：複数の時期が混在して出土している。埋没土中より出土した壺及び高環の特徴は、概ね弥生時代



SB05 出土の甕形土器 (S=1/8)

後期後半（善光寺平の編年4段階ないしは5段階）に相当する。器台及び小型甕はそれらより後出の古墳時代前期初頭と判断できる。したがって本跡の所属時期は、弥生時代後期後半～古墳時代前期前半と考えておく。

S B O 7 (第83図、第91図、第95図 P L 31, 36, 38)

位置：X V B - 07・08・12・13

検出：調査区のほぼ中央付近に長方形に広がる規模の大きな落ち込みを確認する。形状から竪穴住居跡を想定し調査に入る。

規模：隅丸長方形。

埋土：検出面が低く、黒褐色（10YR3/1）の粘質土を1層のみ確認した。

構造：北側が一部、削平されているが、ほぼ全体の形状を伺うことのできる住居跡。主柱穴は4本と推定できるが、北西側の1基は消失し確認できない。Pit1は断面ロウト状で-60cmが測られるが、ほかは20cmほどの規模である。炉跡は確認できない。南壁高は100cmが測られ、幅30cm、深さ20cmほどの周溝が巡る。東壁側の周溝から西側に向けて、本跡の中央部分に溝（D2）が走るが、性格は不明である。同様に、南壁からほぼ垂直に溝（D3）がある。空間を区分する間仕切りの機能であろうか。床面には特に硬化面は認められなかった。

遺物出土状況：小破片が埋土中より出土したのみで図示できる資料はほとんどない。

遺物：第91図12は甕の底部破片でNo.42の出土。風化が著しく内外面の観察は難しい。第95図2と3は敲石。2はNo.3の出土で黒色頁岩製。長軸の端部及び側面を使用している。ことに端部は加撃による表皮のはじけが視られる。3はNo.2の出土でチャート材、1097g。器体の2側面及び長軸の端部を敲いている。

時期：不明（他の遺構の所属時期から推定して、弥生時代後期後半～古墳時代前期ころか）。

S B O 8 (第84図、第91・92図、第95図 P L 31, 36, 38)

位置：X I I Y - 19・20

検出：表土を掘削し遺構検出を実施した結果、黒褐色土の方形の落ち込みを確認した。北側は調査区外となるため追及できなかったが、その形状・規模から住居跡を想定し調査に入る。

規模：隅丸方形か？

埋土：2層に分層できた。黒褐色（10YR2/2）を基調とする粘質シルト層。

構造：北側の半分は調査区外であり、現農道により削平を受けて消滅していると考えられる。このため全体の形状は不明である。ただし南側壁は明瞭で、立ち上がりは約80cmが測られる。また周溝も明瞭に確認することができた。床面を精査したところ、形状等をほぼ同じくし、規模にしてひと回り小さい周溝と柱穴を検出した。調査状況から判断して住居拡張の可能性が高いと考えられるが、明確な判別はつかなかった。柱穴は10本あり、炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況：埋土中より土器片が小破片ながら数多く出土した。床面近くより土器片の集中個所が5箇所に確認できたが、磨耗の激しい小破片のため、器種とその数量は不明である。また土器破片とともに人頭大の礫多数と炭化材の出土を確認している。

遺物：大型の赤彩甕、特大の甕、甕を中心に、甕や甕破片が多く出土している。第91図13は甕口縁部の破片。頸部には幅2.0cmほどの櫛歯状工具による帯状の横走模様が施されている。横走模様は簾状文様の止めを部分的に小刻みに連続する手法で表現されており、同様な模様はそれより下方の胴上半にも施され、2対で紋様帯を形成する。紋様体内には同様な工具を用いた綾杉状の模様を横走させる。弥生後期の甕には極めて珍しい図柄である。No.3の出土。14は甕の底部破

片でNo.2の出土。15は一穴の甕底部破片。胎土中に小石粒が目立つ。No.1の出土。16は甕の口縁及び胴上半部で同一個体と考えられる。口縁部から胴部にかけて緩やかに屈曲する器形である。口縁部には幅1.0cmほどの櫛歯状工具で3本の波状文を巡らせる。頸部は簾状文が横走し、8か所に止めが認められる。胎土中に赤褐色粒子を混入している。第92図1は小型の壺口縁部の破片。表面の風化が著しく、赤彩の有無、施文等は判読できない。2は壺。無文で外面はハケ成形後にナデ調整されている。頸部がすぼまり、肩がやや張り出す形態である。3は床面より出土した甕の口縁部破片。第95図4は砂岩材の敲石で周溝内より出土している。長軸の下端を面的に敲き使用している。上端にはわずかな敲打痕跡を観察できる。

時期：住居跡に拡張と考えられる痕跡が認められるが、甕及び甕の器形から、弥生時代後期後半（善光寺平の編年5段階）ころに相当すると考えられるか。

SB09（第84図、第92図 P L 31、36）

位置：XII Y-19

検出：調査区北端にて表土を掘削し遺構検出を実施、黒褐色土の落ち込みを確認した。北側は調査区外となるため追及できなかったが、東西方向に比較的広範囲にわたる落ち込みを認めた。その形状から凹地ないしは複数の遺構を想定し調査に入った。その結果、住居跡と考えられる遺構が2箇所が存在することが判明し、西側を本跡SB09とし、東側をSB10と仮称し調査を行う。

規模：形状は不明。

埋土：黒褐色（10YR3/1）の粘土質シルトを1層のみ確認した。

構造：北側の大部分が調査区外であることから、住居跡の一部分のみを検出したに留まる。壁に沿って周溝が認められる。全体形は不明。東側の壁よりに深さ-60cmほどの柱穴1基を確認している。

遺物出土状況：埋土中から遺物は、ほとんど出土していない。

遺物：第92図4は台付き甕。内外面とも風化が著しく、施文・調整・赤彩等は観察できない。脚部に径5mmほどの円孔が3箇所に通されている。胎土中には小石粒（石瑛が主）が目立つ。No.1の出土。5は甕の底部破片。底部外面は櫛歯状工具による縦方向の成形が窺われる。埋没土中の出土。6は器台の脚部破片。脚部に径1.0cmの円孔が3箇所穿たれる。風化著しく、胎土内には小石粒が目立つ。No.2の出土。

時期：第92図4は、おそらく赤彩の施された台付き甕と考えられ、その特徴から弥生時代後期後半（善光寺平の編年5段階）と考えられる。しかしながら、第92図6の器台はそれよりやや新しい6段階相当の資料であり、本跡は弥生後期後半～古墳前期ころと判断しておくべきか。

SB10（第84図、第92図 P L 31、36）

位置：XII Y-18・19

検出：SB09と同時に検出した。

規模：形状は不明。

埋土：黒褐色（10YR3/1）の粘土質シルト1層の堆積。

構造：SB09と同様な状態で確認され、遺存の状況もそれに似る。周溝は南側に残り深さ-5cm。

遺物出土状況：埋土中から比較的多くの遺物が出土したが、床面のは少ない。

遺物：第92図7は台付き甕の脚部か？8はほぼ全体像の分かる甕である。胴部は上半の肩が張る形態で、口縁部は強く屈折し胴部に接合する作りである。

時期：第92図8の製作的特徴から、弥生時代後期後半（善光寺平の編年5段階）ころと考えられる。

SB11 (第85図 P L 31)

位置: XⅢE-07・08

検出: 調査区の西南、やや勾配の強い箇所に黒褐色土の落ち込みを確認した。形状は不整形ながら、遺構のコーナーと判断できそうな部分が認められたことから、竪穴状の遺構を想定し調査に入る。

規模: 形状は不明。

埋土: 埋没土は良好に遺存しており3層に区分できた。

構造: 住居跡と考えられる落ち込みの一部分を確認する。北側の大半は削平により消失しており全体形は不明である。柱穴は3基を確認したが、周溝は認められない。南側の壁高-20cmが残存する。床面は不明瞭。

遺物出土状況: 埋土中から遺物がわずかに出土した。1層は現在の耕作土の影響を受けた堆積層で、2層と3層が黒褐色の粘土質シルトである。

遺物: 図示できる遺物はない。

時期: 不明(他の遺構の所属時期から推定して、弥生時代後期後半～古墳時代前期ころか)。

SB12 (第85図 P L 31)

位置: XⅡY-17・18・22・23

検出: 表土を掘削中に、不整形に広がる黒褐色土の落ち込みを認めた。何らかの遺構を想定して調査に入る。

規模: 形状は不明。

埋土: 2層に区分できた。

構造: 住居跡の南東側1/2程度が遺存する。壁は残りのよい部分で30cm程度である。柱穴は3基を確認し、この内のPit1及びPit2が主柱穴と考えられる。

遺物出土状況: 埋土及び床面から遺物がわずかに出土した。

遺物: 図示できる遺物はない。

時期: 不明(他の遺構の所属時期から推定して、弥生時代後期後半～古墳時代前期ころか)。

SB13 (第85図 P L 32)

位置: XⅡY-25

検出: 遺構の検出当初、埋没流路SD02に隣接する溝跡と考えたが、調査を進めるにあたり、全体が不整形な広がりをもつ落ち込みであることが判明した。竪穴状の遺構を想定し調査に入る。

規模: 形状は不明である。

埋土: 3層に区分できた。1層は耕作土の残り、2層が埋没した黒褐色土である。

構造: 住居跡の南側部分を検出した。西側壁よりに柱穴2基を検出した。

遺物出土状況: 壁側から遺物がわずかに出土した。

遺物: 図示できる遺物はない。

時期: 不明(他の遺構の所属時期から推定して、弥生時代後期後半～古墳時代前期ころか)。

SB14 (第85図 P L 32)

位置: XⅡY-18・23

検出: 表土を掘削中に、不整形に広がる黒褐色土の落ち込みを認めた。何らかの遺構を想定し調査に入る。

規模: 形状は不明。

埋土: 黒褐色(10YR3/1)の粘土質シルトを1層のみ確認した。

構造: 住居跡と考えられる落ち込みの南側部分を確認する。壁高は50cmが測られ、壁沿いに幅20cm、深さ-10cmの周溝を確認する。また西側壁よりに柱穴2基を検出した。

遺物出土状況: 周溝中から遺物がわずかに出土した。

遺物：図示できる遺物はない。

時期：不明（他の遺構の所属時期から推定して、弥生時代後期後半～古墳時代前期ころか）。

②掘立柱建物跡（S T）

S T 0 1（第86図、第92図 P L 32、37）

位置：XⅢD-08・09

検出：SD01内に設定したトレンチ及び埋土の掘り下げ途中にて、小規模な柱穴程度の円形状の落ち込み13基を確認した。建物跡を想定して精査した結果、1間×2間の掘立柱建物跡と判断できた。

規模：390cm×360cm。

構造：Pit1及びPit2の検出面では、人頭大の礫を確認する。

遺物出土状況：すべての柱穴から土器小破片が出土した。時期決定は難しいが、弥生後期後半から古墳時代前期の土器片と考えられる。

遺物：第92図9は「S字状口縁」の台付き甕。台部を欠損した例。

時期：不明（出土した土器破片から推定して、弥生時代後期後半から弥生前期初頭か）。

S T 0 2（第86図 P L 32）

位置：XⅣU-22

検出：表土を重機で削平し精査した結果、円形状の落ち込み12基を確認した。その配列状況から掘立柱建物跡を想定し調査を行う。1間×5間の建物跡と考えたが、柱間において東側と西側で均等な欠くことから、1間×2間の建物跡が2棟存在したと考えることもできるか。

規模：620cm×300cm。

構造：Pit1からPit3、Pit10からPit12は柱間50cmから60cmが測られ、Pit4からPit6、Pit7からPit9は柱間120cmが測られる。深さは検出面より-20cmから-30cmである。

遺物出土状況：Pit1、Pit2、Pit12から土器片が出土、Pit1には柱材の残片が検出された。またPit1、Pit2、Pit4からPit6では、柱穴検出面にて拳大の礫が認められたが、性格は不明である。

時期：不明（出土した土器破片から推定して、弥生時代後期後半か）。

S T 0 3（第87図 P L 32）

位置：XⅤA-13・14・18・19

検出：SD03の埋土掘り下げ後、円形状を呈する黒褐色土の落ち込み6基を確認した。その配列から掘立柱建物跡を想定し調査を行う。

規模：350cm×290cm。

構造：1間×2間の建物で、東側の柱穴は比較的明瞭に遺存している。深さ-30cmの筒形。

遺物出土状況：Pit6から土器小破片が出土。

時期：不明（出土した土器破片から推定して、弥生時代後期後半か）。

S T 0 4（第87図 P L 32）

位置：XⅤA-3・4・8

検出：表土掘削の後、円形状を呈する黒褐色土の落ち込み10基を確認した。その配列から掘立柱建物跡を想定し調査を行う。結果、1間×3間と考えられる建物跡を認めた。調査所見にはないが、本跡の東側で確認したSK54とSK67は、その位置関係から本跡に伴う柱穴の可能性もある。その場合の建物規模は、1間×4間と考えられる。

規模：450cm×280cm、もしくは620cm×280cm（1間×4間の場合）。

構造：斜面にて検出されたため、南側の柱穴は浅く、北側の柱穴は-40cmほどの深さで確認できた。柱穴の形状はいずれも筒形である。

遺物出土状況：特になし。

時期：弥生時代後期から古墳時代前期か？

③土坑（SK）

SK31（第88図、第92図 P L 32, 37）

位置：XⅢD-14

検出：SB01の調査時に円形状の黒色土の落ち込みを確認した。規模が大きく、SB01床面より若干低いレベルにて検出できたことから土坑として扱った。

規模：40cm×26cm、深さ17cm。

構造：埋没土は2層に区分でき、1層黒褐色土、2層はにぶい黄褐色土の堆積である。SB01の床面より下位で発見されたことから、それよりも古い遺構と判断できる。

遺物出土状況：坑底面に20cm程の礫があり、その上部に甕形土器が検出された。

遺物：第92図10は小型の甕、2/3個体。器面は風化し、かなり荒れている。胎土中の赤褐色の微粒子が目立つ。No.1の出土。

時期：弥生時代後期後半（善光寺平の弥生土器編年の5段階前後か）。

SK138（第88図、第92図 P L 33, 37）

位置：XⅢE-07

検出：表土掘削の後、黒褐色土の円形状の落ち込みを確認した。平面形状と規模から土坑を想定し調査に入る。埋没土を掘り下げたところ、埋土の中位と坑底面近くにて土器がまとまって出土した。また底面には灰の薄層が認められた。

規模：100cm×80cm、深さ73cm。

構造：平面形状は円形で、断面はバケツ形を呈する。

遺物出土状況：上層の中位にて蓋形土器（第92図12）や壺の破片がまとまって出土した。また坑底面近くから壺形土器の一括個体と一辺20cm程の四角形状の礫が出土した。

遺物：第92図11は底面付近から出土した壺のほぼ完全に近い個体でNo.7の出土。胴の下半は屈曲せず緩やかにすぼまる。口脣は直上方向に面取りされている。外面はハケ調整とミガキ調整が片側ずつ施されている。12は上層近くで出土したNo.1の蓋形土器。縁端部を欠失する1/2程度の破片個体で、頂部に紐掛けの穴が1つ穿たれている。

時期：埋没土上層の中位から出土した蓋形土器は、編年的に弥生後期内に収まるものと考えられる。坑底面出土の壺よりも古いので、明らかな混入資料であろう。第92図11の壺の特徴から、弥生時代の最終末から古墳時代前期初頭（善光寺平の弥生土器編年6段階以後）に位置づけられるか。

④溝跡（SD）

SD01（第69図、第70図、第93図、第95図 P L 33, 37, 38）

位置：XⅡY-23～XⅢD-14

検出：表土を削除した結果、南北に長く伸びる幅13mあまりの黒色土の落ち込みを確認した。慎重に埋没土を掘り下げたが、複数の遺構が重なりあったような状況は認められず、溝状の遺構を想定し調査を行う。

規模：長さ約20m×幅約13m。

構造：埋没土は単純な自然堆積であり、人工的な掘削痕跡が認められない。調査状況から判断して降雨等に起因する一時的な流路（土砂の押し出し）の可能性を考えておきたい。

遺物出土状況：埋土中より、小さな土器片（弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて）が大量に出土

した。大半の破片は全体が軽度で磨耗しているが、流水の激しい押し出し等の結果とは考えられない。状況としては住居跡内出土土器と遺存状況にさほどの違いはないことから、一時的な流路であっても遺物の大きな流下、動きはなかったものと考えられる。

遺物：第93図1は壺の口縁部破片。頸部にT字文を施し、以下に綾杉状に模様を入れる。SB08出土の第91図13と同様な文様構成をとるのか。No.6の出土。2と3は壺の底部。2は大型壺で部分的に赤彩を観察できる。No.6の出土。3は底部に一穴がある。形態及び作りから甕ではないと考えられるが、焼成前であり、穴もしくは粘土粒等の脱痕か。No.1の出土。4は大型甕の底部。体部下半は縦方向のケズリ調整で、上半にはやや粗い波状文が観られる。No.3の出土。5は中型の甕の口縁部で口唇は外削ぎ様に面取りされている。幅0.8cmの櫛歯状工具を使い器面に波状文を念入りに施し、頸部には同じ工具で右回りの横走文を施している。No.6の出土。6は小型甕ないしは台付き甕の口縁部破片。7は甕の2/3程度の個体。砲弾状の形態で一穴式。器面は風化により調整などは観察できない。No.12の出土。8は有段高環の坏部破片。口縁部はやや立ち上がり気味に外反する。9は器台で受け部及び脚部は赤彩されている。10は器台の脚部破片。胎土は褐色でほかの土器とは一見して区別できる。No.11の出土。11は「S字状」の口縁をもつ台付き甕。器面は風化により摩耗し調整等を観察できない。12と13は甕。12は口縁部の破片。13は接合して完形となった個体である。口縁部は「くの字」状に強く外反し、体部の中央部分に最大径がある。器面はハケ調整の後、全体を万遍なくナデ調整している。No.1の出土で土器集中1と重なる。第95図5は黒曜石製の小形刃器で欠損品。急角度調整による刃付け加工がある。6は黒色頁岩材の川原石を利用し、刃部のみを磨研仕上げたノミ状の石器。両刃で頭部には敲いた痕跡が認められる。

時期：第93図1や2、8などは弥生時代後期後半（善光寺平の弥生土器編年5段階ころ）に位置づけられる。9の赤彩の器台、11の「S字状」口縁の台付き甕など、いずれも古墳時代前期（善光寺平の古墳時代土器編年1期ころ）に比定できる。13は形態的にやや後出の感を受けるが、口縁部や器面調整から古墳前期と考えてよいだろう。以上から本跡が形成された時期は古墳時代前期以後と判断できるか。

SD02（第73～77図、第94・95図 P L 33, 38）

位置：XⅢE-09～XVB-02

検出：表土を削除した結果、幅13mあまりある黒色土の落ち込みを確認した。落ち込みは調査区を南北にわたり、XⅢD-03～にて検出したSD01と同様な状況が予想されたため、溝跡を想定して調査を行う。

規模：長さ約40m×幅（北側約25m・南側約70m）。

構造：SD01と同様に、埋没土の堆積状況及び人工的な掘削痕跡は認められず、降雨等に起因する一時的な流路（土砂の押し出し）と判断できる。

遺物出土状況：埋土中より、弥生時代後期から古墳時代にかけての小さな土器片が大量に出土した。破片全体が磨耗するが、遺存状況は堅穴住居跡とさほどの違いはない。

遺物：第94図1と2は壺。1は外面赤彩の底部でNo.6の出土。2はNo.10出土で口縁部を欠失している。長胴の形態で、内外面ともハケとナデの調整で仕上げられているが、風化が著しく観察が難しい。3は鉢の2/3程度の個体。風化が著しく、器面の調整は観察できない。4は長胴気味の甕で口縁部を欠損している。波状文は幅0.8cmの櫛歯状の工具で器面全体にやや雑に施されている。頸部の横走文は右回りで止めは9か所と判断できる。5と6は器台。5は受け部で内外面とも赤彩

されている。6は脚部のやや膨らむ形態で、径1.2cmの穴が3箇所に穿たれている。7は高坏の脚部破片。椀形口縁の高坏と推定でき、外面は赤彩が施されている。No.9の出土。8は有段口縁の高坏の坏部。口縁部は緩やかに外反する。9は縄文時代晩期後半の水式の鉢、口縁部の破片である。第95図7は黒曜石の石核で土器集中のNo.1出土。大形の剥片を素材とし、横長の剥片を1～2枚程度剥取している。表面は風化しており、所属時期については不明。8は安山岩の打製石鏃。片面に表皮を残し、全体の形状を撥形に仕上げている。9は安山岩の敲石。俵状で長軸の端部を面的に敲き使用している。土器集中Vより出土している。10は扁平で棒状の安山岩を用いた敲石。端部はすべて敲き使用している。また表の一面にもアバタ状の敲き部がある。11と14は砂岩材の置き砥石。表裏面は使用に伴い皿状に窪んでいる。また側面には筋状の砥面が2本ある。15はセリサイト質凝灰岩の円盤形の石製品。片面側はていねいに磨き成形されているが、穴はいびつで粗雑である。17は鉄製の刀子である。

時期：第94図1や8は弥生時代後期後半（善光寺平の弥生土器編年5段階ころ）に位置づけられる。5や6は赤彩の器台で、古墳時代前期（善光寺平の古墳時代の土器編年1期ころ）に比定できる。出土土器全体の様相はSD01とほぼ同内容であり、本跡の形成時期も古墳時代前期以降と考えられる。

SD03（第78・79図、第94・95図 P L 33, 38）

位置：XⅢA-10・13～15・18～20, XV B-01・02・06・07・11・12

検出：表土を削除した結果、調査区を南北に走る黒色土の落ち込みを確認した。SD01及びSD02と同様な溝跡と考え調査を行う。

規模：約27.6m×10.6m、深さ50cm。

構造：埋没土の堆積状況及び人工的な掘削痕跡は認められず、降雨等に起因する一時的な流路（土砂の押し出し）と考えられる。

遺物出土状況：埋土中より、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器片が出土した。

遺物：第94図10は高坏の脚部。直立気味の脚で裾端部は接地面が平坦である。器面の風化が著しく調整は観察できない。11は裏の口縁部破片でNo.3の出土。口縁端部は外削ぎ状の形態である。器面の風化は著しい。台付き裏の可能性もある。12はやや受け口状の口縁となる中型の甕でNo.6の出土。幅0.5cmほどの櫛歯状工具で波状文を粗雑に施している。頸部は幅1.5cmほどの横走文であり、波状文と同じ工具であれば3周回転施文となるか。別の工具を使用した可能性もあるが判別できない。13は中型の甕の口縁部破片。口縁端部は若干比厚し（折り返しては）端面を形成、波状文が施されている。第95図12は黒曜石の打製石鏃。凹基無茎式で、極めてていねいな押圧剥離加工で仕上げられている。弥生後期のものであろうか。13は珪質岩材の打製石斧か。主剥離面側の剥離加工がほとんど施されておらず、大形刃器の可能性もある。

時期：出土遺物は弥生時代後期後半のものであるが、出土遺物全体はSD01及びSD02と同様な状況にあり、本跡の形成時期も古墳時代前期以降と考えてよい。

SD04（第88図 P L 33）

位置：XV B-16

検出：表土を削除し遺構の確認のため精査を進めたところ、調査区を南北に走る黒色土の落ち込みを確認した。北端は遺跡埋没後の耕作により削平を受け消失している。

規模：約400cm×50cm、深さ約40cm。

構造：10YR2/2 黒色土の粘土質シルトの単純堆積。

遺物出土状況：埋土中に弥生後期後半の土器片を中心に包含している。

時期：弥生時代後期後半ころか。

SD06（第88図 P L 33）

位置：XVA-12

検出：調査区を東西方向に走る黒色土の落ち込みを確認した。形状と規模から溝跡を想定し調査に入る。

規模：約100cm×30cm、深さ約8.0cm。

構造：10YR3/1 黒色土の粘土質シルトの単純堆積。

遺物出土状況：出土遺物なし。

時期：不明（遺跡全体の様相から、弥生時代後期～古墳時代前期ころか）。

SD08（第88図 P L 33）

位置：XⅢD-04

検出：SB02及びSB03の検出と同時に、北西側に幅29cm、長さ230cmほどの溝状の落ち込みを確認した。確認時は竪穴住居跡（SB04）の周溝と考えると調査に入ったが、溝状の落ち込み以外に遺構の痕跡が認められなかったことから、溝跡と判断した。

規模：約110cm×20cm。

構造：10YR2/2 黒色土の粘土質シルトの単純堆積。

遺物出土状況：埋没土中から土器小破片が出土している。

時期：不明（遺跡全体の様相から、弥生時代後期～古墳時代前期ころか）。

⑤遺物集中区

XU-23・24、A-1・2を中心に、5箇所（I～V）ほど遺物の集中的な出土があった。それらは、いずれもSD02埋没土内及びその検出面に位置し、SD02に伴う出土遺物である可能性が高い。調査所見では遺物集中箇所として別に記録されたことから、SD02に関わる出土遺物の可能性を視野に、以下に土器集中Iについて中心に記述する。

土器集中I・IIの出土遺物（第74図、第92図 P L 37）

位置：XU-23、A-01・02

概要：黒褐色土中に大量の土器破片が出土した。出土状況は一括性のある廃棄や使用時の遺棄とは考えられず、土器破片がまとまって散在しているような状態であった。周辺には、さらに2箇所の遺物集中があるが、いずれも同様な状態である。SD02に伴う遺物の集中と判断しておく。

遺物：弥生時代後期後半の土器片（壺・甕）を若干含むが、主体を占めるのは古墳時代前期初頭ないしは前半の土器である。甕形土器の破片を主体とし、ハケ甕、口唇面取りした甕などがある。第92図13は器台の脚部（高環の脚の可能性もある）破片。やや膨らみのある脚部で、端部は直立気味に立つ。1.2cmほどの円孔が4箇所に穿たれ、外面はハケとミガキ調整で仕上げられている。14は口縁が「く」の字状に強く外反する球胴の形態で、口唇は面取り状に整えられる。外面はタキ手法で成形される。庄内型の甕と推定できる。15と16は口縁部が強く折れ曲がる形態で、口唇が面取りされた甕の口縁部破片。16は器壁が薄く、0.5cmほどが測られる。内外面ともに風化が著しく、調整は観察できない。17は埴形土器の口縁部破片と考えられるか。

4. 小 結

東中曽根遺跡は、西中曽根遺跡と同じ埴捨土石流堆積物の押し出し先端部、標高381mほどに位置する。西中曽根遺跡とは宝録沢川を挟んで東側の対岸にあたる。遺跡の時期は、弥生時代後期の後半から古墳時代前期前半、およそ2世紀の終末から3世紀に所属すると考えられる。出土遺物（土器）から判断される段階は、弥生後期の箱清水式土器5段階～6段階（註4）から古墳時代1期1段階（註2）までに相当する。善光寺平南部の弥生式土器編年の後期5段階と6段階は、本跡の中では明確に区分することはできない。2段階区分の有効性が首肯されたものとすれば、概ね5段階に相当し、6段階は欠落することになる。しかしながら、遺跡は古墳時代1期へと継続していくように看取できることから、6段階の空白を捉えて、集落の不連続性を明言することは躊躇される。本跡はあくまでも弥生後期後半から古墳前期初頭まで継続した集落遺跡と考えておきたい。調査区内で確認された遺構は、竪穴住居跡が13軒、掘立柱建物跡が4棟、溝跡7本、土坑135基がある。

A. 集落の構造について

遺構は深度のあるものを除き、大部分が近現代の可耕地化により削平を受け、遺存状態は良好とはいえない。竪穴住居跡は、その大半が部分的な検出に留まり、全体の形状を留めた例は皆無であった。こうした状況下で、遺跡の考古学的評価を検討することには困難を伴うが、記録保存できた資料より集落像を復元してみる。

①遺構数と推定された所属時期

- 弥生後期後半・・・竪穴住居跡3軒（SB05・SB08・SB10）、該期の可能性が高い例4軒（SB03・SB06・SB07・SB13）、掘立柱建物跡3棟（ST02・ST03・ST04）、土坑1基（SK31）
- 古墳前期前半・・・該期の可能性が高い竪穴住居跡3軒（SB01・SB02・SB09）、掘立柱建物跡は1棟（ST01）、土坑1基（SK138）
- 不明・・・竪穴住居跡3軒（SB11・SB12・SB14）、土坑133基

②集落の構造解釈

○弥生後期後半

調査区の中央部から東側にかけて施設が検出された。その中央部分には一辺約9mが測られる長方形の大型住居跡（SB07）が1棟ある。出土遺物に恵まれず、性格を推定できる根拠に欠けるが、このSB07を中心に遺構のまとまりを探ると、それを取り囲むように3棟の掘立柱建物跡（ST02・ST03・ST04）が存在していることがわかる。さらにその外側には竪穴住居跡のまとまりが窺われ、西側に1群（SB08・SB10・SB13）、東側に1群（SB05・SB06）がある。住居跡の両群は遺存状況が悪いため、それぞれに分けられた住居跡の内容について、個別に検討するには難がある。両群それぞれが血縁的な関係にある生活の単位で、集落を構成する基準の単位であると仮定した場合、ひとつの大型住居を中心に、それらがまとめあげられていたように思考できる。3棟の倉庫群は、この単位を賄う貯蔵庫等の共同施設と考えるべきか。東群のまとまりにあるSB05からは、床面より10cm程度浮いた状況で赤彩の大形壺4点（第90図）が廃棄された状況で出土した。集落の廃絶に伴う事例と考えてみると、廃棄された壺類がSB05の西側方向から、つまり大型住居跡SB07の側から投棄されていることにも何か大きな意味があるのかも知れない。また宝録沢川を挟んで西側にある西中曽根遺跡には、墓跡と推定される土坑のみが存在し、ここで仮定した生活の単位との強いつながりが予想される。今回の発掘により、居住域としての東中曽根遺跡と墓跡としての西中曽根遺跡は、同一の弥生集落である可能性が強まった。2つから3つの住居群のまとまり（※附）が、血縁的な世帯共同体、つまりは（西と東）中曽根遺跡として存在し、八幡地域にある弥生後期社会の単位集団を構成していたと考えたい。埴捨土石流堆積物の眼下に広がる低地部、そこで確認された外

西川原遺跡（A地点・C地点）との集団的関係を、今後は積極的に追究していく必要がある。

○古墳時代前期前半

該期に所属する遺構を遺物の出土状況から明確に示すことは難しい。前段階の弥生後期土器をほとんど含まないか、あるいは埋没土中にわずかに混在する状況のものを当該期として認定した。また弥生時代の遺構を破壊して構築されている例などは、少なくともそれらの遺構より新しいと判断できるので該期に所属させて考えた。その結果、該期の竪穴住居跡を3軒（SB01・SB02・SB09）、掘立柱建物跡を1棟（ST01）認定できた。遺構は調査区の西側、宝録沢川に近い位置に分布し、弥生期の居住域とは中心がずれている。SB09は他のSBとの重複関係から該期に含めたため、弥生期の住居群（西群）の中に1軒のみ存在している。検出遺構数が少なく、集落の構造については言及できる素材ではないが、竪穴住居跡の平面形状が弥生期のものに比べ正方形に近い傾向、住居跡に付随するように1間×2間の建物跡が存在している点などは指摘できる。また宝録沢川を挟んで西側にある西中曽根遺跡には、貯蔵跡あるいは墓跡と推定される土坑のみが存在しており、上述した弥生時代後期と同様に東中曽根遺跡の生活単位と強いつながりが予想され、同一の遺跡と捉える必要があるといえる。

※附) 1989年5月8日～7月26にかけて、千曲市教育委員会(当時更埴市)により、外西川原遺跡の発掘調査が実施された。調査は3地区(A・B・C)に分けられたが、この内のB地区が東中曽根遺跡に隣接した外西川原遺跡であり、今後の調査状況によっては東中曽根遺跡に含まれる可能性がある。今回の調査地とは別にもうひとつ住居群のまとまりがあると考えてよいか。

1990年 更埴市(現千曲市)教育委員会「外西川原遺跡」

なお、外西川原遺跡B地区を東中曽根遺跡に含めて解釈する見方と、5号住居跡と4号住居跡との認識関係に関しては、調査者のひとりである千曲市教育委員会小野紀男氏に助言と教示を求めた。また1980年度調査資料の一部を第6図に再掲することに関し、千曲市教育委員会より協力を得ました。記して感謝いたします。

※附) 外西川原遺跡 (B 地区)

1. 調査の概要

- (1) 調査期間・・・平成元年5月8日～7月26日
- (2) 調査面積・・・2,000㎡
- (3) 調査担当・・・千曲市教育委員会(当時更埴市) 佐藤信之
- (4) 調査対象地・・・県営ほ場整備西部沖工事に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査
外西川原遺跡・宮川遺跡・東中曽根遺跡
- (4) 発掘調査報告書

1990年 更埴市(現千曲市)教育委員会『外西川原遺跡』

2. 遺跡の概要

(1) 外西川原遺跡 B 地区の捉え方

「宮川遺跡、東中曽根遺跡では遺構の検出はない。」(P36)との報告がある。外西川原遺跡に関しては、発掘調査を3地区(A・B・C)に分けて実施したが、この内のB地区が、今回の国道18号バイパス建設に伴う東中曽根遺跡の発掘調査地に隣接する。現行の『長野県千曲市遺跡地図』2008によれば、外西川原遺跡B地区は、外西川原遺跡(遺跡番号119)と東中曽根遺跡(遺跡番号89)の周知化された遺跡範囲の境界域にあたり、所属がはっきりしない。しかしながら外西川原遺跡A地区とC地区はともに低地に位置し、埴捨土石流堆積物の先端部にあるB地区や東中曽根遺跡とは立地を異にする。西中曽根遺跡も含め、台地上の遺跡と低地上の遺跡との構造的な関連性は説明できていないが、少なくとも現況では外西川原遺跡B地区を東中曽根遺跡に含めて考えておくことが遺跡内容を評価していく上に妥当であると判断された。

(2) 調査経過(第6図)

外西川原B地区では、弥生時代後期後半と古墳時代後期前半(6世紀前半ころ)と考えられる竪穴住居跡を検出した。

○弥生後期後半・・・竪穴住居跡2軒(3号・6号)

3号住居址は長軸8mが測られる隅丸長方形の大型例で、6号住居址は5号住居址との重複関係により全体形状が不明な例である。3号住居址からは、赤彩された壺と高環、櫛描波状文を施す甕が出土している。壺は胴部下半に最大径があり、稜はやや弱くスマートなプロポジションである。高環は口縁部が強く反する有稜形と鐮緑状の高環がある。甕は胴中半に最大径をもつ形態である。これら出土土器の特徴から善光寺平の弥生後期土器編年の4段階から5段階が想定でき、東中曽根遺跡とほぼ同時期と判断できる。

○古墳後期前半・・・竪穴住居跡1軒(4号)、該期の可能性が高い竪穴住居跡1軒(5号)

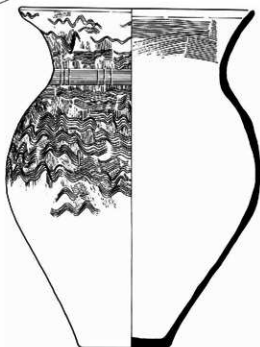
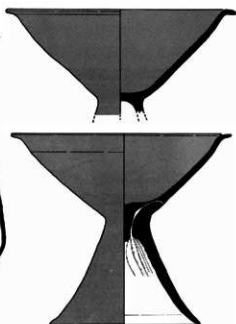
5号住居址(報告では4号となるが、所見と出土遺物の説明から5号を指すものと考えられる)は弥生期の6号住居址を破壊して構築されており、一辺の大きさが6mほどの中型規模の建物である。出土遺物には内面を黒色処理した非クロコ土師器の環(有段環)を中心に、有稜の高環、外面ハケ調整の甕類がある。出土土器の特徴から、古墳時代IV期(屋代遺跡群の編年で7期に相当)に属すると判断できる。古墳IV期は、八幡遺跡群さらには東條遺跡ほかでも確認できない時期であり、段階としては東條遺跡や大道遺跡の集落形成直前にあたる。当該地域における歴史的な遺跡経過を追究する上には、該期の集落遺跡の全容を的確に把握する必要がある。今後の考古学的な調査に期待するとともに、重要な研究課題として提起しておきたい。



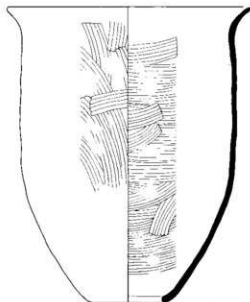
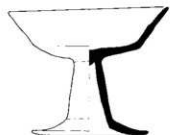
3号住居址



0 (1:8) 20cm



5号住居址 (4号住居址)



0 (1:4) 10cm

第6図 外西川原遺跡 (B地区)

第12表 東中曽根遺跡 土器観察表

図版No	写真No	遺構名	取り上げNo	器種	部位	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面色調	備考
第89図1	PL34	S803 PS	No.1	高坏	坏部~根部	40%	<19.8>	<13.2>	15.1	5YR7/4 にぶい橙	
第89図2	PL34	S805	No.2	甕	口縁部~胴部	20%	<28.6>	—	17.4	7.5YR6/3 にぶい橙	
第89図3	S805	No.15	甕	胴部~底部	10%	—	14.4	(10.6)	7.5YR7/6 橙		
第89図4	PL34	S805	No.34・35	甕	口縁部~胴部	50%	<26.8>	—	(30.0)	2.5YR5/6 明赤褐	
第89図5	PL34	S805	No.34・35	甕	口縁部~胴部	20%	<18.4>	—	(9.4)	5YR6/4 にぶい橙	
第89図6	PL34	S805	No.10・14	台付き甕	口縁部~胴部	40%	13.7	—	(9.6)	5YR6/4 にぶい橙	
第89図7	S805	台付き甕	坏部~根部	30%	—	—	—	(8.2)	5YR6/6 橙		
第89図8	PL34	S805	No.34・35	甕	胴部~底部	30%	—	6.4	(15.4)	10R5/6 赤 5YR5/6 橙	
第89図9	PL34	S805	甕	口縁部~胴部	90%	23.6	8.5	44.0	2.5YR6/6 橙		
第90図1	PL35	S805	No.34・35・36	甕	口縁部~底部	70%	37.3	14.1	69.9	7.5R4/6 赤	
第90図2	PL35	S805	No.17・21・24・34・35	甕	口縁部~底部	60%	35.6	13.0	75.0	10R4/4 赤褐	
第90図3	PL35	S805	No.24・29・35・36	甕	口縁部~底部	70%	35.6	<16.5>	75.5	5YR8/2 灰白	
第90図4	PL35	S805	No.32・35~37	甕	口縁部~底部	70%	34.6	13.4	76	10R4/6 赤 5YR7/6 橙	
第91図1	PL36	S805	No.7	片口鉢	口縁部~底部	80%	11.0	9.0	16.2	5YR6/6 橙	
第91図2	PL36	S805	No.44	甕	口縁部~底部	80%	17.0	4.7	12.2	5YR6/6 橙	
第91図3	PL36	S805	No.20	受部~根部	60%	4.2	18.3	8.0	7.5YR7/4 にぶい橙		
第91図4	PL36	S805	No.35	高坏	坏部	坏部 30%	<29.2>	—	(12.4)	10R4/6 赤	
第91図5	PL36	S805	高坏	坏部	坏部 50%	<24.2>	—	(8.7)	10R4/6 赤		
第91図6	PL36	S805	高坏	脚部	70%	—	—	(10.2)	10R5/6 赤		
第91図7	PL36	S806	No.2	甕	頸部	10%	—	—	(9.4)	10YR6/4 にぶい黄褐	
第91図8	S806	甕	底部	10%	—	<6.4>	(2.1)	2.5Y2/1 黒			
第91図9	PL36	S806	No.8	高坏	脚部	40%	—	<17.0>	(14.8)	10R5/6 赤	
第91図10	S806	No.6	甕	口縁部	20%	<11.6>	—	(4.3)	5YR7/4 にぶい橙		
第91図11	PL36	S806	No.1	器台	脚部	40%	—	—	(6.0)	10R5/6 赤	
第91図12	PL36	S807	No.42	甕	胴部~底部	30%	—	6.0	(8.1)	5YR6/6 橙	
第91図13	PL36	S808	No.3	甕	頸部~胴部	10%	—	—	(14.5)	7.5R4/6 赤 5YR5/6 明赤褐	
第91図14	S808	No.2	甕	胴部~底部	20%	—	11.4	(11.6)	5YR6/6 橙		
第91図15	PL36	S808	No.1	甕	胴部~底部	10%	—	4.6	(5.4)	5YR6/6 橙	
第91図16	S808	甕	頸部~胴部	30%	—	—	—	—	—	5YR5/4 にぶい赤褐	
第92図1	PL36	S808	甕	口縁部~胴部	30%	<15.6>	—	(12.3)	7.5YR7/3 にぶい橙		
第92図2	PL36	S808	甕	頸部~胴部	40%	—	—	12.2	5YR6/6 橙		
第92図3	PL36	S808	甕	口縁部~胴部	20%	<20.9>	—	(9.9)	7.5YR5/4 にぶい橙		
第92図4	PL36	S809	No.1	台付き甕	口縁部~胴部	80%	<13.0>	<8.3>	14.8	5YR5/6 明赤褐	
第92図5	S809	甕	胴部~底部	10%	—	<7.8>	(6.5)	10YR6/4 にぶい橙			
第92図6	PL36	S809	No.2	器台	脚部	10%	—	—	(5.7)	5YR7/4 にぶい橙	
第92図7	S810	台付き甕?	脚部	40%	—	6.4	(5.5)	10YR5/1 褐灰			
第92図8	PL36	S810	甕	口縁部~底部	30%	<23.4>	<7.8>	34.1	5YR7/4 にぶい橙		
第92図9	PL37	ST01	S字甕	口縁部~胴部	10%	<15.1>	—	<4.5>	7.5YR6/4 にぶい橙		
第92図10	PL37	SK31	No.1	甕	口縁部~底部	70%	<11.6>	5.9	15.3	10YR7/3 にぶい黄褐	
第92図11	PL37	SK138	No.7	甕	口縁部~底部	90%	<13.7>	7	24.2	10YR8/3 淺黄褐	
第92図12	PL37	SK138	No.1	甕	体部	60%	<5.3>	—	(5.5)	5YR5/3 にぶい赤褐	
第92図13	PL37	土器集中I	器台	脚部	30%	—	<11.7>	(6.6)	7.5YR6/6 橙		
第92図14	PL37	土器集中I	甕	口縁部~胴部	10%	<19.8>	—	10.0	2.5YR6/6 橙		
第92図15	土器集中I	甕	口縁部~胴部	10%	<20.8>	—	(3.7)	7.5YR5/3 にぶい橙			
第92図16	土器集中I	甕	口縁部~胴部	20%	<11.8>	—	(8.0)	5YR5/6 明赤褐			
第92図17	土器集中I・II	須惠磨坦形土器	口縁部	10%	<19.3>	—	(3.0)	2.5Y2/2 暗灰黄			
第93図1	PL37	SD01	No.6	甕	口縁部~頸部	10%	<27.6>	—	(12.7)	7.5YR7/4 にぶい橙	
第93図2	PL37	SD01	No.6	甕	胴部~底部	20%	—	11.7	(15.8)	10R5/6 赤 7.5YR7/4 にぶい橙	
第93図3	SD01	No.1	甕	胴部~底部	10%	—	5.4	(7.8)	7.5YR8/3 淺黄褐		
第93図4	PL37	SD01	No.3	甕	胴部~底部	20%	—	10.2	(18.0)	2.5YR5/4 にぶい赤褐	
第93図5	PL37	SD01	No.6	甕	口縁部~胴部	20%	<18.0>	—	(15.9)	10YR6/3 にぶい黄褐	
第93図6	SD01	甕	頸部~胴部	10%	<13.4>	—	(6.8)	7.5YR7/3 にぶい橙			
第93図7	PL37	SD01	No.12	甕	口縁部~底部	80%	14.8	2.2	14.2	5YR7/6 橙	
第93図8	PL37	SD01	高坏	坏部	坏部 30%	<27.2>	—	(10.7)	10R5/6 赤		
第93図9	PL37	SD01	器台	坏部~脚部	20%	<8.6>	—	(4.1)	10R5/6 赤		
第93図10	PL37	SD01	No.11	器台	脚部	脚部 90%	—	12.3	(5.4)	7.5YR8/3 淺黄褐	
第93図11	SD01	台付き甕	口縁部~胴部	10%	<13.3>	—	(3.3)	5YR6/6 橙			
第93図12	SD01	甕	口縁部~胴部	10%	<22.8>	—	(8.5)	7.5YR6/3 にぶい橙			
第93図13	PL37	SD01	No.1	甕	口縁部~底部	90%	17.1	5.6	26.7	10YR6/3 にぶい黄褐	
第94図1	PL38	SD02	No.6	甕	胴部~底部	40%	—	10.5	<39.2>	10R 4/6 赤 5YR7/6 橙	

第2章 発掘調査の概要

図版No	写真No	遺構名	取り上げNo	器種	部位	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面色調	備考
第94図2	PL38	SD02	No.10	壺	頸部～底部	40%	—	<6.5>	(21.5)	7.5YR6/6 橙	
第94図3	PL38	SD02		鉢	口縁部～底部	60%	<14.2>	4.2	6.3	7.5YR7/4 にふい橙	
第94図4	PL38	SD02		壺	頸部～底部	60%	—	<8.0>	26.0	5.5YR6/6 橙	
第94図5		SD02		器台	受部	30%	9.2	—	(2.3)	2.5YR6/4 にふい橙	
第94図6	PL38	SD02		器台	坯底部～脚部	40%	—	—	(6.1)	10R 4 / 4 赤褐	
第94図7		SD02	No.9	高坏	坏部～脚部	40%	—	—	(10.9)	10R4/6 赤	
第94図8	PL38	SD02		高坏	坏部	坏部 20%	<28.6>	—	(7.2)	7.5R4/6 赤	
第94図9		SD02		鉢	口縁部	10%	<21.7>	—	(3.2)	10YR8/3 浅黄橙	・縄文晩期
第94図10		SD03		高坏	脚部	脚部 90%	—	6.7	(6.8)	2.5YR5/6 明赤橙	
第94図11		SD03	No.3	壺	口縁部～胴部	10%	<14.6>	—	(8.5)	7.5YR7/3 にふい橙	
第94図12	PL38	SD03	No.6	壺	口縁部～胴部	10%	<24.5>	—	(8.6)	5YR6/6 橙	
第94図13	PL38	SD03		壺	口縁部～胴部	10%	<23.4>	—	(14.7)	7.5YR6/4 にふい橙	

第13表 東中曽根遺跡 土製品観察表

図版No	写真No	遺構名	取上げNo	遺物名称	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重さ (g)	備考
第95図16		S805	土器No.42	土鐘	土	4.5	3.8	10.0	143.2	

第14表 東中曽根遺跡 石器観察表

図版No	写真No	遺構名	取上げNo	遺物名称	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	高さ (mm)	重さ (g)	備考	
第95図1	PL38	S802	埋土	磨石	珪質岩	114.0	74.0	40.0	313.3	・石碇	
第95図2	PL38	S807	No.3	磨石	黒色頁岩	137.0	59.0	43.5	425.0		
第95図3	PL38	S807	No.2	磨石	チャート	173.0	66.0	60.0	1097.0		
第95図4	PL38	S808	周溝内	磨石	砂岩	112.0	44.0	27.0	187.7		
第95図5	PL38	SD01	土器集中下段	刃器	黒曜石	19.5	12.0	7.3	1.7		
第95図6	PL38	SD01	下段石器集中	石No.1	磨製石斧	黒色頁岩	76.5	30.0	12.0	45.6	
第95図7	PL38	SD02	埋土	石核	黒曜石	60.0	58.0	21.0	57.9		
第95図8	PL38	SD02	埋土	打製石鏃	安山岩	182.5	124.5	38.0	849.4		
第95図9	PL38	SD02	土器集中V	磨石	安山岩	117.5	64.0	49.0	523.0		
第95図10	PL38	SD02	トレンチ	磨石	安山岩	177.5	89.0	29.0	518.8		
第95図11	PL38	SD02	ベルト6内 埋土土器集中IV	置き磁石	砂岩	198.0	125.0	62.0	1550.0	・残存率 1/2	
第95図12		SD03	埋土	打製石鏃	黒曜石	26.0	15.0	5.8	0.9		
第95図13		SD03	埋土	打製石斧	珪質岩	140.0	67.0	19.0	196.3		
第95図14		SD02		置き磁石	砂岩	320.0	188.0	89.0	4330.0		
第95図15	PL38	SD02		石製品No.1	セリサイト質 凝灰岩	27.0	28.0	8.0	7.7		

第15表 東中曽根遺跡 金属器観察表

図版No	写真No	遺構名	取上げNo	遺物名称	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	高さ (mm)	重さ (g)	備考
第95図17		SD02	埋土	刀子	鉄	118.0	19.0	7.0	13.8	
第95図18		X V A11	検出面	返りのある鉄板	鉄	72.0	49.0	5.0	58.5	・大1・中5・小・38・総多数

(4) 東條遺跡の調査



- 遺跡の種類：集落遺跡
- 主な時代：古墳時代後期～平安時代中期
(7世紀～9世紀)
鎌倉時代後期～室町時代中期
(13世紀後半～15世紀)
- 遺跡の性格：
 - ・古墳時代後期に大規模な新興集落がつけられ、奈良時代以後、規模を縮小して平安時代中期ころまで続く。
 - ・鎌倉時代後期に街道と門前集落がつけられ、室町時代には街道整備と集落が発展する。

(4) 東條遺跡の調査

1. 調査の概要

(1) 調査期間

- 本発掘調査・・・①平成14年4月22日～11月25日
 ②平成15年4月14日～7月25日
 ③平成17年8月1日～12月9日
 ④平成18年4月3日～12月15日
 ⑤平成19年4月2日～11月30日
 (試掘調査：平成13年12月20日)

(2) 調査面積

15,666 m²

(3) 調査担当

- 本発掘調査・・・①伊藤友久 豊田義幸(7月まで) 町田勝則(8月より)
 ②豊田義幸 寺内貴美子(4月のみ) 町田勝則(7月まで)
 石神周蔵(6月より)
 ③小林秀行 町田勝則(10月まで)
 ④岡村秀雄 小林秀行 山崎まゆみ(11月より)
 ⑤岡村秀雄(10月まで) 小林秀行 市川桂子
 (試掘調査：上田典男 町田勝則)

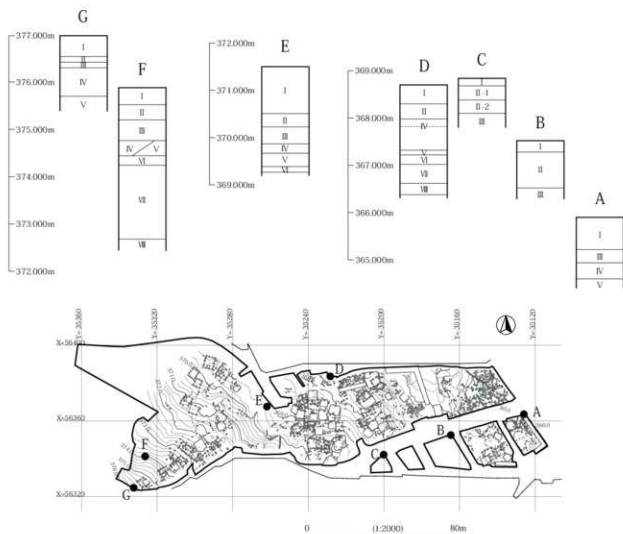
2. 遺跡の概要

(1) 立地

東條遺跡は長野盆地南部の千曲市八幡に位置する。千曲高原面をつくっている旧崩積土(約10万年前)の再移動による土流堆積物で形成された押し出し地形の末端部で、標高367m～399mにある。千曲高原面を開析している谷頭を頂点として北東方向に扇状に広がり、遺跡の東側は千曲川の氾濫原に接している。基盤となる土流堆積物は新期嫉捨土流堆積物(3,250±260年前¹⁴C)に属し、淘汰の悪い安山岩(三峯火山岩)の亜角礫から亜円礫を多量に含み、基質は砂質の泥や粘土である。

(2) a遺跡の範囲と調査区

東條遺跡は、弥生時代から平安時代の集落遺跡として千曲市遺跡分布図(118)に記載されているが、既知の調査事例はない。遺跡周知化の範囲は、字切り図に示された東條地籍にほぼ相当し、東側は尻沢川までの範囲を指定する。今回の道路新設事業は、周知化された遺跡範囲のほぼ中央部分が記録保存の対象となり、現状では標高367m付近のみが水田や畑地で、ほかの大部分が宅地となっている。調査は用地取得とともに随時進められ、結果として5回(本発掘調査①次から⑤次)にわたり実施された。③次調査では、埋蔵文化財の包蔵が知られていない時代(中世遺構)を確認し、その主体部が八日市場地籍に広がると予想されたことから、八日市場地籍を含めた記録保存の措置が取られる方向となった。④次調査では、この中世遺構面の主体部を調査し、さらにその下の古代遺構面の調査を行った。古代遺構面は、東條地籍からつながっており、それと同一の集落跡であると考え、八日市場地籍は新発見の遺跡地ではなく、東條遺跡の一部、すなわち遺跡範囲の拡大と判断されて遺跡地図への搭載と周知化が図られた。⑤次調査の結果、東條遺跡古代遺構面は、八日市場地籍全域ではなく、一部にのみ広がっていることが判明し、中世の



第7図 東條遺跡 土層柱状図

遺構而すべてが東條遺跡古代面と空間的に重複するものではないことが理解された。本報告を受けて、改めて八日市場地籍に位置する中世遺構面の遺跡周知化については、遺跡名称の再検討を図るべき必要があると考えられる。

b 基本層序

調査時の現況は宅地、畑または水田である。調査の結果、基本層序を以下のとおり確認した。

A・B・C地点

I層は10YR5/1 褐灰色粘土、II層は粘質土で、ともに旧耕作土である。水田土壌では鉄分沈着により分層できる箇所がある（II-1 II-2）。III層は10YR2/1 黒褐色粘質土で古代の遺物包含層である。IV層は暗黄褐色土でIII層とV層の漸移層である。V層は10YR5/6 黄褐色細粒砂で地山となる。

D地点

I層は5Y4/2 灰オリーブ色土で現耕作土である。鉄分の沈着の多少で3層に分かれ硬くしまる。II層は礫層である。上部は5Y4/2 灰オリーブ色土となる。III層は砂礫層。IV層は10YR7/1 灰白色粘質シルトで風化礫を含む。上部は砂層である。これらの砂礫層（III層、IV層）はA、B、C地点では確認されない。南西方向からの押し出しの堆積物と考えられる。V層は10YR2/1 黒色土で古代遺物包含層である。礫径5cmを含む。色調によりV-a、V-bに分層できる箇所もある。VI層は7.5Y7/1 灰白色粘質シルトで古代検出面である。VII層は10YR2/1 黒色土。硬くしまりよい。VIII層は砂礫層である。

E地点

I層は道路構築土。II層はかく乱。III層は5BG2/1 青黒色土で拳大～アズキ大の礫を含む。粘性としまりあり。IV層は10YR3/3 暗褐色礫層である。人頭大～卵大の礫を含む。粘性なし、しまり弱い。V層は10YR3/2 黒褐色土で遺物包含層である。礫を含む。VI層は5BG2/1 青黒色砂質～粘質土で古代検出面である。粘性あり、しまり弱い。

F地点

I層は現耕作土。II層は旧耕作土。III層は7.5YR3/2 黒褐色土で遺物包含層である。アズキ大～拳大の礫、炭化物を含む。粘性弱い。IV層は7.5YR4/3 褐色砂質～シルトで中世第1検出面である。アズキ大の礫多く、帯状に含む。粘性、しまり弱い。V層は10YR2/3 黒褐色土で、IV層と同じ中世第1検出面である。アズキ大の礫、炭化物粒子を含む。粘性弱く、しまりよい。VI層は10YR3/2 黒褐色砂礫層で中世第2検出面である。粘性弱く、しまりよい。VII層は10YR2/3 黒褐色礫層。基質はシルト～粘土で、古代遺物包含層である。人頭大～拳大の礫を含む。粘性、しまり強い。VIII層は7.5YR3/2 黒褐色土で古代検出面である。粘性ややある。

G地点

I層は現耕作土。II層は黄色砂質シルトで、上面は中世第1検出面である。I層とII層の間に包含層があったと考えられるが、耕作土により削平されていると思われる。III層は10YR3/4 暗褐色砂質シルトで、中世第2遺物包含層である。拳大の礫を含む。粘性あり、しまり弱い。IV層は10YR3/2 黒褐色土まじり砂礫層で、上面は中世第2検出面、下面は古代検出面である。

(3) 調査結果

発掘調査の結果、古墳時代後期末から戦国時代にわたる集落跡を確認した。記録保存した遺構は、竪穴住居跡75軒、掘立柱建物跡51棟、溝跡31本、土坑2670基、土壇墓3基、焼土跡14基、集石跡5基、遺物集中17箇所、出土遺物には土器コンテナ400箱・土製品232点・石器549点・金属製品694点（銭363点）・木製品コンテナ146箱・動植物遺存体209資料がある。遺跡は時間的に7世紀前半から10世紀初頭までの古代と13世紀から16世紀までの中近世、2つの時期に分けて考えることができた。

東條遺跡古代面

遺構の調査所見と出土遺物を分析した結果、集落は概ね6つの時期に区分して考えることができた。古墳時代後期（古墳V期）、古代1期～古代V期である。古代集落の中心的な時期は平城京遷都以前にあり、古墳時代後期（竪穴住居跡18軒と掘立柱建物跡1棟）、古代1期（竪穴住居跡13軒）、古代II期（竪穴住居跡13軒と掘立柱建物跡5棟）である。奈良時代以後（古代III期以後）は、竪穴住居跡3～4軒程度が集落内に一定の間隔をあけて配置され存続していく状況となる。

東條遺跡中世面

発掘調査の結果、遺跡の形成期は鎌倉・室町時代にあることが分かった。調査所見と出土遺物を整理した結果、集落は概ね2つの時期に区分して考えることができた。鎌倉時代後期から室町時代前期（中世第2検出面相当）と室町時代中期から戦国時代（中世第1検出面相当）である。前者は掘立柱建物跡と井戸跡により集落構成がなされ、後者はそれらに加え新たに方形竪穴建物跡や敷き石遺構が施設され集落構成が図られている。

3. 遺構と遺物（古代）

(1) 古墳時代から古代

①竪穴住居跡（SB）

SB01（第128図、第181図 P L 43, 68）

位置：XIX A - 09

検出：黒色土の掘り下げ中、バレーボール大の礫を数個確認した。その状況がカマド袖石の配列に似る

ことから、住居跡の存在を想定し調査に入る。

規模：残存長（296cm × 244cm）、全体形状は不明。

埋土：黒色土。

構造：カマド想定部分以外は、全体形状を推定できる痕跡は確認できなかった。ただし礎周辺部分に焼土粒が散在する面を確認したことから、そこを床面と認定した。遺物の出土状況から判断して、北側の礎がカマド燃焼部あるいはカマド本体にあたる。

遺物出土状況：カマド本体と考えられる北側の礎内より、甕形土器一個体分が壊れた状態で出土した。またカマド南側の礎集中（カマド崩壊の残骸か）にて黒色土器の坏（1～3・6）と皿（6）がまとまって出土した。

遺物：第181図1～6は黒色土器A類の坏。すべて底部回転ヘラきり、体部下半を回転ヘラケズリ成形する。1はNo.2、3はNo.6の出土で、ともに口径13.0cm。2はNo.3出土で口径16.2cmが測られる。4と5はNo.8出土で、器高5.0cm未満、口径15.0cm。カマド部より出土しているためか、内面の脱色・剥落がある。6はNo.1出土で浅い皿様の坏。7はNo.4出土で、黒色土器B類の皿形土器B形態に相当する。口径12.4cm。8はコの字形口縁の武蔵型甕の一括個体でカマド本体中のNo.8出土。9は須恵器甕形土器A類の口縁部破片で埋没土中の出土。

時期：黒色土器A類にB類の皿形土器、武蔵型甕の存在、土師器坏類の不在などの特徴から古代IV期（9世紀前半）に該当する。

S B 0 2（第128図 P L 43）

位置：XIX A - 09・10

検出：自然流路と考えられるSD02の埋没土掘削中に、それとは形状の異なる直線的なラインの黒色土の落ち込みを確認した。SD02よりも古いと考えられる住居跡を想定し調査に入る。

規模：残存長（470cm × 140cm）、深さ-40cm、形態不明。

埋土：黒色土の単純堆積。

構造：確認時の南側プランのみを検出。壁に沿って幅10cm程の周溝が巡る。床面は平滑な面をそれと認定したが、硬化の度合いは弱く判然としない。

遺物出土状況：埋土中より土器の小破片が出土しているが、本跡の時期を決定できるほどの資料はない。

遺物：土器の小破片。

時期：不明。

S B 0 3（第128図、第181図 P L 43, 68）

位置：XIX B - 13・18

検出：自然流路と考えられるSD04の埋没土掘削中に、カマド袖石と考えられる礎を確認した。さらにこの礎の東および西側に直線的な住居プランを想定できる色調の違いを認めたことから、住居跡を想定して調査に入る。

規模：残存長（508cm × 428cm）、深さ-14cm、主軸方向N67°W、形態不明。

埋土：黒色土の単純堆積。

構造：カマド部の遺存状況では、両袖石及び燃焼部が良好に残る。住居の輪郭では西側が明瞭に残り、東もやや明瞭。南北ラインは残存していない。床面には本跡に伴うと考えられる柱穴が6基（Pit1～Pit6）ある。

遺物出土状況：埋没土中より土器小破片が出土。カマド内及びその周辺部にほぼ完形に近い土器が出土した。

遺物：第181図10～12は非口クロ土師器。10は屈折した口縁部をもつ環形土器で、内外面をいいにナデ調整仕上げされている。No.7出土の完形個体。口径12.6cm、器高4.4cm。11は掘り

方出土の環。外面はケズリ成形の後、ナデ調整される。口径 13.0cm、器高 4.3cm が測られる。12 は内外面でいねいにミガキ調整した深い鉢型の環。器高 6.1cm が測られる。13 は埋没土出土の黒色土器 A 類の環。底部回転ヘラ切り離し、体部下半は回転ヘラケズリ調整である。口径 14.7cm が測られる。14 も埋没土内出土。須恵器環 A 類、ヘラ切り離して口径 14.1cm。15 は須恵器の環蓋。体部表面はケズリ調整。埋没土出土。16 は高環形土器の完形個体で No.1 出土。坏部は椀形で口径 14.4cm。17 はバケツ形をした小型の甕。No.6 出土。18 ~ 22 は長胴甕。18 と 19 はナデ調整の甕 A 類。18 は口縁部破片で、No.8 と No.6 の出土片が接合する。19 は No.5 の出土。20 は No.4 出土。21 と 22 はハケ調整の甕 B 類。21 は No.9 出土。22 は埋没土内出土。23 は内外面を横方向のミガキ調整をした甕形土器。No.10 出土のほぼ完形個体。

時期：黒色土器 A 類の存在と、ナデ調整の甕 A 類、ヘラ切り須恵器環 A 類が存在するなどの特徴から古代Ⅲ期（8 世紀後半）に該当する。



SB03 出土の土器集合

SB04 (第 129 図、第 181 図 P L 43)

位置：XIX B - 13

検出：SB03 の床面を精査中に確認するが切り合い関係の新旧は確認できなかった。北側は SB05 を破壊して構築されている。

規模：残存長 (460cm × 200cm)、深さ - 10cm、隅丸方形か？

埋土：黒色土の単純堆積。

構造：カマドは検出できず。床面の調査時に確認した SK141、SK146 ないしは SK147 が主柱穴と考えられる。

遺物出土状況：遺物は埋没土中より土器の小破片が出土したが、検出状況が悪く、本跡に伴い時期決定の判断根拠となる遺物は得られていない。

遺物：第181図24はハケ調整の土師器長胴甕、口縁部の破片。埋没土中の出土。

時期：時期不明だが、SB05との切り合い関係から、それよりも新しい古代Ⅰ期（7世紀後半）以降と判断でき、SB03と同時に検出したものの、それが古代Ⅲ期（8世紀後半）であることから、すくなくともⅢ期以外のどこかということになる。

SB05（第129図、第182図、第200図 P L 43, 68）

位置：XIX B - 08・13

検出：複数の土坑により破壊を受け南側はSB04により壊される。埋没土の大部分は自然流路のSD04により削り取られている。確認状況は良好ではないが、床面と考えられる平坦面の存在から住居跡を想定した。

規模：残存長（484cm × 232cm）、深さ-18cm、隅丸方形か？

埋土：黒色土の単純堆積。

構造：南側壁のラインは明瞭。床と考えられる平坦面がある。カマドは確認できない。本跡に伴う柱穴も不明である、複数の柱穴が存在することから、掘立柱建物跡が重複している可能性がある。

遺物出土状況：遺物は破片資料が中心で、数は少ない。

遺物：第182図1はNo.1出土の須恵器模倣の環でドーム形の蓋状の形態である。風化著しいが、内面は黒色処理をしている。底部はヘラケズリ調整である。口径11.0cm、器高3.5cmが測られる。2と3は非ロクロ土師器の環類。2は埋没土1層の出土で、1の形態に近い。口径13.0cmが測られる。3はNo.2出土で口径13.0cm、器高3.8cm。底部は平底で全体はバケツ形である。また南壁に近い床面から棒状礎が13点出土しており、こも編み石と考えられる。第200図1は安山岩材の敲石で下端の敲打痕がある。1200.0gが量られNo.15の出土。2は打ち欠きの石錘。安山岩材で1/2残欠。

時期：非ロクロ土師器の環類が主体を占め、須恵器の出土量は少ない。須恵器模倣の環（第182図1）ほかの特徴から判断して、古墳時代の終末ころに比定できる。本跡の検出状況から厳密な時期決定は難しいが、古墳時代Ⅴ期（7世紀前半）と考えておく。

SB06（第129図、第182図 P L 43, 44）

位置：XIX B - 19

検出：自然流路と考えられるSD04の埋没土掘削中に、方形状を想定できる直線的な落ち込みを確認した。形状と落ち込みの規模から住居跡を想定し調査に入る。

規模：残存長（268cm × 248cm）、深さ-8cm、隅丸方形か？

埋土：黒色土の単純堆積。

構造：カマドは検出できなかった。本跡に伴うと考えられる柱穴は、SK211とSK210である。床面の硬化は認められないが、平坦な面があり、そこを床と判断した。住居の輪郭では南側及び西側の一部が残るのみ。

遺物出土状況：埋没土中より土器小破片が出土。

遺物：第182図4は南側の壁よりの床面にまどまって出土した個体No.1で、ミガキ調整の壺形の甕である。

時期：内外面をていねいにミガキ調整した甕の存在から、古代Ⅱ期以前と考えられる。遺構内の出土遺物は検出状況から本跡に伴う可能性は低いものばかりであるが、須恵器環類がごくわずかであることから、概ね古墳時代終末から古代Ⅰ期前後と想定できるか。

SB07（第129図、第182図 P L 44）

位置：XIX G - 13

検出：基本土層（Ⅳ層）の除去後、精査により方形状の落ち込みを確認した。やや規模は小さいが堅穴

住居跡を想定し、調査に入る。

規模：残存長（140cm × 100cm）、深さ-14cm、隅丸方形か？

埋土：黒色土の単純堆積。

構造：カマドや柱穴などは確認できない。規模から判断して、住居ではなく、竪穴状の遺構と考えるべきか。

遺物出土状況：埋没土からも出土遺物はほとんどない。

遺物：第182図5は床面出土の土師器長胴裏の底部破片。外面は劣化が著しく、調整の特徴は観察できない。

時期：時期決定は難しい。

S B 0 8（第130図、第182図、第200図 P L 44, 68）

位置：XIXG-12・13

検出：基本土層（IV層）の除去後、精査により方形の落ち込みを確認する。形状とその規模から竪穴住居跡を想定して調査に入る。

規模：残存長（456cm × 404cm）、深さ-20cm、隅丸方形。

埋土：黒色土の単純堆積。

構造：カマド及び柱穴は検出できなかった。掘り込み以外の施設が確認できていない点から、竪穴住居を認定するには無理がある。何らかの機能をもった竪穴状遺構と考えるべきか。

遺物出土状況：埋没土中より土器の微小な破片が出土している。

遺物：第182図6は須恵器盤脚部。No.8出土。7は須恵器坏蓋、1/2程度の破損個体。つまみ部は宝珠状の低い山形で、体部外面は1/3程度をケズリ調整で仕上げている。返しはほぼ直。No.51出土。8は須恵器坏A類の完形個体。底部回転糸切り離しで、口径13.0cm、器高4.5cm、No.25出土。SB24出土例（第186図5）と類似した資料。第200図3は砥石1/2欠損品。凝灰岩材。ほかに三脚盤の足であろうか、土製で角状をした破片資料が1点（取り上げNo.5）出土している。

時期：床面直上より須恵器の坏A類（糸切り離し）底部破片が出土していること、No.25の坏A類から、古代Ⅲ期（8世紀後半）と判断できるか。ことにNo.25（第182図8）が、同時期と判断したSB24出土資料とほぼ同形の坏である。両住居間の同時性あるいは関係性を示唆する。

S B 0 9（第130図、第182図、第200図 P L 44, 68）

位置：XIXG-02

検出：表土を掘削し遺構の検出を行った結果、黒褐色土がほぼ方形に落ち込むのを確認した。北側および西側は生活道路域となるため、次年度以降の調査対象とした。形状・規模から住居跡を想定し調査に入る。

規模：残存長624cm × (304cm)、深さ-36cm、隅丸方形か？

埋土：3層ある。

構造：カマドは検出できない。未調査区の北側に存在する可能性が高い。床面は良好で主柱穴と考えられる柱穴2基と、その中間に直径45cm程の土坑（Pit2）が1基存在している。

遺物出土状況：埋土中の土器片は少量である。

遺物：第182図9は主柱穴と考えられるPit3の埋没土中から出土した。非ロクロの土師器坏C類である。外面はケズリ調整後、口縁部付近をナデ仕上げし、内面はていねいにミガキ調整される。口径11.5cm、器高4.7cmが測られる。第200図4は磨製石包丁。杏仁形で2穴式。1/2欠損例でNo.2の出土。珪質岩材。このほか、黒曜石製の石核33.2g、No.7出土と石礫の未製品No.1出土がある。

時期：Pit3出土土器の特徴から、古墳時代V期（7世紀前半）ころと推定できる。

S B 1 0 (第 131 図、第 182 図、第 200 図 P L 44, 45, 68)

位 置 : X I X G - 0 4

検 出 : 基本土層 (V 層) の下面に多量の土器小破片を確認した。黄褐色砂層面にて V 層と同質の黒褐色土の方形状の落ち込みを認めたため、住居跡を想定して調査に入る。

規 模 : 長軸 590cm × 短軸 472cm、深さ - 30cm、主軸方向 N65° E、隅丸方形。

埋 土 : 3 層に区分。

構 造 : カマドは焼成部を残し崩落・破壊した状態。煙道部は明瞭に認められ、焚口部からは約 150cm が測られる。床面は比較的良好に遺存していた。西側にはカマド焼成部に認められたような炭化物・焼土粒の分布が確認された。支柱穴は 4 基がある。

遺物出土状況 : 埋土中から比較的多くの遺物が出土したが、床面のものは少ない。

遺 物 : 第 182 図 10 は非ロクロ土師器の環で No.22 出土。口縁部はやや外反する鉢形の形態。11 は内面黒色処理した高環。脚の高さが低く、器高も 8.45cm 程度である。12 ~ 15 は須恵器の環 A 類。12 は No.19 出土。ヘラ切り後、粗雑にナデ調整。口縁はやや外反する。13 ~ 15 は外面にロクロ成形痕を明瞭に留め、底部やや凸気味で底部切り離し後、ナデ調整で仕上げられている。13 は検出面の出土。14 は No.11 出土、15 は No.13 出土である。16 と 17 は須恵器環蓋。16 は扁平のつまみ部で体部外面は 1/2 弱をケズリ仕上げ。返しは短く直に立つ。No.21 出土。17 もほぼ同様な調整手法で仕上げられているが、つまみ部は山形で体部中央は厚みがある。No.42 出土。図示していないが、No.10 出土もほぼ同形態である。18 と 19 は須恵器環 B 類。18 はやや軟質な感があり、口径 12.5cm、器高 4.3cm が測られる。底部やや凸で、ヘラ切り離し後、ていねいなナデ調整仕上げ、No.12 出土。19 は回転ヘラ切り離し、底部には「×」印がある。良好な焼成で硬質、No.19 の出土。20 は円面硯。No.18 出土で、1/10 程度の破片。側面に窓状に透かしが入るが、破片のため形状は不明。このほかに埋土中から、須恵器の高盤の脚、土師器のナデ調整の長胴甕 (No.3) の出土がある。第 200 図 5 は黒曜石製の石錐で床面出土。先端部には明瞭な摩耗痕が認められる。6 は使用痕のある破片。黒曜石材で埋没土出土。7 と 8 は磨石。7 は長さ 2.0cm ほどの球状を呈する安山岩材で、一端が極度に摩耗し平滑化している。No.34 出土。8 は安山岩材で表面が摩耗し、側端の一端は剥落している。No.2 出土。9 は多孔質の安山岩材で、表面にアバタ状で -0.5cm ほどの凹部がある。715g が量られる。No.1 の出土。10 は砥石 1/2 残欠品。表裏は面的に使用されており、端部に断面 V 字状の使用痕 (溝跡) がある。11 は軽石でカマド内より出土している。12 は打ち欠きの石錘。砂岩材で No.23 の出土。

時 期 : 非ロクロ土師器の環と黒色処理の高環がわずかに残存し、須恵器環 A 類はいずれもヘラ切り離し手法である。また須恵器環 B 類の伴出があり、須恵器の高盤の脚の存在、環蓋は体部外面の削りが多く、折り返しが垂直となるなどの特徴がある。古代 I 期後半 ~ II 期 (7 世紀終末から 8 世紀初頭) と考えられる。

S B 1 1 (第 131 図、第 182 図 P L 45, 69)

位 置 : X I X G - 0 3 ・ 0 8

検 出 : 基本土層 (IV 層) を除去し遺構検出の精査を行った。その結果、方形状で上面に遺物の散布を認める落ち込みを確認し、竪穴状遺構を想定し調査に入る。

規 模 : 長軸 412cm × 短軸 332cm、深さ - 14cm、隅丸方形。

埋 土 : 暗褐色土の単純堆積。

構 造 : 住居跡を認定するに値する根拠はない。すなわちカマドや柱穴、平坦な硬化した床面の検出はない。全体の形状や規模から、調査時の所見どおり、何らかの機能をもつ竪穴状遺構と考えられる。

遺物出土状況：埋土中から遺物が極少量出土した。

遺物：第182図21は非ロクロ土師器の坏D類。外面の遺存状況は悪く、調整は判断できないが、内面は黒色処理し、良好なミガキ調整で仕上げられている。No.6出土。22は非ロクロ土師器の鉢口縁部の破片。No.1の出土。23は土師器の長胴甕の口縁部破片。口唇は厚くやや外反、頸部は少しいねいな横ナデにより整形される。内面には輪積み痕を残す。

時期：出土遺物が極めて少量であり時期の判定は難しい。少ない資料から判断すると非ロクロ土師器の坏類の存在から、古墳時代終末から古代I期（7世紀代）と判断できるか。

S B 1 2（第132図、第182図 P L 45, 69）

位置：XIX G - 13・14

検出：基本土層（IV層）を除去し、遺構検出の精査を行った結果、方形状で煙突状の突出部をもつ落ち込みを確認した。竪穴住居跡を想定し調査に入る。

規模：長軸452cm×短軸376cm、深さ-18cm、主軸方向N63°E、隅丸方形。

埋土：2層の自然堆積。

構造：住居跡の平面形状全体を検出した。カマド煙突部は残存するが、袖部および燃焼部の遺存状況は不明瞭。燃焼部に相当する部分に焼土粒の散布が認められたに留まる。柱穴はなく、床面はやや硬化した平坦面で、床下に掘り方が明瞭に認められた。

遺物出土状況：埋土中をはじめ、ほとんど出土していない。

遺物：第182図24は、高盤の盤状部分で脚部を欠損する。床面より若干浮いた位置（No.1）で出土した。ロクロ成形後、ていねいなナデ調整により仕上げられている。

時期：須恵器の高盤は、古代I期からIII期ころまで存続する。埋没土の出土遺物には、非ロクロ土師器は少なく須恵器破片が多いなどの傾向を考慮すると、概ね古代II期（8世紀初頭ころ）であろうか。

S B 1 3（第132図、第182図 P L 45, 69）

位置：XIX G - 03

検出：基本土層（IV層）を除去し、遺構の検出を進めた結果、ふたつのコーナーをもつ方形状を予想させる落ち込みを確認した。東側は畑造成時のコンクリート壁で破壊されており、確認できなかった。

規模：（長軸308cm×短軸124cm）、深さ-20cm、隅丸方形か？

埋土：暗褐色土の単純堆積。

構造：カマドや柱穴、床と考えられる平坦な硬化面は検出できず、住居跡を認定できる根拠はない。全体の形状や規模から、調査時の所見どおり、何らかの機能をもつ竪穴状遺構と考えられる。

遺物出土状況：埋土中からも、ほとんど出土していない。

遺物：第182図25は、ミガキ調整の甕形土器で、口縁部は強く外側に屈曲し如意形である。No.2の出土。

時期：25は本跡の床面より若干浮いた状態で出土しており、これをよりどころとして時期を推定すると、概ね古代II期（7世紀後半）以前と判断できる。少ない出土資料中には歴史的須恵器の坏類の出土がないことから、古墳時代終末を中心に、古代I期ころに収まると考えられる。

S B 1 4（第132図、第182図 P L 46, 69）

位置：XIX A - 17

検出：基本土層（III層）を除去し、IV層上面にて方形状をした落ち込みラインを確認し、調査に入る。

規模：（長軸396cm×短軸392cm）、深さ-18cm、隅丸方形。

埋土：暗褐色土中に黄褐色のブロック土を混じる土層の単純堆積。

構造：掘り込みは深く、地山面を掘削して構築されている。カマドや柱穴は検出できず、床は平坦である。周溝と考えられる溝が巡るが北西コーナーから北側にかけて不明瞭となる。

遺物出土状況：埋土中から、ほとんど出土していない。

遺物：第182図26と27は非ロクロ土師器の環類。両資料とも内面していぬいなミガキ調整がなされる。

26は口径10.2cmが測られ埋没土内出土。27は口縁部がやや外反する器形で、口径13.8cm、器高6.4cmが測られ、No.1出土。28と29は須恵器環類でいずれも埋没土中より出土。28は底部に回転ヘラケズリ調整が施された環。立ち上がりは強く内傾し、受け部はやや溝状。口径10.8cm、器高4.0cmが測られる。29も28とほぼ同形態である。30は須恵器の環蓋。口径10.8cm、器高2.4cmが測られる。天井部外面には刻目で「一」が記される。屈曲部は削りにより凹線状となる。31は須恵器の鉢。口径16.8cmを測る大形なタイプで、胴部下半に最大径がある。口唇部は角頭状で体部は横方向のナデ調整、底部は回転ケズリ成形で仕上げられている。胎土中には黒色の不純物を多く含有している。

時期：非ロクロ土師器の存在と返しのある須恵器環H類及び椀形の蓋から、古墳時代V期（7世紀後半）ころを想定できる。

SB15（第131図 P L 45）

位置：XIXG-04

検出：SB10の調査時に、カマド側に拡張もしくは別の住居を思わせる埋没土の堆積を認める。SB10のカマド主体部を大きく上回る範囲（煙道部に突出する）であり、別の住居の切りあいを想定し調査に入る。

規模：隅丸方形か？形態不明。

埋土：2層の単純堆積。

構造：調査の結果、該当部分は、SB10の床面より下位まで掘り込まれていたが、SB10カマドとの重複は確認できず、平面プランにも北側以外に重複は認められない。このことから別の住居であるとの明確な根拠は得られず、SB10の建て替えもしくは何らかの付属施設と考えるべきか。カマドの重複や切り合いがなく、SB10の輪郭のほうが、本跡の輪郭よりも小さいことから、建て替えてあれば、規模の縮小ということになる。カマド側に敷設された施設と考えるのが、状況から一番妥当であるか。ただし、その機能については不明である。

遺物出土状況：埋没土より土器破片が極く少量出土。

遺物：SB10のカマド内から高温加熱を受けた土師器環B類の口縁部破片が出土している。

時期：SB10のカマド内の土師器環B類が本跡に関わる遺物であれば、古代II期（7世紀終末から8世紀初頭）ころと考えられ、SB10とも大差がないことになる。

SB16（第133図、第134図、第183図、第200図 P L 46, 69）

位置：XVII E-19

検出：基本土層（VI層）上面にて黒色土の落ち込みを確認する。形状と規模から住居跡を想定し調査に入る。

規模：長軸800cm×短軸736cm、深さ-44cm、隅丸方形。

埋土：4層に区分でき、いずれも単純堆積と考えられる。

構造：カマドは北側のほぼ中央に施設される。カマドは崩壊が著しく、袖部及び焚口部は判然としにくい。構造材と考えられる礎が複数散乱した状態で確認された。火床は明瞭に遺存し硬化している。主柱穴は4本が確認でき、深さ40cm～50cm、断面の形はバケツ形である。幅20cm、深さ6cmの周溝は、カマドの付設されている北側を除いて設けられている。床面は硬化し、部分的に貼り床が認められた。

遺物出土状況：大部分の遺物は、埋没土に拳大の小礫とともに包含されていた。特筆すべきは小形の珠紋鏡の出土が1層中にあった。住居廃絶の後、廃棄された遺物が大半を占めるものと考えられる。

遺物：第183図1から3は非ロクロ土師器の坏類。1は平底に近く、やや浅い形状の坏。内面のミガキ調整は顕著で、前段階の有稜を意識するかのようになり1本の沈線(凹線)が走る。埋没土出土。2は深さのある丸底、厚手の坏でほぼ完形。No.16出土。3は外面に横方向のケズリ調整痕を顕著に残し、内面は有稜でミガキ仕上げ。埋没土出土。4は非ロクロ成形の高環の坏部破片。外面も黒色化しており、一部に「く」状の焼成前の刻み?が認められる。No.2出土。5と6は非ロクロの鉢形土器。5は内面黒色処理がなされ、横方向のミガキ調整仕上げ。No.15の出土。6は内外面をていねいにミガキ調整した壺形状の例でNo.7出土。7は須恵器高環の蓋。天井部は回転ヘラケズリで仕上げられ、口縁部は外側をナデによりやや外反させるが、口唇端部は丸状である。No.12出土。8は須恵器の坏身。底部はやや平らで、体部は半分程度を回転ケズリ調整する。蓋受け部は平坦で幅広く、立ち上がりは直立気味である。No.7出土。9と10は土師器の甕。9は外面調整が縦方向のケズリ、内面はていねいに研磨仕上げされる小型の甕である。埋没土出土。10は内外面ともにていねいなミガキ調整で仕上げられた広口の甕で、No.13出土。第200図13は打ち欠きの石錘。川原石の長軸の端部を打ち欠いて製作している。また埋没土出土の珠紋鏡は1/2程度を破損し、全体が変形している。出土状況から判断して廃棄されたものと考えられる。



5B16 出土の珠文鏡 (S=1/2)

時期：非ロクロ土師器の坏類を中心とし、これに高環や鉢、ミガキ調整の甕の出土がある。これら土器の特徴は、古墳時代終末から古代1期にかけての様相である。須恵器高環の蓋の時間的な位置付けは定かにできないが、返しのある須恵器坏も軟質系で器高が低く、返し部の特徴から、古墳終末から古代1期ごろと考えられる。須恵器坏A類さらにはB類の出土がほとんどない点から、古代1期よりも古い段階である可能性が高いが、出土資料の大半が埋没土中であり、本跡の時間的な位置付けは、出土資料と同時期あるいは、それ以前を考える必要があるか。古墳時代終末V期(7世紀前半)を考えておきたい。

S B 1 7 (第134図、第183図、第200図 P L 46, 69)

位置：XVII E - 24・25、J - 04・05

検出：基本土層(VI層)上面にて、幅約8mにわたってL字状に広がる黒色土の落ち込みを確認した。全体の形状から竪穴状の遺構3基が重複していると推定し精査をおこなった結果、3軒の重複と考えられる土質の違いを認め、切り合い関係の最も新しいと判断できる本跡から調査に入る。

規模：長軸580cm×短軸506cm、深さ-40cm、主軸方向N28°W、隅丸方形。

埋土：黒褐色土の単純堆積。

構造：カマドは北西側の辺に付設されている。崩落が著しいが砂と粘土で構築された袖部をわずかに確認した。礫等で袖の芯材とした痕跡は確認できていない。火床部付近は、後出のSK636により破壊を受けている。煙道は残存していない。また本跡に確実に伴うと判断できる柱穴は認められなかった。床面は硬化した平坦面である。

遺物：第183図11と12は非ロクロ土師器の坏類。ともに底部の破片であり、11は鉢、12は小型甕の底部の可能性もある。底部を中心に外面ケズリ成形後にミガキ調整にて仕上げられている。11はNo.14出土で12はNo.11の出土。13～15は須恵器坏類。13は坏H類で、体部外面の

半分程度を回転ケズリ成形している。蓋受け部は凹線状の表現で小さく、立ち上がりは短くやや内傾している。本跡の床下（掘り方）より出土。14は外面にロクロ目を顕著に残し底部はヘラ切り離し手法。口径12.4cm、器高4.2cmが測られる。No.7出土。15は軟質で大形の坏A類で底部ヘラ切り離し。口径14.7cm、器高4.3cmが測られる。No.2及びNo.3出土。16は須恵器坏B類の完形品でNo.12、カマド内の出土。高台は四角状で平面設置。口径11.5cm、器高6.8cmが測られ深い。17は須恵器坏B類。底部は回転ヘラ切り離し後に高台貼り付け。高台は外面接地。口径14.0cm、器高4.0cmが測られる。No.17出土。18は須恵器坏蓋。外面は半分程度回転ヘラケズリ。折り返しは内傾し外側に屈曲する形態。No.4出土。19は土師器甕体部の破片。内外面はていねいなハケ調整がなされる。No.13出土。第200図14は打ち欠き石錘。15はNo.1出土の棒状の敲き石。上端部は敲き痕跡が残り、下端部は刺離状に欠損している。

漆紙様付着物について（写真）

本跡の埋没土上層にて出土した須恵器坏A類（取り上げNo.1）の内部面に漆紙様の付着物が確認された。肉眼観察で有機質と判断したが科学的な分析は実施できなかった。漆紙の可能性が高いことから、赤外線カメラで表裏面を観察した結果、明らかな墨痕や文字等は認められなかった。しかしながら判別の難しい部分もあり、県立歴史館へ観察協力を求めたところ、資料の裏面に文字らしき痕跡のある点の指摘を得た（※）。



SB17出土No.1の須恵器坏A類と漆紙様付着物



漆紙様付着物の赤外線写真

赤外線写真の中央部に縦方向に2～3文字が存在する可能性もあるが、文字らしき痕跡の大きさが1.0cmほどで、その並びも不揃いなこと、痕跡の濃淡が不自然なこと、資料の観察方向により確認できなくなるなどから、文字の可能性は低く、その判別・判読は難しいとの結果に至った。

※ 長野県立歴史館考古資料課水沢教子氏、同館総合情報課福島正樹氏・傳田伊史氏よりご指摘を受けました。

時期：非ロクロ土師器の坏類がごくわずかに組成し、あるいは消滅の段階にあり、須恵器坏類はAそしてBがある。須恵器坏には糸切り底が登場していないことから、概ね古代Ⅱ期（7世紀末から8世紀前半）からⅢ期（8世紀代）と判断できる。ただしSB19及びSB20（古代Ⅰ期～Ⅱ期の初頭）との切り合い関係から、古代Ⅱ期を想定しておきたい。

SB18 (第135図、第183・184図、第200図 P L 46, 47, 69, 70, 80)

位置: XVII J-04・05・09・10

検出: 基本土層(VI層)上面にて、南北方向に一辺約5mの方形状に広がる黒褐色土の落ち込みを確認した。全体の形状から竅穴住居跡を想定し調査に入る。

規模: 長軸456cm×短軸476cm、深さ-35cm、主軸方向N46°E、隅丸方形。

埋土: 黒褐色土の単純堆積。

構造: カマドは北東側の辺に付設されている。崩落が著しいが、砂質土により構築された袖部が明瞭に残る。また煙道部分は先端の大半をSB19に破壊されるが、カマド側は良好に遺存していた。また本跡に伴うと考えられる柱穴は5基確認でき、コーナーに3基と中央部分に2基認められる。

遺物出土状況: 遺物は小破片が多いが、床面直上の中央部分に甕と壺が入れ子状に出土した。取り上げ番号は、No.6・No.7・No.8である。

遺物: 第183図20から24は非ロクロ土師器の坏類。20はNo.14出土のほぼ完形の個体。外面ケズリ調整によりていねいに仕上げられている。口径11.3cm、器高3.7cmが測られる。21～24はすべて埋没土中の出土。21は丸底でやや深い例、22・23・24と次第に平底傾向が強くなる。25は筒型の土器底部破片。全体の形状は不明である。底部付近の器厚は1.0cm、底部の器厚は1.3cm強が測られる。26と27は高坏。脚部は中空で棒状。26はNo.17出土。27は埋没土出土。28・29は須恵器坏蓋。28は外面の約1/2程度に回転ヘラケズリ調整し、屈曲部分は沈線様になる。径10.1cm、器高3.2cmが測られる。No.12出土。29は幅1.0cmほどのつまみ状の宝珠がつく。先端頂部がすばまり指でつまむことが難しいことから、形骸化したものか。外面は半分以上に回転ケズリ調整がなされる。径10cm、器高3.2cmが測られる。埋没土中の出土。30は須恵器の鉢形土器。焼成時点で全体が大きく変形する。丸底からの口縁立ち上がりは長い。No.11出土。31と32は須恵器の短頸甕。ロクロ成形痕を残し、底部には回転ヘラケズリ調整痕が窺われる。口部径が広く、短頸甕と考えられるが、甕であれば注ぎ口部分が欠損したものか。31は、わずかだか30と同様に焼成前の変形がある。33は須恵器の甕、No.9の出土。底部はやや尖り気味の丸底で外面は板状工具による敲き締め成形。体部中央付近には凹線が一条巡る。口縁部形状は第184図12と同様な作りである。第184図1～3は小型甕。1は外面ミガキ調整仕上げ。No.3出土。2は外面ハケ調整でNo.4の出土。3は9とほぼ同形・同容量の小型甕。4～6は土師器長胴甕。ハケ目調整仕上げ。4と6は埋没土中の出土。5はNo.2の出土。7はミガキ甕の底部。No.16出土。8～10は土師器の甕。8と10は一穴式。8は口径14.5cm、器高7.8cmが測られNo.8の出土。9は多孔式(8穴)。内外面ともていねいにナデ仕上げされている。器高13.1cm、口径17.4cmが測られる。10は口径16.7cm、器高11.0cmでNo.6の出土。11は須恵器の甕。12は須恵器の横甕。鼓状の体部は輪積みの後、片側を蓋状に接合させて作る手法。内面は凹形のオサエ工具で青海波状に、外面は板状工具により敲き締められている。体部中央には3本の沈線がめぐる。第200図16は大型の凹石。埋没土出土で4450gが量られる安山岩材。凹部は径7.0cmで深さ1.0cmほどの大きさである。このほか、土師器甕?の体部破片を利用した円盤が1点ある。埋没土出土で8.5gが量られる。

時期: 非ロクロ土師器の坏類と高坏、須恵器坏蓋の特徴から古墳時代終末から古代I期が想定される。須恵器坏A類及びB類の出土が埋没土中にわずかに存在するものの、大部分は古墳時代終末期の様相を示す土器であることから、本跡は古墳時代の終末(7世紀前半)と考えておきたい。



SB18 出土の土器一括（甌2点に短頸壺が入れ子状態で出土）

SB19（第135図、第185図、第200図 P L 47, 70, 80）

位置：XVII J-04・05、E-24・25

検出：基本土層（VI層）上面にて一辺約5mの方形状に広がる黒褐色土の落ち込みを確認した。全体の形状から竪穴住居跡を想定し調査に入る。

規模：長軸560cm×短軸512cm、深さ-20cm、隅丸方形。

埋土：黒褐色土の単純堆積。

構造：カマドは確認できなかったが、北東側に径20cmほどの礫及び粘土まじりの砂質土を確認したことから、その周辺部にカマドが存在した可能性がある。床面は平滑であり、小礫混じりの地山層を考えると、砂質土による簡単な床構築があったものか。柱穴は4基を確認し、その内の2基(Pit1及びPit4)が主柱穴と考えられる。

遺物出土状況：南側から南東側にかけて小礫が出土した。状況から埋没土としての流れ込みと考えられ、包含される遺物も少ない。

遺物：第185図1と2は須恵器環A類。1は底部に回転ヘラケズリ調整痕を留める丸底の環。底部がやや平滑なため火身と考えたが、蓋の可能性も残る。胎土に白色の粒子を多く混入するが、焼成は良好。口径10.9cm、器高4.1cmが測られる。No.9の出土。2は底部ヘラケズリ調整で底部と底部が屈折状となる形態。にぶい褐色（7.5YR5/4）で外面にはロクロ成形痕が明瞭に残る。No.25の出土だが、その位置はSB20との重複部分であり、所属は厳密には不明である。3は須恵器環B類。回転系切り手法で高台は平接地。胎土に白色粒子を混入するが、洗練された生地で焼成も良好である。No.1の埋没土上層出土である。4は土師器のミガキ甕。頸部の極めて短い壺形である。第200図17と18は凹石。17は安山岩材で、表面にアバタ状の凹部（径3.0cm、深さ-0.3cm）がひとつある。No.2の出土。18は大型で表面に凹部がひとつある。凹部は径6.0cm、深さ-1.5cmが測られる。5380gでNo.1出土。19は砥石。表裏面に面的な使用とV字ないしはU字状の使用溝が窺われる。

時期：出土資料は良好ではなく、遺物からの時期決定が困難である。住居跡の切り合い関係があり、それより判断するとSB21（古代Ⅳ期）さらにはSB19（古代Ⅱ期）よりも古いと考えられる。おそらくは古代Ⅰ期（7世紀後半）からⅡ期の初期ころ、SB20とほぼ同時期の所属であろうか。

SB20 (第136図、第185図 P L 47, 70)

位置: XVII E - 20・25

検出: 基本土層 (VI層) 上面にて方形状に広がる黒褐色土の落ち込みを確認した。一辺5mほどの規模であることから竪穴住居跡を想定し調査に入る。

規模: 長軸504cm × (短軸436cm)、深さ-28cm、隅丸方形。

埋土: 黒褐色土の単純堆積。

構造: 本跡は調査の初期段階でトレンチを設定した箇所、北東側の立ち上がりは部分的に消失してしまっている。トレンチで失われた部分にカマドが存在したか否かは定かではないが、トレンチ近くの北西壁付近に焼土の残骸が確認できたことから、北東側にカマドが遺存していた可能性はある。床面は平滑であり砂質土による簡単な床構築が推定される。柱穴は5基を確認した。ST07との切り合い関係もあり、柱穴のすべてが本跡に伴うか判断のつかないとの所見がある。Pit6とPit7が支柱穴であろうか。

遺物出土状況: 埋没土中にほとんど遺物はない。

遺物: 第185図5は非クロコ土師器杯。口縁部は直上し、やや深さのある器形で、外面底部付近はヘラケズリ調整で仕上げられている。No.8の出土。6は須恵器杯B類。回転ヘラ切り離し手法で、高台は断面三角の貼り付けで外側接地。口径14cm、器高3.5cmが測られる。硬質でにぶい橙色(5YR6/4)。埋没土中の出土。7は高杯の脚部。杯部内面は良好にミガキ仕上げされる。No.10出土。8は口縁部外反する壺形のミガキ甕。埋没土中の出土である。

時期: 本跡の出土遺物は少ない。No.8とNo.10が床面直上の遺物である。製作手法から考えると古墳時代末から古代1期ないしは2期にあたる。埋没土中の須恵器杯B類は古代1期相当であり、球胴化したミガキ調整の甕もほぼ同時期であることから、床面出土遺物の位置付けも、それらと差ほど時期差を考慮なくともよいと思われる。本跡を破壊して構築されたSB17の所属時期が、古代II期(7世紀終末～8世紀初頭)と判断できることから、それよりも古い段階となり、古代I期(7世紀後半)もしくはII期のはじめごろと考えられる。

SB21 (第136図、第185図、第201図、第205図 P L 47, 71)

位置: XVII J - 05, XIX F - 01

検出: 基本土層 (VI層) 上面にて、方形状に広がる黒褐色土の落ち込みを認め、形状と規模より竪穴住居跡を想定し調査に入る。確認時点で、埋没土の観察からSB19及びSB29を破壊していることが理解された。

規模: 長軸428cm × 短軸504cm、深さ-24cm、隅丸方形。

埋土: 黒褐色土の単純堆積。

構造: カマドは確認できない。南東側の床面近くを中心に焼土と炭化物の分布がある。床面は砂質土で平坦、硬化している。また床面にはアメーバー状に細長い溝状の落ち込みがあり、鍛冶関連あるいは床暖房等の付帯施設を想定し埋没土を掘り下げるが、性格を診断できる根拠は得られなかった。

遺物出土状況: 埋没土中にほとんど遺物はない。中央の炭化物分布付近より板材 (No.1) が1点出土し、南東側の炭化物付近より図化した土器が比較的まとまって出土した。

遺物: 第185図9～18は黒色土器A類の坏類。9は底部回転糸切りで、内面の黒色処理は色落ちした様な状態である。口径12.2cm、器高4.0cmが測られる。No.10出土。10も9とほぼ同形で、口径12.1cm、器高4.2cm。No.26出土。11はNo.14出土で、口径14.3cm、器高3.3cmが測られる。黒色処理の色落ちは著しい。12と13は外面にカキメ様にロコロ成形成を残す。13は

No.28 出土で口径 12.3cm、器高 3.9cm、14 は No.6 出土で口径 12.5cm、器高 4.1cm が測られる。15 は口径 13.1cm、器高 4.7cm。口縁部がやや型崩れして歪んでおり、縁部の内面には燈明痕のような煤状の付着物がある。No.38 出土。16 は No.15 出土で口径 16.3cm、器高 4.4cm が測られる。風化著しく、内面の黒色処理はほとんど色落ちしている。17 は No.24 出土で口径 14.5cm、器高 5.3cm が測られる。18 は口径 14.0cm、器高 4.3cm。16 同様に黒色処理の色落ちが著しい。No.4 の出土。19 は須恵器環 A 類。底部糸切り離して口径 13.3cm、器高 4.0cm。灰白色でやや軟質か。No.25 の出土。20 と 21 は黒色土器 A 類の椀形土器。No.32 出土で口径 15.4cm、器高 4.9cm が測られる。21 は No.35 出土で、口径 14.5cm、器高 5.5cm。高台は高く 1.5cm が測られる。22 は黒色土器 A 類の皿形土器。口径 13.1cm、器高 3.4cm が測られる。No.15 の出土。23 は灰釉陶器の皿。高台は三日月状で口径 14.5cm、器高 3.1cm。埋没土中の出土。24 は土師器の小甕胴部破片。外面にロクロ成形痕を残す。No.36 の出土。25 と 26 は土師器のケズリ甕。外面には明瞭にケズリ調整痕（幅 3.0cm ほどの工具）を残し、内面ハケ調整。25 は No.15・34、26 は No.10・16・18・30・床面・埋没土中の接合個体。第 201 図 1 と 2 は敲石で、集石状に出土した。1 は砂岩材で端部が平坦になるほど使用されている。74.9g で No.7 の出土。2 は棒状の安山岩材の端部を使用している。基部は欠損しており、両端使用か否かは不明。No.6 の出土。3～8 は打ち欠き石錘。いずれも角礫状素材（地山の混入礫）の長軸中央部付近の両端を挟入状に剥離している。3 は 330g、4 は 272g、5 は 389g、6 は 360g、7 は 257g、8 は 432g が量られる。第 205 図 1 と 2 は大きさが 2.0cm ほどある青銅製品で、留め穴が 2 つある。

時期：黒色土器 A 類の環 A 類が充実している点、椀形土器の組成から古代Ⅳ期（9 世紀前半）に位置づけられる。このことはロクロ使用の土師器が存在しない点からもほぼ妥当と考えられる。埋没土中ではあるが、灰釉陶器の皿が 1 点出土しているが、時期的な変差とはならない。



5821 出土の土器集合

S B 2 2（第 137 図、第 185 図、第 201 図 P L 47, 71）

位置：XVII E - 14・19

検出：調査区に設定した排水用トレンチの断面にて、黒褐色土の落ち込み（立ち上がり）を認め、平面精査の結果、竪穴住居跡を想定し調査に入る。

規模：長軸 480cm × 短軸 468cm、深さ - 26cm、隅丸方形。

埋土：黒褐色土の単純堆積。

構造：カマドは北東コーナーよりに存在したと考えられる。カマドの残骸を推定させる礫（30cm ～

40cm)と炭化物の集中がある。炭化物集中箇所には焼土も混じる。柱穴あるいは土坑と判断できる落ち込みを3基確認した。南東側の床面近くに焼土と炭化物の分布がある。

遺物出土状況：埋没土中に多量の小礫が混入しており、土器片等はほとんどない。

遺物：第185図27は須恵器杯蓋。胎土に黒色粒状の不純物を少量混入する。全体形はドーム形で内外面ともていねいな作りである。直径は10.6cm、器高はおよそ3.5cmが測られる。No.1の出土。28～30は須恵器杯類。28は底部平底、蓋の受け部は大きく明瞭で立ち上がりは内傾。口径10.4cm、器高4.0cmが測られる。埋没土中の出土。29は全体形が釜形で底部にヘラ切り離し痕を明瞭に留める。蓋受け部は大きく、凹線様に仕上げられる。立ち上がりは内傾し、長さ1.2cmほどある。No.8出土。口径12.4cm、器高4.9cm。30は底部を平坦に静止ヘラケズリ成形した杯A類。口径12.2cm、器高3.8cmが測られる。埋没土出土。31は一穴式の甕底部破片。No.8の出土。32は土師器長胴甕。外面は縦方向のハケ調整で、内面は横方向のミガキ調整で仕上げられている。No.6出土。33は須恵器長頸壺の底部。埋没土の出土。第201図9は安山岩材の川原石を打ち欠いた石鍾。No.16出土で320g。10はNo.7出土で315gが量られる。砂岩材の川原石を素材としている。

時期：厚手づくりの須恵器杯H類、杯蓋があり、古墳時代終末から古代1期にかけての時期が推定される。埋没土出土ではあるが、ヘラ切り離し調整の杯A類が出現している可能性も高い。切り合い関係のあるSB23の位置付けも定かではないが、本跡がSB23を破壊していることは事実であり、相対的な判断として古代1期（7世紀後半）ころの可能性が考えられるか。

SB23（第137図、第186図 P L 48, 71, 80）

位置：XVII E-14・19

検出：SB22確認時の平面精査により、それと切り合う方形の落ち込みを確認した。形状そして規模より竪穴住居跡を想定し調査に入る。

規模：長軸（256cm）×短軸（354cm）、深さ-24cm、隅丸方形。

埋土：黒褐色土の単純堆積。

構造：カマドは確認できない。SB22に北西側を破壊される。本跡に伴うと考えられる柱穴は2基ある。

遺物出土状況：土器片等の遺物は少なく、大部分が埋没土中の出土である。

遺物：第186図1は非ロクロ土師器の杯で完形品。厚手で内面は黒色処理し、外面はていねいにナデ調整されている。No.1の出土で北東側の壁よりから3とともに出土している。2は高杯の皿部。内面はていねいにミガキ調整され、外面はケズリそしてナデ仕上げしている。脚部以下を欠損する。No.3の出土。3は須恵器杯蓋の完形個体。外面は約1/2程度回転ケズリ調整により仕上げ、頂部に「×」印が刻まれている。胎土中に黒色の不純物を混入する。No.2出土で1と伴出している。第201図11～15は打ち欠き石鍾。いずれも川原石の側面両端を抉入状に剥離している。11はNo.2出土の閃緑岩材で645g、12はNo.4出土の安山岩材で918g、13はNo.3出土で715g、14はNo.1出土で589g、15はNo.6出土で839gが量られる。

時期：非ロクロ土師器を中心とし、これに須恵器杯類の蓋が加わる。須恵器杯A類等古代型須恵器の出土がないなどの特徴から、古墳時代終末ころと判断できる。SB22に破壊されており、SB22よりも確実に古い。古墳時代V期（7世紀前半）を考えておきたいが、SB16と至近の位置にあり、それと同時代に存在したのか否か、疑問も残る。

SB24（第138図、第186図 P L 48, 71）

位置：XVII E-13・14

検出：調査区北壁近くを掘削し、遺構の確認を行ったところ、長さ200cm程度と小規模ではあるが、

方形の落ち込みを認める。竪穴状の遺構を想定し調査に入る。

規模：長軸 238cm × 短軸 236cm、深さ - 18cm、隅丸方形。

埋土：黒褐色土の単純堆積。

構造：東側の辺は土坑により破壊を受けており不明瞭であるが、残存部分から判断しカマドは確認できない。本跡に伴うと考えられる柱穴は直径 35cm の Pit 1 が 1 基あるのみ。床面は平坦面をそれと認定するも、硬化はさほど認められない。

遺物出土状況：土器片等の遺物は少なく、埋没土中には流れ込みと考えられる拳大より大きな礫が多数混入して確認された。

遺物：第 186 図 4 は須恵器坏蓋の 1/4 程度の破片。つまみ部は扁平で体部外面の 1/2 以上を回転ケズリ調整している。返しは端部を強く外反させ、やや玉縁状となる。No.2 の出土。5 は須恵器坏 A 類完形個体。No.1 の出土で、底部、回転系切り離し手法である。内面には燈明痕が残る。口径 13.0cm、器高 4.1cm、底部内径 7.5cm が測られる。

時期：回転系切り手法の須恵器坏 A 類、扁平つまみの坏蓋等から、古代Ⅲ期（8 世紀前半代）以降の構築と考えられる。

S B 2 5（第 138 図 P L 48）

位置：XVII E - 12・13

検出：調査区の北西隅近くにて方形と推定される黒色土の落ち込みを認めた。竪穴状の遺構を想定し調査に入るが、大半が未買収地隣接部であり買収後の再調査に完掘をゆだねることとした。しかし、2006 年度の調査では、水路確保等の事情により本跡への調査が及ばず、残り部分については検出できていない。

規模：長軸 288cm × 短軸 160cm、深さ - 20cm、隅丸方形。

埋土：黒褐色土の単純堆積。

構造：2003 年度調査では、カマド及び柱穴等の設備は確認できなかった。

遺物出土状況：出土遺物はほとんどない。

時期：不明。

S B 2 6（第 138 図、第 186 図 P L 48, 71）

位置：XVII E - 09・14

検出：調査区の北壁近くにて黒色土の落ち込みを認めた。形状と規模から竪穴状遺構の一部を想定し調査に入る。落ち込みの大半は、調査区外に伸びていたため、全体規模の 1/3 程度を調査したに留まった。

規模：長軸（360cm）×短軸（160cm）、深さ - 16cm、隅丸方形か？

埋土：黒褐色土の単純堆積。

構造：カマドは確認できない。本跡に伴うと考えられる柱穴 4 基を確認した。

遺物出土状況：調査範囲は少なかったが、Pit3 周辺部から土器がまとまって出土した。取り上げ No.1 ~ No.4 はそれぞれが重なり合った状態で出土した。

遺物：第 186 図 6 ~ 10 は非ロクロ土師器の坏でほぼ完形品。いずれも内面をすこぶるていねいにミガキ調整している。6 は全体が浅い鉢状で丸底。内面は体部と底部との境に稜のように明瞭な変化をつけている。底部外面を中心にケズリ成形痕を残し、口縁部は横方向のナデ調整仕上げ。口径 12.5cm、器高 4.2cm が測られる。No.2 の出土。7 と 8 は丸底形で、口縁部を除く体部の大半をケズリ成形仕上げしている。7 は完形で口径 11.4cm、器高 4.1cm、No.4 の出土。8 は口径



SB26 出土の土器集合

11.7cm、器高 3.7cm、No.7 の出土。9 は深さのあるボール形。口径 17cm、器高 5.7cm が測られる。No.3 出土。10 は内外面ともにていねいにミガキ調整した平底・鉢形の坏。口径 12.5cm、器高 4.8cm、No.1 の出土。11 と 12 は土師器甕形土器。内外面ともていねいにミガキ調整される。11 は体部を全体的にミガキ成形し、口縁部は横ナデで仕上げている。小型品で器高 14.3cm が測られる。No.6 の出土。12 は器高 18.3cm が測られる中形品の壺型。体部は良好にミガキ調整されている。No.5 出土。

時 期：非ロクロ土師器を中心としており、坏そして甕がある。須恵器の伴出例はないが、坏 F 類の存在を始め全体の様相から、古墳時代 V 期（7 世紀前半）と考えられる。

SB27（第 139 図 P L 48）

位 置：XVII E-17・18

検 出：調査区の北西隅近くに設定した排水トレンチの断面に、黒色土の落ち込みを認めた。遺構の存在を推定し精査する。落ち込みの全体は未買取地へ伸びており、形状や規模は不明であるが、何らかの遺構（竪穴状遺構）である可能性が高いと考えられたので調査に入る。SB25 同様に、2006 年度の調査では水路確保等の事情により本跡への調査が及ばず、残り部分については検出できていない。

規 模：長さ（164cm）×幅（140cm）、深さ-20cm、不明。

埋 土：黒褐色土の単純堆積。

構 造：カマド及び柱穴等の設備は確認できなかった。

遺物出土状況：出土遺物はほとんどない。

時 期：不明。

SB28（第 139 図、第 186 図 P L 48、49）

位 置：XIX F-01、A-21

検 出：基本土層（Ⅲ層）下面にて、黒褐色土の落ち込みを確認した。形状と規模から竪穴住居跡を想定するが、東側は暗渠排水により破壊されていた。また SB29 との切り合い関係は判然としませんが、調査所見では本跡が SB29 を切ると判断している。

規模：長軸 404cm × 短軸 (272cm)、深さ - 10cm、隅丸方形。

埋土：黒褐色土の単純堆積。

構造：北側にはカマドの残骸と考えられる焼土及び炭化物の堆積が認められた。柱穴は 4 基確認するが、Pit4 以外はいずれも西側の周溝と重複する。床面は砂質土で平坦面となっている。

遺物出土状況：土器片等の出土は少ない。

遺物：第 186 図 13 は須恵器環 B 類の底部破片。高台は平面接地であり、底部回転ヘラ切りか? No.3 の出土。

時期：出土遺物が少なく、時期決定は難しい。埋没土中に須恵器環 B 類があり、黒色土器 A 類の破片も少なからず存在する。灰釉陶器の出土はない。また SB29 との切り合いから、それよりも新しいと判断できる。これらのことから、本跡は灰釉陶器の現れる IV 期以前で、SB29 よりも新しい時期である可能性がある。古代 II 期～III 期 (8 世紀代) を想定しておく。

SB29 (第 140 図、第 186 図、第 201 図 P L 49, 72)

位置：XIX F - 01・06

検出：基本土層 (III 層) 下面にて、SB28 さらには SB34 と重なる黒褐色土の落ち込みを確認した。竪穴住居跡を想定したが、確認部分の大半が東側の生活道路にかかるため、道路の切りまわしの後に追加して再調査することとした。

規模：長軸 328cm × 短軸 540cm、深さ - 36cm、N18° E、隅丸方形。

埋土：黒褐色土の単純堆積。

構造：北側にカマドと考えられる焼土及び炭化物の堆積が認められ、燃焼部であることが判明した。柱穴は 11 基を確認した。Pit3、Pit6、Pit4 が主柱穴と考えられ、4 本柱の建物跡が推定できる。SB28 及び SB34 に切られて構築されている。

遺物出土状況：カマド周辺部を中心に出土している。

遺物：第 186 図 14 は非ロクロ土師器の環でほぼ完形。底部は平底様に成形され、口径 16.7cm、器高 5.5cm が測られる。No.1 の出土。15 と 16 は須恵器環類。15 は環 H 類の 1/2 個体。底部は 1/2 以上に回転ケズリ調整痕を残す。胎土中には黒色不純物を混入している。受け部は小さく、立ち上がりはやや直である。No.6 の出土。16 は須恵器環 A 類で回転糸切り離し手法。No.4 で埋没土層中の出土。17 は須恵器高環の環部。外面は回転ケズリ・ナデ成形仕上げで沈線様の凹線が 2 本入る。床掘り方の出土。18 は須恵器の鉢口縁部破片である。口縁内面に 1 本沈線が入る。外面はカキ目様で、やはり沈線が 2 条入る。埋没土中の出土。19～21 は土師器長胴甕。いずれも細かなケズリ調整痕が内外面に施されている。19 と 20 は No.8 の出土、21 は No.3 の出土である。第 201 図 16 は棒状の安山岩材で両端部を使用した敲石。Pit7 の出土で 1020g。17 は安山岩材の川原石の端部を打ち欠いた石錘。No.1 出土で 725g が量られる。

時期：須恵器環 H 類と高環、非ロクロ土師器の環類がある。埋没土中には古代型須恵器の破片も少なからず存在しているため、正確な時期決定は難しい。ただし本跡は SB28 と SB21 に破壊されることから、概ね古代 I 期以前に所属する可能性がある。古墳時代終末の V 期～古代 I 期 (7 世紀代) を想定しておきたい。

SB30 (第 141 図、第 186 図 P L 49, 72)

位置：XVII E - 9・10・14・15

検出：基本土層 (IV 層) 上面にて、広い範囲に及ぶ黒褐色土の落ち込みを確認した。複数の竪穴住居跡が重複していることを想定しトレンチを設定して断面から観察した結果、住居跡と考えられる遺構 3 基が重なり存在していることが判明した。切り合い関係から北側を SB31 とし、南側を SB32 と仮称し調査に入る。

規模：長軸 832cm × 短軸 720cm、深さ - 40cm、N71° E、隅丸方形。

埋土：3層の堆積層がある。

構造：東側辺の中央部分にカマド 1 基が存在する。粘土材を用い、礫等を芯材としていたと考えられる。カマド周辺部には長さ 20cm ~ 40cm 前後までの礫が散乱して出土した。燃烧部には焼土と炭化物が散在して認められ、煙道は長く約 190cm が測られる。煙道の先端には拳大の礫が落ち込むように出土した。床面は硬く踏み固められたような状況であった。また床面には中央部分を中心に比較的広い範囲に炭化物の分布が認められた。間仕切りと考えられる施設が西側の壁下にて確認された。主柱穴は 4 基、Pit1、Pit2、Pit3、Pit4 がそれぞれあたり、そのほかに Pit10、Pit6 の 2 基を確認している。

遺物出土状況：住居跡の規模に比して、出土遺物量は少ない。

遺物：第 186 図 22 は非ロクロ土師器の高杯の坏部 1/6 程度の破片。体部下半は回転ケズリ調整し、内面は黒色処理を行う。形状から坏の可能性もあるか。埋没土中の出土。23 は一穴式甎の底部片で検出面の出土。24 ~ 26 は、土師器甕。24 は体部ケズリ調整の甕で、口縁部は横ナデ。Pit10 の出土。25 も 23 同様な手法で仕上げられた甕形土器の口縁部破片。No.2 出土。26 はハケ調整後に全面をナデ消す甕で、胎土中に絹雲母を多量に含む。

時期：非ロクロ土師器を主体とし、これに土師器長胴甕が加わる。埋没土中からも古代型の須恵器坏類が出土していない点から古代 I 期より前と判断できる。古墳時代 V 期 (7 世紀前半) を考えておきたい。

SB31 (第 142 図、第 186 図 P L 50, 72)

位置：XVII E - 9・10・14・15

検出：基本土層 (IV 層) 上面にて、SB30 及び SB32 とともに確認し調査に入る。確認時の埋没土の色調等から、本跡が SB30 を破壊して構築されていると考えられた。

規模：長軸 308cm × 短軸 294cm、深さ - 18cm、隅丸方形。

埋土：2層の堆積層がある。

構造：カマドは確認できなかったが、調査所見からカマドは破壊を受けて消失したと考えるよりも、存在しなかった可能性が高い。北壁の一部に長さ約 180cm、深さ - 15cm ほどの周溝が巡る。床面の硬化は認められず平坦面をそれと認定した。直上には炭化物の分布がある。柱穴は 3 基を確認した。

遺物出土状況：出土遺物はほとんどないが、床面より 1 点須恵器坏が出土した。

遺物：第 186 図 27 は須恵器坏 A 類。ほぼ完全な個体で、底部へラ切り離し後、ていねいにナデ調整されている。口径 14.9cm、器高 4.4cm が測られる。胎土中に黒色不純物等を多く混入する。

時期：出土遺物が少ないため時期の推定は困難であるが、床面出土の須恵器坏 A 類を評価して、その出現する古代 I 期以降で、その消滅する古代 III 期以前の可能性がある。また本跡は SB30 を破壊している点から、それよりも新しいと判断できる。本跡の所属年代は、古代 I 期 (7 世紀後半) 以降と考えておく。

SB32 (第 142 図、第 186 図 P L 50, 72)

位置：XVII E - 15

検出：基本土層 (IV 層) 上面にて SB30 とともに確認した。確認時の埋没土の色調等から、本跡が SB30 を破壊して構築していると判断した。

規模：長軸 376cm × 短軸 328cm、深さ - 20cm、隅丸方形。

埋土：2層の堆積層がある。

構 造:カマドは確認できなかったが、本跡上に設定したトレンチの断面上に、焼土や炭化物を確認したことから、カマドは北東側の辺に存在した可能性が高い。また本跡に伴う柱穴は認められないが、ST09の柱穴と重複していれば、判断できなかったことも考えられる。

遺物出土状況:出土遺物はほとんどない。

遺 物:第186図28は、非ロクロ土師器短頸壺の口縁部破片。内外面にていねいにナゲ調整される。口縁部に刻書と観られる痕跡を確認できるが、破損のため文字の可否も含め判読できない。床面直上の出土遺物。29は小型の鉢形土器で、ほぼ完形の資料。口縁部は特にいねいにミガキ調整されている。No.2出土。

時 期:出土遺物が少ないため時期の推定は困難である。SB30(古墳時代V期相当)を破壊することから、それよりも新しいと判断できる。非ロクロ土師器に主体があるが、埋没土中にわずかながら古代型須恵器の環A類が出土している点を評価して、古代I期(7世紀後半)以降と考えられるか。

S B 3 3 (第142図、第187図 P L 50, 72)

位 置:XIX A-16

検 出:基本土層(IV層)上面にて黒色土の落ち込みを確認した。その形状が不整形であり、遺構の可能性は低いとも判断されたが、竪穴状の遺構を想定して調査に入る。結果、周溝が存在する点、柱穴内に柱材が残るなどの点から、何らかの機能を有した竪穴状遺構と判断した。

規 模:長軸348cm×短軸296cm、深さ-24cm、不正長方形。

埋 土:黒色土の単純堆積で、多くの小礫を混入する。

構 造:カマドは確認できなかった。周溝は西側と南側に巡る。南東隅に150×140cm、深さ23cmの大形土坑が1基認められる。

遺物出土状況:出土遺物はほとんどない。

遺 物:第187図1は土師器の小形甕。外面は細かなハケ調整で仕上げられている。

時 期:出土遺物が少ないため時期の推定は困難である。ハケ調整の小型甕は概ね古代II期までは組成することから、それ以前の所属である可能性も考えられる。

S B 3 4 (第140図)

位 置:XIX F-01

検 出:SB29の調査時に黒色土の落ち込みを確認した。SB29と切り合う別の遺構と判断したが、大部分が生活道路直下であり、道路切りまわしの後、再調査に入ることとし、部分的な発掘を実施した。

規 模:計測不能。

埋 土:黒色土の単純堆積と考えられる。

構 造:不明。

遺 物:出土遺物なし。

時 期:不明。

S B 3 5 (第143図、第187図、第202図、第205図 P L 50, 72)

位 置:XVII H-08・09

検 出:基本土層(V層及びIX層上面)にて黒褐色土の落ち込みを確認し、全体が長方形を呈したことから、住居跡を想定し調査に入る。

規 模:長軸590cm×短軸520cm、深さ-24cm、隅丸方形。

埋 土:2層の堆積層がある。

構 造:カマドは確認できなかった。床面は砂質土で、ところどころ堅緻な箇所がある。支柱穴は4基を

確認した。南西の主柱 Pit3 付近には炭化物の分布が認められた。

遺物出土状況：埋没土からは小礫にともない多くの出土遺物があった。

遺物：第187図2は非ロクロ土師器環。内外面ともに良好なミガキ調整がなされている。口径13.2cm、器高4.7cmが測られる。埋没土出土。3は黒色土器A類の環。体部過半から底部にヘラズリ調整を施している。器高3.2cmで口径14.3cmほどの浅い皿形の器形である。No.10出土。4と5は須恵器の環類。ともに回転糸切り離し手法による環で墨痕がある。4は口径12.0cmで埋没土出土、5は口径14.1cmでNo.2と8の出土。6は多孔式の甗で底部破片。埋没土の出土。7はバケツ形のハケ調整甗。埋没土出土。8は器厚の薄い精巧なつくりの「砲弾型」の甗。口縁部は「コ」の字状となっている。埋没土中の出土。9は須恵器の甗E類。胎土に黒色不純物を微量混入する。硬質で鈍い褐色(7.5YR6/3)。埋没土中の出土。10は土師器カキ目調整の甗でほぼ完全な個体。口縁部は「く」の字形に強く外反する形態。底部は静止糸切り離し手法である。No.1, No.9及び埋没土出土。第202図1は凹石。安山岩材で表面に1穴(径4.0cm、深さ0.6cmほど)がある。No.4出土。第205図3は青銅製の帯金具。3.0cm×2.4cm×1.0cm、4.7g。

時期：糸切り底の須恵器環A類にしばられ、底部径内径は6.5cmから7.0cmほどである。浅い器形の黒色土器A類環の存在、土師器環類は埋没土中も含め1点も存在しないなどの特徴から、古代IV期(9世紀前半)ころに比定できるか。

S B 3 6 (第143図、第187図、第202図 P L 50, 72)

位置：XVII H - 04・09

検出：基本土層(Ⅷ層及びⅨ層上面)にて、粘性・しまりのある黒褐色土の落ち込みを確認、全体が長方形状を呈したことから住居跡を想定し調査に入る。

規模：長軸520cm×短軸472cm、深さ-24cm、N35° W、隅丸方形。

埋土：2層の堆積層がある。

構造：カマドは確認できなかったが、北東側に焼土及び炭化物の分布を検出し、その部分にかマドが設置されていた可能性がある。砂質土であり、炭化物の混じる堅緻な床部分を認めたことから、床の構築があったものと考えられるが、掘り方は不明瞭であった。本跡には柱穴状の掘り込み7基があり、Pit6は大きな土坑状の施設と考えられる。Pit1とPit2は主柱穴か。

遺物出土状況：埋没土からは小礫にともない多くの出土遺物があった。

遺物：第187図11は非ロクロ土師器環。内面は細かなミガキ調整により仕上げられ、内面の底部には若干の有稜が観られる。口径14.7cm・器高3.7cmと浅い皿形の器形でNo.3の出土だが、古代1期の所産である。12～17は黒色土器A類の環Aで、すべて糸切り離し手法。12は外面に墨痕を留める。口径11.8cm、底部径5.5cmが測られる。13は口径13.2cm、底部径5.5cmが測られ、外面に墨書「一」らしき痕跡が観察できる。No.7の出土。14は口縁部に漆が付着する。口径13.0cm、器高4.0cmが測られる。15～17は非常にいいな作りの環で内面よくミガキ調整されている。いずれも外面には「万」の墨書がある。15はNo.4出土の1/3程度の口縁部破片。口径12.0cm、器高3.2cm。16は口径12.4cm、底部径5.0cmで、No.4とNo.9の接合資料。17はNo.11出土で正位に墨書が記されている。18は須恵器の環で、外面にロクロ成形痕をカキメ状に留める。口径14.0cm、器高4.0cmが測られる。外面には墨書があるが、欠損して判読できない。19から21は土師器甗。19は非常に細かなハケ調整の甗、口縁部の破片。埋没土の出土。20と21はロクロ成形痕を留める砲弾型の甗。20はナデ調整仕上げの甗口縁部破片で、埋没土の出土。21は内面がいいなハケ調整で、外面は下半を縦方向にケズリ仕上げ、口縁部は回転ナデ調整で仕上げられている。器厚も薄く精巧な作りである。No.36出土例。この

ほか、須恵器の底部破片を利用した円盤が1点ある。埋没土出土で26.0gが量られる。第202図2は砥石1/2残欠。長方形の手持ち砥石。埋没土出土。

時期：黒色土器A類の環が食器の中心を占める。環Aは口径が概ね13.0cm前後で、底部径は5.5cmと狭い。図示していないが床面及び床面直上からは黒色土器B類の破片の出土があり、埋没土中には土師器環の破片が少なからず出土している。よって本跡の所属時期は、古代V期（9世紀後半）と考えておきたい。

S B 3 9（第144図、第187～189図、第202・203図、第205図 P L 51, 72～74, 80）

位置：XVII C - 20

検出：基本土層（Ⅳ層）にて黒褐色土の落ち込みを確認し、形状と規模から住居跡を想定し調査に入る。墓塚（SM03）と重複関係にあるが、確認が遅れたことから新旧関係はつかめず、同時に調査する。

規模：長軸414cm×短軸324cm、深さ-36cm、隅丸方形？

埋土：3層の堆積がある。

構造：カマドは北東側の辺の中央部分に認められる。崩壊しているが燃焼部を中心に袖石が散在して出土した。石組・粘土材による構築で袖石の据え付け痕を明瞭に留める。床面は砂質土の平坦面で貼り床や柱穴は確認できない。

遺物出土状況：カマド周辺部から、ほぼ完形の環類が出土している。

遺物：第187図22・23は非ロクロ土師器の環。いずれも内面をていねいにミガキ調整で仕上げられている。本跡を確認した時点でカマド周辺から出土した。22の例はNo.13（住居ライン外）とNo.22（住居跡内）の接合関係があり、本跡に関連する遺物として取り上げた。内面の底部に有稜の名残（沈線様）を留め、底部平底化した器形である。口径12.2cm、器高3.6cmが測られる。23はNo.24出土で丸底の鉢、完形品。口径10.8cm、器高4.6cmが測られる。24は丸底の環形土器。口径14.1cm、器高5.0cm。埋没土出土。25は非ロクロの皿形土器2/3ほどの個体。口縁部及び内面をていねいにミガキ、外面の下半は弧を描くようにミガキ調整がなされている。口径18.1cmと大形である。No.10ほかの接合資料。26は須恵器環H類の完形個体。蓋受け部は小さくV字状にえぐれ、立ち上がりは強く内傾している。口径9.6cm、器高3.6cm。胎土中に黒色の不純物を混入する。No.9出土。27は須恵器環類。底部回転ヘラケズリ調整で「の」字状に沈線が入る。体部はていねいにナデ仕上げされている。口径8.9cm、器高3.8cm。埋没土出土。28は須恵器環B類。底部回転ヘラケズリ後に外側設置様の高台を貼り付ける。口径15.7cm、器高3.9cmが測られる。29は須恵器無頸壺1/2個体。底部は回転ヘラケズリ後に高台を内側設置様に貼り付けている。口径7.5cmが測られる。30は須恵器の壺体部破片。31は大形の高環で、内面はていねいにミガキ調整し黒光りしている。環部の口径は23.2cmが測られる。残念ながら脚部は欠失している。埋没土出土。第188図1は鉢形土器。体部外面はケズリ調整し、口縁部は横方向のミガキ仕上げ。No.10の出土。2は小型の甕形土器。体部外面はケズリ調整で仕上げ、口縁部及び内面はナデ調整がなされている。No.12出土。3は口縁が内側に直口し無頸壺様となる鉢形の土器。外面はケズリ調整仕上げ。4は一穴式の甕。内外面ともによくミガキ調整されている。5は多孔式の甕。内外面よくミガキ調整されている。No.5の出土。6と7は土師器長胴甕。6はNo.5の出土、7はNo.2の出土。8から12は内外面をていねいにハケ調整される球胴の甕形土器。8はNo.10出土で、第187図28と重なって出土した。9はNo.10とNo.11の接合個体。10はNo.23出土。11はNo.11とNo.17の接合個体。12はNo.10とNo.11の接合個体。第189図1はミガキ調整の球胴の甕形土器。ほぼ2/3ほどの個体。埋没土中の出土。2は須恵



SB39 出土の土器集合

器底面ないしは横線の体部破片。内面には青海波文が明瞭に残り、外面は板状工具によるたたき締め痕が充填されている。埋没土出土。第202図3～5は磨石。3と4は安山岩材で片面に摩耗痕があり、端部を部分的に敲き使用している。ともに埋没土中の出土。5は片面の欠損した端部に摩耗痕があり、表面にはアバタ状の凹みが一か所にある。第205図4は銀メッキ製の耳環。2.8cm、18gが測られる。第203図16は長さ2.0cmほどで、形状からミニチュア土器の取っ手と考えられるか？このほか、鉢？の体部破片を利用した円盤が1点ある。19.9gが量られる。

時期：古代1期（7世紀代）と考えられる。

SB40（第145図、第189図 P L 51, 74）

位置：XVII C - 24・25

検出：基本土層（Ⅷ層）にて黒褐色土の落ち込みを確認した。不整形に広がる状態で遺構の重複を想定したが、全体形をつかめぬまま調査に入った。調査を進める段階で、竪穴住居跡が3軒（本跡・SB41・SB42）重複していることが判明したが、新旧関係を判断できなかった。遺物の出土状況や遺物の時期から、本跡がSB41を破壊して構築されたものと推定した。

規模：長軸（314）cm × 短軸 220cm、深さ-32cm、N23°E、隅丸方形？

埋土：3層の堆積層がある。

構造：カマドは北東側の中央部分に認められる。崩壊しているが燃焼部に焼土が認められ、袖石が散在して出土した。石組・粘土材による構築と考えられる。床は砂礫混じりの平坦面。柱穴は確認できないが、カマド東側に貯蔵穴と考えられる土坑が1基存在する。

遺物出土状況：カマド周辺部から、ほぼ完形の長胴甕と小型甕が出土した。

遺物：第189図3と4は、非ロクロ土器の鉢。3は内外面ともに良好なミガキ調整により仕上げられている。底部は丸底に近いが、直径4.0cmほど平坦な底部形成が認められる。No.3出土。4は口縁部を横ナデにより表出した鉢形土器で完形。底部は明瞭に平底化する。No.2出土。5は小型の甕。外面ケズリ調整さらにはハケ調整を施したのちナデ仕上げされている。特に口縁部外



SB40 出土の土器集合

側は強い横ナデがある。No.4 出土。6 は土師器の長胴甕。内外面をハケ調整仕上げしている。No.1 の出土。

時期：非ロクロ土師器が主体を占め、須恵器環類はほとんど出土していない。ハケ調整の長胴甕は口縁に最大径のある形態で、これに小型甕が伴う。出土資料には恵まれないが、出土土器の特徴から古代1期（7世紀後半）ころを推定しておきたい。

SB41（第145図 P L 51）

位置：XVII C - 19・24

検出：SB41とともに長方形状に広がる黒色土の落ち込みを確認し、調査途中で本跡を決定した。調査を進めた結果、すでに床面近くまで掘削しており、埋没土5cm以内を掘り下げたに留まった。南東側で落ち込みラインに沿うように周溝と考えられる溝跡が発見され、かつ主柱穴と考えられる4基の柱穴が確認できた。検出状況が極めて悪いが、SB40に北東コーナーを破壊されたとの所見を得た。

規模：長軸624cm×短軸508cm、深さ-5cm、隅丸方形。

埋土：黒褐色土の単純堆積である。

構造：カマドは確認できなかったが、北側の柱穴（Pit5・6）内の埋没土に炭化物の混入が観られることから、北側に存在した可能性もある。柱穴は6基確認でき、主柱穴は4基（Pit1～4）と考えられるが、平面配置からみると6本の配列のようでもある。周溝は幅20cm、深さ4cmほどで、住居跡東壁際にある。床面は不明瞭ながら、礫面上層の平坦面をそれと考えた。

遺物出土状況：極めて少量の出土。

遺物：床面近くから、非ロクロ土師器の鉢及び土師器甕の破片が出土したが小破片である。

時期：不明。SB40及びSB42との切り合い関係から、古代1期ころ（7世紀後ころ）と判断できるか。

SB42 (第145図、第189図、第202図 P L 51, 74)

位置: XVII C - 23・24

検出: SB42と同様、SB41を確認調査中に方形状に広がる黒色土の落ち込みを認め、その規模から住居跡を想定し調査に入った。すでに埋没土は北東側で8cm程度しか残存せず、北西側は落ち込みラインが不明瞭であったため、十分に全体像は把握できていない。SB41に北東側を破壊される。

規模: 長軸504cm×短軸472cm、深さ-8cm～-30cm、隅丸方形?

埋土: 3層の堆積層がある。

構造: カマド・周溝・柱穴等は認められない。床面は砂質土の平坦面。

遺物出土状況: 出土数量は極めて少ない。西側のコーナー部分に拳大の礫が集中して出土し、その下位から炭化材が出土した。焼土などは認められない。

遺物: 埋没土中から非クロコ土師器の坏類、ヘラ切り難しの須恵器坏類など小破片が出土した。西側のコーナー部分から須恵器の甕胴部破片、さらには土師器製の小破片が出土した。第189図7は土師器の甕形土器。No.7の出土。第202図6は滑石製の紡錘車。

時期: 時期等判断できる程度の出土遺物には恵まれず、ほかの住居跡等との切り合い関係から判断して、古代Ⅰ期ころ(7世紀後半ころ)の可能性が高い。しかしながら、SB40ほかも含め時期決定は極めて難しい。

SB44 (第146図、第189図 P L 52, 74)

位置: XVII E - 11・12

検出: SB45と同時に確認。広範囲にわたる黒色土の落ち込みを認め、住居跡を想定し調査に入った。調査時、現況で使用中の水路があり、これの切りまわしに伴い、十分な遺構検出ができなかった。SB45との新旧関係は不明である。

規模: 長軸(336cm)×短軸(248cm)、深さ-8cm～-30cm、隅丸方形?

埋土: 黒褐色土の単純堆積。

構造: カマドは北東の辺のほぼ中央にある。燃焼部は明瞭で、火床・支脚(抜き取り痕)を確認した。袖部は石組・粘土構築。カマド手前には20cm～40cm大の大形礫が出土している。カマドの左右には貯蔵穴と考えられる土坑があり、左よりNo.5の甕形土器が出土、右からはNo.1の甕形土器が出土した。柱穴等は認められない。床面はカマド燃焼部から想定した砂質土の平坦面とした。

遺物出土状況: 出土数量は極めて少ない。カマド燃焼部付近より高坏形土器の脚部No.3が出土している。カマド両脇の土坑からは甕形土器が出土している。

遺物: 第189図8は高坏の脚部破片でNo.3出土。9は須恵器坏B類。口径15.2cm、器高4.5cmが測られる。10は須恵器の鉢、口縁部破片。口径14.3cm、11～13は土師器甕。11はNo.1とNo.2のハケ目調整の長胴甕でカマド右の土塚墓内より出土。12は内外面ともていねいなハケ調整の観られる例でNo.5の出土。13はNo.4出土のミガキ調整仕上げの球胴甕で、カマド左の土坑より出土。

時期: 須恵器坏B類と鉢の登場があり、埋没土中からは糸切り底の坏類がない点、ミガキ調整の広口の甕などの存在から、古代Ⅰ期から古代Ⅱ期(7世紀終末から8世紀初頭)と考えられる。

SB45 (旧SB43) (第146図、第189図 P L 52, 74)

位置: XVII E - 11

検出: 遺物包含層を掘削したところ、広範囲にわたる黒色土の落ち込みを認めた。規模から住居跡を想定し調査に入るが、現況で使用中の水路があり、その移設に伴い前後2回にわたり調査を行っ

た。全体の形状は不明確で、当初は2軒が切り合うものとして調査に入ったが、切り合いの根拠はなく1軒と判断した。調査状況がすこぶる悪く、本跡の構造は不明瞭である。

規模：長軸(508cm)×短軸(472cm)、深さ-8cm~-20cm、隅丸方形か？

埋土：黒褐色土の単純堆積がある。

構造：カマド・周溝・柱穴等は認められない。床面は砂質土で本跡の中央部分が硬化していた。

遺物出土状況：出土数量は極めて少ない。

遺物：埋没土中から須恵器の甕が口縁部を欠失するものの、ほぼ完全な個体で出土した。第189図14。注口部がやや突出し注ぎ部の頸は細く長い形態。体部及び頸部には櫛歯状工具による刺突文帯が走る。

時期：不明。埋没土出土ではあるが、甕の年代は、概ね古代1期(7世紀後半)ころと推定できる。

SB46(第144図、第190図、第202図 P L 52, 74)

位置：XVII D-11・16

検出：黒褐色土の落ち込みを認め、その規模も大きく土器片も数多く混入していたことから、住居跡を想定し調査に入る。

規模：長軸380cm×短軸272cm、深さ-10cm、(N46°E)、隅丸長方形。

埋土：黒褐色土の単純堆積。

構造：カマドは確認できないが北東側に火床と考えられる焼土を検出できた。柱穴は3基認められ、カマド推定部に近い北東コーナーよりの例は、規模も大きく土坑と考えられる。貯蔵施設等の機能を想定できるか。炭化物を多く含む埋没土である。床面は不明瞭ながら砂質土の平坦面をそれと認定した。

遺物出土状況：出土数量は調査当初に想定したほどではなく、むしろ少ないか。床面近くから、比較的大形な破片(No.3・6・7・9)が出土した。

遺物：第190図1は非ロクロ土師器の坏、完形個体。手づくね様に小さく、口径8.8cm、器高2.9cmが測られる。内外面とも良好にミガキ調整され、底部は平底。No.8出土。2は非ロクロ土師器の坏で、ほぼ完形に近い個体。内外面とも良好にミガキ調整され底部は平底化する。口径15.7cm、底部径7.5cm、器高4.6cmが測られる。No.1出土。3は土師器のハケ及びケズリ調整の長胴甕。4は須恵器の甕で無頸壺状の形態、口縁部破片。胎土に不純物をほとんど含まない。外面は板状工具によるタタキ締め。No.2出土。第202図7は棒状の閃緑岩材で両端部を使用した敲石。埋没土中の出土。

時期：出土遺物が少なく時期の決定は難しい。古代型須恵器の破片資料がなく、非ロクロ土師器坏類の存在から、古墳時代V期(7世紀前半)ころか。

SB47(第144図 P L 52)

位置：XVII D-06・11、C-10・15

検出：SB46と同様に黒褐色土の落ち込みを認め、その規模から竪穴状の遺構を想定し調査に入る。大半は掘削外へ伸びており、次年度に調査する予定であったが、調査工程上、追跡調査はできなかった。遺構全体の1/2~1/3程度を記録保存した。

規模：不明。

埋土：黒褐色土の単純堆積。

構造：カマド・柱穴・周溝は認められない。床面上には炭化物が多く、藁状のものも集中して検出できた。

遺物出土状況：極めて少ない。

遺物：図示できる資料がない。

時期：不明。

SB48（第147図、第190図、第203図 P L 52, 53, 74, 80）

位置：XVIIH-04・05

検出：砂礫層上面にて不整形に広がる黒色土の落ち込みを確認した。その規模から住居跡等の大形遺構が複数存在する可能性を認め精査した結果、方形の竪穴状遺構が2基（本跡とSB51）存在することを確認した。しかしながら、土層等から切り合いの新旧関係をつかむことはできなかった。

規模：長軸496cm×短軸430cm、深さ-44cm、N24°W、隅丸方形。

埋土：6層の堆積である。

構造：カマドは北西側の辺中央にあり、燃焼部及び袖部を確認できた。左の袖部には拳大の垂角礫が存在しており、礫を芯材とした粘土構築と考えられる。明確な周溝は確認できないが、南東・南西コーナー付近に溝状の掘り込みを検出している。柱穴は2基が存在し、本跡の中央部分に大形の土坑1基（長さ195cm×90cm、深さ-15cm）を確認した。床面は部分的に硬化が認められた。

遺物出土状況：埋没土中から比較的多くの遺物が出土している。

遺物：第190図5は、非ロクロ土師器の鉢で1/2個体。内外面ともミガキ調整仕上げで、底部はボタン状の形態。6は須恵器盤の脚部破片。埋没土中の出土。7は須恵器環B類1/2個体。口径14.2cm、器高3.6cmが測られる。埋没土中の出土。8はハケ調整の長胴甕、口縁部破片。外面は縦方向、内面は横方向に調整されている。胎土中にガラス質の微小片を中量程度混入する。No.2出土。第203図17は柱状の土製品で形状から土馬の脚と考えられるか？

時期：不明。埋没土出土の須恵器環B類の存在から、古墳時代V期～古代I期（7世紀代）と考えられるか。

SB49（第148図、第190図 P L 53, 75）

位置：XVIIJ-12

検出：基本土層（Ⅲ層）を掘削し、砂礫層上面にて方形に広がる黒色土の落ち込みを確認、竪穴住居跡を想定し調査に入る。南側は生活道路内に続いており、多少の追加調査をしたものの、住居跡全体をつかむまでには至らなかった。

規模：長軸（476cm）×短軸592cm、深さ-32cm、N44°W、隅丸方形。

埋土：黒褐色土の単純堆積である。

構造：カマドは北西側の辺中央にある。燃焼部・袖部及び煙道部を確認した。袖部は拳大の垂角礫を芯材とし、黄褐色砂礫と粘性シルト土により構築される。周囲には40cm前後の礫の出土があり、カマド材に関連するものか。右袖部には長胴甕が据えられたように出土しており、調査所見では芯材と考えている。周溝は北西側のカマド左側のみ認められる。柱穴は5基確認したが、この内の3基は東側の辺に沿ってあり周囲には焼土が2か所ある。いずれも支柱穴と考えられる性格の遺構ではない。床面は小礫まじりの黄褐色土が硬化して認められた。

遺物出土状況：カマド周辺部、ことに右袖部分と焚口部分に完形に近い甕形土器数個体が出土している。右袖部には所見で芯材とされる長胴甕No.1が2個体とNo.24甕1個体が出土している。セット状況から判断すると、煮炊き具一式と考えられそうだが、それらをまとめて芯材としたものか。焚口部ではNo.11の環やNo.14・16の小型甕が出土している。

遺物：第190図9～12は非ロクロ土師器の環。9の口縁端部は使用により著しく摩耗する。口径12.2cm、器高4.5cmが測られる。No.11出土。10は内面の胴部と底部の境に沈線を残す完形個体。



SB49 出土の土器集合

黒色処理の程度が弱いか、肉眼では観られない。No.2 出土。11 は No.3 出土。12 は No.18 出土の皿形の例。13 は須恵器の環？、1/4 個体。口径 23.2cm が測られる大形品。胎土も良質で焼成も良好、搬入品であろうか、高環あるいは蓋の可能性はある。No.32 出土。14 はほぼ完全な形に近い甕。No.6・No.10・No.24・埋没土出土の接合資料。口縁部横ナデ、体部はていねいなミガキ成形で多孔式。15 と 16 は小型の甕形土器。15 は外面底部付近にハケ調整及びケズリ成形が残る。全体はナデ仕上げか。No.16 出土。16 は球胴の甕形土器で底部は平底。外面はミガキ調整により、内部はヘラケズリ成形。No.14 出土でほぼ完形。17・18 は土師器長胴甕。ともに右袖部分より出土。17 は No.1 出土のハケ調整の略完形個体。18 は No.1 と No.13 ほかの接合個体で、ケズリ成形の甕下半部。

時期：須恵器環類の出土がない。ミガキ調整の進んだ非クロコ土師器の環、土師器甕類を主体とする点から、古墳時代Ⅴ期（7世紀前半）ないしは古代Ⅰ期ごろと考えられる。

SB50（第149図 P L 53）

位置：XVII J-11、I-15

検出：基本土層（Ⅲ層）を掘削し、砂礫層上面にて不整形に広がる黒色土の落ち込みを確認した。その規模から、住居跡等の大形遺構が複数存在する可能性を認め精査する。結果、方形の堅穴状遺構が2基存在することを確認したが、切り合い関係はつかめなかった。両者をそれぞれ SB48 と SB51 と仮称し調査に入る。

規模：長軸（356cm）×短軸（184cm）、深さ-9cm、形状は不明。

埋土：黒褐色土の単純堆積である。

構造：カマド・周溝は確認できなかった。柱穴は4基を検出したが、主柱穴等の構造を推定できる根拠は得られなかった。床面は砂礫層を基盤とする平坦面であった。

遺物出土状況：遺物の出土量は極めて少ない。

遺物：埋没土中から、非ロクロ土師器の坏類や鉢形土器、土師器甕等の小破片が出土しているが、図示できるものはない。

時期：須恵器坏類の出土がなく、非ロクロ土師器の坏や鉢、さらには土師器甕類の破片が目立つことから、古墳時代V期（7世紀前半）ころと考えられるか。

SB51（第147図、第190図 P L 52, 75）

位置：XVII C-24・25、H-05

検出：砂礫層上面にて不整形に広がる黒色土の落ち込みを確認した。その規模から住居跡等の大形遺構が複数存在する可能性を認め精査に入った。結果、方形の縦穴状遺構が2基存在することを確認したが、切り合い関係はつかめなかった。両者をそれぞれSB48とSB51と仮称して調査に入る。

規模：長軸464cm×短軸476cm、深さ-30cm、N35°E、隅丸方形。

埋土：黒褐色土の単純堆積である。

構造：カマドは北東側の辺中央にある。燃焼部・袖部を確認した。袖部は礫を芯材とし、右側では直立した状態で、左側では礫はないが抜き取り痕が確認できた。袖部芯材に挟まれた燃焼部には焼土がたまり、天井石と考えられる礫が割れた状態で出土した。またカマド内からは、甕形土器2点がつぶれた状態で出土した。周溝は認められない。柱穴は6基確認したが、この内の4基(Pit1～3・5)がその配列から主柱穴と考えられる。床面は小礫まじりの黄褐色土の平坦面。

遺物出土状況：カマド内から甕形土器2個体(No.2)が、カマド周辺部からは土器破片が多量に出土した

遺物：第190図19は非ロクロ土師器の坏。口縁部は横方向の強いナデ、体部はケズリ成形仕上げ。20は須恵器の坏蓋、1/4個体。21は土師器の鉢形土器。口縁部は緩く外反し、内外面ともヘラケズリ調整がなされている。口径24.6cmが測られる。埋没土中の出土。22と23は土師器長胴の甕。ともに右袖部分より出土。22は全体をケズリ成形仕上げする甕。23はハケ調整の小型甕。胎土中にガラス質の微細片を混入する。24は甕の取手、小破片。

時期：須恵器の出土量は少なく、非ロクロ土師器の出土量が多い。埋没土中には1点系切り離し手法の坏A類破片がある。取っ手付きの甕(24)破片も埋没土中の出土である。時期決定できる資料が少ないが、切り合い関係のあるSB48(古墳時代V期～古代I期)と差ほどの時期差は出土遺物では認められないが、第190図20の須恵器坏蓋や甕の存在から、多少なりとも古い可能性があるか。

SB52（第150図、第151図、第202図、第205図 P L 60）

位置：XVII J-07・08・12・13

検出：基本土層(Ⅲ層)を掘削したところ、砂礫層上面にて不整形に広がる黒色土の落ち込みを確認した。その規模、形状から住居跡等の大形遺構が複数存在する可能性を認め精査に入った。しかしながら、平面精査では落ち込み部分の形状(遺構のプラン)をつかむことはできず、トレンチを設定し、土層断面より確認に入る。結果、本跡のほか4軒(SB76・SB53・SB77・SB54)の切り合いを確認した。最も新しいと判断したSB54の調査の後、本跡の調査に入る。SB76との切り合いは不明。またSB53は本跡が破壊している。

規模：長軸516cm×短軸524cm、深さ-36cm、隅丸方形。

埋土：黒褐色土の単純堆積である。

構造：カマド・周溝等の施設は確認できない。柱穴は2基を確認したが、その性格は不明。

遺物出土状況：ほとんど出土していない。

遺物：図示できる土器はないが、第202図8は安山岩材の凹石。表面にアバタ状の凹部(2.5cm程度)

がある。埋没土中の出土。第205図8は鉄鍬の茎部分と考えられる。

時期：不明。遺構の切り合い関係から、SB54（古代V期～VI期）よりも古くSB53よりも新しいと判断できる。

S B 5 3（第150図、第191図、第202図、第205図 P L 53, 60, 75）

位置：XVII J - 07・08

検出：砂礫層上面にて不整形に広がる黒色土の落ち込みを確認した。その規模、形状から、住居跡等の大形遺構が複数存在する可能性を認め精査に入る。しかしながら、平面精査では落ち込み部分の形状（遺構のプラン）をつかむことはできず、トレンチを設定し、土層断面より確認に入る。結果、本跡のほか4軒（SB76・SB52・SB77・SB54）の切り合いを確認した。最も新しいと判断したSB54、それに破壊されるSB52及びSB76の調査後、本跡の調査を行う。

規模：長軸384cm×短軸（200cm）、深さ-40cm、隅丸方形？

埋土：黒褐色土の単純堆積である。

構造：カマド・周溝は確認できない。北東側コーナーより焼土の分布と土器の集中を確認したことから、この付近にカマドの存在を予想できるか。柱穴は3基確認した。北西コーナーより確認したPit1は100cm×100cm、深さ20cmの大形土坑であるが、その性格は不明。本跡の下に検出したSB78との関連が課題だが、焼土及び遺物集中箇所がSB78カマド部分に該当しており、それらの比高差5cm～10cm内の重複であることから、同一遺構の可能性も考えられるか。

遺物出土状態：北東側コーナーに認められた遺物集中以外は、出土数量は少ない。

遺物：第191図1は黒色土器A類の深い鉢形の環、1/2個体。外面の底部付近を手持ちヘラケズリ調整し、内面はていねいにミガキ調整して黒光りしている。口径17.4cm、器高6.2cmが測られる。2～4は須恵器環A類、すべて底部糸切り離し手法。2は口径12.2cmで埋没土の出土。3と4は底部径が大きく、口縁部がやや急に立ち上がる形態。3は口径12.8cmでNo.2出土、4は口径13.2cm。5は土師器の椀口縁部破片。形態から灰軸陶器を模して製作したものと考えられるか。埋没土出土。6と7は土師器のハケ調整の裏。6は小型でやや粗雑な調整がなされている。埋没土出土。第202図9は安山岩材の川原石を利用した磨石で、部分的に摩耗がある。No.2出土。第205図7は鉄釘。

時期：須恵器環A類は糸切り離し手法で、底部径の大きな逆台形の形態が主体である。黒色土器の環類は、口径17.0cmほどの大形例が組成している。埋没土2層からは、灰軸陶器を模したと考えられる土師器椀の口縁部破片が出土している。また本跡はSB52とSB54（古代V期～VI期）に破壊されており、それらよりも古いと判断できる。したがって本跡の所属時期は、黒色土器の出現する古代V期（9世紀前半）と判断できるか。

S B 5 4（第152図、第191図、第202図、第203図、第205図 P L 53, 60, 75, 80）

位置：XVII J - 07・08

検出：基本土層（Ⅲ層）を掘削したところ、砂礫層上面にて不整形に広がる黒色土の落ち込みを確認した。その規模、形状から、住居跡等の大形遺構が複数存在する可能性を認め精査に入る。しかしながら、平面精査では落ち込み部分の形状（遺構のプラン）をつかむことはできず、トレンチを設定し、土層断面より確認に入る。結果、本跡のほか4軒（SB76・SB53・SB77・SB52）の切り合いを確認した。最も新しいと判断した本跡より調査に入る。

規模：長軸516cm×短軸420cm、深さ-56cm、不整の隅丸方形。

埋土：6層の堆積である。

構 造：カマド・周溝は確認できない。柱穴は12基確認した。この内の4基（Pit2・4・6・7）がその配列から主柱穴の可能性を考慮することができる。また本跡の中央部分に大形の土坑を1基（195cm×168cm、深さ-10cm弱）確認したが、性格は不明である。床面に硬化面を確認できない。南側壁及び西側壁には20cm～30cm大の礫が、壁を押さえつけるように列状をなして検出された。形状から中世面の遺構に似るが、機能に関しては不明である。

遺物出土状況：検出面にて土器小破片が出土し、埋没土中からの遺物が多い。

遺 物：第191図8～10は須恵器環A類。すべて回転系切り離し手法。8は底部径が7.0cmと広く、口縁部の立ち上がりはやや急な作り。口径12.6cm、器高4.0cmが測られる。口縁部内外面とも著しく研磨様に磨かれており、転用硯等の再利用品か。No.3出土。9は内外面にロクロ成形痕を明瞭に留めた例で、口径12.8cm、器高4.0cmが測られる。底部内径は6.0cmほど。No.6出土。10もロクロ成形痕を明瞭に留める作りで、口径12.6cm、底部内径は5.7cmが測られる。埋没土出土。11・12は須恵器环蓋。11は扁平な宝珠で、外面1/2以下をケズリ調整し返しははやや鋭角に折れ曲がる。No.10出土。12は返し部が強く外反した形態でNo.4出土。13は須恵器環B類の1/3程度の個体。口径15.2cm、高台部に摩擦痕があり、再利用品か？14は灰釉陶器の小壺の蓋破片。15は須恵器の短頸壺の蓋か。1/5程度の小破片であるが、内面は著しく研磨様に摩擦している。16は土師器の椀の底部。内面著しく摩擦しており、転用硯のような再利用品なのか？埋没土中出土。17と18は土師器の甕形土器。17は細かなハケ調整の小甕、口縁部破片。18は外面に回転ロクロ目を残すナデ成形の甕。No.7出土の2/3個体。第202図10は安山岩材の磨石で埋没土出土。11は方柱状の砥石で1/3程度の残欠品。埋没土出土。第205図5は鉄製の刀子。6は鉄製の鎌。第203図18は棒状の土製品。種類は推定できないが、両端が扁平状になっていることから、何らかの土製品の一部であろう。

時 期：6軒の切り合いの中で最も新しい段階の住居跡である。検出状況が良好でなかったこともあり、出土遺物には若干の混入が予想される。食膳具では須恵器環A類が底部系切り離し手法で、ロクロ目を顕著に残す成形法であること、環B類がほとんど存在しないこと、ロクロ目の土師器小甕の存在などから、古代V期（9世紀後半）と考えられる。ただし埋没土中ではあるが、土師器椀の底部破片が出土しており、古代VI期（9世紀終末）までの時間幅は考慮しておくべきか。

S B 5 5（第149図、第191図、第203図 P L 54, 80）

位 置：XVII J - 02

検 出：砂礫層上面にて方形状に広がる黒色土の落ち込みを確認した。その形状と規模から、竪穴住居跡を想定し調査に入った。西側は落ち込みラインが不明瞭であったが、SK2879と切り合うことが判明した。

規 模：長軸404cm×短軸392cm、深さ-26cm、隅丸方形。

埋 土：2層の堆積である。

構 造：カマドの袖部及び煙道部などは確認できなかったが、焼土の集中を認めた。所見からカマド燃焼部の残骸と考えられ、大きさ30cmほどの垂角礫が4点散在していた。周溝は認められず、柱穴を2基確認した。南側にあるPit2は、掘り込みが浅く皿状である。床面は小礫まじり平坦面、床下-10cmほどの掘り方が認められた。掘り方内は砂礫混じりの土層であった。

遺物出土状況：埋没土中より小礫に混じり、土器小破片が出土した。

遺 物：第191図19は非ロクロ土師器の環。底部は平丸底の浅い形態で内面はていねいにミガキ調整されている。埋没土出土。20・21は須恵器環A類で、外面にロクロ成形痕を明瞭に留め底

部はヘラ切り離し手法。20はNo.4出土で口径13.4cm、器高4.2cm。21は埋没土出土で口径14.0cm、器高4.5cm。22は須恵器短頸壺の蓋、1/4程度の破片。つまみ部は欠失する。口径12.0cm、カマド内のNo.1出土。第203図19は土製の紡錘車。径3.2cmで厚さ1.5cm、18.3g。20は1/2欠損した紡錘車で、径6.0cmで厚さ4.5cm。

時期：須恵器環類はヘラ切り離し手法で、これに非ロクロ土師器の環が組成する。埋没土内には糸切り離し手法の須恵器環Aの小破片3点があるが、本跡に伴うものではないと考えられる。環B類の伴出はないことから、古代Ⅱ期以前の可能性が高く、概ね古代Ⅰ期(7世紀代)ころを想定できるか。

S B 5 6 (第153図、第191図 P L 54, 75)

位置：XVII I - 07・08

検出：基本土層(Ⅲ層)を掘削し、砂礫層上面にてほぼ方形に広がる黒色土の落ち込みを確認したが、南側は掘削した法面内となり、さらには現況で生活用水路が存在することから追跡調査はできなかった。遺構の約半分程度を記録保存した。

規模：長軸(296cm)×短軸396cm、深さ-16cm、隅丸方形か？

埋土：黒褐色土の単純堆積である。

構造：カマドは不明瞭であったが、東側の辺の中央付近より炭化物、焼土の分布が認められ、カマドの残骸と推定できた。袖や燃焼部は確認できなかった。柱穴は認められないが、本跡のほぼ中央付近に大形の土坑(大きさ85cm)が1基検出できた。周溝は確認できない。

遺物出土状況：カマド推定部分に集中して認められた。

遺物：第191図23・24は須恵器環A類。ともに外面に明瞭なロクロ成形痕を留める。23は口縁部の破片であるが、体部に墨書があるが小破片のため文字を判読はできない。炭化物分布内より出土。24はほぼ完全な個体に復元可能な例で回転系切り離し手法。口径12.4cm、器高3.5cmが測られる。底部内径は5.5cmでNo.4とNo.8の接合資料。25は黒色土器B類の皿。内外面良好にミガキ調整されている。口径11.8cm、器高2.4cm。26と27はナデ調整の甕形土器。いわゆる砲弾型の甕。26はNo.5出土、27はNo.5出土。

時期：須恵器環A類は糸切り離し手法が中心でヘラ切り手法はない。黒色土器B類の皿B類の出現がある。土師器甕はロクロ成形砲弾型の形態であるなどの諸要素から、古代Ⅳ期(9世紀代)と考えられる。ただし土師器環類の出現は確認できないことから、9世紀代でも中葉の前後と考えられるか。

S B 5 7 (第153図、第191図 P L 54)

位置：XVII D - 21・22

検出：砂礫層上面にて不整形に広がる黒色土の落ち込みを確認した。精査の結果、全体は三角形状をしており、竪穴住居跡の残骸もしくは大形の遺構を想定して調査に入る。

規模：長軸(224cm)×短軸(344cm)、深さ-12cm、N123°E、隅丸方形か？

埋土：黒褐色土の単純堆積である。

構造：カマドは南東側に、その残骸と考えられる焼土を確認した。焼土堆積部分には皿形の掘り込みがあり、火床・燃焼部と判断した。周辺部には加熱を受けた砂礫が分布していた。周溝はカマド想定部の南側コーナーに認められたが、部分的なものであった。柱穴は確認できなかった。北側は自然的な営力により破壊を受けていた。

遺物出土状況：埋没土中より、土師器甕形土器等の小破片が少量出土した。

遺物：第191図28は須恵器環H類で軟質。受け部の幅は広く、立ち上がりは緩やかに内傾する。口径13.4cmが測られる。

時期：本跡は残像状況が悪く、大半が削平されている。このため所属時期を決定するに十分な情報が無い。所属時期不明と考えるべきであるが、埋没土中の資料に28があり、この資料は古墳時代Ⅶ期から古代Ⅰ期（7世紀代）に位置づけられる。

S B 5 8（第153図、第191図、第202図 P L 54）

位置：XⅦⅠ-05、D-25

検出：砂礫層上面にて方形状に広がる黒色土の落ち込みを確認した。形状から住居跡を想定し調査に入る。

規模：長軸300cm×短軸314cm、深さ-18cm、W6°N、隅丸方形。

埋土：2層の堆積である。

構造：本跡の西側にカマド施設と考えられる焼土が確認できた。明瞭な袖部及び煙道は認められない。焼土もわずかであり、燃焼状況も弱い。直下には浅い凹部があり、燃焼部の残骸か？周溝は確認できない。床面は砂質土の平坦面であるが硬化は弱い。柱穴は5基確認した。Pit1・3・4が主柱穴であろうか。

遺物出土状況：埋没土中より土器等の小破片が少量出土した。また床面より砥石が1点出土している。

遺物：第191図29・30はハケ調整の長胴甕。No.2ほかの接合資料。胎土中にガラス質の微細片を混入する。第202図12は砥石。砂岩材でNo.5の出土。

時期：不明。埋没土の遺物も小破片のみで時期決定は難しい。長胴甕は胴部中央付近の張りがやや緩む形態であり、埋没土中にも糸切り手法の須恵器環A類がなく、1点のみ環B類の破片があることを加味すれば、古代Ⅰ期（7世紀後半代）を想定できるか。

S B 5 9（第154図、第191図 P L 55）

位置：XⅦⅡ-01

検出：砂礫層上面にて方形状に広がる黒色土の落ち込みを確認し、竪穴住居跡を想定して調査に入る。

規模：長軸372cm×短軸408cm、深さ-14cm、真北、隅丸方形。

埋土：2層の堆積である。

構造：検出時点で埋没土の大半を失っており、特に北側では床面直上の調査となった。カマドは本跡の北側にて確認した焼土から、その場所を認定したが、袖や煙道は確認できなかった。また燃焼部の掘り込みも明瞭ではなかった。周溝は北側以外の各辺に確認できた。柱穴は4基を確認した。Pit2～4が主柱穴か。床面は砂質土の平坦面であり、硬化は弱い。

遺物出土状況：埋没土中より、土器の小破片が出土した。

遺物：第191図31は須恵器灯蓋。つまみ部は山形で外面1/3程度にケズリ成形痕を留める。返しはやや丈が短く直に立つ。32・33は須恵器環B類。32は口径15.0cm、器高4.9cm、高台は底部外側につく。埋没土出土。33は埋没土出土で、口径12.8cm、器高3.4cmが測られる。高台は底部の外側に「ハ」の字状につく。34は須恵器短頸壺。底部を欠失している。埋没土の出土。35はハケ調整の長胴甕。胎土中にガラス質の微細片を混入する。No.6出土。

時期：須恵器灯蓋は返しに緩やかに立つ形態で、環B類は高台径のやや大きなタイプである。時期の決定は難しいが、埋没土中の須恵器環類に糸切り離し手法が認められない点などを考慮すれば、古代Ⅰ期からⅡ期（7世紀後半～8世紀前半）に相当してくるか。

S B 6 0（第154図、第191図 P L 55）

位置：XⅦⅢ-20・25

検出：砂礫層上面にて小礫が集中し、かつ方形状に広がる黒色土の落ち込みを確認した。その形状から竪穴住居跡もしくは大形の遺構を想定し調査に入る。

規模：長軸 332cm × 短軸 324cm、深さ - 24cm、N27° W、隅丸方形か？

埋土：黒褐色土の単純堆積である。

構造：カマドは本跡北西側の辺に確認した。礫を芯材とした砂質土による袖の残骸と燃焼部である。燃焼部には焼土が残り、凹凸のある掘り方を確認した。周溝及び柱穴は確認できなかった。床面は砂質土による平坦面で硬化は認められない。

遺物出土状況：埋没土中より、土器の破片が出土した。

遺物：第 191 図 36 は須恵器環 A 類、ほぼ宍形。No.1 の出土。底部回転糸切り離し手法。外面にはロクロ成形痕を留める。口径 12.7cm、器高 3.5cm、底部内径 6.5cm が測られる。

時期：本跡の所属を出土遺物から特定することは難しい。提示した須恵器環の特徴から判断すれば、古代Ⅳ期（9 世紀代）と考えることが可能か。

S B 6 1（第 154 図 P L 55）

位置：XVII G - 25

検出：基本土層（Ⅲ層）を掘削し砂礫層上面にて長方形に広がる黒色土の落ち込みを確認した。落ち込みの南側は調査区域の法面下に伸びており、調査できていない。竪穴住居跡もしくは大形の遺構を想定し調査に入る。

規模：長軸 256cm × 短軸（158cm）、深さ - 10cm、N69° W、隅丸方形か？

埋土：黒褐色土の単純堆積である。

構造：カマドを想定できる焼土の集中が東側の辺近くにて検出できた。袖及び煙道部に関しては確認できなかった。また周溝及び柱穴も確認できていない。床面は砂質土による平坦面。

遺物出土状況：埋没土中より、土器の破片が少量出土した。

遺物：図示できる資料なし。

時期：不明。

S B 6 2（第 155 図、第 192 図 P L 55, 56, 75）

位置：XVII E - 21、J - 01

検出：砂礫層上面にて方形に広がる黒色土の落ち込みを確認、竪穴住居跡を想定し調査に入る。

規模：長軸 454cm × 短軸 398cm、深さ - 24cm、N10° W、方形。

埋土：2 層の堆積である。

構造：本跡の北側にカマドと考えられる焼土を検出した。燃焼部の左右には炭化物を含む凹部があり、袖石の抜き取り痕とも考えられる。焼土と炭化物の分布内より拳大より大きな礫が 3・4 点出土した。周溝及び柱穴は確認できていない。床面は砂質土による平坦面で、部分的に硬化面が認められた。柱穴は 3 基確認できた。

遺物出土状況：カマド想定部付近より、土器の破片が出土した。

遺物：第 192 図 1～3 は非ロクロ土師器の環類で、ともに平丸底。1 は外面底部をケズリ成形し、体部はナデ調整、内面はていねいにミガキ調整されている。口径 11.3cm、器高 4.2cm が測られる。2 は 1 とほぼ同様な作りで、口径 11.4cm、器高 3.4cm が測られる。3 は No.2 の出土。4・5 は高環の脚部。4 は環部が非常に薄い作りの例で、5 はやや厚みがあり脚はケズリ成形と細いハケ調整がなされている。残念ながら口縁部等環部を欠失している。6 はハケ調整の長胴環、口縁部破片。ロクロ目を強く残し、胎土内にガラス質の微細片を混入する。

時期：非ロクロ土師器の環には、いずれも平底化が認められる。高環は古代特有の形態的特徴があり、埋没土中からは時期の判定できない須恵器環類の小破片が少量出土している。土師器ハケ環は胴があまり張らない形態であり、古代Ⅰ期～Ⅱ期の初頭（7 世紀後半）ころが推定できる。

SB63 (第155図、第192図、第202図 P L 56, 75)

位置: XVII D - 25

検出: 砂礫層上面にて広範囲に広がる黒色土の落ち込みを確認した。竪穴住居跡あるいは大形の遺構が複数存在する可能性を考え、精査し土層観察用のトレンチを設定、調査に入る。結果、本跡の西側に1軒(SB64)、東側に1軒(SB68)の住居跡の存在することが判明した。

規模: 長軸468cm×短軸442cm、深さ-22cm、N166°W、隅丸方形。

埋土: 2層の堆積である。

構造: 本跡はSB64及びSB68を破壊する。カマド、周溝、柱穴は確認できない。床面は粘土をブロック的に含む砂質土で貼り床の可能性が高い。

遺物出土状況: カマド想定部付近より、土器の破片が出土した。

遺物: 第192図7は非ロクロ土師器の坏類。内面はていねいにミガキ調整し、外面はヘラケズリ成形を留めている。黒色処理は消失してしまったか、肉眼では観察できない。No.10の出土で、口径15.8cmが測られる。8は須恵器坏A類。底部はヘラ切り離し手法。口径12.8cm、器高3.1cmが測られる。9は非ロクロ土師器椀形の鉢。内外面、ていねいにミガキ調整仕上げされている。口径17.5cm、器高7.1cm。No.1の出土。均整のとれた作りでミガキもていねいな点からロクロ成形の可能性もある。10はハケ調整の小型甕。No.7の出土。第202図13は砥石1/2残欠で、掘り方から出土している。

時期: 須恵器坏類はヘラ切り離し手法の古代型の須恵器が存在する。非ロクロ土師器の坏類も少なからずある。図示していないが、カマド2層より須恵器坏B類の底部小破片があることから、古代I期後半～II期(7世紀終末)以降の可能性は高い。糸切り離し手法の須恵器坏A類の出土はないが、第192図8の製作的特徴は古代III期(8世紀後半)ころと考えられる。この土器とロクロ成形の可能性ある鉢が床面近くの出土例であることから、古代III期(8世紀後半)前後に位置づけることができるのか。

SB64 (第156図、第192図 P L 56, 57, 76)

位置: XVII D - 24・25

検出: 砂礫層上面にて広範囲に広がる黒色土の落ち込みを確認した。竪穴住居跡あるいは大形の遺構が複数存在する可能性を考え、精査し土層観察用のトレンチを設定、調査に入る。結果、本跡の東側に2軒(SB63・SB68)の住居跡の存在することが判明した。本跡とSB63の切り合い関係をつかむことはできなかった。

規模: 長軸444cm×短軸376cm、深さ-12cm、N25°E、隅丸方形。

埋土: 2層の堆積である。

構造: 本跡の北側の壁付近にて焼土を確認した。袖や煙道部分は確認できなかったが、焼土下に、皿状の掘り込み面を認め、これを燃焼部と判断した。周溝は確認できず、柱穴を1基のみ確認した。床面はややしまりのある硬化面を認め、そこを床と判断した。

遺物出土状況: カマド想定部付近より、土器破片が出土した。

遺物: 第192図11は黒色土器A類の坏、完形品。口径は13.7cm、器高4.7cmが測られる。外面はていねいにケズリ調整され、底部は平底。底径7.2cm。12・13はハケ調整の土師器長胴甕。12はNo.1・No.2・No.3・No.16・No.18、埋没土出土の接合資料。13はNo.5・No.8・No.9・No.11・No.14・No.16、埋没土出土の接合資料。

時期: 本跡床面の焼土塊に近接して出土した黒色土器A類の存在とハケ調整の長胴甕の特徴から、古代

Ⅲ期（8世紀後半）以後と判断できる。このことからSB63との新旧関係は本跡が新しい可能性も考えられる。

SB65（第156図、第192図 P L 57, 76）

位置：XVII J-06、I-10

検出：砂礫層上面にて方形状に広がる黒色土の落ち込みを確認した。規模と形状から竪穴住居跡を想定し、調査に入る。

規模：長軸484cm×短軸504cm、深さ-40cm、E 6°N、隅丸方形。

埋土：3層の堆積である。

構造：本跡西側の壁付近にて焼土を確認した。袖や煙道部分は確認できなかったが、焼土下に、皿状の掘り込み面を認め、これを燃焼部と判断した。周溝は確認できなかった。柱穴は14基を確認し、その内の4基（Pit2・Pit12・Pit10・Pit14）に配置上から主柱穴の可能性があるか。ただしPit3やPit5、Pit4やPit11など掘立柱建物跡とも考えられそうな配置もあり、14基の性格は判然としない。床面は砂礫の平坦面を認め、床として判断した。燃焼部には土坑2基（SK2404・SK3041）が別に存在し、本跡を破壊するが、その性格は不明である。

遺物出土状況：カマド想定部付近より、土器破片が出土した。

遺物：第192図14は非ロクロ土師器の坏。底部は平底で体部下半をケズリ成形している。内面はミガキと考えられるが風化が著しく観察できない。口径14.2cmが測られ埋没土中の出土である。15は高坏の脚部破片。No.1の出土。16は須恵器坏蓋。つまみ部は欠損、体部外面は1/2以上にケズリ成形痕を留める。返しは端部を強く外反する。埋没土出土。17は須恵器坏A類。底部ヘラケズリ手法で、口径11.6cm、器高3.1cmが測られる。埋没土出土。18は土師器ハケ調整の長胴甕。胎土中にガラス質の微細粒を混入する。埋没土中の出土。

時期：非ロクロ土師器の坏や高坏が主体。須恵器坏A類は深さのある箱形で、ヘラケズリ手法である。これに須恵器坏蓋B類が伴うことから、本跡の所属時期は概ね古代1期（7世紀後半）ころと考えられるか。

SB66（第157図、第192図、第203図 P L 57, 76, 80）

位置：XVII H-11・12・16・17

検出：砂礫層上面にて方形状に広がる黒色土の落ち込みを確認し、形状から住居跡を想定し調査に入る。

規模：長軸480cm×短軸440cm、深さ-20cm、N48°W、隅丸方形。

埋土：2層の堆積である。

構造：カマドは本跡西側に確認した。袖は確認できなかったが、煙道煙出し部分と考えられる掘り込みがあった。ただしSK2955が重複して存在する箇所であり煙道の構造等はつかめていない。燃焼部には灰と焼土が残存し、皿形の掘り込みがある。付近からは拳大の礫と灰（掻きだしか？）が認められた。幅20cmから30cmの周溝がほぼ全周している。柱穴は6基を確認した。床面近くにて検出した土坑（SK3001およびSK3006）は、その配置から本跡に伴う主柱穴の可能性が高いと考えられる。床面は砂礫混じりの平坦面で、特に硬化していない。

遺物出土状況：埋没土中より多量の土器破片が出土した。また床面より土製の紡錘車が1点出土した。

遺物：第192図19～21は非ロクロ土師器の坏。19は口縁部の小破片であり高坏の坏部の可能性もある。調整等は風化著しく観察できない。口径12.0cmで埋没土中の出土である。20及び21は口径が13.8cmほどで器高5.5cmが測られる深い椀形である。22は黒色土器A類の椀の底部破片か？埋没土中の出土。23は須恵器坏蓋。完形個体で宝珠は扁平、全体形はやや山形に盛

り上がり、返しは小さく直。体部のケズリ調整は1/2程度か。No.2の出土。24はヘラ切り離し手法の環A類。外面にはロクロ調整痕を明瞭に留める。口径14.0cm、器高は4.0cmが測られる。25は内外面ハケ調整の後、ナデ仕上げされた甔。一孔式か？No.5の出土。26は須恵器の短頸壺の一括個体。明るい灰色系。体部過半は部分的に破片が欠落し接合できない。第203図21は土製紡錘車。No.4出土。径7.3cm、厚さ3.5cm、195.5g。このほか、土師器甕？の胴部破片を利用した円盤が1点ある。埋没土出土で13.1gが量られる。

時期：非ロクロ土師器の環類が主体を占め、これにヘラ切り離し手法の須恵器環類が伴う。埋没土中に環B類底部破片はあるが、糸切り底の環A類は存在しない。以上の点から古代1期後半から古代Ⅲ期（7世紀終末から8世紀前半）ころと考えられる。

SB67（第158図、第193図、第205図 P L 57, 76）

位置：XVII E-21・22

検出：砂礫層上面にて方形状に広がる黒色土の落ち込みを確認した。形状と規模から竪穴住居跡を想定し調査に入る。

規模：長軸540cm×短軸452cm、深さ-16cm、真北、隅丸方形。

埋土：2層の堆積である。

構造：明確にカマドと考えられる構築物は確認できなかった。北側の壁近くには焼土および炭化物の分布があり、それがカマドを推定できる唯一のものである。袖や燃焼部等は施設として認められない。周溝は確認できなかった。柱穴は6基を確認したが主柱穴の判断はつかなかった。床面は部分的に硬化した部分が認められた。

遺物出土状況：埋没土中より耳環1点が出土した。

遺物：第193図1は土師器長胴甕。内外面ともハケ調整。No.3の出土。2はハケ調整の後、全面をナデ仕上げた小形の甕形土器。第205図10は埋没土出土の銀環。

時期：不明。

SB68（第157図、第193図 P L 58, 76）

位置：XVII D-25、E-21

検出：砂礫層上面にて広範囲に広がる黒色土の落ち込みを確認した。竪穴住居跡あるいは大形の遺構が複数存在する可能性を考えて精査し、土層観察用のトレンチを設定、調査に入る。結果、本跡の西側に2軒（SB63・SB64）、東側に1軒（SB62）の住居跡の存在することが判明した。

規模：長軸（416cm）×短軸（404cm）、深さ-8cm、N79°W、隅丸方形。

埋土：2層の堆積である。

構造：本跡はSB62に東側を、SB63に西側を破壊される。カマドは西側のSB63に破壊された部分に認められ、わずかながら燃焼部の焼土が残る。袖および煙道等は確認できなかった。また周溝も認められない。床面はしまりのよい硬化面であり、これを除去した時点で柱穴5基を確認した。Pit2・Pit3・Pit4が本跡に伴う主柱穴と考えられるが、床下の検出である。

遺物出土状況：カマド想定部付近より、土器の破片が出土した。

遺物：第193図3は須恵器の甕または短頸壺の胴部破片。埋没土中の出土。4は輪積み痕を明瞭に残した小型甕。全体をハケ調整の後、ナデ仕上げしている。No.1とNo.2の接合資料。

時期：出土遺物が十分でなく、本跡の所属時期を決めることは困難である。SB62（古代1期）に本跡は破壊されており、それよりも古いと判断できる。古墳時代V期から古代1期の前半相当（7世紀前半）か。

SB69 (第158図、第193図 P L 58, 76)

位置: XVII H - 12・17

検出: 砂礫層上面にて長方形に広がる黒色土の落ち込みを確認した。南側は調査区外に及んでおり、落ち込みラインは不明瞭であった。形状から竪穴住居跡を想定し調査に入る。

規模: 長軸 (328cm) × 短軸 (2724cm)、深さ - 24cm、隅丸方形か?

埋土: 検出時にすでに床面直上であり、堆積土層は黒褐色土の単純堆積を確認したのみ。

構造: 本跡はSK2999、ST42を破壊する。カマド及び周溝は確認できない。柱穴は2基を確認した。本跡に伴う主柱穴であるか否かは不明である。床面は明確には確認できなかった。すでに検出レベルが低かった可能性もある。

遺物出土状況: 埋没土中より土器の小破片が出土。

遺物: 第193図5は須恵器環A類、糸切り離し手法で外面にはロク口成形痕を明瞭に留める。口径13.0cm、器高3.8cm、底部内径6.0cmが測られる。埋没土中の出土。6は羽釜の口縁部破片か。7はナデ調整の土師器裏の口縁部破片。

時期: 本跡の所属時期を決定することは難しい。埋没土中から出土した須恵器環A類は糸切り手法であり、底部内径等の諸特徴から古代IV期に比定できる。また同じく埋没土中ではあるが、黒色土器B類の破片が3点あり、やはり古代III期以降の所産である。これらのことから、本跡は古代III期あるいはIV期の可能性を考えることもできるか。

SB70 (第159図、第193図、第202図 P L 58, 76)

位置: XVII E - 16

検出: 砂礫層上面にて不整形に広がる黒色土の落ち込みを確認した。その広がり様子から、竪穴状の遺構が複数重複している可能性を予想し、平面の精査後に調査に入る。結果、SB71との切り合いを確認できた。本跡がSB71に破壊される。

規模: 長軸492cm × 短軸366cm、深さ - 8cm、W5° N、隅丸方形か?

埋土: 黒褐色土の単純堆積である。

構造: 東側の壁中央近くに焼土を確認した。明瞭な掘り方、加熱を受けた地面の様子から、そこにカマドが存在した可能性が高い。しかしながら、袖、煙道等の施設は認められなかった。周溝は南壁から西壁にかけて確認できた。柱穴は6基があり、この内の3基 (Pit1・2・4) は断面の形状・深さが類似しているが、主柱穴か否かは配置からは判断できない。床面は明確ではなく、砂質土の平坦面をそれと認定した。

遺物出土状況: 埋没土中より土器破片が出土している。

遺物: 第193図8・9は須恵器の環A類。ともに底部へラ切り離し手法で、「×」様の記号がある。8は箱形で口径11.2cm、器高4.0cmが測られる。No.3とNo.6とカマドNo.1の接合資料。9は口径13.1cm、器高3.9cm、No.2出土。10は須恵器の锅盖。つまみ部分を欠失する。体部外面は1/2程度回転ケズリ調整し、返しは直。やや軟質。11は須恵器環B類。口径15.9cm、器高4.7cmが測られる。底部に「×」記号があり、胎土中には赤褐色の粒子を混じる。高台は底部の外側に貼り付き平接地。12は須恵器長頸壺の頸部。No.3・No.5・No.6・No.7の接合資料。13・14は土師器裏形土器。13は底部破片、14は口縁部の破片。15はNo.4出土の円筒形土器。外面は縦方向にミガキ・ナデ調整し、内面は横方向のハケ調整。第202図14は安山岩材の凹石で、径1.0cmほどの凹部が表面にひとつある。埋没土の下層より出土している。

時期：須恵器環類はいずれもヘラ切り離し手法で、口径の小さな箱形例がカマドより出土している。須恵器環B類は口径の大きなものが組成し、環蓋B類もある。以上の特徴から、古代Ⅰ期～Ⅱ期（7世紀終末～8世紀前半）に推定可能か。

SB71（第159図、第193図 P L 58, 76）

位置：XVII E - 11・16

検出：砂礫層上面にて不整形に広がる黒色土の落ち込みを確認した。その広がり様子から、竪穴状の遺構が複数重複している可能性を予想し、平面の精査後、調査に入る。結果、SB70との切り合いが確認できた。本跡がSB70を破壊する。

規模：長軸516cm×短軸484cm、深さ-28cm、N3°E、隅丸方形。

埋土：2層の堆積である。

構造：北側の壁中央近くに焼土を確認した。明瞭な掘り方や加熱を受けた地面の様子から、そこにカマドが存在した可能性が高い。袖、煙道等の施設は認められなかった。周溝は南壁から西壁にかけて、コーナー部分に確認できた。柱穴は7基があり、この内の3基（Pit1・3・4）が主柱穴である可能性が高い。

遺物出土状況：カマド推定部より土師器の甕と環類がまとめて出土した。

遺物：第193図16は古墳時代の有稜の環類。口径12.7cmが測られる。胎土中にはほとんど混入物のない洗練された粘土で焼かれており搬入品と考えられる。17と18は黒色土器A類と観られる。17は底部にケズリ成形痕を留め、底部平底。風化著しく、ミガキ調整の様子は観察できないが、均整のとれた形態やその作りはロクロ成形と考えられる。No.2の出土。18は底部にケズリ成形痕を留める、口縁外面は強い横ナデで仕上げられている。内面の黒色処理はほとんど脱色している。底径は4.3cmと小さく、口径14.3cmが測られる。Pit3出土。19・20は非ロクロ土



SB71 出土の土器集合

師器の環類。19は平底で小ぶりの環で、口径9.4cm、器高4.8cm。内面の黒色処理は脱色している。No.2の出土。20は浅い皿形で、口径12.7cm、器高4.1cmが測られる。カマドNo.12出土。21と22は高環形土器、同一の個体か？21はNo.9、Pit2及びカマドNo.2ほかの接合資料。22は脚部の破片でPit2の出土。23は甔の底部。内外面とも縦方向のていねいなミガキ調整がある。多孔式。24と25は土師器の甔。24はカマド内出土でNo.2出土。

時期：非ロクロ土師器の環類があり、須恵器環類は小破片ながら伴出、内面黒色処理された高環形土器が存在する。カマド周辺の遺物の特徴は、古代Ⅰ期相当と思われるが、北東壁に近い床面付近から出土した第193図17及びPit3より出土した第193図18はロクロ使用の黒色土器A類の可能性が高いので、それらが最も新しい遺物と判断できる。本跡がSB70を破壊していたとの所見があり、SB70の所属年代（古代Ⅰ期後半）をさかのぼることはできない。したがって、本跡の所属時期は古代Ⅱ期あるいは黒色土器A類の出現する古代Ⅲ期（8世紀後半）以後と考えるべきである。

SB72（第160図、第194図 P L 59, 77）

位置：XVII E - 16・17・21・22

検出：砂礫層上面にて方形状に広がる黒色土の落ち込みを確認し、竅穴住居跡を想定して調査に入る。

規模：長軸376cm×短軸408cm、深さ-26cm、真北、隅丸方形。

埋土：2層の堆積である。

構造：北側の壁中央近くに焼土と土器の集中を確認した。掘り方も明瞭であることから、カマド燃焼部と推定した。袖、煙道等の施設さらに周溝、柱穴は確認できなかった。

遺物出土状況：カマド燃焼部の上部より、円筒形土器破片が一括出土した。

遺物：第194図1は円筒形土器。内面には明瞭な輪積み痕が残り、外面は縦方向の細かなハケ調整が観られる。2は多孔式の甔で完形品。口縁部外面は強い横ナデにより仕上げられている。口径18.0cm、器高10.0cmが測られる。

時期：所属時期を決定するには出土遺物が十分ではない。多孔式の甔の存在から古代Ⅰ期相当の可能性が高く、埋没土の下層から須恵器環B類の小破片2点があることを加味し、古代Ⅰ期後半～Ⅱ期（7世紀終末）ころと推定できるか。



SB72出土の土器（甔と円筒形土器）

SB73 (第161図、第194図、第202図 P.L. 59, 77)

位置：XVII E - 17・22・23

検出：砂礫層上面にて不整形に広がる黒色土の落ち込みを確認した。規模が大きく、竪穴住居跡または大形の遺構を想定し精査する。結果、方形状に広がる落ち込みは、遺構3基が重複するものと判断できた。その形状から竪穴住居跡を想定し、埋没土の土層差からSB73、SB74、SB75を仮称し調査に入る。

規模：長軸516cm×短軸568cm、深さ-16cm、N17° E、隅丸方形。

埋土：黒褐色土の単純堆積である。

構造：カマドは本跡の北側壁中央付近に確認できた。焼土および灰の分布をそれと認めたが、袖及び煙道等の施設は確認できなかった。焼土の両側には袖部芯材の抜き取り痕と考えられる凹みが認められた。また焼土下には皿状の掘り込み面があり、燃焼施設と考えられる。検出当初、本跡が最も新しいと判断したが、床面を精査したところ、本跡の硬化面がSB74のところまでで、断ち切られた状況が見られたため、本跡をSB74が破壊すると結論づけた。柱穴は8基（床下から3基 Pit6～Pit8）を確認したが、主柱穴はその配置からは判断できない。

遺物出土状況：埋没土中より土器破片が出土した。カマドの西側に甕形土器が一括して出土した。

遺物：第194図3は古墳時代の有稜の坏、口縁部破片。体部外面はケズリ成形し、内面はケズリ後、ていねいにナデ調整されている。口径11.6cm、器高4.3cmが測られる。No.5出土。4～7は非ロクロ土器の坏類。4と5はともに口縁部が内傾気味に直立し、底部丸底の坏B類で、体部下半はケズリ成形し、内面はていねいにミガキ調整された内黒。4・5ともにNo.4出土。4は口径10.5cm、器高3.8cm、5は口径11.8cm、器高4.8cmが測られる。6は内面にていねいにミガキ調整した内黒で丸底。No.4出土。7は底部が平底化した形態で底部には「一」記号がある。口径10.5cm、底径5.6cmが測られる。8は須恵器坏蓋あるいは坏身か。内外面とも回転ナデ調



SB73 出土の土器集合

整され、天井部はやや平坦で、坯身の底部を思わせる形状である。9はハケ調整の土師器長胴甕。胎土中にはガラス質の微細片を混入する。No.2の出土。10～12は内外面ミガキ調整された球胴の甕形土器。10は小形例でNo.5の出土。11はNo.7の出土、12はNo.1の出土。第202図15～17はPit7より一括して出土した磨石。15は安山岩材で表面及び側面にアバタ状の凹部がある。16と17は片面に摩擦面が観られる。

時期：古墳時代V期。

SB74（第161図、第194図、第203図 P L 59）

位置：XVII E-22、J-02

検出：砂礫層上面にて不整形に広がる黒色土の落ち込みを確認した。規模が大きく、竪穴住居跡または大形の遺構を想定し精査する。結果、方形状に広がる落ち込みは、遺構3基が重複するものと判断できた。埋没土の土層差からSB73、SB74、SB75を仮称し調査に入ったところ、本跡がSB73を破壊していることが確認できた。

規模：長軸358cm×短軸336cm、深さ-16cm、W9°N、隅丸方形。

埋土：黒褐色土の単純堆積である。

構造：カマドは東側の壁中央付近にて検出した焼土部分とした。袖及び煙道、燃焼部掘り込み等の施設は確認できなかった。カマド周辺部の床面は硬化があり、焼土粒子が散在して認められた。柱穴は1基を床下にて確認したが、性格は不明。

遺物出土状況：埋没土中より土器破片が出土した。

遺物：第194図13は須恵器の長頸壺の底部破片。第203図22は黒色土器B類で蓋のつまみ部分に似るが、つまみ部は空洞で壺形ようである。器種は推定できない。検出面の出土である。

時期：SB73を本跡が破壊することから、その所属時期である古墳時代V期よりも新しいと判断できるが、厳密に所属時期を特定できない。

SB75（第160図、第194図 P L 60, 77）

位置：XVII E-22・23

検出：砂礫層上面にて不整形に広がる黒色土の落ち込みを確認した。規模が大きく、竪穴住居跡または大形の遺構を想定し精査する。結果、方形状に広がる落ち込みは、遺構3基が重複するものと判断できた。埋没土の土層差からSB73、SB74、SB75を仮称し調査に入る。3軒のうち、堆積土層の観察から本跡が最も新しいと考えられ、SB74そしてSB73と時代が古くなることが予想できた。

規模：長軸508cm×短軸（500cm）、深さ-18cm、W1°N、隅丸方形。

埋土：黒褐色土の単純堆積である。

構造：検出面がすでに床面に近い状態であった。カマドは東側の壁中央付近の焼土部分を認定した。袖及び煙道、燃焼部掘り込み等の施設は確認できなかった。煙道が設置されたと考えられる部分は不明瞭で、崩落後の状態を確認できなかったことによるか。柱穴は1基を南側壁付近で確認したが、性格は不明。確認状況では上位からの掘り込み、土坑の可能性を所見とする。

遺物出土状況：埋没土中より土器破片が出土し、須恵器の破片が目立つ。

遺物：第194図14は黒色土器A類の環。内面ていねいにミガキ調整した内黒。底部は平底でケズリ調整。口径11.8cm、器高4.4cm、底部径4.4cmを測る。No.2出土。15は黒色土器A類の鉢もしくは環。口縁部は大部分を欠損する。底部はケズリ調整。口径19.0cm、器高6.7cm、底部径6.0cmが測られる。No.3出土。16は須恵器の環A類。口径13.2cm、器高4.0cm、底部内径は5.5cmが測られる。No.1の出土。

時期：須恵器と黒色土器A類が主体を占める。須恵器環A類は、糸切り離し手法でヘラ切り手法の破片は確認できない。環Aの底部内径が5.5cmほどであることから、概ね古代Ⅳ期（9世紀前半）に該当すると考えられる。しかし灰軸陶器の出土はみられないが、埋没土中から土師器環の可能性ある口縁部破片資料が2点出土しており、その出現する古代Ⅴ期（9世紀後半）までの時間幅は考慮しておくべきか。

SB76（第150図、第151図、第194図、第205図 P L 60, 77）

位置：XⅦJ-8

検出：砂礫層上面にて不整形に広がる黒色土の落ち込みを確認した。その規模、形状から、住居跡等の大形遺構が複数存在する可能性を認め精査に入る。しかしながら、平面精査では落ち込み部分の形状（遺構のプラン）をつかむことはできず、トレンチを設定し、土層断面より確認に入る。結果、本跡のほか4軒（SB52・SB53・SB54・SB76）の切り合いを確認した。SB52～SB54を調査した後、本跡の調査に入る。

規模：長軸（224cm）×短軸394cm、深さ-10cm、隅丸方形？

埋土：黒褐色土の単純堆積である。

構造：カマドは東側の辺、中央部分にて確認できた、袖部は粘質土により構築され、左右の袖部に焼土が認められる。火床と考えられる部位には焼土等は確認できなかった。左袖部に柱穴1基が認められたほか、計5基の柱穴を確認した。床面に硬化面を確認できない。また南壁と東壁にはSB54同様に、大形の礫で壁を押えるような構築がなされていた。

遺物出土状況：埋没土中から多くの遺物が出土し、土師器環の破片も少量ながら存在する。またカマド埋没土中から小破片ながら黒色土器B類の出土がある。

遺物：第194図17は黒色土器A類の環、ほぼ完形個体。No.6の出土。浅い形態で皿形に近い。口径12.6cm、器高3.1cm、底部径5.5cmが測られる。18は須恵器環。回転糸切り離し後にナデ調整。口径13.8cm、器高4.0cm。調査時はPit1出土として取り上げた資料だが、その所属時期は古代Ⅲ期と考えられる。19は黒色土器A類の碗もしくは盤か。口径15.4cm、器高6.0cmが測られる。No.5の出土。20は灰軸陶器の壺口縁部破片。21はハケ調整の土師器甕、口縁部破片。第205図9は針状の鉄製品。

時期：食膳具の中心は黒色土器となり、カマド内から黒色土器B類の出土もある。埋没土中ではあるが、土師器環類や灰軸陶器の破片の出土もあり、本跡の所属時期は概ね古代Ⅴ期（9世紀後半）ころと考えられる。

SB77（第150図、第151図、第194図 P L 60）

位置：XⅦJ-03・08

検出：砂礫層上面にて不整形に広がる黒色土の落ち込みを確認した。その規模、形状から、住居跡等の大形遺構が複数存在する可能性を認め精査に入る。しかしながら、平面精査では落ち込み部分の形状（遺構のプラン）をつかむことはできず、トレンチを設定し、土層断面より確認に入る。結果、本跡のほか4軒（SB52・SB53・SB54・SB76）の切り合いを確認した。SB52～SB54を調査し、SB76の調査に入るが、調査中に本跡との重複を認め、別遺構として調査を行う。

規模：長軸（290cm）×短軸360cm、深さ-9cm、隅丸方形？

埋土：黒褐色土の単純堆積である。

構造：カマドは認められないが、北側の辺付近の床面より焼土の集中分布を確認した。硬化した状況から、そこがカマド火床と考えられる。袖部及び煙道部は確認できていない。周溝はない。柱穴1

基と左コーナー側に大形土坑1基(70cm×55cm,深さ-15cm)を確認した。床は黒褐色土で、硬化は認められない。

遺物出土状況: 検出面から埋没土層にて、多くの遺物が出土した。

遺物: 第194図22は須恵器環A類、回転糸切り離し手法で、外面にはロクロ成形痕を明瞭に留める。

口径12.3cm、器高4.0cm、底部内径5.8cmが測られる。カマド直下ほかの接合資料。23はケズリ調整の土師器甕形土器の口縁部破片。Pit1出土。24はハケ調整の甕、口縁部破片。No.1出土。

時期: カマド直下より出土した須恵器環の特徴は、古代Ⅲ期の後半(8世紀末)～Ⅳ期(9世紀前半)ころと判断できる。ほかの住居跡との切り合い関係から、本跡が最も古いと考えられ、SB53(古代Ⅴ期, 9世紀前半)よりは古い構築時期と判断できる。

SB78(第162図、第205図 P L 60)

位置: XVII J-07・08

検出: SB53調査時に床面にて別の落ち込みラインを認めた。SB76とSB77を調査時にも、その落ち込みに関連すると考えられる落ち込みラインを確認。それら重複した住居跡を調査した後、本跡の調査を行う。

規模: 長軸(632cm)×短軸(496cm)、深さ-18cm、N4°W、隅丸方形か?

埋土: 黒褐色土の単純堆積である。

構造: カマドは北側の辺の中央部にて検出した。袖部は確認できず、火床と煙道部がある。火床には明瞭な焼土跡が残る。周溝は確認できず、柱穴1基と大形の土坑2基が認められた。

遺物出土状況: カマド周辺部から、土器片が多く出土した。

遺物: 埋没土を中心に黒色土器A類ほか、土器小破片が出土している。

時期: 不明。重複した別の住居跡との切り合い関係を明確にすることはできなかったが、別の住居跡を確認中に本跡の落ち込みラインを確認していることから、最も新しい住居跡の可能性もある。

②掘立柱建物跡(ST)

ST01(第163図 P L 61)

位置: XIX B-07・12

検出: Ⅳ層上面で、平面形の整った土坑群を検出したが、その配列より掘立柱建物跡と判断した。

規模: 柱穴の配置は3間(186cm×148cm×186cm)×2間(228cm×258cm)の10本柱であり、主軸はN10°W、桁行520cm、梁間486cmの寸法を測り、床面積25.27㎡である。柱穴は深く明瞭な掘り込みである。

重複関係: Pit9(旧SK29)はSK56に切られる。

埋土: 基本土層Ⅲ層を基調とする黒褐色粘質土を埋土とする。この埋土に褐灰色土のブロックを含むものもある。柱穴内より巨礫の出土がある。

遺物: 柱穴の埋没土中より須恵器環類、非ロクロ土師器の環類等の破片が出土している。

時期: 須恵器環類にはヘラ切り離し手法を中心に糸切り離し手法も伴う。古墳時代Ⅴ期以降と考えられる。

ST02(第163図、第195図 P L 61, 77)

位置: XIX G-07・08・12・13

検出: 基本層序Ⅳ層中で土坑群を検出したが、平面状の規則性より掘立柱建物跡と判断した。

規模: 柱穴の配置は3間(210cm×206cm×188cm)×3間(190cm×172cm×174cm)の11本柱と考えられるが2本を欠く。主軸はN25°W、桁行604cm、梁間536cmの寸法を測り、床面積32.37㎡である。いずれの柱穴も深く明瞭な掘り込みである。

重複関係：南西隅はSB08により切られる。Pit6 (SK255) と Pit11 (SK245) は切り合い関係がある。

埋土：基本層序Ⅲ層を基調とする黒褐色粘質土。Pit6 (SK255) は細粒砂混じりである。

遺物：第195図1は須恵器環B類の底部。高台は角頭状でやや内設置型。高台径は8.0cmが測られる。底部に「×」記号がある。

時期：環B類の製作の特徴から古代Ⅲ期～Ⅳ期（8世紀後半～9世紀前半）ころと考えられるが、埋没土1層の出土であり、混入の可能性もある。SB08と切り合い関係があり、新旧は調査所見として得られていないが、古代Ⅳ期と考えることもできる。

STO3 (第164図 P L 61)

位置：XIX C - 08・13・14

検出：基本層序Ⅳ層中で土坑群を検出したが、平面形の規則性より掘立柱建物跡と判断した。

規模：柱穴の配置は2間(216cm・196cm)×1間(390cm)の6本柱であり、主軸はN25°W、桁行412cm、梁間390cmの寸法を測り、床面積は16.07㎡である。柱穴は深く明瞭な掘り込みである。

重複関係：なし

埋土：基本層序Ⅲ層を基調とする黒褐色粘質土。

遺物：須恵器環類の破片が中心に出土している。

時期：糸切り離し手法の須恵器環類を中心とする。黒色土器A類の環破片が1点出土していることから、その出現する古代Ⅲ期（8世紀後半）以降の可能性が高い。西側にSTO2が、南側にSB12が隣接する。その距離からみて時期差があると考えられる。

STO4 (第164図、第195図 P L 61, 77)

位置：XVII E - 24、J - 04

検出：古代遺構検出面において、黒褐色土の円形の落ち込みを検出した。規模は小さいが、規則的な配列から掘立柱建物跡を想定し、調査を行った。

重複関係：STO5と重複関係にある。新旧関係は不明であるが、STO5より古い可能性がある。またPit4には切り合い関係がある。

規模：柱穴の配置は2間(160cm・182cm)×1間(252cm)の6本柱であり、主軸はN16°W、桁行342cm、梁間252cmの寸法を測り、床面積8.62㎡である。

埋土：黒色粘土の単層。

遺物：第195図2は土師器碗の完形個体。口径13.3cm、器高4.7cm、高台径7.0cm。内外面とも風化著しく調整は観察できない。胎土にφ2mmの赤褐色粒子を混入する。

時期：土師器碗の存在から古代Ⅴ期（9世紀後半）以降と判断できる。

STO5 (第165図 P L 61)

位置：XVII E - 24、J - 04

検出：古代遺構検出面において、黒褐色土の円形の落ち込みを検出した。規則的な配列から掘立柱建物跡を想定し調査を行った。ただし西側は、今回の調査区外にあり全体は不明である。

重複関係：STO4と重複関係にある。新旧関係は不明だがSTO4より新しい可能性がある。

規模：柱穴の配置は2間(160cm・202cm)×1間(260cm)の6本柱のうち3本を検出、3本は壁の断面で確認した。主軸はN18°W、桁行362cm、梁間260cmの寸法を測り、床面積9.41㎡である。いずれの柱穴も規模が約100cm×85cm、深さ約40cmの明瞭な落ち込みである。

埋土：黒褐色粘質土。

遺物：Pit1～Pit3より黒色土器A類と考えられる土器破片が出土している。須恵器環類の破片が最も多い。

時期：出土遺物から、古代Ⅲ期以降と考えられるが。

ST06 (第165図、第195図、第203図、第205図 PL 61, 62, 77, 80)

位置: XIX F-01

検出: SB21・SB28の検出時に平石を数基確認し、出土位置から礎石建物跡を想定し調査。礎石の上部及び下部に掘り方等は検出できなかった。

重複関係: SB21、SB28、SB29より新しい。

規模: 礎石の配置は2間(252cm・144cm)×2間(88cm・80cm)の総柱の可能性もあるが、6つの礎石が確認されたのみである。主軸はN24°W、桁行400cm、梁間220cmの寸法を測り、床面積8.8㎡である。

遺物: 第195図3はPit2出土の須恵器環A類1/2個体。底部糸切り離し手法で、口径13.2cm、底部内径7.5cmが測られる。軟質須恵器。4はPit1出土の須恵器環B類1/5個体底部を欠失する。口径12.1cmが測られる。第205図12は鉄斧。第203図23はおちょこ形のミニチュア土器。手づくねで、口径4.0cm、器高2.5cmが測られる。No.1の出土。24は土製紡錘車。径7.6cm、厚さ2.3cm、重さ177g。

時期: 礎石立ちの建物で、Pit2より出土した須恵器環A類の特徴から古代Ⅲ期(8世紀後半)の可能性もあるが、調査所見でSB21(古代Ⅳ期相当)を破壊すると判断されており、それよりも新しい古代Ⅴ期(9世紀後半)以降と判断できる。

ST07 (第166図、第195図、第203図)

位置: XVII E-20・24・25

検出: 東西方向に掘削した試掘トレンチ内を精査したところ柱状の落ち込み部分を認めた。トレンチ以外には砂礫層面にて円形状の落ち込み、さらにSB17検出面にて同様の落ち込みを確認した。

重複関係: SB16、SB17、SB20より新しい。

規模: 柱穴の配置は3間(214cm・240cm・230cm)×2間(232cm・204cm)の総柱の可能性もあるが、10本の柱が検出されたのみ。主軸はN68°E、桁行684cm、梁間436cmの寸法を測り、床面積29.82㎡である。

埋土: 黒褐色粘質土を主とする。

遺物: 第195図5はPit4出土の須恵器環A類の1/5程度の破片。外面には特徴的なロク口成形痕を留める。ヘラ切り離し後にナデ調整。口径12.4cmが測られる。第203図25は羽口の破片。

時期: 須恵器の特徴は古代Ⅲ期(8世紀後半)ころと考えられる。しかしながら、SB16(古代Ⅰ期)、SB17(古代Ⅱ期)、SB20(古代Ⅱ期)を破壊するとの所見があり、古代Ⅲ期よりも新しい可能性が高い。古代Ⅳ期(9世紀前半)以降なのか。

ST08 (第166図)

位置: XVII E-24・25

検出: SB17の埋土掘り下げ時に検出した。柱穴の形状と規模がST07の柱穴とほぼ同様で位置も近いことから、単独の土坑ではないと推定し、位置関係から2基のみであるが、STと判断した。

重複関係: SB17より新しい。

規模: 柱心間の距離は180cm、方向はN65°Eである。確認されたのは2基のみであるが、対になる柱穴が存在した可能性もある。ST07の建替えも予想される。

埋土: 黒褐色土を主とする。

遺物: 土師器器裏の小破片が出土。

時期: 不明。

ST09 (第167図 P L 62)

位置: XVII E - 15・20、XIX A - 11

検出: SB30を検出し、埋土の掘り下げ時に、明らかに住居跡の埋土と異なる非常に柔らかい部分があり、形状、規模からSTとした。

重複関係: SB30、SB31、SB32より新しい。Pit2は土坑として単独に重複関係がある。

規模: 柱穴の配置は4間(150cm・170cm・150cm・142cm)×3間(134cm・204cm・70cm)で総柱建物跡の可能性はあるが、柱穴は14本検出されたのみである。試掘トレンチで破壊されてしまった可能性がある。主軸はN52°E、桁行476cm、梁間412cmの寸法を測り、床面積は19.61㎡である。

埋土: 黒～黒褐色土を主とする。

遺物: Pit2とPit7より黒色土器A類の破片が出土し、Pit9にはさらに黒色土器B類の皿破片の出土がある。

時期: 古代IV期(9世紀後半)以降と考えられるか。

ST10 (第167図)

位置: XVII E - 14・19・20

検出: SB16の検出時において、SKも同時に検出した。形状、規模から9基をST10の柱穴と認定した。

重複関係: SB16やSB23より新しい。

規模: 柱穴の配置は3間(4間)(96cm・196cm・184cm)×1間(412cm)である。主軸はN52°E、桁行476cm、梁間412cmの寸法を測り、床面積19.61㎡である。

埋土: 黒褐色土の単純堆積。

遺物: 出土遺物なし。

時期: 不明だが、SB16及びSB23より新しいことから、古代II期以降と判断できる。

ST11 (第168図、第202図 P L 80)

位置: XVII E - 14・19

検出: SB16の検出時において土坑も同時に検出した。形状、規模から7基をST11の柱穴と認定した。なおPit2は旧SK477である。

重複関係: SB16やSB23より新しい。

規模: 柱穴の配置は2間(3間)(160cm・250cm)×1間(344cm)のである。主軸はN10°W、桁行410cm、梁間344cmの寸法を測り、床面積14.1㎡である。

埋土: 黒～黒褐色土。

遺物: 第202図19は溶岩のくぼみ石でPit2の出土。凹部は底部まで貫通している。19.5cm×18.5cm×12.6cm、2350g。

時期: 不明だが、SB16及びSB23より新しいことから、古代II期以降と判断できる。

ST15 (第104図、第107図)

位置: XVII H - 03・08

検出: 基本層序VIII層を掘削後、古代検出面において遺構検出を行ったところ、円形状の複数の落ち込みを検出した。建物跡を想定しST15Pit1～Pit3をつけたが、規則的な配置は見られなかった。

規模: 柱穴の配置は1間×1間(115cm×115cm)か。

埋土: 黒色粘土。

遺物: 出土遺物なし。

時期: 不明。

ST16 (第107図)

位置: XVII H - 08・13

検出: 古代検出面において遺構検出を行ったところ、複数の落ち込みを検出した。建物跡を想定し ST16Pit1 ~ Pit3 をつけたが、規則的な配置は見られなかった。

重複関係: ST43 と切り合うと考えられるが、出土遺物では ST43 が古い。

規模: 柱穴の配置は 1 間×1 間 (125cm×90cm) か。

埋土: 黒色粘土。

遺物: 柱穴内より須恵器環 A 類及び B 類の破片が出土しているほか、Pit3 より灰軸陶器碗の小破片ある。

時期: 灰軸陶器の出現する古代 IV 期 (9 世紀前半) 以降と考えられるが、隣接する SB35 が古代 IV 期であり、同時存在はしないか。

ST17 (第168図、第195図 P L 62, 77)

位置: XVII H - 13・14

検出: 基本層序Ⅷ層を掘削後、遺構検出を行ったところ、円形の複数の落ち込みを検出した。掘立建物跡を想定し、それぞれの配置から ST17 を想定した。

重複関係: ST20 と重複関係にあるが切り合いは認められないため、新旧関係は不明である。

規模: 柱穴の配置は 2 間 (144cm・100cm) × 1 間 (250cm) の 6 本柱のうち 5 本を検出した。主軸は N42° W、桁行 244cm、梁間 250cm の寸法を測り、床面積 6.1 m² である。

埋土: 黒色粘土。

遺物: 第195図6は Pit1 出土の須恵器環 B 類の底部破片。高台は外接地型。ほかに Pit1 から須恵器環 A 類の底部が出土している。ヘラ切り離し手法である。

時期: 須恵器の特徴は、古代 II 期～III 期 (8 世紀代) と考えられ、それ以後の構築の可能性が高い。

ST18 (第168図、第195図 P L 62, 77)

位置: XVII H - 13

検出: 基本層序Ⅷ層を掘削後、遺構検出を行ったところ、円形の落ち込みを複数検出した。建物跡を想定し、3 基のみであるが形状や規模から ST18 を想定した。

重複関係: Pit1 は SK705 と重複するが新旧関係は不明である。SK2965 より新しい。

規模: 柱心間の距離は、154cm・146cm、方向は N50° W である。対になる柱穴はない。

埋土: 黒色粘土。

遺物: 埋没土中からは糸切り離し手法の須恵器環類を中心に出土している。黒色土器の出土はない。

第195図7は Pit1 出土の須恵器環 A 類の 1/5 程度の口縁部破片。軟質で内面にはカキメ状にロクロ調整痕を留める。

時期: 須恵器の特徴から古代 IV 期ころと考えられるが、黒色土器の出土がないため、時期決定は不明。

ST19 (第107図)

位置: XVII H - 13・18

検出: 古代検出面において遺構検出を行ったところ、円形状の複数の落ち込みを検出した。建物跡を想定し ST19Pit1 ~ Pit4 をつけたが、規則的な配置は見られなかった。

規模: 柱穴の配置は不明。柱穴が一列に並ぶ (東から 65cm・150cm・115cm が測られる)。

埋土: 黒色～褐灰色粘土。

遺物: 出土遺物なし。

時期: 隣接する ST20 とほぼ同方向に並ぶ点から、それと同時期の古代 IV 期 (9 世紀前半) ころか。

ST20 (第169図)

位置: XVII H - 09・13・14

検出: 基本層序Ⅶ層を掘削後、遺構検出を行ったところ、円形の複数の落ち込みを検出した。建物跡を想定しST20とした。

重複関係: ST17と重複関係にある。新旧関係は不明である。Pit6は土坑として単独の重複関係がある。

規模: 柱穴の配置は3間(188cm・184cm・188cm)×1間(358cm)の8本柱で、この内の6本を検出した。主軸はN44°E、桁行560cm、梁間358cmの寸法を測り、床面積19.94㎡である。

埋土: 黒色粘土。

遺物: 埋没土中より、須恵器環類と土師器甕類の破片が出土している。

時期: 不明。

ST27 (第169図 P L 62)

位置: XVII C - 18・23

検出: 古代検出面の砂礫層において円形の複数の落ち込みを検出した。形状や位置関係より建物跡を想定しST27とした。

重複関係: なし。

規模: 柱穴の配置は2間(238cm・216cm)×1間(430cm)の6本柱である。主軸はN70°W、桁行454cm、梁間430cmの寸法を測り、床面積19.52㎡である。いずれの柱穴も深く明瞭な掘り込みである。

埋土: 黒色土。

遺物: Pit1より鉢の破片が2点、Pit4からは土師器甕の破片が1点出土している。

時期: 不明。

ST31 (第170図 P L 62)

位置: XVII C - 17・18・22・23

検出: 古代検出面の砂礫層において円形の複数の落ち込みを検出した。形状や位置関係より建物跡を想定しST31とした。

重複関係: Pit6、Pit7はかく乱によって破壊されている。

規模: 柱穴の配置は4間(120cm・152cm・126cm・150cm)×2間(200cm・208cm)の12本柱のうち11本を検出した。桁行556cm、梁間410cmの寸法を測り、主軸はN34°E、床面積22.8㎡である。いずれの柱穴も深く明瞭な掘り込みである。

埋土: 黒色土。

遺物: Pit8とPit10から非ロクロ土師器の環類の破片がある。

時期: 出土土器から、古墳時代V期～古代I期ごろと判断できるか。

ST33 (第170図 P L 62)

位置: XVII C - 13・14

検出: 古代検出面の砂礫層において円形の複数の落ち込みを検出した。形状や位置関係より建物跡を想定しST33とした。

重複関係: なし。

規模: 柱穴の配置は2間(184cm・196cm)×2間(180cm・190cm)の8本柱である。主軸はN25°E、桁行380cm、梁間370cmの寸法を測り、床面積14.1㎡である。いずれの柱穴も深く明瞭な掘り込みである。

埋 土：黒色土。

遺 物：Pit7 から非ロクロ土師器の坏類の破片、須恵器の可能性ある微小破片がある。

時 期：出土土器から、古墳時代V期～古代I期ころと判断できるか。

ST34 (第171図 P L 62)

位 置：XVII C - 08・13

検 出：砂礫層において円形の複数の落ち込みを検出した。形状や位置関係より建物跡を想定しST34とした。
重複関係：なし。

規 模：柱穴の配置は4間(126cm・132cm・116cm・142cm)×3間(136cm・114cm・126cm)の14本柱であり。主軸はN35°E、桁行516cm、梁間376cmの寸法を測り、床面積19.4㎡である。いずれの柱穴も深く明瞭な掘り込みである。

埋 土：黒色土。

遺 物：出土遺物なし。

時 期：ST33との近接した関係から、それとは同時に存在しないと考えられる。時期は不明。

ST35 (第171図 P L 63)

位 置：XVII C - 04・09

検 出：砂礫層において円形の複数の落ち込みを検出した。形状や位置関係より建物跡を想定しST35とした。
重複関係：Pit4はSK1437と重複するが新旧関係は不明である。

規 模：柱穴の配置は4間(5間)(146cm・154cm・156cm・160cm)×3間(182cm・152cm・176cm)の15本柱である。主軸はN16°E、桁行616cm、梁間510cmの寸法を測り、床面積31.42㎡である。いずれの柱穴も深く明瞭な掘り込みである。

埋 土：黒色土。

遺 物：Pit8・10・12より土師器製の小破片が出土している。

時 期：不明。

ST36 (第172図 P L 63)

位 置：XVII C - 09・10・15

検 出：古代検出面の砂礫層において円形の複数の落ち込みを検出した。形状や位置関係より建物跡を想定しST36とした。北東側は調査区外にあり全体を検出できなかった。

重複関係：なし

規 模：柱穴の配置は5間(150cm・138cm・154cm・138cm・132cm)×3間(180cm・154cm・246cm)の16本柱と想定できるが、そのうちの13本を検出した。主軸はN36°E、桁行714cm、梁間592cmの寸法を測り、床面積42.27㎡である。いずれの柱穴も深く明瞭な掘り込みである。

埋 土：黒色～黒褐色土。

遺 物：Pit8より非ロクロ土師器の坏破片1点がある。Pit13からは須恵器製破片1点のほか黒色土器の可能性ある小破片1点がある。

時 期：古代Ⅲ期以降であろうか。

ST39 (第172図 P L 63)

位 置：XVII H - 16

検 出：砂礫層において円形の複数の落ち込みを検出した。形状や位置関係より建物跡を想定しST39とした。
重複関係：なし。

規模：柱穴の配置は2間(184cm・186cm)×2間(168cm・156cm)の8本柱であり、桁行370cm、梁間310cmの寸法を測り、主軸はN35°W、床面積11.47㎡である。

埋土：黒色～黒褐色土。

遺物：出土資料は土器小破片が中心である。Pit3(旧Pit17)より黒色土器A類の環破片が1点ある。

時期：古代Ⅲ期以降か。隣接するSB66と同一方向の主軸を持ち、同時期の可能性もある。

ST40(第173図 P L 63)

位置：XVII G - 19・20・24・25

検出：古代検出面の砂礫層において円形の複数の落ち込みを検出しSKとした。さらに形状や位置関係より建物跡を想定しST40とした。

重複関係：SB60と切り合う。Pit5(SK2897)と対になる柱穴がSB60内で検出できないため、SB60より古い可能性がある。

規模：柱穴の配置は2間(220cm・210cm)×2間(210cm・190cm)の9本柱の内の8本を確認した。主軸はN36°W、桁行430cm、梁間400cmの寸法を測り、床面積は17.2㎡である。

埋土：黒褐色土。

遺物：出土遺物なし。

時期：不明。SB60を破壊して構築されていた可能性が高いことから、その時期(古代Ⅳ期)よりも古い。

ST41(第172図)

位置：XVII H - 16

検出：砂礫層において円形の複数の落ち込みを検出した。形状や位置関係より建物跡を想定しST41とした。

重複関係：ST39とほぼ90°ずれをもって重複関係にある。新旧関係は不明である。

規模：柱穴の配置は3間(164cm・176cm・122cm)×1間(250cm)の8本柱を想定し、その内の7本を認めた。主軸はN59°E、桁行474cm、梁間250cmを測り、床面積11.85㎡である。

埋土：黒～黒褐色土。

遺物：出土遺物なし。

時期：不明。ST39が古代Ⅲ期以降と考えられるので、その前後の時期であろうか。

ST42(第173図)

位置：XVII H - 12・13・17

検出：砂礫層において円形の複数の落ち込みを検出しSKとした。またSB69の柱穴は、その配置から掘立柱建物跡の柱穴の可能性が考えられ、形状や位置関係より建物跡を想定しST42とした。

重複関係：SB69と重複する。新旧関係は不明瞭だが、SB69の検出時にPit5(SB69P4)、Pit6(SB69P1)は見つかっていないことからSB69より古い可能性もある。Pit2(SK3002)とPit3(SK2964)は重複があるが新旧は不明である。

規模：柱穴の配置は2間(270cm・200cm)×1間(336cm)の6本柱である。P2、P3はいずれかがST42の柱穴の可能性もある。主軸はN50°W、桁行470cm、梁間336cmの寸法を測り、床面積15.79㎡である。

埋土：黒褐色土。

遺物：出土遺物なし。

時期：SB69が古代Ⅳ期の可能性が高いことから、それよりも古いと判断できる。

ST43(第174図 P L 63)

位置：XVII H - 07・08・12・13

検出：砂礫層において円形の複数の落ち込みを検出した。形状や位置関係より建物跡を想定しST43とした。
重複関係：Pit5（SK3012）はSK2982に切られ、Pit8（SK2970）はSK2969を切ると推定される。

規模：柱穴の配置は3間（244cm・242cm・214cm）×3間（2間）（150cm・164cm・116cm）の11本柱である。主軸はN54°W、桁行700cm、梁間414cmの寸法を測り、床面積28.98㎡である。

埋土：黒～黒褐色土。

遺物：出土遺物なし。

時期：ST42等との軸方向の同一性を考慮すれば、それと同じ時期の可能性も考えられるか。

ST44（第174図）

位置：XVIIH-09・10

検出：砂礫層において円形の複数の落ち込みを検出し土坑として調査した。形状や位置関係より建物跡を想定し、整理時にST44とした。

重複関係：SB36、ST45と重複関係にある。Pit2（SK723）とSB36の切り合いは不明瞭なため、またST45との切り合いは認められないため、新旧関係は不明である。

規模：柱穴の配置は3間（210cm・164cm・226cm）の4本柱であり、方向はN29°Eである。柱穴は深く明瞭な掘り込みであるが、対になる柱穴は検出されていない。

埋土：暗灰色土。

遺物：出土遺物なし。

時期：不明。

ST45（第174図）

位置：XVIIH-09・10

検出：砂礫層において円形の複数の落ち込みを検出し土坑として調査した。形状や位置関係より建物跡を想定しST45とした。

重複関係：ST44と重複関係にある。切り合いは認められないため、新旧関係は不明である。

規模：柱穴の配置は4間（160cm・160cm・170cm・170cm）の5本柱であり、方向はN43°E。

埋土：暗灰色土。

遺物：出土遺物なし。

時期：不明。

ST46（第175図 P L 63）

位置：XVII D-20

検出：古代検出面の明黄褐色シルト層において円形の複数の落ち込みを検出しSKとした。さらに形状や位置関係より建物跡を想定しST46とした。

重複関係：ST47、ST48と重複関係にある。切り合いは認められないため、新旧関係は不明。

規模：柱穴の配置は2間（310cm・156cm）×2間（190cm・190cm）の8本柱である。主軸はN16°W、桁行466cm、梁間380cmの寸法を測り、床面積17.48㎡である。

埋土：黒褐色シルト。

遺物：出土遺物なし。

時期：不明。

ST47（第175図 P L 63）

位置：XVII D-20・25、E-16

検出：古代検出面の明黄褐色シルト層において円形の複数の落ち込みを検出しSKとした。さらに形状

や位置関係より建物跡を想定し ST47 とした。

重複関係：ST46、ST48 と重複関係にある。切り合いは認められないため、新旧関係は不明。

規模：柱穴の配置は 2 間 (220cm・300cm) × 1 間 (290cm) の 6 本柱のうち 5 本を認めた。主軸は N60° E、桁行 520cm、梁間 290cm の寸法を測り、床面積 15.08 m²である。

埋土：黒褐色シルト。

遺物：出土遺物なし。

時期：不明。

ST48 (第 175 図 P L 63)

位置：XVII D-20・25、E-21

検出：古代検出面の明黄褐色シルト層において円形の複数の落ち込みを検出し SK とした。さらに形状や位置関係より建物跡を想定し ST48 とした。

重複関係：ST46、ST47 と重複関係にある。切り合いは認められないため、新旧関係は不明である。SB64 より新しい。Pit4 (SK2854) は SK2853 と、Pit8 (SK2927) は SK2928 と重複する。

規模：柱穴の配置は 3 間 (128cm・136cm・164cm) × 1 間 (370cm) の 8 本柱のうち 6 本を認めた。また Pit7 (SK3034) は棟持柱を想定した。主軸は N72° E、桁行 478cm、梁間 370cm の寸法を測り、床面積 17.69 m²である。

埋土：黒～黒褐色シルト。

遺物：出土遺物なし。

時期：不明。

ST49 (第 176 図)

位置：XVII E-16・21

検出：古代検出面において円形の複数の落ち込みを検出し SK とした。整理時に形状や位置関係より建物跡を想定し ST49 とした。

重複関係：SB70、SB72 より新しい。SB71 とも重複関係にあるが、切り合いは認められないため新旧関係は不明。Pit5 (SK2838) は SK2837 より古い。

規模：柱穴の配置は 2 間 (260cm・170cm) × 2 間 (170cm・130cm) の 8 本柱のうち 6 本を認めた。主軸は N55° W、桁行 430cm、梁間 300cm の寸法を測り、床面積 19.2 m²。

埋土：黒褐色シルト。

遺物：出土遺物なし。

時期：SB70、SB71 の時期差が約 50 年と短いので、その間に ST 50 が建っていたと考えるよりも、SB70、SB71 より新しいと考える方が妥当であろうか。

ST50 (第 176 図)

位置：XVII I-04・05

検出：古代検出面において円形の複数の落ち込みを検出した。位置関係より建物跡を想定し ST50 とした。

重複関係：SB58 と重複関係にあるが、切り合いは認められないため新旧関係は不明である。Pit3 (SK2523) は SK2525 と重複関係にあり、Pit5 (SK2554) は SK2555 より新しい。

規模：柱穴の配置は 2 間 (184cm・296cm) × 1 間 (440cm) の 6 本柱のうち 5 本を認めた。主軸は N56° W、桁行 480cm、梁間 440cm の寸法を測り、床面積 21.12 m²である。

埋土：黒褐色シルトと灰黄褐色シルトのブロックを埋土とする。

遺物：出土遺物なし。

時期：SB58 の時期が不明であることから本跡も不明。

ST51 (第177図)

位置：XVII D-25、E-21、I-05、J-01

検出：古代検出面において円形の複数の落ち込みを検出しSKとした。形状や位置関係より建物跡を想定し、整理段階でST51とした。

重複関係：SB62と重複関係にあるが、切り合いは認められないため新旧関係は不明である。

規模：柱穴の配置は3間(190cm・160cm・200cm)×2間(140cm・120cm)の10本柱の内、8本を認めた。桁行550cm、梁間260cmの寸法を測り、主軸はN70°E、床面積14.3㎡である。

埋土：黒褐色シルトと灰黄褐色シルトのブロックを埋土とする。

遺物：出土遺物なし。

時期：不明。

ST52 (第177図)

位置：XVII J-02・03

検出：円形状の落ち込みを複数検出した。またPit1(旧SB55P3)はSB55の掘り下げ中に検出したものである。形状や位置関係より建物跡を想定しST52とした。

重複関係：SB55と重複し、Pit1がSB55を切ることから新しい。

規模：柱穴の配置は2間(222cm・218cm)×2間(258cm・162cm)の8本柱のうち7本を認めた。主軸はN5°W、桁行440cm、梁間420cmの寸法を測り、床面積18.48㎡。

埋土：黒色粘土質シルトを主とする。

遺物：出土遺物なし。

時期：不明。

ST53 (第178図 P L 63)

位置：XVII J-06・07

検出：古代検出面において円形状を呈する複数の落ち込みを検出した。形状や位置関係より建物跡を想定しST53とした。

重複関係：SB65、ST55と重複するが、切り合いはないため新旧関係は不明である。

規模：柱穴の配置は3間(190cm・230cm・300cm)×1間(314cm)の8本柱のうち7本を認めた。主軸はN64°W、桁行720cm、梁間314cmの寸法を測り、床面積22.61㎡。

埋土：黒色粘土質シルトを主とする。

遺物：出土遺物なし。

時期：不明。

ST54 (第178図 P L 63)

位置：XVII J-07・12

検出：古代検出面において円形の複数の落ち込みを検出した。形状や位置関係より建物跡を想定しST54とした。

重複関係：ST53と重複するが、切り合いはないため新旧関係は不明である。

規模：柱穴の配置は3間(222cm・162cm・194cm)×1間(254cm)の8本柱であり、桁行578cm、梁間254cmの寸法を測り、主軸はN5°W、床面積14.68㎡である。

埋土：黒色粘土質シルトを主とする。

遺物：出土遺物なし。

時期：不明。

③土坑 (SK)

SK41

位置: XIXA-15・20

規模形状: 平面は南北に長軸を持つ楕円形。長軸 37cm、短軸 30cm、深さ 49cm、断面は東に偏ってV字形に尖る。

埋土: 1層 細粒砂混じりの暗褐色土。

遺物: 第203図27は土玉。

時期: 不明。

SK85 (第179図、第195図、第205図 P L 64, 77, 80)

位置: XIXB-17・22

規模形状: 主軸はN25°E、約1.8mのほぼ方形で底面は楕円形状の平面である。断面形は上半部が上に開き、下半部が一部テラスを持つロウト状である。深さ76cmが測られる。形状から井戸ととらえた。SK87と切り合うが、新旧不明。

埋土: 2層に分かれる。下部は暗褐色の粘質土で木器や巨礫を含み、上部は褐灰色粘土で黄褐色粘土のブロックを含む。埋め戻されたものと思われる。

遺物: 第195図8は灰釉陶器の椀、完形個体。軸はハケ塗りと親られ、底部高台は断面三日月状で、底部外面に「生」の墨書がある。口径13.8cm、器高4.1cmが測られる。第205図17は丸太材の端部。径14cmが測られる。18と19は建築部材を井戸枠に転用したもの。

時期: 古代IV期(9世紀前半)ころか。

SK199 (第195図 P L 64)

位置: XIXB-18

規模形状: 平面は主軸をN20°Wに持つ方形で、南部は調査区外に延びる。残存で長軸38cm、短軸35cm、深さ-10cm、断面はタライ形、底面は方形の平面である。

埋土: 1層 粘性のある暗褐色土。炭化物を含む。

遺物: 第195図9は非ロクロ土師器の椀形の環。小型の手づくね様で、口径8.3cm、底径5.5cmが測られる。2/3程度の破損個体。

時期: 古墳時代V期～古代I期(7世紀代)ころか。

SK250 (第203図 P L 80)

位置: XIXG-13

規模形状: 平面は主軸を北東方向に持つ楕円形。長軸40cm、短軸33cm、深さ38cm、断面はタライ形である。

埋土: 1層 粘性のある暗褐色土。黄褐色土のブロックをやや北側に集中して混入する。

遺物: 第203図29は土製紡錘車。表面は非常にいいにナデ調整して仕上げられている。径4.5cm、厚さ2.7cm、62.7gが量られる。

時期: 不明。

SK262 (第202図)

位置: XIXG-07

規模形状: 平面は主軸を北西方向に持つ楕円形。長軸36cm、短軸30cm、深さ42cm、断面はタライ形である。ST03と重複するが、切り合いはないため新旧関係は不明である。

埋土: 1層 細粒砂質の黒褐色土。

遺物: 第202図18は安山岩材の凹石。表面にはアバタ状の凹部がひとつある。12.3cm×10.0cm×4.0cm、485gが量られる。

時期：不明。

SK377 (第195図 P L 77)

位置：XIX G - 04

規模形状：平面は径26cmの円形。深さ23cm、断面はタライ形である。SB10、SB15、SK376より新しい。
またSK389よりは古い。

埋土：1層 黒色粘土。

遺物：第195図10は須恵器環H類の1/2個体。受け部はやや凹み、立ち上がりは矮小化し緩やかに内傾する。口径10.3cm、器高3.6cmが測られる。

時期：古墳時代V期～古代I期(7世紀代)ころか。

SK378 (第195図)

位置：XIX G - 04

規模形状：平面は径24cmの円形。深さ33cm、断面は北側に偏ってV字状に尖る。

埋土：1層 黒色粘土。

遺物：第195図11は小型の甕形土器。風化が著しく、内外面の調整は観察できない。

時期：古代II期(8世紀前半)前後か。

SK400 (第203図 P L 64, 80)

位置：XVII E - 18

規模形状：長軸108cm、短軸90cmの不整形。深さ15cm。

埋土：上部は砂質の褐色土、下部は炭化物を含む黒色の粘質シルトの2層に分かれる。

遺物：第203図30は土製紡錘車の1/2欠損例。手づくね仕上げで、径4.3cm、厚さ3.1cmが測られる。

時期：不明。

SK511 (第202図)

位置：XVII E - 09

規模形状：平面は長さ82cm、幅90cm、の不整形。深さ20cm。

埋土：1層 黒色シルト褐灰色土のブロックを多く含む。炭化物を含む。

遺物：第202図20は安山岩材の敲石。端部には激しく敲いた痕跡が残る。18.3cm×9.2cm×9.4cm、1280g。No.1の出土。

時期：SB31より古いことから古墳V期の遺構か。

SK579 (第195図 P L 64, 77)

位置：XVII E - 09・14

規模形状：平面は北東方向に主軸を持つ楕円形。長軸56cm、短軸推定50cm、深さ24cm、断面はタライ形である。SK580に切られる。

埋土：1層 黒褐色粘質シルト。礫を含み、しまり弱くもろい。

遺物：第195図12は須恵器の蓋か。体部外面は1/3程度をケズリ成形し、内面の天井部にナデ消し状の痕跡が残る。2/3程度の破損個体。やや軟質である。

時期：不明。

SK615 (第179図、第195図 P L 64, 77)

位置：XIX A - 21

規模形状：平面は北東方向に主軸を持つ不整形。長さ158cm、幅74cm、深さ15cm。SK612と切り合うが、新旧関係は不明である。

埋土：1層 黒褐色土。粘性、しまり強い。

遺物：第195図13と14は黒色土器Aの坏類。いずれも外面にロクロ成形痕を留め、内面はていねいにミガキ調整されている。13はNo.1とNo.5の接合個体。口径12.6cm、器高3.9cm底部径5.0cmが測られる。14は口径12.6cm、器高3.5cm、底部径6.0cmが測られる。No.2出土。15と16は黒色土器A類の椀。15はNo.4出土のほぼ完形個体。口径16.0cm、器高6.0cm。16はNo.12と埋没土器A類の坏Aと椀の存在から、古代IV期（9世紀前半）と考えられる。

時期：黒色土器A類の坏Aと椀の存在から、古代IV期（9世紀前半）と考えられる。

SK627（第195図 PL 64）

位置：XVII E-15

規模形状：平面は主軸をN75°Eに持つ楕円形。長軸36cm、短軸32cm、深さ20cm。断面はタライ形である。

埋土：1層 黒褐色粘質シルトに褐灰色土のブロックを含む。炭化物を含む

遺物：第195図17は須恵器坏A類。口径13.0cm、器高3.5cmが測られ、底部は糸切り離し手法である。外面にロクロ成形痕を留め、浅身で体部は緩く外傾している。

時期：出土須恵器の特徴から、古代III期（8世紀後半）ころと推定される。

SK665（第195図 PL 77）

位置：XVII H-13

規模形状：平面は径約24cmのほぼ円形。深さ79cm、断面はU字状である。

埋土：1層 黒褐色土。粘性やや強く、しまり強い。

遺物：第195図18は須恵器坏A類、ほぼ完形個体。口径12.3cm、器高3.4cm、底部内径は6.5cmが測られる。19は黒色土器Aの坏、ほぼ完形の個体。外面底部付近にケズリ成形痕を留める。口径15.8cm、器高5.1cmが測られる深椀形。

時期：須恵器坏A類の特徴及び黒色土器A類の坏から古代IV期（9世紀前半）と考えられる。

SK714（第205図）

位置：XVII H-09

規模形状：平面は径22cmの円形。深さ17cm、断面はU字状。

埋土：1層 黒色土。粘性やや弱く、しまり強い。

遺物：第205図20は建築材と考えられる柱材。径9.3cmが測られる。

時期：不明。

SK2649（第203図）

位置：XVII H-12

規模形状：北東方向に主軸を持つ隅丸の方形。長軸1.7m、短軸1.6m、深さ98cm。断面はすり鉢状。

埋土：1層 黒褐色土。

遺物：第203図28は白玉状を呈する土製の玉。径1.3cm、厚さ1.1cm、1.6g。

時期：不明。

SK2902（第179図、第195図 PL 64, 77）

位置：XVII E-22

規模形状：平面は不整形。長さ70cm、幅64cm、深さ3cm、断面は浅いタライ形。SB67より新しい。

埋土：黒褐色土。

遺物：第195図20～22は須恵器坏A類。いずれも外面にロクロ成形痕を留め、口径13cm大である。20はヘラ切り離し手法でNo.2の出土。底部に「一」記号がある。21も底部に「一」ないしは「×」

記号があるが1/2個体のため判別できない。ヘラ切り離し手法でNo.1とNo.8、No.9の接合個体。22は外面に墨書が確認できるが、該当部分が欠損しており、文字の全体像は不明。No.3の出土。

時期：出土須恵器の特徴から、古代Ⅲ期（8世紀後半）ころと推定される。

SK2965（第195図 P L 65）

位置：XVII H-13

規模形状：平面は不整形。長さ60cm、幅44cm、深さ12cm、断面はU字形である。

埋土：黒色土。径5～10cmの礫を含む。ST18P1より古い。

遺物：第195図23は土師器の坏？おちょこ形を呈するが、「手づくね様」ではなく、全体をていねいに作り上げ、外面にはハケ調整がなされている。口径5.0cm、器高3.0cmが測られる。

時期：不明。

SK3000（第195図 P L 65）

位置：XVII H-12

規模形状：平面は不整形。長さ116cm、幅90cm、深さ19cm、断面はタライ状で底面は凹凸がある。

SK3015と切り合う。新旧関係は不明。

埋土：黒褐色土。細粒砂～小礫を含む。

遺物：第195図24は須恵器環蓋。体部外面は1/3程度をケズリ調整している。つまみ部は扁平で、返しは退化し、わずかに折れ曲がる程度。25は土師器のハケ調整の長胴甕、口縁部破片。内外面ともていねいに調整されている。

時期：不明。

SK3026（第195図 P L 65）

位置：XVII J-06

規模形状：平面はほぼ東西方向に主軸を持つ楕円形。長軸48cm、短軸40cm、深さ51cm、断面はすり鉢状である。SB65と切り合う。古代以降の時期に所属する可能性がある。

埋土：黒褐色土。炭化物を含む。

遺物：第195図26は非ロクロの土師器の坏？口径11.6cm、器高3.0cmが測られる。外面はていねいにハケ調整し、内面はミガキ調整されている。

時期：古墳時代Ⅴ期～古代Ⅰ期（7世紀代）ころか。

SK3051（第179図 P L 65）

位置：XVII D-25

規模形状：平面はほぼ北東方向に主軸を持つ楕円形。長軸66cm、幅56cm、深さ7cm、断面は浅い皿状で、底面の一部に焼土がある。SB64より古い。

埋土：黒褐色土を主とし、焼土、灰、炭化物を含む。

時期：出土遺物もなく、時期は判断できない。

④集石跡（SQ）

SQ01（第180図、第195図 P L 67, 78）

位置：XIX G-06

検出：基本土層Ⅱ層を掘り下げ中に土器が出土した。

規模形状：東西方向に約70cm、南北方向に約50cmの範囲に分布する。南東方向に隣接して同様なSQ02がある。

埋土：基本土層Ⅱ層（10YR6/6明黄褐色土に細粒砂や暗褐色土のブロック、小礫を多量に含む）。

遺物：第195図27は高環の脚破片。脚の長い形態で外面はていねいに縦方向のミガキ調整で仕上げられている。にぶい橙色で異系統の土器か。

時期：出土遺物が希少であり判断は難しい。長脚の高環は9世紀前半代であろうか。

SQ02（第180図、第195図 P L 67, 78）

位置：XIX G - 06

検出：基本層序Ⅱ層（10YR6/6明黄褐色土に細粒砂や暗褐色土のブロック、小礫を多量に含む）。

規模形状：110cm離れて南北2カ所にまとまる。

遺物：第195図28はハケ調整の長胴甕。南の集中では土師器の裏が押しつぶされた状態で出土した。

時期：不明。甕の形態的な特徴は古代Ⅱ期～Ⅲ期ごろであろうか。

SQ03（第180図）

位置：XVII C - 15

検出：古代検出。

規模形状：南北に90cm、東西に20cmの帯状にまとまる。

遺物：出土遺物なし。

時期：不明。

SQ04（第180図）

位置：XVII C - 15

検出：古代検出。

規模形状：北西に70cm、南東に20cmの帯状にまとまる。北方向に約1m隣接して同様なSQ03がある。

遺物：出土遺物なし。

時期：不明。

SQ05（第180図、第195図、第196図 P L 67, 78）

位置：XVII J - 07・08

検出：SB53調査時、完形の土器が集中する箇所がみられた。明確な床面はないため埋土中と判断し、SQ05として調査を行った。SB53より新しい。東に隣接して同様に検出されたSF21がある。

規模形状：北東方向に約2m、南西方向に約1mの帯状に広がる。

遺物：第195図29～34は黒色土器Aの環類。29はNo.22の出土で、口径12.3cm、器高3.6cmが測られる。内面は縦方向に密なミガキ調整で仕上げられている。30はNo.9とNo.38の接合個体。底部は回転ヘラケズリ調整で、内面の黒色は風化により脱色している。31はNo.1出土で口径12.8cm、器高3.8cmが測られ、浅身の形態。32と33は埋没土中の出土で1/2個体。ともに風化著しい。34はNo.4とNo.35及び埋没土中の接合資料で、口径13.8cm、器高5.3cmが測られる深身の形態。35と36は須恵器環A類で糸切り離し手法。35はNo.12と埋没土中の接合資料で軟質、口径12.2cm、器高3.2cmが測られ、ロクロ成形痕はナデ消されている。36はNo.10と埋没土中の接合資料で軟質。口径12.9cm、器高4.2cm、内外面に明瞭にロクロ成形痕を留めている。第196図1は黒色土器A類の環A。内面はていねいにミガキ調整され黒色処理を行わないか、ほとんど消失しまっている。口径12.8cm、器高3.4cmが測られる。No.11出土。2は須恵器の短頸壺、口縁部破片。埋没土中の出土。3は口縁部「コ」の字形の小型甕で体部器面は横及び斜め方向のケズリ調整。4と5は土師器甕形土器。ロクロ成形の砲弾型で、ほぼ同様な作りだが、口縁部の高さに差がある。外面はていねいなナデ調整仕上げ、内面は横方向のハケ調整である。4は埋没土出土、5はNo.8の出土。6と7は土師

器のハケ調整の甕形土器。6は埋没土とSB76出土破片との接合資料。7は幅1.5cmほどで目の細かな工具により外面縦方向にハケ調整し、内面は横方向にナデ成形で仕上げられている。No.33出土。

時期：食器類は黒色土器A類が中心となり、坏A類は口径13.0cmほどの小形例が主体である。須恵器環類は軟質でロクロ成形痕を留める糸切り手法の例である。煮沸具には小型甕、砲弾型のロクロ甕がある。これらの特徴から、概ね古代Ⅳ期（9世紀前半）に該当する。

⑤焼土跡（SF）

SF01（第180図）

位置：XIXB-18

検出：古代検出面。SK160に切られる。

規模形状：北東方向に約1.8m、北西方向に約1mの範囲に炭化物が分布する。掘り込みは確認できない。

時期：古代。詳細は不明。

SF17（第180図 P L 66）

位置：XVII E-22

検出：古代検出面。SB67の検出時に焼土の広がる箇所を検出した。SB67よりは新しいと考えられる。

規模形状：1辺の長さ約50cmの不整形円形状。掘り方の深さは8cmほどである。その表面に明褐色の焼土が30cm×25cmの範囲に広がる。厚さは4cmほどである。

遺物：須恵器環破片、土師器甕の破片が出土している。

時期：不明。

SF18（第180図 P L 66）

位置：XVII E-17

検出：古代検出面。SB72の東側に位置する。

規模形状：主軸N22°E。長軸75cm、短軸45cmの不定形で帯状。中心部分は焼土ブロックと炭化物からなり、外側に暗赤灰色・黄褐色・橙色の焼土がみられる。さらにその周りに焼土ブロックと炭化物が分布する。深さ10～18cmほど掘り込まれるが、底面には凹凸がある。

遺物：須恵器環、土師器甕の小破片が出土している。

時期：古代。詳細は不明。

SF19（第180図、第196図、第203図 P L 66, 80）

位置：XVII E-22

検出：古代検出面。SB73の検出時に特に遺物の集中する範囲がみられた。またSB73・74・75の南北トレンチからは、灰や焼土、炭化物を含む掘り込みがあり、遺物はこの層に含まれることが確認されたためSF19と認定した。この時点で平面プランは明確ではなかったため、遺物を記録して取り上げ、少しずつ下げながらプランを確定した。全体の状態は不明である。SB73よりは新しい。

規模形状：現存では主軸は東西長さ1.1m、幅最大80cmの不定形な楕円である。深さは約20cmである。東側が不明であるがトレンチの東側では検出されないため、長さは最大でも1.4m以下と考えられる。底面はほぼ平らである。堆積土層は5つに区分でき、細かい焼土や炭化物を含む黒褐色～褐色のシルトと灰層、焼土層からなる。

遺物：遺物は1層、2層中から多く出土する。破片が主であり完形品はない。第196図8は円筒形土器の体部。外面は縦方向のハケ調整で内面は輪積み痕を明瞭に留める。直径11cm、残存する高さは9cmである。焼土の脇に立った状態（No.14）で出土した。このほか、ハケ調整の甕、大

形破片がある。形態は口縁部直下の肩部に最大径をもち、器面は縦方向のハケ調整である。第203図26は土馬で頭部と体部は10cmほど離れて見つかった。

時期：円筒形土器の存在、ハケ裏の形態的特徴から、古代Ⅳ期（9世紀前半）ころと推定できるか。

S F 2 1（第180図 P L 66）

位置：XVII J - 08

検出：古代検出面。SB53 検出時に焼土の分布がみられた。西側には同様に検出されたSQ05がある。

SB77より新しい。また付近にあるSB52・53・54・76・77・78よりも新しいと考えられる。

規模形状：長軸50cm、短軸45cmの不定形な円形である。焼土の厚さは最大で8cmで地面が直接焼けている。西側にSQ05が位置するので関連が予想される。

遺物：焼土の上から1点土器が出土している。

時期：不明。

⑥土壌墓（SM）

S M 0 2（第179図 P L 65）

位置：XVII C - 09

検出：古代検出面。礫を伴うSK1488とその南西に骨片の分布を検出したことから、土壌墓を想定して調査を行った。検出時の礫と骨片以外に掘り込み等は確認できなかった。

重複関係：なし。

規模形状：東西1.2m、南北1.4mの範囲の中に歯、骨片、土器、礫が分布する。

埋土：SK1488とした礫の周りには掘り込みがみられるが、全体としては確認しづらい。

骨の特徴：歯はウマの臼歯、骨片の種類は不明である。

遺物：出土遺物はなし。

時期：不明。

S M 0 3（第179図 P L 65）

位置：XVII C - 20・25

検出：SB39掘り下げ時に骨粉を確認し、周辺を精査したところ人骨の足骨を確認した。SM03のプランとSB39のプランと誤認した結果によるもので、再検出した結果、南プランは認められたが、その他は不明。

重複関係：土層断面から確認はできなかったが、人骨の遺存状況よりSB39より新しいと判断した。

規模形状：南側のプランの残存形より推定した。主軸N60°W、長さ2m、幅1m、深さ25cmの人骨1体分を中心とした長楕円形。

埋土：黒色シルトを主とする。2層に分層した。

人骨の特徴：人骨はスポンジ状の骨で、形は残るが非常にもろかった。頭部は調査の中でほとんど残らなかった。手足の末端は形が不明瞭であり太い骨のみを図化した。遺物は少ない。SB39の掘り下げ時に周辺で銀環が見つかったが、出土レベルからSM03に伴う可能性もある。

遺物：須恵器と土師器裏の小破片が各1点のみ出土。

時期：SB39が古墳時代Ⅴ期に推定できることから、本跡はそれ以降と考えられる。

⑦溝跡（SD）

S D 0 1（第196図 P L 78）

位置：XIX B - 06・12・13

検出：基本層序Ⅱ層での検出において、砂層が溝状に落ち込むのを確認し、溝跡と判断した。

重複関係：ほかの遺構との切り合い関係はない。

規模形状：溝の幅は東側で広く約90cm、北側へいくほど狭くなる。検出面上で約70cm、深さは最大で約30cmが測られる。北側の調査区境の断面において上部が緩やかに開き、現耕作土直下では幅2.3mほどに広がる様子が確認された。段を持つ構造であるか、本来砂層はもう少し厚く堆積したものの耕作土により削平された可能性がある。

埋土：明褐色細粒砂の単層。

出土遺物：東側に片寄って埋土中からごくわずかに出土した。第196図9は須恵器環口縁部の1/4破片。底部は小破片だが、ヘラ切り離し手法。口径12.9cm、器高3.6cmが測られる。10は灰釉陶器の椀、口縁部破片。縁は外側に緩く折れる形態。口径は18cm前後となるか。9世紀後半ころか、近世遺物の出土はない。

時期：古代Ⅲ期～Ⅳ期（8世紀後半～9世紀前半）の資料が混在する。

S D O 2（第196・197図、第203・204図、P L 78, 79）

位置：XIX A - 09・12・13・14・17・18・19・20・23・24・25

検出：基本層序のⅢ層を掘削し、Ⅳ層上面の検出面上において黒色土の落ち込みを観察した。慎重に埋没土を掘り下げたが、複数の遺構が重なりあったような状況は見られず、溝状の遺構を想定し調査を行った。

重複関係：東緑北側にSB01とSB02を確認する。SB01は新しく、SB02は古いと判断できた。

規模形状：N20°E方向に延びる。幅は最大で約18m、長さ約25m、深さ最大で43cm。東緑は内側に湾曲する。西緑はXIX A - 17グリッドでは明確に検出できたが、その北側と南側のラインははっきりとしなかった。

埋土：巨礫から小礫まで多量に含む黒色粘質土。自然堆積であり、降雨等に起因する一時的な土砂の押し出しであると考えられる。

遺物：第196図11は非ロクロ土師器の環、1/4程度の破片個体。内面はていねいにミガキ調整し、底部には稜がある。外面はナデ仕上げ。埋没土中出土。12～14は黒色土器Aの環類。12は埋没土出土で口径13.1cm、器高3.5cmが測られる。13はNo.1の出土で、口径12.2cm、器高4.2cm、底部径6.0cm。14は埋没土出土で、口径13.3cm、器高4.4cm、底部径5.5cmが測られる。15は高環の脚部。埋没土出土。16は黒色土器A類の椀。内面の口縁部は横方向のミガキ調整仕上げで、口径16.3cm、器高5.4cmが測られる。埋没土出土。17～19は須恵器環類。17は糸切り離し手法の環A類、口径13.6cm、器高4.4cm。18は17同様の環A類底部の破片。19は底部に鉢巻き状に紐状の高台を貼りつけた環B類、完形個体。底面はほぼ中央が接地し、高台の機能はあまり感じられない。口径14.7cm、器高4.1cm。埋没土中の出土。20と21は須恵器環蓋。20は扁平のつまみと体部外面は1/2程度のケズリ成形。返しは直に立つ形態。21は宝珠様のつまみを持つ。返しは緩やかに外に折れる。22は甕の底部破片。多孔式で埋没土出土。23は小型の甕形に近い鉢形土器。内面は黒色処理。24は須恵器の甕形を模した土師器。埋没土出土。25は内外面ハケ調整された鉢もしくは銅形の土器口縁部破片。調整等製作技法は甕型土器と同様で、口径33.0cmが測られる。26はロクロ成形痕を明瞭に留める甕型土器口縁部破片。27は外面カキメ調整のある小型甕のほぼ完形個体。第197図1と2はハケ調整の土師器長胴甕。3と4は外面がナデ調整仕上げされた土師器長胴甕でほぼ完形個体。5は須恵器の鉢形土器口縁部破片。埋没土出土で口径34.6cm。6と7は須恵器の甕。6は取手付きの長頸甕。7は四耳甕の体部破片。8は須恵器甕の口縁部破片。第203図1は紡錘車。滑石製で1/2残欠。埋没土中の出土で9.4g。第204図1は鉢形に作られた手づくねの土器で、口径4.5cm、器高2.0cmが測ら

れる。2は土鈴。手づくねで、全体形はイチジク状に仕上げられ、空洞で内部に土玉(径1.0cm0.9g 図中の右下)が入る。ほぼ完全な形だが、頂部を欠失する。埋没土出土で55.0gが量られる。3～7は羽口の破片。

時期：非ロクロ土師器の環や高環(古墳時代後期末)、須恵器環B類に鉢A類、軟質須恵器の環A類、ロクロ調整の甕など古代Ⅳ期(9世紀前半)にかけての遺物が混在して出土している。

SD03(第197図、第203図、第204図)

位置：XIX A-10・14・15・20・25、B-06・11・16・21

検出：基本層序のⅢ層を掘削し、Ⅳ層上面の検出面においてSD02、SD03の東側に同様に南北に延びる黒色土の落ち込みを観察した。慎重に埋没土を掘り下げたが、複数の遺構が重なりあったような状況は見られず、溝状の遺構を想定し調査を行った。

重複関係：黒色土を掘り下げた底面底部でSK群を検出する。本跡とSK群との新旧関係は判然としながい、検出経過からSK群は古いと考えられる。

規模形状：SD02と平行して「く」の字形に延びる。幅は最大で約12m、長さは約25m、深さは最大で35cmが測られる。西縁はほぼ明確だが、東縁は北側部分のみ明確で、南部分のラインははっきりとしなかった。

埋土：礫を多量に含む黒色粘質土。自然堆積であり、降雨等に起因する一時的な土砂の押し出しであるとされる。

出土遺物：第197図9は黒色土器A類の環、1/3個体。外面にロクロ成形痕を明瞭に留める。第203図2は石鐮の先端部破片で基部を欠損している。表面の風化が著しいが安山岩材であろうか。3は大型の紡錘車で断面はカマボコ形。埋没土1層の出土で228.0g。このほか黒曜石製の石核が1点出土している。第204図8はミニチュア土器で鉢形。

時期：不明。

SD04(第197・198図、第203・204図 P L 79)

位置：XIX B-06・07・08・11・12・13・16・17・18・19・22・23

検出：基本層序のⅢ層を掘削し、Ⅳ層上面の検出面において、SD02と平行して東側に延びる黒色土の落ち込みを観察した。慎重に埋没土を掘り下げたが、複数の遺構が重なりあったような状況は見られず、溝状の遺構を想定し調査を行った。

重複関係：黒色土を掘り下げた底面底部でSB、SK群を検出する。状況よりSB、SK群は古いと考えられる。

規模形状：西縁の北部は検出できたが、南部ははっきりとしない。幅は最大で約20m、長さ約25m、深さは最大で40cmが測られる。

埋土：礫を多量に含む黒褐色粘質土。自然堆積であり、降雨等に起因する一時的な土砂の押し出しであるとされる。

出土遺物：第197図10～12は非ロクロ土師器の環類。10は内面に稜を持つ形態でいねいにミカキ調整仕上げしている。本遺跡中でも比較的古い形態的特徴を示す資料である。埋没土出土でほぼ完形個体。11は10よりも内面の有稜が退化し平底化した形態。12は内面に稜はなく、浅い丸底の環。13は高環の脚部破片。14と15は黒色土器A類の環。14は口縁部がやや緩く外反する形態。15は深さのある椀状の形態。16は黒色土器B類の皿。口径13.6cm、器高2.9cmが測られる。17は黒色土器A類の深い環の形態であるが、観察の限り、内面の黒色処理・ミガキ調整は消失してしまっている。18と19は須恵器環。18は底部へら切り離し手法で、口径13.0cm、器高4.0cmが測られる。19は口径13.6cmを推定する環口縁部破片で、外面に風

構えに方「夙」の墨書がある。20は須恵器盤の皿部。口径17.0cmが測られる。第198図1～4は須恵器の蓋。1は宝珠様のつまみ部で体部外面は1/2程度をケズリ成形している。返しは強く折れ曲がり直に立つ。埋没土中の接合個体。返しは強く折れ曲がり直に立つ。埋没土中の接合個体。2はつまみ部を欠失している。径21.1cmの大形の蓋。返しは直に立つ。3は体部外面1/2程度をケズリ成形し、返し部は非常に小さく形骸化の感がある。完形個体で内面に墨書が2文字ある。墨痕が薄く判読は難しいが、「食所」または「倉所」か？(赤外線写真)。4はつまみ部が扁平で凹状に作られ、体部も扁平で板状である。口径17.9cmが測られる。5はナデ調整の球胴の裏形土器口縁部の破片。6はハケ調整の長胴裏の口縁部破片。5と6ともに埋没土出土。第203図4は平基有茎式石甌で先端を欠損している。側辺は細かな鋸歯状で材質は安山岩か。5はチャート材の平基有茎式石甌で先端を欠損している。第204図9と10は羽口の破片。11・12は椀形の滓。



第198図3の蓋内面の墨書

時期：内面に稜を有する非ロクロ土師器環の出土があり、黒色土器A類の環、さらには須恵器の杯蓋や環、黒色土器B類皿などの出土がある。古墳時代後期末から古代IV期（9世紀前半）の遺物が混在する。

SD05（第198図 P L 79）

位置：XIX A - 14

検出：基本層序のIV層上面で検出した。SD02とSD03に挟まれ、両者をつなぐ溝状の遺構を想定し調査を行った。

重複関係：SK44を破壊する。

規模形状：幅はSD02側で85cm、SD03側で44cm。深さは最大で25cm、SD02側からSD03側へ向かって傾斜する。

埋土：基本層序III層を基調とする暗褐色土の単層である。炭化物や小礫を含む。

出土遺物：第198図7は非ロクロ土師器の坏底部破片。底部はやや平底化した丸底形態。8は高環の坏底部破片か。9は外面縦方向のケズリ成形の長胴裏、口縁部破片。

時期：出土遺物は、摩滅を受けた状況のものが多く、時期を推定するのは困難。

SD09（第180図）

位置：XIX B - 24、XIX G - 04

検出：古代検出面。基本層序V層下面にて精査中に溝状の落ち込みを確認した。

重複関係：SB10の煙道に破壊されるのでSB10よりは古い。またSK380よりも古いと考えられる。

規模形状：ほぼ南北に延びる。幅20～30cm、深さ約20cm。断面はU字形である。SB10煙道南側では検出されなかったこと、調査区北側へ延び、全体は不明である。

埋土：黒色粘土の単層。

遺物：出土遺物なし。

時期：不明。

SD10（第180図、第198図 P L 67, 79）

位置：XIX G - 05

検出：古代検出面。基本層序V層下面にて精査中に溝状の落ち込みを確認した。

重複関係：検出時にいくつかの遺構が重複していると考えられたが、検出面での判断はできなかった。調査の結果 SK336 は SD10 より古い。SK340、SK346、SK373 について、新旧関係は不明である。

規模形状：主軸は N40° W、長さ約 7m、幅約 60cm、深さ 10～15cm である。断面形は浅くタライ状である。
埋土：黒色粘土の単層。

遺物：第 198 図 10 は非ロクロ土師器の坏類、口縁部の破片で内面には稜を有するが、風化が著しく調整等の観察は難しい。11 は手づくねのミニチュア土器。12 は口縁部「コ」字状の裏で No.3 出土。体部はケズリ調整。13 はナデ調整の球胴の裏形土器、口縁部破片。No.1 の出土。

時期：古墳時代後期末の非ロクロ土師器から土師器砲弾型裏の古代Ⅲ期（8 世紀後半）またはⅣ期の初頭までの遺物が混在する。

SD32（第 180 図 P L 67）

位置：XVII-09

検出：古代検出面の砂礫層を精査中に黒色土の帯状の落ち込みを確認した。

重複関係：なし。

規模形状：主軸はほぼ南北の直線となる。長さ 6.6m、幅 40～50cm、深さは検出面より 40cm である。断面は U 字形である。

埋土：黒色シルト層である。明確に分層はできないが、下部は上部に比べ粘性がある。

遺物：須恵器の微小破片が 1 点ある。

時期：南北の軸方向を考えると、西側に隣接する古代の SB56 より、東側の古墳～奈良期の集落の軸に合致している。何らかの区画溝と考えられるか。

SD33（第 180 図 P L 67）

位置：XVII-03・08

検出：古代検出面の砂礫層を精査中に、黒色土の帯状の広がりを確認した。

重複関係：なし。

規模形状：くの字状に屈曲する。長さは南北方向に約 6m、北東方向に約 4.3m である。幅は 20～30cm、深さは 8～15cm と浅く断面は U 字形である。

埋土：古代遺物包含層を基調とした黒色シルト層である。

遺物：土師器の甕や鉢の小破片が出土している。

時期：不明。

SD36（第 180 図 P L 67）

位置：XVIIH-11・12

検出：古代検出面において精査中に黒褐色土の帯状の落ち込みを確認した。SK3016 より新しい。

規模形状：主軸は N45° W、長さは 4m、幅は 30～40cm である。深さは 10cm 以下と浅く、断面形はタライ状である。傾斜方向に対して長軸は直交して延びるため北東側の立ち上がりはなだらかである。また底面の一部はテラス状になる。

埋土：褐灰色シルトの単層。

時期：不明。

SD37（第 180 図 P L 67）

位置：XVIIH-11・12

検出：古代検出面において精査中に黒褐色土の帯状の落ち込みを確認した。SD36 と同様、性格不明の遺構である。SD36 とほぼ直角に交わる。

重複関係：なし。

規模形状：主軸はN30°E、長さは3.1m、幅は20～30cmである。深さは6cmと浅く、断面形状はタライ状である。傾斜方向に長軸は延びている。

埋土：黒褐色シルトの単層。

遺物：黒色土器A類の坏破片が8点出土している。

時期：不明。

遺構外出土（グリッド）

出土遺物

土器：第198図14～17は非クロロ土師器の坏。14は微細破片の接合資料で体部外面に「井」状の刻み記号がある。XVII E-17出土。15は有段口縁で平丸底の形態。底部から体部外面にかけてヘラケズリ成形し、口縁部は横ナデ、内面はていねいにミガキ調整されている。XVII D-14出土。16は浅身で、底部は平丸底。内面は底部を一方に、口縁部を横方向にミガキ調整している。XVII D-19出土。17は大型で浅身の鉢形の形態で底部は平づくりである。XVII E-25出土。18は須恵器坏。返し部は強く反り上がり、蓋の受け部もやや幅広い。底部はケズリ成形で凸状。XVII E-18出土。19と20は須恵器の蓋。19はつまみ部が宝珠状で返しは小さく突き出る。返し内径は6.5cmほど。天井部がせり上がる形態。XIX A-11出土。20はつまみ部が宝珠状で、天井部は平坦で返しは力強く立ち上がる。XVII E-20出土。21と22は須恵器高坏。21は返しが高く内傾して立ち上がり、蓋受け部もしっかりと作られている。脚部は欠損するが、透かし部の存在を明瞭に確認できる。XVII E-9出土。22は脚部破片であるが、2条の凹線と直下に透かし部が3単位入る。XVII A-13出土。23は須恵器の短頸壺、胴部破片。底部には「井」状の刻み記号がある。XVII E-22出土。24～26は須恵器坏A類。ともに底部ヘラ切り離し手法と観られるが、ていねいにナデ調整されている。体部が強く立ち上がる箱形である。24は底部に発泡状のコブがあり、形状もゆがんでいる。XVII E-25出土。25は24に比して良好な作りで、体部外面にはロクロ成形痕を留める。XVII E-19出土。26は底部切り離し時に、ヘラにより渦巻き形に痕跡を留めた例で、本跡の中でも唯一特殊な手法である。完形個体でXIX A-23出土。全体にゆがみがある。27は須恵器坏蓋B類。返しは小さく強く内傾する。体部外面は1/2程度ケズリ成形し、つまみ部は平。完形個体で返し内径は12.5cmが測られる。XIX A-15出土。28と29は須恵器坏B類。28は口縁部がやや外傾して立ち上がる形態で、器高は3.3cmほどである。XVII E-25出土。29は口径18.0cm、器高3.5cmが測られる大形品。口唇端部は強く外側につまみ出される。高台は角頭状。XIX A-14出土。30は須恵器盤で脚部を欠失している。口径27cmほどの例でXVII I-8出土。31～39は体部外面に墨書が認められる資料だがいずれも体部の欠損した小破片のため判読は難しい。31は土師器の坏A類。XVII G-05出土。32～39は須恵器坏A類。32は軟質で糸切り離し手法、底部内径7.0cmが測られる。墨書は欠損のため判読は難しいが35などと同じ文字か。XIX A-20出土。33の墨書は「北」か。34は軟質の底部糸切り離し手法。口径13.0cm、器高4.0cm、底部内径は5.0cmほどで、内外面にロクロ成形痕を明瞭に留める。墨書は正位で風構えに「風」。XIX B-18の出土。35と36も34とほぼ同様な個体で、墨書も同じ。35はXIX A-14出土、36はXIX B-11の出土。37と38は判読できない。39は軟質の糸切り離し手法の坏。口径12.0cm、器高3.5cm、底部内径は5.0cm。34と酷似した製作法で作られている。墨書は体部外面に正位で「得」か。XIX A-14出土。第199図1は黒色土器A類の坏、完形個体。底部糸切り離しで、口径13.0cm、

器高4.2cm、底部径5.5cmが測られる。XIX A-14 III層出土。2は土師器碗の底部破片。XVII G-5とB-25出土の接合資料。3と4は灰軸陶器の碗。3は口縁部破片で軸葉はほとんど消失している。口径18.0cmほどの大形例である。XIX A-14出土。4は碗の底部。高台径8.2cmが測られる。XVII C-10の出土。5は灰軸陶器の皿。XVII H-15出土。6は灰軸陶器の平瓶の取手。XVII H出土。7は灰軸陶器の耳皿、体部破片。高台は三日月形。XIX B-11出土。8と9は甌。8は多孔式でXVII J-04のIII層出土の1/2個体。9はXVII E-14のV層出土の接合例だが、体部下半は欠失後、割れ口に研磨の痕跡があり再利用など意識的な加工があると考えられる。10と11は土師器の甕。10は球胴形で外面は縦方向のミガキ調整で仕上げられている。XVII E-25出土。11は長胴形で口唇直下に細い沈線様の凹線があり、外面は縦方向のミガキ調整がなされている。XVII D-14出土。12～14は須恵器の壺。12と13は同一個体と考えられるが、13は意図的な破損のように割れ口がギザギザ波打つように欠損し胴上半部と接合しない。12と13ともにXVII D-15の出土。14は口縁部の破片でXVII E-24出土。15と16はこね鉢と推定できる器種の底部。15は須恵質。底面は貫通しない多孔で摩耗している。体部外面には「↑」の記号がある。XIX A-11 III層出土。16は土師質で底部の厚さは4.0cmが測られる。底面は貫通しない多孔。XVII G-15出土。17は須恵器坏蓋B類。径14.0cm、体部外面に「井」状の刻み記号がある。XIX A-20の出土。18は土師器ハケ甕の底部。特殊な刻み記号がある。XVII H-13出土。19は弥生時代中期前半の鉢形土器。口縁は8単位の小波状で底部には網代痕がある。地文に縄文（風化が激しく明瞭ではないが、LRとRL2種の原体？）を施し、口縁部には2本の横走する沈線が同様な工具で体部に四角形の枠どりを3単位施文する。2区の検出面にて伏せた状態で出土した。

石器：第203図6はチャート材の凹基無茎式鎌で片方の脚部を欠損している。XIX A-23 V層下の出土。7は扁平片刃石斧。完存品で石墨片岩材。6.4cm × 4.7cm × 1.0cm、47.5g。8は磨製石包丁の残欠を再加工した例で、器種は推定不能。一穴の周囲側面を磨き成形しているが、図左側の側面は欠損している。XIX B-6の出土。9は紡錘車。1/3程度の残欠品。滑石製か。XIX A-20の出土。10は滑石製の白玉。1.6cm × 1.2cm × 0.65cm、0.9g。XVII C-14出土。11は安山岩材の磨石。表裏がわずかに摩耗している。XIX G-04の出土。12～15は凹石でもいずれも安山岩材。12の凹みは径3.5cm、深さ-1.2cm。XIX A-14の出土。13は径4.0cm、深さ-1.6cm。XVII E-18出土。14はきめの細かな材で機能部が浅い皿形に凹む例。径2.2cm、深さ-0.3cm。XVII E-19出土。15は表裏に凹みのある例。表面は径5.0cm、深さ-1.5cm、裏面は径3.0cm、深さ-0.6cm。XVII E-09の出土。

土製品：第204図13と14は土製紡錘車の1/2欠損例。15～19は土鉢。15は7.4g、16は14.7g、17は(13.2g)、18は(9.1g)、19は9.5gが量られる。20はツツミ形の土製品と考えたが、盤などの脚の破片部分の可能性もある。21と22は土器の体部破片を利用した円盤。21は須恵器蓋のつまみ部分で24.6g、22は7.5gが量られる。

金属器：第205図13～15は耳環。13は劣化著しくメタル部分のみ残る。径2.6cm、8.4g。SD02埋没土1層トレンチより出土。14は銀メッキ製で径2.0cm、7.5g。XVII H-06の出土。15はメッキが剥がれて芯材部分のみの例で径2.8cm、10.3g。XVII D-25出土。16は鉄製の楔で8.2cm × 5.0cm × 1.7cm、32.1gが測られる。XIX B-25の出土。

4. 小 結 (古代)

東條遺跡は、東に傾斜した標高 367 m から 399 m にわたる埴捨土石流台地末端部に位置する。遺跡の形成時期は、古墳時代終末期から平安時代前半期、そして鎌倉・室町時代にある。遺構の分布域と検出層位の差異から古代以前と中世は明確に区別できるので、それらを分けて報告を行う。以下、まず古代に関する部分をまとめる。出土遺物（土器）から判断される遺構それぞれの所属時期及び段階は、古墳時代後期終末のⅤ期（屋代遺跡群の古墳時代 8 期～9 期 註2）、古代Ⅰ期（屋代の古代Ⅰ期前半）、古代Ⅱ期（屋代の古代Ⅰ期後半～2 期）、古代Ⅲ期（屋代の古代Ⅲ期～5 期）、古代Ⅳ期（屋代の古代Ⅵ期・7 期）、古代Ⅴ期（屋代の古代Ⅷ期）である。年代の相対的な位置付けは、概ね以下のとおりとなる。

古墳時代Ⅴ期（7 世紀前半）、古代Ⅰ期（7 世紀後半）、古代Ⅱ期（7 世紀終末～8 世紀初頭）、
古代Ⅲ期（8 世紀代）、古代Ⅳ期（9 世紀前半）、古代Ⅴ期（9 世紀後半）

A. 集落の構造について

遺構の多くは重複関係にあり、遺構掘り込み面の上部は削平を受けている。また調査区西側の八日市場地籍では、古代面と中世面がおおよそ 100cm の間層を挟んで重なる状況にあり、時代として明確に区別される。調査は用地取得の進捗とともに部分的に進められた経過もあり、集落跡全体の構造的な整合が十分進められなかった箇所もある。ことに竪穴住居跡（建物跡）群と掘立柱建物跡群などの年代的な位置付けには課題が多く残った。したがって、集落構造の把握という重要な側面において、出土遺物がある程度に保証された竪穴建物跡を中心に検討する結果となったが、これも調査精度の観点で細かな段階区分を行うまでに至っていない。限定された情報の中で当該遺跡の集落像復元を試みることにする。

① 遺構数と推定された所属時期

- 古墳時代後期終末・・・竪穴住居跡 17 軒（SB05・SB09・SB11・SB13・SB14・SB16・SB18・SB23・SB26・SB29・SB30・SB42・SB46・SB49・SB50・SB51・SB73）、該期の可能性が高い例 1 軒（SB06）、該期の可能性高い掘立柱建物跡 1 棟（ST01）、土坑 4 基（SK199・SK377・SK511・SK3026）
- 古代Ⅰ期・・・竪穴住居跡 13 軒（SB22・SB31・SB32・SB39・SB40・SB41・SB45・SB48・SB55・SB57・SB58・SB65・SB68）
- 古代Ⅱ期・・・竪穴住居跡 13 軒（SB10・SB12・SB15・SB17・SB19・SB20・SB33・SB44・SB59・SB62・SB66・SB70・SB72）、該期の可能性高い掘立柱建物跡 5 棟（ST11・ST17・ST31・ST33・ST35）、土坑 1 基（SK378）、集石跡 1 基（SQ02）
- 古代Ⅲ期・・・竪穴住居跡 7 軒（SB03・SB08・SB24・SB28・SB63・SB64・SB71）、該期の可能性高い掘立柱建物跡 9 棟（ST03・ST05・ST27・ST34・ST36・ST39・ST40・ST42・ST43）、土坑 2 基（SK627・SK2902）、該期の可能性高い溝跡 1 基（SD10）
- 古代Ⅳ期・・・竪穴住居跡 8 軒（SB01・SB21・SB35・SB56・SB60・SB69・SB75・SB77）、掘立柱建物跡 2 棟（ST02・ST18）該期の可能性高い例 4 棟（ST19・ST20・ST52・ST54）、土坑 3 基（SK85・SK615・SK665）、集石跡 1 基（SQ05）、焼土跡 1 基（SF19）
- 古代Ⅴ期・・・竪穴住居跡 5 軒（SB36・SB52・SB53・SB54・SB76）、掘立柱建物跡 4 棟（ST04・ST06・ST07・ST09）該期の可能性高い例 2 棟（ST10・ST45）
- 不明・・・竪穴住居跡 11 軒（SB02・SB04・SB07・SB25・SB27・SB34・SB47・SB61・SB67・SB74・SB78）、掘立柱建物跡 12 棟（ST08・ST15・ST16・ST41・ST44・ST46～ST51・ST53）、土坑 1116 基、土壇墓 2 基、溝跡 9 本、集石跡 3 基、焼土跡 4 基

②集落の構造解釈

○古墳時代Ⅴ期：(7世紀前半ころ)

東條遺跡を調査区内で見える限り、該期以前の遺構は存在していない。したがって古墳時代後期の7世紀前半になり集落が形成されたと考えてよい。当該期は陶邑窯跡群のⅢ型式期(およそ625年ころ)にあたる。古代型の須恵器環の生産が開始されたころをもって、前半と後半に便宜的に区分すれば、東條遺跡はその後半期に位置づけることができる。この段階の東條遺跡は在地製作の非クロコ土師器が中心であり、いまだ古代型の須恵器環は出現していない。古代Ⅰ期との区別は、この古代型須恵器環の出現の有無をひとつの基準としたが、東條遺跡の場合は、須恵器の出土数が極めて少ないので、在地製作の坏や高坏等の型式変化も判断の根拠とした。

調査区全体で該期に相当すると考えられる住居跡の位置を検討すると、調査区中央のXVII E・J区を中心に一所、その東のXIX B・G区に一所、西のXVII C区に一所のまとまりが認められる。空間的には3か所にまとまりがあると観られる。それぞれのまとまりの中で、調査区中央部にある一群は、一辺が7m50cmほどの大型住居跡3軒(SB16・SB30・SB29)とその周囲に1軒ないしは2軒の一辺4mから4m50cm規模の小型住居跡が存在する。このような観点で東の一群を観ると、一辺6mほどの中型の住居跡(SB09・SB05)と、やはり小型と観られる一辺4m程度の住居跡(SB11・SB06)が存在している。西では一辺6mほどの中型例(SB49・SB73・SB57?)、さらにそれより一回り小さい一辺5mほどの例(SB42・SB51)の2者があり、これに小型例(SB50・SB46)がある。東の一群も西の一群も中型例1軒に小型例1軒ないし2軒が組み合わさって単位が構成されているように観える。こうした住居跡の空間的な概観をもとに、個別の住居跡構造や内部施設に目を向けると、大型住居跡(SB30ほか)は軸の揃う規則的な4本以上の支柱穴をもち、構造的にしっかりしたカマドが設置されている。中型の住居跡は、支柱穴に規則的配置が観られそうな例(SB18など)もあるが、大部分は不規則なものでカマドの設置は大型住居跡同様に認められる。しかし一方で、小型例は支柱穴が確認できず、カマドそのものが不明瞭で焼土痕跡が認められる程度の例が少なくない。

以上から、古墳時代後期終末の集落構造は、大型住居跡を中心とした一群の単位1箇所と中型の住居跡を中心とした一群の生活単位2箇所ないしは3箇所が存在し、それらを統合して、ひとつの集落が構成されていたと判断できそうである。大型そして中型の住居跡は日常居住の施設であるとと考えられ、これに付随した小型住居の性格が課題だが、今回の調査内容から、これについての追究はできなかった。

○古代Ⅰ期：飛鳥時代(7世紀後半ころ)

【時期区分のポイント：古代型の須恵器環類の出現する段階】

古墳時代後期終末に形成された集落は、古代型の須恵器環類の出現以降も基本的には継続されたと考えられる。しかしながら東條遺跡の場合、須恵器環類の出土が極めて少なく、該期とそれ以前、さらには次期との区別が難しい。在土器の特徴から編年的研究の再検討が望まれるが、十分な研究史的成果が蓄積されておらず厳密な基準は今のところない。したがって、以下に示す時期別の区分が多少なりとも前後する場合もあることを念頭に置いて記述する。

調査区全体で住居跡の位置関係について検討すると、調査区中央に一所、その西に一所のまとまりが認められる。東地区の一群はSB13を除くと、該期相当の例は確認できない。中央地区では前時期に存在した一辺が7m50cmほどの大型住居跡はすでになく、一辺5mほどの中型例(SB22・SB65)と一辺3mほどの小型例(SB31・SB58・SB68)に限られてくる。西地区にある住居跡のまとまり(SB41、SB39とSB48)が、該期における住居あるいは生活の単位を表現しているものと考えられるか。中央地区の大型住居跡とそれに関連する住居跡が消滅した姿に集落構造に現れた社会的な背景を読み取ることができるか。

○古代Ⅱ期：飛鳥時代終末から奈良時代初頭（7世紀終末から8世紀初頭ころ）

【ポイント：須恵器環と蓋A類は消滅し、古代型須恵器環B類と蓋B類の出現する段階】

古代の開始期は、古代型須恵器環A類の出現と環B類及び環蓋B類の出現により、前半期と後半期に区分して考えることができる。また古墳時代からの系統をもつ須恵器有稜環や環蓋A類は、概ね7世紀の終末までには終了して行く。東條遺跡では、須恵器有稜環等の出土が極めて少ないが、須恵器環B類の出現期に須恵器有稜環等が明瞭に伴出した遺構はない。古代型須恵器環A類が出現した段階に、須恵器有稜環等も消失傾向が強まり、環B類の出現期には消失した可能性を指摘できる。そこで、屋代遺跡群の編年で古代Ⅰ期前半とⅠ期後半に区分した後半期を、次期の古代Ⅱ期と合わせ、古代Ⅱ期として集落像を捉えてみた。調査所見により住居跡の新旧が判明しても、出土遺物では時期区分できない遺構もあり、結果としてⅡ期に所属すると判断した住居跡間に近接した位置関係の例（SB70とSB72など）が生じてしまった。これらは同時には存在しないと考えられるので、居住時期には確実に時間差がある。このことから古代Ⅱ期には、屋代遺跡群の編年基準を用いなくても、やはり2つの段階を用意しておく必要があるのかもしれない。古代Ⅰ期からの継続も含め古代Ⅱ期の前半と考えられる例は5軒（SB10・SB19・SB20・SB33・SB62）、前半から後半に位置づけられると考えられる例が6軒（SB12・SB44・SB59・SB66・SB70・SB72）ある。住居跡の位置関係を検討すると、調査区中央に再び住居跡がまとまる傾向がある。西の地区は2軒に減少し、東の地区ではSB10を中心に新たに4軒が現れる。調査区全体を俯瞰すると、住居跡の軸が北東に20度ほど傾く一群とほぼ南北軸をとる一群の2者が存在していることが解る。時期区分の段階に合わせ考えると、前半期の住居跡が前者に相当し、前半から後半にかけてのものが後者に当たると考えられるが厳密なものではない。また前半期の住居跡は、一辺5mほどの中型例（SB10・SB19・SB20）と一辺3mほどの小型例（SB12・SB33）で構成され、古代Ⅰ期に想定した居住の単位と同じであるが、後半期の例は一辺4m規模の方形指向の小型住居跡（SB59・SB70など）に統一されているように観える。さらには西地区の空間地に、掘立柱建物跡（ST31・ST33・ST35など）が施設されてくるのも、この時期の特徴（前半期か後半期かは不明）と考えられるか。該期はまさに奈良時代への移行期であるだけに、住居の設営さらには集落形成に関わる政治的な意図が働いた結果があるのだろうか、さらなる類例の検証が望まれる。

○古代Ⅲ期：奈良時代（8世紀代）

【ポイント：非クロコ土師器は消滅し、黒色土器A類が登場する。古代型須恵器には糸切り離し手法が出現し、ヘラ切り手法と交代していく段階】

該期は奈良時代全般にかけての時期を設定しており、他の時期とは同等に扱えない。時期区分の指標となる土器編年が相対的、傾向的なものであり、当遺跡での適応が難しく、出土遺物の整理段階で多くの遺構が判別できなかったことにも起因している。このような中で大まかに該期の集落を覗いてみると、住居跡の軸方向では北東側に傾くものが古い傾向にあり、南北軸の一群が新しい時期まで継続しているように観える。これまで中央区を中心に設営された住居群は、西地区では消滅し東地区でも2軒程度となる。中央地区には一辺6mの大型住居跡が1軒（SB17）と一辺5mほどの中型例が1軒（SB71）あり、これに小型例が組み合わさるような構成をとる。ただしSB17やSB28は古代Ⅱ期から該期にかけてのもので、SB71やSB24よりは多少古いと考えられる。この意味では、中央地区もSB71を中心とする居住の単位ひとつで構成されていたものであろうか。約70年近い期間に対して、古と新を合わせてもわずかに9軒の検出は、集落としてはまさに最小単位の一群を捉えたに過ぎない感がある。集落としては衰退傾向を示すのか。

この時期で特筆すべき点は、西地区の空間地が掘立柱建物群で（ST39～ST43ほか）構成される点にある。

古代Ⅱ期にその萌芽が現れたとすれば、計画的な集落設営が奈良時代を通して進められたことになるか。ただし建物跡の所属時期に関しては推定の域を出ないため、積極的な集落構造については課題が残る。

○古代Ⅳ期：平安時代（9世紀前半）

【ポイント：高台付きの椀や皿が出現し、黒色土器B類や灰釉陶器が登場する段階】

古代型須恵器の坏は、糸切り離し手法のみとなり、黒色土器B類の椀や皿が出現する。椀類や皿の登場は認められるものの、東條遺跡では灰釉陶器の出土が極めて少ない。古代Ⅲ期は70年ほどの期間を設定しているため、実際にはその中の小期では、3～4軒程度の住居跡の単位が1～2箇所程度しか存在していないと考えられる。この意味では、該期も前時期の集落形成をほぼ継続したものと考えられるが、特徴的な点は住居跡1軒1軒が距離を置いて設置されているように見えることである。古代Ⅲ期には住居跡間は10m内の至近の位置に3軒ほどのまとまりが認められたが、該期ではいずれも10m以上の間隔を隔てて設置されている。このことは住居跡1軒（一辺5m規模）の自立性が高く、これに掘立柱建物跡を伴うかたちで生活の単位となり、これが4箇所程度（SB21・SB35・SB53？・SB75）で集落を構成しているように見える。住居の構造は、支柱穴を持たずカマドも上部構造が判然としない例が中心で、中型規模の例は一辺5mほどの大きさで、小型例（SB01・SB56・SB60・SB69）は一辺3m前後の大きさである。

○古代Ⅴ期：平安時代（9世紀後半）

【ポイント：須恵器坏類は消滅し、土師器坏・椀類が登場する段階】

須恵器の坏が消滅に至り、土師器坏・椀類が登場する。東條遺跡では、土師器製食器の出土がほとんどなく、幾つかの住居跡埋没土内より破片が数点出土したに留まっている。遺跡内では、竪穴住居跡が4軒と該期の可能性ある掘立柱建物跡が5棟存在するだけである。住居跡はいずれも中型規模の例である。ただし、SB54とSB76は建物跡の構造が酷似しており、重複方向も同じであること、壁際の礫敷き列が同一の施設と考えられそうな点から、同じ建物跡である可能性も指摘できる。同一の建物跡と考えると、一辺6m50cm程度の長方形の大型ないしは中型の建物跡が想定できる。こうした壁に礫敷き列をもつ建物跡は、千曲川を挟んで対岸の五輪堂遺跡にも確認されており、その所属時期はやはり9世紀後半と考えられている。五輪堂遺跡では、こうした建物跡を堂跡と想定しており、東條遺跡例の比較資料となる。このように考えると、該期での竪穴住居跡はSB36の1軒のみとなる。

5. 遺構と遺物（中世）

（1）中世の遺構検出面

中世の調査は土層の堆積と検出された遺構、出土した遺物の状況を検討しながら進めた。

平成18年度調査では、青磁、古瀬戸などの陶磁器類を包含する層（暗褐色砂質シルト）を鍵層とした。遺構は、この包含層より上で検出（中世第1検出面）される遺構群と、包含層を剥ぎ取って検出（中世第2検出面）される遺構群がある。地点によってはこの包含層が存在しない場所があり、これらについては中世検出面としてまとめて認識し調査を進めた。

平成19年度の調査では、中世第1検出面は場所により、さらに2段階に細分されたため、中世遺構の検出面は少なくとも3段階あることを検証し、調査を進めた。

各検出面の遺構の帰属する時期は出土する陶磁器類を参考に次のようにまとめた。

- ① 中世検出面（以下、中世面）：鎌倉時代後期から戦国時代。
- ② 中世第2検出面（以下、中世第2面）：鎌倉時代後期から室町時代前期。
- ③ 中世第1検出面（以下、中世第1面）：室町時代中期から戦国時代。

2段階細分③-1 室町時代中期。

③-2 室町時代末から戦国時代。

各検出面の調査区内での状況は、東側が部分的に砂礫層と水田土壌のような土に覆われ、中世第2面以降の検出面が確認できない。西側では、部分的に中世第1面の上に戦国時代（16世紀頃）の遺構が検出できる層が被覆している。これを細分すると中世第1検出面③-2にあたる。近世以降は、耕作による水田土壌や、宅地造成のための礫の投げ込みなどの痕跡が認められた。

（2）鎌倉時代後期から室町時代前期（中世第2面）

①土坑（SK）

SK1886（第257図 P L 91）

位置：XVII G-13

検出：井戸SK1814の断ち切り調査時に、断面を確認した。切り合いはない。

規模：平面形態は円形で、天場石での内径は110cm、下部の内径は60cm、深さ270cmを測る。

埋土：褐色砂質土で、下部では褐色土にグライ化している。径35cm大の礫が投げ込まれていた。

構造：石組み井戸。水溜は曲物が埋設される。断面は漏斗状から円筒形を呈す。水溜に曲物を用いた井戸はSK1400がある。

遺物出土状況：遺物は少なく、石鉢の破損品、常滑系の焼物などが出土した。

遺物：第275図1は溶岩製の凹石の破損品、第285図1は井戸水溜の曲物で樹種がヒノキである。

SK2222（第257図 P L 92）

位置：XVII G-13・14

検出：中世第1面での調査後、古代面調査時に検出された。中世第2面が土石流堆積等によって削られ、古代面での確認となった。中世第2面の遺構と同時期の井戸と考える。切り合いはなし。

規模：平面形態は円形で、検出面での礫内径は径90cm、深さ60cmを測る。

埋土：径35cm大の礫が投げ込まれていた。基質は水分を多く含む泥である。

構造：石組み井戸。底に直径50cmの大きな亜円礫を敷いている。石組みは底から徐々に内径を広げる。

遺物：なし。

SK2744（第257図、第275図、第279図、第286図 P L 92, 93, 111）

位置：XVII G-04

検出：礫が弧を描くような配列を認めた。埋土は礫主体で礫間の土はほとんどない。切り合いはなし。

規模：平面形態は検出面での礫内径が125×110cmとやや南北に扁平な楕円形で、深さ230cmを測る。

埋土：1層は礫のみで間隙が多いが土壌の充填はほとんどない。長軸85cm、短軸57cmの半円形の礫が井戸の蓋のように平におとし込まれている。2層は褐色シルト～粘土で泥状を呈し、自然埋没と考える。3層は水溜内の埋土で黒褐色から褐色の粘質土。平石が底部に置かれていた。

構造：石組み井戸。断面形は円筒形を呈する。水溜は深さ30cmを測る。掘り方が確認でき、直径271cmの円形で、断面形は上縁部になるに従ってラッパ状に開く。基礎の礫には、80cm大の礫を用いて土台石としている。このような土台石を用いている井戸は、SK2744、SK2222、SK1814、SK1741があり、本遺跡での井戸構造の特徴といえよう。また、井戸の立ち割り時の観察からは、掘り込まれている井戸の地山が井戸の左右で異なり、西側は砂礫層で、東側は何層かの地層で形成されていた。井戸が設置される場所は、このような地層の境を選んでいた可能性が考えられる。

遺物出土状況：1層より内耳土器、3層から板状木製品（釣瓶の側板）、柄付き刀子の柄の部分など木製品が出土した。

遺物：第275図12、13は溶岩製の凹石である。第279図16は鉄製の火打金である。第286図9は漆塗りの柄付き小刀で樹種がモクレン属である。10は漆器椀で樹種がカツラ属である。11は釣瓶で樹種がヒノキである。12は釣瓶の側板で樹種はサワラである。13はマツ属複雑管束亜属の節を利用した掛け具と思われる。14は曲物側板で樹種はヒノキ科である。

時期：埋土中の炭化物の¹⁴C年代測定からは11世紀後半～12世紀前半の数値が出ている。

SK2745（第257図、第275図、第286図 P L 93, 111）

位置：XVII G-09

検出：古代面まで重機で掘削中に礫がまとまっている地点が確認された。よって、検出は古代面で行った。切り合いはなし。

規模：平面形態は円形で、検出面における礫内径は70×80cm、深さ50cmを測る。

埋土：褐色の泥質土、径3cm大の礫を含む。

構造：石組み井戸。掘り方で140×145cmの円形である。

遺物出土状況：イヌの骨、網かご、曲物の薄板材、土器片が3点出土した。

遺物：第275図14は溶岩の凹石である。第286図15は曲物の側板で樹種がヒノキである。16は網代状のかごで樹種がヒノキである。

時期：埋土中の炭化物の¹⁴C年代測定から15世紀の結果を得ている。近接するSK2744を考慮すると、SK2744を埋めて、新たに本井戸を構築したことも推測される。

SK2197（第257図、第270図 P L 93, 105）

位置：XVII B-23・24

検出：ST38調査時のトレンチ断面で確認された遺構で、SK2197の埋没後にST38が見つかったことが土層堆積から理解できた。中世第2面の砂礫層上面においては黒色土の落ち込みとして検出した。

規模：平面は不整形な楕円形で、274×150cm、深さ45cm、長軸はN58°Eを測る。

埋土：3層に分層される。

構造：壁は凹凸がある。底面は船底形を呈する。周辺には同様の遺構はない。骨片の出土からは墓的な

機能も考えられるか。

遺物出土状況：1層より骨片、青磁片が出土した。

遺物：第270図27は青磁碗でB0類、31も青磁碗でB1類である。骨の鑑定は小片で鑑定はできなかった。その他の土坑

XVII B区は南西—北東方向へ傾斜しており、SK2197、SK2286以外は径40～80cmの楕円形～円形の土坑を主とし、径30cm以下の土坑もある。深さは20cm前後のものが多い。

SK2329 (B-24、G-04)：平面楕円形、断面は階段状、深さ12cm。遺物は第279図3鉄製の釘。

XVII G区は南西—北東方向へ傾斜している。そのうちG-02、03、07、08、12、13の土坑は切り合いを持ち、径40cm以上の土坑と径30cm以下の土坑に大きく分かれる。深さは20～30cmほどが多く、掘り込みも明確である。形態の類似する土坑を組み合わせると方形の配置になるものがあり、掘立柱建物が建つ可能性が高い。

SK1878 (G-07)：平面楕円形、断面V字状、深さ29cm。遺物は第282図1銭、至道元寶である。

SK1884 (G-03、08)：平面円形、断面皿状、深さ30cm。遺物は第278図1羽口である。

SK1970 (G-03)：平面不整形、断面階段状、深さ30cm。遺物は第282図2銭、政和通寶である。

SK2014 (G-08)：平面楕円形、断面U字状、深さ50cm。遺物は第279図1鉄製の刀子である。

SK2081 (G-07)：平面円形、断面U字状、深さ19cm。遺物は第270図28青磁碗である。

SK2131 (G-12、13)：平面楕円形、断面階段状、深さ21cm。遺物は第275図2軽石である。

SK2215 (G-03)：平面不整形、断面中央が凹む階段状、深さ10cm。遺物は第283図3銭、元祐通寶である。

SK2216 (G-08)：平面楕円形、底面は凹凸、深さ32cm。遺物は第279図2鉄滓と考えられる。

SK2331 (G-04)：平面楕円形、断面U字状、深さ12cm。遺物は第270図32青磁碗である。

SK2507 (G-15、20 H-11、16)：平面不整形、底面は凹凸、深さ18cm。遺物は第270図33かわらけである。

XVII H区の土坑は径30cm以下の土坑と径40cm以上の土坑に分かれる。掘り込みの明確な土坑はその配置から掘立柱建物が建つ可能性がある。

SK2517 (H-16)：平面楕円形、断面V字状、深さ37cm。遺物は第270図36かわらけである。

SK2648 (H-11、12)：平面楕円形、断面皿状、深さ67cm。遺物は第270図37、38が裏で、38は中津川の裏である。

SK2649 (H-12)：平面楕円形、断面段を持つU字状、深さ98cm。遺物は第270図34中津川以外の裏である。

SK2651 (H-06)：平面楕円形、断面V字状、深さ34cm。遺物は第270図39青磁の皿である。

SK2662 (H-11)：平面楕円形、断面皿状、深さ49cm。遺物は第270図40古瀬戸の水滴合子である。

SK2758 (H-01)：平面楕円形、断面U字状、深さ35cm。遺物は第275図4砂泥互層岩の礎である。

SK2770 (H-01)：平面楕円形、断面皿状、深さ30cm。遺物は第275図3凝灰岩の砥石である。

②溝跡 (SD)

SD29 (第232図、第266図 P L 101)

位置：XVII G-04・05

検出：浅い窪み状の溝である。切り合いはない。検出時に黒褐色土を掘り下げた。

規模：長軸はN60°W。東側はトレンチで破壊される。残存長は2.5m、幅は60～80cm、深さ12cm。中世第2面で検出される溝は浅く、一部のみが確認される程度である。溝の上部を削り

取られた可能性も考えられる。

構造：断面は浅い皿状を呈す。井戸に伴う溝か。

SD34 (第235図、第266図、第269図 P L 101, 105)

位置：XVIIH-07・08

検出：SH12調査終了後、グライ化した青灰色土を掘り下げ、黄褐色砂質層を検出中、黒褐色土の落ち込みを伴う帯状のプランを検出した。切り合いはなし。

規模：長軸はN 30° E、長さ4.3m、幅約1.5～1.9m、深さ18cm。

埋土：黒褐色土に礫の流れ込みが含まれ、自然埋没である。

構造：断面は浅い皿状で、SD35と連続することも考えられる。

遺物出土状況：埋土よりかわらけ出土。

遺物：第269図17はかわらけである。

SD35 (第236図、第266図 P L 101)

位置：XVIIH-07・08・12・13

検出：SH12調査終了後、グライ化した青灰色土を掘り下げ、黄褐色砂質層を検出中、黒褐色土の落ち込みを伴う帯状のプランを検出した。切り合いはなし。

規模：長軸はN 50° W。西側は検出できない。残存長3.3m、幅約1m、深さ14cm。

埋土：黒褐色土に礫の流れ込みが含まれ、自然埋没である。

構造：断面は浅い皿状で、溝底部には凹凸がある。SD34と連続することも考えられる。

遺物出土状況：かわらけ片が出土している。

③遺構外出土遺物

第279図6はC-16出土の鉄製品、第282図4がC-16出土の銭で元祐通寶である。

第275図5はG-07出土の砂泥互層岩の硯で、第278図2はG-07出土の羽口である。

第279図4はG-08出土、5はG-07出土の鉄製の釘である。

第282図5はG-05出土の銭、開元通寶である。6はG-07出土の咸淳元寶である。7は6の裏面である。8はG-12出土の銭、治平元寶である。

(3) 室町時代中期から戦国時代(中世第1面)

①礎石・掘立柱建物跡(ST)

ST37 (第252図、第269図、第279図、第282図 P L 87, 105, 110)

位置：XVII G-05 H-01

検出：中世第1面において遺構検出中に径30～40cmの平石が6基認められ、配置から礎石建物と想定した。各礎石はST21やST38と比べやや小ぶりである。SK2765、SK2767とは重複すると考える。

規模：礎石配置は2間(200cm・200cm)×2間(205cm)の9基の総柱建物の様相であるが、全体像は不明である。S2はS1とS3の間に位置し、総柱とすれば外れた位置である。主軸はN33° E、桁行400cm、梁間390cmを測り、床面積15.6㎡である。けがき線が確認できないので厳密な柱間は不明である。

埋土：いずれの礎石も掘り方をもつ。

構造：礎石を置くための造成などの痕跡は調査では認められなかった。傾斜地を平坦に削り、その上に礎石を置いた可能性がある。建物の北東側には、桁行に平行して径10～30cmの垂角礫が

並ぶように認められた。同様に SD31、直交して SD30 が位置する。SD30 の北西、南東脇には SH16、SH17 が検出された。これらの一連の遺構は ST37 の付属施設とも考えられるが、機能は不明である。礎石が小ぶりであるので、簡易な建物であった可能性もある。

遺物出土状況：礎石掘り方内から、若干出土している。

遺物：第 269 図 4 は青磁碗、8 は黄軸の鉄釘で、第 279 図 7 は名称不明の鉄製品である。第 282 図 9 は銭で景祐元寶②塩野篆書である。10 は元豊通寶である。

ST38（第 253 図、第 254 図、第 269 図、第 276 図、第 279 図 P L 87, 105）

位置：XVII B-23・24

検出：重機で表土をはいだところ径 40～100cm の平石や角礫の石の並びが認められ、精査を行った。S1、S2、S3 と SX11 は当初 1 つの遺構として調査を始めたが、SX11 の床下を調査するなかで、礎石がさらに西側に延びることが判明し、結果として SX11 より古い遺構となった。周辺の土層堆積からみると、SX11 検出面の土が ST38 中央付近まで被っていたことにより、SX11 の遺構範囲を確認する中で ST38 も同時に検出したことになったと考える。また、本遺構の検出面より下層で SK2197 が検出されている。このことから、少なくとも一帯では、中世の遺構検出面は 3 段階あり、本遺構はその 2 段階目の遺構といえる。なお、いくつかのピット的な SK と重複関係にあると考えられる。

規模：本体となる礎石の配置は、3 間（158cm・190cm・200cm）× 2 間（190cm・190cm）の 12 基の総柱建物で、そのうち 8 基を検出した。2 間×3 間の長方形で、主軸は N64° E、桁行 54.8cm、梁間 380cm をはかり、床面積 20.9 m² である。S7 と S8 以外はけがき線が確認できないので厳密な柱間は不明である。

埋土：礎石に掘り方がある。

構造：平面の石の配列等から、ST38 を整理しておく。

ア 本体となる礎石の配置は、2 間×3 間の長方形である。しかしながら、さらに、S7、S8 の西側には S10、S11 があり、柱の位置からみると本体に付属する礎石といえる。この場合、S9 に対応する礎石が検出されなかったが、柱が通っていたと仮定すれば、2 間×4 間の総柱建物も考えられる。一方で、西側の一間がとび出る構造の建物であった可能性もある。

イ 本体の西側には、2 列の礫の並びがあり、S10、S11 に沿うように屈曲して検出されている。調査の中、2 列の礫間には砂質分の強い黄褐色土が確認され、また S6 と S10 の間には幅約 50cm の溝状の落ち込み SD28 がある。これらは、本遺構に関連する施設、たとえば雨水を流す付属施設とも考えられる。本遺構北側にある SH18 はその範囲が本遺構の長軸に沿ってあり、傾斜地の低い方向にある。このことから、本遺構の土台面の造成に関連する遺構（土留めなど）の可能性はあるが、根拠となる土層観察結果は得られていない。

ウ S1、S2 の付近には本遺構の礎石と比べて小ぶりの礫が並ぶようにある。別建物の礎石の可能性や ST38 の立替えなども推測される。

エ 礎石を置くための造成などの痕跡を調査で確認できなかった。傾斜地を平坦にして、その上に礎石を置いたと考えられる。

遺物出土状況：かわらけ、中世陶器片等が出土した。磁器類は出土していない。

遺物：第 269 図 5 は中津川の片口鉢である。6 はかわらけである。7 は中津川の四耳壺である。第 276 図 14 は安山岩製のすり石である。第 279 図 8～11 は鉄製の釘で、12 は鉄製の刀子である。

②土坑（SK）

SK1679（第256図、第270図 P L 90, 105）

位置：XVII G-03

検出：砂礫層上面まで重機で掘り下げ精査したところ、径30cm大の礫のまとまりが検出された。その中に円弧を描く礫の並びが認められ井戸跡とした。切り合いはない。南側は砂礫とシルトの堆積、北側は厚い砂礫の堆積がみられ、地層の境に構築された遺構である。

規模：平面形態は円形、上縁で100×110cm、底部で60×50cm、深さ280cmを測る。

埋土：深さ150cm以下では基質はなく礫のみで埋められている。中層は径10～30cm大の礫からなり、基質は黒褐色土。上縁部は黒褐色土を主とする。炭化物、砂粒、径20cm大の礫を多く含む大礫が3個置かれている状態で、人為的埋没状況を示していた。

構造：石組み井戸。断面の上半部はゆるやかな漏斗状で、下半部は円筒状である。掘り方は不明瞭であるが、地山に比べて黒色の円弧、直径約200cmが確認された。また井戸の北側から北西方向にかけて礫の広がりが認められ、SH13とした。

遺物出土状況：掘り方埋土から銭貨、かわらけ、内耳土器片が出土している。

遺物：第270図11は掘り方出土のかわらけで灯明皿である。

時期：SK1680と同じ。¹⁴C年代測定では江戸時代まで下る結果が出ている。埋没時の年代を示すものか。

SK1680（第256図 P L 90）

位置：XVII G-08

検出：砂層上面まで重機で掘り下げ精査したところ、径30cm大の礫のまとまりが検出された。その中に円弧を描く礫の並びが認められ井戸跡とした。またSK1678は検出時に確認され、SK1680埋没後に掘られ新しいものと判断できる。

規模：平面形態は円形、上縁部は径110×105cm、下部は径50×65cm、深さ220cmを測る。

埋土：黄褐色砂礫。自然埋没と考えられる。

構造：石組み井戸。水溜はビット状に掘りくぼめられていた。掘り方は検出面において径265cmの円形が推定される。断面形は漏斗状で、検出面より約100cmの深さから円筒状になる。掘り方内は礫を裏込めとし井戸側石組みを支えている。上縁から数えて3段目の礫までは径20～30cm大の垂角礫が用いられている。4段目以下から下部までは土台の礫を除き厚さ4cmほどの平石を積みあげている。上半部のみを作り直した可能性も考えられる。北側上縁部に大きめの平石が組み込まれている。上縁の高さは一定ではないため井戸枠設置のための平石ではなく、足場としての機能があると考えられる。石組に平石を用いた井戸はSK1680のみである。

遺物出土状況：青磁片1点が出土している。

SK1741（第256図、第270図、第275図、第285図 P L 90, 91, 105, 111）

位置：XVII D-21・I-01

検出：直径30cmの礫が散在する中世第1面において、径30cm大の礫のまとまりが検出された。切り合いはなし。

規模：平面形態は隅丸方形。長軸N45°E、上縁部の規模は115×125cm、下部は75×90cm、深さ220cmを測る。

埋土：径10～40cmの礫が多量に埋没する。基質のグライ化の差によって2層に分層した。

構造：石組み井戸。水溜はビット状に掘りくぼめられていた。井戸側礫は9～11段積み上げられている。下部礫は径50cmの垂角礫を1辺に配置し基礎を作っているため隅丸方形を呈する。上部の礫

もこの影響を受ける。北東方向に礫のまとまりがみられ、足場の機能が考えられる。

遺物出土状況：かわらけがまとまって出土し、内耳土器片が見られた。木製品では底部近くから曲物の側板と底板が破損した状態で出土した。笹塔婆は深さ178cmのところまで出土している。遺物の出土深度は凡そ190cm、130cm、100cmの3つのグループに分けられそうであるが、時間差がどの程度あるかは不明である。

遺物：第270図12～15、17～23はかわらけである。第275図9は安山岩製の臼である。第285図5は容器で曲物の底板である。樹種はヒノキである。6は祭祀具で木簡、笹塔婆である。形態は主頭状である。表に「梵字 迷故三」裏に「南無」と書かれている。「迷故三」は「迷故三界城」(まようがゆえにさんかいはしろなり)の一部と考えられ、庶民信仰の資料として注目される。

時期：¹⁴C年代測定では16世紀後半～17世紀前半の結果となった。内耳土器片が出土していることから、年代は埋没時を示すものか。

SK1814 (第256図、第270図、第275図 P L 91, 105)

位置：XVII C-13

検出：中世第1面において径20～30cm大の礫の円形の広がり確認された。上面の礫を取り除き井戸側の上縁礫およびその下部に組まれた石組を確認し、井戸跡と判断した。切り合いはなし。北側にSK1680、西側にSK1886、SK2222が隣接しているため、これらの4基の井戸が同一時期に存在した可能性は低い。

規模：平面形態は円形、上縁部の規模は径93×90cm、下部は径70cm、深さ250cmを測る。

埋土：底部の3層は自然埋没、2層、1層は礫を多量に含む人為的な埋め立てと考えられる。

構造：石組み井戸。ほぼ円筒形に石は組まれている。最下部の礫は長径50cm前後の大きな礫を基礎として配置しており、積み上げる礫との区別をしていることがうかがわれる。水溜はピット状である。最下部の井戸側礫の下場より50cmの深さを測る。掘り方は検出面において255×210cmの不整円形を呈する。断面は深さ80cmまですり鉢状に掘り込まれ、その下部から円筒形に掘り込まれている。径10～15cm大の礫が井戸側礫の裏に込められている。

遺物出土状況：埋土1層よりすり鉢が3点、底から70cm上で火鉢が出土している。

遺物：第270図26は火鉢である。第275図10は安山岩製の砥石である。

時期：埋土中のモモ核の¹⁴C年代測定では13世紀後半から14世紀前半の値が得られた。火鉢も14～15世紀に属すると考えられる。本遺構は礫を埋めることによる、井戸の機能を終焉させ、SK1680などに作り替えたことも考えられる。

SK2315 (第257図、第285図、第286図 P L 92, 111)

位置：XVII H-01・02・06・07

検出：重機により中世第1面まで掘り下げ、円形に並ぶ礫群を検出し、井戸跡と確認した。北東に傾斜する検出面からは礫が帯状にまとまっており、本跡との連続性が考えられる。切り合いはなし。

規模：平面形態は円形、上縁部は径110×100cm、底部は径約60cm、深さ275cmを測る。

埋土：上部1、2層は淘汰のよい黄褐色砂、小礫まじりで上方細粒化のセットが互層となり深さ2mまで達する。下部3、4、5層はグライ化した灰色粘質土で特に4層は植物遺体の堆積が著しい。使用時における自然堆積状況を示していると考えられる。

構造：石組み井戸。水溜りはない。掘り方はやや不整形ではあるが、190×170cmのほぼ円形で、わずかに上縁部が広がる。ほぼ円筒形に底部まで掘り下げられ、底部の規模は110×115cmである。礫間の隙間は少なく、掘り方も、数cm大きめに掘った後に大礫を並べ組んでいるのが観察

できる。裏込めも認められるが、SK1679より顕著ではない。本遺構から北に延びる礫は、溝状に窪んでいるため、排水溝の機能があった可能性もある。

遺物出土状況：上部の砂礫層からは遺物の出土なし。下部からは木簡、鉄製小刀、漆皿が出土した。小刀は柄がないもののほぼ完形である。井戸を鎮める祭祀具とも考えられる。灰色泥質堆積物からは漆塗りの隅丸方形の曲物底板の半分とやや湾曲気味の15×10cm台形状の鉄板が出土、最下層の礫混じり褐色土上面からは木製の杓と陶磁器が出土した。有機物を含む自然堆積層の遺物は井戸廃棄後、その下位の遺物は井戸使用時のものと考えられる。

遺物：第279図17は板状の鉄である。18は鉄製の刀子である。第285図8は容器、曲物の底板で樹種はヒノキである。9は容器、曲物の底板で樹種はスギである。第286図1は容器、漆製品の底蓋板で樹種はサワラである。2は調理加工具の杓子で樹種はヒノキである。3は用途不明品の棒状製品でさいばし状である。樹種はヒノキである。4は形態が木筒状であるが、文字などは確認されない。薄板状で樹種はスギである。5は用途不明品の板状の屑材である。樹種はツガ属である。6は容器で漆器皿、樹種はカツラである。7は容器で漆器椀、樹種はケヤキである。8はその他の削片で棒状の燃えさしである。樹種はマツ属複雑管束亜属である。

時期：¹⁴C年代測定では15世紀の数値を得ている。

XVII B区の土坑はST38の周辺に分布する。径10～20cmの小さい円形の土坑が主で、他にいくつかの径30～70cmの楕円形の土坑がある。ST38とは重複関係にあるが、礎石建物との関連性がうかがえる。SK2120(B-23, 24)：平面円形、断面階段状、遺物は第270図29青磁碗である。

XVII C区の土坑はH区と連続して北東—南西方向の直線的な並びがみられる。径20～40cmの円形の土坑が主で、他に径50cmほどの楕円形の土坑もある。柱根をもつ土坑もあり、なんらかの建物または施設の可能性がいろいろあるだろう。

SK1726(C-25)：平面楕円形、断面円筒形で柱根を持つ。SK1727より古い。遺物は第285図3建築部材で芯持ち材、柱根である。形態は丸木材鋭角で樹種はコナラ属コナラ節である。

XVII G区の土坑はSX15、SX15とSK1679の間、SK1680、ST37の周辺に分布する。径50cmのやや大きい円～楕円形の土坑を主とし、径40cm以下の土坑がある。特に他の遺構との関連性はうかがえない。SK1778(G-03)：平面円形、断面は浅い皿状で深さ9cm。遺物は第279図15棒状の鉄製品である。SK1794(G-09)：平面円形、断面はU字状で深さ15cm。遺物は第270図30青磁の碗である。SK2177(G-03)：平面楕円形、断面は階段状の浅い凹みで深さ7cm。遺物は第279図13鉄板。SK2334(G-21)：鍋が出土。SKとして取り上げたが、掘り込みは確認できなかった。遺物は第269図25である。

XVII H区の土坑はC区と連続して北東—南西方向の直線的に並び、径40～50cmの円形～楕円形を主とするもので、SK1661は大きく240×130cmの楕円形で深さ33cmである。

SK1704(H-05)：掘り方の平面は楕円形、断面U字状で深さ40cm。遺物は第285図2建築部材、芯持ち材で柱根である。形態は角材で平底、樹種はクリである。

SK1706(H-05)：柱根であるが、掘り方は確認されなかった。遺物は第285図4建築部材、芯持ち材で柱根である。形態は角材で平底、樹種はモモである。

XVII I区の土坑は径15～25cmの小さい土坑と径40cmほどの土坑、100～180cm大の土坑に分かれる。比較的集中しているため、組み合わせはできないが、建物があったことは想定できる。

SK1735(I-01)：平面楕円形、断面U字状、深さ13cm。遺物は第275図8安山岩製の臼である。

SK1844(I-08)：平面円形、断面U字状、深さ24cm。遺物は第285図7連筒下駄で樹種はケヤキ。

SK1936 (I-08・13): 平面不整形、断面は皿状で底面凹凸あり。深さ30cm。遺物は第275図11 安山岩製の臼である。

③方形竪穴建物跡(SX)

SX11 (第259図、276図 P.L.94)

位置: XVII B-18・23・24

検出: 表土を重機によって除去し、砂礫を主体とした層を掘り下げ中、径20～30cmほどの礫のまとまりが検出された。礫の範囲を把握するために平面的に掘り下げ、柱穴などの遺構検出を行いながら、礫出しを行い、範囲をつかんだ。東側には明らかに礎石と思われる礫(ST38)と考えられる石が2mの間隔を持って3基配置されており、当初はその一部と考えていた。礫のまとまりをみてトレンチを入れ土層観察したが、落ち込みや土の堆積の変化は明確ではなく、中世の地山の可能性や何らかの埋没礫の可能性が考えられた。その中で5つの礫が、南北方向に列をなし、礫の面を西側にそろえていることから、他の礫を伴う方形の竪穴状の遺構が西側に広がると判断した。

ST38との関係は面的に1面高く、本遺構のほうが新しい。検出面が傾斜していたことから、傾斜上部ではSX11が検出され、傾斜下部ではその面が除かれその下層にあるST38が現れた状況となった。このため、本遺構東側の壁は確認ができていない。

規模: 360×240cm、長軸N36°E

埋土: 黒褐色土、砂礫が多く混じる。

構造: 方形に礫をめぐらせ壁としている。掘り方は不明である。炭化物を伴うP1が北東壁際に位置する。これを火床とするなら入口は南側である。SX12・15と同様な性格を持った竪穴である。

遺物: 第276図18、19は溶岩製の凹石であろうか。

時期: ST38よりは新しいため、室町時代後半～戦国時代。

SX12 (第259図、第283図 P.L.94、110)

位置: XVII B-22・23

検出: 南東隅部分を形成する石の並びや、南西隅部分の石の一部、西側の一部の礫の並びを検出した。地山に含まれる自然堆積の礫とは分布の状況が異なる。切り合いはない。

規模: 平面形態は方形。残存部から推定で、330×270cmを測る。長軸N20°E。

埋土: 黒褐色砂礫まじりシルト。粗粒砂～小礫の混入目立つ。床面は灰褐色粘土質シルトの貼り床が認められた。

構造: 柱穴としてSK1690、SK1691、SK1692、SK1693を想定した。掘り込みはしっかりしているが、方形の並びはみられない。床面は貼り床で明褐色の斑紋のため全体に橙色に見える。貼り床は2～3cmの厚さを持ち壁となる礫の内側に貼りつけられている。また壁に沿って並べられた礫は、全体に1段だが、一部2段のところもある。礫の大きさがそろわないところは小さめの礫で込められている。また礫の抜けた痕跡も確認できた。SK1682を火床とするなら南側が出入口の可能性が高い。

遺物出土状況: 埋土および床面からの出土はない。

遺物: 第283図12は永楽通寶で、SKからの出土である。

時期: 隣接するSX11と同時期の室町時代後半～戦国時代と考えるが、近接しているため、両者が同時期に利用されたとは考えにくい。

SX13 (第260図、第271図 P.L.94、106)

位置：XVII B-17

検出：地山と類似するがやや色調の暗いシルトを基質とする砂礫を方形に検出した。また東、西、南側の南北・東西の礫の並びが一部検出された。切り合いはなし。

規模：平面形態は方形。残存部から推定で、300×320cm、長軸N14°E。

埋土：黒褐色砂礫層。基質は同色の中粒砂～シルト、礫は径2mm～3cm、5cmの円～亜円礫の安山岩を主体とする。壁にめぐらされたやや大きめの垂角礫を多く含む部分、基質主体の部分、砂礫主体の部分など一様ではないが、分層はできなかった。

構造：検出面より約10cm下でやや締まりのよい面が認められたため床面としたが、基質はシルト～中粒砂で地山と差はない。北側の中央部に床面が直接焼け、その上位に炭化物の広がりが見られた(旧SF15)。位置からSX13の炉と推定した。壁は径10～15cm程度の平な石が一段で並ぶ。埋土中にも類似した石が含まれるため、2段以上積まれていた可能性がある。南壁の中央の一部の礫が途切れ、炉との位置からも出入り口部分ではないかと推定される。

遺物：礫の下から第271図6はかわらけがでている。

時期：SX11 検出土層面と同様であることから、室町時代後半～戦国時代とした。

SX14 (第259図 P L 95)

位置：XVII B-12・13

検出：コの字状の直線的な礫の並びを検出した。周囲に同様な角礫は分布せず、また礫の並びが明確なため、礫を残し周囲は礫の下場まで掘り下げて形を明らかにした。切り合いはなし。

規模：平面形態は方形と推定。コの字の残存長300×140cm。長軸はN20°E。

埋土：黒褐色砂礫層。基質は同色の中粒砂～シルト、礫は径2mm～3cm、5cmの円～亜円礫の安山岩を主体とする。

構造：明確な床面、焼土、柱穴は確認できない。礫の並びは明らかであるが、礫の形状が揃って、亜円礫を使うなど、南側のコの字の並びは他のSX12、13、15とは異なる。

遺物：なし。

時期：SX11 検出土層面と同様であることから、室町時代後半～戦国時代とした。

SX15 (第260図、第271図 P L 95、106)

位置：XVII G-01・02・06・07

検出：大きさが類似した礫が方形に並ぶようすが確認された。トレンチを入れ断面観察の後、石積みの下場の位置を床面ととらえた。方形内部の礫は、床面から浮いているものを外し、それ以外のものも形状を見ながら、使用時にないと推定されるものは外し掘り下げた。床面は明確ではないが、精査時に炭化物の広がりがみられ、その下位に炭化物、灰を多く含むP1を確認した。

規模：平面形態はほぼ方形。300×310cm、長軸はN23°E、深さ20～30cmである。

埋土：褐色細粒砂～細礫混じり粘土質シルト。炭化物、礫の含有の多少、橙色鉄分集積など部分的に違いが見られる。

構造：礫を並べるための掘り方がある。一部2段、3段に積まれていて高さや内側のラインが揃っている。類似した礫が埋土中にも見られるため、本来はもう何段か礫が積まれていたと推定される。P1が炉に相当する可能性があるが、焼土は検出されていない。P1の反対側、北壁の中央の一部が途切れ、開口部がある。やや外側に凸のふくらみを持ち、階段状の出入口であった可能性もある。

遺物：破片のみ数点で、埋土より出土。第271図7はかわらけである。

時期：SX11 検出土層面と同様であることから、室町時代後半～戦国時代とした。

④配石 (SH)

SH13 (第222図、第256図、第280図 P L 97)

位置: XVII G-03

検出: 重機により表土層、砂礫層を除去し、黄褐色砂層で検出したところ礫の頭がみえ、傾斜に沿って礫が帯状に分布するのを確認した。礫の一端はSK1679の礫に連なる。切り合いはなし。

規模: 平面規模は300×200cmの範囲にやや散漫な状況に広がる。SK1315、SK1680、SK1741も同様な礫の広がりがみられる。

埋土: 礫間には黒色土が入り込んでおり周辺の砂質土とはやや異なる。

構造: 掘り方はない。SK1679の井戸に繋がることが推測されることから、同井戸の付属施設の可能性がある。

遺物: 第275図15は凝灰岩製の砥石、16は砂岩製の砥石である。第280図4は鉄製の釘である。

SH14 (第264図)

位置: XVII B-25

検出: 平らな礫のまとまりを検出した。

規模: 平面規模は420×280cmの範囲に不整形に礫がまとまる。

構造: 掘り方はない。周辺遺構との関連は不明である。人為的なものか判断は難しい。

遺物: なし。

SH16・17 (第224図 P L 97)

位置: XVII H-01

検出: ST37 検出時にただらかに北側に傾斜する面から礫のまとまりを検出した。切り合いはなし。

規模: 90×60cmの範囲に礫がまとまる。

構造: SD30をはさんでSH17と対峙した位置にある。

遺物: なし。

SH18 (第228図、第253図、第254図)

位置: XVII B-18・19・24

検出: 中世第1面で確認した部分と、SX11を削平後のST38検出時に確認した部分がある。当初一帯が現石垣の下位にあたり石垣の根石と判断したが、区画を示す可能性も考え調査を行った。

規模: 径10～30cm大の礫を帯状に配している。

構造: 西側は直線的で、東側はやや広がる。ST38関連遺構と考える。

遺物: なし。

⑤焼土跡 (SF)

SF16 (第265図 P L 98)

位置: XVII H-06・07

検出: SK2315井戸跡の検出時に炭化物、骨粉の広がりを確認し精査した。赤みを帯びた焼土粒、炭化物層、粘性のある灰色灰層を検出した。切り合いはなし。

規模: 平面形態は不整形で径120×90cm、長軸N41°Eを測る。

構造: 浅い皿状の掘り方を持つ。

遺物: ヒトの大腿骨、指骨(中節骨、末節骨)、臼歯歯根、切歯歯冠が出土した。他に種類は不明であるが、四肢骨片などが出土している。全て焼骨である。

⑥溝跡(SD)

SD28 (第228図 P L 101)

位置: XVII B-23

検出: SX11 を除去し ST38 を検出中に砂質土の帯状の落ち込みを検出した。SX11 より古い。

規模: ST38 の礎石 6 と礎石 7 を結ぶ位置にある。長軸 N66° W、残存長 170cm、断面は浅いU字形で、幅約 60cm である。

埋土: 炭化物粒を含む黒褐色土。

構造: ST38 に伴う場合は雨水対策の溝と考えられるか。

遺物: なし。

SD30 (第224図)

位置: XVII H-01

検出: ST37 検出中に砂礫が帯状に広がるのを検出した。SD31 より古い。

規模: N52° W の傾斜方向に延びる。長さ約 220cm、断面は皿状で、幅約 50 ~ 70cm。

埋土: 砂礫。

構造: 断面は浅い皿状で、両脇に SH16、SH17 がある。

遺物: なし。

SD31 (第224図)

位置: XVII C-21 H-01

検出: ST37 検出中に砂礫が帯状に広がるのを検出した。SD30 より新しい。

規模: N55° W の傾斜に平行して延びる。長さ約 550m、断面は浅い皿状、幅は約 60 ~ 120cm である。

埋土: 砂礫。

構造: 断面は浅い皿状 SD30、SD31、SH16、SH17 をまとめて ST37 の付属施設の可能性も考えられる。

遺物: なし。

⑦遺構外出土遺物

第271図23はB-17・18出土の内耳土器口縁~胴部、24、25はB-18出土の天目後期Ⅱ、29~31はB-23出土のかわらけ、32はB-23出土の古瀬戸の平碗である。

第272図1はB-23出土のすり鉢、2、3はB-24出土のかわらけ、4はB-25出土の古瀬戸の梅瓶の底部である。

第276図3はB-24出土の凝灰岩製の砥石である。

第280図19はB-25出土の鉄製の鎌、20はB-23 SX11 ベルト内出土の鉄製の鎌である。

第281図1はB-18出土の鉄製の楔である。

第282図13はB-18出土の銭、治平元寶、14はB-19出土の銭、景德元寶、15はB-22出土の銭、祥符元寶である。16はB-23出土の銭、開元通寶、17は16の裏面である。18はB-23出土の銭、聖宋元寶である。19はB-24出土の銭、政和通寶である。

第276図10はC-25出土の砂泥互層岩製の硯、12はC-25出土の凝灰岩質砂岩製の五輪塔である。

第280図16はC-21出土の鉄製の刀子と考える。11は鉄製の釘である。

第274図7はG-02出土の古瀬戸の水注、8はG-03出土の火鉢、9はG-02出土のかわらけ、10はG-03、04出土の山茶碗5型式である。11はG-05出土のかわらけ、13はG-04出土の尾張片口鉢Ⅰ類、14はG-17出土、15はG-20出土、16はG-13出土の中津川片口鉢Ⅰ類である。17はG-04出土の古瀬戸の底卸目皿、19はG-17出土のすり鉢、20はG-15出土の白磁皿Ⅴ類、21

はG-20、H-16出土の青磁碗である。22はG-12出土、23はG-15出土のかわらけである。

第276図1はG-04出土、2はG-08出土の安山岩製の凹石、4はG-21出土の凝灰岩製の砥石、5はG-07出土の安山岩製の凹石、6はG-24出土の溶岩製の凹石、7はG-11出土の砂泥互層岩製の完形の硯、8はG-04出土の砂泥互層岩製の完形の硯、9はG-20、H-16出土の砂泥互層岩製の硯で接合資料、11はG-12出土の緑色凝灰岩製の管玉である。

第278図4はG-03出土の土錘である。第280図7はG-3出土、8はG-12出土、9はG-11出土の鉄製の釘、21はG-12出土の銅製のはばき、22はG-08出土の鉄製の金具である。

第281図2はG-12出土の鉄製の金具、4はG-20出土の鉄滓である。

第282図20はG-07出土の銭で、唐国通寶、21はG-07出土の銭、熙寧元寶、22はG-11出土の銭、天聖元寶、23はG-11出土の銭、元豐通寶、24はG-12出土の銭、祥符通寶、25はG-16出土の銭、塩野家書の皇宋通寶である。

第274図28はH-13出土の青白磁の小壺、31はH区出土の青磁碗A2類である。

第280図10はH-01出土の鉄製の釘、12はH-02出土の、13はH-01出土の鉄製の釘、15はH-01出土の鉄製の刀子、17はH-17出土の鉄製の刀子、18はH-11出土の鉄製の鎌である。

第281図はH-17出土の鉄板である。第282図26はH-01出土の銭、開元通寶、27はH-01出土の銭、紹聖元寶、28はH-02出土の銭、淳化元寶である。

第278図3はトレンチC出土の土錘である。

(4) 鎌倉時代から戦国時代(中世検出面)

①礎石・掘立柱建物跡(ST)

ST12(第248図、第287図 P L 86)

位置: XⅦH-08・09

検出: 黄褐色砂礫層上面において、径20～40cmの円形の落ち込みが複数認められ検討した結果200cm前後の間隔で配置することが分かったため掘立柱建物とした。切り合いはなし。

規模: 柱穴の配置は2間(336cm・(320cm))×2間(136cm・180cm)の9本柱の総柱建物と想定され、そのうち8本を検出した。主軸はN25°E、桁行336cm、梁間316cmを測り、床面積10.62㎡である。いずれの柱穴も掘り込みは浅い。

埋土: 黒褐色から褐灰色土。

構造: Pit5、Pit10、Pit11は総柱の配置からは外れているが、ST12を構成する柱穴と考える。

遺物出土状況: 柱穴からの出土である。

遺物: 第287図1はPit2出土の建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は角材鈍角で樹種はアスナロである。Pit11からはチャート製の剥片が出土した。

時期: ST13と同時期、室町時代中期頃か。

ST13(第216図、第269図 P L 105)

位置: XⅦH-13・14

検出: 表土掘削後南北方向に石列を発見、東側を検出するが、他に礫はない。検出レベルをやや下げたところで17基のピットを確認したが、西側の調査では、これに関連するような礫、ピットの検出はみられなかった。柱穴の配置に規則性がみられないが、これらをまとめてST13とした。

埋土: 黒褐色土、暗褐色土、灰褐色土、褐色土、にぶい黄褐色砂質土の単層である。

遺物: 第269図1は黄瀬戸御皿で接合資料である。

時期：出土遺物からは室町時代中期頃か。

ST14 (第248図 P L 86)

位置：XVIIH-09・10

検出：黄褐色砂礫層上面において、径20～40cmの円形の落ち込みが複数認められ、ほぼ規則的に配列することが分かった。12基のピットをまとめて掘立柱建物とした。切り合いはなし。

規模：柱穴の配置は2間(176cm・202cm)×2間(176cm・202cm)の9本柱であり、主軸はN55°W、桁行378cm、梁間316cmを測り、床面積11.88㎡である。いずれの柱穴も掘り込みは浅い。

埋土：10YR4/1、10YR2/1、N3/0の黒褐色から褐灰色土である。

構造：総柱建物になるか。

遺物：なし。

時期：ST12と同時期の室町時代中期頃か。

ST21 (第249図、第269図、第276図 P L 86, 105, 109)

位置：XVII C-11・16・21

検出：重機にて表土剥ぎ中に大きな石が見つかったため、周辺を高め削平したところ平石が見つかった。その後精査をおこない、9基の礎石を確認した。重機による撤去が考えられるため石の配置の確認できないものもある。切り合いはない。

規模：礎石の配置は3間(204cm・200cm・194cm)×3間(206cm・182cm・203cm)の16基のうち9基を確認した。けがき線が観察できないので厳密な柱間は不明である。主軸はN27°Eで地形の傾斜に沿う。桁行608cm、梁間596cmを測り、床面積36.24㎡である。

埋土：掘り方は確認できた。黒褐色土で炭化物を含む。

構造：3間×3間の総柱建物で、御堂のような建物が考えられる。また、建物内で黄褐色砂礫の面的なまとまりが認められたが、造成土かは判断できなかった。

遺物出土状況：建物範囲内で検出中に少量出土した。

遺物：第269図2、3はかわらけ、第276図13は砂泥互層岩製の完形の硯である。他に銭の破片と〇元通寶が出土している。

時期：¹⁴C年代測定では、礎石掘り方埋土の炭化物からは、15世紀前半、12世紀中ごろの値を得ている。本遺構検出面の下の層には、陶磁器片を含む包含層が認められ、それを剥いだ面が中世第2面となる。このことから、本遺構は中世第1面相当と考えられ、室町時代中期頃と考える。

ST22 (第248図 P L 86)

位置：XVII B-15・20、C-11・16

検出：黄褐色砂層を下げた面において、径20～40cmの円形の落ち込みが複数認められ、SKとした。その後、配置から掘立柱建物と認定した。切り合いはなし。隣接するST21とは距離が近いので、同時期に存在した可能性は低いと考えられる。

規模：柱穴の配置は1間(263cm)×1間(250cm)の4本柱であり、主軸はN50°E、桁行290cm、梁間256cmを測り、床面積7.42㎡である。いずれの柱穴も深く明瞭な掘り込みである。中央部はかく乱により破壊されている。

埋土：Pit3は黒褐色土で炭化物粒を多く含む。Pit2は暗オリーブ褐色土。Pit1、Pit5は黒褐色土でしまりよく炭化物を含む。

構造：Pit4は他のピットと異なり直径97cmと大きい。

遺物出土状況：建物範囲内で小破片が出土した。

時期：ST12と同様な形態であり、同時期の室町時代中期頃と考える。

ST23 (第250図 P L 86)

位置：XVII C-10・15、D-06・11

検出：本遺構の所在する地点は、傾斜地としては低い場所にあたる。ST21のある傾斜地でも高い場所とは異なり、湧水が出る場所にある。検出面は砂礫層上面で、周囲にも礫は広がっているものの礫径30～40cmとやや大きく平石であることから礎石建物とした。SK1299より新しい。建物範囲内と重複するSKがある。

規模：礎石の配置は1間(640(710)cm)×2間(164cm・186cm)の6本柱のうち5基を検出した。けがき線が確認できないので厳密な柱間は不明である。主軸はN37°E、桁行680cm、梁間350cmを測り、床面積23.8㎡である。

埋土：掘り方は確認できなかった。

構造：桁行が6mと長いので、重複するSKが柱穴である可能性もある。本遺構の立地は湧水のみられる場所であるため、本遺構の利用に際しては地盤の強化等が考えられるが、明確な造成痕跡を観察できなかった。しかしながら、湧水レベルの低下などの要因で、当時は水はけのよい環境であったことも考えられる。

遺物：遺物なし。

時期：本遺跡における礎石建物の利用時期は室町時代中期頃であり、同様の時期と推測する。

ST24 (第248図 P L 86)

位置：XVII C-13・14

検出：砂礫層上面において検出中、径30～50cmの円形の落ち込みを認められSKとした。その後検討し、配置から掘立柱建物跡と認定した。切り合いはなし。

規模：柱穴の配置は1間(404cm)×1間(280cm)の4本柱であり、主軸はN88°W、桁行404cm、梁間280cmを測り、床面積11.31㎡である。いずれの柱穴も深く明瞭な掘り込みである。

埋土：黒褐色土。

構造：Pit1、Pit2、Pit4は底部に礫が認められる。特にPit4は平石である。

遺物出土状況：建物周辺で青磁片が出土しているが、本遺構に伴うか判断しがたい。

時期：ST12と同様な形態であり、同時期の室町時代中期頃と考える。

ST25 (第250図)

位置：XVII C-19・20・24・25

検出：径30cm前後の円形の落ち込みが認められ、配置検討のうえ掘立柱建物跡とした。中央部を南北に暗きよで破壊されている。切り合いはなし。

規模：柱穴の配置は1間(350cm)×1間(214cm)の4本柱であり、主軸はN52°E、桁行350cm、梁間214cmを測り、床面積7.49㎡である。いずれの柱穴も明瞭な掘り込みである。やや菱形を呈する。

埋土：Pit1、Pit2は黒褐色土、Pit3は黒色土、Pit4は黒褐色土と柱痕が極暗褐色土。

遺物：なし。

遺物：ST12と同様な形態であり、同時期の室町時代中期頃と考える。

ST26 (第251図 P L 86)

位置：XVII C-17・21・22

検出：ST21の調査後に中世第2面まで表土剥ぎをしたところ、径100cmほどと径40cmの円形の落

ち込みが複数認められSKとし、その後の検討で掘立柱建物跡とした。切り合いはなし。

規模：柱穴の配置は2間(208cm・168cm)×1間(240cm)の6本柱であり、主軸はN23°E、桁行335cm、梁間260cmを測り、床面積8.71㎡である。いずれの柱穴も深く明瞭な掘り込みである。

埋土：黒褐色土。Pit1の上部は黄褐色土混じりで炭化物を含む。Pit2、Pit3、Pit4は酸化鉄のブロックを含み、しまりややよい。

構造：Pit1、Pit2、Pit5は直径がやや大きく不整形である。ピットの規模に差がある。

時期：中世第2面相当の鎌倉時代後期から室町時代前期。

ST55(第251図、第287図、第288図)

位置：XVIC-03

検出：砂礫層上面において、径20～50cmの円形の落ち込みと柱根が複数認められSKとし、周辺を精査の結果ほぼ規則的に配列することが分かったため、9基を掘立柱建物跡とした。1基はかく乱で破壊されたと思われる。切り合いはなし。

規模：柱穴の配置は3間(170cm・200cm・110cm)×2間(190cm・200cm)の10本柱のうち9本を検出した。主軸はN10°E、桁行480cm、梁間390cmを測り、床面積18.72㎡である。

埋土：灰色土で粘性、しまりあり。Pit4、Pit7、Pit8は灰色砂質土である。

構造：Pit9を除き、いずれも柱根をもつ。

遺物：第287図4はPit1(旧SK748)出土の建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は角材鈍角で樹種はクリである。7はPit4(旧SK772)出土の建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は丸木材で樹種はカキノキ属である。8もPit4出土の建築部材の分割材で、樹種はクリである。11はPit7(旧SK775)出土の建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は丸木材鈍角で樹種はカツラである。第288図4はPit6(旧SK782)出土の建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は丸木材鈍角で樹種はカエデ属である。8はPit8(旧SK795)出土の建築部材で芯持ち材の杭で形態は丸木材鋭角で樹種はクリである。16はPit5(旧SK824)出土の建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は丸木材鈍角で樹種はクリである。

時期：中世第1面相当で、室町時代中期か。

②土坑(SK)

SK844(第255図、第269図、第289図 P L 88, 105, 111)

位置：XVIC-02・03・07・08

検出：SD12砂礫層を取り除いたところ、円形に回る礫が検出されたため井戸とした。SK844の断面観察において脱色したSD12埋土の砂粒の落ち込みを確認でき、SD12が新しいと判断した。

規模：平面形態楕円形。検出面における礫内径は130×140cm、下部100×115cm、深さ90cmを測る。

埋土：黒褐色粘質土を主とする。水分を多く含み、灰色粘質土、暗灰黄色粘質土、砂礫のレンズ状の堆積が観察されることから、これらは次第に埋没していったと思われる。径20cm大の垂円礫は井戸側の石組と大きさが類似しており、上縁部の礫の崩落も考えられる。

構造：石組み井戸。

遺物出土状況：植物遺体を多く含み、多数の木製品が出土した。箸、下駄、漆器、曲物などである。上部からは編物籠が出土した。常滑の甕、山茶碗、灯明皿も出土した。

遺物：第269図22はかわらけである。第289図2は小刀の柄で樹種はヒノキ、3、4、6は曲物側板で樹種はヒノキ、5は曲物底板で樹種はサワラ、7は漆器碗で樹種はコナラ節、8は漆器皿で樹

種はクリ、9は漆器碗で樹種はコナラ節、10は連歯下駄で樹種はハリギリ、11～13は箸で13の樹種はヒノキ、14は棒状の削片で燃えさし、樹種はマツ属複雑維管束属である。15は用途不明品で筒状、樹種はウツギ属である。16は琴似形の形代と考えら、樹種はサワラである。17は用途不明品の加工材の残材、形態は積木状で樹種はスギである。18は折敷で樹種はヒノキである。19は何らかの部材の残材で、樹種はヒノキである。

時期：漆器などの出土遺物から、中世第2面相当の鎌倉時代後期から室町時代前期。

SK1021 (第255図 P L 88)

位置：XVII B-10・15

検出：周囲のSKと比べグライ化した土が目立っていたため掘り下げ、半裁し断面観察を行った。灰色土と石組の落ち込みが認められたため井戸とした。切り合いはなし。

規模：平面形態は楕円形。検出面における礫内径は30×40cm、下部で25cm、深さ40cmを測る。井戸としてはかなり小型である。水を汲み取るのほか、水をためるための施設かもしれない。

埋土：粘質が強いグライ化した灰色土。

構造：石組み井戸。底部に5cmほどの浅い水溜がある。周囲には径約130cmの掘り方をもつ。

遺物：なし。

時期：中世第1面相当か。

SK1105 (第255図)

位置：XVII C-11

検出：弧を描くような径20cmほどの礫の並びを検出したため井戸とした。切り合いはなし。

規模：平面形態は隅丸方形。検出面における礫内径は50×50cm、深さ40cmを測る。

埋土：石組が崩れたものか、礫が埋まっているのを確認した。

構造：石組み井戸。SK1021と類似している。

遺物：なし。

時期：中世第1面相当か。

SK1111 (第255図、第290図 P L 88, 112)

位置：XVII C-09

検出：黒色土層上而まで掘り下げたところ径30cm程大の礫が4m四方に広がっていた。礫間に充填している土は水分が多く含まれ泥状態の黄灰色粘土である。調査は2段階に分けて、上部の礫のみを取り上げて礫の状況を確認し、黒色土層の下位の砂礫層(地山)に弧を描くような石の並びを調査した。切り合いはなし。

規模：平面形態はほぼ円形。検出面における礫内径は約120cm、下部は40cm、深さ140cmを測る。

埋土：上部は黄灰色粘土で石組の崩れた礫を含む。下部は灰褐色粘土。投げ込まれたものと考えられる径30cm大の垂円礫を50%含む。

構造：石組み井戸。断面は漏斗状で水溜ビットはない。

遺物出土状況：先端部を尖頭状に削りこんでいる棒状木製品が出土。石組の間には常滑系の甕の破片、埋土からは内耳土器片を出土した。

遺物：第290図9棒状製品で加工のある材である。樹種はクリである。

時期：中世第1面相当の室町時代中期から戦国時代。

SK1123 (第255図、第270図、第291図、第292図、第293図 P L 88, 89, 105, 112)

位置：XVII C-23

検出：砂礫層上面まで掘り下げたところ径30cm大の礫のまとまりを検出した。礫間に充填している土は水分が多く含まれ泥状態のグライ化した灰色粘質土であった。点在する礫の間に弧を描く礫の並びが認められ、その連続性から井戸の上縁部とした。SK1400より新しい。

規模：平面形態は円形。上部の礫内径は120cm、下部は80cm、深さ160cmを測る。

埋土：黒褐色粘質土。上部はグライ化した灰色を呈し、径30cm大の礫を40%含む。下部には礫が少なく、上部に行くに従って量が多くなる。石組の自然崩落の可能性が高い。

構造：石組み井戸。最下部礫下には5×5×85cmの角材が方形に組まれる木枠（根太）が構築されている。さらに砂層中に掘り込まれた底部には直径40cm、深さ30cmの円形プランの水溜がある。最下部には径50cm大の大きい礫を配置し、その上に順次石を組んでいる。

遺物出土状況：遺物は上部に少なく、中部、下部に集中する。水溜からはかわかけ片と板材を出土した。井戸構築した直後の遺物であることから、祭祀関係の可能性もある。中部、下部からは曲物、白木皿、漆皿、漆椀、杭、木札、多数の箸など多くの木製品が出土した。このほか井戸の祭祀として考えられる形代や削り痕を持つ長さ10cmほどの火付け具が出土している。

遺物：第270図9、10はかわかけである。第291図7は工具の柄、8は刀子さやで樹種はサワラ、9は祭祀具で刀子形の形代、樹種はサワラ、10は曲物側板、樹種はヒノキ、11は曲物底板、樹種はサワラ、12、13は曲物側板で樹種はヒノキである。14は曲物側板で樹種はスギ、15は挽物皿で樹種はクリである。16、17は白木の皿で樹種はブナ属である。第292図1は曲物底板で樹種はヒノキ、2、3は曲物側板で樹種はサワラ、4は漆器椀、5～7は漆器皿で樹種はクリ、9は漆器椀で樹種はケヤキである。8、10は用途不明の加工材で折敷？、樹種は8はヒノキ、9はヒノキ科である。11～28は箸、樹種が11、12は不明、20がツガ属、22、27がヒノキ、25がサワラ、28がモミ属でその他はすべてスギ、29は棒状製品でさいばし状で樹種はスギである。第293図1は下駄で樹種はオニグルミ、2は櫛で樹種がイスノキ、3は圭頭状の塔婆で樹種はサワラ、4は形代で樹種はマツ属複雑管束亜属、軸はサワラである。5～8は形代で樹種は5、6、8がサワラ、7はモミ属である。9は板状製品で竹とんぼ状、樹種はサワラである。10、11は棒状の削片で燃えさし、樹種はマツ属複雑管束亜属である。12は棒状木製品で樹種はスギ、13は丸半に裂いた残材で樹種はスギ、14は角柱状の棒状製品で樹種がスギである。15は板状製品で樹種はサワラである。16は容器の結合補助具で樹皮製品、17は加工材の積木状の残材、樹種はヒノキである。18は井戸の側板材で樹種はモミ属である。第294図1～4は井戸の角材の根太材、樹種はツガ属である。

時期：埋土の杭の¹⁴C年代測定から13世紀～14世紀の年代を得ている。中世第2面相当である。

SK1399（第255図 P L 89）

位置：XVII C-11

検出：砂礫層上面まで重機で下げたところ径30cm大の礫が南西から北東方向へ帯状に検出された。全体に徐々に礫を取り上げながら掘り下げ、礫のまとまりを認めた。切り合いはなし。

規模：平面形態は楕円形。長軸N21°E。検出面での礫内径は60×90cm、下部で45×70cm、深さ120cmを測る。

埋土：基質は黒褐色の粘質土で径30cm大の垂円礫を50%含む。上部はグライ化して灰色を呈し水分多く含む泥状である。下部はやや礫が少なく20%含む。礫の混入が顕著なことから自然崩落ではなく、礫を投げ込んで埋め戻した状況が考えられる。

構造：最下部には径30cm大の礫を配置し、その上に順次石を組んでいる。断面は漏斗状。本遺構北に

はSD12-1が存在し、位置関係から、排水路的な本遺構と関連する施設と考えられる。

遺物：なし。

時期：SD12と本遺構が関連するとして、SD12がSK844より新しい遺構であることから、中世第1面相当と考えられる。室町時代中期から戦国時代。

SK1400（第255図、第298図 P L 89, 113）

位置：XVII C-23

検出：SK1123の重機による断ち割り中、SK1123北側に井戸の木枠らしい角材を検出した。断面観察を行い、SK1123に切られた掘り込みを確認したため、井戸跡とした。

規模：平面形態は円形。水溜埋設部分で径55cm、深さ58cmを測る。掘り方は方形で残存長80cm、南西の辺はSK1123に破壊されている。

埋土：水溜の埋土は黒色砂質土で黒色粘質土や中礫、木製品を多く含む。水溜の下部はグライ化し灰褐色を呈する。分層が認められないことからほぼ同一時期に埋めもどしたものと考えられる。大礫の混入がない。

構造：調査区内の中世で唯一の素掘井戸。木枠が4辺中2辺分の2本の角材が確認された。木枠の外側に立てる板材の破片が埋土とともに押しつぶされた状況がうかがえた。底部中央部より曲物が埋設された状況（水溜）で検出された。水溜の構造は異なるが、木枠（根太）を設置する構造は類似することから、SK1400を構築途中、石組を行う前に廃棄し、埋め戻した後にSK1123につくり直したと考える。

遺物出土状況：曲物ピット内の泥状堆積物の中から、曲物、漆塗りの櫛、絵馬状木製品、など祭祀的な遺物を出土した。井戸の構築時か埋め戻し時の遺物と考えられる。

遺物：第298図1は井戸の水溜の曲物で樹種はヒノキ、2は漆塗りの横櫛で樹種はイスノキ、3は井戸の根太材で形態は角材、樹種はモミ属である。4は井戸の側板材で樹種はモミ属である。5は祭祀具で板状の絵馬状木製品、樹種はサワラである。6は加工材の板材で用途は不明、樹種はモミ属である。7は井戸の板材の井戸側で樹種はモミ属、8は井戸の根太材で形態は角材、樹種はモミ属である。

時期：鎌倉時代後期から室町時代前期。SK1400より古い。

SK1420（第255図 P L 89, 90, 113）

位置：XVII D-11・16

検出：砂礫層を取り除いた古代検出面において、礫が円形に回る状況が検出され、状況から井戸跡とした。切り合いはなし。

規模：平面形態は楕円形。検出面での礫内径は130×110cm、底部では径60cm、深さの推定は中世検出面から140cmを測る。

埋土：黒褐色粘質土。径20cm大の垂円礫を含む

構造：石組み井戸と考えてよいか。

遺物出土状況：埋土より曲物の底板と蓋が出土した。

遺物：第299図2～4は曲物底板である。2は木釘付きで樹種はサワラ、3、4は樹種がヒノキである。5は加工材の竹材で用途は不明である。

時期：検出は古代面となったが、中世面調査時の見落として、中世の遺構と考えるK1679、SK1680と同様の中世第1面相当と推測した。XVII C区には多数の土坑が分布する。径30～60cm、径1m以上の土坑や、杭または柱根をもつ土坑、打ち込まれた杭などがある。類似する規模の土坑

が方形に並ぶことから、掘立柱建物が建つ可能性がある。

- SK741 (C-03): 第287図2 建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は角材鋭角で樹種はクリ。
- SK744 (C-03): 平面円形、断面U字状、深さ10cmの掘り方をもつ。遺物は第287図3 建築部材で芯持ち材の杭である。形態は丸木材鋭角で樹種はマンサクである。
- SK749 (C-03): 平面円形、断面U字状、深さ9cmの掘り方をもつ。遺物は第287図5 建築部材で分割材の杭状である。形態は板材で樹種はスギである。
- SK758 (C-02): 平面不整形、断面皿状、深さ12cmの掘り方をもつ。遺物は第287図9 漆器碗で樹種はクリである。
- SK760 (C-03): 平面楕円形、断面皿状、深さ4cmの掘り方をもつ。遺物は第287図6 建築部材で分割材の杭状である。形態は角柱状鋭角で樹種はスギである。
- SK767 (C-03): 平面円形、断面U字状、深さ10cm。遺物は第281図5 鉄製の釘である。
- SK774 (C-02・03): 平面不整形、底面凹凸で、深さ19cmの掘り方をもつ。遺物は第287図10 建築部材で芯持ち材である。樹種はクリである。
- SK777 (C-03): 平面楕円形、断面皿状、深さ22cm。平石が柱穴底部に置かれている。遺物は第287図12 建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は丸木材鈍角平底で、樹種はカエデ属である。13は曲物の蓋で樹種はヒノキである。
- SK778 (C-03): 平面円形、断面皿状、深さ7cmの掘り方をもつ。遺物は第288図1 建築部材で芯持ち材の杭である。形態は丸木平底で樹種はクリである。
- SK780 (C-03): 平面円形、断面皿状、深さ8cmの掘り方をもつ。SD12より古い。遺物は第288図2 建築部材で芯持ち材の杭である。形態は丸木材鋭角で樹種はケヤキである。
- SK781 (C-03): 平面円形、断面U字状、深さ8cm。SK838と重複する。遺物は第288図3 漆器碗の蓋である。高台痕があり底部は楕円である。樹種はケヤキである。
- SK785 (C-02): 平面楕円形か、断面皿状、深さ24cm。炭化物が広がる。遺物は第288図5 曲物底板で、樹種はサワラである。
- SK786 (C-03): 平面楕円形、断面皿状、深さ9cm。遺物は第288図6 漆器碗、樹種はブナ属である。
- SK790 (C-03・08): 平面楕円形、断面皿状、深さ17cm。遺物は第269図18 古瀬戸の平碗である。
- SK791 (C-02): 第288図7 用途不明の板状の製品である。形態は板材で方形の穴が2か所開いている。樹種はスギである。
- SK802 (C-07): 平面円形、断面浅い皿状の掘り方をもつ。第288図9 建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は丸木材鈍角で樹種はコナラ節である。
- SK803 (C-03): 平面円形、断面U字状、深さ17cm。遺物は第288図10 漆器碗で、樹種はブナ属である。
- SK804 (C-03): 平面楕円形、断面U字状、深さ26cm。遺物は第269図19 青磁の碗である。
- SK813 (C-03): 第288図11 建築部材で分割材の杭、形態は角柱材鋭角で樹種はスギである。
- SK814 (C-03): 第288図12 建築部材で分割材の杭、形態は角柱状鋭角で樹種はスギである。
- SK815 (C-03): 第288図13 建築部材で分割材の杭、形態は角柱状鋭角で樹種はスギである。
- SK821 (C-03): 平面円形、断面浅い皿状の掘り方をもつ。遺物は第288図14 建築部材で分割材の杭、形態は角材鋭角で樹種はブナ属である。
- SK822 (C-03): 第288図15 建築部材で芯持ち材の柱根、形態は丸木材鋭角で樹種はクリである。
- SK825 (C-08): 第288図17 建築部材で芯持ち材の柱根、形態は丸木材鈍角で樹種はヌルデである。

- SK828 (C-03): 第288図18 建築部材で芯持ち材の柱根、形態は丸木材鈍角で樹種はクリである。
- SK829 (C-03): 第289図1 建築部材で芯持ち材の柱根、形態は丸木材鋭角で樹種はカエデ属。
- SK875 (C-04): 第289図20 建築部材で芯持ち材の柱根、形態は丸木材鈍角で樹種はブナ属である。
- SK880 (C-04): 第290図1 建築部材で芯持ち材の柱根、形態は丸木材鋭角で樹種はマツ属複雑管束亜属である。
- SK887 (C-04): 第290図2 建築部材で芯持ち材の杭、形態は丸木材鋭角で樹種はクリである。
- SK934 (C-10): 第290図4 建築部材で芯持ち材の柱根、形態は丸木材鈍角で樹種はマツ属である。
- SK940 (C-10): 第290図5 建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は丸木材鋭角で樹種はミツバウツギである。
- SK951 (C-04): 遺物は第290図6 漆器椀で樹種はクリである。
- SK960 (C-09): 平面楕円形、断面U字状、深さ18cm。遺物は第269図21 火鉢の口縁部である。
- SK963 (C-09): 平面楕円形、断面U字状、深さ20cmの掘り方をもつ。SD14より古い。遺物は第290図7 建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は角材平底で樹種はツガ属である。
- SK968 (C-05): 平面楕円形、断面U字状、深さ17cm。遺物は第269図20かわらけである。
- SK970 (C-10): 平面円形、断面U字状、深さ22cm。遺物は第290図8 曲物底板で樹種はヒノキである。
- SK974 (C-10): 第290図10 建築部材で杭、樹種はツガ属である。
- SK1100 (C-19): 平面楕円形、断面U字状、深さ20cm。遺物は第290図11 建築部材で分割材の柱根である。形態は角材平底で樹種はヒノキである。
- SK1145 (C-06): 平面円形、断面U字状、深さ不明の掘り方をもつ。SH07と重複する。遺物は第276図16 凝灰岩製の砥石である。第290図12は建築部材で芯持ち材の柱根、形態は丸角材で樹種はブナ属である。
- SK1147 (C-06): 平面円形、断面U字状、深さ36cmの掘り方をもつ。遺物は第291図1 建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は丸木材平底で樹種はヒノキである。
- SK1175 (C-07): 平面楕円形、断面U字状、深さ49cmの掘り方をもつ。SD12より古い。遺物は第291図2 建築部材で芯持ち材の柱根、形態は丸木材鈍角で樹種はヒノキ科である。
- SK1178 (C-07): 平面楕円形、断面U字状、深さ14cmの掘り方をもつ。SD12-1より古い。遺物は第291図3 建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は丸木材鋭角で樹種はクリである。
- SK1192 (C-07): 平面不整形、底面凹凸の掘り方をもつ。遺物は第291図4、5が建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は4が丸木材平底で樹種はツガ属、5は丸木材鋭角で樹種はブナ属である。
- SK1196 (C-07): 平面不整形、底面凹凸、深さ14cmの掘り方をもつ。遺物は第291図6 建築部材で分割材の柱根である。形態は角材平底で樹種はクリである。
- SK1199 (C-07): 平面不整形、底面凹凸、深さ21cmの掘り方をもつ。遺物は第295図1 建築部材で分割材の柱根である。形態は角材平底で樹種はクリである。
- SK1316 (C-02、07): 平面楕円形、断面U字状、深さ23cmの掘り方をもつ。遺物は第295図2 建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は丸木材平底で樹種はクリである。
- SK1317 (C-01) (P L 93): SD12 凹地内で礫間より検出された。上部で井戸の痕跡が検出されなかったことから、この凹地内での水溜の施設であると考えた。平面楕円形で径44×38cmを測る。埋土は黒褐色土で炭化物を20%含み、粘性、しまりあり。遺物は第295図

6が出土した水溜の曲物である。二重の側板を持ち樹種はヒノキ科である。7は円形の木製品で栓である。形態は積木状で樹種はコナラ属コナラ節である。8は曲物の底板で樹種はヒノキである。

- SK1320 (C-01): 平面楕円形、断面U字状、深さ50cm。遺物は第295図3、4が建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は3が丸木材鈍角で樹種はモミ属、4は角材鋭角である。
- SK1322 (C-01): 掘り方は不明確である。遺物は第295図5建築部材で分割材の柱根である。形態は角材平底で樹種はツガ属である。
- SK1324 (C-01): 掘り方は不明確である。遺物は第295図9建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は丸木材鋭角で樹種はコナラ属コナラ節である。
- SK1328 (C-02): 平面楕円形、断面U字状、深さ44cmの掘り方をもつ。遺物は第295図10建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は丸木材鋭角で樹種はイヌシデまたはアサダである。
- SK1329 (C-02): 第295図11建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は丸木材鋭角で樹種はモミ属である。
- SK1331 (C-02): 第295図12、13は建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は12が丸木材平底で樹種はモクレン属である。13は丸木材鈍角で樹種はカツラ属である。
- SK1334 (C-02): 掘り方不明確である。遺物は第296図1建築部材で芯持ち材の柱根、形態は丸木材平底で樹種はクリである。
- SK1337 (C-02): 第295図14建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は角材鈍角で樹種はクリ。
- SK1339 (C-02): 平面円形、断面U字状、深さ68cmの掘り方をもつ。遺物は第296図2建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は丸木材鋭角で樹種はハシバミ属である。
- SK1340 (C-02): 掘り方不明確。遺物は第296図3建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は丸木材鈍角で樹種はサクラ属である。
- SK1343 (C-02): 第296図4角柱状の棒状製品である。樹種はスギである。
- SK1346 (C-02): 平面円形、断面V字状、深さ41cmの掘り方をもつ。遺物は第296図5建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は丸木材鈍角で樹種はクリである。
- SK1347 (C-01): 平面不整形、断面皿状、深さ16cmの掘り方をもつ。遺物は第296図6建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は丸木材鈍角で樹種はモミ属である。
- SK1349 (C-07): 平面楕円形、断面U字状、深さ29cmの掘り方をもつ。遺物は第296図78建築部材で分割材の柱根である。形態は角材平底で樹種はハリギリである。
- SK1350 (C-02): 第296図9建築部材で分割材の柱根である。形態は角平底で樹種はコナラ属コナラ節である。
- SK1351 (C-02): 第296図10建築部材で芯持ち材の柱根、形態は丸木材平底で樹種はクリである。
- SK1355 (C-06): 平面楕円形、断面皿状、深さ17cm。遺物は第296図11建築部材で分割材の柱根である。形態は角材平底で樹種はクリである。
- SK1356 (C-06): 平面楕円形、断面皿状、深さ38cmの掘り方をもつ。SK1372より古い。上部に焼土が見られる。遺物は第297図1建築部材で芯持ち材の柱根で、形態は丸鈍角で樹種はツガ属である。
- SK1357 (C-01): 平面円形、断面皿状、深さ18cmの掘り方をもつ。遺物は第297図2建築部材で分割材の柱根である。形態は角材鈍角で樹種はヒノキ科である。
- SK1360 (C-07): 平面円形、断面U字状、深さ34cmの掘り方をもつ。遺物は第296図12建築

部材で芯持ち材の柱根、形態は丸木材平底で樹種はクリである。

- SK1363 (C-07): 第297図3 建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は丸木材鈍角で樹種はコナラ属コナラ節である。
- SK1364 (C-06): 平面円形、断面U字状、深さ37cmの掘り方をもつ。遺物は第297図4 建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は角材鈍角で樹種はキハダである。
- SK1367 (C-06): 平面楕円形、断面U字状、深さ24cmの掘り方をもつ。遺物は第297図5 建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は丸木材鈍角で樹種はヒノキ科である。
- SK1370 (C-06): 平面円形、断面U字状、深さ44cmの掘り方をもつ。遺物は第297図6 建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は角材平底で樹種はアスナロである。
- SK1375 (C-07): 平面円形、断面U字状、深さ35cmの掘り方をもつ。遺物は第297図7 建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は角材鈍角で樹種はキハダである。
- SK1378 (C-01): 第297図8 建築部材で分割材の柱根である。形態は角材鋭角で樹種はモミ属。
- SK1396 (C-02): 平面楕円形、断面U字状、深さ25cmの掘り方をもつ。SK1335より古い。遺物は第297図11 建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は丸木材平底で樹種はマツ属複雑管束亜属である。
- SK1401 (C-01): 平面円形、断面U字状、深さ29cm。遺物は第298図9 建築部材で丸半の棒状。
- SK1402: 第297図12 建築部材で芯持ち材の柱根である。形態はやや角材で樹種はモミ属である。
- SK1406 (C-06): 平面円形、断面U字状、深さ38cmの掘り方をもつ。遺物は第299図1 建築部材で分割材の柱根である。形態は角材平底で樹種はクリである。
- SK1605 (C-06): 平面楕円形、断面U字状、深さ23cmの掘り方をもつ。遺物は第299図6 建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は角材平底で樹種はクリである。
- SK1632 (C-02): 第299図7 建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は丸木材鋭角で樹種はコナラ属コナラ節である。

XVII B区には、径20cmほどの土坑と径50cmほどの不整形な土坑が分布する。

- SK1001 (B-20): 平面隅丸方形、断面皿状、深さ29cm。遺物は第283図1 銭で、開元通寶である。2は1の裏面である。
- SK1020 (B-20, C-16): 平面不整形、断面U字状、深さ17cm。遺物は第269図23 青磁碗である。
- SK1030: 平面不整形、深さ37cm。遺物は第269図24、第270図1～6、16はかわらけである。
- SK1082 (B-15): 平面隅丸方形、断面皿状、深さ18cm。遺物は第270図7 中津川の片口鉢I類である。

XVII D区の土坑は径1～3mの黄褐色の砂が被る大きな土坑(窪み)と径50cm以下の土坑、掘り方はなく柱根のみのSKが分布する。XVII C-05・10のST23、SH11、SD22周辺から連続する土坑である。

- SK925 (D-06): 平面楕円形、断面V字状、深さ31cmの掘り方をもつ。遺物は第289図21 建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は丸木材鋭角で樹種はクリである。
- SK923 (D-06): 建築部材で分割材の柱根である。形態は角材平底で樹種はツガ属である。
- SK1088: 形態不明。遺物は第270図8かわらけである。
- SK1288 (D-11): 平面不整形、底面凹凸、深さ36cm。遺物は第276図15 砂岩製の砥石である。
- SK1388 (D-06): 第297図9 建築部材で芯持ち材の杭である。形態は丸木材鋭角で樹種はブナ属。
- SK1389 (D-01・06): 第297図10 建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は丸木材鈍角で樹種はヤナギ属である。

③方形竪穴建物跡(SX)

SX03 (第258図、第271図、第276図 P L 94, 106)

位置: XVII B-23・24

検出: 重機で掘削中に石の並びを確認し、精査を行った。中世遺物包含層より上で検出されたが、同一検出面が調査区全体に及んでいるわけではない。位置的にSX04より新しいか。

規模: 地形の傾斜に合わせて南東側は不明瞭であるが、隅丸方形と推測される。長軸N60°W、残存長(390×360cm)、深さ20cmを測る。

埋土: 4層に分層された。多くの礫が投げ込まれ、下位ほど炭化物粒を多く含む。

構造: 石を壁際に並べ、内部はコの字状に区画された竪穴状の遺構で、掘り方を持つ。床面で灰溜まりとピットが2基確認された。炭化物を多く含む、作業小屋的な利用も考えられる。今回の調査では、内部に区画を持つ方形竪穴建物跡は本遺構のみである。

遺物出土状況: 埋土中から少量出土している。

遺物: 第271図2は天目茶碗の底部、第276図17は安山岩製の臼である。

時期: 室町時代末から戦国時代。

SX04 (第258図、第271図 P L 94, 106)

位置: XVII B-14

検出: SX03と同様に、検出面で礫の並びを確認した。傾斜に合わせて深く掘り下げて壁をつくった部分のみ検出した。地形的に傾斜が低くなる東側は明瞭ではなく、SX03が近接する。本遺構とSX03が同時期に存在したのか、重複するかは調査の中では判断できなかった。

規模: 平面形態は南東側が不明であるものの、他の同様の遺構を考慮すると隅丸方形と考えられる。長軸N50°W、残存長(350×200cm)、深さ40cmを測る。

埋土: 暗褐色土の単層。多くの礫が投げ込まれていた。炭化物粒を含む。

構造: 石を壁際に並べた竪穴状の遺構である。掘り方を持ち、西壁は石が3段に積まれ、中央部に礫のない空間があり、入口部と考えたい。床面よりピットが確認された。埋土中に焼粘土塊が見られ、壁土の焼けたものと考え、礫を土台にした土壁が立っていた上層構造が想定できる。

遺物出土状況: 焼粘土塊、中世土器片が出土している。

遺物: 第271図3は中津川の甕である。

時期: 室町時代末から戦国時代。

SX05 (第258図、第271図 P L 94, 106, 110)

位置: XVII B-10

検出: 中世遺物包含層より上の面で検出した。中世第1面相当である。北側はトレンチ、東側はかく乱により破壊された。切り合いはなし。

規模: 残存するのは、竪穴隅の一角所で、残存長(330×300cm)である。

埋土: 地山の流入があり壁の礫も動いていると考えられる。

構造: 円礫を壁際に並べた竪穴状の遺構である。礫を並べるための掘り方がある。SX03、04と同様の遺構と考える。

遺物出土状況: 中世土器片等が少量出土した。

遺物: 第271図4、5はかわらけ、第283図11は銭、皇宋通寶である。

時期: 室町時代末から戦国時代。

SX06 (第215図 P L 94)

位置：XVII C-24

検出：砂礫層の上面で一定の範囲に礫が長方形に分布していた。南北方向に入る暗きよによって破壊されている。礫を残して下げていったが、特に明確な壁立は見つからなかった。切り合いはなし。

規模：礫は460×310cmの隅丸方形の範囲に広がる。

形状：竪穴状の遺構の底部の可能性ある。掘り方は確認されない。

遺物出土状況：土器片数点出土。

時期：室町時代末から戦国時代か。

SX08 (第258図)

位置：XVII C-12

検出：礫層中に東西に配列された石列が認められた。

規模：N82°E、長さ275cmを測る。

構造：垂角礫径10～50cmが一列に並ぶだけなので詳細は不明であるが、壁際に一辺に配置された礫の可能性もある。

遺物：なし。

時期：室町時代末から戦国時代か。

④ 櫓列 (SA)

SA01 (第261図 P L 95)

位置：XVII C-05

検出：SD14の東縁に沿って検出された杭列で、SA01-1からSA01-4が認められる。

規模：主軸はN32°E、長さ150cmを測る。

構造：杭は直径3～5cmの芯持材の丸材を用いている。長さ20～36cmで先端の加工は簡便に一方からの切り出し面のみで尖らせているものもある。周囲にも同様の打ち込まれた杭が検出されているが、同一の杭列として認識できなかった。4本以外にも連続する可能性もある。

遺物：第299図8は芯持ち材の杭である。形態は丸木材鋭角で樹種はコナラ属コナラ節である。

時期：中世第1面相当で、室町時代中期から戦国時代。

SA02 (第261図、第299図 P L 95, 113)

位置：XVII C-10、D-06

検出：径約10～30cmの垂角礫の間から杭の頭を検出した。切り合いはなし。

規模：主軸 N35°E、長さ180cmを測る。

構造：北からSA02-4、SA02-5、SA02-11 (5×3cm)、SA02-6、SA02-7、SA02-16、SA02-8 (6×3cm)、SA02-9 (4×2cm)、SA02-15 (3×1cm)の9本が並ぶ。長さ15～55cm、板状の角材を本体とし、先端を尖らせて杭にしてある。板の向きに規則性はみられない。周囲にも同様な杭が検出され列としては認められないが、杭の加工の状態が類似しているため、同じSAとして取り上げた。

遺物：第299図9は建築部材で芯持ち材の柱根である。形態は丸木材鈍角で樹種はマツ属複雑管束亜属である。10は建築部材で分割材の杭である。形態は角材鋭角で樹種はクリである。11は建築部材で芯持ち材の杭である。形態は丸木材鋭角で樹種はブナ属である。12は建築部材で分割材の杭である。形態は三角板材鋭角で樹種はサクラ属である。

時期：中世第1面相当で、室町時代中期から戦国時代。

SA03 (第261図 P L 95)

位置：XVII C-10

検出：黒褐色土を掘り下げ中に礫が検出され、精査中に横位の木製品が見つかった。その後、杭の頭が検出され、杭と横位の木器との組み合わせが明らかになった。切り合いはなし

規模：主軸はほぼ東西方向、長さ100cm、幅20cmを測る。

構造：杭は長さ40～53cmである。溝の側壁を護岸する構造として考える。SD15、16は本遺構に向かうが、プランは確認できず、関係は不明である。

遺物出土状況：横木に用いている木製品は柄つきの角材で、SK1123の井戸の根太材に用いられているような、建築部材である。

時期：中世第1面相当で、室町時代中期から戦国時代。

⑤敷石遺構（SH）

SH02（第262図 P L 96）

位置：XVII C-01・02

検出：表土を重機で掘り下げ中に、数点の平石を検出した。平石は10数点規則的な配列でまとまって並ぶことが確認できた（SH02上）。この平石の並べられている黄褐色砂層の下にも同様な平石の並びが検出された（SH02下）。下の平石はSH02上の整然さと比べて乱れている状況が観察される。同様な平石を用いて面的に広がる状況から同一遺構として扱った。

規模：SH02上の平石の配石範囲は185×160cmで、SH02下の平石の配石範囲は185×190cmである。

埋土：SH02上は水田土壌を除去後に検出したもの。SH02下は灰褐色粘質土と黄褐色粘質土・砂質土の互層が覆う。堅直なたたき締めが何われ、何らかの構造物の土台としたものか。また黄褐色砂礫にも覆われるが、こちらはしまりがなく自然堆積の可能性もある。

遺物：なし。

時期：中世第1面相当で、室町時代中期から戦国時代。

SH03（第262図 P L 96）

位置：XVII C-02

検出：水田層の除去後SH02上と同一検出面にて検出した。平石を配列する整然さはSH02ほど認められないものの、ある程度のまとまりをもっていた。平石の板状の垂角礫は黒褐色土上に配されたと考えられ、その下部には黄褐色砂が層状に堆積している。切り合いはなし

規模：厚い板状の垂角礫が110×115cmの規模でまとまっている。

構造：礫の縁がそろった状態ではないが、意図的に配した様子が見てとれる。掘り方はない。SH02の南0.6m地点に位置する遺構である。同一面上からはSH02、03以外の遺構はない。

遺物：礫間からの遺物の出土はないものの、周辺の同一検出面から、すり鉢、かわらけの破片が出土している。

時期：中世第1面相当で、室町時代中期から戦国時代。

SH04（第262図 P L 96）

位置：XVII C-06・07

検出：にぶい黄褐色の礫混じり砂質土をやや掘り下げた面から平石がまとまって検出された。これより北側で検出されたSH02、03と同様のものと判断した。切り合いはなし。

規模：平石のまとまりは140×115cmの範囲に広がる。礫径は最大30cm、厚さ4～5cmである。

構造：平石は敷き詰められていた可能性がある。20cmほど掘り下げた褐色土層面からSH05が検出さ

れたがSH04と連続性が見られないため、別遺構とした。古い順にSH05—SD12-1—SH04と考えられる。

遺物：なし。

時期：中世第1面相当で、室町時代中期から戦国時代。

SH05（第262図、第270図、第278図、第283図 P L 96, 105, 110）

位置：XⅦC-07

検出：SH04の調査終了後、その下を掘り下げ中に、礫混じりの黒褐色土層において、粗粒の砂礫が充填するSD12-1を検出した。その縁辺部より垂角礫のまとまりを確認し、SD12-1の縁辺部に沿って礫が見られることから、SD12-1はSH05より新しいと判断した。本遺構の北側は、トレンチより失われている。SK1110に切られる。

規模：全容不明。方形に囲む礫は立てた様子で、平石は平らに配置する。

埋土：礫に囲まれた内側は黒色土で周囲に比べて比較的礫を含まない。

形状：石組の竪六状の遺構と考えられる。コの字形に配列された礫の並びが確認できる。北側は確認トレンチで削られていたが、四角形に囲まれていた可能性も考えられる。

遺物出土状況：かわらけや銭貨8枚が礫間から出土している。

遺物：第270図41～44はかわらけ、第278図5は土錘である。第283図3は銭、塩野草書の至道元寶、4は嘉裕通寶、5、6は熙寧元寶、7は大觀通寶である。

時期：中世第1面相当で、室町時代中期から戦国時代。

SH06（第262図、第270図、第283図 P L 97, 105, 106, 110）

位置：XⅦC-06・07

検出：SD12杭列の南側に接するように平石のまとまりが検出された。断面観察よりSD12杭列は杭の打ち込み後、横木を構築し、欄に用いた後、構築粘土材で補強し側面を整えた様子がみられる。その構築粘土材がSH06の平石を切っていることからSD12より新しいと判断した。

規模：径10～30cm、5～20cm、厚さ5cmの垂角礫の平石を240×130cmの範囲に配石している。

埋土：平石は一部黄褐色砂で被覆されている。下位は黒褐色土。

構造：掘り方を確認していないが、直下の土層の状況は黒褐色土の下位に黄褐色の粘質土が薄く貼られており、基盤づくりなどの整地が行われている可能性がある。

遺物：第270図45は青磁碗、46、48は白磁皿である。第283図8は銭、祥符元寶、9は天聖元寶、10は元豊通寶である。

時期：中世第2面相当で、鎌倉時代後期から室町時代前期。

SH07（第262図）

位置：XⅦC-01・06

検出：褐色土を掘り下げるとSD12凹地を取り囲む南辺側の礫に連なって礫の面的な広がりが見えられた。他の配石遺構と異なり平石は用いられていない。10～20cm下位の黒褐色土中より杭が3本で検出された（SK1365・1366・1142）が、直接の切り合いはない。

規模：垂角礫が185×180cmの範囲に広がる。

埋土：黄褐色砂質土中に礫がのる。その下位には黒褐色土、褐色土の堅致な層が基盤としてあり、構築時の整地の意図がうかがえる。

構造：SD12の杭列内に配された礫と連続することから整地遺構の一部と考えられる。

遺物：なし。

時期：鎌倉時代後期から室町時代前期。

SH08 (第277図 P L 97, 109)

位置：XVII C-01・06

検出：SH07を検出中、黄褐色土層上面に人頭大の平石のまとまりが検出された。XVII C-01・02にトレンチを入れる際、何点かの平石を遺失した可能性があるが、全面に広がるような配石範囲にはならないと判断した。切り合いはなし。

規模：115×90cmの範囲に配石している。水平性はやや欠くもののSH02、SH04、SH06と同様な平石を選別して敷きつめている。

埋土：平石直下の層は黒褐色土、その下位は黄褐色砂礫層、その下位は黒褐色土である。構築時の整地と考えられるかもしれない。

遺物出土状況：平石の礫間より漆製品の腐食した木胎部分が出土した。取り上げ不能であったが、漆膜も確認できた。

遺物：第277図1は砂泥互層岩製の礎である。

時期：鎌倉時代後期から室町時代前期。

SH09 (第264図)

位置：XVII C-06

検出：SX05の調査後、重機にて下位の黒褐色土まで掘り下げる途中、礫の頭のまとまりが見つかった。結果、SX01とSH05の間に人頭大の礫がまとまっていたが、礫面はそろっておらず、礫は直角礫で選択されたものようには見えなかった。その後、比較的小きめの礫を外していくと列をなすようなまとまりがみとめられた。

規模：160×70cmの範囲に東西に2列に礫が並ぶ。全容は不明である。

構造：礫に共通性がみられないことから、他の敷石遺構とは性格が異なると考えられる。

遺物出土状況：礫間より漆器片、漆塗膜が出土した。

時期：鎌倉時代後期から室町時代前期。

SH10 (第264図 P L 97)

位置：XVII C-04

検出：XVII C04周辺を重機で掘り下げ中、SK検出面の5～10cm下がった灰褐色砂礫層より平石の配列が検出された。切り合いはなし。

規模：75×75cmの範囲に12点の平らな礫を上下に重なることなく敷き詰めて並べている。

埋土：掘り方は確認できない。

構造：SK1194と同様なSKの可能性もあったが、掘り込みはみられなかったため配石として扱った。平石を配列する点は他のSHと類似する。

遺物：なし。

時期：鎌倉時代後期から室町時代前期

SH11 (第263図、第264図 P L 97)

位置：XVII C-15 D-11

検出：SD22と同じ中世検出面。検出面に散在する礫の中から一定の列をなす平石を残したところ、全体の分布が判明した。SD22より新しい。

規模：長軸N54°W、330×60cmの範囲で平石が並び、その北東側にやや大きめの礫が間隔をあけて並ぶ。

埋 土：掘り方は確認できない。

構 造：SD22と石列のセットで「溝と建物址」、平石の並びと周囲SK1310、SK1305、SK1613、SK1289、SK1621との組み合わせで「建物と道」とも捉えられるが、明らかでない。

遺物出土状況：中世土器の小破片。

時 期：中世第1面相当で、室町時代中期から戦国時代。

⑥焼土跡（SF）

S F 0 2（第265図）

位 置：XVII C-04

検 出：黒褐色土上面で炭化物の広がる範囲を検出した。焼土は伴わないので、本来なら焼土跡といえなが、ここではSFとして扱う。切り合いはなし。

規 模：主軸N71°W、長さ66cm、幅40cm、厚さ2cmを測る。

周辺には炭化物の集中する範囲が検出され、SF03、SK945、SK947、SK899では焼骨が見られる。

時 期：室町時代中期から戦国時代。

S F 0 3（第265図）

位 置：XVII C-05

検 出：SF02と同様で、黒褐色土上面で炭化物の広がる範囲を検出した。焼土は伴わない。ここではSFとして扱う。切り合いはなし。

規 模：主軸N64°W、長さ68cm、幅60cm、厚さ4cmを測る。

時 期：室町時代中期から戦国時代。

S F 0 5（第265図 P L 98）

位 置：XVII C-13・14

検 出：中世検出面とした黄褐色砂層まで掘り下げる途中、礫とともに焼土、炭化物層の広がりを確認した。切り合いはなし。他の遺構より10cmほど検出面が高い。

規 模：95×85cmの範囲に広がる不整形な平面形状である。角礫を伴う。

遺 物：なし。

時 期：室町時代中期から戦国時代。

S F 0 6（第265図 P L 98, 106）

位 置：XVII B-14

検 出：SX03、04と同様で中世遺物包含層より上位で炭化物と焼土塊の広がりを検出した。切り合いはなし。

規 模：長軸N20°E、70×80cmほどの範囲に分布する。炭化物、焼土を取り除くとピットが検出された。ピットは円形で径30cm、断面皿状、深さ10cmを測る。

埋 土：黒褐色土。炭化物が混じる。灰も多く混じる。しまりやや弱い。焼土塊が若干混じる。

構 造：近接してSF07、SF08がある。

遺 物：第271図8はかわらけである。

時 期：室町時代中期から戦国時代。

S F 0 7（第265図 P L 98）

位 置：XVII B-14

検 出：SF06と同じ。

規 模：長軸N57°E、100cmほどの不整形な範囲に焼土、炭化物が分布する。焼土を取り除くとピット

が検出された。ピットは断面不整形で、深さ 30cm を測る。

埋土：黒褐色土で炭化物、焼土粒を含む。

遺物：なし。

時期：室町時代中期から戦国時代。

S F 0 8 (第 265 図 P L 98)

位置：XVII B - 10・14

検出：SF06 と同じ。

規模：長軸 N25° W、径 85 × 55cm ほどの楕円形の範囲に分布する。炭化物を取り除くとピットが検出された。ピットは円形で径 30cm、断面円柱状、深さ 36cm を測る。

埋土：赤褐色土で炭化物、粘土塊が混じる。壁は焼けていない。ピットからは焼土塊が出土した。焼土塊は近接する、SX04 でも出土していることから、SX04 との関係が注目される。SF06 ~ 08 は、近接していることから、何らかの関連があると考えられる。

時期：室町時代中期から戦国時代。

S F 0 9 (第 265 図 P L 98)

位置：XVII B - 15

検出：SX02 ~ 04 の調査終了後、下層を掘り下げ中に、黒色礫混じり層で焼土および炭化物層の面的な広がりを確認した。切り合いはなし。周辺では遺構を確認していない。

規模：100 × 75cm の範囲に不整形に広がる。断面は浅い皿状で深さ 3cm を測る。

埋土：炭化物、焼土が層状をなす。掘り方はない。

遺物：なし。

時期：中世第 2 面相当か。鎌倉時代後期から室町時代前期。

S F 1 1 (第 265 図 P L 98)

位置：XVII C - 06

検出：黒褐色土上面で焼土の広がる範囲を検出した。SH06 の礫が広がる同一面である。

規模：長軸 N70° E。SD12-2 に破壊されるため全容は不明であるが、平面形態は楕円形と推定される。残存する範囲で 80 × 65cm で、焼土の厚さは 15cm を測る。

埋土：明黄褐色土、褐色土、黒褐色土からなる。焼土、灰、炭化物を含む。

遺物：なし。

時期：鎌倉時代後期から室町時代前期

⑦溝跡 (S D)

S D 1 1 (第 266 図 P L 99)

位置：XVII H - 13

検出：中世検出面で検出した。SK664 より古い。

規模：長軸 N75° W、長さ 280cm、幅 20cm、深さ 2cm を測る。

埋土：茶黒褐色土。

構造：断面形は浅い皿状、底面はほぼ平らである。

遺物出土状況：土器片が数点ある。

時期：中世第 1 面相当、室町時代中期から戦国時代。

S D 1 2 (第 209 図、第 210 図、第 267 図、第 269 図、第 283 図、第 299 図、第 300 図、第 301 図 P L 99, 100, 105, 110, 113)

位置：XVII C-01・02

検出：表土を重機によって掘り下げ黒褐色土に含まれる炭化物層面にて検出をおこなった。井戸跡 SK844 を切って東西に直線的に延びる帯状の黄褐色砂礫層と傾斜に沿って延びる2本の帯状の黄褐色砂層を確認した。直線的な溝をSD12、分岐してやや湾曲して延びる溝をSD12-1 SD12-2 とした。

規模：東西方向に約11m延びる。断面はU字形、溝幅は約200cmを測る。

埋土：上から黄褐色砂礫層、にぶい黄褐色土、黒色土の3層に大きく分かれる。

構造：SD12を検出するきっかけとなった埋土の黄褐色砂は、SD12-1 SD12-2からの流れ込みであり、XVII C02 東半分より東側でのみ確認された。この砂層を除去後は、にぶい黄褐色土が検出され、杭の頭が見え始める。その後、結果XVII C01、02のSD12の南縁に沿って東西に杭列が並び、横木を柵状に組み、さらに構築材で覆い補強した状況が観察できた。傾斜下方に当たる北縁には杭はなく、拳大～やや大きめな垂円礫で覆われている状況であった。この礫はSD12底部に向かって落ち込んでいく様子が見られることから、杭による護岸と礫の積み上げによる護岸の両方が行われていた可能性がある。ここでは、これらの杭等を護岸材として扱う。礫を取り除くと黒色土が検出され、黒色土中からは多くの木質遺物が検出され、SD12凹地の埋土と判断した。SD12凹地は西側が垂角礫を内側に押しつけるように配してあり、最後は礫の配石のみとなる。

遺物出土状況：黒色土からは木質遺物などが多量に出土している。

遺物：第269図9は中津川以外の裏口縁部、11は中津川の裏の胴部から底部である。14は杭列構築土内で青磁碗である。第283図13～17は銭13は開元通寶、14は熙寧元寶、15は元祐通寶、16、17は咸淳元寶である。第299図13は曲物底板で樹種はサワラ、14、15は漆器碗で樹種はケヤキである。16は糸巻きの部材でかせと考えられる。形態は断面長方形の棒状で樹種はスギである。17は円形の薄板状製品で用途は不明、樹種はヒノキである。18は棒状製品で用途は不明、面取りがしてあり樹種はスギである。第300図1は棒状の部材でかせと思われ、樹種はヒノキである。同図2～15、第301図1～11はSD12杭列の杭で護岸材である。形態の特徴は第300図2、5、8、第301図1、11は角材鋭角、第300図3、4、6、9、10、第301図8は板材鋭角、第300図7、12、14、第301図3、4、6、は三角材鋭角、第300図11、第301図5、9、10は丸木材鋭角、第300図13は丸1/8鋭角、第300図15は1/4鋭角、第301図2は板状丸1/4鋭角、第301図7は三角材である。樹種は同定していない300図12、15、301図1、2、10を除きすべてクリである。また301図12～14はSD12護岸材のうち自然木で樹種は全てマツ属複雑管束亜属である。

時期：中世第2検出面相当の鎌倉時代後期から室町時代前期か。

SD12-1（第209図、第210図、第266図、第269図 PL 99, 105）

位置：XVII C-02・03・06・07・08・11・12

検出：中世検出面で検出した。SD12より新しい。SH06を切る。

規模：南から北方向にやや湾曲して延びる。長さ約10.5m、幅約80～120cm、断面はU字形、深さ30cmを測る。

埋土：黄褐色の砂と小礫からなる。

構造：南からSD12に向かって砂礫の流れ込みがあったと考える。

遺物出土状況：黄褐色砂礫からの出土はほとんどない。

遺物：第269図15はかわらけである。

時期：中世第1面相当の室町時代中期から戦国時代か。

SD12-2 (第209図、第210図、第266図、第277図 P L 99, 109)

位置：XVII C-01・06

検出：SD12-1と同じ。SF06を切る。

規模：南から北方向に延びる。長さ約6m、幅約100～130cm、断面は浅い皿状、深さ15cmを測る。

埋土：SD12-1と同じ。

遺物：第277図2は砂泥互層岩製の硯である。

時期：中世第1面相当の室町時代中期から戦国時代か。

SD13 (第211図、第212図、第266図、第269図、第283図 P L 100, 105, 110, 113)

位置：XVII C-04・05、D-01・06

検出：中世検出面で検出した。北東側は調査区外に延びるため溝全体は検出できなかった。SD14より古い。

規模：調査区境に沿って北西―南東方向に残存長で約22m延びる。溝幅は約120cm、断面はU字状と推定、深さ20cmを測る。

埋土：褐色砂質土で砂礫を含む部分もある。

構造：SD16が分岐している。全体像は不明だが、流路として主要な位置を占めていた可能性がある。

遺物：第269図16は白磁碗である。第283図18～19は銭、18が景祐元寶。19が治平元寶である。第301図15は曲物底板で樹種はヒノキ、16は漆器皿で樹種はトネリコ属、17は木筒状で樹種はヒノキである。18は木札状の薄板状製品で用途は不明、樹種はヒノキ、19は角柱状の棒状製品で樹種はカバノキ属である。第302図1は下駄で樹種はケヤキである。

時期：中世第2面相当の中世第2検出面相当の鎌倉時代後期から室町時代前期。

SD14 (第211図、第266図 P L 100, 105, 113)

位置：XVII C-05・08・09・10

検出：黒褐色の中世検出面において砂が帯状に広がるのを検出した。SD13より新しい。

規模：北東―南西方向に残存長で約6m、C10グリッド付近で屈曲し東西方向に西へ約11m延びる。溝幅は約40～100cm、断面形は皿状、深さ18cmを測る。

埋土：赤―黄褐色のやや粗粒な砂からなる。溝の底部に残された砂粒と考えられる。

構造：SD13に向かって流れている。明確な検出はできなかったが、SD12-1と連続する可能性もある。

遺物：第269図13は古瀬戸の瓶子である。第269図12は(SD12-3)SD14の可能性があるが珠洲の壺である。第301図20は曲物底板で樹種はスギである。

時期：中世第1面相当の室町時代中期から戦国時代。

SD15 (第211図、第212図、第266図 P L 100)

位置：XVII C-09・10

検出：黒色土を掘り下げ中に帯状に延びる砂の分布を検出した。SD16に合流する可能性もあるが、不明である。

規模：北東―南西方向に残存長で約5m、C10グリッドで屈曲し東西方向に西へ約3m延びる。溝幅は約40～85cm、断面形は片寄ったV字状、深さ12cmを測る。

埋土：赤―黄褐色のやや粗粒な砂からなる。溝の底部に残された砂粒と考えられる。

構造：SK1111の井戸に共伴し、排水路的な可能性がある。

遺物：なし。

時期：中世第1面相当の室町時代中期から戦国時代。

SD16 (第211図、第212図、第266図)

位置：XVII C-05

検出：黒色土を掘り下げ中に帯状に延びる砂の分布を検出した。SD13から分岐する切り合いは不明である。

規模：SD13と並行して北西-南東方向に延び、残存長は約5m。溝幅は約25～30cm、断面はゆるやかなV字状、深さ8cmを測る。

埋土：赤～黄褐色のやや粗粒な砂からなる。溝の底部に残された砂粒と考えられる。

構造：SA03の礫に絡んだ杭および横木のあり方は護岸材の可能性を示すことからSD16はSA03に取られる遺構の可能性はある。

遺物：なし。

時期：中世第1面相当で、室町時代中期から戦国時代。

SD18 (第210図、第266図 P L 100)

位置：XVII C-02

検出：中世検出面で検出した。切り合いはなし。

規模：南北方向から南東方向へゆるやかに弧を描く。北側は調査区外へ延びると推定される。残存長は約5m、溝幅は25～30cm、断面は皿状で深さ20cmを測る。

埋土：黒褐色土。

構造：埋土が砂でないことから流路としては機能していなかった可能性もある。

遺物：なし。

時期：中世第1面相当で、室町時代中期から戦国時代。

SD21 (第215図、第266図 P L 100)

位置：XVII C-20

検出：周辺はやや高く、中世遺物包含層が明確でない地点である。検出面は鉄分集積が目立ち、砂礫の落ち込みが帯状に広がる。北東側を暗きよによって破壊されている。

規模：北東-南西方向に延び残存長は約3m、溝幅は約30cm、断面は浅いU字状で、深さ5cmを測る。

埋土：暗オリーブ褐色土。砂礫を多く含む。

構造：土石流の流れの北東方向に沿う配置であり、自然流路の可能性もある。

遺物：なし。

時期：中世第1面相当で、室町時代中期から戦国時代。

SD22 (第212図 P L 101, 105)

位置：XVII D-11・12

検出：一帯は微高地上でやや高く、宅地の造成を受けていたため、土層を把握しにくい。SK1288、SH11より古い。

規模：北東-南西方向に軸を持ち東側は市道に、西側は宅地にかく乱を受けている。残存長は約6.5m、溝幅は30～150cm、断面はU字状、深さ25cmを測る。

埋土：黒褐色粘質土。

構造：隣接遺構のSH11とは軸方向が直交し、区画性を持つ。何らかの建物、道と溝という関連もうかがえる。

遺物：第269図10はすり鉢である。第302図2は曲物の底板で樹種はヒノキである。

時期：中世第1面相当で、室町時代中期から戦国時代。

SD24（第209図、第266図 PL101）

位置：XⅦB-05、C-01

検出：黄褐色砂が混じる堅致な面での検出。礫の頭が帯状に並ぶ様子が捉えられた。黄褐色砂を掘り下げると、礫間には黒色土が充填した礫の石列を検出した。礫は人頭大の亜角礫で、平面的に2列に直線状に配置している。北側を意識した礫の面合わせになっている。下流部（東北東）になるほど礫の崩れが著しい。切り合いはなし。

規模：傾斜面に沿った西南西—東北東方向に軸を持つ。傾斜の比高は90cm、石列は西側では収束し、東側は調査区外に延びる可能性が高い。残存長で約12m、礫間の距離は約75cmを測る。

埋土：黒褐色土が泥状に充填する。自然木の混入が著しい。

構造：掘り方はわずかな掘り込みである。水路の可能性も考えられる。

遺物：第277図3は軽石である。第302図3は曲物底板で樹種はヒノキである。

時期：本遺構の検出面では内耳土器が検出されていることから、中世第1面相当の室町時代中期から戦国時代。

⑧遺構外出土遺物

第283図20はW-22出土の銭、景德元寶である。21はW-23出土の銭、開元通寶である。

第271図13はB-10出土の内耳土器で接合資料である。14はB-05出土のすり鉢、15はB-14出土の内耳土器、16はB-15出土の内耳土器、17～19はB-14出土のかわらけ、20、22はB-15出土のかわらけ、21はB-15出土の青磁碗である。26はB-20出土のかわらけ、27はB-20出土の古瀬戸の折縁深皿、28はB-20出土の古瀬戸の鉄軸仏花瓶である。

第277図4はB区出土の軽石、5、6はB区出土の砂泥互層岩製の碗である。

第281図6はB-14出土の青銅製の銅鏃、11はB-10出土の鉄製の短刀、14はB-23出土の鉄製斧である。

第283図22はB-05出土の銭、元豐通寶である。23はB-05出土の銭、聖宋元寶である。24はB-15出土の政和通寶である。

第272図5はC-01出土のすり鉢で接合資料、6、11、12、15～17はC-01出土、33はC-06出土のかわらけである。7はC-01出土、28はC-03出土の山茶碗6型式である。8はC-01出土の青磁碗である。9はC-01出土の青白磁の小品、10はC-01出土の山茶碗片口鉢I類、13はC-01出土の古瀬戸の底鉤目皿である。14はC-02出土の青磁碗、18、19、21はC-02出土の青磁碗である。22はC-02出土の古瀬戸、20、23はC-02出土の古瀬戸の鉤皿である。24はC-02出土の青磁の同安碗である。25はC-02・03出土の古瀬戸の平碗、26はC-03出土の青磁の同安皿、27はC-03出土の白磁皿Ⅳ類、29はC-04出土の珠洲のすり鉢である。30はC-02出土のすり鉢、31はC-06出土の青磁碗B1類である。32はC-06出土の青磁碗A類、34はC-07出土の青磁碗A2類、35はC-08出土の尾張片口鉢I類である。36はC-09出土の内耳土器、37はC-09出土の珠洲、38はC-10出土の青磁碗A類底部である。39はC-10で古瀬戸の合子、40はC-10出土の白磁の合子である。

第273図1はC-10出土の古瀬戸の折縁小皿、2はC-10出土、12はC-11出土、17、18、20～22はC-12出土、25はC-07出土、26はC-13出土、30、31はC-14出土、36、37はC-22出土、40はC-25出土のかわらけである。3、4はC-10出土の火鉢、8、9もC-10出土の火鉢で、接合資料である。5はC-11出土の青磁花瓶、6はC-10出土の青磁同安皿、7はC-10出土の青磁

碗B1類である。10はC-10出土の山茶碗5形式である。11はC-10出土の手づくね土器、13はC-13出土の把手付小皿である。14はC-10出土の尾張片口鉢1類、15はC-10出土のすり鉢である。16はC-10出土の中津川壺である。19はC-11出土の古瀬戸の平碗、23はC-12出土の青磁碗B1類、24はC-08出土の中津川片口鉢1類、27、28はC-14出土の内耳土器である。29はC-13出土の中津川壺、32はC-07出土の天目茶碗後期Ⅱで接合資料である。33はC-14出土の青磁碗A類の底部の接合資料である。34はC-18出土の青磁碗A2類、35はC-18出土の青磁碗A4類、38はC-25出土のかわらけである。39はC-01出土の白磁皿A類、第274図34はC区出土の青磁小型夜学型器台である。

第277図7はC-01出土の凝灰岩製の砥石、8はC-01出土の砂泥互層岩製の硯、9、10はC-02出土の凝灰岩製の砥石である。11はC-02出土の安山岩製の臼、12はC-02出土の溶岩製の凹石、13はC-02出土の砂泥互層岩製の硯、14はC-02出土の砂岩製の硯である。15、16はC-03出土、17はC-07出土、18、19はC-10出土の凝灰岩製の砥石、20はC-10出土の砂泥互層岩製の硯である。21はC-10出土の溶岩製の凹石である。

第281図7はC-03出土の鉄製品、8はC-18出土、9はC-02出土、10はC-03出土の鉄製の釘である。13はC-02出土の鉄製の鎌と思われる。15はC-23出土の鉄製の鋸である。

第283図25はC-01出土の銭、祥符元寶である。26はC-01出土の銭、皇宋通寶、27はC-01出土の銭、聖宗元寶、28、29はC-02出土の銭、開元通寶、30はC-02出土の銭、咸平元寶、31はC-02出土の銭、元祐通寶、32はC-02出土の銭、元符通寶、33はC-06出土の銭、元豐通寶、34はC-06出土の銭、元祐通寶である。

第284図1はC-06出土の銭、紹聖元寶、2はC-07出土の銭、開元通寶、3はC-07出土の銭、皇宋通寶、4はC-07出土の銭、治平元寶、5はC-07出土の銭、元豐通寶、6はC-07出土の銭、元祐通寶、7はC-07出土の銭、元符通寶、8はC-07出土の銭、④塩野家書 政和通寶、9はC-09出土の銭、皇宋通寶、10はC-09出土の銭、紹聖元寶、11はC-10出土の銭、元祐通寶、12はC-11出土の銭、熙寧元寶、13はC-11出土の銭、元豐通寶、14はC-12出土の銭、太平通寶、15はC-15出土の銭、治平通寶、16はC-21出土の銭、開元通寶、17は16の裏面である。18はC-24出土の銭、淳熙元寶、19はC区出土の銭、景德元寶である。

第302図4はC-01、02出土の柄杓の柄、形態は棒状で先端が尖り、樹種はブナ属である。5はC-03出土の漆器皿で、樹種は5がコナラ属コナラ節、6はC-05出土の漆器皿で、樹種はクリである。7はC-04出土の漆器碗で、樹種はケヤキ、8はC-02出土の漆器碗で、樹種はコナラ属コナラ節である。9はC-01、02出土の棒状の削片で燃えさして、樹種はマツ属複雑管束亜属である。10～14はC-02出土の箸、樹種は11がスギ、12はヒノキ、13はツガ属、14はヒノキ科である。15、16はC-02出土のさいばし状の棒状製品で用途は不明である。樹種は15がヒノキ、16がツガ属である。17はC-02出土のさいばし状の棒状製品で用途は不明である。樹種はヒノキである。18はC-01、02出土の木筒である。形態は板状で樹種はスギである。19はC-01、02出土の板状木製品で、用途は不明である。樹種はサワラである。20、21は加工材で板状組み合わせ具部材である。22は20と21を組み合わせたもので、用途は不明である。樹種はスギである。

第303図1～3はC-01出土の曲物の底板で、樹種は1はヒノキ、2、3はヒノキ属である。4、5はC-01出土の漆器碗で樹種はクリである。6はC-01出土の横櫛で樹種はイスノキである。7はC-01出土の下駄で樹種はケヤキである。8はC-01出土の木筒である。表面には「蘇民得来子孫口」と書かれ、裏面には五芒星のマークがある。樹種同定は行っていないが、針葉樹と思われる。9はC-01出

土の板状の不明品で樹種はモミ属である。10～12はC-01出土の燃えさしで樹種はマツ属複雑管束亜属である。13、14、17～20はC-02出土の曲物の底板である。樹種は13がスギ、14がサワラ、17、19、20がヒノキ、18がヒノキ属である。15、16はC-02出土の曲物の側板である。15はヒノキ、16はツガ属である。

第304図1はC-02出土の折敷で樹種はヒノキである。2はC-02出土の漆器碗で内面、外面とも菊が描かれている。樹種はトネリコ属である。3はC-02出土の漆器の破片で樹種はケヤキである。内外面に描かれている模様はスタンプで押されたものと思われる。4～6はC-02出土の漆器皿である。樹種は4がトネリコ属、5がブナ属、6がクリ属である。7～9はC-02出土の漆器碗で樹種は7がハリギリ、8がケヤキ、9がコナラ属コナラ節である。10、11はC-02出土の箸で樹種は10がヒノキ、11がスギである。12はC-02出土の棒状製品でさいばし状である。用途は不明で樹種はモミ属である。13はC-02出土の横櫛で樹種はイスノキである。14～18はC-02出土の下駄である。18は先端部のみ残存している。樹種は14がトネリコ属、15がケヤキ、16がサワラ、17がヒノキ、18がサクラ属である。19はC-02出土の棒状製品で用途は不明である。樹種はモミ属である。20はC-20出土の祭祀具で刀形の形代である。樹種はマツ属複雑管束亜属である。21はC-02出土の加工材で薄板状のへぎ材である。用途は不明で樹種はヒノキ科である。

第305図1はC-02出土の棒状製品で用途は不明である。樹種はカエデ属である。2はC-02出土の板状製品で用途は不明、樹種はサワラである。3はC-02出土の加工材で積木状の残材である。用途は不明で、樹種はスギである。4はC-02出土の加工材で六角柱状の木製品である。用途は不明で、樹種はクマシデ属である。5はC-02出土の用途不明の残材で、樹種はサワラである。6、7はC-03出土の曲物の底板で樹種は6はサワラ、7はヒノキである。8はC-03出土の側板?である。板状で樹種はヒノキである。9はC-03出土の曲物の側板で、樹種はサワラである。10～12は折敷で樹種はヒノキである。13は縁のある加工材で折敷または櫛の原材?である。樹種はヒノキである。14はC-03出土の漆器皿で樹種はブナ属である。15は漆器碗で樹種はケヤキである。

第306図1、2はC-03出土の漆器皿で、樹種は1がクリ、2がコナラ属コナラ節である。3はC-03出土の漆器碗で樹種はクリである。4はC-03出土のさじで樹種はサワラである。5はC-03出土の下駄で樹種はケヤキである。6はC-03出土の横櫛で、樹種はイスノキである。7はC-03出土の祭祀具で陽物の形代である。樹種はマツ属複雑管束亜属である。8はC-03出土の下駄で樹種はハリギリである。9はC-03出土の連歯下駄で、樹種はケヤキである。10はC-03出土の圭頭状の塔婆で、樹種はヒノキである。11はC-03出土の祭祀具で刀形の形代で、樹種はサワラである。12はC-03出土の祭祀具で形代、樹種はツガ属である。13、14はC-03出土の分割材で13は板材、14は割材の棒状製品である。15、16はC-03出土の割片で棒状の燃えさしである。樹種はマツ属複雑管束亜属である。17、18はC-03出土の端材で17は木端、18は積木状で樹種はサワラである。19はC-04出土の曲物底板で樹種はサワラである。20はC-04出土の祭祀具で舟形の形代、樹種はヒノキである。21はC-04出土の漆器碗で樹種はケヤキである。22はC-04出土の棒状製品で用途は不明、樹種はマツ属複雑管束亜属である。

第307図1はC-05出土の曲物底板で樹種は1がヒノキ、2はサワラである。3はC-05出土の漆器皿で樹種はクリである。4、5はC-05出土の祭祀具で形代、樹種はサワラ、6はC-05出土の祭祀具で陽物の形代、樹種はマツ属複雑管束亜属、7はC-05出土の分割材で角材、樹種はヒノキ、8、9はC-05出土の部材で板状製品、用途は不明で樹種はスギ、10はC-05出土の分割材で形態は板材、棒状製品である。11、12はC-06出土の漆器皿で樹種は11がケヤキ、12は広葉樹である。13はC-

06 出土の漆器椀で樹種はクリ、14 はC-06 出土の加工材で圭頭状、用途は不明、樹種はサワラ、15 はC-07 出土の漆器椀で樹種はコナラ属コナラ節、16 はC-07 出土の漆器皿でトネリコ属である。17 はC-07 出土の曲物底板で、樹種はサワラ、18 はC-07 出土の曲物で、樹種はヒノキである。19 はC-07 出土の厚手板状の端材で、樹種はスギである。

第308 図1 はC-07 出土の編物で用途は不明、2 はC-07 出土の分割材で割材の棒状製品、3 はC-08 出土の曲物底板で樹種はサワラ、4～6 はC-10 出土の曲物底板で樹種はヒノキ、7 はC-10 出土の曲物の底板か蓋で、樹種はスギ、8 はC-10 出土の曲物底板で樹種はヒノキである。9、10 はC-10 出土の漆器椀で樹種は9 がクリ、10 がカツラである。11 はC-10 出土の工具の柄で樹種はガマズミ属、12 はC-10 出土の箸で樹種はスギ、13 はC-10 出土の横櫛で樹種はイスノキである。

第309 図1 はC-10 出土の加工材で用途不明の角柱状の木製品、樹種はスギである。2 はC-15 出土の曲物底板で樹種はヒノキ、3 はC-15 出土の部材で用途は不明、樹種はヤナギ属である。

第274 図1 はD-06 出土の青磁香炉、2 はD-06 出土、3～5 はD-11 出土のかわらけである。

第277 図22 はD-06 出土の溶岩製の凹石、23 はD-11 出土の溶岩製の凹石である。

第284 図20 はD-06 出土の銭、天禧通寶、21 はD-11 出土の元豊通寶である。

第309 図4 はD-06 出土の漆器皿で樹種はケヤキ、5 はD-06 出土の柄杓曲物の底板で、樹種はヒノキ、6、7 はD-06 出土の曲物底板で樹種は6 がスギ、7 がサワラである。8 はD-06 出土の折敷？で樹種はヒノキである。9 はD-06 出土のさいばし状の棒状製品で樹種はツガ属、10 はD-06 出土の竹製品で用途は不明、樹種はマダケ属、11 はD-06 出土の棒状製品で用途は不明、樹種はサワラである。12 はD-06 出土の部材で残材である。樹種はヒノキである。

第274 図6 はF-10 出土の古瀬戸の燭台である。

第284 図22 はG-03 出土の銭、嘉祐元寶、23 はG-03 出土の銭、聖宋元寶、24 はG-03 出土の銭、嘉定通寶、25 はG-07、12 の銭、洪武通寶、26 はG区出土の銭、紹聖元寶である。

第274 図24 はH区出土の珠洲の甕、25 はH区出土の中津川の甕、26 はH区出土の中津川以外、27 はH区出土のかわらけ、30 はH区出土の青磁碗B 1 類である。

第277 図24 はH-13 出土の滑石製の白玉である。

第284 図27 はH-13 出土の洪武通寶である。28 は27 の裏面である。

第309 図13 はH-10 出土の薄板状の製品で用途は不明、樹種はサワラである。14 はH-14 出土の建築部材の分割材で柱根である。形態は角材で樹種はスギである。

第281 図12 は鉄製の鎌と思われる。

第309 図15 はW-23 出土の先端尖状の加工材で木釘である。樹種はヒノキである。16、17 はW-23 出土の箸で、樹種は16 がヒノキ、17 はツガ属である。

第274 図29 はかわらけである。32 は青磁の皿A 類である。33 は古瀬戸の平碗である。

第284 図29 は銭、乾元重寶、30 は銭、聖宋元寶、31 は銭、宣和通寶である。

(5) 戦国時代～

中世遺構検出面より上の層で検出された遺構等をここで扱う。特に調査区西側の斎ノ森神社側では、近世以降の宅地造成等の盛土・整地跡や土坑が検出されている。出土遺物は染付破片など少量であった。

①土坑 (SK)

SK1000 (B-4・9): 平面不整形、断面皿状、深さ33cm。北側は近年の造成により削られている。

遺物は小破片がみられ、第270図35はかわらけである。

SK1666 (G-15): 平面不整形、断面方形、深さ52cm。遺物は第275図6軽石である。

SK1826 (G-11): 平面不整形、底面は凹凸、深さ41cm。遺物は第282図11銭、皇宋通寶である。

SK1667 (H-11): 平面楕円形、断面皿状で深さ66cm。遺物は第275図7溶岩製の凹石である。

②墓墳 (SM)

SM01 (第268図 P L 102)

位置: XVII C-14

検出: XVII C-01～10は低湿地状で黒色粘質土が堆積しているが、その南側部分は様相が異なり、現在の地割に沿って青灰色粘質土が見られた。この青灰色粘質土を重機により20cmほど掘り下げたところ、木の板が検出され、箱型の板材を確認した。骨粉がみられたことから、棺と仮定して調査を進めた。北側は現在の水田造成により削り取られていた。切り合いはなし。

規模: 平面形態は長方形。長軸N20°E、北側は欠損し残存長(115cm)、幅72cm、深さ25cmを測る。

埋土: 掘り方埋め土は灰褐色砂質土、木棺内部の覆土は灰色の粘質土。いずれも骨粉と思われる白色の粒子を多く含む。また黒褐色の植物根の混入が多い。

構造: 木棺部の長さ(約95cm)、幅47cm、深さ18cm。断面形はタライ状、壁はやや開いて立ち上がる。底面はほぼ平ら。側板は土圧で内側に20～26°傾いている。木棺部は天井板、下左右側板、底板からなる。天井板は一枚板で端部は切断されている。表裏面とも腐食で工具による削り痕は不明瞭。南西隅の部分に板状に残存しているのみ。大きさは約60×10cm、厚さ2cm。底板は約90cm×45cm厚2cm以下と薄い。側板は柾目のサワラ材?を用いている。木棺を作った墓は本調査区内ではSM01のみである。

遺物出土状況: 木棺内の南端部に骨が3点まとまって底板から浮いた状態で検出された。位置から人骨の脚部と思われるが、残存状況は悪い。副葬品は発見されなかった。

時期: ¹⁴C年代測定では10世紀後半～11世紀前半の結果を得ているが、検出の状況を考慮すると、現在の水田面と中世検出面の間の時期と推測される。近世以降と考えられる。

③溝跡 (SD)

SD01 (第247図、第268図 P L 102)

位置: XIX B-06・12・13

検出: 基本層序Ⅱ層で検出。砂の溝状の落ち込みを確認し、溝跡と判断した。切り合いはなし。

規模: 溝の幅は東側で広く約90cmで、北側へいくほど狭くなる。検出面上で約70cm、断面は皿状で、深さ最大約30cmを測る。

埋土: 明褐色細粒砂の単層。

構造: 北側の調査区境の断面において上部がゆるやかに開き、現耕作土直下では幅230cmほど広がる様子が確認された。段を持つ構造であるか、本来砂層はもう少し厚く堆積したものの耕作土によって削平されたかは不明である。

遺物出土状況: 埋土より出土。

遺物：第196図9は須恵器環口縁部の1/4破片。底部は小破片だが、ヘラ切り離し手法。口径12.9cm、器高3.6cmが測られる。10は灰軸陶器の碗、口縁部破片。縁は外側に緩く折る形態。口径は18cm前後となるか。東側に片寄って覆土中からごくわずかに出土した。近世遺物はない。

時期：古代Ⅲ期～Ⅳ期（8世紀後半～9世紀前半）の資料が混在する。覆土の砂層は戊の溝水時の洪水砂に相当するものと推定すれば近世か。

SD17（第242図、第268図 P L 102）

位置：XVIC-12

検出：切り合いなし。西側にSX09が隣接するが、新旧関係は明確でない。

規模：ゆるやかな弧を描き、南北方向に約6m延びる。溝幅30～40cm、断面は浅い皿状で、深さ5cmを測る。

埋土：やや粗い赤～黄褐色砂からなる。流れに沿って溝の底部付近に残されたものか。

構造：自然流路か。

遺物：なし。

SD20（第242図、第268図 P L 102）

位置：XVII B-10、C-06

検出：東西南北を意識したL字状の平面形を確認した。切り合いなし。

規模：南北方向に約2m、東西方向に4約m延びる。溝幅20～35cm、断面は皿状で、深さ50cmを測る。

埋土：暗オリーブ褐色シルト質砂からなる。

構造：区画の溝か。

遺物：なし。

④ 畝状遺構（SL）

SL01（第245図、第268図 P L 102）

位置：XVII H-11・16・17

検出：中世検出面より上位の砂礫層の上面で検出した。上を覆った砂層を除去し、黒い帯の凹凸を認め、形状から畑の畝と判断した。切り合いなし。周辺のSK類との関係は畝跡のほうが新しい。

規模：南西～北東へ黒色シルトの帯が長さ2.5m、XVII H-16南半分は検出面が平坦になり、畝は検出されない。また北東側も傾斜が急になり一部検出されたのみである。

埋土：黄褐色～褐色の砂礫に覆われる。

構造：黒色粘土シルトの部分は畝で、高さは5～10cm、畝の間隔は40～50（最大60cm）を測る。

遺物出土状況：畝埋土砂礫より少量出土。

遺物：第271図9、10はかわらけ、第280図1は鉄製の釘である。

⑤ 方形竪穴建物跡（SX）

SX01（第241図下、第268図 P L 103）

位置：XVII B-04・09

検出：近世以降につくられた盛土面で検出した。切り合いはなし。

規模：長軸N38°E、長さ5m、幅1～2.7mを測る。底面は凹凸が著しい。

埋土：炭化物、土器粒が混じる。粗粒である。

構造：不整形な落ち込みで、流路的な溝につながる。

遺物：第271図1はかわらけである。

SX09（第242図、第268図 P L 103）

位置：XVIC-12

検出：中世検出面で井戸 SK1399 の調査終了後、東側に検出を広げたところ黒色土の広がりを検出した。土砂押し出しによって被覆された窪地部分の可能性もある。

規模：傾斜方向下方に当たる東側壁は検出されなかったが、平面は長方形と推定される。長軸 N75° W、残存長 (4.5 × 3.5m)、深さ 20cm を測る。

埋土：淘汰のよい黒色土。

構造：床面と思われる硬い面はないが、比較的底面が平坦である。

遺物出土状況：かわらけが出土している。

時期：中世検出面に被覆する土石流がつくった窪みと思われ、中世より新しい時期の所産と考える。

SX16 (第244図 P L 103)

位置：XVII G - 11

検出：重機により表土を除去後、礫の頭を確認し、列をなしていた礫を検出した。切り合いなし。

規模：傾斜方向に東西に並ぶ。長軸 N70° W、長さ 5.5m、幅約 60cm を測る。

構造：中世遺構とは異なり大きい礫で構成されている。

時期：遺物はなく、構造等から近世以降の所産か。

SX17 (第244・268図 P L 103)

位置：XVII G - 11

検出：重機により表土剥ぎ中に、径 30cm 大の礫がコの字形に並ぶのを検出した。切り合いはなし。

規模：東側傾斜面下部方面に開くコの字形を呈する。長軸 N75° W、礫の範囲は 1.4 × 1.4m を測る。

埋土：黒色土。

構造：礫は径 30cm ほどのものを南に 4 個、西に 3 個、北に 3 個を並べ数個の礫が被るよう検出されている。コの字に囲まれた内部には一部粘土があり、底部としての機能を持たせたものか。掘り方は明確に検出できない。規模の小さな礫の配列で性格は不明。SX16 とは軸方向が共通している点から何らかの可能性はあるか。

遺物出土状況：銭片が出土。

時期：遺物はなく、構造等から近世以降の所産か。

⑥配石 (SH)

SH12 (第246・268図 P L 103)

位置：XVII H - 07・08・12・13

検出：表土を重機で除去し中世第1面を検出中、XVII H地区中央の傾斜部より検出した。角礫を積み上げた状況で傾斜に沿って帯状に広がる。意図的に礫を並べた様子はない。切り合いはなし。

規模：長軸 N24° E、長さ 14.5m、幅 4.6m の範囲に人頭大～拳大の角礫が不規則に集石する。

構造：傾斜地を平場にするための造作が行われ、傾斜部分に礫を落とし込み補強としたとも考えられる。

遺物出土状況：礫間より青磁片、美濃、中津川、山茶碗、古瀬戸、かわらけ、灰砂、土師器などが混入。

遺物：第270図47は中津川の裏の口縁部である。49は珠洲の頸部、第280図3、5は鉄製の釘である。

時期：現水田造成による段にほぼ重なるようにしてあり、水田造成時の段差補強とも考えられる。遺物は、中世の陶磁器がみられたが、時期は近世以降の水田造成時の所産と考える。

SH15 (第243・268図 P L 103)

位置：XVII I - 08・09

検出：重機により表土を剥ぎ中に礫の頭を確認した。列をなして配置された礫の一群を検出した。切り合いはなし。

規模：長軸N16°W、長さ7.7m、幅3.3mの範囲に礫径5～20cmの角礫が不規則に集石する。

構造：東側に現在の道路が並行して走る。当初は、道路敷き跡とも推測したが、並んだ礫の上面が平坦でなく、水田造成時の段整地の跡とも考えられる。

遺物出土状況：礫間より出土。

遺物：第280図6は鉄製の釘である。第282図12は銭、元豐通寶である。

時期：検出状況から近世以降と考える。

⑦遺構外遺物

第271図11はB-02出土のかわらけである。12はB-08かく乱出土の火鉢の底部である。

第274図12はG-08出土の天目茶碗後期Ⅱである。18はG-07出土の古瀬戸の緑釉小皿である。

6. 小 結 (中世)

(1) 中世の概観

東條遺跡は古墳時代後期(7世紀後半頃)から戦国時代(16世紀末頃)にかけての複合遺跡である。遺跡の標高は366～382mを測り、標高差16mほどの傾斜地に位置している。土層からは、何回かの土石流の堆積が観察でき、土石流堆積の間には、土器・石器を含む土層(包含層)が存在している。ここでは、中世の遺構、遺物等について補足し、幾つかの課題についても触れておきたい。

低地部分の調査

中世の遺構が検出された位置は、主に調査区のXVⅡB・C・G・H区にあたる。傾斜地として見た場合、最も高い地点が調査区南側のXVⅡG区であり、低い地点がC区となる。さらに細かく見るとC区01から10区と西に接するB区04・05・09・10区一帯が調査区の中でも低い土地となり、調査中も湧水が染み出る状況である。地形の傾斜方向は南西から北東方向にあり、更級川からの氾濫がその方向に流れ、調査区内を幾度か土砂が覆ったという自然環境が推測される。

この氾濫は遺跡内を縦断しているが、とくに調査区西側では室町時代末から戦国時代頃の方形竪穴建物の検出面がその後の氾濫で削られていたことも土層観察から考えられた。このため、西側の調査はトレンチ調査のみとした。

この低地部分であるが、湿潤な土地であったためか、杭・柱といった建築部材の他に、多くの木製品が出土した。一方で、平石を配した遺構もみつかるとして、この一帯の遺構の状況は調査時においても、解釈において困難を極めた。ここでは、この低地部分状況をまとめておきたい。

①調査経過

旧水田層を重機により除去中に、天目茶碗片の出土と平石がまとまって敷かれている配石が検出された。この層には礫が30～40%と多く含まれていた。平石の配列は3箇所にみられ、平坦面を上面に丁寧に配しているSH02と、やや散在傾向を示すSH03・04とを検出した。配されている礫は厚さ3cmの平たい礫である。

SHの調査を進める中で、粗粒砂の堅致な面が帯状に観察された。脇からは、礫が帯状に検出され、検出面はおびただしい礫が広がる状況となった。これら礫が人為的に配されたかの判断についてはある程度平坦面を持った礫がフラットに位置することをひとつの着眼とし、集中のあり方、立位、比較的大きな礫の集まりを残しながら、自然礫との区別をして調査を進めた。

並行してSD12を検出し調査を進めた。流水性の黄褐色砂礫が埋土の溝である。南側縁辺より、杭の頭が溝に沿って並ぶことが確認された。埋土の観察により、南側から流れ込む流路がSD12に合流すること

を確認した。また、溝底部より10×10cmの角柱の柱材を検出し、その後、周辺にも同様の角柱材が検出された。

SD12に沿う杭列の確認と流路の検出をする。杭列は8mほどの長さで終わり、30～40cmの礫を溝の側壁で観察された。検出してきた砂礫は南側上方からの流れ込みと判断した。SD12としてきた溝は、杭列に沿った溝で、杭は溝縁辺部の土留めや整地のための施設と推測する。

SD12の杭は長さ50cm、幅10cm、厚さ1～2cmの材を用いている。杭の傾斜上部側には枝木などの細木を用いて横に並べ、粘質土で固めて構築されていた。杭列は溝の片側しのみ見られ、反対側の縁辺は、多くの亜円礫が底部に向かって緩やかな傾斜を持って落ち込んでいた。

SH02・03調査終了後、サブトレンチを設定し、掘り下げる。トレンチの断面より、黒色腐植土が層をなす地点を確認し、完形の漆椀、硯等の出土をみた。この堆積は一定範囲に限定されているため住居跡の床施設などの可能性も推測された。

SD12の杭列に接して新たに同様な平石を用いた配石(SH06)が検出される。SH02の下部から砂層が検出されたが、ここにも平石の配列が上部よりさらに密集した形で検出され、SH02の配石が作り替えの可能性も考慮した。

先に住居と仮定した範囲での柱穴等の検出を試みるが、φ10cm程度の丸材が3本、砂層に掘りこまれるピット10箇所ほど確認されたものの柱穴と判断できる痕跡は得られない。焼土を伴ったピットが検出されるが、それより新しい丸材SK1334が立つことが確認される。砂層を掘り下げ、黒色腐植土の範囲を確認し、黒色腐植土の下部層(2層の黒色腐植土には挟まれた層)は粘土質、また粗粒砂が硬く締まった堅致面を呈していた。堅致な面は床面と捉えられるかどうか、調査では判断できなかった。

この粘土質層を取り除いた下の層からは椀材や椀のような木製品、銭貨が20点近く出土するとともに、丸材の上端が検出されてくる。堅致な面が存在しない地点は粘質土混じり砂土が礫を伴って検出され、おびただしい礫を取り除くと礫に押しつぶされ、礫がかぶった状態で曲げ物SK1317が埋設されていた。住居跡に伴うものかどうか判断し難い。

角材、丸材の柱、杭の検出を進め、角材14点、丸材40点あまりを確認するが、これらを全体として俯瞰し、建物が建つかどうか検討したものの、柱数が多く、建物を想定するに至らなかった。

時期は遺物の状況から、時期的には13世紀後半から15世紀と幅広く捉えておきたい。

礎石および掘立柱建物跡

①礎石建物跡

先に記したとおり、中世の調査は土層の堆積と検出された遺構、出土した遺物の状況を検討しながら進めた。礎石建物跡が検出された層は、青磁、古瀬戸などの陶磁器類を包含する層より上で検出(中世第1面)されている。特にST38の検出では、SX11と重複し、ST38が古い。その結果、ST38の帰属時期は次の通りとなる。

中世第1面検出なので、帰属時期は室町時代中期から戦国時代となる。さらに、SX11が室町時代末から戦国時代に帰属することから、ST38のつくられた時期は室町時代中期頃と推測される。

宮本長二郎氏によると、礎石建物について建築史的にみると次のようにまとめられる。

まず、弥生時代から中世まで続く伝統的な掘立柱建物がある。この工法は柱間が不揃いで一定ではない。わざと不揃いになっている点は特徴的である。中世の豪族クラスではこのタイプの掘立柱建物が一般的である。一方で、大陸から伝わった建築法があり、宮殿や寺社の建築は設計されたもので、礎石や一定の柱間を持つ。礎石建物は掘立柱建物と比べて、上部構造を考慮して設計される。設計がないと建物は建たず、礎

石は重い構造物に対応し、いわゆる大工（番匠）が設計する。ちなみに、家大工は江戸時代になってから一般化する。一般の農民は自分で建てた。城下町づくりで集まった大工が、建設が落ち着くと人手があまり、家大工になってゆく。伝統的な宮大工とは系統を異にした。

中世における礎石建物は、地頭級ではかなりの有力者でないといつとくらず、掘立柱建物を利用する。庄屋クラスが礎石建物を持つのは近世に入って後である。一方で、権力者を想定せず、モニュメンタルな建物と考えれば、地域住民が大工技術を持つ者に指導を受けて、地域におけるお堂などを建てる、知り合いの大工と一緒に力を合わせて、建物を建てることも考えられる。地域の地域民の手による建物とも考えられる。周辺で多くの柱穴が出ていることは、居住は掘立柱建物であったことを裏付けているのかもしれない。

礎石建物は通常上屋は重い建物である。どのような理由で室町時代中頃になると突然、東條遺跡に礎石建物が建てられることになるのか。建てたのは有力者か一般庶民なのか、判断は難しく課題として残された。

東條遺跡の礎石建物については礎石の大きさに大小があるものの、共通した特徴がある。

ア 更級川を起源とする洪水や土石流が流れる場所で、傾斜地に立地していること。

イ しっかりした地盤作りがないこと。

東條遺跡における礎石建物跡は、その立地が必ずしも安定した地盤にない。それにもかかわらず、礎石を置く地盤は、平坦になされているものの地盤を硬化させるなどの作業がなされていないことが、調査で確認されている。このことは、本遺跡における礎石建物の利用のあり方を考える際のポイントとなろう。

井原今朝明氏によれば、基礎が流されないために礎石を使い、洪水などで物が流されても、すぐに礎石基礎によってつくり替えが可能であったため利用されたのではないかと。つくり替えられる建物、町家建築の原型である。との解釈もいただいている。

また、小野正敏氏からは、礎石建物跡の時期について、礎石建物跡が14世紀代とすれば一般的でない。それ以降とすれば、14世紀代をどのように位置付けるのか。との課題を示された。礎石建物跡の時期は室町時代中期以降と考えているが、礎石建物跡が登場する以前と以後の明確な画期は現段階では示せなかった。

②掘立柱建物跡

今回の調査では、中世に帰属する約1500基におよぶ柱穴状の土坑と杭が検出されている。このうち、掘立柱建物として組める土坑もあると考えられ、発掘作業、整理作業を通して検討したが、明瞭にはできなかった。

宮本長二郎氏の指導では、以下の助言をいただき、検討の参考にさせていただいた。

鎌倉幕府が武家の住宅について総柱型を採用し、やがて、総柱型が地方の屋敷へ波及する。規模は、5間×5間以上の柱間で、柱間6尺5寸が基本である。一般の民家のものでは、梁間1間型で庇がつく場合がある。一見して梁間2間に見える場合も、棟持柱をもつ梁間1間型と考えるほうがよい。

組み合わせとしては、総柱型が母屋で、梁間1間型は付属屋が考えられる。

13～14世紀頃になると、部屋境の柱が出てくる。また、柱穴が連続的に並ばず、抜けている場合も出てくる。特に梁間1間型は、柱間が等間隔にならず、柱穴が相対しないこともある。

東條遺跡は傾斜地に建物が造られるが、床は平らにしたとしても、柱の深度は、傾斜と比例して深度が変化するわけではなく、まちまちである。旧地表面が確認できない場合もあるので、柱深度による分類は難しく、一概に言えない。

建物の造営尺は6世紀末以後、7世紀代は小尺：0.292～0.295m、8世紀代は：0.296～0.300m、平安時代は：0.300～0.304m、鎌倉時代初期にはピークの0.305mにまで尺度は伸び続け、以後は縮小

しつつ、近世には現尺にいたる。

柱間寸法は等寸法ではなく、ばらばらな寸法である。但し、5寸きざみの差がでる。

桁行はまっすぐにはならない。両側柱は平行にならない。山形にずれたり、外側に膨らんだり、台形、平行四辺形もあり、一般集落の伝統といってよい。しかし、違っていても技術的には進んでいる。いい加減ではなく、尺度を持って変えている。低地部分の XV II C02・03 付近の柱根を見ると、大型の 4～5 間あるような作業的な建物も考えられる。

掘立柱建物には、大きく二つの系譜があり、一つは弥生・古墳時代以来の流れをひくものと、もう一つは平安時代以降に新しく生まれた流れのものである。古いタイプのもは、柱列がそろっていなかったり、柱間が一定でなかったりし、この流れは近世初頭まで続いている。新しいタイプのもは、比較的きっちりとして作られており、総柱建物が主流である。10世紀以降にみられ、おそらく武家層に広く用いられたものと考えられている。

③低地部分の柱根について

柱根は丸木柱、角柱、長方形柱がある。観察結果からは、太い樹木から柱に適する部分を計画的に取り出したものというよりは、丸太の表面を面取りした材が多く見られた。立派な屋敷跡というよりは、小屋的な簡素な建物が建っていた可能性も考えさせる。また、転用材もみられ、建物を目的に作られた材ではないとも言えそうである。このことは、その利用者の具体像はすぐさま有力者に結びつくものでないことが考えられる。

このことから、多数の柱穴は何回もの建て替えや簡易な建物利用が想定される。このうち幾つかの柱穴は片底的な簡易な建物の痕跡として理解されるべきものも含まれていると考える。そのような状況であるからこそ、多数の柱穴を建物跡として組むことを逆に難しくしている。

井戸跡と方形竪穴建物跡

①井戸跡

検出された井戸跡の時期は鎌倉時代後期から室町時代前期に帰属するものを最古とする。石組み井戸跡であり、中世における石積み技術の一端を示すものである。この時期の石組み井戸跡事例は例が少なく貴重事例といえよう。各石組み井戸跡は利用時の上の部分、積み方、底のあり方や出土物について記述したが、このうち、天場石と考えられる井戸跡もあり、利用時の地表に出ている面（平らな石で入り口全体を押さえる必要がある）を確認したことになる。

また、断面観察からは、石の積み方が途中で変わり、積み直しがあつたことが伺える事例もあつた。

出土遺物については、木製品を含む土器などが廃棄されていた井戸跡と、遺物のほとんどない井戸跡とに分かれる。井戸跡の祭祀の有無や井戸跡利用時の考え方などが反映したものであろうか。そこには曲げ物の水溜を設置している例もある。

なお、井戸跡は近接し、同時期利用が考えにくい例があり、何らかの理由によりつくり変えが行われていることが考えられる。

②方形竪穴建物跡

この竪穴状の遺構は一辺4m前後の方形で、壁に石をめぐらし、炉のような焼土だまりを壁側に1箇所ともなう。めぐらした石は一部途切れ、そこが出入り口部と考えられる。県内では佐久市北山寺遺跡ほかに幾つかの類例があり、住居や作業小屋的な利用が推測される。同様な例の一つである富士見町砂原遺跡の事例は、時期が1500年代で、東條遺跡のものと同様である。砂原遺跡では穀物蔵とされるもので、あわせて、農民の掘立柱建物跡が検出され、屋敷地を構成している。東條遺跡では、穀物蔵としての証拠は得

られていない。地下倉や竪穴倉か、焼土や炭を伴うので作業小屋か判断し難い。

上層構造を考えられるように、柱穴探しを遺構内外で行ったが、検出できなかった。SX02・03で見られた焼土塊が土壁として利用されていた可能性もある。遺構の性格を考えるために、床面で検出された焼土・炭分布の土を取り上げて鉄屑等の有無を確認したが、特に記述する結果は得られていない。

木製品

東條遺跡では、井戸跡や低地部分で5,585点の木製品を得ている。このうち、407点を図掲載した。分類は、「J」漆器190点、「K」杭394点、「T」火付け具1,064点、「S」箸等1,359点、「C」木屑1,205点、「W」木器類500点、「P」板類866点、その他7点である。

以上の分類は、次の手順でまとめたものである。

第1段階：材の形態での分類（分割材、芯もち材、削り出し、板状のもの）

第2段階：材への人為的痕跡での分類（加工のある材、加工のない材・・・自然木）

第3段階：器種分類の可否。

加工については、以下の通り。

1次加工（第1段階での材を作りだす加工）

2次加工（1次加工材をさらに加工して、形を整えたもの、未製品も含まれる。）

3次加工（製品として細部調整加工をしたもの）

また、製品については、単体で製品と判断できるもの（下駄・櫛・漆椀など）、未製品、完成品だが欠損品、製品だが器種不明の木製品、部材に分けた。

製品については、加工があるもの（穴がある、削り込みがあるなど）、加工があるが製品ではなく判断できないものがある。

このほか、製作工程上の資料として、残材：長さの調節のための切り残りの板材（たとえば、板を柁目で割って、刀子でカットして折れている板材（残材）は工程上のものとする）。割っただけの板材（素材から割っただけで手が入っていないもの）などがある。

製品として認識できる木製品は、漆器・櫛・さじ・下駄・絵馬状木製品・曲物・祭祀具（刀形・陽物・琴柱）・杓子・樹皮製品・栓・鞘（さや）・塔婆・柄・編物・木筒・木釘・建築部材・井戸枠などである。このほか、用途不明の木製品やその残材、残屑などである。その中から、いくつかについて若干触れておく。なお、木製品の分類・評価にあたっては、山田昌久氏のご指導を得て進めた。

①多様に利用した曲物

中世の井戸や包含層から直径10～20cmの円形曲物の底板（または蓋板）が、破片を含めおよそ80点出土した。また、底板を抜いた大形の曲物を水溜として埋設している鎌倉～室町時代の井戸が2基検出されている。さらに、曲物を加工・利用した柄杓や折敷、曲物の底板を再利用した絵馬状木製品や刀形の祭祀具、曲物の側板材の利用とも考えられる木筒なども確認された。

②同一樹種の用材が使われている櫛

14世紀代の井戸や包含層から櫛6点が出土した。すべて幅広の長方形をした横櫛で、歯が密に詰まっている櫛と間隔の広い櫛がある。樹種はすべてイスノキである。東海地方以西の四国・九州・沖縄の暖かい地域に生育する常緑高木であることから、他地域からの流通品として持ち込まれたものと考えられる。

③建築材を切断した残材ほか

木製品のうち製品として判断できない端材や木片があり、建築材を加工する際、不要として切り取られた部分と考えられるものもみられた。

④漆器

漆器は、12世紀になると、古代国家権力の衰えとともに、各地で工人たちが自立した漆器生産を開始し、安価な渋下地とよばれる漆器が出現する。塗りも1～2回、木地もケヤキからブナ・トチなど地元で手に入れやすい材を利用し、赤色漆が漆絵として使われるようになる。東條遺跡で出土した漆器も渋下地のものが多く、大量生産的な安価な普及品といえる。しかし、古代の伝統的な要素を持つ、木地にケヤキを利用したものや塗膜回数が多い漆器も若干存在している。

⑤その他

ヨコ引き鋸の痕がある積み木状の材が見られた。建築中に長さを調節するために切り落とした端材であろう。施設材の再利用か、施設材の端材を使ったものか。板材については、器種に行き着けないものも多く、「へぎ板」として括った。

木製品の製作過程を想定し、各段階を迫る作業も計画したが、今回そこまでに行っていない。木材が製品入手材か現地入手材かについては、樹種鑑定資料との再検討が課題として残った。

出土陶磁器類

東條遺跡の中世土器の構成は ①青磁・白磁・青白磁の貿易陶磁器、②古瀬戸陶器、③常滑系の甕類、④珠洲焼の甕、壺、⑤カワラケ、⑥内耳土器である。

出土資料の全体は接合以前で10412点となる。このうち、かわらけ6744点、灯明皿880点と全体量の8割弱を占める。青磁・白磁の貿易陶磁が567点、内耳土器648点、古瀬戸184点、常滑系（中津川等含む）346点、珠洲系（地元産主体）369点などである。出土地点はXVⅡC地区で出土量の半分近くを占めていた。

貿易陶磁は青磁が多く、12世紀～13世紀のものが主である。全体に破片が多いこともあるが、量の多寡で、地域おける有力者の存在などを考えることは難しいと考える。興味深い資料として、黄軸鉄彩の盤の破片と小型夜学型器台の破片がある。出土例は少ないものであるが、遺跡を特徴付ける資料とまではいえないと考える。

古瀬戸も多様な機種があるが、時期としては古瀬戸前期35点、中期71点、後期76点で、古瀬戸中期から後期の資料群が多い。資料全般からは、鎌倉時代後期から室町前期に収まる段階と室町後期以降の段階が考えられる。古瀬戸の詳細は表とし、各器種の時期を概観する。（註1）

天目茶碗：25点あり、古瀬戸中期2点、後期23点である。特に後期Ⅱ・Ⅲ期が12点と多い。

平碗：29点あり、古瀬戸中期10点、後期19点である。特に後期Ⅰ・Ⅱ期が11点と多い。

緑釉小皿：5点あり、古瀬戸後期Ⅲ・Ⅳ古期が4点である。

折縁小皿・中皿：3点あり、小皿は古瀬戸後期Ⅲ期で、中皿が古瀬戸中期Ⅱ期である。

底卸目皿：4点あり、古瀬戸中期Ⅰ～Ⅱ期である。

小皿：3点あり、古瀬戸中期Ⅰ期1点、他2点は細分できず中期とした。

折縁深皿：11点あり、古瀬戸前期1点、中期9点、後期1点で、中期が大半を占める。

直縁大皿：2点あり、古瀬戸後期Ⅰ期～Ⅱ期2点である。

卸目付大皿：2点あり、古瀬戸後期である。

盤類：6点あり、古瀬戸後期Ⅰ～Ⅱ期5点である。

卸皿：27点あり、古瀬戸前期4点、中期20点、後期3点である。このうち中期Ⅰ期が9点と多い。

梅瓶・四耳壺：梅瓶は7点、うち古瀬戸前期2点、中期5点である。四耳壺は7点、古瀬戸前期である。

瓶子：4点あり、古瀬戸前期Ⅲ～Ⅳ期である。

第2章 発掘調査の概要

水注：3点あり、古瀬戸前期1点、中期2点である。

壺か瓶：21点あり、古瀬戸前期16点、中期2点、後期1点である。

仏花瓶：1点あり、古瀬戸中期Ⅰ～Ⅱ期である。

鉄軸仏花瓶：4点あり、古瀬戸中期Ⅰ期～Ⅱ期である。

尊式花瓶：3点あり、古瀬戸後期である。

花瓶・燭台：花瓶3点、燭台1点がある。いずれも古瀬戸後期である。

柄付片口：1点あり、古瀬戸中期である。

双耳小壺：2点あり、古瀬戸後期Ⅲ～Ⅳ新期である。

合子：1点あり、古瀬戸中期Ⅰ期である。

小壺か小瓶：4点あり、古瀬戸中期2点、後期2点である。

筒型容器：1点あり、古瀬戸後期Ⅰ期～Ⅱ期である。

入子：1点あり、古瀬戸前期から中期である。

器種名		前期			中期				後期				古瀬戸計	大量製品			大累計	合計				
		I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III		IV古	IV新	3前			3後	4前	4後	
天目類	天目茶碗					1	1			4	6	6		7	25	25				25	25	
碗類	平碗					1	4		7	1	1				29	29				29	29	
						5			4	3	1											
小皿類	緑釉小皿											1	2	2	5						5	
	折縁小皿											1	2		2						2	
	折縁中皿					1									1						1	
	底印目皿					1									4	15					4	17
	小皿					3									3							3
	志野菊皿 内壳皿					1	2											1	1	1	1	1
盤類	折縁深皿				1	1	2			1					11						11	
	唐縁大皿						5								2	21					2	21
	印目付大皿									1	1		1		2						2	
	盤類									5				6							6	
初皿	初皿			1	2	9	3	2		1	1	1		27	27						27	27
壺瓶類	梅瓶					2	3							7	42						7	
						1		1						7							7	42
	四耳壺		2	1										4								4
	瓶子			1	3									3								3
	水注 壺か瓶		4	5	2	2					1			21								21
神仏具	仏花瓶(小)					1								1							1	
	鉄軸仏花瓶					4								4							4	
	尊式花瓶									2	1			3	12						3	12
	花瓶									3	1			3							3	
	燭台										1			1							1	
鉢類	柄付片口					1							1	1						1	1	
小壺・小瓶類	双耳小壺												2	2							2	
	合子					1								1	7						1	7
	小壺か小瓶							2		1		1		4							4	
その他	筒形容器									1				1	2						1	2
	入子					1	2							1							1	1
不明	不明													2	2						2	2
総計						2	2	3	11	9	3	0	14	7	12	3					183	
						35				71				76							1	185

古瀬戸分類表

中世の様相

東條遺跡の西に接する、姨捨の棚田に続く道（市道9485号線）は鎌倉時代からの古道「一本松街道」と推定されている（戸倉町誌 1999）。遺跡西側は旧地籍名で「市場」、古名で「八日市場」と呼ばれることから、遺跡が当時の人びとが行きかう場所にあったことを推測させる。道を挟んで遺跡西隣には「斎の森」の諏訪社があり、もとはムラの出入りに祀られる「塞の神」に由来する可能性もある。このような土地情報のなか、3面に及ぶ中世面で発見された遺構・遺物は、今後、地域史を解明するための好資料といえる。

検出された遺構は、姨捨山側からの土石流堆積層を基盤としているためか、礎石建物跡や石組み井戸、礎を壁にめぐらせた竪穴状の遺構など、石を利用した遺構が特徴的に認められた。このうち、3間×3間の礎石立ちの建物跡は50cm大の平らな石を利用している。さらに、4間×2間とも考えられる礎石建物跡もあり、周囲の遺構・遺物出土状況と合わせてその性格について今後も検討が必要である。

中世調査面でも調査区北東の低地部分では、角材や丸太材の柱と杭の列が集中する地点や、柱の跡と考えられる多数の小さな穴、屋敷跡などが推測される状況である。遺物については、カワラケ、青磁・白磁の輸入磁器、古瀬戸や常滑などの国産施釉陶器の破片と内耳土器などで、破片の状態がほとんどであるが、あわせて約1万点が出土をみた。主な時期は13～14世紀頃と15～16世紀頃である。また、硯などの石製品や輸入銅銭も多くみられた。さらに、この遺跡を特徴付ける資料には多様な木製品がある。

一方で、遺跡の環境推移と土地利用についてその歴史的経過をまとめることはできなかった。

全国的に低湿地遺跡の調査事例が増える中で、その立地環境の再検討が行われている。東條遺跡においても地質的な内容が分かりやすく記述するまでには至らなかった。とくに、東條遺跡の立地環境は姨捨山側からの押し出しがあり、また、千曲川寄りには氾濫原という環境で、押し出しと氾濫の重なりや境が分かれば、中世における開発実態究明の一助になるものであった。成果の中で、押し出しの時期・方向、繰り返しの経過などをまとめておくことも課題である。

古地図（註2）をみると、姨捨側から流れる更科川が、遺跡調査区南側で分岐している。分岐点には十王堂（閻魔様）がある。神社は一般に分水口にあるとされる。神社の前では市が開かれ、「三味場」とは死者を葬る場である。中世では、「神社・市場・墓」はセットを組む。この図からは、十王堂・八日市場・三味場がセットである。東條遺跡はその中で、どういう位置づけになるか、これらも今後の検討課題である。

立地環境や古地図に見る土地利用のあり方は、一本松街道がここに選ばれた要因を考えさせる。

一本松街道の地盤はどうなっているのか。押し出しのなかで、削り残された高いところが自然に道になったのか、もしくは分水によって道をあえて確保したのかなど、残された課題は多い。

註1) 貿易陶磁については人間文化研究機構小野正敏氏に、古瀬戸については愛知学院大学藤澤良祐氏の鑑定、指導をいただき整理を行った。

註2) 2009「姨捨棚田の文化的景観歴史的調査報告書」千曲市教育委員会による。古地図解説には、国立歴史民俗博物館井原今朝男氏のご教示を得ている。

(2) 木簡について

東條遺跡では、2点の木簡が確認できた。それらについてまとめておく。なお、釈文記号等は奈良文化財研究所木簡データベースに準じた。

木簡1（蘇民将来符木簡）

木簡は調査区北側の中世検出面から出土した（XVII C-01）。13世紀後半から14世紀と考えられる杭列を伴う窪地からの出土である。隣接して東側には柱・杭が多数検出されている。

① 釈文

[家カ]

「<蘇民将来子孫人□□」

227 × 28 × 1 032

「<☆」

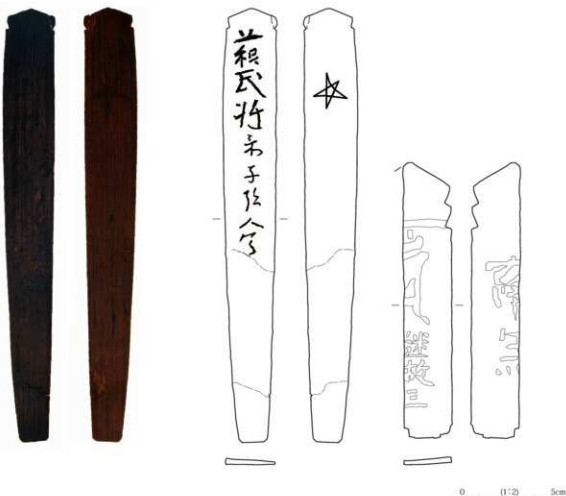
② 内容

上端は切り折れ調整により尖り、頭部に切込みがある。下端部は平坦で、木筒中央部と下部に折れがある。風化が著しく、肉眼では墨書の判読は難しい。釈読にあたっては、奈良文化財研究所史料調査室の御教示を得て解説した。

木筒は長さ 22.7cm、幅 2.8cm、厚さ 0.1cm である。頭部切り込みを利用して、紐をつけてつり下げたとも考えられる。風化の状態は上半のほうが下半より著しいように観察され、地中に刺してあった可能性も考えられる。表面に「蘇民将来子孫人(家)□」、裏面に陰陽道でセーマンと呼ばれる「星」が墨書されている。厄よけのまじないのお札として使われたのであろう。

出土事例は発見当時、山形県から兵庫県まで 46 遺跡 84 点で、長岡京跡右京六条二坊六町（奈良時代）出土例が最古例である。

長野県において蘇民将来信仰は、現在でも、毎年長野県上田市信濃国分寺の八日堂縁日で頒布される六角柱をした木製の蘇民将来符が著名である。今回の木筒はこの信仰についての県内最古の事例となり、「蘇民将来符」木筒自体は県内では初めての出土となった。



第8図 東條遺跡 木筒

木筒 2

木筒は調査区中世第1検出面で確認された井戸（SK1741）からの出土である。井戸内に投げ込まれた礫中から発見された。井戸の底までの深度さが205cmあり、木筒は深さ173cmの地点で出土した。時期は室町時代中期から戦国時代である。

① 釈文

（バン）

・「 迷故三×

・ 南 無 × (146) × (25) × 3 061

② 内容

上部約半分と下部を欠損するが、長さ146mm、幅25mm、厚さ1～3mmが残し、山形の頭部で左右に切れ込みがあるものと推定される。表面の切れ込み二段目に板碑にみられる条線が墨書されている。墨書は墨が抜けた状態で確認でき、裏面の「南無」は表面と比べて不明瞭である。

表面に「梵字（バン）迷故三」、裏面に「南無」が書かれている。「迷故三」は定型文である「迷故三界城」の一部で、欠損部には「界城」が書かれていたと推測される。意味は「迷うために、凡夫の世界は城をめぐらせる」の意味である。梵字は「大日如来」を表す「バン」と考えられ、現代に引き継がれている四国八十八箇所巡礼に関係してこの言葉があり、巡礼装束のうち菅笠の表に書かれる文字のひとつに「迷故三界城」がある。また、「南無」は四国巡礼を考慮にすれば、空海、真言宗関係が考えられ、密教の本尊「大日如来（南無大日如来）」や空海を表す「南無大師遍照金剛」が推測される。同様の文字が書かれた木筒は愛媛県別府遺跡の「迷故三界城」、香川県浜ノ町遺跡の「迷故三界当」などがあり、いずれも井戸からの出土である。

(3) 烏帽子について

烏帽子は土坑（SK844）から、数cm程度の破片となって出土した。破片は最大片でも5cm前後である。出土当初は遺物の性格等の判断がつかず、布のような繊維を持つ資料として取上げ、室内作業の中で烏帽



第9図 東條遺跡 烏帽子

子と判断するに至った。それぞれの破片の接合を試みたが、形状を復元できていない。

資料の表面は黒色を呈し、その下にさらに紙状のものが認められ重なる構造であった。烏帽子と推測するに至ったのは、栃木県下古館遺跡出土烏帽子の報告写真との比較からで、様相が似ていたことによる。これにより、木胎漆器分析を実施した。

その結果、漆塗膜は4層(c1～c4)からなり、下地層はほとんど見当たらない。塗膜c1層は透明褐色、塗膜c2層は炭粉を多少含む不透明褐色、c3層は透明色、c4層は炭粉を多少含む不透明褐色を呈する。下地には、繊維を束ねた布目が見られるが、薄片において繊維自体は空洞であった。なお、分析時の観察によると、内部には紙を挟んで、漆を直接添付した布で折り返している状況が見られた。繊維自体が空洞であるため繊維分析は実施していない。折り返し部分は烏帽子の縁の可能性があるが、全体像がつかめないため判断しがたい。時期は、鎌倉時代後期から室町時代前期と考えられる。

参考文献

- 1979 横田賢次郎、森田勉 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」九州歴史資料館研究論集 4
- 1982 森田勉 「14から16世紀の白磁の分類と編年」貿易陶磁研究第2号 日本貿易陶磁研究会
上田秀夫 「14から16世紀の青磁碗の分類について」貿易陶磁研究第2号 日本貿易陶磁研究会
小野正敏 「14から16世紀の染付碗、皿の分類と年代」貿易陶磁研究第2号 日本貿易陶磁研究会
- 1982 藤沢良祐 「古瀬戸中期様式の成立過程」東洋陶磁 8号 東洋陶磁学会
- 1985 水野和雄 「日本石硯考」考古学雑誌 70巻 4号 日本考古学会
- 1990 倉澤正幸 「蘇民将来符の一考察」信濃第 42巻 第8号 信濃史学会
- 1991 小野正敏 「中世陶磁器研究の視点と方法 - 消費地遺跡からみた問題 -」『考古学と中世史研究』名著出版
- 1992 京都大学埋蔵文化財研究センター 「京都大学埋蔵文化財ニュース 2」
- 1993 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅳ
- 1994 藤沢良祐 「山茶碗研究の現状と課題」研究紀要 3 三重県埋蔵文化財センター
- 1994 国立歴史民俗博物館 「日本出土の貿易陶磁 東日本編 2」同館資料調査報告書 5
- 1995 栃木県教育委員会 栃木県埋蔵文化財調査報告第166集 「下古館遺跡」
- 1995 藤沢良祐 「瀬戸古窯址群Ⅲ - 古瀬戸前期様式の編年」瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第3 瀬戸市埋蔵文化財センター
- 1995 中世土器研究会 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 1997 山梨県教育委員会 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第132集 「大師東丹保遺跡Ⅲ・Ⅳ区」同Ⅳ区」
- 1999 戸倉町 「戸倉町誌第2巻歴史編上」
- 1999 日義村教育委員会 日義村の文化財 14 「長野県木曾郡上村遺跡」
- 2004 (財)愛媛県埋蔵文化財センター 埋蔵文化財発掘調査報告書第114集 「別府遺跡ほか」
- 2004 (財)香川県埋蔵文化財調査センター サポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6冊「浜ノ町遺跡」
- 2006 総研大 日本歴史研究専攻・国立歴史民俗博物館 「儀礼を読みとく」吉川弘文館
- 2006 吉岡康暢先生古希記念論集 『陶磁器の社会史』桂書房
- 2006 四柳嘉章 「漆Ⅰ、Ⅱ」ものとの人間の文化史 131-1, 2 法政大学出版局 2007 水野和雄 「石硯」季刊考古学 99号 雄山閣
- 2008 井原今朝男 『中世寺院と民衆』臨川書店
- 2011 高倉洋彰 『著の考古学』ものが語る歴史 26 同成社

7. 自然科学分析

岩石石材分析

1. 目的

住居跡、土坑、グリッドなどから硬質で緻密な赤色または緑色の岩石が出土した。地山に含まれる礫は安山岩が主であり、また千曲川の河床礫とも異なることから、化学組成を蛍光X線分析とX線回折分析で調べ、石材を鑑定した。

・試料2：石斧 (SB28 取り上げNo.1)・試料3：緑色岩石 (SK138 取り上げNo.1)・試料4：赤色岩石 (SK138 取り上げNo.3)・試料5：層状赤色岩石 (XIX B-13)・試料6：赤色岩石 (XIX A-10)・試料7：赤色岩石 (XIX B-11)

2. 分析結果

分析試料2：石斧は暗緑色の縞状岩石であり、黒色塊と淡緑色部からなる。化学組成はマグネシウム、アルミニウム、ケイ素、カリウム、カルシウム、チタン、マンガン、鉄などのピークが明瞭に検出された。黒色部においてはケイ素が最大51.57%、鉄が最大約16.28%、マグネシウムが最大約18.68%、カルシウムが最大約6.77%それぞれ検出された。黒色部以外では、ケイ素が最大61.11%、カルシウムが最大約10.85%、カリウムが最大3.29%、リンが最大0.98%、イオウが最大約0.47%、それぞれ検出された。

分析試料3・4：緑色部分はガラス質で均質であるが、白色などの鉱物を伴った層状部がみられた。緑色部分の代表的な化学組成は、ケイ素が最大約87.74%、アルミニウムが最大約8.10%、カリウムが最大約4.96%それぞれ含まれていた。X線回折分析ではいずれも石英(Quartz:SiO₂)の顕著なピークが複数検出され、その他では長石類のサニディン(sanidine:(Si₃Al)O₈)やカルシウム-鉄酸化物(CaFe₂O₇)のピークも確認された。分析試料5・6・7：これらの赤色岩石は層状白色部あるいは白色部を伴っている。赤色部の化学組成はケイ素が最大約96.93%、鉄が最大約14.8%、アルミニウムが最大約3.09%、それぞれ含まれる。X線回折分析ではいずれも石英(Quartz:SiO₂)の顕著なピークが複数検出された。なお試料5と6では赤鉄鉱(Hematite:Fe₂O₃)のピークが若干みられた。

3. 小結

石斧の岩石は、暗緑色の縞状構造が見られ、ケイ素が平均約53.22%と低いことから、塩基性の変成岩類である。マグネシウムなどの元素が特徴的に多いことから蛇紋岩類と考える。

緑色あるいは赤色を呈する岩石は蛍光X線分析によりケイ素が大半を占め、X線回折分析から石英を主体としサニディンあるいは赤鉄鉱を含む岩石である。チャートやメノウのように石英主体からなる岩石ではないため、硬質の頁岩質、あるいは碧玉質の岩石と考えられる。なお緑色岩石では、白色などの鉱物を伴った層状部が見られ、化学組成はチタンや鉄が多く、X線回折分析では鉄の酸化物が検出されている。赤色岩石の赤味は非晶質の鉄酸化物起源であると推定される。白色部はケイ素主体であり鉄が少ない部分である。

獣骨鑑定

1. 目的

遺跡出土の骨の種類を明らかにする。

2. 結果

骨の出土点数は187点でそのうち獣骨は102点の種名が判明し、4点の人骨が確認された。結果は第17表にまとめる。第8図～第10図は保存状態のよい獣骨写真である。

3. 小結

古代の墓塚SM02からはウマの臼歯と中手骨あるいは中足骨が出土した。SK1535からは加工痕のあるシカの角が出土した。また押し出しの堆積物であるSD03からはウシ・ウシ?、ウマ・ウマ?、シカ・シカ?、イノシシの骨や歯が出土した。SB03P3からはウマの踵骨、SB16からはシカの歯の破片、カマド

からは焼骨破片が出土。ST06、ST06 下位の溝、SB28 からはウマの臼歯と焼骨片が出土した。中世井戸 SK2745 からはイヌの四肢骨や肋骨などが見ついている。誤って井戸に落ちたとも考えられる。SX03 からはサカナの骨が出土した。

全体としてウシ・ウマの骨や歯が多く出土している。遺構に伴わないものや、1 体としてまとまっていないため葬られたとは考えにくい。

人骨は古代の SF16 から出土した。焼骨である。

木製品の樹種同定

1. 目的

中世（鎌倉～室町時代）の各遺構から出土した木製品の木材利用を検討するために樹種同定を行った。樹種同定の結果は第 16 表 木製品一覧表にまとめる。

2. 樹種の特徴

同定の結果全 396 試料のうち、針葉樹ではマツ科のモミ属 17 点、ツガ属 18 点、マツ属複雑管束亜属 20 点、マツ属 1 点、ヒノキ科のスギ 44 点、ヒノキ 70 点、サワラ 46 点、アスナロ 2 点、ヒノキ属 3 点、ヒノキ科 8 点、広葉樹ではヤナギ科のヤナギ属 2 点、クルミ科のオニグルミ 2 点、カバノキ科のカバノキ属 1 点、ハシバミ属 1 点、クマシデ属 1 点、イヌシデもしくはアサダ 1 点、ブナ科のクリ 65 点、ブナ属 14 点、コナラ属コナラ亜属コナラ節 17 点、ニレ科のケヤキ 20 点、カツラ科のカツラ 2 点、カツラ属 3 点、モクレン科のモクレン属 2 点、マンサク科のマンサク 1 点、イスノキ 7 点、バラ科のモモ 1 点、サクラ属 3 点、ミカン科のキハダ 2 点、ウルシ科のヌルデ 1 点、ミツバウツギ科のミツバウツギ 1 点、ユキノシタ科のウツギ属 1 点、カエデ科のカエデ属 4 点、ウコギ科のハリギリ 5 点、カキノキ科のカキノキ属 1 点、モクセイ科のトネリコ属 5 点、スイカズラ科のガマズミ属 1 点、広葉樹 1 点、イネ科のマダケ属 1 点、不明 1 点が確認された。

第 16 表に製品ごとの樹種についてまとめた。樹種別にみると、針葉樹ではヒノキが最も多く、曲物の側板、底板、蓋、つるべ、箸、杓子、折敷、下駄、塔婆、形代、小刀の柄、柱根、薄板状の製品、棒状の製品などに使用されている。材は木裡直通で大きな材がとれる良材であり、特に保存性が高い。サワラは曲物の側板、底板、蓋、つるべ、箸、匙、下駄、網かご、塔婆、形代などに使用されており、材はヒノキには劣るが、木裡直通、肌目緻密であり、水質によく耐える材である。ヒノキ属は曲物に使用されている。モミ属は温帯性のモミと考えられ建築材としての柱根や、施設材としての井戸の側板材、根太材、井戸側加工材としての板材などに使用されている。材は耐久性、保存性は低いが、軽軟なことから加工が容易な木材である。ツガ属は柱根、井戸の根太材、曲物、箸に使用されている。材は厚重で耐朽性、保存性は中庸である。切削、加工はあまり容易ではない。マツ属複雑管束亜属は柱根、形代などに使用されており、材は水湿によく耐える。スギは曲物、箸、建築材や土木材として柱根、角柱や角柱状の木製品、厚手の板状、板状の木製品、杭や杭状の木製品、曲物の側板に使用されている。加工が容易で大きな材がとれる良材である。広葉樹ではクリが最も多く皿、漆器皿、漆器碗、杭、柱根に使用されており、材は厚重で保存性がよい。ケヤキは碗、漆器皿、漆器碗、下駄、杭に使用されている。材はやや堅硬で強靱であるといえる。コナラ属コナラ亜属コナラ節は漆器皿、漆器碗、柱根、杭などに使用されている。ブナ属は皿、漆器皿、漆器碗、柱根、杭などに使用されている。材は堅硬、緻密、靱性がある。イスノキはすべて櫛に使用されている。温暖帯に分布する常緑広葉樹で材は極めて重硬で強度が強い。加工は困難ではあるが、目が細かく緻密なことから、細かな加工には適していて、櫛の材としてはツゲに次ぐ良材とされている。サクラ属は下駄、柱根、杭に使用されており、耐久性、保存性の高い材で、切削、加工の難度は中庸である。ウツギ属は筒状の木製品に使用されており、材は硬い。マダケ属は不明木製品に使用されている。

3. 小結

板状を呈する試料（容器や井戸の施設としての曲物底板・側板・蓋、食具としての折敷、祭祀具としての形代、木筒、埋葬具としての塔婆、施設材としての井戸の側板材・根太材、厚手の板材、板状の製品、薄板状の製品）は全て針葉樹を使用している。ヒノキ、サワラ、スギは割裂性が高く、櫻を用いた剥ぎ取り板の製作が容易な樹種が選択されていると推定される。また網かごにもヒノキとサワラを使用していた。

建築部材としての柱根は多種の材を使用していたが、特にクリが多い。また施設材としての杭もクリが多く、特に護岸用としての杭は全てクリを使用していた。芯持材の柱材の中にはカキノキ属が使用されていた。本州にはカキノキ、マメガキ、トキワガキの3種類が分布するが、このうちカキノキとマメガキは中国原産の栽培種とされる。トキワガキは現在の長野県には分布していないことから、今回のカキノキ属は栽培種のカキノキ・マメガキの可能性があり、本地域で栽培されていた可能性を示唆する。

櫛に使用されているイスノキは長野県内には分布しておらず、他地域からの搬入品か、搬入された木材により製作されていた可能性もある。履物としての下駄はケヤキ、ハリギリなどを使用している。容器としての漆器の椀・皿にはクリ、ケヤキ、コナラ属コナラ亜属コナラ節を多く使用する。

漆器の漆塗膜分析

1. 目的

中世の木胎漆器の塗膜材質、構造のを検討を行うために、光学顕微鏡による塗膜構造の観察、赤外分光器による漆同定、塗膜に混和されている無機成分を調べるためのエネルギー分散型X線マイクロアナライザーによる分析（文様部分の塗膜を採取できなかったものについては蛍光X線分析）を行った。

2. 分析結果

漆器椀 24 点、漆器皿 14 点、烏帽子 1 点、櫛 1 点、箸 1 点、柄 1 点、板 1 点、不明 1 点、計 44 点を分析した。

3. 小結

漆膜の成分は生漆の成分であるウルシオールが確認されたことからすべて漆である。ただし箸と板からは漆が検出されなかった。漆塗膜の構造は1層のものは椀が7点、皿が6点、櫛が1点、2層のものは椀が13点、皿が7点、不明なものが1点、3層のものは椀が1点、皿が1点、柄が1点、4層のものは椀が3点、烏帽子が1点である。下地層のあるものは椀23点、皿14点、櫛1点、板1点、不明1点でいずれも炭粉である。文様の赤色顔料はいずれも水銀朱である。

放射性炭素年代測定

1. 目的

遺構の時期および周辺遺構との前後関係を明らかにする。

2. 分析結果

得られた¹⁴C年代は以下のとおりである。また暦年較正年代を計算し、時期を示した。

竪穴状遺構 SX03 床面から出土した炭化物 (IAAA-62683) が 390 ± 30 yrBP で、室町時代後期から江戸時代初頭に相当する。竪穴状遺構 SX02・03 埋土から出土した炭化物 (IAAA-62684) が 300 ± 30 yrBP で、室町時代後期から江戸時代初期に相当する。ST21 ビット 4 掘り方から出土した炭化物 (IAAA-62685) が 540 ± 30 yrBP で、鎌倉時代後期から室町時代前期に相当する。ST21 ビット 9 掘り方から出土した炭化物 (IAAA-62686) が 810 ± 30 yrBP で、鎌倉時代中頃に相当する。井戸跡 SK1123 埋土下部から出土した杭 (IAAA-62687) が 660 ± 30 yrBP で、鎌倉時代後半に相当する。SK1350 埋土から出土した木片

(IAAA-62688) が $930 \pm 30\text{yrBP}$ で、平安時代後期に相当する。SK1328 埋土から出土した木片 (IAAA-62689) が $550 \pm 30\text{yrBP}$ で、鎌倉時代末から室町時代初頭に相当する。SD12 杭列の打ち込み杭 (IAAA-62690) が $630 \pm 30\text{yrBP}$ で、鎌倉時代後半に相当する。SD12 杭列の柵材 (IAAA-62691) が $640 \pm 30\text{yrBP}$ で、鎌倉時代後半に相当する。これらの遺構は鎌倉時代から室町時代ととらえてよい。

ベルトーチの2層出土の炭化物が (IAAA-72563) が $680 \pm 30\text{yrBP}$ で、鎌倉時代の中頃に相当する。同8層出土の炭化物 (IAAA-72564) が $930 \pm 30\text{yrBP}$ で、平安時代後期から末に相当する。同12層出土の炭化物 (IAAA-72565) が $760 \pm 30\text{yrBP}$ で、鎌倉時代前期に相当する。SK2197の2層の炭化物 (IAAA-72566) が $900 \pm 30\text{yrBP}$ で、平安時代後期から末に相当する。SK2117の炭化物 (IAAA-72567) が $1060 \pm 30\text{yrBP}$ で、平安時代前期に相当する。SK2122の炭化物 (IAAA-72568) が $600 \pm 30\text{yrBP}$ で、室町時代前期に相当する。ST38 地点Aの炭化物 (IAAA-72569) が $870 \pm 30\text{yrBP}$ で、平安時代後期から末に相当する。ST38-No3の炭化物 (IAAA-72570) が $680 \pm 30\text{yrBP}$ で、鎌倉時代中期に相当する。ST37-G トレンチの炭化物 (IAAA-72571) が $650 \pm 30\text{yrBP}$ で、鎌倉時代後期に相当する。ST37-S6の炭化物 (IAAA-72572) が $720 \pm 30\text{yrBP}$ で、鎌倉時代前期に相当する。SX11 ピット内の炭化物 (IAAA-72573) が $350 \pm 30\text{yrBP}$ で、戦国時代に相当する。SK1682の炭化物 (IAAA-72574) が $290 \pm 30\text{yrBP}$ で、江戸時代前期に相当する。SB54 ピット4の炭化物 (IAAA-72575) が $1260 \pm 30\text{yrBP}$ で、古墳時代後期に相当する。SX15 焼土壁の炭化物 (IAAA-72576) が $400 \pm 30\text{yrBP}$ で、江戸時代前期に相当する。SK1992の炭化物 (IAAA-72577) が $880 \pm 30\text{yrBP}$ で、平安時代後期から末に相当する。SK772の柱材 (IAAA-72578) が $580 \pm 30\text{yrBP}$ で、室町時代前期に相当する。屋敷No1の炭化物 (IAAA-72579) が $600 \pm 30\text{yrBP}$ で、室町時代前期に相当する。屋敷No2の炭化物 (IAAA-72580) が $1070 \pm 30\text{yrBP}$ で、平安時代前期に相当する。SM01の板材 (IAAA-72581) が $960 \pm 30\text{yrBP}$ で、平安時代中期に相当する。SK1396の柱材 (IAAA-72582) が $620 \pm 30\text{yrBP}$ で、室町時代前期に相当する。SK1398の柱材 (IAAA-72583) が $630 \pm 30\text{yrBP}$ で、室町時代前期に相当する。SK1741の果実 (IAAA-72584) が $360 \pm 30\text{yrBP}$ で、江戸時代前期に相当する。SK1372の柱材 (IAAA-72585) が $800 \pm 30\text{yrBP}$ で、平安時代後期から末に相当する。SK1223の炭化物 (IAAA-72586) が $850 \pm 30\text{yrBP}$ で、平安時代後期から末に相当する。SK1194の炭化物 (IAAA-72587) が $680 \pm 30\text{yrBP}$ で、鎌倉時代中期に相当する。SD12の種実 (IAAA-72588) が $650 \pm 30\text{yrBP}$ で、鎌倉時代後期に相当する。SK2315の炭化物 (IAAA-72589) が $520 \pm 30\text{yrBP}$ で、室町時代中期に相当する。SK2744の炭化物 (IAAA-72590) が $830 \pm 30\text{yrBP}$ で、平安時代後期から末に相当する。SK2745の炭化物 (IAAA-72591) が $490 \pm 30\text{yrBP}$ で、室町時代中期に相当する。SK1814の炭化物 (IAAA-72592) が $660 \pm 30\text{yrBP}$ で、鎌倉時代後期に相当する。古代に属する数値があるが、出土遺物からみて炭化物の流れ込みなども考えられる。

井戸SK1111埋土から出土した種実 (IAAA-81460) が $640 \pm 30\text{yrBP}$ で、13世紀後半から14世紀前半に相当する。井戸SK1400埋土底部付近から出土した種実 (IAAA-81461) が $890 \pm 30\text{yrBP}$ で、11世紀後半に相当する。井戸SK1741埋土から出土した種実 (IAAA-81462) が $350 \pm 30\text{yrBP}$ で、16世紀後半から17世紀前半に相当する。SD24埋土から出土した種実 (IAAA-81463) が $630 \pm 30\text{yrBP}$ で、14世紀前半に相当する。井戸SK1679埋土最下層から出土した炭化物 (IAAA-81464) が $169 \pm 30\text{yrBP}$ で、18世紀後半から19世紀に相当する。SK1402から出土した柱根 (IAAA-81465) が $670 \pm 30\text{yrBP}$ で、13世紀後半から14世紀前半に相当する。SK775から出土した柱根 (IAAA-81466) が $620 \pm 30\text{yrBP}$ で、14世紀前半に相当する。SK1334から出土した柱根 (IAAA-81467) が $680 \pm 30\text{yrBP}$ で、13世紀後半に相当する。SK1352から出土した柱根 (IAAA-81468) が $620 \pm 30\text{yrBP}$ で、14世紀前半に相当する。SA2-No3柱根 (IAAA-81469) が $620 \pm 30\text{yrBP}$ で、14世紀前半に相当する。

3. 小結

礎石建物 ST21 ST37 ST38 はその上限と下限より 13 世紀後半から 16 世紀末に建てられた。ST38 の検出面の年代は 14 世紀代であり、ST21 の年代は 15 世紀前半である。「蘇民将来符木簡」が出土した屋敷と称されるXVII C02・03 グリッドの検出面は 14 世紀前半にまとまる。付近の柱穴は若干古い。掘立柱建物跡の可能性のある柱根については 13 世紀から 14 世紀前半の年代が示され、これらは遺物とも整合性がある。木棺墓は古代の年代が出たが、板材の採取箇所や転用を考えると疑問である。所見どおり近世としたほうがよい。竪穴状遺構 SX02・03・11・15 の年代は 16 世紀後半である。井戸は SK1123 (13 ~ 14 世紀) に壊された井戸 SK1400 は比較的古い 11 世紀後半の値を示す。SK1111、SK1814 は 13 世紀後半から 14 世紀前半の値を示す。井戸 SK1741、SK1741 種実は 16 世紀後半から 17 世紀前半の江戸時代の値が、井戸 SK1679 は近世の値を示した。いずれも出土遺物との間にはずれがみられる。

第17表 東條遺跡 人骨・獣骨一覧表

写真No.	遺構名	取上げ No.	地区	層位	種名	骨名	部位名	左右	歯 上下	歯種	状態	認定コメント
			X IX B16	II層	ウシ	歯	臼歯片	不明	不明	不明	破片	
写真 11	5803 P3		X IX B13・B18		ウマ	骨	踵骨	左			完形	関節炎痕跡、長:約105mm
	SK56		X IX B12	埋土1層	ウシ?	骨	中足骨?	不明			破片	
			X IX G05	V層	不明	歯	不明	不明	不明	不明	破片	
			X IX B16	II層中	ウマ	歯	臼歯片	不明	不明	臼歯	破片	若くない
	SD02		X IX A09	トレンチ1北埋土1層	不明	骨	不明	不明			破片	
	SD02		X IX A09	トレンチ1北埋土1層	不明	骨	不明	不明			破片	
	SD03		X IX B11	トレンチ2内埋土1層	ウシ	歯	臼歯片	不明	不明	臼歯	破片	
	SK84		X IX B17	埋土	不明	骨	不明	不明			破片	横骨片
	SK90		X IX B16	埋土	不明	骨	不明	不明			破片	
写真 13	SK90	No.2	X IX B16		シカ	骨	上脛骨	右			破片	骨幹遠位部
			X VI E19	検出面	ウマ	歯	下顎臼歯	左	下	臼歯	破片	
			X VI E	検出面	ウマ	歯	下顎左第二大臼歯	左	下	第3大臼歯	完形	若い個体、歯冠長31.6mm
			埋土		ウマ	歯	上顎臼歯	不明	上	不明	破片	
			埋土		ウマ	歯	上顎第二小臼歯	左	上	第2小臼歯	完形	歯冠はさほど高くない
	SB16		X VI E19	I層	シカ	歯	不明	不明	不明	不明	破片	
	ST06		X IX F01		ウマ	歯	上顎臼歯	不明	上	臼歯	破片	横骨(高温ではない)
			X VI E18	検出面	ウマ	歯	上顎切歯	左	上	第2切歯	ほぼ完形	若い個体
	ST06 下溝		X IX F01		ウマ	歯	上顎右臼歯	右	上	第3大臼歯	完形	若い個体
	ST06 石No.2の下		X IX F01		不明	骨	四肢骨片	不明			破片	横骨
	SB33	No.1	X IX A16		不明	骨	不明	不明			破片	横骨
	SB33	No.2	X IX A16		シカ	歯	不明	不明	不明	不明	破片	破片
	SB33	No.3	X IX A16		不明	骨	不明	不明			破片	破片
			X IX A16	V層	ウマ	歯	上顎歯	不明	上	不明	破片	
	SB27 カマド内		X VI E17・E18		不明	骨	不明	不明			破片	横骨
	SB16 カマド内		X VI E19		不明	骨	不明	不明			破片	横骨
	SB16 カマド内		X VI E19		不明	骨	不明	不明			破片	横骨
	SB16 カマド内	骨No.7	X VI E19		不明	骨	四肢骨片	不明			破片	破片
	SB16		X VI E19		不明	骨	不明	不明			破片	横骨
	SB29		X IX A21・F01	埋土	不明	骨	四肢骨片	不明			破片	横骨
	SB28 ST06 下溝		X IX F01		不明	骨	不明	不明			破片	遠位関節
			X VI E14	検出面	ウマ?	骨	中手あるいは中足骨	不明			破片	破片
	ST13 P20		X VI H14	埋土	不明	骨	破片	不明			破片	横骨
	ST18 P2		X VI H13	埋土	不明	骨	破片	不明			破片	破片
	ST20 P5		X VI H13・H14	埋土	不明	骨	破片	不明			破片	横骨
			X VI C02	VI層	ウマ	歯	上顎右第二小臼歯	右	上	第2小臼歯	完形	やや歯冠が低い(若くない)
写真9-A			X VI C03	VI層	ウマ	骨	指(後肢の基節骨)	不明			完形	最大長74mm
			北区		不明	骨	破片	不明			破片	
			X VI C02	VI層	不明	骨	破片	不明			破片	破片
			X VI C05・10	V層	ウマ	骨	寛骨臼部	右?			破片	
			X VI C10	V層 上面	イヌ	骨	大趾骨(骨端欠)	左			破片	骨幹のみ、幅13.7mm厚12.2mm
			X VI C10	V層 上面	イヌ	骨	距骨(骨端欠)	左			破片	骨幹のみ
写真1			X VI C10		イヌ	骨・歯	下顎骨と歯(骨端欠)	左	下	CP4M1, M2, M3	ほぼ完形	下顎長139mm近 遠心径20.0mm
			X VI C10		イヌ	骨	距骨(骨端欠)	右			破片	
写真2			X VI D06	V層	イヌ	骨・歯	下顎骨と歯	右	下	P2~M2	完形	
			X VI D06	V層	ウマ	骨	寛骨(坐骨)	右			破片	
写真9-B		No.3	X VI C10		ウマ	骨	指骨(後肢の基節骨)	不明			完形	最大長81mm
		No.1	X VI D06	V層	ウマ	歯	臼歯	左	上	M2	完形	若い個体
		No.2	X VI D06	V層	ウマ	歯	臼歯	左	上	M1	完形	番号8と同一個体
		No.3	X VI D06	V層	イヌ	骨	大趾骨(骨端欠)	左			破片	番号2-1より小さい個体、幅11.4mm厚11.4mm
			X VI D06		シカ	歯	切歯	左	下	I2	完形	シカあるいはカモシカ
写真6		No.6	X VI D06		ウマ	骨	上脛骨(両端欠)	右			破片	
		No.6			シカ	骨	角片	不明			破片	切端あり(6点)
写真3		No.14	X VI C10	V層	ウマ	骨	肩甲骨(両端欠)	右			破片	頸部最小幅53.8mm
写真10		No.4	X VI D06		ウマ	骨	距骨(近位部欠)	左			破片	ほぼ完形
			X VI C08	VI層	ウマ	歯	臼歯	左			完形	
			X VI C04	切歯深トレンチ	不明	骨	肩甲骨?	不明		M2	破片	
			X VI C15		不明	骨	四肢骨片	不明			破片	横骨
			X VI C10	V~VI層 杭周辺	ウマ	骨	手根骨(右舟状骨)	右			完形	
			X VI C10	V~VI層 杭周辺	ウマ	骨	寛骨2つ(坐骨部)	右			破片	
写真12			X VI C10	VI層 SK下部	ウシ	骨	中足骨	左			ほぼ完形	最大長213mm
		No.10	X VI D06		不明	骨	肋骨	不明			破片	ウシ、ウマではない

第2章 発掘調査の概要

写真No.	遺構名	取上げ No.	地区	層位	種名	骨名	部位名	左右	歯 上下	歯種	状態	鑑定コメント		
写真7		No.18	XVI C10		ウマ	骨	中手骨	右			ほぼ完形	近位にカットマーク、遠位に咬痕。最大長195mm		
			XVI C10	VI層 サブトレ	ウマ	骨	上腕骨幹片	右			破片			
			XVI D06	V層 -20cm	不明	骨	不明	不明			破片	頰骨、ウロコ状のキズ有り		
			XVI D06	VI層	ウマ	歯	臼歯	左	上	M2	完形			
		SK845		XVI C08		不明	骨	不明			破片			
		SK1123 (井戸3)		XVI C23	VI層 下部	ザカナ	骨	脛骨			破片			
		SK846		XVI C08		不明	骨	不明	不明		破片			
				XVI C08		ウマ	歯	臼歯	右	上	M3	完形	若い個体	
				No.6	XVI C01		ウマ	骨	頤蓋骨 (側頭骨)	右		破片	下顎基部、番号41と接合	
				XVI C01	VI層	不明	骨	頤蓋骨片	不明		破片			
EW トレンチ			XVI C01	VI層	ウマ	骨	上腕骨幹 (両端欠)	左			破片			
			XVI C01	VI層	ウマ	骨	下顎骨正中部	右			破片	切歯歯槽あり		
			XVI C14	VI層中 下部	不明	骨	不明	不明			破片			
			XVI C10	V層	ウマ?	骨	肋骨	不明			破片			
			No.1	XVI C01		ウマ	歯	臼歯	左	上	M1	完形	高齢 (歯根形成)	
			No.11	XVI D06		ウマ	骨	肩甲骨 (両端欠)	左			破片	頸部最小幅57.2mm	
				XVI C01	VI層	ウマ	骨	頤蓋骨片 (脛骨)	右			破片	番号29と接合	
			No.4	XVI C01		ウマ	歯	臼歯	右	上	M1	完形	高齢 (歯根形成)	
			No.16	XVI C10	V層	ウシ	骨	大腿骨骨頭	左			破片		
			No.2	XVI C01		ウマ	歯	臼歯	右	上	M2	完形	高齢 (歯根形成)	
写真4			XVI C01		ウマ	骨	頤蓋骨 (側頭骨)	右			破片	番号29と接合		
			No.5	XVI C01		ウマ	骨	頤蓋骨 (上顎骨)	右			破片	歯槽部	
			No.7	XVI C01		不明	骨	不明	不明			破片		
			No.8	XVI C01		不明	骨	頤蓋骨片	不明			破片		
			XVI C10	V~VI層	イヌ	骨	上腕骨 (両端欠)	左				破片	短い	
			XVI C07	黒色土	ウマ	歯	臼歯	右	上	M2	完形	高齢ではない		
			XVI C18	礫内	不明	骨	四肢骨片	不明			破片	脛骨		
			XVI C18		不明	骨	四肢骨片	不明			破片	脛骨		
		SK02・03		XVI B14・B15		ザカナ	骨	脛骨片				破片	脛骨	
				No.11	XVI C01		ウマ	骨	下顎骨正中部	右		破片	切歯歯槽あり (番号32とは別個体)	
ベルト			XVI C13・14・18・19	横出部上層黄褐色土上の黒褐色	不明	骨	四肢骨片	不明			破片			
			No.3	XVI C01		ウマ?	骨	頤蓋骨片	不明			破片		
				VI層	ザカナ?	骨	頤蓋骨片	不明			破片			
				VI層	ウマ?	骨	頤蓋骨片	不明			破片			
			No.10	XVI C01		ウマ?	骨	頤蓋骨片	不明			破片		
				XVI C02	VI層	ウマ	歯	切歯	右	上	I2	ほぼ完形	高齢ではない	
		写真8			XVI C01	VI層	ウマ	骨	中手骨両端欠	左			破片	全周にわたり多数の傷あり
					XVI C10		ウマ	骨	不明	不明			破片	
					XVI D06	V層	ウマ	歯	切歯	右	上	I3	完形	咬耗していない若い個体
					XVI C01	中世VI層	ウマ?	骨	頤蓋骨片	不明			破片	
	XVI C01			中世VI層	ウマ	骨	中手骨	左			破片	69と同一 (臼歯に近い歯槽部)		
					キツネ	骨	第3中手骨?	右			完形			
	XVI C01			中世VI層	不明	骨	頤蓋骨片	不明			破片			
	XVI C01			中世VI層	ウマ	骨	頤蓋骨 (側頭骨、脛骨)	左			破片			
					ウマ	歯	臼歯	右	上	M2	完形			
	XVI C01				ウマ	骨	頤蓋骨 (上顎骨、鼻骨)	右			破片	65と同一 (臼歯に近い歯槽部)		
写真5			XVI D06	VI層	不明	骨	不明	不明			破片			
			No.6	XVI D06	V層	不明	骨	四肢骨片	不明			破片		
			No.4	XVI D06		不明	骨	椎骨椎体	不明			破片		
			XVI C08	VI層	ウマ	歯	切歯片	不明	不明	不明	破片			
			XVI C10	V層	ウマ	骨	肩甲骨近位骨幹部	左			破片	頸部最小幅48.2mm		
		石列周辺		XVI C10		不明	骨	肋骨片	不明			破片	ウマ、ウシではない	
			XVI C14	V層	不明	骨	不明	不明			破片			
			No.1	XVI C15		不明	骨	四肢骨片	不明			破片		
			XVI C04・C05		不明	骨	四肢骨片	不明			破片			
			XVI D11	中世	不明	骨	不明	不明			破片			
SD13		XVI C02		ウマ	歯	臼歯	右	下	M1M2	完形	若い個体 (歯根が長)			
テント下		XVI C10		ウマ	骨	大腿骨 (両端欠)	右			破片				
SM02		XVI C10		ウマ	骨	脛骨 (近位部)	右			破片				
		XVI C10		ウマ	骨	尺骨 (近位部)	右			破片				
		XVI C10		ウマ	骨	中足骨 (遠位端欠)	右			破片				
SK899		XVI C04		不明	骨	不明	不明			破片				
		No.2	XVI C15		不明	骨	四肢骨片	不明		破片				

写真 No.	遺構名	取上げ No.	地区	層位	種名	骨名	部位名	左右	歯 上下	歯種	状態	鑑定コメント
	SM02	No.1	X VI C02		ウマ	骨	中手あるいは中足骨遠位関節片	不明			破片	
	SM02	No.2	X VI C02		不明	骨	不明	不明			破片	
	SM02	No.4	X VI C02		不明	骨	不明	不明			破片	
	SM02		X VI C02		不明	骨	不明	不明			破片	
	SM02	No.3	X VI C02		不明	骨	不明	不明			破片	
			X VI C08		不明	骨	不明	不明			破片	焼骨
			X VI B15・D02	横出面	不明	骨	不明	不明			破片	
	SF05		X VI C14		不明	骨	四肢骨片	不明			破片	
			X VI C01	V層	シカ	骨	中手骨が中足骨	不明			破片	元々ある溝を生かして、カンザシ加工している
	SK1535		X VI E12			シカ	骨	角			破片	加工あり
			Z		Z	ウマ	骨	中足骨幹			破片	
			X VI B18	中世第一様出面	不明	骨	関節	不明			破片	
		No.4	X VI B24	中世第一様出面	不明	骨	四肢骨片	不明			破片	
			X VI B24	中世第一様出面	シカ	骨	角	不明			破片	焼骨
			X VI G13	中世第一様出面	不明	骨	不明	不明			破片	
			X VI H11	中世第一様出面	不明	骨	四肢骨片	不明			破片	
	SF16	No.1	X VI H07	中世第一様出面	ヒト	骨	大股骨片	不明			破片	焼骨、粗線や発達
	SF16	No.2	X VI H07	中世第一様出面	不明	骨	四肢骨片	不明			破片	焼骨
	SF16	No.3	X VI H07	中世第一様出面	不明	骨	不明	不明			破片	焼骨
	SF16		X VI H07	中世第一様出面	ヒト	骨	指骨(中関節、末節骨)	不明			破片	焼骨と足と思われる
	SF16		X VI H07	中世第一様出面	ヒト	歯	臼歯歯根、切歯歯冠	不明	不明	1, M	破片	焼骨
	SF16	一括	X VI H07	中世第一様出面	ヒト	骨・歯	臼歯歯根、指骨(中関節?)	不明	上	M	破片	焼骨(113～117まで同一遺構)
	ST38	1層	X VI 地点 B	中世第一様出面	ウシ	骨	指骨(末節骨)	不明			ほぼ完形	
	SK2136	No.3	X VI G07	中世第二様出面	ウマ	歯	臼歯	不明	上	不明	破片	
	SK2197		X VI B24	中世第二様出面	不明	骨	四肢骨片	不明			破片	
	SK2662		X VI H11	中世第二様出面	不明	歯	不明	不明	不明	不明	破片	
	SK2662	No.1	X VI H11	中世第二様出面	不明	歯	臼歯	不明	不明	不明	破片	
	SK2662	No.2	X VI H11	中世第二様出面	ウマ	歯	臼歯	不明	不明	不明	破片	
	SK2662	No.3	X VI H11	中世第二様出面	ウマ	歯	下顎臼歯	右	下	P4	破片	
	SK2686	No.1	X VI H07	中世第二様出面	ウマ	歯	切歯	右	上	I2	ほぼ完形	
	SK2686	No.2	X VI H07	中世第二様出面	不明	歯	不明	不明	不明	不明	破片	
	SK2686 付近	No.1	X VI H07	中世第二様出面	不明	骨	不明	不明	不明	不明	破片	大型獣か
	SK2686 付近	No.2	X VI H07	中世第二様出面	不明	歯	不明	不明	不明	不明	破片	
	SK2686 付近	No.3	X VI H07	中世第二様出面	ウマ	歯	臼歯	不明	不明	不明	破片	
	SK2686 付近	No.4	X VI H07	中世第二様出面	不明	骨	四肢骨片	不明	不明	不明	破片	
	SK2686 付近	No.5	X VI H07	中世第二様出面	不明	骨	四肢骨片	不明	不明	不明	破片	大型獣
	SK2744 井戸		X VI G04	中世第二様出面灰土粘層	イヌ?	歯	犬歯	右	下	C	完形	全長 31.6
	ST38 礎石下	地点 A (単点)	X VI B23・B24	中世第二様出面	キツネ?	骨	四肢骨片	不明			破片	両端切断、加工痕
	SB49		X VI J12	古代 カマドIV層	不明	骨	不明	不明			破片	焼骨
	SB51		X VI J25	古代 カマドII層	不明	骨	不明	不明			破片	焼骨
	SB67		X VI E21・E22	古代 埋土	シカ?	歯	不明	不明	不明	不明	破片	焼骨
	SB68 カマド付近		X VI D25	古代	不明	骨	不明	不明			破片	焼骨
	SB70		X VI E16	古代 埋土	不明	骨	四肢骨片	不明			破片	焼骨
	SB73		X VI E17・E22・E23	古代 埋土	不明	骨	四肢骨片	不明			破片	焼骨
	SK2279		X VI B24	古代	イノシシ	歯	臼歯	不明	不明	不明	破片	
	SK2403		X VI I10・J06	古代	シカ?	歯	臼歯	不明	不明	不明	破片	
	SK2745		X VI G09	古代	イヌ	骨	肋骨(14本+α)	不明			破片	
	SK2745		X VI G09	古代	イヌ	骨	椎骨2点、志田中足骨		左		破片	椎骨は種体欠損
	SK2745		X VI G09	古代	イヌ	骨	脛骨幹(両端欠)	左			破片	
	SK2745		X VI G09	古代	イヌ	骨	趾骨幹(両端欠)	左?			破片	145-1と同一個体か
	SK2879		X VI J02	古代	不明	骨	不明	不明			破片	焼骨
	SK3000		X VI H12	古代	不明	骨	四肢骨片	不明			破片	焼骨
	SK3051		X VI D25	古代	不明	骨	不明	不明			破片	焼骨
	SK3051		X VI D25	古代	不明	骨	不明	不明			破片	焼骨
	SD33		X VI I03・I08	古代 埋土	不明	骨	椎骨	不明			完形	小型の動物
	調査区北西壁		X VI D20	古代 横出面	不明	骨	不明	不明			破片	
			X VI E21	古代	シカ	歯	臼歯	不明	不明	不明	破片	
			9区南	古代	ウシ?	歯	臼歯	不明	不明	不明	破片	
	SK2879		X VI J02	古代	不明	骨	不明	不明			破片	焼骨
	SK2879		X VI J02	古代	不明	骨	四肢骨片	不明			破片	焼骨
	SK2876		X VI D20	古代	不明	骨	四肢骨片	不明			破片	焼骨
			X VI J07-07	古代 サブトレ	不明	骨	四肢骨片	不明			破片	焼骨
	SK2849		X VI D25	古代	不明	骨	四肢骨片	不明			破片	小型の動物

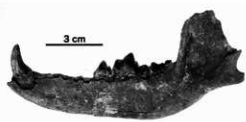


写真1 イスの左下顎骨外側面
咬耗の少ない若い個体である。



写真2 イスの右下顎骨外側面

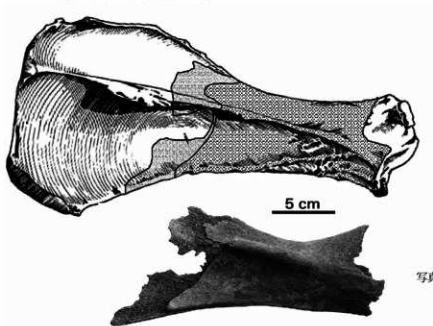


写真3 ウマの右肩甲骨

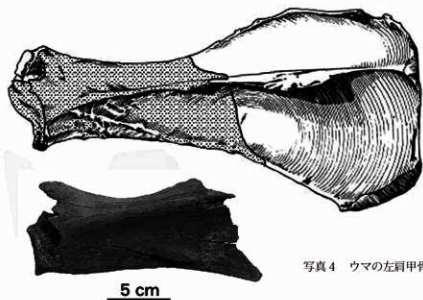


写真4 ウマの左肩甲骨



写真5 ウマの左肩甲骨

図に示したシャドウ部が出土した部位

第10図 東條遺跡出土の獣骨1

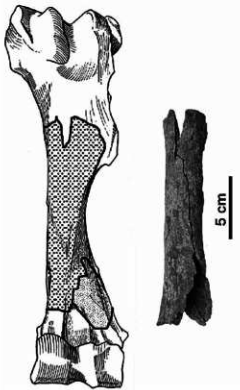


写真6 ウマの右上腕骨

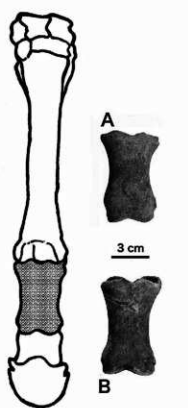


写真9 ウマの基節骨 A・B
どちらもほぼ完形で出土している

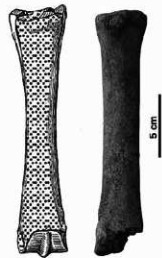


写真7 ウマの中手骨

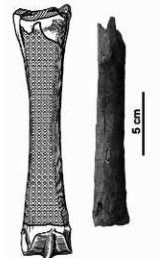


写真8 ウマの中手骨

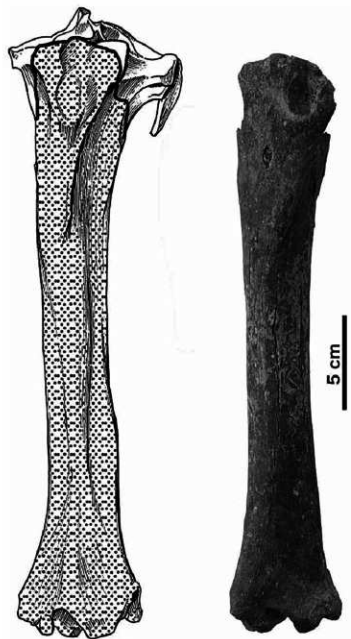


写真10 ウマの左脛骨

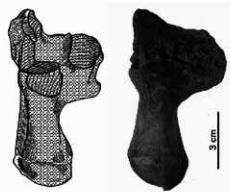


写真11 ウマの左踵骨 関節面が荒れて変形性関節炎になっている

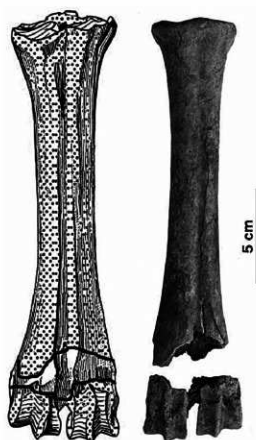


写真12 ウシの中足骨

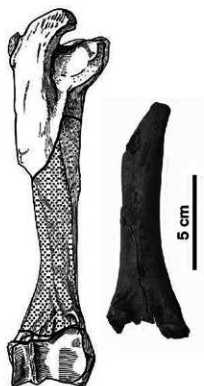


写真13 シカの上脛骨

第12図 東條遺跡出土の獣骨3

第18表 東條遺跡土器観察表(古代)

図版No	写真 No	遺構名	取上げ No	器種	部位	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面色調	備考
第181図1	PL68	S801	No.2	黒色土器A 杯	口縁部～底部	80%	13.0	5.6	4.5	2.5YR8/1 灰白	
第181図2	PL68	S801	No.3	黒色土器A 杯	口縁部～底部	60%	16.2	5.9	5.9	10YR8/2 灰白	
第181図3	PL68	S801	No.6	黒色土器A 杯	口縁部～底部	70%	13.0	5.2	4.4	2.5YR/2 灰白	
第181図4	PL68	S801 カマド部	No.8	黒色土器A 杯	口縁部～底部	50%	<15.0>	<7.3>	<4.2>	7.5YR7/2 明褐色	
第181図5	PL68	S801 カマド部	No.8	黒色土器A 杯	口縁部～胴部	30%	<15.0>	—	(4.5)	7.5YR7/3 IC 赤い槽	
第181図6	PL68	S801	No.1	黒色土器A 杯	口縁部～底部	完形	12.8	5.2	3.3	5YR8/2 淡褐	
第181図7	PL68	S801	No.4	黒色土器B 皿	口縁部～底部	90%	12.4	7.0	2.6	N 3/ 粗灰	
第181図8	PL68	S801 カマド部	No.8	武蔵型埴	口縁部・胴部	30%	20.5	—	—	7.5YR6/3 IC 赤い槽	
第181図9	S801 埴土	—	—	須恵器壺A	口縁部	10%	<37.0>	—	(11.2)	10YR2/3 黒褐	
第181図10	PL68	S803	No.7	非砂土師器杯	口縁部～底部	完形	12.6	—	4.4	7.5YR7/4 IC 赤い槽	
第181図11	—	S803 脚方	—	非砂土師器杯	口縁部～底部	40%	<13.0>	—	4.3	5YR6/6 槽	
第181図12	PL68	S803	No.9	非砂土師器杯	口縁部～底部	50%	<13.4>	—	6.1	5YR6/6 槽	・深い鉢形の杯
第181図13	S803 埴土	—	—	黒色土器A 杯	口縁部～底部	30%	<14.7>	<7.2>	5.2	5YR8/2 灰白	
第181図14	S803 埴土	—	—	須恵器杯A	口縁部～胴部	30%	<14.1>	—	3.6	N7/ 灰白	
第181図15	S803 埴土	—	—	須恵器片蓋	体部	30%	<16.8>	—	2.9	NS/ 灰	
第181図16	PL68	S803	No.1	高埴	口縁部～底部	完形	14.4	8.2	10.1	2.5YR6/6 槽	
第181図17	PL68	S801	No.6	小埴	口縁部～底部	完形	10.8	6.8	10.5	5YR6/6 槽	・バケツ用小型
第181図18	PL68	S803	No.8・6	長形埴	口縁部～胴部	20%	14.0	—	(6.1)	5YR6/4 IC 赤い槽	
第181図19	S801	No.5	長形埴	胴部～底部	20%	—	9.4	(6.8)	2.5YR5/6 明赤褐		
第181図20	PL68	S803	No.4	長形埴	胴部～底部	50%	—	8.1	(21.6)	7.5YR7/6 槽	
第181図21	PL68	S803	No.9	長形埴	胴部～底部	60%	—	5.6	(13.3)	5YR6/6 槽	
第181図22	PL68	S803 埴土	No.10	長形埴	口縁部～胴部	10%	<15.8>	—	(20.5)	10YR7/3 IC 赤い黄槽	
第181図23	PL68	S801	No.10	土師器杯	口縁部～底部	90%	<22.2>	7.0	16.8	5YR6/6 槽	
第181図24	S804 埴土	—	—	土師器長形埴	口縁部～胴部	10%	<19.0>	—	(8.0)	5YR7/6 槽	
第182図1	PL68	S805	No.1	土師器杯	口縁部～底部	50%	<11.0>	5.0	3.5	10YR8/2 灰白	・須恵器種の杯
第182図2	PL68	S805 埴土1 層	—	非砂土師器杯	口縁部～底部	90%	<13.0>	—	3.6	5YR8/4 IC 赤い赤槽	
第182図3	—	S805	No.2	非砂土師器杯	口縁部～底部	35%	<13.0>	—	3.8	10YR7/4 IC 赤い黄槽	
第182図4	S806 床面	—	—	土師器壺	口縁部～胴部	10%	21.4	—	(9.4)	5YR8/4 淡褐	
第182図5	S807 床面 直上	—	—	土師器長形埴	胴部～底部	20%	—	5.0	<6.3>	5YR7/6 槽	
第182図6	PL68	S808	No.8	須恵器壺	胴部～底部	10%	—	—	(2.3)	5R4/1 粗赤灰	
第182図7	PL68	S808	No.51	須恵器片蓋	体部	30%	<15.4>	—	(3.9)	NS/ 灰	
第182図8	PL68	S808	No.25	須恵器杯A	口縁部～底部	ほぼ完形	13.0	6.8	4.5	5P2/1 黒黄	
第182図9	PL68	S809 P3 埴土	—	非砂土師器杯C	口縁部～底部	70%	11.5	—	4.7	5YR6/2 灰褐	
第182図10	S810	No.22	非砂土師器杯	口縁部～底部	40%	<13.4>	—	4.8	5YR6/6 槽		
第182図11	S810	—	高埴	胴部～底部	60%	<13.6>	<6.7>	8.45	10YR8/4 黄槽		
第182図12	PL68	S810	No.19	須恵器杯A	口縁部～底部	40%	<12.8>	—	4.1	5P6/1 青灰	
第182図13	S810 輸出	—	—	須恵器杯A	口縁部～底部	40%	<12.9>	—	3.25	5G5/1 付-7 灰	
第182図14	PL68	S810	No.11	須恵器杯A	口縁部～底部	80%	13.5	7.2	4.15	2.5G5/1 付-7 灰	
第182図15	PL68	S810	No.13	須恵器杯A	口縁部～底部	50%	13.3	4.3	4.2	2.5G6/1 付-7 灰	
第182図16	PL68	S810	No.21	須恵器片蓋	体部	80%	<13.9>	—	2.3	5YR5/6 明赤褐	
第182図17	PL68	S810	No.42	須恵器片蓋	体部	50%	<17.0>	—	3.5	7.5YR6/1 灰	
第182図18	PL68	S810	No.12	須恵器杯B	口縁部～底部	50%	<12.5>	<9.4>	4.3	10YR6/1 粗灰	
第182図19	PL68	S810	No.19	須恵器杯B	口縁部～底部	40%	<15.6>	<11.2>	6.1	10R5/4 赤褐	・「X」印有り
第182図20	PL68	S810	No.18	須恵器片蓋	口縁部～底部	10%	<14.0>	<19.6>	4.8	5YR4/1 暗紫灰	
第182図21	PL68	S811	No.6	非砂土師器杯D	口縁部～底部	50%	8.8	—	(5.1)	7.5YR7/1 明粗灰	
第182図22	S811	No.1	非砂土師器杯	口縁部～胴部	10%	<12.9>	—	(6.0)	7.5YR8/2 灰白		
第182図23	S811	—	—	土師器長形埴	口縁部～胴部	10%	<20.8>	—	(10.3)	7.5YR7/3 IC 赤い槽	
第182図24	S812 床面	—	—	高埴	胴部	ほぼ完形	17.6	—	(3.55)	2.5YR6/1 粗灰	
第182図25	PL68	S813	No.2	土師器壺	口縁部～胴部	20%	18.5	—	(7.8)	5YR7/6 槽	
第182図26	PL68	S814 埴土	—	非砂土師器杯	口縁部～底部	50%	<10.2>	—	4.6	10YR8/2 灰白	
第182図27	PL68	S814	No.1	非砂土師器杯	口縁部～底部	80%	13.8	—	4.4	7.5YR6/4 IC 赤い槽	
第182図28	PL68	S814 埴土	—	須恵器杯	口縁部～底部	70%	<10.8>	—	4.0	5Y6/1 灰	
第182図29	PL68	S814 埴土	—	須恵器片蓋	口縁部	10%	<10.4>	—	(2.5)	5Y6/1 灰	
第182図30	PL68	S814	—	須恵器片蓋	体部	80%	10.8	—	2.4	NS/ 灰	・刻目「一」有り
第182図31	PL68	S814	—	須恵器片蓋	口縁部～胴部	20%	<16.8>	—	(13.0)	2.5G4/1 粗付-7 灰	
第183図1	PL68	S816 埴土	No.16	非砂土師器杯	口縁部～底部	60%	<12.6>	—	3.7	7.5YR7/3 IC 赤い槽	
第183図2	PL68	S816	—	非砂土師器杯	口縁部～底部	10%	12.6	—	5.3	7.5YR7/3 IC 赤い槽	
第183図3	PL68	S816 埴土	—	非砂土師器杯	口縁部～胴部	20%	<16.6>	—	(6.2)	2.5YR5/6 明赤褐	
第183図4	PL68	S816	No.2	非砂土師器杯	口縁部～胴部	25%	<13.7>	—	(5.2)	5YR4/0 赤褐	・刻目「<」有り
第183図5	PL68	S816	No.15	非砂土師器杯	口縁部～底部	50%	<11.6>	—	7.5	5YR7/6 槽	
第183図6	PL68	S816	No.7	非砂土師器杯	口縁部～底部	70%	<9.2>	—	8.0	5YR7/3 IC 赤い槽	
第183図7	PL68	S816	No.12	須恵器高片蓋	体部	40%	<14.2>	—	(4.5)	10Y6/1 灰	
第183図8	S816	No.7	須恵器片	口縁部～底部	30%	<11.5>	—	3.6	7.5YR7/1 粗灰		
第183図9	S816 埴土	—	—	土師器壺	口縁部～胴部	10%	<13.7>	—	(7.6)	2.5YR5/4 IC 赤い赤槽	
第183図10	S816	No.13	土師器壺	口縁部～胴部	10%	<19.0>	—	(6.7)	2.5YR6/0 槽		
第183図11	S817	No.14	非砂土師器杯	口縁部～底部	80%	—	<40.0>	(5.1)	5YR7/4 IC 赤い槽		

第2章 発掘調査の概要

図版No	写真 No	遺構名	取上げ No	器 種	部 位	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面色調	備 考
第183図12	SB17	No.11	非刃土師器環	底部	20%	—	—	—	(3.9)	2.5YR7/4 に近い	
第183図13	PL69	SB17/床下	No.7	須恵器環 H	口縁部～底部	25%	<10.2>	<5.2>	2.7	5PB4/1 暗青灰	
第183図14	SB17	No.7	須恵器環 A	口縁部～底部	30%	<12.4>	6.6	4.2	5YR6.6 橙		
第183図15	PL69	SB17	No.2・3	須恵器環 A	口縁部～底部	70%	14.7	—	4.3	2.5GY8/1 灰白	
第183図16	PL69	SB17/カマ ト内	No.12	須恵器環 B	口縁部～底部	ほぼ完全	11.5	7.2	6.8	5PB5/1 青灰	
第183図17	PL69	SB17	No.17	須恵器環 B	口縁部～底部	40%	<14.0>	<8.8>	4.0	N7/ 灰白	
第183図18	SB17	No.4	須恵器蓋	体部	20%	<13.2>	—	2.1	5B4/1 暗青灰		
第183図19	SB17	No.13	土師器鉢	胴部～底部	20%	—	<7.8>	(11.8)	10YR7/3 に近い	黄褐色	
第183図20	PL69	SB18	No.14	非刃土師器環	口縁部～底部	90%	11.3	—	3.7	5YR7/4 に近い	橙
第183図21	PL69	SB18 埋土	非刃土師器環	口縁部～底部	50%	<11.0>	—	5.1	7.5YR7/4		
第183図22	PL69	SB18 埋土	非刃土師器環	口縁部～底部	40%	11.2	—	3.9	7.5YR7/4 に近い	橙	
第183図23	PL69	SB18 埋土	非刃土師器環	口縁部～底部	30%	<11.2>	—	4.6	7.5YR7/6 橙		
第183図24	PL69	SB18 埋土	非刃土師器環	口縁部～底部	40%	<14.4>	—	(4.8)	7.5YR7/4 に近い	橙	
第183図25	PL69	SB18	筒型土器	胴部～底部	30%	—	6.1	(7.0)	7.5YR7/3 に近い	黄褐色	
第183図26	PL69	SB18	高坏	坏底部～脚部	60%	—	10.2	(9.0)	10YR7/4 に近い	黄褐色	
第183図27	PL69	SB18 埋土	高坏	坏部	50%	—	9.0	10.2	7.5YR7/4 に近い	橙	
第183図28	PL69	SB18	須恵器杯蓋	体部	ほぼ完全	10.1	2.1	3.2	N6/ 灰		
第183図29	PL69	SB18 埋土	須恵器杯蓋	体部	70%	10.0	—	3.2	NS/ 灰		
第183図30	PL69	SB18	須恵器鉢	口縁部～底部	40%	13.5	—	8.4	10YR4/1 赭灰		
第183図31	PL69	SB18	須恵器短頸壺	胴部～底部	90%	—	—	(6.5)	NS/ 灰		
第183図32	PL69	SB18	須恵器短頸壺	胴部～底部	70%	—	—	8.0	N4/ 灰		
第183図33	PL69	SB18	須恵器壺	口縁部～底部	90%	<13.7>	—	19.1	NS/ 灰		
第184図1	PL70	SB18	No.3	小空甕	口縁部～底部	90%	<10.8>	—	9.9	5YR7/3 淡青	
第184図2	PL70	SB18	No.4	小空甕	口縁部～胴部	30%	<13.4>	—	(12.5)	5YR7/6 橙	
第184図3	PL70	SB18	No.5	小空甕	口縁部～底部	50%	16.0	3.8	14.4	5YR5.6 明赤褐色	
第184図4	PL70	SB18 埋土	No.2	土師器長胴壺	口縁部～胴部	30%	<20.8>	—	(19.5)	10YR8/2 灰白	
第184図5	SB18	No.2	土師器長胴壺	口縁部～胴部	30%	<19.6>	—	(15.3)	10YR7/3 に近い	黄褐色	
第184図6	PL70	SB18 埋土	No.1	土師器長胴壺	口縁部～底部	20%	<18.9>	<6.0>	—	10YR7/2 に近い	黄褐色
第184図7	PL70	SB18	No.16	注 1 壺	胴部～底部	20%	—	—	—	7.5YR8/3 淡黄褐色	
第184図8	PL70	SB18	No.8	土師器甕	口縁部～底部	完全	14.5	3.0	7.8	5YR7/4 に近い	橙
第184図9	PL70	SB18	No.3	土師器甕	口縁部～底部	80%	17.4	5.5	13.1	7.5YR7/3 に近い	橙
第184図10	PL70	SB18	No.6	土師器甕	口縁部～底部	80%	16.7	—	11.0	5YR7/3 に近い	橙
第184図11	PL70	SB18	No.6	須恵器鉢	胴部	20%	—	—	(16.0)	5YR6/1 灰白	
第184図12	PL70	SB18	No.9	須恵器樽	口縁部～底部	70%	11.4	—	24.4	10R5/1 赤灰	
第185図1	SB19	No.9	須恵器環 A	口縁部～底部	30%	<10.9>	—	(4.1)	N3/ 暗灰		
第185図2	SB19	No.25	須恵器環 A	口縁部～底部	25%	<12.6>	—	(4.2)	7.5YR5/4 に近い	黄褐色	
第185図3	PL70	SB19 埋土 上層	No.1	須恵器環 B	胴部～底部	30%	—	6.0	(4.7)	2.5GY4/1 暗灰-7 灰	
第185図4	SB19	No.8	土師器注 1 壺	口縁部～胴部	10%	<15.8>	—	(7.0)	2.5YR6.6 橙		
第185図5	SB20	No.8	非刃土師器環	口縁部～底部	25%	<12.6>	—	4.3	7.5YR6/1 赭灰		
第185図6	PL70	SB20 埋土	No.8	須恵器環 B	口縁部～底部	20%	<14.0>	<9.6>	3.5	5YR6.4 に近い	黄褐色
第185図7	SB20	No.10	高坏	坏部～脚部	30%	—	—	(4.8)	5YR6.5 に近い	黄褐色	
第185図8	SB20 埋土	No.10	注 1 壺	口縁部～胴部	10%	<17.4>	—	(11.4)	5YR7/4 に近い	橙	
第185図9	SB21	No.10	黒色土器 A 坏	口縁部～底部	20%	<12.2>	4.8	4.0	2.5YR/3 淡黄		
第185図10	PL71	SB21	No.26	黒色土器 A 坏	口縁部～底部	完全	12.1	15.8	4.2	10YR8/3 淡黄褐色	
第185図11	PL71	SB21	No.14	黒色土器 A 坏	口縁部～底部	60%	<14.3>	5.7	3.3	5YR2/2 灰白	
第185図12	PL71	SB21	No.14	黒色土器 A 坏	口縁部～底部	60%	<12.7>	5.0	3.9	7.5YR7/4 に近い	黄褐色
第185図13	PL71	SB21	No.28	黒色土器 A 坏	口縁部～底部	50%	<12.3>	4.7	3.9	5YR7/6 橙	
第185図14	PL71	SB21	No.6	黒色土器 A 坏	口縁部～底部	60%	<12.5>	5.0	4.1	7.5YR8/2 灰白	
第185図15	PL71	SB21	No.38	黒色土器 A 坏	口縁部～底部	90%	13.1	5.0	4.7	10YR8/1 灰白	
第185図16	PL71	SB21	No.15	黒色土器 A 坏	口縁部～底部	60%	<16.3>	6.8	4.4	7.5YR8/3 淡黄褐色	
第185図17	SB21	No.24	黒色土器 A 坏	口縁部～底部	50%	<14.5>	5.8	5.3	7.5YR7/4 に近い	黄褐色	
第185図18	PL71	SB21	No.4	黒色土器 A 坏	口縁部～底部	90%	<14.0>	5.7	4.3	N7/ 灰白	
第185図19	PL71	SB21	No.25	須恵器環 A	口縁部～底部	完全	13.3	5.3	4.0	N7/ 灰白	
第185図20	PL71	SB21	No.32	黒色土器 A 樽	口縁部～底部	25%	<15.4>	7.1	4.9	10YR8/3 淡黄褐色	
第185図21	PL71	SB21	No.35	黒色土器 A 樽	口縁部～底部	ほぼ完全	14.5	6.7	5.5	7.5YR8/4 淡黄褐色	
第185図22	PL71	SB21	No.15	黒色土器 A 皿	口縁部～底部	60%	13.1	6.5	3.4	10YR8/1 灰白	
第185図23	PL71	SB21 埋土	No.3	灰陶釉瓦	口縁部～底部	20%	<14.5>	<7.4>	3.05	5Y6/1 灰	
第185図24	PL71	SB21	No.36	土師器小空甕	胴部～底部	60%	—	5.7	(8.2)	10YR5/3 に近い	黄褐色
第185図25	PL71	SB21 床面 埋土	No.15・ 34	土師器注 1 壺	口縁部～胴部	10%	<18.6>	—	(13.0)	10YR8/4 淡黄褐色	
第185図26	PL71	SB21 床面 埋土	No.10・ 16・18・ 30	土師器注 1 壺	胴部～底部	20%	—	—	(16.6)	10YR8/3 淡黄褐色	
第185図27	PL71	SB22	No.1	須恵器杯蓋	体部	40%	<10.6>	—	(3.5)	NS/ 灰	
第185図28	SB22 埋土	No.8	須恵器環	口縁部～底部	30%	<10.4>	(5.9)	4.0	2.5GY8/1 灰白		
第185図29	PL71	SB22 埋土	No.8	須恵器環	口縁部～底部	60%	<12.4>	—	4.9	N6/ 灰	
第185図30	PL71	SB22 埋土	No.8	須恵器環 A	口縁部～底部	80%	<12.2>	8.0	3.8	2.5GY8/1 付-7 灰	
第185図31	SB22	No.8	甕	胴部～底部	10%	—	<3.2>	(3.1)	7.5YR1/2 黄		
第185図32	SB22	No.6	土師器長胴壺	口縁部～胴部	20%	<20.6>	—	12.4	7.5YR8/2 灰白		
第185図33	SB22 埋土	No.6	須恵器長頸壺	胴部～底部	20%	—	9.0	(7.2)	N4/ 灰		
第186図1	PL71	SB23 北東 側壁	No.1	非刃土師器環	口縁部～底部	ほぼ完全	13.2	—	4.55	10YR8/2 灰白	
第186図2	PL71	SB23	No.3	高坏	坏部	80%	15.4	—	(5.4)	10YR8/2 灰白	

図版No	写真 No	遺構名	取上げ No	器 種	部 位	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面色調	備 考
第186回3	PL71	S823	No.2	須恵器片蓋	口縁部～底部	ほぼ完了	11.9	5.5	3.95	N5/灰	-印「×」有り
第186回4		S824	No.2	須恵器片蓋	体部	25%	<12.7>	—	2.8	N5/灰	
第186回5	PL71	S824	No.1	須恵器片蓋	口縁部～底部	完了	13.0	7.5	4.1	N3/灰	
第186回6	PL71	S826	No.2	非均土師器片	口縁部～底部	完了	12.5	—	4.2	10YR6/2灰白	
第186回7	PL71	S826	No.4	非均土師器片	口縁部～底部	完了	11.4	—	4.1	10YR7/3に灰白	
第186回8	PL71	S826	No.7	非均土師器片	口縁部～底部	70%	<11.7>	—	3.7	10YR7/3に灰白	
第186回9	PL71	S826	No.3	非均土師器片	口縁部～底部	ほぼ完了	17.0	—	5.7	5YR7/3に灰白	
第186回10	PL71	S826	No.1	非均土師器片	口縁部～底部	完了	12.5	6.4	4.8	5YR7/4に灰白	
第186回11	PL71	S826	No.6	土師器鉢	口縁部～底部	90%	12.3	6.2	14.3	10YR7/4に灰白	
第186回12	PL71	S826	No.5	土師器鉢	口縁部～底部	ほぼ完了	13.6	7.2	18.3	2.5YR6/6	
第186回13		S828	No.3	須恵器片B	胴部～底部	20%	—	<9.8>	(2.3)	5R4/1暗赤灰	
第186回14	PL72	S829	No.1	非均土師器片	口縁部～底部	70%	16.7	7.0	5.5	10YR7/3に灰白	
第186回15	PL72	S829	No.6	須恵器片H	口縁部～底部	40%	<11.0>	—	3.5	N5/灰	
第186回16	PL72	S829 埋土層	No.4	須恵器片A	口縁部～底部	50%	12.8	6.0	3.2	N5/灰	
第186回17		S829 床 盛り方		須恵器高環	口縁部～胴部	20%	<10.6>	—	(3.7)	N5/灰	
第186回18		S829 埋土		須恵器鉢	口縁部～胴部	10%	<13.7>	—	(8.8)	N6/灰	
第186回19	S829	No.8	土師器長胴鉢	口縁部～胴部	10%	<18.2>	—	(10.0)	5YR6/4に灰白		
第186回20	S829	No.8	土師器長胴鉢	口縁部～胴部	10%	<20.4>	—	(10.7)	2.5YR7/4に灰白		
第186回21	PL72	S829	No.3	土師器長胴鉢	口縁部～胴部	30%	<18.8>	—	(9.6)	2.5YR6/4に灰白	
第186回22		S830 埋土		非均土師器高環	胴部～胴部	20%	<13.0>	—	4.55	5YR6/3に灰白	
第186回23		S830 埋土		鉢	胴部～底部	10%	—	3.3	(5.2)	2.5YR6/2灰白	-一穴式
第186回24		S830 P10		土師器鉢	口縁部～胴部	10%	<17.8>	—	(9.2)	2.5YR6/3に灰白赤褐	
第186回25		S830	No.2	土師器鉢	口縁部～胴部	10%	<16.4>	—	(8.5)	2.5YR6/4に灰白	
第186回26	PL72	S830		土師器鉢	口縁部～胴部	10%	18.0	—	(11.0)	2.5YR7/4に灰白	
第186回27	PL72	S831		須恵器片A	口縁部～底部	70%	14.9	6.0	(4.4)	2.5G6/1片-7灰	
第186回28		S832 床面 遺上		非均土師器短頸壺	口縁部～胴部	10%	<8.4>	—	(4.2)	N5/灰	-刻痕有り
第186回29	PL72	S832	No.2	鉢	口縁部～底部	75%	<8.7>	—	6.2	10YR7/3に灰白	
第186回31	PL72	S833		土師器小虎腹	口縁部～胴部	20%	12.7	—	(9.6)	2.5YR7/3に灰白	
第187回2	PL72	S835 埋土		非均土師器片	口縁部～底部	30%	<13.2>	—	(4.7)	2.5YR7/3に灰白	
第187回3	PL72	S835	No.10	黒色土師A 片	口縁部～底部	70%	14.3	6.2	3.2	2.5YR6/6浅黄褐	
第187回4		S835 埋土		須恵器片A	口縁部～底部	50%	<12.0>	<5.5>	3.1	2.5G6/1片-7灰	
第187回5	PL72	S835	No.2・8	須恵器片A	口縁部～底部	ほぼ完了	14.1	6.1	4.2	2.5YR7/3に灰白	
第187回6		S835 埋土		底	底部	10%	—	<6.9>	(3.2)	5YR7/4に灰白	-多孔式
第187回7	PL72	S835 埋土		八ヶ岡製鉢	口縁部～底部	60%	<11.6>	<7.5>	12.7	5YR5/2灰褐	-磁埴型
第187回8	PL72	S835 埋土		土師器鉢	口縁部～胴部	10%	<20.8>	<5.6>	—	2.5YR6/3に灰白	
第187回9	PL72	S835 埋土		須恵器片E	口縁部～底部	10%	<26.5>	—	(11.7)	2.5YR6/3に灰白	
第187回10	PL72	S835 埋土	No.1・9	土師器鉢	口縁部～底部	70%	<17.2>	8.0	19.0	5YR6/4に灰白	
第187回11	PL72	S836	No.3	非均土師器片	口縁部～底部	80%	14.7	3.0	3.7	10YR7/2に灰白	
第187回12	PL72	S836		黒色土師A 片	口縁部～底部	30%	<11.8>	5.5	3.9	5YR7/3に灰白	-黒意有り
第187回13		S836	No.7	黒色土師A 片	口縁部～底部	30%	<13.2>	5.5	4.1	2.5YR7/3に灰白	-黒意「一」有り
第187回14	PL72	S836		黒色土師A 片	口縁部～底部	完了	13.0	5.3	4.0	2.5YR6/3浅黄	-漆付
第187回15		S836	No.4	黒色土師A 片	口縁部～底部	20%	<12.0>	—	(3.2)	2.5YR7/3に灰白	-黒意「万」有り
第187回16	PL72	S836	No.4・9	黒色土師A 片	口縁部～底部	80%	12.4	5.0	3.8	10YR8/3浅黄褐	-黒意「万」有り
第187回17	PL72	S836	No.11	黒色土師A 片	口縁部～底部	20%	<12.7>	—	(4.0)	10YR8/3浅黄褐	-黒意「万」有り
第187回18		S836		須恵器片A	口縁部～底部	20%	<14.0>	—	(4.0)	N7/灰白	-黒意有り
第187回19		S836 埋土		土師器鉢	口縁部～胴部	10%	<16.2>	—	(8.2)	10YR8/2灰白	
第187回20		S836 埋土		土師器鉢	口縁部～胴部	10%	<26.6>	—	(17.7)	10YR8/3浅黄褐	-磁埴型
第187回21	PL72	S836	No.36	土師器鉢	口縁部～底部	90%	23.4	—	31.1	2.5YR7/3に灰白	-磁埴型
第187回22	PL72	S839 方 隅 辺	No.13・ 22	非均土師器片	口縁部～底部	ほぼ完了	12.2	7.0	3.6	10YR6/2灰黄褐	
第187回23	PL72	S839	No.24	非均土師器片	口縁部～底部	完了	10.8	5.7	4.6	2.5YR7/3に灰白	
第187回24		S839 埋土		片	口縁部～底部	50%	14.1	2.7	5.0	2.5YR6/6	
第187回25	PL72	S839	No.10	非均土師器片	口縁部～底部	50%	18.1	—	3.6	5YR6/8	
第187回26	PL72	S839	No.9	須恵器片H	口縁部～底部	完了	9.6	3.8	3.6	5B5/1青灰	
第187回27	PL72	S839 埋土		須恵器片	口縁部～底部	40%	<8.9>	4.2	3.8	2.5Y6/1黄灰	-沈積「の」有り
第187回28	PL72	S839		須恵器片B	口縁部～底部	50%	<15.7>	<9.9>	3.9	N3/暗灰	
第187回29	PL72	S839		須恵器無頸壺	口縁部～底部	60%	7.5	5.7	10.3	N6/灰	
第187回30		S839		須恵器壺	胴部	10%	—	—	(7.9)	N6/灰	
第187回31		S839 埋土		高環	胴部	30%	<23.2>	—	(3.6)	2.5YR7/4に灰白	
第188回1		S839	No.10	鉢	口縁部～底部	40%	<13.7>	—	10.4	2.5YR6/8	
第188回2	PL73	S839	No.12	小虎腹	口縁部～胴部	30%	<11.4>	—	(9.5)	5YR6/4に灰白	
第188回3	PL73	S839		鉢	口縁部～底部	60%	<9.8>	—	10.8	2.5YR6/3に灰白	-無頸壺様
第188回4	PL73	S839		壺	口縁部～底部	90%	16.8	3.5	12.5	10YR7/4に灰白	-一穴式
第188回5	PL73	S839	No.5	壺	口縁部～底部	90%	18.4	7.8	17.6	5YR7/6	-多孔式
第188回6	PL73	S839	No.5	土師器長胴鉢	口縁部～胴部	60%	22.6	—	(21.1)	10YR6/3に灰白	
第188回7	PL73	S839	No.2	土師器長胴鉢	口縁部～胴部	70%	20.2	—	(27.2)	10YR7/4に灰白	
第188回8	PL73	S839	No.10	土師器鉢	口縁部～胴部	50%	<33.0>	—	(10.0)	10YR6/2灰黄褐	
第188回9	PL73	S839	No.10・11	土師器鉢	口縁部～胴部	70%	<23.6>	—	(19.2)	2.5YR6/4に灰白	
第188回10	PL73	S839	No.23	土師器鉢	口縁部～胴部	70%	24.2	7.6	21.2	10YR6/4に灰白	
第188回11		S839	No.11・17	土師器鉢	口縁部～胴部	30%	<22.4>	—	13.2	2.5YR7/3に灰白	
第188回12	PL73	S839	No.10・11	土師器鉢	口縁部～胴部	50%	<24.6>	—	(20.4)	2.5YR7/3に灰白	
第189回1	PL74	S839 埋土		土師器鉢	口縁部～底部	30%	<26.8>	<9.6>	<23.0>	2.5YR7/3に灰白	

第2章 発掘調査の概要

図面No	写真 No	遺構名	取上げ No	器 種	部 位	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面色調	備 考
第189図2		S839 埋土		須恵器鉢	胴部～底部	30%	—	—	(14.4)	SY6/7 灰	
第189図3	PL74	S840	No.3	非の7土師器鉢	口縁部～底部	70%	10.5	4.0	5.7	2SYR5/4 に近い黄褐色	
第189図4	PL74	S840	No.2	非の7土師器鉢	口縁部～底部	完形	9.6	6.4	6.6	10YR7/2 に近い黄褐色	
第189図5	PL74	S840	No.4	小穴壺	口縁部～底部	90%	12.8	5.9	11.8	2SYR7/4 に近い黄褐色	
第189図6	PL74	S840	No.1	土師器長胴壺	口縁部～底部	90%	20.7	6.3	28.8	10YR7/3 に近い黄褐色	
第189図7	PL74	S842	No.7	土師器鉢	口縁部～底部	70%	<17.0>	10.0	38.0	10YR5/3 に近い黄褐色	
第189図8		S844	No.3	高坏	胴部	40%	—	11.9	(6.5)	SYR6/8 褐色	
第189図9	PL74	S844		須恵器坏 B	口縁部～底部	30%	<15.2>	<11.2>	4.5	10Y4/1 灰	
第189図10		S844		須恵器鉢	口縁部～胴部	20%	<14.3>	—	(7.2)	NS/ 灰	
第189図11	PL74	S844 かまど下石	No.1・2	土師器鉢	口縁部～胴部	40%	20.8	—	(15.2)	10YR8/3 浅黄褐色	
第189図12	PL74	S844	No.5	土師器鉢	口縁部～底部	完形	15.2	5.2	19.3	5YR7/4 に近い黄褐色	
第189図13	PL74	S844 かまど左	No.4	土師器鉢	口縁部～底部	30%	<25.8>	—	(21.0)	10YR7/2 に近い黄褐色	
第189図14	PL74	S845		須恵器鉢	胴部～底部	90%	—	—	(10.2)	10YR4/1 灰	
第190図1	PL74	S846	No.8	非の7土師器坏	口縁部～底部	90%	8.8	4.3	2.9	2SYR7/3 に近い黄褐色	・手づくね様
第190図2	PL74	S846	No.1	非の7土師器坏	口縁部～底部	90%	15.7	7.5	4.6	5YR6/4 に近い黄褐色	
第190図3		S846		土師器長胴壺	口縁部～底部	30%	<16.6>	—	(16.9)	10YR7/3 に近い黄褐色	
第190図4	PL74	S846	No.2	須恵器鉢	口縁部～胴部	10%	<23.2>	—	(10.7)	N7/ 灰	・外面板状工具取寄せ締め
第190図5		S848		非の7土師器鉢	口縁部～底部	40%	<14.7>	<4.5>	(6.1)	10YR8/3 浅黄褐色	
第190図6	PL74	S848 埋土		須恵器鉢	坏底部～胴部	10%	—	—	(2.9)	10Y6/1 灰	
第190図7	PL74	S848 埋土		須恵器坏 B	口縁部～底部	50%	<14.2>	<10.4>	(3.6)	N6/ 灰	
第190図8		S848	No.2	長胴壺	口縁部～胴部	25%	<15.7>	—	(12.9)	10YR7/4 に近い黄褐色	
第190図9		S849	No.11	非の7土師器坏	口縁部～底部	80%	12.2	6.2	4.5	2SYR7/4 に近い黄褐色	
第190図10		S849	No.2	非の7土師器坏	口縁部～底部	80%	<13.3>	—	5.3	10YR6/4 に近い黄褐色	
第190図11	PL75	S849	No.3	非の7土師器坏	口縁部～底部	70%	<12.5>	—	4.3	5YR6/4 に近い黄褐色	
第190図12	PL75	S849	No.18	非の7土師器坏	口縁部～胴部	50%	13.4	—	(2.7)	5YR6/6 灰	
第190図13	PL75	S849	No.32	須恵器坏?	口縁部～胴部	10%	<23.2>	—	(8.6)	N3/ 陶灰	
第190図14	PL75	S849	No.6・ 10・24	甌	口縁部～底部	80%	<18.2>	6.0	(14.4)	7SYR7/4 に近い黄褐色	・多孔孔
第190図15	PL75	S849	No.16	小穴壺	口縁部～底部	60%	<13.6>	6.0	12.7	5YR6/4 に近い黄褐色	
第190図16	PL75	S849	No.14	小穴壺	口縁部～底部	ほぼ完形	14.2	7.3	14.3	7SYR8/3 浅黄褐色	
第190図17	PL75	S849	No.1	土師器長胴壺	口縁部～底部	80%	<19.0>	8.8	34.7	5YR6/6 褐色	
第190図18		S849	No.1・13	土師器長胴壺	胴部～底部	60%	—	7.5	(3.0)	5SYR6/4 に近い赤褐色	
第190図19		S851		非の7土師器坏	口縁部～底部	25%	7.9	—	5.0	5YR5/4 に近い赤褐色	
第190図20		S851		須恵器坏蓋	体部	40%	12.8	—	(3.8)	2SY6/1 灰	
第190図21	PL75	S851 埋土		土師器鉢	口縁部～胴部	20%	<24.6>	—	(9.5)	5YR4/2 灰褐色	
第190図22		S851		土師器長胴壺	口縁部～底部	30%	17.2	6.6	—	5YR6/6 褐色	
第190図23	PL75	S851		小穴壺	口縁部～胴部	60%	15.5	—	(15.5)	5YR6/4 に近い黄褐色	
第190図24	PL75	S851 埋土		甌	取手	25%	—	—	—	7SYR6/3 に近い黄褐色	
第191図1		S853		紫色土師 A 坏	口縁部～底部	40%	<17.4>	<8.8>	6.2	10YR8/3 浅黄褐色	
第191図2		S853 埋土		須恵器坏 A	口縁部～底部	30%	<12.2>	<6.4>	3.5	N7/1 灰白	
第191図3	PL75	S853	No.2	須恵器坏 A	口縁部～底部	40%	12.8	7.5	4.0	S85/1 黄灰	
第191図4		S853		須恵器坏 A	口縁部～底部	30%	<13.2>	7.0	3.4	2SGY5/1 緑灰	
第191図5	PL75	S853 埋土		土師器鉢	口縁部～胴部	15%	<13.0>	—	(2.0)	5YR7/6 褐色	
第191図6		S853 埋土		土師器鉢	胴部～底部	30%	—	(6.2)	(11.5)	5YR6/6 褐色	
第191図7	PL75	S853		土師器鉢	口縁部～胴部	10%	<15.4>	—	(11.5)	2SYR7/3 に近い黄褐色	
第191図8	PL75	S854	No.3	須恵器坏 A	口縁部～底部	80%	12.8	7.0	4.0	3R5/1 黄灰	
第191図9	PL75	S854	No.6	須恵器坏 A	口縁部～底部	完形	12.6	6.0	4.0	2SY5/1 灰	
第191図10		S854 埋土		須恵器坏 A	口縁部～底部	40%	<12.6>	5.7	3.4	2SGY6/1 緑灰	
第191図11	PL75	S854	No.10	須恵器坏蓋	体部	90%	12.7	—	2.7	NS/ 灰	
第191図12		S854	No.4	須恵器坏蓋	体部	25%	17.6	—	3.8	NS/ 灰	
第191図13	PL75	S854		須恵器坏 B	口縁部～底部	25%	<15.2>	<10.8>	4.0	NS/ 灰	・再利用品か?
第191図14		S854		灰輪陶器坏蓋	体部	15%	<5.8>	—	0.9	5Y6/2 粉-7 灰	
第191図15		S854		須恵器高短胴壺蓋	体部	25%	<8.8>	—	(3.2)	10Y7/1 灰白	
第191図16		S854 埋土		土師器鉢	底部	10%	—	8.4	(2.0)	5YR7/6 褐色	
第191図17		S854		土師器鉢	口縁部～胴部	10%	<14.6>	—	(6.3)	2SYR5/8 明赤褐色	
第191図18	PL75	S854	No.7	土師器鉢	口縁部～底部	60%	<13.4>	4.6	10.1	5YR7/4 に近い黄褐色	
第191図19		S855 埋土		非の7土師器坏	口縁部～底部	40%	<13.9>	6.0	4.0	5YR5/6 明赤褐色	
第191図20		S855	No.4	須恵器坏 A	口縁部～底部	50%	<13.4>	5.9	4.2	N7/1 灰白	
第191図21		S855 埋土		須恵器坏 A	口縁部～底部	50%	<14.0>	<7.5>	4.5	N7/ 灰白	
第191図22		S855 かまど内	No.1	須恵器短胴壺	口縁部	20%	<12.0>	—	(3.5)	10BG4/1 緑青灰	
第191図23		S856		須恵器坏 A	口縁部～胴部	10%	<11.8>	—	(3.6)	N7/1 灰白	・墨書有り
第191図24	PL75	S856	No.4・8	須恵器坏 A	口縁部～底部	70%	12.4	5.5	3.5	N6/ 灰	
第191図25	PL75	S856		紫色土師 B 皿	口縁部～底部	30%	<11.8>	6.1	2.4	5Y2/1 黒	
第191図26	PL75	S856	No.5	土師器鉢	口縁部～底部	10%	<21.8>	—	(10.0)	2SYR7/3 に近い黄褐色	
第191図27		S856	No.5	土師器鉢	口縁部～胴部	10%	<22.6>	—	(14.5)	5YR8/4 浅黄褐色	
第191図28		S857		須恵器坏 H	口縁部～底部	25%	<13.4>	<8.0>	(4.0)	2SYR6/1 黄灰	
第191図29		S858		長胴壺	口縁部～胴部	10%	<19.7>	—	(4.6)	10YR7/3 に近い黄褐色	
第191図30		S858		長胴壺	口縁部～胴部	25%	<17.4>	—	(18.9)	2SYR6/4 に近い黄褐色	
第191図31		S859		須恵器坏蓋	体部	30%	<15.8>	—	2.7	NS/ 灰	
第191図32		S859 埋土		須恵器坏 B	口縁部～底部	30%	<15.0>	<10.8>	4.9	10YR5/8 黄褐色	
第191図33		S859 埋土		須恵器坏 B	口縁部～底部	25%	<12.8>	<9.8>	3.4	NS/ 灰	
第191図34		S859 埋土		須恵器短胴壺	口縁部～胴部	10%	<8.9>	—	(5.3)	N4/ 灰	
第191図35		S859	No.6	長胴壺	口縁部～胴部	10%	<23.2>	—	(9.7)	10YR7/2 に近い黄褐色	

図解No	写真 No	遺構名	取上げ No	器 種	部 位	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面色調	備 考	
第191回36	S860		No1	須恵器杯A	口縁部～底部	80%	12.7	6.5	3.5	7.5Y/1 灰白		
第192回1	PL75 S862			非070土師器杯	口縁部～底部	70%	<11.3>	4.5	4.2	5YR6/3 に染い増		
第192回2	S862			非070土師器杯	口縁部～底部	50%	<11.4>	—	3.4	5YR6/3 に染い増		
第192回3	PL75 S862		No2	非070土師器杯	口縁部～底部	40%	<14.8>	(5.0)	(5.3)	5YR7/4 に染い増		
第192回4	S862			高杯	杯部～脚部	30%	—	—	(7.4)	5YR7/4 に染い増		
第192回5	S862			高杯	杯部～脚部	30%	—	—	(9.4)	5YR7/6 増		
第192回6	S862			長胴壺	口縁部～胴部	10%	<19.4>	—	(12.7)	7.5YR7/4 に染い増		
第192回7	S863		No10	非070土師器杯	口縁部～胴部	30%	<15.8>	—	(5.1)	7.5YR7/3 に染い増		
第192回8	PL75 S863			須恵器杯A	口縁部～底部	90%	12.8	6.0	3.1	N7/ 灰白		
第192回9	PL75 S863		No1	非070土師器鉢	口縁部～底部	80%	<17.5>	8.3	7.1	10YR7/2 に染い黄褐色		
第192回10	PL75 S863		No7	小笠壺	口縁部～胴部	20%	<13.4>	—	(10.7)	10YR5/3 に染い黄褐色		
第192回11	PL76 S864			黒色土器A 杯	口縁部～底部	90%	13.7	7.2	4.7	7.5YR7/4 に染い増		
第192回12	S864		No1・2 1・16・18	土師器長胴壺	口縁部～胴部	30%	<25.2>	—	(25.2)	10YR7/4 に染い黄褐色		
第192回13	PL76 S864		No5・8・ 9・11・ 14・16	土師器長胴壺	口縁部～胴部	20%	<20.4>	—	(29.4)	7.5YR7/3 に染い増		
第192回14	PL76 S865 埋土			非070土師器杯	口縁部～底部	40%	<14.2>	—	(4.6)	7.5YR8/4 浅黄褐色		
第192回15	S865		No1	高杯	脚部～底部	50%	—	—	(5.9)	7.5YR7/3 に染い増		
第192回16	S865 埋土			須恵器杯蓋	体部	30%	<13.2>	—	(2.3)	N4/ 灰		
第192回17	PL76 S865 埋土			須恵器杯A	口縁部～底部	40%	<11.6>	<6.0>	3.1	N6/ 灰		
第192回18	S865 埋土			土師器長胴壺	口縁部～底部	20%	<21.0>	<6.0>	—	10YR6/2 灰黄褐色		
第192回19	S866 埋土			非070土師器杯	口縁部～底部	30%	<12.0>	—	4.7	7.5YR8/3 浅黄褐色		
第192回20	PL76 S866			非070土師器杯	口縁部～底部	70%	13.8	—	5.5	7.5YR8/3 浅黄褐色		
第192回21	PL76 S866			非070土師器杯	口縁部～底部	90%	13.8	5.0	5.5	7.5YR7/3 に染い増		
第192回22	S866 埋土			黒色土器A 椀	底部	10%	<7.6>	<7.5>	(1.5)	7.5YR7/4 に染い増		
第192回23	PL76 S866		No2	須恵器杯蓋	体部	15%	25.7	—	3.9	2.5Y7/1 灰白		
第192回24	S866			須恵器杯A	口縁部～底部	30%	<14.0>	<5.5>	4.0	7.5YR6/4 に染い増		
第192回25	PL76 S866		No5	甌	口縁部～胴部	90%	14.5	—	(14.9)	7.5YR7/6 増	・一穴式	
第192回26	PL76 S866			須恵器短頸壺	口縁部～頸部	10%	<10.2>	—	(4.1)	7.5YR7/1 灰白		
第193回1	PL76 S867		No3	土師器長胴壺	胴部～底部	30%	—	(8.4)	(18.4)	5YR5/4 に染い赤褐色		
第193回2	S867			土師器甌	口縁部～胴部	20%	<12.6>	—	(9.5)	5YR4/6 赤褐色		
第193回3	S868 埋土			須恵器鉢	胴部	10%	—	—	(4.0)	10B6/4 緑青灰	・短頸壺?	
第193回4	PL76 S868		No1・2	小笠壺	口縁部～底部	30%	<11.6>	5.7	9.3	10YR8/3 浅黄褐色		
第193回5	S869 埋土			須恵器杯A	口縁部～底部	40%	<13.0>	<6.0>	3.8	N6/ 灰		
第193回6	PL76 S869			甌蓋	口縁部	10%	<19.5>	—	(4.8)	7.5YR6/4 に染い増		
第193回7	S869			土師器甌	口縁部～胴部	10%	<20.4>	—	(9.3)	5YR6/6 増		
第193回8	PL76 S870		No3・6・ カマド No1	須恵器杯A	口縁部～底部	50%	11.2	—	4.0	N5/ 灰	・刻み「×」有り	
第193回9	PL76 S870		No2	須恵器杯A	口縁部～底部	90%	13.1	6.0	3.9	10YR6/1 赭灰	・刻み「×」有り	
第193回10	S870			須恵器杯蓋	体部	40%	<16.2>	—	(1.9)	N7/ 灰白		
第193回11	PL76 S870			須恵器杯B	口縁部～底部	90%	15.9	10.0	4.7	7.5YR8/2 灰白	・印「×」有り	
第193回12	PL76 S870		No3・5・ 6・7	須恵器長頸壺	口縁部	10%	<9.7>	—	(11.4)	N6/ 灰		
第193回13	PL76 S870			土師器甌	口縁部～底部	80%	10.6	5.2	3.4	5YR7/2 明褐色		
第193回14	S870			土師器甌	口縁部～胴部	20%	<21.0>	—	(17.0)	10YR7/3 に染い黄褐色		
第193回15	PL76 S870		No4	円筒形土器	胴部	25%	—	—	(26.4)	5YR6/6 増		
第193回16	S871			杯	口縁部～胴部	10%	<12.7>	—	(3.1)	5YR6/6 増		
第193回17	PL76 S871		No2	黒色土器A 杯	口縁部～底部	70%	13.1	7.0	4.5	10YR6/3 に染い増		
第193回18	PL76 S871 P3			黒色土器A 杯	口縁部～底部	80%	14.3	4.3	5.0	10YR5/3 に染い黄褐色		
第193回19	PL76 S871		No2	非070土師器杯	口縁部～底部	25%	<9.4>	(4.2)	4.8	7.5YR6/4 に染い増		
第193回20	PL76 S871		カマド No12	非070土師器杯	口縁部～底部	80%	<12.7>	—	4.1	7.5YR7/3 に染い増		
第193回21	PL76 S871		No9・P2 ・カマド No2	高杯	杯部	35%	<18.5>	—	(4.0)	10YR8/2 灰白		
第193回22	PL76 S871 P2			高杯	杯部～底部	70%	—	7.2	(7.5)	7.5YR6/6 増		
第193回23	PL76 S871			甌	底部	10%	—	<7.0>	(5.3)	7.5YR6/8 増	・多孔式	
第193回24	S871 カマド内		No2	土師器甌	口縁部～胴部	30%	<20.0>	—	(21.2)	10YR6/3 に染い黄褐色		
第193回25	PL76 S871			土師器甌	胴部	20%	—	—	(18.1)	10YR8/1 灰白		
第194回1	PL77 S872			円筒形土器	胴部～底部	60%	—	8.6	(31.5)	5YR5/4 に染い赤褐色		
第194回2	PL77 S872			杯	口縁部～底部	完形	18.0	—	10.0	10YR7/4 に染い赤褐色	・多孔式	
第194回3	S873		No5 杯	口縁部～底部	20%	<11.6>	—	4.3	5YR6/6 増			
第194回4	PL77 S873		No4	非070土師器杯	口縁部～底部	10%	11.5	—	3.8	10YR7/3 に染い黄褐色		
第194回5	PL77 S873		No4	非070土師器杯	口縁部～底部	90%	10.8	—	4.8	7.5YR7/4 に染い増		
第194回6	PL77 S873		No4	非070土師器杯	口縁部～底部	10%	11.1	—	3.25	10YR7/3 に染い黄褐色		
第194回7	PL77 S873			非070土師器杯	口縁部～底部	70%	<10.5>	5.6	3.6	10YR8/2 灰白	・刻み「一」有り	
第194回8	PL77 S873			須恵器長頸壺?	口縁部～底部	40%	<10.2>	<3.6>	3.5	N7/1 灰白	・杯?	
第194回9	PL77 S873		No2	土師器長胴壺	口縁部～胴部	20%	<16.4>	—	(15.8)	5YR6/6 増		
第194回10	PL77 S873		No5	土師器甌	口縁部～底部	40%	<12.8>	<6.6>	12.6	5YR5/6 明赤褐色		
第194回11	S873			土師器甌	口縁部～胴部	10%	<31.6>	—	(17.5)	7.5YR7/4 に染い増		
第194回12	PL77 S873			土師器甌	口縁部～底部	50%	<25.8>	<8.8>	17.9	5YR7/4 に染い増		
第194回13	S874 焼出處			須恵器長頸壺	胴部～底部	10%	—	—	(8.0)	(3.9)	5P87/1 明褐色	
第194回14	PL77 S875		No2	黒色土器A 杯	口縁部～底部	70%	11.8	4.4	4.4	7.5YR7/6 増		
第194回15	PL77 S875		No3	黒色土器A 鉢	口縁部～底部	60%	<19.0>	6.0	6.7	7.5YR8/3 浅黄褐色	・杯?	
第194回16	PL77 S875		No1	須恵器杯A	口縁部～底部	70%	13.2	5.5	4.0	2.5Y6/1 P1-7 灰		

第2章 発掘調査の概要

図版No	写真No	遺構名	取上げNo	器種	部位	残存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面色調	備考		
第194図17	PL77 S876		No.6	黒色土器A 坏	口縁部～底部	90%	12.6	5.5	3.1	7.5YR7/6 青灰			
第194図18	PL77 S876 P1			須恵器坏	口縁部～底部	90%	13.8	7.0	4.0	10BG5/1 青灰			
第194図19	PL77 S876		No.5	黒色土器A 椀	口縁部～底部	60%	<15.4>	8.0	6.0	5YR7/8 灰白			
第194図20	S876			灰釉陶器	口縁部	10%	<4.5>	—	—	(16)	10Y7/1 灰白		
第194図21	S876			土師器椀	口縁部～胴部	10%	<25.0>	—	—	(7)	10YR5/4 に近い黄褐色		
第194図22	S877 片石下直下			須恵器坏 A	口縁部～底部	70%	<12.3>	5.8	4.0	10YR4/1 赭灰			
第194図23	S877 P1			土師器椀	口縁部～胴部	10%	<22.3>	—	—	(7)	5YR7/4 に近い黄褐色		
第194図24	S877		No.1	土師器椀	口縁部～胴部	10%	<24.5>	—	—	(10.5)	5YR5/4 に近い黄褐色		
第195図1	PL77 S102			須恵器坏 B	胴部～底部	80%	8.0	(3.7)	10Y5/1 灰		・印「X」有り		
第195図2	PL77 S104			土師器椀	口縁部～底部	完形	13.3	7.0	4.7	10YR7/3 に近い黄褐色			
第195図3	PL77 S106 P2			須恵器坏 A	口縁部～底部	50%	<13.2>	7.5	3.2	10Y6/1 灰		・軟質遺産物	
第195図4	S106 P1			須恵器坏 B	口縁部～胴部	50%	<12.1>	—	—	(3.3)	N4/0 灰		
第195図5	S107 P4			須恵器坏 A	口縁部～底部	50%	<12.4>	—	—	(3.8)	10YR5/1 赭灰		
第195図6	PL77 S117 P1			須恵器坏 B	胴部～底部	20%	—	(8.0)	(3.7)	7.5YR4/2 灰褐			
第195図7	PL77 S118 P1			須恵器坏 A	口縁部～胴部	20%	<13.7>	—	—	(4.3)	7.5YR7/2 黄褐色		
第195図8	PL77 S885			灰釉陶器椀	口縁部～底部	完形	13.8	6.3	4.1	5Y6/1 灰		・墨書「生」有り	
第195図9	SK199			非対称土師器椀	口縁部～底部	60%	<8.3>	5.5	5.4	7.5YR8/2 灰白		・手づく白釉	
第195図10	PL77 SK377			須恵器坏 H	口縁部～底部	50%	<10.3>	—	—	(3.6)	N5/1 灰		
第195図11	SK378			小笠原	口縁部～底部	30%	<11.0>	<5.0>	11.2	7.5YR8/3 浅黄褐色			
第195図12	PL77 SK579			須恵器椀?	口縁部～底部	80%	<13.4>	—	—	4.5	7.5Y6/1 灰		
第195図13	PL77 S6615		No.1・5	黒色土器A 坏	口縁部～底部	60%	<12.6>	5.0	3.9	7.5YR7/4 に近い黄褐色			
第195図14	PL77 S6615		No.2	黒色土器A 坏	口縁部～底部	50%	12.6	6.0	3.5	10YR7/3 に近い黄褐色			
第195図15	PL77 S6615		No.4	黒色土器A 椀	口縁部～底部	ほぼ完形	16.0	7.5	6.0	5YR7/4 に近い黄褐色			
第195図16	PL77 S6615		No.12	黒色土器A 椀	口縁部～底部	40%	<17.8>	7.5	5.5	7.5YR6/3 に近い黄褐色			
第195図17	S6627			須恵器坏 A	口縁部～底部	70%	<13.0>	5.0	3.5	10G76/1 赭灰			
第195図18	PL77 S6665			須恵器坏 A	口縁部～底部	ほぼ完形	12.3	6.5	3.4	5BG5/1 青灰			
第195図19	PL77 S6665			黒色土器A 坏	口縁部～底部	ほぼ完形	15.8	6.5	5.1	7.5YR7/3 に近い黄褐色			
第195図20	PL77 SK2902		No.2	須恵器坏 A	口縁部～底部	60%	<13.6>	<5.2>	4.4	N3/ 赭灰		・印「一」有り	
第195図21	PL77 SK2902		No.1・8・9	須恵器坏 A	口縁部～底部	70%	13.2	5.8	4.8	N6/ 灰		・印「X」有り	
第195図22	PL77 SK2902		No.3	須恵器坏 A	口縁部～胴部	30%	13.6	—	—	(3.5)	N6/ 灰		・墨書有り
第195図23	SK2965			土師器坏?	口縁部～底部	30%	<5.0>	<3.3>	3.0	7.5YR7/2 黄褐色		・おちよて形	
第195図24	SK3000			須恵器坏 钵	体部	40%	<13.4>	—	—	3.0	N7/ 灰白		
第195図25	SK3000			土師器長胴椀	口縁部～胴部	10%	34.0	—	—	(7.5)	10YR3/1 黄褐色		
第195図26	SK3026			非対称土師器坏?	口縁部～底部	20%	<11.6>	4.6	3.0	7.5YR7/3 に近い黄褐色			
第195図27	PL78 S001			高坏	胴部	30%	—	—	—	(14.4)	5YR7/4 に近い黄褐色		
第195図28	PL78 S002			丸胴椀	口縁部～胴部	70%	<18.0>	—	—	(2.8)	7.5YR6/6 灰		
第195図29	PL78 S005		No.22	黒色土器A 坏	口縁部～底部	ほぼ完形	12.3	5.6	3.6	5YR7/6 灰			
第195図30	S005		No.9・38	黒色土器A 坏	口縁部～底部	40%	<13.2>	<5.2>	3.4	7.5YR7/4 に近い黄褐色			
第195図31	PL78 S005		No.1	黒色土器A 坏	口縁部～底部	80%	12.8	5.0	3.8	7.5YR8/3 浅黄褐色			
第195図32	S005 埋土			黒色土器A 坏	口縁部～底部	40%	<13.2>	—	—	(4.2)	7.5YR7/4 に近い黄褐色		
第195図33	S005 埋土			黒色土器A 坏	口縁部～底部	50%	<12.8>	<7.0>	4.4	7.5YR8/4 浅黄褐色			
第195図34	PL78 S005		No.4・35	黒色土器A 坏	口縁部～底部	70%	13.8	5.0	5.3	2.5Y7/3 浅黄褐色			
第195図35	PL78 S005		No.12	須恵器坏 A	口縁部～底部	80%	12.2	6.1	3.2	N7/ 灰白			
第195図36	PL78 S005			須恵器坏 A	口縁部～底部	50%	12.9	5.1	4.2	N8/ 灰白			
第196図1	S005		No.11	黒色土器A 坏	口縁部～底部	20%	<12.8>	<5.8>	3.4	7.5YR7/3 に近い黄褐色			
第196図2	S005 埋土			須恵器短胴椀	口縁部～胴部	10%	<8.8>	—	—	(3.4)	N 3 赭灰		
第196図3	PL78 S005			小笠原	口縁部～底部	80%	12.4	4.3	13.9	5YR6/6 灰			
第196図4	PL78 S005 埋土			土師器椀	口縁部～胴部	20%	<21.8>	—	—	(16.6)	5YR5/6 黄褐色		
第196図5	S005		No.8	土師器椀	口縁部～胴部	10%	<23.8>	—	—	(12.9)	7.5Y7/4 に近い黄褐色		
第196図6	PL78 S005			土師器椀	口縁部～底部	20%	<18.8>	<9.0>	15.2	10YR6/4 に近い黄褐色			
第196図7	PL78 S005		No.33	土師器椀	口縁部～胴部	30%	<19.6>	—	—	(18.6)	7.5YR7/4 に近い黄褐色		
第196図8	SF19		No.14	円筒形土器	胴部	10%	—	—	—	(9.0)	7.5YR7/8 黄褐色		
第196図9	PL78 S001			須恵器椀	口縁部～底部	20%	<12.9>	<5.5>	3.6	N7/ 灰白			
第196図10	PL78 S001			灰釉陶器椀	口縁部～胴部	10%	<18.0>	—	—	(2.0)	2.5GY7/1 明灰7 灰		
第196図11	S002 埋土			非対称土師器椀	口縁部～底部	10%	12.8	4.8	3.9	7.5YR8/3 浅黄褐色			
第196図12	PL78 S002 埋土			黒色土器A 坏	口縁部～底部	80%	13.1	5.0	3.5	7.5Y7/2 黄褐色			
第196図13	PL78 S002		No.1	黒色土器A 坏	口縁部～底部	90%	12.2	6.0	4.2	5YR8/2 灰白			
第196図14	PL78 S002 埋土			黒色土器A 坏	口縁部～底部	70%	13.3	5.5	4.4	7.5YR8/3 浅黄褐色			
第196図15	PL78 S002 埋土			高坏	胴部～底部	40%	—	10.6	10.0	5YR7/6 灰			
第196図16	PL78 S002 埋土			黒色土器A 椀	口縁部～底部	60%	16.3	6.9	5.4	7.5YR7/4 に近い黄褐色			
第196図17	PL78 S002			須恵器坏 A	口縁部～底部	30%	<13.6>	<5.3>	4.4	N6/ 灰			
第196図18	S002			須恵器坏 A	胴部～底部	40%	—	(6.3)	(3.7)	N8/ 灰白			
第196図19	PL78 S002 埋土			須恵器坏 B	口縁部～底部	ほぼ完形	14.7	9.4	4.1	10Y5/1 灰			
第196図20	PL78 S002			須恵器椀	体部	50%	<17.5>	—	—	3.5	N5/ 灰		
第196図21	S002			須恵器椀	体部	30%	<18.8>	—	—	3.8	N7/ 灰白		
第196図22	PL78 S002 埋土			胴部～底部	10%	—	3.6	(5.4)	5YR7/6 灰		・穿孔式		
第196図23	PL78 S002			鉢	口縁部～底部	70%	9.6	4.2	8.0	5YR6/4 に近い黄褐色			
第196図24	S002 埋土			土師器椀	口縁部～胴部	30%	<11.0>	—	—	(5.2)	7.5YR6/4 に近い黄褐色		
第196図25	S002			鉢	口縁部～胴部	10%	<33.0>	—	—	(9.6)	10YR7/4 に近い黄褐色		
第196図26	S002			土師器椀	口縁部～胴部	10%	<22.3>	—	—	(8.2)	7.5YR8/4 浅黄褐色		
第196図27	PL78 S002			小笠原	口縁部～底部	90%	12.0	6.0	13.4	7.5YR6/2 灰褐			
第197図1	PL79 S002			土師器長胴椀	口縁部～胴部	20%	<21.6>	—	—	(11.9)	5YR6/4 に近い黄褐色		
第197図2	PL79 S002			土師器長胴椀	胴部～底部	30%	—	5.6	(23.5)	10YR6/2 浅黄褐色			
第197図3	PL79 S002			土師器長胴椀	口縁部～底部	80%	17.5	7.0	32.7	7.5YR7/6 灰			

図版No	写真No	遺構名	取上げNo	器種	部位	残存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面色調	備考
第197回4	PL79	S002		土師青長胴壺	口縁部～底部	90%	<14.5>	6.5	18.0	2.5YR5/6 明赤褐色	
第197回5		S002 埋土		須恵器鉢	口縁部～胴部	10%	<34.6>	—	(8.0)	N6/灰	
第197回6	PL79	S002		須恵青長胴壺	口縁部～胴部	40%	13.8	—	(28.4)	7.5R3/6 暗赤	
第197回7	PL79	S002		須恵青四耳壺	胴部	10%	—	—	(5.5)	N5/灰	
第197回8	PL79	S002		須恵器鉢	口縁部～底部	10%	<35.8>	—	(12.0)	5YR2/1 黒黒	
第197回9		S003		黒色土器A 杯	口縁部～底部	25%	<12.4>	<5.3>	3.6	2.5YR2/灰白	
第197回10	PL79	S004 埋土		非均土師器杯	口縁部～底部	ほぼ完形	15.6	—	5.5	5YR6/4 に近い青	
第197回11	PL79	S004		非均土師器杯	口縁部～底部	90%	13.1	4.6	4.2	5YR6/8 青	
第197回12		S004		非均土師器杯	口縁部～底部	40%	<13.2>	—	4.5	7.5YR/4 に近い青	
第197回13		S004		高杯	胴部	40%	—	<12.8>	(10.2)	10YR8/4 浅黄褐色	
第197回14		S004		黒色土器A 杯	口縁部～底部	20%	<12.8>	<5.2>	4.0	7.5YR/6 青	
第197回15		S004		黒色土器A 杯	胴部～底部	30%	—	<6.2>	(4.8)	7.5YR8/4 浅黄褐色	
第197回16	PL79	S004		黒色土器B 皿	口縁部～底部	50%	13.6	6.9	2.9	7.5YR1/7 黒	
第197回17	PL79	S004		黒色土器A 杯	口縁部～底部	70%	15.7	6.1	5.8	7.5YR2/灰白	
第197回18	PL79	S004		須恵器杯A	口縁部～底部	60%	13.0	6.2	4.0	10G4/1 暗緑灰	
第197回19	PL79	S004		須恵器杯A	口縁部～胴部	20%	<13.6>	—	(3.2)	10YR/7/1 灰白	・黒書「風」有り
第197回20	PL79	S004		須恵器盤	口縁部～杯部	50%	17.0	—	(2.3)	N5/灰	
第198回1		D04 埋土		須恵器蓋	体部	20%	<11.4>	—	4.8	N6/灰	
第198回2	PL79	S004		須恵器蓋	体部	70%	21.1	—	(3.8)	N7/灰白	
第198回3	PL79	S004		須恵器蓋	体部	完形	14.1	—	3.5	10YR4/1 赭灰	・黒書有り
第198回4	PL79	S004		須恵器蓋	体部	80%	17.9	—	2.5	N4/灰	
第198回5		S004 埋土		土師器鉢	口縁部～胴部	10%	<16.8>	—	(5.4)	7.5YR8/3 浅黄褐色	
第198回6		S004 埋土		長胴壺	口縁部～胴部	10%	<21.7>	—	(11.3)	7.5YR6/4 に近い青	
第198回7		S005		非均土師器杯	胴部～底部	30%	—	—	(4.0)	7.5YR8/4 浅黄褐色	
第198回8		S005		高杯	杯部	10%	<12.6>	—	(5.0)	5YR2/6 青	
第198回9	PL79	S005		長胴壺	口縁部～胴部	10%	<20.4>	—	(8.3)	7.5YR8/4 浅黄褐色	
第198回10		S010		非均土師器杯	口縁部～底部	20%	<10.7>	—	4.1	7.5YR6/3 に近い青	
第198回11	PL79	S010		手づくね二丁土器	口縁部～底部	50%	<5.4>	4.0	4.2	2.5YR8/3 浅黄	
第198回12		S010	No.3	土師器蓋	口縁部～胴部	10%	<15.7>	—	(6.4)	10YR/7/3 に近い黄褐色	
第198回13		S010	No.1	土師器鉢	口縁部～胴部	10%	<21.5>	—	(8.0)	5YR6/8 青	
第198回14	XVI E17			非均土師器杯	口縁部～胴部	10%	<12.6>	—	(5.0)	7.5YR4/1 赭灰	・刻「#」有り
第198回15	XVI D14			非均土師器杯	口縁部～底部	25%	<12.2>	4.0	6.3	10YR/2 に近い黄褐色	
第198回16	XVI D19			非均土師器杯	口縁部～底部	60%	14.7	—	4.9	10YR8/3 浅黄褐色	
第198回17	XVI E25			非均土師器杯	口縁部～底部	40%	<20.1>	8.0	7.0	7.5YR/7/4 に近い青	
第198回18	XVI E18			須恵器杯	口縁部～底部	25%	<11.9>	—	4.2	N6/0 灰	
第198回19	XIX A11			須恵器蓋	体部	90%	9.0	—	(3.3)	N6/1 灰	
第198回20	XVI E20			須恵器蓋	体部	70%	7.1	—	2.5	N6/0 灰	
第198回21	XVI E19			須恵器高杯	杯部	30%	<14.0>	—	(5.0)	N4/0 灰	
第198回22	XVI A13			須恵器高杯	胴部	10%	—	—	(6.2)	N6/0 灰	
第198回23	XVI E22			須恵器短頸壺	胴部～底部	70%	—	—	(5.4)	10YR5/1 赭灰	・刻「#」有り
第198回24	XVI E25			須恵器杯A	口縁部～底部	25%	<11.0>	6.0	4.0	N3/0 暗灰	
第198回25	XVI E19			須恵器杯A	口縁部～底部	40%	<10.0>	<5.0>	(5.9)	N6/0 灰	
第198回26	XIX A23			須恵器杯A	口縁部～底部	90%	13.9	9.8	3.8	N4/0 灰	
第198回27	XIX A15			須恵器杯B 蓋	体部	完形	12.5	—	3.3	10Y5/1 灰	
第198回28	XVI E25			須恵器杯B	口縁部～底部	10%	<13.7>	<10.3>	3.3	N5/0 灰	
第198回29	XIX A14			須恵器杯B	口縁部～底部	30%	<18.0>	<14.6>	(3.5)	N7/0 灰白	
第198回30	XVI I18			須恵器盤	口縁部～胴部	20%	<27.0>	—	(3.0)	10Y6/1 灰	
第198回31	XVI G05			土師器杯A	口縁部～胴部	20%	<12.4>	—	(3.6)	7.5YR7/6 青	・黒書有り
第198回32	XIX A20			須恵器杯A	胴部～底部	20%	—	7.0	(3.0)	5YR7/1 明赤灰	・黒書有り
第198回33	XIX A14			須恵器杯A	口縁部	10%	—	—	(2.4)	5YR7/1 明赤灰	・黒書「凡」有り
第198回34	XIX B18			須恵器杯A	口縁部～底部	60%	<13.0>	5.0	4.0	2.5Y7/1 灰白	・黒書「凡」有り
第198回35	XIX A14			須恵器杯A	口縁部～胴部	20%	<12.9>	—	(3.3)	2.5YR/1 灰白	・黒書「凡」有り
第198回36	XIX B11			須恵器杯A	口縁部～胴部	10%	<13.1>	—	(3.6)	5YR7/1 明赤灰	・黒書「凡」有り
第198回37	XIX C03			須恵器杯A	口縁部	10%	—	—	(2.4)	7.5YR7/1 明赤灰	・黒書有り
第198回38	XVI H19			須恵器杯A	口縁部	10%	—	—	(2.3)	5YR7/1 明赤灰	・黒書有り
第198回39	XIX A14			須恵器杯A	口縁部～胴部	60%	<12.0>	5.0	(3.5)	5YR7/1 明赤灰	・黒書「冊」有り
第199回1	XIX A14			黒色土器A 杯	口縁部～底部	90%	13.0	5.5	4.2	7.5YR/3 に近い青	
第199回2	XVI G05・B25			土師器板	胴部～底部	20%	—	8.0	(3.0)	5YR6/6 青	
第199回3	XIX A14			灰釉陶器碗	口縁部～胴部	10%	<18.0>	—	(3.9)	10YR7/1 灰白	
第199回4	XVI C10			灰釉陶器碗	底部	10%	—	<8.2>	(2.5)	2.5Y7/1 灰白	
第199回5	XVI H15			灰釉陶器皿	口縁部～底部	10%	<14.1>	<6.8>	(2.5)	5Y7/1 灰白	
第199回6	XVI H			灰釉陶器平皿	取手	10%	—	—	—	7.5Y7/1 灰白	
第199回7	XIX B11			灰釉陶器耳皿	底部	50%	—	5.0	(1.9)	N6/0 灰	
第199回8	XVI J04			壺	口縁部～底部	40%	<16.8>	3.9	11.0	7.5YR8/4 浅黄褐色	・多孔式
第199回9	XVI E14			須恵器杯A	口縁部～胴部	30%	<25.4>	—	(19.5)	7.5YR8/4 浅黄褐色	
第199回10	XVI E25			土師器鉢	口縁部～胴部	20%	<21.0>	—	(16.0)	7.5YR/7/4 に近い青	
第199回11	XVI D14			土師器鉢	口縁部～底部	90%	17.4	7.5	29.5	7.5YR/7/3 に近い青	
第199回12	XVI D15			須恵器蓋	胴部～胴部	30%	—	—	(9.6)	5P86/1 青灰	・同一個体か?
第199回13	XVI D15			須恵器蓋	胴部	30%	—	—	(12.8)	5P86/1 青灰	・同一個体か?
第199回14	XVI E24			須恵器蓋	口縁部～胴部	20%	<14.0>	—	(13.9)	N6/0 灰	
第199回15	XIX A11			須恵器こね鉢	底部	10%	—	<9.3>	(5.2)	5G5/1 緑灰	・刻み「T」有り
第199回16	XVI G15			土師器こね鉢	底部	10%	—	<7.1>	(6.1)	5YR5/6 明赤褐色	
第199回17	XIX A20			須恵器杯B 蓋	体部	20%	<14.0>	—	(2.6)	7.5YR5/2 灰白	・刻「#」有り
第199回18	XVI H13			土師器蓋	胴部～底部	10%	—	7.4	(4.4)	7.5YR6/4 に近い青	・刻み有り
第199回19	9/71～2			鉢	口縁部～底部	—	<15.6>	9.0	9.1	7.5YR/7/4 に近い青	

第2章 発掘調査の概要

第19表 東條遺跡土器観察表(中世)

図版No.	写真No.	遺構名	取上げNo.	器種	部位	残存率	長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重さ(g)	外面色調	備考
第269図1	PL105	ST13		黄瀬戸 細皿	口縁~底部	60%	<15.8>	4.2	8.0	305.6	2.5 Y 8/2 灰白	
第269図2	PL105	ST21 トレンチー5号No.3 礎石		かわらけ	口縁~底部	60%	<8.8>	1.3	<6.7>	41.8	5YR2/6 橙	
第269図3	PL105	ST21		かわらけ	口縁~底部	10%	<10.9>	2.7	<2.7>	10.8	7.5YR8/3 浅黄橙	
第269図4	PL105	ST37 Fトレ		青磁碗A2類	口縁~胴部	20%	<12.8>	3.45	—	22.6	2.5 Y 5/2 暗灰黄	
第269図5	PL105	ST38 礎石No.1東		中瀬川 片口鉢類	口縁部	—	<32.0>	(5.0)	—	30.2	2.5YR8/3 浅黄	
第269図6	PL105	ST38 地点A 1層		かわらけ	口縁部	50%	7.4	1.45	6.4	32.6	7.5YR8/3 浅黄橙	
第269図7	PL105	ST38 地点B 1層		中瀬川 西四喜	口縁部	—	<14.0>	(3.2)	—	16.9	5 Y 8/2 灰白	
第269図8	PL105	ST37 1層		黄瀬戸 鉄煎	胴部	10%	—	(3.5)	—	10.5	5Y7/3 浅黄	
第269図9	PL105	SD12 埋土V層上砂層		中瀬川以外 甕	口縁部	10%	<35.8>	(5.9)	—	193.0	10R2/2 暗黒赤褐	
第269図10	PL105	SD22	No.4	すり鉢	胴~底部	30%	—	8.2	12.8	1280.3	N2/ 黒	
第269図11	PL105	SD12		中瀬川 甕	胴~底部	10%	—	(5.0)	<22.1>	82.5	7.5 Y 6/1 灰	
第269図12	PL105	SD14		珠洲 甕	胴部	10%	—	(9.3)	—	168.2	10Y5/1 灰	
第269図13	PL105	SD14		古瀬戸 瓶子	胴~底部	10%	—	(6.9)	12.0	383.6	—	
第269図14	PL105	SD12 帆列橋築土内		青磁碗B1類	口縁部	10%	—	(2.2)	—	11.9	7.5GY7/1 明緑灰	
第269図15	PL105	SD12-1		かわらけ	口縁~底部	50%	<7.4>	1.3	<5.8>	24.3	2.5Y8/2 灰白	
第269図16	PL105	SD13		白磁 碗B1類	口縁部	10%	—	(1.6)	(6.1)	33.1	N8/ 灰白	
第269図17	PL105	SD34		かわらけ	口縁~底部	70%	11.3	2.8	8.3	75.9	7.5YR7/4 にふい煙	
第269図18	PL105	SK990 埋土		古瀬戸 平碗	胴~底部	—	(2.4)	4.8	35.6	7.5Y6/2 灰白		
第269図19	PL105	SK804 埋土		青磁碗A4類	口縁部	10%	<16.6>	4.25	—	13.9	5YR6/2 灰オリーブ	
第269図20	PL105	SK968 上部		かわらけ	口縁~底部	50%	<10.3>	2.65	<6.0>	37.2	2.5YR8/2 灰白	
第269図21	PL105	SK960		火鉢	口縁部	—	6.9	—	96.1	7.5YR3/1 黒褐		
第269図22	PL105	SK844 No.7		かわらけ	口縁~底部	50%	<7.8>	1.3	<6.2>	36.9	10YR8/1 灰白	
第269図23	PL105	SK1020		青磁碗A2類	口縁部	—	<16.7>	(3.0)	—	9.0	5Y6/3 オリーブ黄	
第269図24	PL105	SK1030		かわらけ	口縁~底部	45%	<10.5>	(2.4)	<5.6>	24.2	7.5YR8/2 灰白	
第269図25	PL105	SK234		鍋	口縁~底部	70%	<45.8>	24.6	<31.4>	4750.0	7.5YR6/4 にふい煙	
第270図1	PL105	SK1030		かわらけ	口縁~底部	—	<7.7>	1.9	<5.5>	13.8	2.5Y7/1 灰白	
第270図2	PL105	SK1030		かわらけ	口縁~底部	80%	6.9	1.9	4.5	26.9	2.5Y7/2 灰白	
第270図3	PL105	SK1030		かわらけ	口縁~底部	60%	7.1	1.8	5.0	18.1	N8/ 灰白	
第270図4	PL105	SK1030		かわらけ	口縁~底部	90%	7.0	2.2	4.6	31.0	N8/ 灰白	
第270図5	PL105	SK1030 ベルト内		かわらけ	口縁~底部	70%	7.3	2.1	5.6	39.7	7.5Y7/1 灰白	
第270図6	PL105	SK1030		かわらけ	口縁~底部	売用	6.9	2.2	4.6	32.1	7.5Y7/1 灰白	
第270図7	PL105	SK1082		中瀬川 片口鉢1類	口縁部	—	(4.3)	<12.0>	123.8	2.5Y7/1 灰白		
第270図8	PL105	SK1088		かわらけ	口縁~底部	40%	<7.4>	1.7	<5.6>	15.4	7.5YR8/3 浅黄橙	
第270図9	PL105	SK1123 埋土下層		かわらけ	口縁~底部	30%	<7.8>	1.1	<5.5>	16.7	2.5Y7/4 浅黄	
第270図10	PL105	SK1123 埋土		かわらけ	口縁~底部	30%	<7.8>	1.35	<5.8>	16.1	2.5Y7/2 浅黄	
第270図11	PL105	SK1679 甕り方		かわらけ 灯明皿	口縁部	25%	<12.5>	2.8	<9.5>	41.0	7.5YR7/3 にふい煙	
第270図12	PL105	SK1741		かわらけ	口縁~底部	50%	6.9	1.7	(5.5)	18.2	2.5Y8/2 灰白	
第270図13	PL105	SK1741 EW サブトレ		かわらけ	口縁~底部	90%	7.0	1.5	5.3	31.5	7.5YR8/2 灰白	
第270図14	PL105	SK1741 甕り方		かわらけ	口縁~底部	90%	7.4	1.6	5.5	35.9	2.5Y8/2 灰白	
第270図15	PL105	SK1741		かわらけ	口縁~底部	90%	7.8	1.5	5.5	38.0	2.5Y8/2 灰白	
第270図16	PL105	SK1030		かわらけ	口縁~底部	売用	9.5	2.1	6.5	68.9	2.5 Y 8/3 浅黄	
第270図17	PL105	SK1741		かわらけ	口縁~底部	90%	7.2	1.7	5.3	38.9	2.5Y8/2 灰白	
第270図18	PL105	SK1741 (3~5段目)		かわらけ	口縁~底部	40%	<7.0>	1.5	<5.0>	17.7	10YR8/2 灰白	
第270図19	PL105	SK1741 (3~5段目)		かわらけ	口縁~底部	90%	7.4	1.8	5.5	37.5	10YR8/2 灰白	
第270図20	PL105	SK1741 (3~5段目)		かわらけ	口縁~底部	50%	<8.0>	2.1	<5.6>	25.1	10YR8/1 灰白	
第270図21	PL105	SK1741 (5~8段目)		かわらけ	口縁~底部	50%	7.7	1.6	5.7	29.6	7.5YR8/3 浅黄橙	
第270図22	PL105	SK1741		かわらけ	口縁~底部	90%	7.1	1.8	5.5	4.0	10YR8/3 浅黄橙	
第270図23	PL105	SK1741		かわらけ	口縁~底部	90%	7.3	1.8	5.7	48.7	2.5YR8/2 灰白	
第270図24	PL105	SK1779		かわらけ	口縁~底部	20%	—	(1.2)	<6.6>	12.9	10YR5/2 灰白	
第270図25	PL105	SK1663		中瀬川以外 甕	口縁~胴部	10%	<28.6>	(4.0)	—	85.2	5R4/1 暗赤灰	
第270図26	PL105	SK1814		火鉢	口縁部	30%	<31.0>	(13.7)	—	727.4	10R2/1 黒	・井戸299~310
第270図27	PL105	SK2197 ST38下		青磁碗B0類	口縁~胴部	10%	<128.8>	(2.9)	—	13.0	5GY7/1 明オリーブ灰	
第270図28	PL105	SK2081		青磁碗A1類	口縁~胴部	10%	<14.6>	(3.5)	—	27.4	10YR6/2 オリーブ灰	
第270図29	PL105	SK2120 礎石内		青磁碗B1類	口縁~胴部	10%	—	(3.7)	—	10.8	5GY7/1 明オリーブ灰	
第270図30	PL105	SK1794		青磁碗B1類	胴~底部	10%	—	(2.5)	<5.6>	47.6	10Y6/2 浅黄橙	
第270図31	PL105	SK2197 埋土		青磁碗B1類	胴~底部	20%	—	(2.3)	<6.0>	—	2.5Y6/1 黄灰	
第270図32	PL105	SK2331		青磁碗B1類	口縁~胴部	10%	—	(3.2)	—	17.7	7.5Y5/2 灰オリーブ	
第270図33	PL105	SK2507		かわらけ	口縁~底部	売用	7.8	1.5	5.0	40.7	10YR8/2 灰白	
第270図34	PL105	SK2649 甕		中瀬川以外 甕	口縁~胴部	10%	<29.2>	(5.2)	—	—	10R4/3 赤褐	
第270図35	PL105	SK1000 上のベルト内		かわらけ	口縁~底部	60%	<9.8>	2.4	5.0	64.4	10YR8/3 浅黄橙	
第270図36	PL105	SK2517		かわらけ	口縁~底部	30%	<13.8>	2.6	<8.8>	51.6	7.5YR7/3 にふい煙	
第270図37	PL105	SK2648 F II層		中瀬川以外 甕	口縁部	10%	<28.2>	(2.7)	—	—	2.5YR4/3 にふい赤褐	
第270図38	PL105	SK2648 F II層		中瀬川 甕	口縁部	10%	<43.6>	(7.7)	—	36.2	7.5YR4/3 暗	
第270図39	PL105	SK2651		青磁 A 甕類	胴~底部	10%	—	(1.5)	<5.0>	10.2	2.5Y7/1 灰白	
第270図40	PL105	SK2662		古瀬戸 水漬合子	口縁~胴部	20%	—	(4.9)	—	26.0	10YR7/2 にふい黄橙	
第270図41	PL105	SH05 下部VI層		かわらけ	口縁~底部	20%	<8.8>	1.6	—	20.9	7.5YR7/4 にふい煙	
第270図42	PL105	SH05		かわらけ	口縁~底部	90%	11.2	3.2	5.5	98.0	10YR8/1 灰白	
第270図43	PL105	SH05		かわらけ	口縁~底部	90%	7.8	1.4	6.3	58.9	10YR8/2 灰白	
第270図44	PL105	SH05		かわらけ	口縁~底部	30%	<9.0>	3.0	<6.4>	43.1	10YR8/2 灰白	
第270図45	PL105	SH06 サブトレI 遺構内		青磁碗B1類	口縁部	10%	—	(2.0)	—	9.6	7.5Y6/2 灰オリーブ	
第270図46	PL106	SH06 下層東西土b層		白磁 皿類	胴~底部	10%	—	1.1	4.0	—	5Y7/2 灰白	
第270図47	PL106	SH12 石垣下部灰砂上		中瀬川 甕	口縁部	10%	<47.8>	(3.9)	—	92.8	2.5Y5/3 黄橙	

図号No	写真 No	遺構名	取上げ No	種類	部位	残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重さ (g)	外面色調	備考
第270図48	PL106	SH06下層黒色土層		白磁 皿V類	口縁～底部	10%	<10.6>	(21)	—	6.3	7.5Y7/2灰白	
第270図49	PL106	SH12 石垣砂礫内		埴土	底部	10%	—	(5.3)	—	139.1	7.5Y6/1灰	
第271図1	PL106	SX01		かわらけ	口縁～底部	80%	8.8	1.3	8.0	55.8	7.5YR/4淺黄橙	
第271図2	PL106	SX03 埴土		埴土	胴～底部	10%	—	2.1	4.5	52.2	2.5Y8/2灰白	
第271図3	PL106	SX04		中津川 鏡	口縁部	10%	<46.0>	(3.8)	—	93.6	5YR5/2灰黄	
第271図4	PL106	SX05	No.1	かわらけ	口縁～底部	50%	<8.5>	1.6	6.8	32.3	7.5YR6/6黄	
第271図5	PL106	SX05	No.1	かわらけ	口縁～底部	50%	<8.1>	1.7	<6.5>	40.7	7.5YR/7/4にぶい黄橙	
第271図6	PL106	SX13 埴土?		かわらけ	口縁～底部	50%	<10.8>	2.9	<6.0>	27.1	10YR8/2灰白	
第271図7	PL106	SX15 埴土		かわらけ	口縁～底部	10%	<10.0>	3.0	<5.7>	24.4	7.5YR/2灰白	
第271図8	PL106	SF06 No.2		かわらけ	口縁～底部	30%	<9.2>	2.4	<5.9>	23.6	5YR8/3灰黄	
第271図9	PL106	SL01 絞埋土砂礫		かわらけ	口縁～底部	60%	8.2	1.5	6.6	44.5	7.5YR/6淺黄橙	
第271図10	PL106	SL01 絞埋土砂礫		かわらけ	口縁～底部	80%	12.0	3.1	7.7	93.5	5YR8/4灰黄	・埴土
第271図11	PL106	XVI B02 IV層		かわらけ	口縁～底部	—	<7.5>	1.7	<5.2>	13.0	7.5YR/2灰白	
第271図12	PL106	XVI B08 埴土		火鉢	底部	—	—	(2.1)	<16.0>	73.1	10YR3/1黒黄	
第271図13	PL106	XVI B10 検出	No.1	内耳土器	口縁～底部	40%	<32.4>	19.1	<24.6>	1388.6	10YR3/1黒黄	
第271図14	PL106	XVI B05 砂礫上層黒褐色土		すり鉢	口縁部	10%	<28.7>	(8.3)	—	130.8	5Y6/1灰	
第271図15	PL106	XVI B14 検出面		内耳土器	口縁～胴部	10%	<31.5>	(12.2)	—	510.5	10YR4/4黄	
第271図16	PL106	XVI B15 検出面		内耳土器	口縁～底部	20%	<26.5>	17.7	(22.6)	457.7	7.5YR/43黄	
第271図17	PL106	XVI B14		かわらけ	口縁～底部	90%	11.1	3.1	7.0	114.3	10YR8/2灰白	
第271図18	PL106	XVI B14		かわらけ	口縁～底部	80%	11.2	2.6	7.2	84.5	7.5YR/76黄	
第271図19	PL106	XVI B14		かわらけ	口縁～底部	90%	10.2	3.0	7.0	119.3	7.5YR/8/4淺黄橙	
第271図20	PL106	XVI B15 検出		かわらけ	口縁～底部	40%	<10.9>	4.1	<7.0>	59.0	7.5YR/2灰白	
第271図21	PL106	XVI B15 検出		青磁碗B1類	口縁～胴部	10%	<16.7>	5.7	—	389	2.5GY/7/1明オリーブ灰	
第271図22	PL106	XVI B15 検出		かわらけ	口縁～底部	50%	<8.1>	1.6	<5.9>	32.6	7.5YR/4にぶい黄橙	
第271図23	PL106	XVI B17・B18EVALト砂礫層(上位)		内耳土器	口縁～胴部	10%	<31.6>	(11.0)	—	138.0	10YR6/4にぶい黄橙	
第271図24	PL106	XVI B18 磁器		天目 後朝II	口縁～胴部	20%	<10.8>	(5.7)	—	30.0	10YR/2灰黄橙	
第271図25	PL106	XVI B18 磁器		天目 後朝II	口縁～胴部	20%	<10.5>	(5.8)	—	34.3	7.5YR5/6明黄	
第271図26	PL106	XVI B20		かわらけ	口縁～底部	50%	<10.1>	2.6	<7.1>	63.8	10YR8/2灰白	
第271図27	PL106	XVI B20 トレンチ		古瀬戸 折縁深皿	胴～底部	10%	—	(3.9)	<15.0>	41.6	2.5Y7/2灰黄	
第271図28	PL106	XVI B20 杭周辺		古瀬戸 鉄輪土器 花瓶	底部	10%	—	6.0	—	55.8	2.5Y3/2黒黄	
第271図29	PL106	XVI B23		かわらけ	口縁～底部	20%	<7.2>	1.2	<5.0>	11.5	7.5YR/3淺黄橙	
第271図30	PL106	XVI B23		かわらけ	口縁～底部	10%	<9.2>	2.1	<6.7>	5.6	7.5YR/3淺黄橙	
第271図31	PL106	XVI B23		かわらけ	口縁～底部	40%	<8.2>	2.15	<4.0>	19.4	2.5Y6/2灰白	
第271図32	PL106	XVI B23		古瀬戸 平碗	口縁～胴部	10%	<15.0>	(3.6)	—	17.0	7.5YR/1灰白	
第272図1	PL106	XVI B23		すり鉢	口縁～底部	30%	<24.7>	11.2	14.0	676.4	5Y6/1灰	
第272図2	PL106	XVI B24		かわらけ	口縁～底部	10%	<10.8>	2.15	<6.0>	14.7	5YR6/6黄	
第272図3	PL106	XVI B24		かわらけ	口縁～底部	50%	<10.0>	2.2	<6.8>	29.9	7.5YR/7/4にぶい黄橙	
第272図4	PL106	XVI B25		古瀬戸 椀皿	底部	—	—	(5.5)	7.0	107.7	5Y7/2灰白	
第272図5	PL106	XVII C01 V層	No.1-2	すり鉢	口縁～胴部	10%	<30.8>	(11.7)	—	395.7	5Y5/1灰	
第272図6	PL106	XVII C01 青灰色砂土層		かわらけ	口縁～底部	30%	<11.4>	3.0	<7.8>	32.2	10YR/2灰白	
第272図7	PL107	XVII C01 V層上層		山茶碗 6型式	胴部	30%	—	(4.5)	<4.4>	66.2	2.5Y7/1灰白	
第272図8	PL107	XVII C01 VI層		青磁碗A4類	口縁～胴部	10%	—	(5.6)	—	55.0	10Y6/2オリーブ灰	
第272図9	PL107	XVII C01 VI層		青白磁 小物	口縁～胴部	20%	—	(3.1)	—	3.2	10YR/1灰白	
第272図10	PL107	XVII C01 黄色砂層		中津川 山茶碗 片口鉢I類	口縁部	10%	<30.0>	(5.6)	—	94.5	2.5Y7/2灰黄	
第272図11	PL107	XVII C01 V層		かわらけ	胴～底部	20%	—	(1.2)	<7.0>	27.7	10YR/2にぶい黄橙	
第272図12	PL107	XVII C01 VI層		かわらけ	口縁～底部	30%	<11.4>	3.1	<7.4>	37.9	10YR/2にぶい黄橙	
第272図13	PL107	XVII C01 V層上層		古瀬戸 意匠皿	口縁～胴部	30%	<17.2>	(3.7)	—	68.7	5Y8/1灰白	
第272図14	PL107	XVII C02 V層		青磁碗B1類	口縁～胴部	10%	<17.8>	(4.2)	—	19.7	7.5Y6/2オリーブ灰	
第272図15	PL107	XVII C01 屋敷黒色土①下層		かわらけ	口縁～底部	80%	<8.2>	1.7	6.0	38.5	7.5YR/2灰白	
第272図16	PL107	XVII C01 屋敷黒色土②		かわらけ	口縁～底部	50%	<8.0>	1.5	<6.4>	—	5YR8/3淺黄	
第272図17	PL107	XVII C01 屋敷黒色土③		かわらけ	口縁～底部	30%	<4.7>	1.4	<6.6>	27.7	2.5Y8/2灰白	
第272図18	PL107	XVII C02 NSサブレIV層		青磁碗B0類	口縁～底部	20%	<13.2>	3.3	3.0	13.4	10GY5/1緑灰	
第272図19	PL107	XVII C02 V層		青磁碗B0類	胴～底部	20%	—	(2.0)	<8.0>	27.1	10GY7/1明緑灰	
第272図20	PL107	XVII C02 ベルトVI層上層		古瀬戸 初皿	底部	—	—	(1.0)	<10.0>	39.4	5Y7/1灰白	
第272図21	PL107	XVII C02 VI層		青磁碗B0類	口縁～胴部	10%	<12.0>	(4.1)	—	11.2	10YR/1 明緑灰	
第272図22	PL107	XVII C02 IV層上の砂質土		青磁碗B0類	口縁～胴部	10%	—	(2.7)	—	3.5	5Y6/7/1 明オリーブ灰	
第272図23	PL107	XVII C02 IV層		古瀬戸 初皿	口縁～胴部	10%	<15.6>	(3.0)	—	16.5	5Y8/2灰白	
第272図24	PL107	XVII C02 IV層		青磁 同安碗	底部	10%	—	(1.9)	4.7	57.7	7.5Y7/1灰白	・同安12C 後
第272図25	PL107	XVII C02・C03 検出		古瀬戸 平碗	胴～底部	—	(5.5)	<5.0>	51.6	7.5YR/6黄	・平碗14C	
第272図26	PL107	XVII C03 グリットNo.4		青磁 同安碗	底部	10%	—	(1.4)	<5.0>	25.0	7.5Y7/1灰白	・同安12C 後
第272図27	PL107	XVII C03 VI層		白磁 皿V類	胴～底部	10%	—	(1.5)	<4.0>	10.1	5Y7/1灰白	
第272図28	PL107	XVII C03		土器No.3 山茶碗 6型式	口縁～底部	20%	<8.8>	1.7	4.6	40.0	2.5Y7/1灰白	
第272図29	PL107	XVII C04 グリットNo.4		珠洲 すり鉢	胴～底部	10%	—	(3.2)	<8.7>	63.8	N4/0灰	・古いタイプ類似ナシ12C
第272図30	PL107	XVII C02	No.11・12	すり鉢	口縁～底部	40%	<27.0>	9.5	12.4	813.9	10YR6/3にぶい黄橙	
第272図31	PL107	XVII C06 VI層		青磁碗B1類	口縁～胴部	10%	—	(3.7)	—	12.2	5GY7/1 明オリーブ灰	
第272図32	PL107	XVII C06 V層		青磁 A類	底部	10%	—	(0.9)	4.7	27.8	2.5Y6/2灰黄	
第272図33	PL107	XVII C06 V層		かわらけ	口縁～底部	40%	<12.0>	3.1	<8.6>	49.3	7.5YR/2灰白	
第272図34	PL107	XVII C07 VI層		青磁碗A2類	胴～底部	10%	—	(3.1)	5.2	41.1	5GY5/1 オリーブ灰	
第272図35	PL107	XVII C08 検出面		埴土 片口鉢I類	口縁～胴部	10%	<27.6>	(6.8)	—	84.5	N7/0灰白	

第2章 発掘調査の概要

図面No	写真No	遺構名	取上げNo	種類	部位	残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重さ (g)	外面色調	備考
第272号36	PL107	XVII C09 礎群内		内耳土器	口縁部	10%	<28.8>	4.3	—	472	N15/6 黒	
第272号37	PL107	XVII C09 V層		埴輪	口縁部	10%	<25.6>	4.1	—	225	25Y7/1 灰白	・13C後ロクロ磨あり
第272号38	PL107	XVII C10 IV層		青磁碗A類	底部	—	(1.8)	5.8	107.2	5Y6/3 オリーブ黄		
第272号39	PL107	XVII C10 V層		古瀬戸 合子	口縁→胴部	10%	—	(1.8)	—	6.3	5Y7/2 灰白	
第272号40	PL107	XVII C10 V層		白磁 合子	—	10%	<5.1>	1.4	<3.8>	3.2	N7/灰白	
第273号1	PL107	XVII C10 V層		古瀬戸 新緑小皿	口縁→底部	30%	<7.4>	2.3	<3.8>	18.3	25Y6/2 淡黄	・中期様式色い〜13C末
第273号2	PL107	XVII C10 V層		かわらけ	口縁→底部	40%	8.0	1.7	—	202	75YR/3 淺黄橙	
第273号3	PL107	XVII C10 V層		火鉢	口縁→胴部	10%	—	(7.4)	—	95.5	N5/灰	
第273号4	PL107	XVII C10 V層		火鉢	胴部	10%	—	(6.0)	—	68.8	5YR4/4 にぶい赤褐	・14C前後
第273号5	PL107	XVII C11 井戸周辺出土		青磁 花瓶	胴部→胴部	10%	—	(4.8)	—	43.9	7.5GY6/1 緑灰	
第273号6	PL107	XVII C10 IV〜V層		青磁 同安皿	底部	—	(1.7)	<5.0>	—	27.4	5YR/2 灰白	
第273号7	PL107	XVII C10 V層		青磁碗B1類	口縁→胴部	—	—	(4.6)	—	13.3	7.5Y6/2 灰オリーブ	・12C後
第273号8	PL107	XVII C10 V層表採		火鉢	口縁→胴部	10%	—	(6.4)	—	98.7	N4/灰	・榎栗13C
第273号9	PL107	XVII C10 V層表採		火鉢	口縁→胴部	10%	—	(6.4)	—	98.7	N4/灰	・榎栗
第273号10	PL107	XVII C10 V層深堀り		山茶碗 5型式	底部	10%	—	(1.8)	<6.2>	3.0	75Y7/1 灰白	・尾張(南部)13C中 灯明磨あり
第273号11	PL107	XVII C10 V層		手づくね	口縁→底部	20%	<6.9>	1.4	—	9.7	—	
第273号12	PL107	XVII C11		かわらけ	口縁→底部	90%	7.5	1.6	6.5	52.5	75YR/4 淺黄橙	
第273号13	PL107	XVII C10 V層		把手付小皿	把手	—	—	(3.0)	—	16.6	25Y8/1 灰白	
第273号14	PL107	XVII C10 V層深堀り		尾張 片口鉢1類	胴部→底部	10%	—	(5.0)	<17.0>	159.8	75Y6/1 灰	・尾張(南部)13C中 灯明磨あり
第273号15	PL107	XVII C10 グリット№7		すり鉢	口縁→底部	40%	<20.0>	9.5	<10.2>	309.1	75Y5/1 灰	
第273号16	PL107	XVII C10 V層		中津川 壺	口縁→胴部	10%	<19.0>	(9.8)	—	225.2	5YR5/4 にぶい赤褐	・中津川で壊かれた13C 〜14C
第273号17	PL107	XVII C12 黒色粘質土中		かわらけ	口縁→底部	劣形	11.8	3.1	8.8	127.3	75YR/3 淺黄橙	・内湾内面削り 13C 新し面あり
第273号18	PL107	XVII C12 黒色土層		かわらけ	口縁→底部	50%	<9.9>	1.2	<4.0>	34.5	10YR/1 灰白	
第273号19	PL107	XVII C11 横出面		古瀬戸 平碗	口縁部	10%	—	(3.1)	—	12.0	7.5Y7/3 淺黄	
第273号20	PL107	XVII C12 黒色土層		かわらけ	口縁→底部	50%	12.2	2.7	8.0	80.8	75YR/2 灰白	
第273号21	PL107	XVII C12 横出面		かわらけ	口縁→底部	40%	<13.0>	3.0	<9.0>	41.0	10YR/2 灰白	
第273号22	PL107	XVII C12		かわらけ	口縁→底部	70%	8.4	1.7	6.5	53.2	10YR/2 灰白	
第273号23	PL107	XVII C12		青磁碗B1類	底部	20%	—	(1.8)	5.2	58.3	10Y5/2 オリーブ灰	
第273号24	PL107	XVII C08 横出面		中津川 片口鉢1類	胴部→底部	20%	—	(6.7)	<12.0>	204.1	5Y7/1 灰白	
第273号25	PL107	XVII C07 V層		かわらけ	口縁→底部	90%	8.4	1.5	6.3	65.9	75YR/3 淺黄橙	
第273号26	PL107	XVII C13 V層中下部		かわらけ	口縁→底部	60%	8.1	1.6	7.0	43.8	75YR/4 淺黄橙	
第273号27	PL107	XVII C14	土器№3 (1)	内耳土器	口縁部	10%	41.7	10.1	—	336.7	75YR1/7 黒	
第273号28	PL107	XVII C14	土器№3 (1)	内耳土器	口縁→胴部	40%	<30.7>	(15.2)	—	336.7	5YR/2 1 黒褐	
第273号29	PL107	XVII C13	土器№3	中津川 壺	口縁→胴部	10%	—	(7.1)	—	92.8	25YR5/2 灰褐	
第273号30	PL107	XVII C14 IV層		かわらけ	口縁→底部	40%	<10.0>	2.5	<3.3>	28.0	75YR/3 にぶい赤	
第273号31	PL107	XVII C14 IV層上面		かわらけ	口縁→底部	60%	8.4	1.5	7.0	48.9	75YR/4 淺黄橙	
第273号32	PL107	XVII C07 横出面・ベルト		天目 後期II	口縁部	10%	<13.9>	(3.6)	—	22.5	5YR4/4 にぶい赤褐	
第273号33	PL107	XVII C14	青磁片 №3	青磁碗A類	底部	20%	—	(3.0)	—	101.5	10GY7/1 明緑灰	
第273号34	PL107	XVII C08 セクションベルト内壁中央近辺		青磁碗A2類	口縁部	10%	<18.0>	(3.8)	—	25.3	75Y5/2 灰オリーブ	
第273号35	PL107	XVII C18 グリット№7		青磁碗A4類	口縁部	10%	<16.0>	(4.7)	—	27.4	10Y6/2 オリーブ灰	・龍栗12C後〜13C前
第273号36	PL107	XVII C22		かわらけ	口縁→底部	劣形	8.4	1.1	6.5	51.7	75YR/4 淺黄橙	
第273号37	PL107	XVII C22		かわらけ	口縁→底部	90%	8.2	1.2	6.2	44.7	75YR/4 淺黄橙	
第273号38	PL107	XVII C25	№3	かわらけ	口縁→底部	40%	<11.0>	(3.0)	8.6	53.7	10YR/3 にぶい黄橙	
第273号39	PL107	XVII C01 V層上面		白磁 皿状器	口縁→底部	30%	<10.5>	(2.0)	<2.7>	13.5	10GY7/1 明緑灰	
第273号40	PL107	XVII C25		かわらけ	口縁→底部	70%	7.6	1.7	5.5	29.6	10YR/4 淺黄橙	
第274号1	PL107	XVII D06 IV層		青磁 香炉	胴部	10%	—	(1.7)	—	18.9	5G6/1 緑灰	
第274号2	PL108	XVII D06	№9	かわらけ	口縁→底部	50%	<11.1>	3.25	<8.0>	58.6	75YR/3 淺黄橙	
第274号3	PL108	XVII D11	土器№1	かわらけ	口縁→底部	40%	<7.8>	1.6	<5.9>	24.1	10YR/1 灰白	
第274号4	PL108	XVII D11	土器№2	かわらけ	口縁→底部	60%	<10.7>	3.15	<6.9>	82.5	10YR/3 淺黄橙	
第274号5	PL108	XVII D11	土器№3	かわらけ	口縁→底部	50%	<7.7>	1.6	<5.5>	22.2	5YR/4 淺橙	
第274号6	PL108	XVII F10		古瀬戸 餅台	—	—	—	(4.3)	—	53.9	5Y7/3 淺黄	
第274号7	PL108	XVII G02 礎等(覆丸?)		古瀬戸 水注	胴部→底部	—	—	(5.6)	<6.3>	69.2	25YR/1 灰白	
第274号8	PL108	XVII G03 礎等(覆丸?)		火鉢	口縁部	—	<28.8>	(4.8)	—	74.0	10YR/3 1 黒褐	
第274号9	PL108	XVII G02 礎等(覆丸?) 下層		かわらけ	口縁→底部	60%	8.5	2.3	4.9	58.2	25Y8/4 淡黄	
第274号10	PL108	XVII G03-G04 ベルト		山茶碗 5型式	口縁→底部	10%	<8.2>	1.4	<4.7>	6.6	25Y8/1 灰白	
第274号11	PL108	XVII G05		かわらけ	口縁→底部	50%	—	(1.25)	4.3	48.6	75YR/6 褐	
第274号12	PL108	XVII G08 近世?水路機軸		天目 後期II	胴部→底部	10%	—	(1.8)	<4.0>	14.3	5YR5/4 にぶい赤褐	
第274号13	PL108	XVII G04 杭付石		尾張 片口鉢1類	底部	—	—	(5.1)	<10.2>	77.3	25Y7/1 灰白	
第274号14	PL108	XVII G17		中津川 片口鉢類	胴部→底部	—	—	(6.9)	—	165.6	25Y7/1 灰白	
第274号15	PL108	XVII G20		中津川 片口鉢類	胴部→底部	—	—	(4.7)	—	224.5	25Y7/1 灰白	
第274号16	PL108	XVII G13		中津川 片口鉢類	口縁→胴部	—	<32.0>	(6.2)	—	56.1	25Y7/1 灰白	
第274号17	PL108	XVII G04 礎等(覆丸?)		古瀬戸 底割石皿	口縁→胴部	10%	<15.0>	(3.3)	—	23.6	N7/灰白	
第274号18	PL108	XVII G07 サブト近世? 水路機軸		古瀬戸 緑釉小皿	口縁→底部	—	<10.5>	2.4	<4.5>	26.5	10YR/1 灰白	
第274号19	PL108	XVII G17		すり鉢	口縁部	—	—	(5.5)	—	79.3	25Y8/1 灰白	

図版No	写真No	遺構名	取上げNo	器種	部位	残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重さ (g)	外面色調	備考
第274図20	PL108	XVII G15 ベルト沿い トレンチ		白磁皿 V類	口縁～胴部	—	<18.2>	2.3	—	8.3	2.5YG/1 灰白	
第274図21	PL108	XVII G20+H6 黒色土下げ		青磁碗 B1類	口縁部	—	<16.2>	2.4	—	10.8	7.5GY/71 明緑灰	
第274図22	PL108	XVII G12		かわらけ	口縁～底部	80%	<16.2>	1.5	4.0	40.9	5YR7/6 灰	
第274図23	PL108	XVII G15 黒色土下げ中		かわらけ	口縁～底部	—	—	7.6	1.6	5.9	—	5YR7/4 に近い橙
第274図24	PL108	XVII H区 検出面		鎌倉 壺	口縁～胴部	10%	<18.3>	(13.5)	—	438.0	N4/ 灰	
第274図25	PL108	XVII H区 検出面		中津川 壺	口縁～胴部	10%	—	(10.6)	—	361.9	10YR5/3 に近い黄褐	
第274図26	PL108	XVII H区 検出面		中津川以外	口縁部	10%	—	(8.1)	—	198.6	2.5Y5/2 黒灰土	
第274図27	PL108	XVII H区 検出面		かわらけ	口縁～底部	80%	7.6	1.6	6.0	33.7	7.5YR/74 に近い白	
第274図28	PL108	XVII H3 灰色粘厚土		青白磁 小壺	胴～底部	—	(2.85)	—	—	5.2	10YR8/2 灰白	
第274図29	PL108	トレンチNo.3 -F		かわらけ	口縁～底部	—	7.8	1.5	6.5	63.2	7.5YR/76 灰	
第274図30	PL108	XVII H区 検出面		青磁碗 B1類	口縁部	—	(2.6)	—	—	12.4	10GY/1 明緑灰	
第274図31	PL108	XVII H区 カベ		青磁碗 A2類	胴～底部	10%	(2.9)	<5.6>	42.6	10Y6/2 オリーブ灰		
第274図32	PL108	z		青磁 A類皿	口縁～底部	20%	<11.0>	2.1	<4.9>	29.6	5Y7/1 灰白	
第274図33	PL108	z		古瀬戸 平碗	底部	—	<1.65>	4.8	50.6	2.5YR8/2 灰白		
第274図34		C区		青磁 小飯塚字 笠舞台	胴部	10%	—	(2.8)	—	4.1	7.5GY/1 緑灰	

第20表 東條遺跡土製品観察表(古代)

図版No	写真No	遺構名	取上げNo	遺物名称	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	高さ (mm)	重さ (g)	備考
第203図16		S839		ミニチュア	土	19.8	11.7	8.1	1.3	
第203図17		S848		土馬の脚?	土	28.2	11.0	9.0	2.1	
第203図18		S854	土器No.13	棒状土製品	土	39.8	7.2	5.1	1.8	
第203図19		S855 古代面	No.2	紡輪車	土	31.5	32.0	15.0	18.3	
第203図20		S855 古代面 埋土1層		紡輪車	土	60.0	45.0	34.1	85.8	
第203図21	PL80	S866 古代面	土器No.4	紡輪車	土	73.0	72.2	35.0	195.5	
第203図22		S874 古代面 検出		ミニチュア	土	40.0	40.0	37.0	46.6	
第203図23		S706	No.1	ミニチュア	土	40.0	39.0	27.0	25.0	
第203図24	PL80	S706 下溝		紡輪車	土	76.0	74.6	23.0	177.0	
第203図26	PL80	S719	土器No.1	土馬	土	52.2	29.5	37.4	35.0	・接合(頭)
第203図26	PL80	S719	土器No.2	土馬	土	57.5	27.5	20.5	23.4	・接合(脚)
第203図27	PL80	S841		土玉	土	12.8	12.8	11.0	1.6	
第203図28	PL80	S82649		土玉	土	10.1	9.0	4.0	0.1	
第203図29	PL80	S8250		紡輪車	土	45.0	43.9	27.0	62.7	
第203図30	PL80	S8400 埋土		紡輪車	土	43.3	31.0	21.3	17.4	
第204図1		S002 トレンチ3 東端埋土 1層一括		手づくね	土	45.0	44.5	20.0	23.2	
第204図2		S002 トレンチ1 北埋土 1層中		土鈴	土	44.0	41.0	55.7	55.0	
第204図8		S003 埋土 1層一括		ミニチュア	土	32.5	31.0	24.0	16.9	
第204図13		Z区 トレンチ1北 表探		紡輪車	土	84.2	40.5	27.9	72.3	・石面に混入
第204図14		XVII E19 V層		紡輪車	土	77.4	40.5	29.8	93.9	
第204図15	PL80	XVII C06 検出面		土鐘	土	39.5	14.9	13.8	7.4	
第204図16	PL80	XVII C11 黒色土層		土鐘	土	55.2	18.0	17.1	14.7	
第204図17	PL80	XVII C12 黒色土層		土鐘	土	56.2	17.0	16.6	13.2	
第204図18	PL80	XVII C07 V層上部		土鐘	土	47.0	16.0	14.2	9.1	
第204図19	PL80	XVII C03 V層上部砂層		土鐘	土	50.7	15.4	14.9	9.5	
第204図20		F区 X IX B11 V層上部砂層		ツツ形土製品	土	22.8	22.8	29.3	17.2	
第204図21		X IX B17		土製内盤	須磨器	42.8	39.4	15.5	24.6	
第204図22		XVII B08 仮1層		土製内盤	土	35.5	35.0	6.0	7.5	

第21表 東條遺跡土製品観察表(中世)

図版No	写真No	遺構名	取上げNo	遺物名称	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	高さ (mm)	重さ (g)	備考
第278図3	PL109	中世第1棟 トレンチC		土鐘	土	46.0	16.0	14.0	8.2	
第278図4	PL109	X VII G03		土鐘	土	51.0	15.0	14.0	10.5	
第278図5	PL109	SH05		土鐘	土	40.0	14.0	14.0	9.2	
第278図6	PL109	X VII C07 東端下部中世		土鐘	土	57.0	14.0	13.0	8.7	

第22表 東條遺跡羽口炉体観察表(古代)

図版No	写真No	遺構名	取上げNo	遺物名称	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	高さ (mm)	重さ (g)	備考
第203図25	S707 P9			羽口	土	75.0	65.0	38.0	103.9	
第204図3	S002 トレンチ1と2の間	埋土1層一括		羽口	土	82.0	85.0	67.0	354.8	
第204図4	S002 トレンチ1と2の間	埋土1層一括		羽口	土	81.0	69.0	39.0	167.8	
第204図5	S002 埋土1層			羽口	土	74.5	57.2	46.2	128.0	
第204図6	S002 トレンチ1北	埋土1層		羽口	土	73.0	52.0	29.0	89.1	
第204図7	S002 TR1の北	埋土1層		羽口	土	84.8	43.2	45.3	125.5	
第204図9	S004 TR1の北	埋土1層		羽口	土	83.5	72.5	65.0	262.1	
第204図10	S004 TR1の北	埋土1層		羽口	土	80.0	72.0	69.0	339.8	
第204図11	S004 埋土1層一括			椀形鋳造滓	土	74.0	50.0	22.0	66.3	
第204図12	X IX B18 目録			椀形鋳造滓	土	79.0	65.0	30.0	142.2	

第2章 発掘調査の概要

第23表 東條遺跡羽口I体観察表(中世)

図版No	写真No	遺構名	取上げNo	遺物名称	材質	長さ	幅	高さ	重さ(g)	備考
第203図25	SH05			土樋	土	41.5	6.5	6.2	9.1	
第278図1	SK1884			羽口	土	47.0	47.0	25.0	40.8	2点-1
第278図2	XVI G07		No.1	羽口	土	79.1	61.2	29.4	86.7	

第24表 東條遺跡石器観察表(古代)

図版No	写真No	遺構名	取上げNo	遺物名称	材質	長さ	幅	高さ	重さ(g)	備考
第200図1	S805		No.15	礫石	安山岩	168.0	90.0	63.0	1200.0	
第200図2	S805		No.5	石鏃	安山岩	122.0	88.0	28.3	331.6	
第200図3	S808		石鏃No.1	礫石	燧石	108.5	73.0	44.0	450.0	
第200図4	S809 埋土1層		No.2	磨製石包丁	珪質岩	103.0	65.0	8.0	56.8	・杏仁形で2穴式
第200図5	S810 床			石鏃	黒曜石	33.3	14.2	7.8	4.1	
第200図6	S810-6 埋土(下層)			礫石	黒曜石	27.5	14.5	5.2	1.5	
第200図7	S810		土器No.34	磨石	安山岩	29.1	25.5	23.8	23.9	
第200図8	S810		石鏃No.2	磨石	安山岩	120.0	111.0	37.0	623.0	
第200図9	S810		石鏃No.1	礫石	安山岩	111.0	102.0	89.0	715.0	・多孔質
第200図10	S810		石鏃No.11	礫石	砂岩	120.0	131.0	43.0	1062.0	・細粒砂岩
第200図11	S810 カマド			礫石	礫石	76.0	74.0	40.0	48.3	
第200図12	S810		土器No.23	石鏃	砂岩	98.0	74.5	16.0	174.6	
第200図13	S816 1層			石鏃	安山岩	98.5	75.5	30.5	295.4	
第200図14	S817		S-No.2	石鏃	安山岩	143.0	94.0	37.0	730.0	
第200図15	S817		S-No.1	礫石	安山岩	137.0	48.0	32.0	310.0	
第200図16	PL80 S818 埋土			礫石	安山岩	224.0	181.0	134.0	4450.0	
第200図17	S819		石鏃No.2	礫石	安山岩	88.5	89.0	40.0	420.0	
第200図18	PL80 S819		石鏃No.1	大型礫石	砂岩	231.0	175.0	119.0	5380.0	
第200図19	S819		石鏃No.3	礫石	砂岩	113.0	103.0	32.0	485.0	・細粒砂岩 表面に削りキズ多数
第201図1	S821 集石一括		No.7	礫石	砂岩	82.0	28.0	22.0	74.9	
第201図2	S821		No.6	礫石	安山岩	162.0	83.0	58.0	928.0	・残存率1/2
第201図3	S821 集石一括		No.7-(1)	石鏃	安山岩	79.0	76.5	32.0	330.0	・角礫状素材
第201図4	S821 集石一括		No.7-(2)	石鏃	砂岩	115.0	51.0	34.0	272.0	・角礫状素材
第201図5	S821 集石一括		No.7-(3)	石鏃	安山岩	121.0	63.5	31.0	389.0	・角礫状素材
第201図6	S821 集石一括		No.7-(4)	石鏃	安山岩	96.0	69.0	37.0	360.0	・角礫状素材
第201図7	S821 集石一括		No.7-(5)	石鏃	安山岩	129.0	50.5	36.5	257.0	・角礫状素材
第201図8	S821 集石一括		No.7-(6)	石鏃	安山岩	153.0	75.0	35.0	432.0	・角礫状素材
第201図9	S822		S-No.16	石鏃	安山岩	95.5	79.0	28.5	320.0	
第201図10	S822		S-No.7	石鏃	砂岩	111.0	74.5	22.5	315.0	
第201図11	S823		S-No.2	石鏃	閃緑岩	114.5	108.0	34.0	645.0	
第201図12	S823		S-No.4	石鏃	安山岩	141.0	100.0	53.0	918.0	
第201図13	S823		S-No.3	石鏃	安山岩	123.0	104.0	39.0	715.0	・川原石
第201図14	S823		S-No.1	石鏃	安山岩	123.0	106.0	32.5	589.0	・川原石
第201図15	PL80 S823		S-No.6	石鏃	安山岩	120.0	109.0	50.0	839.0	・川原石
第201図16	S829 P7			礫石	安山岩	146.0	80.0	60.0	1020.0	
第201図17	S829		No.1	石鏃	安山岩	144.0	136.5	32.0	725.0	
第202図1	S835 埋土		No.4	礫石	安山岩	97.0	80.0	66.0	535.0	
第202図2	S836 埋土			礫石	燧石	76.0	58.0	21.0	98.3	
第202図3	S839 埋土			礫石	安山岩	138.0	107.0	51.0	924.0	
第202図4	S839 埋土			礫石	安山岩	123.0	79.0	29.0	360.0	
第202図5	S839 埋土			礫石	砂岩	107.0	92.0	43.5	540.0	・残存率1/2
第202図6	S842 埋土上層			新緑車	礫石	43.0	43.5	20.5	48.0	
第202図7	S846 北西埋土			礫石	閃緑岩	96.0	41.0	20.0	128.3	
第202図8	S852 古代埋土			礫石	安山岩	114.0	94.5	39.0	444.3	
第202図9	S853 古代		No.2	磨石	安山岩	113.0	79.0	71.0	718.3	
第202図10	S854 古代埋土			磨石	安山岩	64.0	62.0	47.0	249.2	
第202図11	S854 埋土			礫石	砂岩	65.0	33.0	24.0	82.7	・中粒砂岩
第202図12	S858 古代No.5		No.5	礫石	砂岩	132.0	127.0	78.0	1873.5	
第202図13	S863 古代掘り方			礫石	燧石	95.0	45.5	25.0	181.8	
第202図14	S870 古代埋土下			礫石	安山岩	84.5	69.0	36.0	249.1	
第202図15	S873 P7 古代			磨石	安山岩	137.0	85.5	51.0	716.9	
第202図16	S873 P7 古代			磨石	安山岩	104.0	78.0	39.0	386.5	
第202図17	S873 P7 古代			磨石	安山岩	109.0	82.0	30.0	339.4	
第202図18	SK262 埋土1層			礫石	安山岩	123.0	100.5	40.0	485.0	
第202図19	PL80 ST11 P2			礫石	安山岩	195.0	185.0	126.0	2350.0	・旧 SK477 多孔質安山岩
第202図20	SK511		No.1	礫石	安山岩	183.0	92.0	94.0	1280.0	
第203図1	トレンチ1の北S002 埋土2層中			石製紡錘車	礫石	79.0	79.0	29.0	9.4	
第203図2	S003 埋土1層			石鏃	安山岩	19.0	9.7	3.9	0.6	
第203図3	トレンチ1の北S003 埋土1層中			石製紡錘車	燧石	21.0	37.0	11.0	228.0	
第203図4	S004 埋土1層			石鏃	安山岩	25.9	16.0	4.3	1.3	
第203図5	S004 埋土1層			石鏃	チャート	25.5	20.2	3.5	1.6	
第203図6	X IX A23 V層			石鏃	チャート	23.6	12.5	3.2	0.6	
第203図7	トレンチ1の北			扁平片方石斧	石巻片岩	64.0	47.0	10.0	47.5	
第203図8	X IX B06			磨製石包丁	頁岩	37.5	37.5	4.0	7.2	
第203図9	X IX A20 III層			石製紡錘車	礫石	17.0	28.0	9.0	4.8	

図版No	写真No	遺構名	取上げNo	遺物名称	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	高さ (mm)	重さ (g)	備考
第203図10	XVII C14	古代煉出面		白土	滑石	16.0	12.0	6.5	0.9	
第203図11	XIX G04	集中一積	GNo 5-⑦	磨石	安山岩	99.0	79.0	44.5	414.0	
第203図12	XIX A14	Ⅱ層		磨石	安山岩	52.0	46.5	26.0	66.0	
第203図13	XVII E18	V層		磨石	安山岩	70.0	57.0	39.0	114.5	
第203図14	XVII E19	V層		磨石	安山岩	68.5	65.0	32.0	186.7	
第203図15	XVII E09	煉出面		磨石	安山岩	86.0	75.0	48.0	290.3	

第25表 東條遺跡石器観察表 (中世)

図版No	写真No	遺構名	取上げNo	遺物名称	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	高さ (mm)	重さ (g)	備考
第275図1	SK1886	灰色粘土		磨石	溶岩	147.0	164.5	112.0	1743.7	
第275図2	SK2131			磨石	磨石	73.0	64.0	39.0	58.8	
第275図3	SK2770			磨石	凝灰岩	148.0	57.0	46.0	351.8	
第275図4	PL109 SK2758			礫	砂泥互層岩	80.0	65.0	14.0	124.5	
第275図5	PL109 X VII G07			礫	砂泥互層岩	64.0	31.0	7.0	19.6	
第275図6	SK1666			磨石	磨石	50.0	44.0	42.0	19.7	
第275図7	PL109 SK1667	埋土		磨石	溶岩	117.0	106.5	70.0	586.0	
第275図8	SK1735			臼	安山岩	165.0	58.5	51.0	281.1	
第275図9	SK1741 (井戸)			臼	安山岩	264.5	139.0	73.0	2386.9	
第275図10	SK1814			磨石	安山岩	246.0	89.0	74.0	2125.3	
第275図11	PL109 SK1936			臼	安山岩	288.0	163.5	104.0	5118.1	・残存率1/2
第275図12	SK2744			磨石	溶岩	180.0	132.0	85.0	1620.1	
第275図13	SK2744 (井戸)			磨石	溶岩	79.0	72.0	58.0	327.3	
第275図14	SK2745	古代井戸側境内		磨石	溶岩	182.0	98.0	109.0	987.5	
第275図15	SH13 No.1			磨石	凝灰岩	94.0	40.0	40.0	185.5	
第275図16	SH13		No.1	磨石	砂岩	102.0	86.0	49.5	393.6	
第276図1	X VII G04			磨石	安山岩	104.0	92.5	35.0	480.2	・凹み有り
第276図2	PL109 SK1680	北の礎		磨石	安山岩	149.5	105.5	90.0	1763.2	
第276図3	X VII B24			磨石	凝灰岩	136.0	43.0	37.0	301.8	
第276図4	X VII G21			磨石	凝灰岩	88.0	32.0	31.5	92.0	
第276図5	X VII G07			磨石	安山岩	91.0	85.5	48.0	462.6	
第276図6	X VII G24	調査区外		磨石	溶岩	88.0	86.5	58.0	487.5	
第276図7	PL109 X VII G11			礫 (完形)	砂泥互層岩	49.0	30.0	5.5	15.9	
第276図8	PL109 X VII G04		No.3	礫 (完形)	砂泥互層岩	75.0	36.5	10.0	46.6	
第276図9	PL109 X VII H16 - G20			礫	砂泥互層岩	85.0	51.0	15.0	58.8	
第276図10	PL109 X VII C25		No.1	礫	砂泥互層岩	142.0	92.0	21.0	458.0	
第276図11	X VII G12 No.1			碧玉	緑色凝灰岩	23.0	10.0	10.0	3.8	
第276図12	PL109 X VII C25			五輪礫	凝灰質砂岩	258.0	259.0	178.0	13500.0	
第276図13	PL109 5T21	黒色土		礫 (完形)	砂泥互層岩	82.0	73.0	25.0	280.2	
第276図14	5T38	No.7 トレンチ内		すり石	安山岩	110.0	90.0	32.0	510.0	・拓本有り
第276図15	SK1288		No.2	磨石	砂岩	219.5	105.0	73.0	2020.0	・細粒砂岩 接合
第276図16	SK1145			磨石	凝灰岩	86.0	46.0	26.0	144.0	
第276図17	5X03 No.1			臼	安山岩	219.0	145.0	124.0	4520.0	
第276図18	5X11		No.1	磨石	溶岩	122.0	108.0	76.0	560.0	
第276図19	5X11			磨石	溶岩	68.5	63.0	41.0	148.0	
第277図1	PL109 SH08	6層下部		礫	砂泥互層岩	105.0	65.0	20.0	174.9	・礫種有り
第277図2	PL109 SD12-2			礫	砂泥互層岩	71.0	63.0	24.0	198.4	
第277図3	SD24			磨石	磨石	95.5	78.5	46.0	93.9	
第277図4	X VII B 黒褐色土			磨石	磨石	73.0	61.0	21.0	24.9	
第277図5	PL109 X VII B 黄褐色砂礫層			礫	砂泥互層岩	107.0	79.0	21.0	288.3	
第277図6	PL109 X VII B 黒褐色土			礫	砂泥互層岩	135.0	99.0	27.0	345.0	
第277図7	X VII C01 VI層			磨石	凝灰岩	67.0	31.5	37.0	76.0	
第277図8	PL109 X VII C01 VI層			礫	砂泥互層岩	59.0	31.0	10.0	17.6	
第277図9	X VII C02			磨石	凝灰岩	141.0	38.0	34.0	220.6	
第277図10	X VII C02 屋敷		石No.5	磨石	凝灰岩	100.0	46.5	51.5	350.0	
第277図11	PL109 X VII C02 屋敷出露?			臼	安山岩	333.5	185.0	110.0	9100.0	・残存率1/2
第277図12	X VII C02 V層			磨石	溶岩	78.0	67.5	54.0	245.5	
第277図13	PL109 X VII C02 IV層下部 砂礫上面			礫	砂泥互層岩	107.0	88.0	18.0	316.0	
第277図14	PL109 X VII C02 屋敷No.2			礫	砂岩	120.0	70.0	18.0	212.6	
第277図15	X VII C03 V層			磨石	凝灰岩	93.0	37.0	28.0	143.2	
第277図16	X VII C03 VI層			磨石	凝灰岩	49.0	42.0	11.0	30.1	・4面使用
第277図17	X VII C07 V層			磨石	凝灰岩	44.0	33.0	3.5	7.6	
第277図18	X VII C10 VI層			磨石	凝灰岩	88.0	34.0	40.0	136.5	
第277図19	X VII C10 VI層			磨石	凝灰岩	92.0	32.0	11.0	51.3	
第277図20	PL109 X VII C10 IV層			礫	砂泥互層岩	70.0	50.0	19.0	118.6	
第277図21	X VII C10 IV層			磨石	溶岩	70.0	65.0	52.0	208.5	
第277図22	X VII D06	IV層下部		磨石	溶岩	108.5	84.0	73.0	332.0	・残存率1/2
第277図23	X VII D11		石No.1	磨石	溶岩	144.0	130.0	106.0	1350.0	
第277図24	X VII H13	VI層上面		碧玉	滑石	11.5	11.0	6.5	1.1	

第2章 発掘調査の概要

第26表 東條遺跡金属観察表(古代)

図録№	写真№	遺構名	取上げ№	遺物名称	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	高さ (mm)	重さ (g)	備考
第205図1	S821		No.1	金具	銅	160	140	2.0	1.6	
第205図2	S821		No.1	金具	銅	150	130	1.0	0.6	
第205図3	S835	埋土		帯金具	銅	300	240	10.0	4.7	
第205図4	S839	埋土	No.162	耳環	鉄+メッキ	280	260	7.0	18.0	
第205図5	S854			刀子	鉄	57.3	17.5	10.7	9.4	
第205図5	S854			刀子	鉄	33.3	3.0	9.7	4.4	
第205図6	S854		No.12	鎌	鉄	37.8	24.8	16.9	16.0	
第205図6	S854		No.12	鎌	鉄	152.3	42.5	20.0	110.7	
第205図7	S853			釘	鉄	25.0	13.8	13.1	3.2	
第205図7	S853			釘	鉄	55.2	14.2	17.7	10.7	
第205図8	S852		No.1	鏃?	鉄	59.4	19.7	15.3	17.0	
第205図8	S852		No.1	鏃?	鉄	16.9	11.1	10.8	2.1	
第205図8	S852		No.1	鏃?	鉄	21.5	12.3	11.8	4.2	
第205図8	S852		No.1	鏃?	鉄	30.0	11.9	10.9	3.8	
第205図9	S876		No.1	釣り針?	鉄	32.0	14.0	13.2	4.7	
第205図9	S876		No.1	釣り針?	鉄	25.5	13.0	11.0	4.0	
第205図9	S876		No.1	釣り針?	鉄	23.5	10.0	10.0	2.6	
第205図9	S876		No.1	釣り針?	鉄	42.5	13.6	10.3	7.0	
第205図9	S876		No.1	釣り針?	鉄	26.2	12.8	11.5	4.7	
第205図9	S876		No.1	釣り針?	鉄	42.0	12.0	11.5	5.6	
第205図10	S867	埋土		鋳造	鉄+メッキ	290	270	6.0	15.2	
第205図11	S878	古代P3内		刀子	鉄	39.2	15.4	10.4	4.0	
第205図11	S878	古代P3内		刀子	鉄	36.8	14.7	11.3	5.5	
第205図11	S878	古代P3内		刀子	鉄	36.5	11.5	8.5	3.1	
第205図12	ST06	下溝埋土		鉄斧	鉄	127.0	73.0	47.0	44.30	
第205図13	SD02	埋土1層 TR4・3の間		耳環	鉄	26.0	24.0	6.0	8.4	
第205図14	X VI H06		No.1	耳環	鉄+メッキ	20.0	18.0	7.0	7.5	
第205図15	X VI D25	古代線出面		耳環	鉄	28.0	25.0	5.0	10.3	
第205図16	X IX B25	V層埋土	B・No.1-②	鏃?	鉄	82.0	17.0	50.0	32.1	・解説

第27表 東條遺跡金属観察表(中世)

図録№	写真№	遺構名	取上げ№	遺物名称	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	高さ (mm)	重さ (g)	備考
第279図1	SKQ014			刀子	鉄	18.8	16.1	11.0	3.2	
第279図1	SKQ014			刀子	鉄	47.0	19.9	16.8	11.5	
第279図1	SKQ014			刀子	鉄	85.4	30.7	22.7	44.7	
第279図2	SKQ216			鍔深?	鉄	65.4	63.6	25.6	134.5	
第279図2	SKQ216			鍔深?	鉄	32.6	16.2	13.5	6.9	
第279図3	SKQ329			釘	鉄	67.0	7.0	6.0	11.7	
第279図4	X VI G08			釘	鉄	63.0	8.0	8.0	7.3	
第279図5	X VI G07			釘	鉄	62.8	8.4	6.3	3.9	
第279図5	X VI G07			釘	鉄	38.3	7.3	7.1	2.7	
第279図6	X VI C16			鍔製品	鉄	17.0	18.0	5.0	2.0	・リング状
第279図7	X VI H01	礎石 ST37			鉄	48.2	46.5	18.7	41.3	
第279図7	X VI H01	礎石 ST37			鉄	33.9	21.3	15.3	7.3	
第279図8	ST38	大型礎石建物棟出面		釘	鉄	78.0	15.0	14.0	21.8	
第279図9	ST38	S12東側1層黄褐色土		釘	鉄	75.0	19.0	20.0	37.8	
第279図10	ST38		No.4	釘	鉄	47.1	18.2	16.5	14.5	
第279図10	ST38		No.4	釘	鉄	21.8	19.2	9.5	4.5	
第279図10	ST38		No.4	釘	鉄	25.2	14.6	12.8	5.0	
第279図11	ST38	トレンチ A1層		釘	鉄	57.0	17.0	13.0	16.8	
第279図12	ST38		No.35	刀子	鉄	47.2	24.5	13.2	9.6	
第279図12	ST38		No.35	刀子	鉄	29.8	21.4	10.5	4.5	
第279図13	SK2177			鍔板	鉄	69.9	34.7	21.7	45.3	
第279図13	SK2177			鍔板	鉄	32.0	27.2	14.5	11.6	
第279図14	SK2311			刀子	鉄	135.0	30.0	14.0	63.9	
第279図15	SK1778		No.3	棒状	鉄	535.0	23.0	21.0	203.0	・3種類に分別
第279図16	SK2744	井戸内部		金具	鉄	66.0	29.0	13.0	15.6	
第279図17	SK2315	井戸	No.4	板状	鉄	137.0	59.0	8.0	177.4	
第279図18	PL110	SK2315 井戸	No.1	刀子	鉄	300.0	29.1	9.7	101.1	
第280図1	X VI H11	S11 砂礫埋土		釘	鉄	69.0	12.0	12.0	13.7	
第280図2	SX13内	線層		刀子	鉄	64.0	27.0	23.0	34.7	
第280図3	SH12	ブレハブ側斜面		釘	鉄	75.0	16.0	15.0	25.1	
第280図4	SH13		No.2	釘	鉄	62.0	18.0	15.0	16.2	
第280図5	SH12			釘	鉄	61.4	21.0	17.6	23.5	
第280図5	SH12			釘	鉄	18.5	11.9	9.7	2.5	
第280図6	SH15	黒色礫埋め戻し		釘	鉄	50.0	5.0	4.0	3.0	
第280図7	X VI G03			釘	鉄	58.0	8.0	8.0	7.5	
第280図8	X VI G12			釘	鉄	82.0	18.0	14.0	27.1	
第280図9	X VI G11			釘	鉄	65.0	12.0	12.0	9.2	
第280図10	X VI H01			釘	鉄	76.0	15.0	13.0	21.1	
第280図11	X VI D21			釘	鉄	81.5	16.6	15.0	22.9	

図版No	写真No	遺構名	取上げNo	遺物名称	材質	長さ	幅	高さ	重さ (g)	備考
第280図11	XW D21			釘	鉄	29.4	12.1	8.8	4.0	
第280図12	XW H02			釘	鉄	122.0	10.0	9.0	18.8	
第280図13	XW H01		No 3	釘	鉄	142.0	15.0	17.0	25.8	
第280図14	中世第1横出面		No 95	釘	鉄	17.4	12.0	10.1	4.4	
第280図14	中世第1横出面		No 95	釘	鉄	27.4	14.4	11.1	4.6	
第280図14	中世第1横出面		No 95	釘	鉄	18.3	9.0	8.7	1.2	
第280図15	XW H01		No 3・4	刀子	鉄	172.5	33.0	32.2	161.5	
第280図15	XW H01		No 3・4	刀子	鉄	28.2	20.8	11.6	8.0	
第280図16	XW C21		No 1	刀子?	鉄	51.0	20.0	9.0	17.9	
第280図17	XW H16 黒色土下層			刀子	鉄	84.7	28.6	16.5	34.8	
第280図17	XW H16 黒色土下層			刀子	鉄	39.0	23.7	13.2	12.6	
第280図17	XW H16 黒色土下層			刀子	鉄	26.1	24.5	11.7	6.6	
第280図18	XW H11			鏃	鉄	100.0	39.2	30.4	93.6	
第280図18	XW H11			鏃	鉄	52.5	29.5	13.9	22.3	
第280図19	XW B25			鏃	鉄	69.0	31.0	10.0	34.4	
第280図20	SK11 ヘルト内			鏃	鉄	39.8	29.6	11.8	12.5	
第280図20	SK11 ヘルト内			鏃	鉄	32.8	21.6	12.8	6.5	
第280図20	SK11 ヘルト内			鏃	鉄	14.4	11.5	9.9	1.7	
第280図21	X W G12			はばき	銅	22.0	21.0	10.0	12.2	
第280図22	X W G08		No 1	金属		38.0	11.0	6.0	3.2	
第281図1	X W B18			鏃	鉄	73.0	17.0	11.0	53.6	
第281図2	X W G12			金属	鉄	43.0	35.4	19.8	31.0	
第281図2	X W G12			金属	鉄	49.0	39.4	17.2	28.4	
第281図3	X W H17 砂礫層			鉄板	鉄	37.9	27.0	12.4	10.4	
第281図3	X W H17 砂礫層			鉄板	鉄	94.2	77.3	34.4	245.2	
第281図4	X W G20			鉄滓	鉄	72.0	52.0	28.0	126.7	
第281図5	SK767			釘	鉄	63.0	6.0	5.0	3.8	
第281図6	X W B14 横出面			銅鏃	青銅	72.0	6.0	6.0	12.8	
第281図7	X W C03 V層			鉄製品	鉄	75.0	6.0	6.0	3.8	
第281図8	X W C18		No 1	釘	鉄	58.0	13.0	13.0	19.4	
第281図9	X W C02 V層			釘	鉄	57.0	4.0	5.0	2.1	
第281図10	X W C03 V層			釘	鉄	114.0	6.0	5.0	10.5	
第281図11	X W B10 V層			短刀	鉄	242.0	25.0	7.0	70.2	
第281図12	X W B06			鏃?	鉄	56.0	21.0	18.0	26.3	
第281図13	X W C02 II～III層			鏃?	鉄	85.0	20.0	7.0	27.0	
第281図14	PL109 X W B23 東西ベルト西トシ			鉄斧	鉄	182.5	69.4	47.0	63.3	
第281図14	PL109 X W B23 東西ベルト西トシ			鉄斧	鉄	21.3	18.7	10.2	4.9	
第281図15	X W C23			鏃	鉄	66.5	42.8	29.9	55.8	
第281図15	X W C23			鏃	鉄	42.9	37.7	28.4	49.7	

第28表 東條遺跡鉄貨観察表(中世)

図版No	写真No	遺構名	取上げNo	遺物名称	材質	残存率	鉄貨名称	詳細
第282図1	PL110 SK1878			銭貨	銅銭	完形	聖徳元貨	
第282図2	PL110 SK1970			銭貨	銅銭	完形	政和通貨	
第282図3	PL110 SK2215			銭貨	銅銭	完形	元祐通貨	
第282図4	PL110 X W C16			銭貨	銅銭	完形	元祐通貨	
第282図5	PL110 X W G05			銭貨	銅銭	完形	開元通貨	
第282図6	PL110 X W G07			銭貨	銅銭	完形	咸淳元貨	
第282図7	PL110 X W G07			銭貨(裏面)	銅銭	完形	咸淳元貨	
第282図8	PL110 X W G12			銭貨	銅銭	一部欠損	治平元貨	
第282図9	PL110 ST37			銭貨	銅銭	完形	崇寧元貨	①塩野原遺
第282図10	PL110 ST37		No 7	銭貨	銅銭	完形	元豐通貨	
第282図11	PL110 SK1826		No 6	銭貨	銅銭	完形	皇宋通貨	
第282図12	PL110 SH15			銭貨	銅銭	完形	元豐通貨	
第282図13	PL110 X W B18			銭貨	銅銭	完形	治平元貨	
第282図14	PL110 X W B19		No 1	銭貨	銅銭	完形	崇寧元貨	
第282図15	PL110 X W B22		No 1	銭貨	銅銭	完形	祥符元貨	
第282図16	PL110 X W B23			銭貨	銅銭	完形	開元通貨	
第282図17	PL110 X W B23			銭貨(裏面)	銅銭	完形	開元通貨	
第282図18	PL110 X W B23		No 3	銭貨	銅銭	完形	聖宋元貨	
第282図19	PL110 X W B24		No 3	銭貨	銅銭	完形	政和通貨	
第282図20	PL110 X W G07		No 4	銭貨	銅銭	完形	唐國通貨	
第282図21	PL110 X W G07			銭貨	銅銭	完形	崇寧元貨	
第282図22	PL110 X W G11			銭貨	銅銭	完形	天聖元貨	
第282図23	PL110 X W G11			銭貨	銅銭	完形	元豐通貨	
第282図24	PL110 X W G12			銭貨	銅銭	完形	祥符通貨	
第282図25	PL110 X W G16			銭貨	銅銭	完形	皇宋通貨	①塩野原遺
第282図26	PL110 X W H01		No 2	銭貨	銅銭	完形	開元通貨	
第282図27	PL110 X W H01		No 1	銭貨	銅銭	完形	紹聖元貨	
第282図28	PL110 X W H02		No 1	銭貨	銅銭	完形	淳化元貨	(宋990)
第283図1	PL110 SK1001 横出面			銭貨	銅銭	完形	開元通貨	(裏有リ)
第283図2	PL110 SK1001 横出面			銭貨	銅銭	完形	開元通貨	(裏有リ)

第2章 発掘調査の概要

図版No	写真No	遺構名	取上げNo	遺物名称	材質	残存率	種名	詳細
第283図3	PL110	SH05	No.1	鏡筒	銅鉄	完形	空透元貫	3.塩野築基
第283図4	PL110	SH05		鏡筒	銅鉄	完形	蓋花透貫	
第283図5	PL110	SH05	No.2	鏡筒	銅鉄	完形	断平元貫	
第283図6	PL110	SH05	No.2	鏡筒	銅鉄	完形	断平元貫	3.大里築基
第283図7	PL110	SH05	No.2	鏡筒	銅鉄	完形	大観透貫	
第283図8	PL110	SH06 6層下層		鏡筒	銅鉄	完形	葎苧元貫	
第283図9	PL110	SH06		鏡筒	銅鉄	完形	瓦釜元貫	
第283図10	PL110	SH06 6層下層		鏡筒	銅鉄	完形	元貫透貫	3.塩野築基
第283図11	PL110	SK05		鏡筒	銅鉄	完形	壘米透貫	
第283図12	PL110	SK12	No.1	鏡筒	銅鉄	完形	永楽透貫	
第283図13	PL110	SD12 IV層礎砂層		鏡筒	銅鉄	完形	開元透貫	
第283図14	PL110	SD12 IV層礎砂層		鏡筒	銅鉄	完形	断平元貫	
第283図15	PL110	SD12 IV層礎砂層		鏡筒	銅鉄	完形	元祐透貫	
第283図16	PL110	SD12 IV層礎砂層		鏡筒	銅鉄	完形	成淨元貫	
第283図17	PL110	SD12 IV層礎砂層		鏡筒(裏面)	銅鉄	完形	成淨元貫	
第283図18	PL110	SD13		鏡筒	銅鉄	完形	壘米透貫	
第283図19	PL110	SD13		鏡筒	銅鉄	完形	治平元貫	
第283図20	PL110	XVI W22		鏡筒	銅鉄	完形	壘米透貫	(1004)
第283図21	PL110	XVI W23 砂層		鏡筒	銅鉄	完形	開元透貫	(621)
第283図22	PL110	XVII B05 砂層		鏡筒	銅鉄	完形	元貫透貫	
第283図23	PL110	XVII B05 砂層中		鏡筒	銅鉄	完形	壘米元貫	
第283図24	PL110	XVII B15 黒色土		鏡筒	銅鉄	完形	政和透貫	
第283図25	PL110	XVII C01 V層		鏡筒	銅鉄	完形	葎苧元貫	
第283図26	PL110	XVII C01		鏡筒	銅鉄	完形	壘米透貫	
第283図27	PL110	XVII C01 VI層		鏡筒	銅鉄	完形	壘米元貫	
第283図28	PL110	XVII C02 VI層		鏡筒	銅鉄	完形	開元透貫	(裏有り)
第283図29	PL110	XVII C02 VII層		鏡筒(裏面)	銅鉄	完形	開元透貫	(裏有り)
第283図30	PL110	XVII C02 IV層礎砂層		鏡筒	銅鉄	完形	成淨元貫	
第283図31	PL110	XVII C02 屋敷	No.20	鏡筒	銅鉄	完形	元祐透貫	
第283図32	PL110	XVII C02 WE サブトレ 砂層上面		鏡筒	銅鉄	完形	元符透貫	
第283図33	PL110	XVII C06 礎群上面		鏡筒	銅鉄	完形	元貫透貫	
第283図34	PL110	XVII C06	No.5	鏡筒	銅鉄	完形	元祐透貫	
第284図1	PL110	XVII C06	No.5	鏡筒	銅鉄	完形	紹聖元貫	
第284図2	PL110	XVII C07 IV層上面		鏡筒	銅鉄	完形	開元透貫	
第284図3	PL110	XVII C07 IV層		鏡筒	銅鉄	完形	壘米透貫	
第284図4	PL110	XVII C07 IV層上面		鏡筒	銅鉄	完形	治平元貫	
第284図5	PL110	XVII C07 V層上面		鏡筒	銅鉄	完形	元貫透貫	
第284図6	PL110	XVII C07 IV層上面		鏡筒	銅鉄	完形	元祐透貫	
第284図7	PL110	XVII C07 V層上面		鏡筒	銅鉄	完形	元符透貫	
第284図8	PL110	XVII C07 IV層上面		鏡筒	銅鉄	完形	政和透貫	4.塩野築基
第284図9	PL110	XVII C09 V層		鏡筒	銅鉄	完形	壘米透貫	
第284図10	PL110	XVII C09 V層		鏡筒	銅鉄	完形	紹聖元貫	
第284図11	PL110	XVII C10 V層		鏡筒	銅鉄	完形	元祐透貫	
第284図12	PL110	XVII C11 井戸4右組み検出面		鏡筒	銅鉄	完形	断平元貫	
第284図13	PL110	XVII C11 黒色土		鏡筒	銅鉄	完形	元貫透貫	
第284図14	PL110	XVII C12		鏡筒	銅鉄	完形	太平透貫	
第284図15	PL110	XVII C15	No.1	鏡筒	銅鉄	完形	治平透貫	
第284図16	PL110	XVII C21	No.1	鏡筒	銅鉄	完形	開元透貫	
第284図17	PL110	XVII C21	No.1	鏡筒(裏面)	銅鉄	完形	開元透貫	
第284図18	PL110	XVII C24		鏡筒	銅鉄	完形	淳祐元貫	
第284図19	PL110	XVII C区		鏡筒	銅鉄	完形	壘米元貫	
第284図20	PL110	XVII D06 IV層		鏡筒	銅鉄	完形	天通透貫	
第284図21	PL110	XVII D11 II層		鏡筒	銅鉄	完形	元貫透貫	
第284図22	PL110	XVII G03	No.4	鏡筒	銅鉄	完形	嘉祐元貫	
第284図23	PL110	XVII G03 中世検出		鏡筒	銅鉄	完形	壘米元貫	
第284図24	PL110	XVII G03 サブトレ		鏡筒	銅鉄	完形	嘉定透貫	
第284図25	PL110	XVII G07-G12 中世検出		鏡筒	銅鉄	完形	洪武透貫	
第284図26	PL110	XVII G区		鏡筒	銅鉄	完形	紹聖元貫	
第284図27	PL110	XVII H13 VI層検出面		鏡筒	銅鉄	完形	洪武透貫	(1368)
第284図28	PL110	XVII H13 VI層検出面		鏡筒(裏面)	銅鉄	完形	洪武透貫	(1368)
第284図29	PL110	XVII C 覆瓦		鏡筒	銅鉄	完形	乳元重貫	(唐759)
第284図30	PL110	表探		鏡筒	銅鉄	一部欠損	壘米元貫	
第284図31	PL110	表探		鏡筒	銅鉄	一部欠損	宣和透貫	

第29表 東條遺跡木器観察表(古代)

図版No	写真No	遺構名	分類群	遺物名称	器種等	出土層位	長さ口径 (cm)	幅底径 (cm)	厚さ器高 (cm)	樹種	形態の特徴
第205図17		XIX B17・B22 SK85	その他	芯持材	丸太材	(29.3)	14.1	10.8		カエデ属	丸材 平底
第205図18	PL80	XVII SK85	掘削材	部材	井戸	(31.7)	9.2	2.0		モミ属	井戸枠転用
第205図19	PL80	XVII SK85	掘削材	部材	井戸	(30.9)	14.6	2.5		モミ属	井戸枠転用
第205図20		XVII H09 SK714	建築部材	柱根		(33.5)	9.3	9.3		オニグルミ	丸木材

第30表 東條遺跡木器観察表(中世)

図版No	写真No	遺構名	分類群	遺物名称	器種等	出土層位	長さ口径 (cm)	幅高さ (cm)	厚さ高さ (cm)	樹種	形態の特徴
第285 図 1	PL111	SK1886(水灌)	船飾材	井戸	動物		47.0	18.0	0.5	ヒノ	厚め
第285 図 2		SK1704	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(34.0)	12.6	11.3	ケ	角材平直
第285 図 3		SK1726	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(38.0)	15.2	13.9	ナ属37部	丸木材鋭角
第285 図 4		SK1706	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(43.0)	27.0	24.0	ヒ	角材平直
第285 図 5	PL111	SK1741	容器	底板	動物		(11.0)	(7.0)	0.5	ヒ	底板側板
第285 図 6	PL111	SK1741	祭祀具	木厨「迷哉三」	管轄溝	V層	14.6	2.5	0.3		直板状
第285 図 7		SK1844	船飾具	障物	下駄		(17.5)	9.4	1.2	ナ	溝面下駄
第285 図 8		SK2315	容器	底板	動物	匱方	(18.4)	(7.2)	0.8	ヒノ	
第285 図 9		SK2315	容器	底板	動物	4層	(8.8)	(4.2)	0.3	ナ	
第286 図 1		SK2315	容器	漆製品	匣蓋板		23.6	9.6	1.2	ナ	板材
第286 図 2	PL111	SK2315	調理加工具	杓子		IV層	27.5	6.9	0.6	ヒノ	
第286 図 3		SK2315	用途不明品	棒状製品	さいばし状	II層	26.0	0.8	0.8	ヒノ	さいばし状(棒状)
第286 図 4	PL111	SK2315	用途不明品	削材		半冠全層3	(23.6)	(2.1)	0.2	ナ	板板状
第286 図 5		SK2315	用途不明品	削材		匱方	(6.4)	(1.3)	0.9	ナ属	板板状
第286 図 6		SK2315	容器	漆器	皿		9.3	7.7	1.0	ナ	
第286 図 7		SK2315	容器	漆器	椀	匱方8段 目石	—	—	(1.8)	ナ	
第286 図 8		SK2315	その他	削片	燃えさし	II~IV層	8.7	0.9	0.3	IV層埋藏管理 蓋属	棒状
第286 図 9		SK2744	工具	刀子溝塗り柄 付き	刀子柄付き	3層下部	5.4	3.2	1.3	ナ属	
第286 図 10		SK2744	容器	漆器	椀	埋土	—	<6.0>	(1.5)	ナ属	高台付(高い)
第286 図 11		SK2744	容器	約瓶			(18.1)	(5.4)	1.3	ヒノ	板材
第286 図 12	PL111	SK2744	容器	約瓶			<16.8> 6.4	<20.8> 20.4	1.8	ナ	板材
第286 図 13	PL111	SK2744	用途不明品	削け具?	削け具?		(8.2)	2.1	2.2	IV層埋藏管理 蓋属	五本木
第286 図 14		SK2744	容器	銅板	動物	最下層	(14.0)	(2.5)	0.3	ヒノ科	
第286 図 15		SK2745	容器	銅板	動物		(71.3)	(13.3)	0.3	ヒノ	薄板状
第286 図 16	PL111	SK2745	容器	かご			(39.0)	13.7	13.5	ヒノ	棒状状
第287 図 1		ST12	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(21.8)	12.3	11.5	ナ	角材鋭角
第287 図 2		SK741	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(44.8)	10.2	10.8	ナ	角材鋭角
第287 図 3		SK744	建築部材	芯持ち材	杭	立位	(35.0)	6.0	5.5	ナ	丸木材鋭角
第287 図 4		ST55 (旧SK748)	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(22.0)	7.6	6.8	ナ	角材鋭角
第287 図 5	PL111	SK749	建築部材	分割材	板状	立位	(59.0)	9.0	3.2	ナ	板材
第287 図 6		SK760	建築部材	分割材	板状	立位	(26.0)	2.0	1.5	ナ	角材鋭角
第287 図 7		ST55 (旧SK772)	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(16.3)	13.7	12.7	ナ属	丸木材
第287 図 8		ST55 (旧SK772)	建築部材	分割材	立位	(22.0)	14.9	13.7	ナ		
第287 図 9		SK758	容器	漆器	椀	埋土	—	<7.8>	1.8	ナ	高台付
第287 図 10		SK774	建築部材	芯持ち材	立位	(22.0)	9.0	9.0	ナ	丸木材鋭角	
第287 図 11		ST55 (旧SK775)	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	44.8	9.8	9.8	ナ属	丸木材鋭角
第287 図 12		SK777	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(22.0)	12.8	10.5	ナ属	丸木材鋭角平直
第287 図 13	PL111	SK777	容器	蓋	動物		12.8	(10.0)	0.6	ヒノ	
第288 図 1		SK778	建築部材	芯持ち材	杭	立位	(54.0)	9.7	7.7	ナ	丸木材平直
第288 図 2		SK780	建築部材	芯持ち材	杭	立位	(35.1)	4.3	4.0	ナ	丸木材鋭角
第288 図 3		SK781	容器	漆器	椀蓋	埋土	—	6.4	(3.8)	ナ	高台直底縁構
第288 図 4		ST55 (旧SK782)	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(19.8)	8.0	7.4	ナ属	丸木材鋭角
第288 図 5		SK785	容器	底板	動物	立位	(16.4)	(10.0)	0.6	ナ	
第288 図 6		SK786	容器	漆器	椀	埋土	12.8	6.0	2.2	ナ属	高台付
第288 図 7		SK791	用途不明品	棒状製品			(11.3)	(5.0)	0.7	ナ	板材
第288 図 8		ST55 (旧SK795)	建築部材	芯持ち材	杭	立位	(46.5)	11.2	8.1	ナ	丸木材鋭角
第288 図 9		SK802	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(32.4)	10.5	9.3	ナ属37部	丸木材鋭角
第288 図 10		SK803	容器	漆器	椀	埋土	<12.2>	<6.8>	3.0	ナ属	高台付
第288 図 11	PL111	SK813	建築部材	分割材	杭	立位	(27.5)	4.2	1.8	ナ	角材鋭角
第288 図 12	PL111	SK814	建築部材	分割材	板状	立位	(29.0)	1.8	1.8	ナ	角材鋭角
第288 図 13	PL111	SK815	建築部材	分割材	板状	立位	(26.0)	1.8	1.5	ナ	角材鋭角
第288 図 14		SK821	建築部材	分割材	杭	立位	(22.0)	6.7	5.9	ナ属	角材鋭角
第288 図 15		SK822	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(33.5)	10.3	8.3	ナ	丸木材鋭角
第288 図 16		ST55 (旧SK824)	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(26.3)	9.5	9.8	ナ	丸木材鋭角
第288 図 17		SK825	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(24.3)	11.8	13.0	ナ	丸木材鋭角
第288 図 18		SK828	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(23.4)	8.7	7.8	ナ	丸木材鋭角
第289 図 1		SK829	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(43.7)	8.7	7.2	ナ属	丸木材鋭角
第289 図 2	PL111	SK844	用途不明品	その他	小刀の柄	埋土	5.5	3.9	0.6	ヒノ	
第289 図 3		SK844	容器	銅板	動物		10.8	(3.8)	0.4	ヒノ	
第289 図 4		SK844	容器	銅板	動物		(27.7)	(4.3)	0.2	ヒノ	
第289 図 5		SK844	容器	底板	動物	V層	10.5	(4.4)	0.4	ナ	
第289 図 6		SK844	容器	銅板	動物	IV層	(9.8)	(4.8)	0.3	ヒノ	
第289 図 7		SK844	容器	漆器	椀	埋土	—	<6.6>	(2.4)	ナ属37部	高台付
第289 図 8		SK844	容器	漆器	椀	埋土	9.2	7.5	1.1	ナ	底部溝付
第289 図 9		SK844	容器	漆器	椀	埋土II層	12.4	6.6	3.6	ナ属37部	高台付
第289 図 10	PL111	SK844	船飾具	障物	下駄	II層	20.8	9.5	1.4	ナ	溝面下駄
第289 図 11		SK844	食事具	箸		埋土	17.5	0.5	0.4	ナ	はし
第289 図 12		SK844	食事具	箸		IV層	(16.7)	0.7	0.4	ナ	はし

第2章 発掘調査の概要

図版No	写真No	遺構名	分類群	遺物名称	器種等	出土層位	長さ(口径) (cm)	幅径 (cm)	厚さ(高さ) (cm)	群 種	形態の特徴
第289図13	SK844		食器具	箸			18.0	0.7	0.5	江戸	はし
第289図14	SK844		その他	削片	燃えさし	1層	9.3	0.5	0.4	江戸	燗
第289図15	PL111	SK844	用途不明品	その他	筒状	IV層	(5.7)	1.0	0.9	江戸	筒状
第289図16	PL111	SK844	用途不明品	形代?	蟹杖形		6.5	1.9	0.5	江戸	蟹杖
第289図17	PL111	SK844	用途不明品	加工材	箱材		2.5	4.2	2.1	江戸	箱状
第289図18	SK844		食器具	折敷?		II層	(9.3)	(4.7)	0.9	江戸	折敷
第289図19	SK844		不明	部材	箱材	IV層	(2.6)	3.4	3.2	江戸	箱状
第289図20	SK875		建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(41.3)	5.7	5.2	江戸	丸木材鉋角
第289図21	SK925		建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(47.3)	9.6	7.2	江戸	丸木材鉋角
第290図1	SK880		建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(26.2)	8.7	8.3	江戸	丸木材鉋角
第290図2	SK887		建築部材	芯持ち材	杭	立位	(28.0)	5.4	5.0	江戸	丸木材鉋角
第290図3	SK923		建築部材	分割材	柱根	立位	(39.5)	13.3	11.5	江戸	角材平底
第290図4	SK934		建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(51.0)	11.3	10.8	江戸	丸木材鉋角
第290図5	SK940		建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(23.0)	11.8	10.4	ミツバツツギ	丸木材鉋角
第290図6	SK951		容器	漆器	椀	—	—	—	(5.6)	江戸	高台付
第290図7	PL111	SK963	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(36.0)	14.6	12.2	江戸	角材平底
第290図8	SK970		容器	底板	漆物		(8.5)	(6.4)	0.4	江戸	箱状
第290図9	PL112	SK1111	用途不明品	棒状製品	加工の鋳造材		(4.8)	2.3	2.2	江戸	棒状
第290図10	SK974		建築部材	分割材	杭	立位	(52.6)	4.4	3.2	江戸	角材
第290図11	PL112	SK1100	建築部材	分割材	柱根	立位	(60.2)	13.0	6.6	江戸	角材平底
第290図12	SK1145		建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(26.0)	7.8	6.7	江戸	丸木材鉋角
第291図1	SK1147		建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(45.2)	11.0	9.8	江戸	丸木材鉋角
第291図2	SK1175		建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(61.0)	13.0	12.1	江戸	丸木材鉋角
第291図3	SK1178		建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(39.8)	12.8	11.8	江戸	丸木材鉋角
第291図4	SK1192		建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(44.0)	14.2	12.0	江戸	丸木材鉋角
第291図5	SK1192		建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(26.0)	8.4	6.4	江戸	丸木材鉋角
第291図6	PL112	SK1196	建築部材	分割材	柱根	立位	(39.0)	13.7	13.5	江戸	角材平底
第291図7	SK1123		工具	鉄		下部層	(10.2)	2.9	1.7	江戸	釘
第291図8	SK1123		工具	刀子類	刀子さや		(14.6)	2.2	0.7	江戸	刀子
第291図9	SK1123		祭祀具	形代(刀子)	刀子形	下部層	(9.6)	(2.4)	0.8	江戸	刀子
第291図10	SK1123		容器	銅瓶	漆物		28.0	(1.2)	—	江戸	高台付
第291図11	SK1123		容器	底板	漆物	下部層	(16.0)	(4.0)	0.7	江戸	箱状
第291図12	SK1123		容器	銅瓶	漆物		(37.4)	(3.4)	0.3	江戸	高台付
第291図13	SK1123		容器	銅瓶	漆物	中層部3	(20.6)	(3.2)	0.4	江戸	高台付
第291図14	SK1123		容器	銅瓶	漆物		(56.1)	(3.8)	0.8	江戸	板状
第291図15	SK1123		容器	漆物	皿	埋土2-3層	9.4	7.4	2.4	江戸	高台付
第291図16	SK1123		容器	白木	皿	埋土2-3層	—	6.8	(0.6)	江戸	高台付
第291図17	SK1123		容器	白木	皿		9.6	7.2	1.3	江戸	高台付
第292図1	SK1123		容器	底板	漆物	下部層	(34.2)	(6.4)	1.0	江戸	板状
第292図2	SK1123		容器	銅瓶	漆物	埋土4層	15.2	(3.8)	0.2	江戸	木札状
第292図3	SK1123		容器	銅瓶	漆物	3層	(15.2)	(3.8)	0.1	江戸	薄板状
第292図4	SK1123		容器	漆器	椀		13.4	<7.8>	6.6	江戸	高台付
第292図5	SK1123		容器	漆器	皿	下部層	<8.6>	<6.8>	0.9	江戸	高台付
第292図6	SK1123		容器	漆器	皿	埋土2-3層	9.2	7.0	1.4	江戸	高台付
第292図7	SK1123		容器	漆器	皿		<9.8>	<8.0>	1.2	江戸	高台付
第292図8	SK1123		用途不明品	加工材	折敷?	埋土IV層	(9.2)	3.0	0.8	江戸	板状
第292図9	SK1123		容器	漆器	椀	埋土中層	—	<7.3>	(3.4)	江戸	高台付
第292図10	SK1123		用途不明品	加工材	折敷?	埋土中層	3.0	(5.1)	0.8	江戸	板状
第292図11	SK1123		食器具	箸		埋土中層	21.5	0.7	0.4	江戸	はし
第292図12	SK1123		食器具	箸		埋土中層	20.0	0.7	0.4	江戸	はし
第292図13	SK1123		食器具	箸		埋土中層	(23.0)	0.8	0.4	江戸	板状2
第292図14	SK1123		食器具	箸		埋土中層	19.5	0.8	0.5	江戸	はし
第292図15	SK1123		食器具	箸		埋土中層	16.5	0.8	0.5	江戸	はし
第292図16	SK1123		食器具	箸		埋土中層	21.0	0.5	0.4	江戸	はし1
第292図17	SK1123		食器具	箸		埋土中層	18.8	0.4	0.4	江戸	はし1
第292図18	SK1123		食器具	箸		埋土中層	(19.4)	0.7	0.3	江戸	はし1
第292図19	SK1123		食器具	箸		埋土中層	19.0	0.6	0.5	江戸	はし1
第292図20	SK1123		食器具	箸		埋土中層	(19.5)	0.9	0.3	江戸	はし(板状)
第292図21	SK1123		食器具	箸		II層	18.0	0.7	0.4	江戸	はし1
第292図22	SK1123		食器具	箸		下部層	(19.5)	0.5	0.2	江戸	はし2
第292図23	SK1123		食器具	箸		II層	20.0	0.6	0.6	江戸	はし1
第292図24	SK1123		食器具	箸		II層	18.7	0.7	0.6	江戸	はし1
第292図25	SK1123		食器具	箸		下部層	23.0	0.5	0.6	江戸	はし2
第292図26	SK1123		食器具	箸		下部層	20.0	0.6	0.6	江戸	はし2
第292図27	SK1123		食器具	箸		下部層	22.0	0.6	0.2	江戸	はし1(薄板)
第292図28	SK1123		食器具	箸		下部層	(18.0)	0.6	0.4	江戸	はし1
第292図29	SK1123		用途不明品	棒状製品	不明	下部層	(12.0)	0.6	0.7	江戸	はし(さいばし状)
第293図1	SK1123		服飾具	履物	下駄	埋土中層	(17.3)	(19.8)	1.1	江戸	下駄
第293図2	PL112	SK1123	服飾具	帯	練帯	4層	(3.5)	3.5	1.0	江戸	練帯
第293図3	PL112	SK1123	埋葬具・葬具	陪葬		埋土中層	(8.6)	(4.2)	0.4	江戸	圭頭状
第293図4	PL112	SK1123	祭祀具	形代?	不明	埋土IV層	18.9	1.8	1.2	江戸	燗
第293図5	PL112	SK1123	祭祀具	形代	不明	埋土中層	14.3	4.0	0.5	江戸	燗

図面No	写真No	遺構名	分類群	遺物名称	器種等	出土層位	長さ口徑 (cm)	幅底径 (cm)	厚さ高さ (cm)	樹種	形態の特徴	
第293回 6	PL112	SK1123	祭祀具	形代	不明	下部層	14.1	5.3	0.3	???		
第293回 7	SK1123	祭祀具	形代	不明	下部層	(13.0)	(1.4)	(0.3)		柱	環状状	
第293回 8	SK1123	祭祀具	形代	不明	中層部①	(15.7)	(1.6)	(0.7)	???			
第293回 9	PL112	SK1123	用途不明品	板状製品	不明	下部層	14.3	2.2	0.4	???		
第293回 10	PL112	SK1123	その他	削片	燃えさし	下部層	10.8	1.0	0.5	???	7層埋積管束 臺層	棒状
第293回 11	SK1123	その他	削片	燃えさし	下部層	10.3	1.8	2.2	???	7層埋積管束 臺層	棒状	
第293回 12	SK1123	用途不明品	棒状製品	不明	下部層	(16.0)	1.1	0.7	???		棒状木製品	
第293回 13	SK1123	用途不明品	筒	榫材	中層部①	(17.3)	1.4	0.5	???		丸木に製いた榫材	
第293回 14	SK1123	用途不明品	棒状製品	不明	下部層	50.2	(2.4)	1.3	???		角柱	
第293回 15	SK1123	用途不明品	板状製品	不明	埋土IV層	(6.2)	6.4	0.7	???		板状	
第293回 16	SK1123	容器	結合補助具	樹皮製品	不明	(2.0)	(2.1)	(0.8)				
第293回 17	PL112	SK1123	用途不明品	加工材	榫材	中層部	5.7	7.5	2.5	???		棒木状
第293回 18	SK1123	施設材	井戸	銅板材		(9.9)	13.6	0.7				
第294回 1	PL112	SK1123	施設材	井戸	榎木材	93.2	6.4	4.7		丸木	角材	
第294回 2	PL112	SK1123	施設材	井戸	榎木材	92.5	8.5	4.1		丸木	板材	
第294回 3	PL112	SK1123	施設材	井戸	榎木材	92.3	7.3	4.4		丸木	角材	
第294回 4	PL112	SK1123	施設材	井戸	榎木材	93.6	7.7	3.5		丸木	角材	
第295回 1	SK1199	建築部材	分割材	柱根	立位	(14.3)	14.3	13.6	???		角材平直	
第295回 2	SK1316	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(39.0)	7.4	6.5	???		丸木材平直	
第295回 3	SK1320	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(48.8)	9.7	8.8	???		丸木材板角	
第295回 4	SK1320	建築部材	杭	杭	立位	(18.0)	2.3	1.5			角材板角	
第295回 5	SK1322	建築部材	分割材	柱根	立位	(25.0)	3.7	1.6		丸木	角材平直	
第295回 6	PL112	SK1317(水灌)	施設材	井戸	動物	39.0	20.0	0.4		???	二重の銅板	
第295回 7	PL112	SK1317	日用品	内照木製品	粒?	2.2	6.6	6.4		???	棒木状	
第295回 8	PL112	SK1317	容器	底板	動物	9.0	(4.1)	(0.2)		???	底板	
第295回 9	SK1324	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(35.5)	8.9	5.1		???	丸木材板角	
第295回 10	SK1328	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(45.3)	10.7	9.2		???	丸木材板角	
第295回 11	PL112	SK1329	建築部材	芯持ち材	柱根	(47.0)	10.4	9.8		丸木	丸木材板角	
第295回 12	SK1331	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(16.0)	8.4	7.4		???	丸木材平直	
第295回 13	SK1331	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(35.4)	11.0	9.0		???	丸木材板角	
第295回 14	SK1337	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(26.8)	8.3	6.9	???		角材板角	
第296回 1	SK1334	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(19.0)	9.0	8.2	???		丸木材平直	
第296回 2	SK1339	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(69.0)	10.5	8.3		???	丸木材板角	
第296回 3	SK1340	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(57.5)	10.2	9.0	???		丸木材板角	
第296回 4	SK1343	不明品	棒状	角柱	立位	9.2	(5.7)	3.0	???		角柱状	
第296回 5	SK1346	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(57.5)	8.0	6.0	???		丸木材板角	
第296回 6	PL112	SK1347	建築部材	芯持ち材	柱根	(44.4)	11.3	9.2		丸木	丸木材板角	
第296回 7	PL112	SK1349	建築部材	分割材	柱根	(68.0)	11.8	11.2		???	角材平直	
第296回 8	SK1349	建築部材	分割材	柱根	立位	(15.3)	6.5	4.5		???	角材平直	
第296回 9	SK1350	建築部材	分割材	柱根	立位	(26.5)	12.0	8.2		???	角材平直	
第296回 10	SK1351	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(23.0)	8.0	6.7	???		丸木材平直	
第296回 11	PL113	SK1355	建築部材	分割材	柱根	(36.3)	15.1	14.5	???		角材平直	
第296回 12	SK1360	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(24.3)	8.6	7.2	???		丸木材平直	
第297回 1	SK1356	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(58.5)	16.3	13.2		丸木	丸木材板角	
第297回 2	PL113	SK1357	建築部材	分割材	柱根	(49.0)	14.0	7.7		???	角材板角	
第297回 3	SK1363	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(31.0)	8.7	8.3		???	丸木材板角	
第297回 4	SK1364	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(47.0)	12.5	10.0		???	角材板角	
第297回 5	SK1367	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(29.5)	9.8	7.1		???	丸木材板角	
第297回 6	SK1370	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(59.0)	11.3	10.0		???	角材平直	
第297回 7	SK1375	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(37.0)	12.0	10.2		???	角材板角	
第297回 8	SK1378	建築部材	分割材	柱根	立位	(35.8)	5.0	3.5		柱	角材板角	
第297回 9	SK1388	建築部材	芯持ち材	杭	立位	(37.0)	7.2	6.9		???	丸木材板角	
第297回 10	SK1389	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(20.8)	7.3	6.7		???	丸木材板角	
第297回 11	PL113	SK1396	建築部材	芯持ち材	柱根	(40.0)	10.0	10.0		???	丸木材平直	
第297回 12	SK1402	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(36.0)	15.8	14.0		柱	中々角材	
第298回 1	SK1400(水灌)	施設材	井戸	動物	埋設	46.0	20.0	0.6		???		
第298回 2	SK1400	服飾具	櫛	櫛		12.4	3.8	0.9		???		
第298回 3	SK1400	施設材	井戸	榎木材		68.6	5.5	6.4		丸木	角材	
第298回 4	SK1400	施設材	井戸	銅板材		(29.1)	7.5	0.6		丸木	柱	
第298回 5	PL113	SK1400	祭祀具	板状製品	騎馬状木製品	12.3	6.6	0.4	???			
第298回 6	SK1400	用途不明品	加工材	板材		(41.2)	14.9	0.9		丸木	板材	
第298回 7	SK1400	施設材	井戸	井戸側		(51.8)	13.9	0.7		丸木	板材	
第298回 8	SK1400	施設材	井戸	榎木材		68.8	7.6	4.4		丸木	角材	
第298回 9	SK1401	建築部材	棒状	棒状	立位	(23.2)	7.0	3.3			丸平	
第299回 1	SK1406	建築部材	分割材	柱根	立位	(45.0)	12.3	7.8	???		角材平直	
第299回 2	PL113	SK1420	容器	底板	動物	14.2	13.9	1.0	???		木釘付	
第299回 3	PL113	SK1420	容器	底板	動物	11.6	11.5	0.6	???			
第299回 4	SK1420	容器	底板	動物	棒出	12.7	(5.9)	1.1	???			
第299回 5	SK1420	用途不明品	加工材	竹材		(6.3)	1.2	0.2			竹材	
第299回 6	PL113	SK1605	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(60.0)	11.4	10.8	???		角材平直
第299回 7	SK1632	建築部材	芯持ち材	柱根	立位	(55.0)	9.5	8.9		???	丸木材板角	
第299回 8	SA01	建築部材	芯持ち材	杭	立位	(36.5)	3.3	2.3		???	丸木材板角	

第2章 発掘調査の概要

図面No	写真No	遺構名	分類群	遺物名称	器種等	出土層位	長さ(径) (cm)	幅底径 (cm)	厚さ高さ (cm)	群 種	形態の特徴
第299図9		SA02	建築部材	芯持ち材	柱根		(23.8)	8.5	6.4	7)瓦葺補装束 葺屋	丸木材鋭角
第299図10		SA02	建築部材	分割材	杭		(52.5)	5.5	4.0	7)瓦葺補装束 葺屋	角材鋭角
第299図11	PL113	SA02	建築部材	芯持ち材	杭		(28.8)	4.2	4.1	7)瓦葺補装束 葺屋	丸木材鋭角
第299図12		SA02	建築部材	分割材	杭		(27.0)	5.0	2.9	7)瓦葺補装束 葺屋	三角板材鋭角
第299図13		SD12	容器	底板	動物		(11.0)	(2.6)	0.8	7)瓦葺補装束 葺屋	7)瓦葺補装束 葺屋
第299図14		SD12(凹地)	容器	漆器	椀		—	—	(3.2)	7)瓦葺補装束 葺屋	7)瓦葺補装束 葺屋
第299図15		SD12	容器	漆器	椀	埋土	—	<6.6>	(2.8)	7)瓦葺補装束 葺屋	高台付
第299図16		SD12(凹地)	木骨き	部材	かせ?		(17.9)	1.5	0.8	7)瓦葺補装束 葺屋	横切断面長方形
第299図17	PL113	SD12	用途不明品	漆板状製品	漆板状製品		5.2	(2.2)	0.4	7)瓦葺補装束 葺屋	円形薄板
第299図18		SD12	用途不明品	漆板状製品	漆板状製品		(8.2)	1.2	0.6	7)瓦葺補装束 葺屋	漆板取取り有り
第300図1	PL113	SD12	用途不明品	部材	かせ?		34.4	1.2	—	7)瓦葺補装束 葺屋	漆板
第300図2		SD12	無銘材	護岸材	杭		(46.0)	5.0	2.8	7)瓦葺補装束 葺屋	角材鋭角
第300図3		SD12	無銘材	護岸材	杭		(51.0)	6.3	3.2	7)瓦葺補装束 葺屋	板材鋭角
第300図4	PL113	SD12	無銘材	護岸材	杭		(59.0)	6.3	1.2	7)瓦葺補装束 葺屋	板材鋭角
第300図5		SD12	無銘材	護岸材	杭		(47.2)	5.1	4.5	7)瓦葺補装束 葺屋	角材鋭角
第300図6		SD12	無銘材	護岸材	杭		(58.0)	7.0	2.0	7)瓦葺補装束 葺屋	板材鋭角
第300図7		SD12	無銘材	護岸材	杭		(41.5)	6.0	4.2	7)瓦葺補装束 葺屋	三角材鋭角
第300図8		SD12	無銘材	護岸材	杭		(67.5)	4.1	3.0	7)瓦葺補装束 葺屋	角材鋭角
第300図9		SD12	無銘材	護岸材	杭		(61.0)	6.0	3.3	7)瓦葺補装束 葺屋	板材鋭角
第300図10		SD12	無銘材	護岸材	杭		(37.2)	5.9	2.3	7)瓦葺補装束 葺屋	板材鋭角
第300図11		SD12	無銘材	護岸材	杭		(53.0)	5.0	4.5	7)瓦葺補装束 葺屋	丸木材鋭角
第300図12		SD12	無銘材	護岸材	杭		(45.5)	7.7	4.3	7)瓦葺補装束 葺屋	三角材鋭角
第300図13		SD12	無銘材	護岸材	杭		(60.0)	5.5	3.0	7)瓦葺補装束 葺屋	丸1/8鋭角
第300図14		SD12	無銘材	護岸材	杭		(53.9)	5.0	3.0	7)瓦葺補装束 葺屋	三角材鋭角
第300図15		SD12	無銘材	護岸材	杭		(70.5)	6.0	4.0	7)瓦葺補装束 葺屋	1/4鋭角
第301図1		SD12	無銘材	護岸材	杭		(54.0)	4.9	3.4	7)瓦葺補装束 葺屋	角材鋭角
第301図2		SD12	無銘材	護岸材	杭		(35.5)	5.2	2.7	7)瓦葺補装束 葺屋	板状丸1/4鋭角
第301図3	PL113	SD12	無銘材	護岸材	杭		(50.3)	3.8	3.4	7)瓦葺補装束 葺屋	三角材鋭角
第301図4		SD12	無銘材	護岸材	杭		(43.3)	4.7	3.5	7)瓦葺補装束 葺屋	三角材鋭角
第301図5	PL113	SD12	無銘材	護岸材	杭		(56.0)	3.7	3.7	7)瓦葺補装束 葺屋	丸木材鋭角
第301図6		SD12	無銘材	護岸材	杭		(55.8)	5.2	4.2	7)瓦葺補装束 葺屋	三角材鋭角
第301図7		SD12	無銘材	護岸材	漆板		(52.0)	4.3	3.0	7)瓦葺補装束 葺屋	三角材
第301図8	PL113	SD12	無銘材	護岸材	杭		(45.0)	6.1	2.1	7)瓦葺補装束 葺屋	板材鋭角
第301図9		SD12	無銘材	護岸材	杭		(40.3)	2.6	2.6	7)瓦葺補装束 葺屋	丸木材鋭角
第301図10		SD12	無銘材	護岸材	杭		(75.5)	7.5	4.8	7)瓦葺補装束 葺屋	丸平材鋭角
第301図11		SD12	無銘材	護岸材	杭		(60.5)	8.8	4.6	7)瓦葺補装束 葺屋	角材鋭角
第301図12	PL113	SD12	無銘材	護岸材	自然木		(71.2)	2.4	2.4	7)瓦葺補装束 葺屋	自然木
第301図13	PL113	SD12	無銘材	護岸材	自然木		(55.2)	3.2	3.2	7)瓦葺補装束 葺屋	自然木
第301図14	PL113	SD12	無銘材	護岸材	自然木		(36.0)	2.4	2.4	7)瓦葺補装束 葺屋	自然木
第301図15		SD13	容器	底板	動物	砂層	8.9	(4.0)	0.6	7)瓦葺補装束 葺屋	7)瓦葺補装束 葺屋
第301図16		SD13	容器	漆器	皿	<8.8>	<8.8>	<6.6>	1.2	1)円筒 2)円筒	7)瓦葺補装束 葺屋
第301図17		SD13	軽量具	木彫状	動物	砂層	(8.3)	(1.0)	0.2	7)瓦葺補装束 葺屋	漆板状
第301図18		SD13	用途不明品	漆板状製品	漆板状製品		16.8	2.2	0.3	7)瓦葺補装束 葺屋	木丸状
第301図19		SD13	用途不明品	漆板状製品	加工材	砂層	12.2	2.0	1.3	7)瓦葺補装束 葺屋	角柱状
第301図20	PL113	SD14	容器	底板	動物	溝内	10.0	(8.8)	0.7	7)瓦葺補装束 葺屋	7)瓦葺補装束 葺屋
第302図1		SD13	服飾具	履物	下駄	砂層	20.6	9.8	1.5	7)瓦葺補装束 葺屋	7)瓦葺補装束 葺屋
第302図2		SD22	容器	底板	動物		(7.4)	(4.1)	0.3	7)瓦葺補装束 葺屋	7)瓦葺補装束 葺屋
第302図3		SD24	容器	底板	動物		8.3	(4.2)	0.5	7)瓦葺補装束 葺屋	7)瓦葺補装束 葺屋
第302図4		履靴床下X VII C01・C02	容器	朽円	柄	砂上層	(13.9)	2.0	1.4	7)瓦葺補装束 葺屋	漆板先端尖り
第302図5		履靴X VII C02	容器	漆器	皿	溝1層	—	7.6	(0.7)	7)瓦葺補装束 葺屋	7)瓦葺補装束 葺屋
第302図6		履靴X VII C05	容器	漆器	皿	溝2下層	—	<7.6>	(0.8)	7)瓦葺補装束 葺屋	7)瓦葺補装束 葺屋
第302図7		履靴X VII C04	容器	漆器	椀		—	<6.0>	(1.0)	7)瓦葺補装束 葺屋	高台付
第302図8		履靴床下X VII C02	容器	漆器	椀	V層	—	<6.0>	(2.2)	7)瓦葺補装束 葺屋	高台付
第302図9		履靴X VII C01・C02	その他	削片	燃えさし	溝②	10.6	1.3	0.6	7)瓦葺補装束 葺屋	漆板
第302図10		履靴X VII C02	食事具	箸	箸	溝①	15.3	0.6	0.5	7)瓦葺補装束 葺屋	はし
第302図11		履靴X VII C02	食事具	箸	箸	下層	20.3	0.5	0.3	7)瓦葺補装束 葺屋	はし
第302図12		履靴X VII C02	食事具	箸	箸	溝①	(18.0)	1.5	0.3	7)瓦葺補装束 葺屋	はし
第302図13		履靴X VII C02	食事具	箸	箸	溝①下層	19.0	0.5	0.6	7)瓦葺補装束 葺屋	はし1
第302図14		履靴床下X VII C02	食事具	箸	箸	砂上層	20.0	0.8	0.4	7)瓦葺補装束 葺屋	はし1科
第302図15		履靴X VII C02	用途不明品	漆板状製品	さいばし状	溝①	(30.5)	1.0	0.7	7)瓦葺補装束 葺屋	さいばし状(漆板)
第302図16		履靴X VII C02	用途不明品	漆板状製品	さいばし状	下層	23.7	0.9	0.6	7)瓦葺補装束 葺屋	さいばし状(漆板)
第302図17		履靴X VII C02	用途不明品	漆板状製品	不明	下層	(20.5)	0.9	0.5	7)瓦葺補装束 葺屋	さいばし状
第302図18		履靴X VII C01・C02	軽量具	木彫	砂質粘質層	(14.3)	1.9	0.4	7)瓦葺補装束 葺屋	漆板	
第302図19	PL113	履靴床下X VII C01・C02	用途不明品	漆板状製品	不明	砂上層	12.2	1.7	0.4	7)瓦葺補装束 葺屋	漆板
第302図20		履靴	用途不明品	加工材	板状組合せ 具部材	粘質灰色土	(35.5)	11.6	0.6	7)瓦葺補装束 葺屋	7)瓦葺補装束 葺屋
第302図21		履靴	用途不明品	加工材	板状組合せ 具部材	粘質灰色土	(35.5)	11.6	0.6	7)瓦葺補装束 葺屋	7)瓦葺補装束 葺屋
第302図22	PL113	履靴	用途不明品	加工材	板状組合せ 具部材	粘質灰色土	(35.5)	11.6	0.6	7)瓦葺補装束 葺屋	7)瓦葺補装束 葺屋
第303図1		X VII C01	容器	底板	動物	砂④	11.0	(7.2)	0.4	7)瓦葺補装束 葺屋	7)瓦葺補装束 葺屋

図面No	写真No	遺構名	分類群	遺物名称	器種等	出土層位	長さ口径 (cm)	幅径 (cm)	厚さ高さ (cm)	器種	形態の特徴
第303図2		X VII C01(7ト)	容器	底板	動物		(7.5)	(2.8)	0.7	土片	
第303図3		X VII C01(層敷)	容器	底板	動物	黒土層下	8.6	(4.0)	0.2	土片	
第303図4		X VII C01	容器	漆器	椀		12.8	6.0	5.9	土片	丸底
第303図5		X VII C01	容器	漆器	椀		14.5	7.6	6.2	土片	高台付
第303図6	PL114	X VII C01	服飾具	櫛	櫛櫛	石組内	(5.6)	4.1	0.6	土片	
第303図7		X VII C01(層敷)	服飾具	履物	下駄	V層	(9.0)	7.3	1.3	土片	
第303図8	PL114	X VII C01	軽金属	木彫		V層	22.7	2.8	0.1	針葉樹	「藤民指来符」木彫
第303図9		X VII C01	用途不明品	加工材	板材		34.2	(4.3)	1.0	土片	板状
第303図10	PL114	X VII C01	その他	削片	燧石さし		9.3	0.7	0.9	7層埋管管束 層	棒状
第303図11		X VII C01	その他	削片	燧石さし		8.6	0.8	0.9	7層埋管管束 層	棒状
第303図12		X VII C01	その他	削片	燧石さし		10.3	0.9	0.6	7層埋管管束 層	棒状
第303図13		X VII C02	容器	底板	動物	V層	(10.9)	(4.5)	0.5	土片	
第303図14		X VII C02	容器	底板	動物	V層上面	35.2	(20.0)	1.2	土片	板状
第303図15		X VII C02	容器	側板	動物	砂質土V層	9.0	5.3	0.6	土片	底板有り
第303図16		X VII C02(層敷)	容器	側板	動物	黒土I層	(10.3)	(3.6)	0.3	土片	丸底
第303図17		X VII C02	容器	底板	動物	V層	(7.9)	(4.8)	0.6	土片	
第303図18	PL114	X VII C02	容器	底板	動物	V層	5.8	5.2	0.4	土片	小形
第303図19		X VII C02	容器	底板	動物	V層	(7.8)	(2.6)	0.5	土片	
第303図20		X VII C02	容器	底板	動物	V層	(8.8)	(2.7)	0.4	土片	
第304図1		X VII C02	食器具	折敷	椀	V層	27.9	(2.8)	0.7	土片	板状
第304図2		X VII C02	漆器	漆器	椀	黒土	—	7.5	(6.0)	1層3層	高台付
第304図3		X VII C02	漆器	漆器	破片	埋V層上	—	—	(2.7)	土片	
第304図4		X VII C02	漆器	漆器	皿	V層	<9.8>	<7.6>	1.0	1層3層	
第304図5		X VII C02	漆器	漆器	皿	V層	9.8	7.0	1.2	7層	
第304図6		X VII C02	漆器	漆器	皿	V層	<8.4>	<6.8>	1.2	土片	
第304図7		X VII C02(ベ針)	漆器	漆器	椀	V層	—	<6.2>	(1.2)	土片	高台付
第304図8		X VII C02	漆器	漆器	椀		—	—	(1.6)	土片	
第304図9		X VII C02	漆器	漆器	椀		10.4	6.0	3.0	3層埋管層	高台付
第304図10		X VII C02	食器具	箸		V層	12.8	0.7	0.5	土片	ほし
第304図11		X VII C02	食器具	箸		V層	20.0	0.7	0.7	土片	ほし
第304図12		X VII C02	用途不明品	棒状製品	さいばし状	V層下	(19.0)	1.3	0.8	土片	さいばし状(棒状)
第304図13	PL114	X VII C02	服飾具	櫛	櫛櫛	IV層	(4.9)	(3.3)	0.9	土片	
第304図14		X VII C02	服飾具	履物	下駄		(13.8)	(8.5)	1.3	1層3層	
第304図15	PL114	X VII C02	服飾具	履物	下駄		(21.2)	9.7	1.4	土片	
第304図16	PL114	X VII C02	服飾具	履物	下駄		17.6	8.3	1.5	土片	
第304図17		X VII C02	服飾具	履物	下駄		16.8	(7.6)	1.6	土片	
第304図18		X VII C02(層敷)	服飾具	履物	下駄	黒色土層下	(5.2)	(6.7)	(0.8)	土片	先端部のみ
第304図19	PL114	X VII C02	用途不明品	棒状製品	不明		(26.0)	5.8	3.6	土片	棒状
第304図20	PL114	X VII C02	祭祀具	形代	刀子形	V層下	12.0	1.7	1.7	7層埋管管束 層	
第304図21	PL114	X VII C02	用途不明品	加工材	へぎ材	V層	(8.2)	1.8	0.2	土片	薄板状
第305図1		X VII C02	用途不明品	棒状製品	不明	V層	28.6	1.9	1.5	土片	棒状
第305図2		X VII C02	用途不明品	板状製品	不明	V層	19.4	7.3	1.0	土片	板材
第305図3	PL114	X VII C02	用途不明品	加工材	残材	V層	6.0	2.8	2.6	土片	橋木材
第305図4		X VII C02	用途不明品	加工材	輿柱状木製品	V層	(5.0)	4.0	4.3	土片	六角柱材
第305図5		X VII C02	用途不明品	不明	残材	黒色土	(5.1)	8.4	0.5	土片	
第305図6		X VII C03	容器	底板	動物		(18.1)	7.6	0.4	土片	長方形(溝丸)
第305図7		X VII C03	容器	底板	動物	V層	7.9	(3.4)	0.7	土片	
第305図8		X VII C03	容器	側板	たが?	IV層	(23.8)	2.7	0.4	土片	板状
第305図9		X VII C03	容器	側板	動物		(29.7)	(5.2)	0.4	土片	板状
第305図10		X VII C03	食器具	折敷			(32.8)	(19.0)	0.6	土片	板状
第305図11	PL114	X VII C03	食器具	折敷			(28.2)	20.2	0.2	土片	薄板状
第305図12	PL114	X VII C03	食器具	折敷			(24.5)	22.6	0.2	土片	薄板状
第305図13		X VII C03	用途不明品	加工材	折敷 or 那 の原材?	V層	(3.3)	(4.3)	0.6	土片	板状線あり
第305図14		X VII C03	容器	漆器	皿	V層	8.8	7.2	0.8	7層	
第305図15		X VII C03	容器	漆器	椀		—	<6.2>	(1.5)	土片	高台付
第306図1		X VII C03	容器	漆器	皿		9.4	6.8	1.5	土片	
第306図2		X VII C03	容器	漆器	皿	V層	—	<7.5>	(1.3)	3層埋管層	
第306図3		X VII C03	容器	漆器	椀	V層	—	<7.8>	(4.6)	土片	高台付
第306図4	PL114	X VII C03	食器具	さじ		V層	(6.2)	1.2	0.8	土片	
第306図5		X VII C03	服飾具	履物	下駄	V層	(3.9)	(6.7)	(1.0)	土片	
第306図6	PL114	X VII C03	服飾具	櫛	櫛櫛		(1.7)	3.5	0.9	土片	
第306図7	PL114	X VII C03	祭祀具	形代	筒筒		(17.0)	2.5	2.5	7層埋管管束 層	
第306図8		X VII C03	服飾具	履物	下駄	IV層	(15.5)	7.2	1.0	土片	
第306図9	PL114	X VII C03	服飾具	履物	下駄		(21.3)	(9.4)	1.6	土片	溝面下駄
第306図10	PL114	X VII C03	埋葬具・葬具	埴土	埴土		8.7	4.8	0.5	土片	圭頭状
第306図11	PL114	X VII C03	祭祀具	形代	不明	IV層	(9.2)	1.8	0.3	土片	円形
第306図12	PL114	X VII C03	祭祀具	形代	不明	IV層	11.7	3.4	0.3	土片	
第306図13		X VII C03	その他	分割材	棒状製品	V層	(34.0)	2.6	1.3	土片	板材 鋭角
第306図14		X VII C03	その他	分割材	棒状製品	V層	(31.2)	3.3	3.2	土片	筒材

第2章 発掘調査の概要

図版No	写真No	遺構名	分類群	遺物名称	器種等	出土層位	長さ×口径 (cm)	幅底径 (cm)	厚さ高さ (cm)	器 種	形態の特徴
第306図15	PL114	X VII C03	その他	削片	燃えさし	V層	11.2	1.2	0.5	7) 灰澄精管尖蓋	棒状
第306図16	PL114	X VII C03	その他	削片	燃えさし	V層	10.8	1.6	0.7	7) 灰澄精管尖蓋	棒状
第306図17	PL114	X VII C03	その他	燻材	木端	V層上	2.5	4.5	2.3	7) 灰澄精管尖蓋	木端
第306図18	PL114	X VII C03	その他	燻材	積木状	V層	3.9	2.0	1.2	7) 灰澄精管尖蓋	棒状
第306図19		X VII C04	容器	底板	曲物	V層	(12.4)	(3.8)	0.6	7) 灰澄精管尖蓋	棒状
第306図20	PL114	X VII C04(層敷)	祭祀具	形代	舟形	Ⅴ層②	(12.3)	(2.1)	0.6	7) 灰澄精管尖蓋	棒状
第306図21		X VII C04	容器	漆器	椀	Ⅴ層	<15.6>	—	(4.0)	7) 灰澄精管尖蓋	竹状
第306図22	PL114	X VII C04	用途不明品	棒状製品	不明	V層	(9.5)	1.3	1.3	7) 灰澄精管尖蓋	棒状
第307図1		X VII C05	容器	底板	曲物	V層～Ⅴ層	(5.3)	(5.3)	0.8	7) 灰澄精管尖蓋	板状
第307図2		X VII C05(層敷)	容器	底板	曲物	—	(12.4)	(5.2)	0.5	7) 灰澄精管尖蓋	棒状
第307図3		X VII C05	容器	漆器	皿	—	—	6.6	(0.9)	7) 灰澄精管尖蓋	竹状
第307図4	PL115	X VII C05	祭祀具	形代	不明	V層～Ⅴ層	0.7	1.5	1.2	7) 灰澄精管尖蓋	棒状
第307図5		X VII C05	祭祀具	形代	不明	V層	(8.5)	(3.3)	0.7	7) 灰澄精管尖蓋	棒状
第307図6	PL115	X VII C05	祭祀具	形代	燻材	V層	(29.0)	3.1	3.0	7) 灰澄精管尖蓋	棒状
第307図7	PL115	X VII C05	その他	分割材	角材	—	5.5	9.4	4.8	7) 灰澄精管尖蓋	角材
第307図8		X VII C05	用途不明品	部材	板状製品	—	(20.7)	4.6	1.3	7) 灰澄精管尖蓋	板状
第307図9		X VII C05	用途不明品	部材	板状製品	—	(16.7)	(2.6)	0.8	7) 灰澄精管尖蓋	板状
第307図10		X VII C05	その他	分割材	棒状製品	V層	(38.5)	2.0	0.9	7) 灰澄精管尖蓋	板状
第307図11		X VII C06	容器	漆器	皿	Ⅴ層	<8.8>	<6.0>	1.2	7) 灰澄精管尖蓋	竹状
第307図12		X VII C06	容器	漆器	皿	Ⅴ層	9.0	7.0	1.0	7) 灰澄精管尖蓋	板状
第307図13		X VII C06	容器	漆器	椀	V層	—	6.8	(2.2)	7) 灰澄精管尖蓋	高台座
第307図14	PL115	X VII C06	用途不明品	加工材	圭頭状	Ⅴ層	(5.9)	(2.6)	0.8	7) 灰澄精管尖蓋	圭頭状
第307図15		X VII C07	容器	漆器	椀	炭化物層	<15.6>	—	(4.3)	7) 灰澄精管尖蓋	竹状
第307図16		X VII C07	容器	漆器	皿	—	9.6	7.2	1.1	7) 灰澄精管尖蓋	板状
第307図17		X VII C07	容器	底板	曲物	—	(10.4)	(6.5)	0.7	7) 灰澄精管尖蓋	板状
第307図18	PL115	X VII C07	容器	曲物	曲物	Ⅴ層	11.8	6.8	0.7	7) 灰澄精管尖蓋	板状
第307図19		X VII C07	その他	厚手板状	燻材	Ⅴ層	(17.6)	(15.3)	3.2	7) 灰澄精管尖蓋	厚手板状
第308図1	PL115	X VII C07	用途不明品	不明	不明	—	—	—	—	7) 灰澄精管尖蓋	燻材
第308図2		X VII C07	その他	分割材	棒状製品	V層	(37.5)	3.2	2.4	7) 灰澄精管尖蓋	棒状
第308図3		X VII C08	容器	底板	曲物	—	7.8	(4.0)	0.6	7) 灰澄精管尖蓋	板状
第308図4		X VII C10	容器	底板	曲物	V層深層	(19.3)	(9.1)	(1.3)	7) 灰澄精管尖蓋	板状
第308図5		X VII C10	容器	底板	曲物	—	8.2	7.7	0.6	7) 灰澄精管尖蓋	板状
第308図6		X VII C10	容器	底板	曲物	—	(12.3)	(4.3)	0.4	7) 灰澄精管尖蓋	板状
第308図7		X VII C10	容器	底板が着	曲物	棟出面	(16.3)	(8.1)	1.2	7) 灰澄精管尖蓋	板状
第308図8		X VII C10	容器	底板	曲物	—	(10.6)	(3.4)	0.6	7) 灰澄精管尖蓋	板状
第308図9		X VII C10	容器	漆器	椀	—	—	6.6	(5.4)	7) 灰澄精管尖蓋	高台付
第308図10		X VII C10	容器	漆器	椀	—	—	<6.8>	(1.7)	7) 灰澄精管尖蓋	高台付(低い)
第308図11	PL115	X VII C10	工具	柄	—	Ⅴ層	28.5	3.3	3.4	7) 灰澄精管尖蓋	柄
第308図12		X VII C10	食器具	箸	—	Ⅴ層	17.0	0.7	0.4	7) 灰澄精管尖蓋	はし
第308図13	PL115	X VII C10	服飾具	櫛	櫛櫛	V層上面	(5.3)	(2.3)	0.8	7) 灰澄精管尖蓋	櫛
第309図1		X VII C10	用途不明品	加工材	角柱状木製品	V層	(29.6)	2.4	1.3	7) 灰澄精管尖蓋	角柱状
第309図2		X VII C15	容器	底板	曲物	V層	(3.9)	(1.7)	0.2	7) 灰澄精管尖蓋	小型円板
第309図3	PL115	X VII C15	用途不明品	部材	不明	—	(12.0)	8.1	3.5	7) 灰澄精管尖蓋	竹状
第309図4		X VII D06	容器	漆器	皿	Ⅴ層	—	6.8	(1.4)	7) 灰澄精管尖蓋	高台付(輪高台)
第309図5		X VII D06	容器	底板	柄杓曲物	Ⅴ層砂層上面	6.4	6.0	0.5	7) 灰澄精管尖蓋	板状
第309図6		X VII D06	容器	底板	曲物	Ⅴ層	(10.0)	(3.1)	0.7	7) 灰澄精管尖蓋	板状
第309図7		X VII D06	容器	底板	曲物	棟出面	(9.1)	(3.4)	9.4	7) 灰澄精管尖蓋	板状
第309図8		X VII D06	食器具	折敷?	—	—	26.1	(3.3)	0.8	7) 灰澄精管尖蓋	板状
第309図9		X VII D06	用途不明品	棒状製品	不明	—	(16.5)	0.8	0.9	7) 灰澄精管尖蓋	さしばし状
第309図10		X VII D06	用途不明品	竹製品	不明	Ⅴ層・V層	(6.1)	5.0	4.7	7) 灰澄精管尖蓋	竹製品
第309図11		X VII D06	用途不明品	棒状製品	不明	—	(11.3)	1.3	1.3	7) 灰澄精管尖蓋	棒状
第309図12		X VII D06	不明	部材	錐材	—	20.6	(11.0)	0.8	7) 灰澄精管尖蓋	板状
第309図13		X VII H10	用途不明品	板状製品	—	—	14.5	(9.5)	0.2	7) 灰澄精管尖蓋	薄板状
第309図14		X VII H14	建築部材	分割材	柱根	立位	(31.5)	17.0	12.2	7) 灰澄精管尖蓋	角材
第309図15	PL115	X IV W23	用途不明品	加工材	木釘	砂層	9.4	0.9	0.4	7) 灰澄精管尖蓋	先端尖状
第309図16		X IV W23	食器具	箸	—	砂層	25.5	0.7	0.5	7) 灰澄精管尖蓋	はし
第309図17		X IV W23	食器具	箸	—	砂層	21.5	0.7	0.3	7) 灰澄精管尖蓋	はし

(5) 遺跡範囲の確認調査概要



バックホーによる遺跡範囲の確認

(5) 遺跡範囲の確認調査

○外西川原遺跡隣接地

1. 調査の概要

(1) 調査期間

平成14年10月15日～10月18日

(2) 調査面積

85.7㎡(対象面積2,950㎡)

(3) 調査担当

寺内貴美子 町田勝則

(4) 結果

a 概況

千曲市遺跡分布図に登載された東中曽根遺跡(89)と外西川原遺跡(119)に挟まれた標高377m～378mの低地部を対象に実施した。今回、東中曽根遺跡の本調査により、東中曽根遺跡と外西川原遺跡は、ほぼ同一の集落遺跡である可能性が濃厚になったため、両遺跡の中間地に隣接する地籍(用地取得のなされた八幡字外西川原3626番地)に試掘トレンチを設定し、調査を行った。

b 基本層序

堆積土層は4層で、5層の砂礫層(2.5YR4/2円礫40%程度で構成)が地山相当と判断された。5層は深い所では地表下約100cmほどが測られる。1層表土(10YR4/3)、2層(10YR5/2旧水田耕作土)、3層(7層に細分可能な埋没流路由来の砂質土:2.5Y4/2)、4層(10YR3/1粘性の強い黒褐色土で部分的に堆積する)である。

c 結論

当該の地籍は、5層相当の地山を含め、更級川の土砂堆積物で覆われていることが判明した。4層は局所的に堆積する土層であり、5層上面に一時的に生活面が形成された可能性もあるが、調査時に遺構・遺物(2.0cm大の磨滅した土器片が1点)は確認できなかった。本調査の必要はないと判断した。



試掘トレンチ全景(東中曽根遺跡より)



堆積土の様子

○八日市場地籍

1. 調査の概要

(1) 調査期間

平成14年12月12日～12月16日

(2) 調査面積

75 m² (対象面積 1,860 m²)

(3) 調査担当

町田勝則

(4) 結果

a 概況

千曲市遺跡分布図に登録された東條遺跡（118）の隣接地を対象に実施した。用地取得のなされた八幡字八日市場 3702 番地に試掘トレンチを設定し、調査を行った。

b 基本層序

堆積土層は3層で、4層砂礫層（円礫40%程度で構成）が地山と判断された。4層は外西川原地籍の5層相当と考えられる。地表下約-110cmほどが測られる。1層は表土、2層（10YR5/6 黄褐色砂質粘土）、3層（10YR3/1 黒褐色粘質土）である。

c 結論

4層の地山直上に堆積した3層黒褐色粘質土が遺物包含層と考えられる。試掘トレンチは、対象地籍の北と南、その中央に3本東西方向に実施した。結果、中央と南側のトレンチは、宅地撤去時のかく乱を受け、堆積土層は破壊されていた。北側設定のトレンチ内では遺構は確認されなかったが、3層下部から現代遺物に混じり、中世遺物（かわかけ等の土器破片12点）が出土した。このことから県道姉捨停車場線付近に、中世遺構の存在する可能性が高いと判断された。用地取得の進んでいない北側や県道の東側での遺構確認に託し、当該地籍での範囲確認調査を終了した。



調査の様子（更級川方向より）



堆積土の様子

○北田・蛭坪地籍

1. 調査の概要

(1) 調査期間

平成13年12月4日～12月11日

(2) 調査面積

北田 270 m²・蛭坪 321 m² (対象面積 12,904 m²)

(3) 調査担当

伊藤友久

(4) 結果

a 概況

千曲市遺跡分布図に登録された東條遺跡（118）の隣接地を対象に実施した。用地取得のなされた八幡

字北田 5548 番地、蛭坪 3909・3910 番地に試掘トレンチを設定し、調査を行った。

b 基本層序

北田地籍（標高 362m）の堆積土層は 3 層で、3 層以下は細粒の砂層（2.5Y4/4）が堆積し、深掘では現耕土下-500cm 程度までは厚く堆積するものと判断された。1 層は水田耕作土、2 層は 7 つの層に区分でき、2 つ目と 4 つ目に旧水田耕作土がある。最下層から近世陶磁器の破片が出土したことから、それらは、近世以降の水田土壌と考えられるか。

蛭坪地籍（標高 362m～364m）の堆積土層は 7 層が確認できた。1 層は水田耕作土、2 層は褐色砂質土（10YR4/4）、3 層は褐色砂質土（10YR5/1）で旧水田耕作土、近世陶磁器の破片が出土、4 層暗褐色粘土混細粒砂層（10YR3/4）、5 層黄褐色粘質土（2.5Y5/6）、6 層褐色粘土混細粒砂層（10YR4/6）、7 層（2.5Y4/2）である。

c 結論

北田地籍の堆積層は、最下層より近世陶磁器の破片が出土したことから、少なくともトレンチ内の堆積はそれ以降のものと考えてよい。砂質の堆積土であることから、おそらくは千曲川を起源とする洪水等の氾濫が想定される。蛭坪地籍の 4 層以下の堆積層も、同様に千曲川を起源とする洪水関連の堆積と考えられるが、3 層水田耕作土中に近世陶磁器の破片が出土していることから、北田の最下層と同一面であるのか、あるいは近世期の比較的短期間の内に、洪水等の環境により堆積が進行して形成されたものなのか。東條遺跡側の土石流の押し出しは、当該地籍までは及ばず、現県道長野上田線付近がその末端に当たるものと考えられる。



北田地籍トレンチ全景（千曲川方向より）



堆積土の様子



蛭坪地籍トレンチ全景（北田地籍方向より）



堆積土の様子

第3章 発掘調査の成果

第1節 遺跡を取り巻く環境

1 自然環境

2 歴史環境



第3章 発掘調査の成果

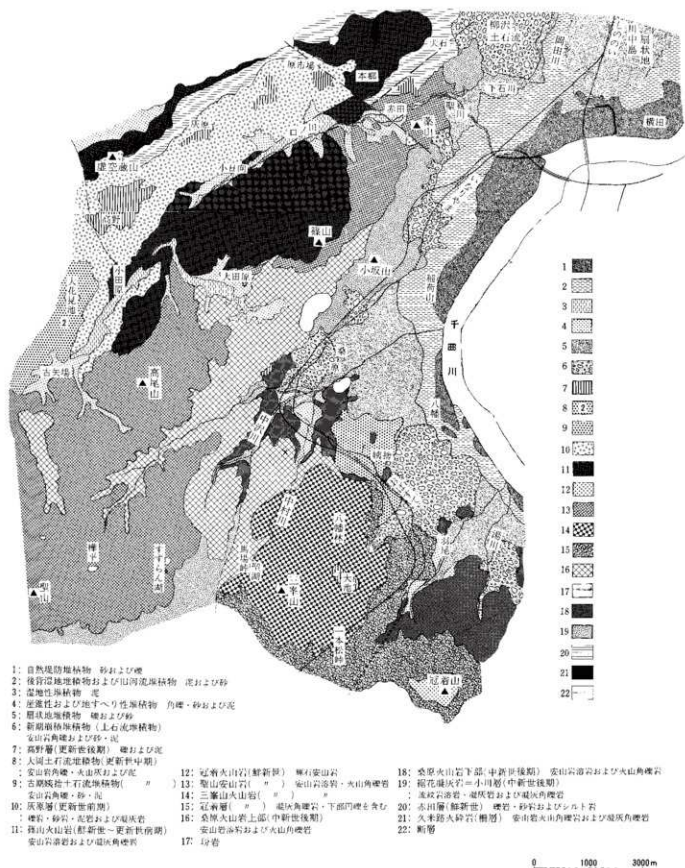
第1節 遺跡を取り巻く環境

1. 自然環境

(1) 地形と地質

長野盆地は、日本列島のほぼ中央部にあり、大河として名高い信濃川（長野県内は千曲川）の中流部にあたる。盆地は中期更新世に形成された構造盆地で、西縁と東縁に断層群がある。西縁断層群は西上がり東落ちの性質で、階段状に盆地側が沈み、結果、善光寺地震など内陸部直下型の地震が多発している。沈んだ盆地部には千曲川や岸川などの河川による多量の土砂が堆積し、広大な千曲川氾濫原に自然堤防や後背湿地が発達している。ボーリング調査によると、沖積層は86m、第四系の堆積物は400m前後と推定される。この地域の基盤岩類は、千曲川西側の西部山地は上部中新統の裾花凝灰岩・鮮新統の桑原火山岩・冠着凝灰角礫岩・聖山火山岩・三峯山火山岩・鮮新統末の篠山火山岩からなる（第13図）。その山麓には中部更新統の古期土石流堆積物、完新統の新时期土石流堆積物、扇状地堆積物などが分布する。信濃川は源流から河口まで、総延長366.8kmあり、長野県川上村の源流から千曲市域までは、約131kmある。千曲市はほぼ中央に千曲川を挟んで、平野と山地が両翼に広がる「羽を伸ばしたチョウ」の形を呈し、標高600m未満の土地が約6割を占める。長野県全体でのそれが1割程度であることと比較して、極めて低位の沖積地に位置するといえる。遺跡のある八幡地区は、千曲川の流が北西方向から大きく北東方向へ屈曲し、河川勾配が3.77/1000から1.09/1000へと転換し、急峻な礫床から中流性の砂泥床に大きく変化する場所にあたる。地形区分上は、標高360mから390m程度の緩やかな傾斜地である山麓部と、標高400mから600m前後、さらに600mを超える急峻な山地部が該当する。

山地部は冠着山（1152.2m）、三峯山（1131.3m）、聖山（1447.1m）と続く山列から北方へ高尾山（1166.4m）、篠山（907.7m）と1000m級の山並みが連なり、急な東側斜面を形成している。冠着山西方の鳥居平から一本松峠にかけては、第三系の冠着凝灰角礫岩で、安山角礫岩や石英安山岩質の凝灰岩を膠結し、粒径は5～30cmを中心に100cm近いものまでが含まれる。三峯山周辺は、黒色の輝石安山岩及び凝灰角礫岩からなる三峯山火山岩で、聖山を中心として高尾山山塊、篠山の南東斜面から鳥坂峠・薬山にかけては聖山火山岩がある。聖山火山岩は、下部に黒色緻密な玄武岩質安山岩、上部は板状節理の発達した複輝石安山岩が目立ち、下位の桑原火山岩や裾花凝灰岩部層を不整合に覆い、高尾山では約300mの堆積厚がある。聖山山塊の最下部付近に分布する溶岩は、カリウム-アルゴン年代で540万±30万年を得ており、鮮新世前期の活動が推定される。篠山や高尾山の南東山麓、聖高原北斜面の佐野川・中沢川流域などに分布する桑原火山岩は、黒色緻密なガラス質輝石安山岩で、八幡の梵天山鉱床は桑原火山岩中にろう石鉱床が胚胎したものである。また八幡部、大雲寺裏山（霊淨山塊）の石切り場は、石英角閃石普通輝石ひん岩である。これらの岩質によって形成された山地部の斜面は三峯山山体の崩落による地滑り性の土石流によって、典型的な押し出し地形を形成している。傾斜は10°～15°を測り、標高550mのJR姨捨駅付近から八幡上町の380m付近までの広がりをもつ。土石流堆積土は、新第四系に属し、古期と新时期に分けられる。古期姨捨土石流堆積物（炭素年代は13550±460年前）は泥主体の基質に三峯山火山岩や桑原火山岩の不淘汰な角礫を多く含む。地滑りにより二次的に移動し、姨捨から八幡峰の傾斜地に分布、下方は佐野川扇状地まで接する。新規姨捨土石流堆積物（炭素年代は3250±260年前）は三峯山火山岩の淘汰の悪い亜角～亜円礫を多量に含む砂泥土である。千曲高原を開析した谷頭から崩壊し、姨捨駅



第13図 高尾山山系(川西地区)の地質略図(註1より転載)

付近から千曲川氾濫原までを覆う。長楽寺の姥石は、この土石流で移動した凝灰角礫岩の巨岩である。現在、緩斜面は溜池灌漑による水田化により、階段状に並んだ大小さまざまな棚田となっており、更級川流域の棚田は「田子の月」として著名である。古期姥捨土石流堆積物上には峯謨坂遺跡、新时期姥捨土石流堆積物上には西中曾根遺跡、東中曾根遺跡、東條遺跡が立地する。

山麓部は、更級川や佐野川などの小河川が北東流し、前述の姥捨土石流台地の末端部分、更新世～新新世にかけて形成された崖灘や扇状地からなる。佐野川上流の不動滝より下流域、八幡の郡地区・峯地区・上町地区などには、礫花凝灰岩部層が分布している。流紋岩～石英安山岩質の凝灰岩を主体に、火山礫凝灰岩・凝灰角礫岩・火山角礫岩からなり、一部に砂岩や泥岩、礫岩をささむ。更級川は大池のくぼ地を源流とし、佐野川は聖山東方のくぼ地、鍋久保を源流とする。佐野川扇状地は、背後の山地から供給された粗粒の堆積物からなり、扇頂部（標高400m）から表面勾配19/1000で傾斜し、千曲川の浸食崖付近まで続く。現在は、扇頂部付近の果樹栽培と扇中央部以下の水田が主な土地利用である。扇状地には湧水があり、柳清水（八幡七頭・七清水のひとつ）、大ふけ、水別、清水などの小字名も残るが、水田利用の大部分は、佐野川から引水している。しかしながら佐野川は酸性鉱毒水（多量の二価・三価鉄イオンを含む）であることから、水田に沈殿池を造るなど鉱毒対策を施す一方、昭和44年以後、千曲川から揚水し、酸性（pH1.8～pH4.6）の緩和を図っている。

（2）気候と植生

標高が低く、沖積地を中心とした地形で、海の影響を受けない内陸性気候の特徴がある。ことに千曲川貫通谷という特殊地形であり、寒暑の差が大きく、少雨（残雪も少ない）、日照時間が短い。気温は冬が比較的低温、春から夏にかけての気温上昇が著しいのが特徴である。「更級市消防署資料」（文献1より引用）によると、1月の最低平均気温（1977～1984年間の平均値）は、屋代で-4.5℃、長野では-5.0℃を測り、8月の最高平均気温では、屋代で31.2℃、長野で30.2℃を測る。最暖月と最寒月の較差は、最高気温で約28℃、最低気温で27℃もある。日平均気温が0℃以下になる冬期は1月上旬から2月中旬ごろまでで、25℃以上に上がる盛夏は7月下旬から8月中旬までである。

また8月平均気温での最高と最低の格差は9.2℃もあり、田植え時期が遅い地域となっている。年平均降水量は約950mmで、日本列島全体の平均に対し、約半分程度と、極めて少ない。春から夏にかけて少なく、梅雨と台風による降水量が全体の1/2ほどを占めている。また夏は雷の発生件数が高いことも、一つの特徴で、桑原左近将監とかみなりの子どもの民話、「桑原桑原＝くわばらくわばら」の口承は、あまりにも有名である。この他にも天候に関わることわざは数多く、「冠着山に横雲あれば雨」、「冠着曇れば晴れとなり聖が曇れば雨となる」、「冠着になご（冠雪）三度来れば、雪降る」などは遺跡から周辺に見える冠着山を題材にした観天望気である。風は盆地特有の乱流が発生しやすく、千曲市域の南高北低の地形は、ことに日中南風が卓越し、夜間北風が強い特徴がある。

内陸性気候の特徴は、植生にも影響を与えて、太平洋側の南方型植物と日本海側の植物群が接する地域を生み出している。かつて、冠着山から聖山にかけては、ブナの混在する自然林があったとされ、猿ヶ馬場峠近くには栗の原生林が現在も残っているようである。『更級市誌』に記載された市域の植物は、木本植物301種、野草（地衣類等除く）664種、帰化植物101種がある。主なものでは、ブナ・トチ・アカマツ・ヒノキ・モミ・サワグルミ・クリ・シラカバ・ツノハシバミ・カツラ・コブシ・ホオノキ・シナノキ・オオボダイジュ・サワラなどがあげられる。

（3）名勝地

姥捨土石流台地上には西行法師が阿彌陀仏の四十八願にちなんでつけたとされる「四十八枚田」がある。元禄元年（1688年）に松尾芭蕉も来遊した長楽寺は、「信濃三十三番札所」十四番の名刹として知られ

ている。これらは冠着山裾部の棚田と合わせ、平成11年5月10日に国指定名勝地(3,174.46㎡)に指定されている。

2. 歴史環境

(1) 周辺の遺跡

東條遺跡ほかが存在する長野盆地南西部の千曲川左岸地域は、旧更級郡に属する。地形的には盆地低地部の千曲川氾濫原、緩やかな傾斜地である扇状地と埴捨土石流台地と呼ばれた標高400m前後の山麓部、それ以上の急峻な山地部に分かれている。千曲市教育委員会作成(旧更埴市1988)の遺跡分布図で、川西地区と呼称された地域(第14図・第31表)が該当し、その図を参照して、東條遺跡周辺の遺跡について概観する。

旧石器時代

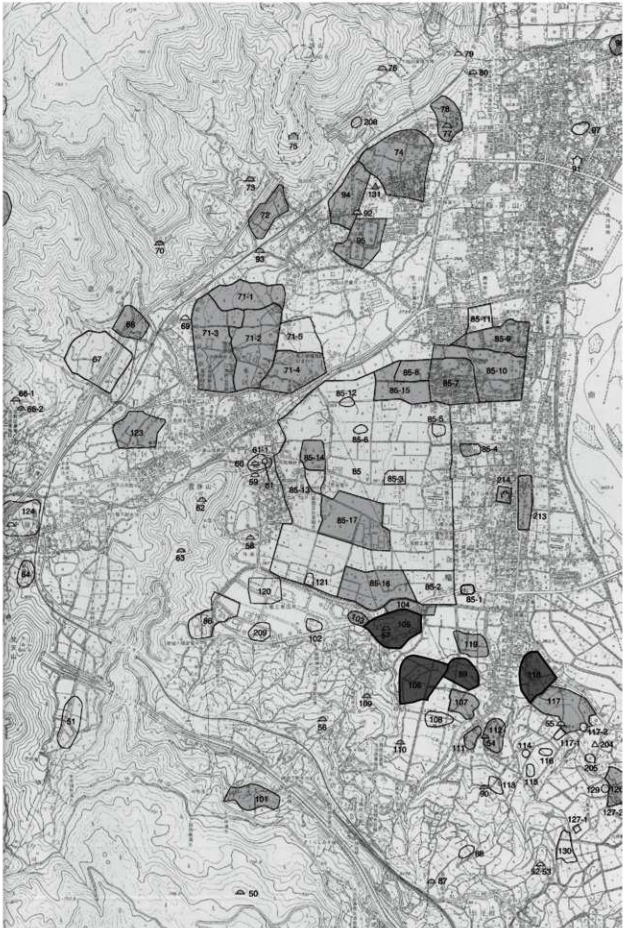
石器採集地が1ヶ所確認されている。桑原の大田原峠と呼称される地区にある佐野山遺跡(82)である。ここでは、黒曜石製の縦長剥片の基部に簡単な調整加工を施したナイフ形石器、片面調整の押し切り状石器などが採集され、旧石器時代後半(約1300年前)の遺跡である可能性が示唆されている。

縄文時代

草創期(10000年ほど前)の遺跡は知られていない。更埴市誌(1994年)では池尻遺跡採集の石器を取り上げるが、石器の形態的特徴のみでは、時期判断は難しい。確かな足跡が認められるのは縄文時代も早期(8000年ほど前)に入ってからで、ことに押型文土器(楕円文が主体)を中心とした遺跡が顕著である。地理的に近い治田池遺跡(95)から押型文土器と特殊磨石が採集されている。このように、千曲川に近い平地部の湿地帯周辺に、人々の足跡を読み取ることもできるが、大部分の遺跡地は標高700m代の山地部にある。東條遺跡の北西部、標高1166mの高雄山山麓域には、佐野川中上流域で押型文土器と特殊磨石を採集した横手開拓地遺跡、柄木沢流域で峠遺跡と池尻遺跡がある。峠遺跡は土器破片のみの採集地であるが、池尻遺跡は楕円押型文土器を中心とする確かな生活痕跡を確認できた遺跡である。池尻遺跡は前期以降まで、半ば継続的に選地されており、縄文時代初源期の営地として留意しておくべき定点である。池尻より下った標高470mの崖錐地上には、押型文土器初頭の集落遺跡として知られた烏林遺跡(68)がある。中央自動車道の開設に伴い発掘調査が行われたため、集落の概要が半ば推定できている。小竪穴3軒、土坑6基を調査し、押型文土器(格子目文及び山型文が中心)と石器(石鏝と特殊磨石)が大量に出土している。また東條遺跡南西部に位置する三峯山山麓、大池灌漑用溜池周辺でも押型文土器採集地が確認されている。早期も押型文を除くと、明確な集落痕跡は確認できず、断片的な土器破片資料を持って、考えざるを得ない状況である。押型文土器を採集している佐野山遺跡や古屋敷遺跡から、胎土に多量の繊維を含む絡糸体圧痕文の土器、貝殻痕の土器などが同じく採集されている。

前期(6000年ほど前)は、気温の上昇(現在の平均気温より約2℃高い)と、人々の定住化が促進された時期である。該期の初頭に位置付けることのできる植物質繊維混入の縄文施文土器は、池尻遺跡や古屋敷遺跡で採集されており、中葉期は断片的ではあるが、佐野山遺跡で確認されている。半截竹管による沈線文を多用した後半期の土器は、池尻遺跡で数多く確認されている。池尻では時期不明瞭な落し穴状土坑が検出され、小坂西遺跡(72)では住居跡1軒が発掘されている。このように前期段階の当地域は、早期での遺跡とほぼ同一の遺跡地内に土器片が採集され、新出する遺跡の発見は今のところない。

中期(5000年ほど前)はいわゆる縄文農耕と呼ばれる食料生産の開始された時期であるが、川西地区では該期の資料がほとんど発見されていない。更級川右岸の尾根にある坪山B遺跡(112)では、ほ場整備事業に伴う発掘調査で、大溝から中期初頭の土器がまともに出て出土したが、生活遺構は確認できなかった。



第14図 千曲市川西地区の遺跡の位置(註1より転載)

第3章 発掘調査の成果

番 号	遺 跡 名	旧 石 器	縄 文 前 ・ 中	縄 文 後 ・ 晩 明	弥 生 中	弥 生 後 ・ 明	古 墳 前 ・ 中	古 墳 後 ・ 明	奈 良	平 安	中 近 世	文 献
50	婦人塚古墳							○				
51	上平沢遺跡		○									
52	京塚1号古墳						○					
53	京塚2号古墳						○					
54	坪山古墳						○					
55	吉野塚古墳						○					
56	上人塚古墳						○					
57	丸山古墳						○					
58	静塚古墳						○					
59	矢先山下古墳						○					
60	矢先山1号古墳						○			45		
60	矢先山2号古墳						○			45		
61	矢先山経塚						○			3,89		
62	山ノ神古墳						○					
63	このまの古墳						○			45		
64	中原南遺跡						○					
65	中原古墳						○					
66-1	吹上塚東古墳						○					
66-2	吹上塚西古墳						○					
67	藤塚遺跡			○								
68	鳥林遺跡	○	○	○	○					66		
69	塚ノ口1号古墳						○					
69	塚ノ口2号古墳						○					
70	宝殿ノ塚古墳						○					
71-1	返町遺跡			○	○	○	○	○	○	37,45		
71-2	後安遺跡						○	○	○			
71-3	宮沖遺跡						○	○	○			
71-4	湯原遺跡						○	○	○			
71-5	駒清水遺跡						○	○	○			
72	小坂西遺跡	○	○	○	○	○	○	○	○	66		
73	遠見塚古墳						○					
74	元町遺跡						○			45		
75	小坂南遺跡						○			33		
76	塚穴古墳						○			45		
77	一本松古墳						○			12,45		
78	湯ノ崎遺跡						○					
79	東谷古墳						○					
80	湯ノ崎1号古墳						○					
80	湯ノ崎2号古墳						○					
82	佐野山遺跡	○	○	○						45		
85-1	大伝寺遺跡						○					
85-2	成沢遺跡						○					
85-3	中道遺跡						○					
85-4	北塚遺跡						○					
85-5	御領免遺跡						○					
85-6	稲付遺跡						○					
85-7	青木遺跡						○			8,15		
85-8	外くね遺跡						○					
85-9	六反田遺跡						○			45		
85-10	横まくり遺跡						○					
85-11	志川遺跡						○			45		
	よこみぞ遺跡						○					
	れんでは遺跡						○					

番 号	遺 跡 名	旧 石 器	縄 文 前 ・ 中	縄 文 後 ・ 晩 明	弥 生 中	弥 生 後 ・ 明	古 墳 前 ・ 中	古 墳 後 ・ 明	奈 良	平 安	中 近 世	文 献	
85-12	真光寺遺跡						○				○	45	
85-13	北なめり石遺跡						○	○	○				
85-14	田畑遺跡						○	○					
85-15	北福付遺跡						○	○	○			21	
85-16	北宮司遺跡						○	○	○			24	
86	赤坂遺跡			○			○	○	○				
87	曾根塚古墳						○						
88	上吉野遺跡						○						
89	東中層塚遺跡						○	○	○				
90	判官塚古墳						○						
91	稲雨山城跡						○				○	45,108	
92	検見塚古墳						○						
93	小坂塚古墳						○	○					
94	小坂東遺跡			○			○	○	○	○			
95	治田池遺跡						○					45	
97	町屋敷遺跡						○						
101	山ノ神遺跡						○					45	
102	柳下遺跡						○				○		
103	家遺跡						○	○	○				
104	宮川遺跡						○	○	○				
105	笹田坂遺跡						○	○	○				
106	西中層塚遺跡						○	○	○				
107	舞台遺跡						○	○	○				
108	狭狹遺跡						○	○	○				
109	杉ノ木古墳						○					90	
110	狭狹塚穴						○						
111	坪山A遺跡						○	○	○				
112	坪山B遺跡						○	○	○				
113	判官塚遺跡						○	○	○				
114	丸山遺跡						○				○	23	
115	下吉野A遺跡						○				○	23	
116	下吉野B遺跡						○				○		
117	下吉野C遺跡						○	○	○	○	○	23	
117-1	下吉野C-1遺跡						○				○	20	
117-2	下吉野C-2遺跡						○				○	20	
118	東塚遺跡						○	○	○				
119	外西川原遺跡						○						
120	石原A遺跡						○						
121	石原B遺跡						○						
123	町裏遺跡						○						
124	堂林遺跡						○	○	○				
127-1	龍田遺跡						○	○	○			19	
129	平田遺跡						○	○	○			19	
130	久保田遺跡						○	○	○				
131	元町焼窯跡						○						
139	権山遺跡	○	○		○						○	45	
204	西久保瓦窯跡						○					○	20
205	西久保遺跡						○					○	20
208	寺山遺跡						○						
209	白石遺跡						○						
213	武水河神土遺跡						○					○	
214	八幡松田遺跡						○					○	108

第2工区前半部分の遺跡
第2工区後半部分の遺跡

第31表 千曲市川西地区の遺跡の年代(註1より転載)

佐野川流域にある真光寺遺跡(85-12)からは、中期後葉と考えられる深鉢形土器の装飾把手破片が採集され、治田池遺跡からも同時期と考えられる土器片が出土している。池尻遺跡は小規模の竪穴式遺構が検出され、中期初頭と考えられる土器と打製石斧や磨石の出土があるが、前期からの継続的な選地である。

後期(4000年ほど前)は、気温の冷涼化(現在の平均気温より1℃低い)が進み、食料生産様式に変化が現れる時期である。中期段階に小竪穴式遺構を確認している池尻遺跡から、後期前半の土器破片資料と飯面土偶の破片が出土している。大池南尾根遺跡では後期初頭から中葉期の土器破片がまとまって採集されている。東條遺跡の近傍では、標高400m台にある石原A・B遺跡(120,121)で土器集中区が検出され、後期中葉から後半のまとまった土器破片が採集されている。

晩期(3000年ほど前)は、いよいよ稲作農耕へと突入していく段階で、縄文文化終焉の時期にあたる。川西地区では、桑原の小坂西遺跡、長尾根地区の坪山遺跡から晩期後半の土器破片が採集され、池尻遺跡では東海地方と関係のある条痕土器も出土している。しかし後期同様、確かな生活痕跡は認められない。

弥生時代

桑原の反町遺跡(71-1)から中期後半(2000年ほど前)の土器破片が採集されているほか、治田神社境内から、該期と考えられる太型始刃石斧がまとまって発見されている。千曲川左岸域の川西地区は稲作開始期の弥生時代になっても、縄文時代と同様に断片的な遺物採集のみに留まっている。これは、縄文遺跡も同様なことではあるが、当該地域に大規模発掘がいまだに及んでいないこと、集落遺跡の営まれるであろう平坦地の大部分が現在も水田耕作されている点によると考えられる。しかし、八幡遺跡群の調査である程度広域に発掘対象となった地区でも、縄文そして弥生時代の生活痕跡がほとんど確認できなかったことは、当地域の発展史を考えていく上で、極めて重要な情報である。弥生時代も後期後半(1800年ほど前)となると、竪穴住居跡や土坑で構成される集落遺跡が確認できる。宮川以南の姨捨土石流台地端部には、外西川原遺跡(119)、舞台遺跡(107)、東中曽根遺跡(89)、峯誦坂遺跡(105)、西中曽根遺跡(106)がある。今回の発掘調査でも東中曽根遺跡で竪穴住居跡と掘立柱建物跡、峯誦坂遺跡で土器棺墓、西中曽根遺跡で土坑を確認している。外西川原遺跡は標高380m前後に位置し、後期後半の竪穴住居跡8軒が発掘され、隣接する東中曽根遺跡との関連が窺われる。舞台遺跡は西中曽根遺跡上段の標高390mに位置し、竪穴住居跡7軒と掘立柱建物跡1棟を発掘している。峯誦坂遺跡北側の宮川下流域に宮川遺跡(104)がある。竪穴住居跡、土坑、井戸跡からなり、後期終末の様相を呈する。このことから、弥生時代の後期後半から終末期には、姨捨土石流台地端部を中心に、中小規模の集落遺跡が本格的に設営され始めたことが理解される。最大の特徴は、八幡遺跡群のある佐野川扇状地上ではなく、あくまでも台地縁辺部に集落が選地された点であろうか。この傾向は古墳時代にも引き続くものと予想されるが、良好な集落遺跡は確認できていない。

古墳時代

該期は古墳そのものが築かれる時期であり、川西地区にも小規模な古墳が数多く築造されている。諸所での古墳造営と相俟ってか、集落遺跡は拡散選地される。これまで集落遺跡の確認できなかった佐野扇状地にも、志川遺跡(85-11)、横まくり遺跡(85-10)等が設営され、大道遺跡も、この時期の集落遺跡である。宮川以南の土石流台地上では、峯遺跡(103)があり、古墳時代の住居跡2軒と土坑1基を確認している。また今回の調査で、西中曽根遺跡では住居跡と土坑、東中曽根遺跡と東條遺跡(118)では住居跡と掘立柱建物跡を確認している。現在当該地域の集落遺跡と古墳の対比は稲荷山元町遺跡(74)と塚穴古墳群(76)、反町遺跡と吹上塚古墳(66)、志川遺跡と八幡古墳群、外西河原遺跡と姨捨古墳群が予想・設定されている。集落遺跡と古墳、歴史的要素が充実した段階といえる。川西地区の古墳は北から塚穴古墳群(7世紀前半中心)、八稜鏡2面を出土した一本松古墳(77)(7世紀代中心で9世紀頃まで追葬か)、

小坂古墳群（6～7世紀代）、吹上塚古墳群（5世紀末ころか）、八幡古墳群（6世紀代中心か）、媛捨古墳群（6から7世紀代）がある。

古代以降

当地方は古代には更級郡に属し、犀川以南の川中島から南は筑摩郡の本城村におよぶ地域に該当する。更級郡衙の比定地は、八幡にある社宮司遺跡（85-16）であり、ほ場整備事業に伴う発掘調査で掘立柱建物跡9棟が確認され、奈良三彩陶器、灰釉陶器、墨書土器、そして豊富な木製品が出土している。坂城更級墳場バイパスに伴う発掘調査では住居跡16軒、掘立柱建物跡52棟、区画的な大溝や漆紙文書、墨書土器を確認し、郡衙との関連は濃厚である。また国内初の六角木桶（宝桶）が出土している。社宮司の北方にある北稲付遺跡（85-15）でも青銅製の帯金具に木簡、墨書土器などが出土し、やはり更級郡衙との関連が推定されている。今回の調査対象遺跡である峯謡坂遺跡では小規模な集落であるが、灰釉陶器や緑釉陶器、円面硯の出土があり、一般の農民とは別の階級の居住が推定される。東條遺跡の古代集落は7世紀～9世紀頃に営まれ律令国家の盛行期には規模を縮小していく。志川にある青木遺跡（85-11）は、古手の瓦が採集され、該期の廃寺跡の可能性が示唆されていたが、過去1回の調査で該期に相当する遺構は確認できなかった。これら集落関連の遺跡以外に、大田原には上日向窟跡群があり、3号窟の灰原から8世紀中ごろと推定される須恵器と瓦が出土し、更級郡内の須恵器生産窟として注目されている。また石原A遺跡では、厳密な時期比定は難しいが、該期の終末頃と考えられる木棺墓が1基確認され、横沢遺跡群上ノ田（78）・平田遺跡（129）などでは火葬墓の検出がある。矢先山（61）は平安時代の経塚として有名である。東條遺跡では土石流による中断の後、13～16世紀の中世遺構が確認されている。鎌倉・室町幕府下の地方都市に開かれた門前町、交通の要所として整備された街道を髣髴とさせる遺構群で、漆器や櫛、下駄、銭などの日用品のほか、「蘇民将來符」木簡や呪符木簡などの出土がある。武水別神社遺跡（213）は平成5年度に調査された遺跡地で、近世と考えられる石列1基と中世から近世期の埋蔵銭39000枚（この内20000枚が寛永通宝）が出土している。

註1) 本節は 長野県埋蔵文化財センター 2006 『一般国道18号(坂城更級バイパス) 埋蔵文化財発掘調査報告書1 千曲市内その1 社宮司遺跡ほか』第2章第1節に加筆、修正したものです。

引用・参考文献

- 1 更埴市 1994 『更埴市史 第一巻 古代・中世編』
- 2 長野県埋蔵文化財センター 1994 『中央自動車道長野線 埋蔵文化財発掘調査13 更埴市内・長野市内その1 烏林遺跡』
- 3 更埴市教育委員会 1995 『長野県更埴市 坪山遺跡・判官塚古墳』
- 4 更埴市教育委員会 1998 『長野県更埴市 湯ノ崎遺跡・一本松古墳』
- 5 千曲市教育委員会 2005 『長野県千曲市遺跡分布図』
発掘時は1998 『長野県更埴市遺跡分布図』に基づいた。
- 6 武水別神社 1994 『長野県武水別神社高良社本殿修理工事報告書』
- 7 岡田雅彦・竹内三千夫 1972 『更埴市大字八幡青木遺跡発掘調査報告』（『長野県考古学会誌』14）
- 8 更埴市教育委員会 1984 『長野県更埴市八幡遺跡群北稲付遺跡—西部沖ほ場整備に伴う発掘調査報告書—』
- 9 更埴市教育委員会 1986 『長野県更埴市社宮司遺跡—西部沖ほ場整備に伴う発掘調査報告書—』
- 10 更埴市桑原村誌編纂委員会 1967 『桑原村誌』
- 11 佐藤信之 1987 『更埴市・大池南遺跡出土土器について』（『長野県考古学会誌』53）
- 12 更級埴科地方誌刊行会 1978 『更級埴科地方誌 第二巻 原始古代中世編』
- 13 下平秀夫 1970 『長野県更埴市桑原池尻遺跡調査概報（2）』（『信濃』Ⅲ—22—4）
- 14 文化財保護委員会 1967 『全国遺跡地図 長野県』
- 15 森嶋稔・米山一政 1964 『長野県更埴市桑原池尻遺跡報告書（1）』（『上代文化』34）
- 16 矢口忠良 1968 『長野県更埴市桑原地区太田原向山古窯址出土の須恵器について』（『信濃』Ⅲ—20—7）

第3章 発掘調査の成果

第2節 遺跡からみた地域の歴史

1 古代的社会の形成

～

8 中世社会の終焉



第3章 発掘調査の成果

第2節 遺跡からみた地域の歴史

1. 古代社会の形成

(1) 7世紀前半(古墳時代V期)の「さらしな」

①「さらしな」の遺跡(第15図)

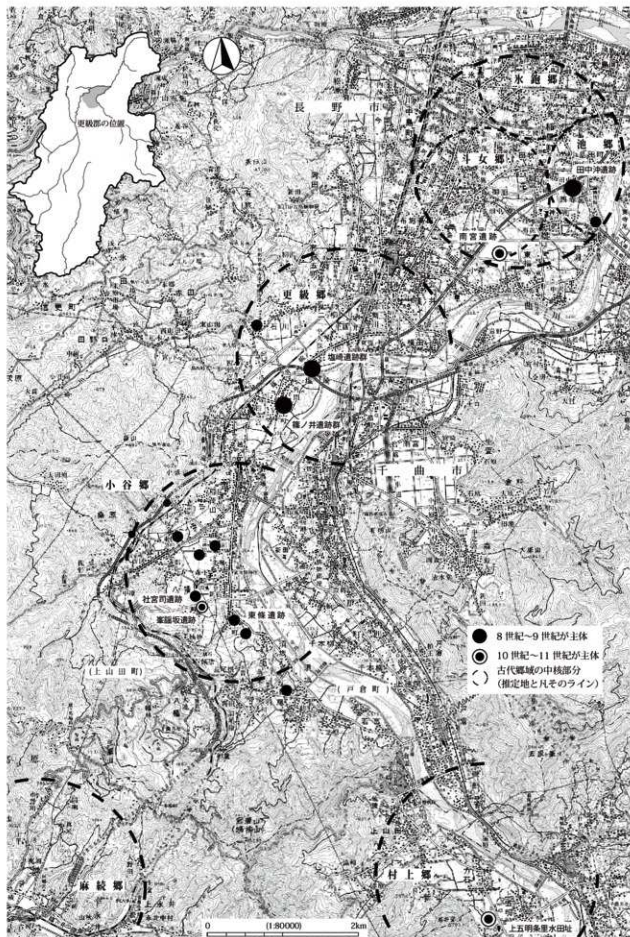
【時期区分のポイント:古墳時代終末・7世紀第1～2四半期頃、搬入の須恵器環H類・環蓋H類の段階】

該期の食器は、陶器窯産等の搬入須恵器環類により構成され、いまだ古代型の須恵器環類が登場しない段階である。貯蔵具では須恵器の大甕に加え、瓶類が盛行し、横瓶(1類タワラ形と2類シピン形)、提瓶(ツツミ形)、平瓶(ラッパ口形)、甕(注口付瓶)などの種類がある。

更級郡内で該期の集落遺跡を検討できる事例はいまだ多くはない。発掘調査により成果の知られた遺跡に、長野市田中沖遺跡、千曲市桑原遺跡群湯屋遺跡、八幡遺跡群大道遺跡、そして今回の東條遺跡がある。

東條遺跡(第16図)は、国道18号線地点と上町団地地点の2箇所が発掘調査が実施された。上町団地地点では、6世紀終末から7世紀初頭にかけての竪穴住居跡が確認されているものの、住居跡のまとまりを捉えるだけの面的調査がない。今回調査対象となった国道18号線地点をもとに集落跡の内容を考えてみると、居住の中心となった竪穴住居跡には、一辺6mを越える大型例(SB16・SB30ほか)と、それ以下の中・小型例(SB49・SB73ほか)があり、それらで集落が構成されていることが分かる。大型例は調査対象地内の中央地区に分布し、その左右の地区(東西方向)に中・小型例の住居跡が分布し、大まかに3つのまとまり(3住居跡群)・生活の単位(近接した住居跡の大・小、あるいは中・小の組み合わせで構成される住居跡のまとまりを便宜的に呼称)を捉えることができる。注意されるのは中央地区の住居跡群(生活の単位)で、およそ40mの範囲内に大型住居跡が3軒(SB16・SB29・SB30)と、それぞれに一辺3m～4mほどの小型の住居跡が付随するかのよう存在している点である。SB29にはSB18が、SB30にはSB26が、SB16にはSB23か?が組めるように見える。このような生活の単位の特殊性は、ひとつの集落のみならず地域社会をまとめる階層の竪穴として理解できるのであろうか。それのない大道遺跡や湯屋遺跡を比較したとき、東條遺跡が当該地域の中核的な集落遺跡であった可能性は高いと考えられる。おそらくは古代「小谷郷」を形成する中核的集落遺跡であり、同じ更級郡内にある田中沖遺跡が古代「池郷」を形成する中核的な集落遺跡と予想されるのと同様に考えることができるか。東條遺跡の中央地区に位置するSB16の埋没土内からは、古墳時代前期以後、氏族社会の特別な階層に継承されたと考えられる小型の珠紋鏡が廃棄され出土している。7世紀後半(古代1期)に至り、生活単位の中に大型住居跡が消失していくことを考え合わせると、歴史的過程の中で、該期の東條遺跡の集落構造が示す社会的な意義は大きい。遺跡背後の南斜面には埴谷古墳群が築造される。標高440m付近に横穴式石室をもつ判官古墳があり、出土遺物から6世紀から7世紀にかけて、築造そして追葬が行われたと評価されている。

大道遺跡は、一辺5mほどの中型の竪穴住居跡(SB03・SB16)と、それ以下の小型住居跡で集落が構成される。調査区内では住居跡のまとまりはか所に限られ、東條遺跡のようないくつかの群での構成は確認できていない。中型例1軒と小型例2軒から3軒で構成された生活の単位を発掘したのと思われるが、遺跡の背後にある八幡古墳群(矢崎山1,2号墳・矢崎山下古墳・山ノ神古墳など)の築造を考慮すれば、大道遺跡の集落規模は、より大きなものと推定される。遺跡は7世紀代にほぼ取まるが、住居跡に重複が見られ、少なくとも二つの時期があると考えられる。佐野川扇状地のほぼ中央に集落が設置されることから、八幡遺跡群の中核を担う集落のひとつと考えられる。



第15図 古代更級郡内の主な遺跡の位置

東條遺跡古墳時代V期 (7世紀前半)



西地区の住居群

中央地区の住居群

東地区の住居群

- 古墳V期(7C前半)
- 古代I期(7C後半)
- 古代II期(8C前半)
- 古代III期(8C代)
- 古代IV期(9C前半)
- 古代V期(9C後半)
- 不明



湯屋遺跡は、佐野川左岸域の桑原遺跡群にある集落遺跡で、発掘調査により47軒の竪穴住居跡が確認されたが、詳細は不明である。遺跡背後の南東斜面には小坂古墳群(塚ノ口古墳・小坂古墳・遠見塚古墳など)があり、いずれも7世紀代に属する盛土墳と推定され、本遺跡との関連性が強い。また湯屋遺跡の北東側、湯ノ崎の南斜面、元町遺跡の背後には塚穴古墳や一本松古墳がある。一本松古墳は径11mの盛土を持つ円墳で横穴式石室構造、古くに金環1、土製勾玉1、直刀1が出土し、八稜鏡2面(追葬か)の伝承がある。築造はやはり7世紀後半代と推定されている。

②歴史的な背景(国政・大陸文化の受容と国際化)

キーワード：遺隋使(隋滅亡)・遣唐使(唐の建国) 蘇我氏の天皇権力の越権 聖徳太子一族の滅亡

589年隋が南朝の陳を滅ぼし、高句麗・百済・新羅は隋の冊封を受ける。598年頃より高句麗と隋が政治的な衝突。592年蘇我馬子、崇峻天皇を殺害させ、推古天皇擁立。聖徳太子は推古天皇の摂政となる。594年仏教興隆の詔。600年遺隋使を派遣、朝鮮半島での倭の立場を確保しようと目論む。604年冠位十二階、十七条の憲法制定。607年法隆寺建立。遺隋使の派遣。小野妹子、南淵清安らは年少にして随行、612年には隋が敗退、煬帝が江都で殺害され滅びる。唐の建国。610年僧曇徴、紙や墨の製法を伝える。この頃、三教義疏(勝鬘・維摩・法華経)なる。620年『天皇記』・『国記』の撰録。622年『天寿国編帳』作成される。623年に新羅の使者が来日、僧の恵日が帰国。留学生の派遣と国交を建言。630年、遣唐使の派遣。僧旻、南淵清安・高向玄理らが帰国。この頃に蘇我入鹿は、天皇のみが許される呪術や祭祀、即位などの権限を越権し、こうした行為が他の豪族にも波及する。643年入鹿は聖徳太子の皇子、山背大兄王を斑鳩宮で殺害する。

(2) 7世紀後半(古代I期)の「さらしな」

①「さらしな」の遺跡

【時期区分のポイント：古代I期7世紀第3四半期頃、古代型の須恵器環A類・環蓋A類が出現する段階】
古墳時代の食膳具・貯蔵具を基本的に継承するが、消滅していく器もある。貯蔵具では甕E類(無頸甕)や瓶類の埴瓶が消滅する。食膳具では非ロクロ土師器の環(A類・B類)が消失し、古代型の須恵器環A類が登場する。

東條遺跡(第17図)は、古墳時代V期に地域社会を担う中核的な集落として誕生し、地域をまとめあげる階層者が住む集落として機能した可能性が高い。該期に至ると、特別な階層者を思わせるような大型の竪穴住居跡は消滅してしまうが、一辺5mほどの中型例(SB22・SB65)と一辺3mほどの小型例(SB31・SB68)で構成された集落が形成される。住居跡間の距離間隔から、中型例1軒程度と小型例2軒程度で、ひとつのまとまりを構成したものと観える。このまとまりが集落を構成する生活の単位、あるいは労働の単位と考えると、調査区中央地区に一か所、その東西の地区に各一か所が認められることになる。1軒の竪穴住居跡の居住に関わる員数やまたその関係性については推定の域を出ないが、1軒に2～5人程度の員数を想定できるなら、3軒程度で10人前後の居住が可能となり、「戸」のような生活あるいは労働の単位を考えることもできる。今回の調査区内では、それが3箇所あるので3戸が予想でき、1戸が2つから3つ程度集まって「1戸」(30人前後か)を編成していたと仮定すると、ちょうど1戸(郷戸)分の単位を検出したことになる。東條遺跡として周知化された埋蔵文化財包蔵地の範囲内に、この推定を還元すると、いまだ発掘調査の及んでいない部分も含めた全体の中に10～15戸が予想できることになる。つまり東條遺跡は古代籍帳上の3～5戸(郷戸)程度で集落が形成されていた仮定上の計算となる。東條遺跡は小谷郷に所在し、「1郷」は50戸で編成されたとされているので、残り45～47戸程度が郷内には存在したことになる。

峯謨坂遺跡(第18図)は、該期(概ね大化の改新以後)に新設された集落遺跡である。一辺5mほどの中型例1軒と一辺4mほどの小型例2軒前後があり、両者のまとまりを単純に仮定評価すれば、1戸程度を想定できる。遺跡は尾根状に張り出した台地先端部に立地し、周知化された包蔵地範囲での、集落設営上の好適地を今回は発掘調査している。調査結果を遺跡全体に及ぼせても、およそ4~6戸程度しか推定できない計算となる。つまり峯謨坂遺跡は、仮定上、1戸(郷戸)ないしは2戸(郷戸)程度の集落規模を考えることができる。「クニを分割して評を設置する」時期であるだけに、更級郡衝の誕生、その成立前夜を積極的に評価し、これに関わる政治的、社会的な機能を支援する戸(郷戸)を峯謨坂遺跡には想定したい。本遺跡が古代Ⅰ期に新設されて早くも次の古代Ⅱ期には消失してしまう意味は、本集落跡の示すそうした性格の一端を暗示しているように思える。

大道遺跡には、該期に所属すると判断できる竪穴住居跡はほとんどない。調査区西側の端で検出した一辺4m~3m規模の住居跡(SB11・SB12)にその可能性を考えることができるが、時期決定を行える出土遺物が貧弱である。それらの住居跡が当該期のものであると仮定すると、集落跡の主体部は今回発掘した地籍の西側(調査区外)に展開している可能性がある。調査区内から須恵器A類が1点、B類が4点、破片資料で出土しているだけで、現状では生産的単位を示す集落跡の全体像はつかめていない。

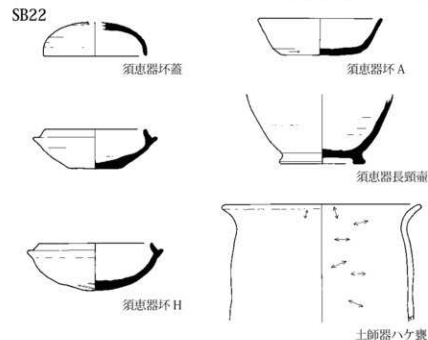
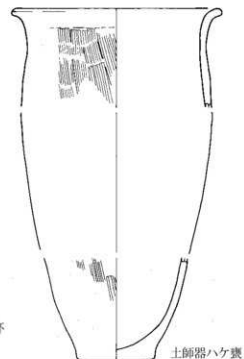
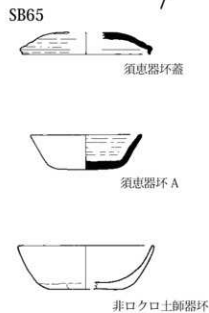
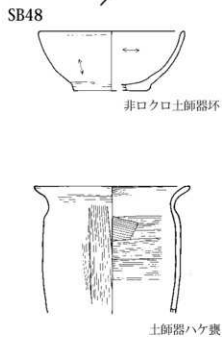
社宮司遺跡では、集落跡の構造が明確に読み取れていない。竪穴住居跡2軒(SB05・SB16)と掘立柱建物跡4棟(ST29ほか)を検出したが、それらの時間的な位置付けは、むしろ古代Ⅰ期の後半ころと考えられる。該期の前半は溝跡等を中心とした生産域であり、いまだ施設の建設が計画的に進んでいない段階と評価でき、報告書では「社宮司Ⅰ期Ⅰ小期」と段階設定している。後半に建設された建物跡を、681年飛鳥御浄原律令の制定に近い時期と予想したいが、地域支配拠点に関わるような施設群の可能性を考えるには、やや不十分な遺構内容である。続く古代Ⅱ期以降の本遺跡内容を加味して考えると、律令社会の開闢期に地方行政に参画していく施設(遺跡)の萌芽期と理解しておくべきであろう。

②歴史的な背景(国政;政権の交代と政治改革)

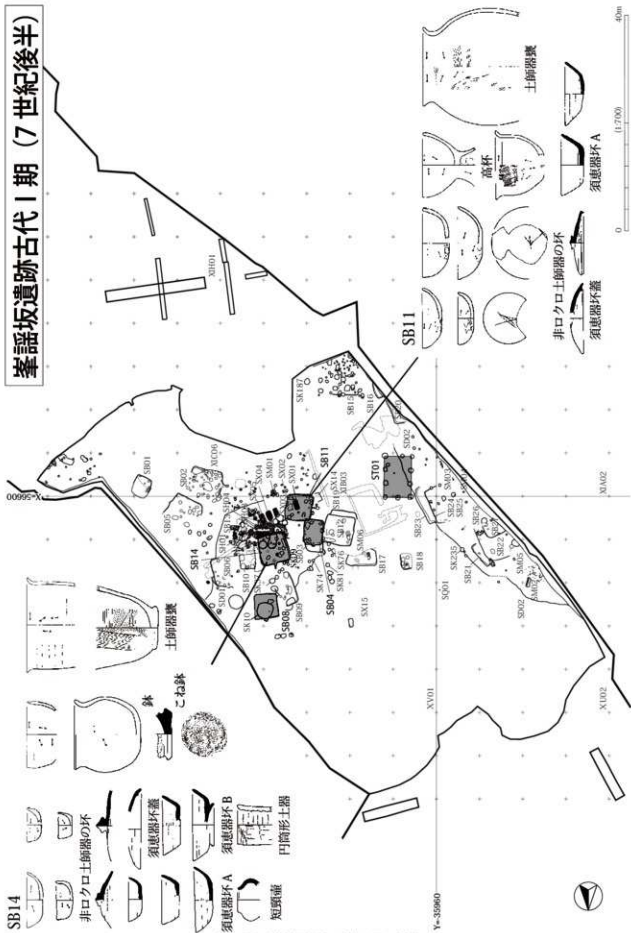
キーワード:改新の詔 公地公民 班田收受 男女の法 庚午(寅)年籍 東国支配

645年倭国史に残るクーデター、乙巳の変(大化の改新)が起こる。蘇我入鹿の暗殺に成功した中大兄皇子と中臣鎌足は、孝徳天皇を立て、新政権を樹立する。大和王権は氏族制度を根幹とする地域社会の統合体であるが、新政権はそれを中央に集権化させることを、政治目標とし、大化二年(646年)に改新の詔、「男女の法」、さらには薄葬令を打ち出す。『日本書紀』に記された詔の四箇条は、1.子代・部曲・屯倉・田荘の廃止と封祿の支給、2.京・畿内国・郡・閭塞・駅伝の制、3.戸籍・計帳、班田收受の法、4.賦役の制とされる。「男女の法」は、出生児に対し良民を父方に、賤民は母方に属させた。また新政権は唐及び朝鮮半島諸国(高句麗・新羅・百濟)との対外関係を踏まえつつ、倭国東端の地、東国の開拓、統合化を進める。このための施策として、人口や田地の調査、武器の徴収などを実施し、淳足の柵(647年)、磐舟の柵(648年)を設置する。ここで重要な点は、武器を徴収し、空閑地に武器庫を設けて保管させたこと、蝦夷の居住地に近い毛野地方などでは、蝦夷の襲撃に備えるとして武器を所持した本人に貸与したことである。「シナノ」の地は、毛野地方と並び蝦夷居住地の周辺域にあたることも考えられるが、ここ「さらしな」の地には鉄製武器の出土は残念ながら少ない。武器を回収し、空閑地あるいは郡家への保管が進められていたのか、集落遺跡はもとより古墳への副葬量の調査が望まれる。652年難波宮(前期難波宮?)に遷都。658年には阿部比羅夫が蝦夷、肅慎の征討を開始する。660年百済が唐に滅ぼされ、やがて白村江の戦いとなり倭国は大敗する。天智天皇(中大兄皇子即位)は669年に近江令を制定し、670年には初の全国的な戸籍、庚午年籍(永久保存)を作成する。詔に示された賦役の制では、仕丁の出仕単位を50戸とし、その戸より「庸の米」を供出させた。ここに定められた共同体の結合原理が、後の社会

東條遺跡古代Ⅰ期 (7世紀後半)



第17図 東條遺跡の古代Ⅰ期の集落



第18図 峯謡坂遺跡の古代1期の集落

で「里」に生かされたとされる。実際の集落遺跡で確認される住居跡のまとまりを原点として、集落遺跡の構造、遺跡間の関係性を摸索していく上に、編戸、ことに50戸の単位は手法として重要である。690年には庚寅年籍が完成し、六年一造、国一評(郡)一里一戸の制が確立する。684年天武天皇の治世、複郡案に伴い信濃へも使者が派遣されている。

2. 古代社会の成立

(1) 8世紀前半(古代Ⅱ期)の「さらしな」

①「さらしな」の遺跡

【時期区分のポイント:古代Ⅱ期7世紀第4四半期～8世紀第1四半期頃、須恵器環B類と環蓋B類が出現する段階】

貯蔵具は7世紀終末ころより変化が見られ始め、甕や須恵器小壺(A類丸底)が消滅、新たに甕類(甕B類・C類)が登場する。食膳具では非クロコ土師器が該期で完全に消滅し、須恵器環A類さらしなには環BⅠ類(法量4種類)が出揃う。古墳時代の須恵器高環は消滅し、変わって須恵器の盤が登場してくる。

東條遺跡(第19図)では、調査対象地の中央地区に住居跡のまとまりが再び増加し、西地区に2軒のまとまりが、東地区には4軒のまとまりが観られるようになる。これらのまとまりは、住居跡の軸が北東に20度ほど傾く一群とほぼ南北軸を取る一群の2者に別れ、中央地区のまとまりのひとつが後者に該当する。時間的な前後関係は、古い住居跡が前者で、新しい住居跡が後者に所属する傾向にあるが厳密ではない。また古い住居跡は一辺5mほどの中型例(SB10・SB19・SB20)と一辺3mほどの小型例(SB12・SB33)で構成されるのに対し、新しいものは一辺4m規模の方形プランを指向する小型住居跡(SB59・SB62・SB70・SB72・SB74)で統一されているように観える。さらしなには西地区の端に該期に所属すると考えられる掘立柱建物跡3棟(ST31・ST33・ST35)がまとまりをもって造られ、計画的な施設造営を窺うことができる。調査区内には4つから5つ程度の房戸が推定でき、周知化された包蔵地範囲内には20～25の房戸(200～250人程度)、6～7戸(郷戸)が予想できそうである。集落跡の規模としては古代Ⅰ期よりも2戸(60人前後)程度増大した仮定上の計算になる。集落規模の増大または再編成が、調査地の中央地区に確認された正方位を指向する住居跡のまとまりや西地区に建設された掘立柱建物群に現れているとしたら、社宮司遺跡で該期に設置されてくる、やはり正方位指向の住居跡や掘立柱建物跡と、設計上の計画性や関連性が読み取れるのかもしれない。まさに律令社会における地域集落の構造を読み解く、ひとつの検討材料を内包するものと考えたい。

峯謡坂遺跡と大道遺跡には、該期の住居跡は検出されず、生産の単位となるような集団は占拠していないと考えられる。峯謡坂遺跡は、前時期に新たに形成された一房戸程度の集落であるが、該期に至り、突如として、それが消失する理由は何か。このことが「クニを分け」「評」を設置する」施策に関係し、社宮司遺跡等の都衙関連施設の建設に着手、あるいはそれら施設に移転した結果と評価できるなら、歴史的な意義は極めて大きい。峯謡坂遺跡と同様に大道遺跡も該期に消失する。大道遺跡の南50mほどには社宮司遺跡があり、やはり社宮司遺跡等の増設に関わった結果なのだろうか。この2つの遺跡の消失と社宮司遺跡の増設・再編が時期をほぼ同じくしている点は注意すべき考古学的事象といえる。

社宮司遺跡では、「社宮司Ⅰ期2小期」がほぼ該当し、計画的な施設造営が開始される段階である。竪穴住居跡に加え、計画的とも観える建物群の設置がある。前段階には竪穴住居跡2軒(SB05・SB16)と掘立柱建物跡4棟(ST29ほか)程度が設置されるに留まったが、該期に至ると東西方向の溝跡を2本(北側にSD01、南側にSD84)掘削し、その溝間の空地、幅にして50mの区画内(北区と仮称)に、特異ともいえる桶状の集排水設備をもった一辺6mもある大型竪穴住居跡(SB17)と4棟の掘立柱建物跡

東條遺跡古代Ⅱ期（7世紀終末～8世紀前半）



SB19



須恵器環 A



須恵器環 B

土師器ミガキ裏

SB10



須恵器環 A



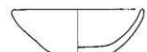
須恵器環蓋



須恵器環 B



非口クロ土師器環



高杯



円面硯

0 (1:600) 20m

第19図 東條遺跡の古代Ⅱ期の集落

(ST19・ST30 ほか)が設置される。この区画された北区の南方(南区と呼ぶ)には、3棟の掘立柱建物跡(ST08 ほか)が林立し、なかでも東西方向に長軸のある2間×6間(ST12 床面積 50㎡)の長大な建物跡は、まさに政治的・社会的な機能を考えるに十分な内容をもつ。こうした状況証拠を鑑みれば、該期において「更級郡家」が、この八幡の地域に造営されたと考えることも、あながち誤りではなさそうである。政庁機能は、やはり八幡字「郡(こおり)」の地籍周辺に想定できるのか。本遺跡より北へ500mの位置に、郡家推定地はある。

②歴史的な背景(国政：中央集権と律令国家の誕生)

キーワード：大宝律令 日本と信濃国 平城京 郷里制 班田の確保 浮浪人 出挙 条里制 蓄銭
叙位令 飢饉・病 国分寺(尼寺)造営

694年藤原京遷都。701年大宝律令が制定される。律令が完全な形として成立したこと、倭にかわり「日本」の国名を正式に定めたこと、行政上の命令や報告は公文書をもって行い、公文書には干支ではなく年号を用いるなど、今日の国家形成の基礎的な骨格がここに築かれる。702年岐蘇山道(木曾路)が開かれ、713年には吉蘇路が通じている。この頃より「信濃国」の国名が使われたとされる。708年に武蔵国より自然銅(和銅)が献上され「和同開珎」を発行、711年には蓄銭叙位令が發布され貨幣経済の端緒が開かれる。710年平城京遷都。715年国一郡一郷一里制(大宝律令では50戸を一里)に改める。同年南信地域の遠山で地震(『続日本紀』では「遠江地震」と記述)が起こったことが記録される。この頃、信濃国ほかの百姓を東国(出羽国)に移す。712年『古事記』、720年『日本書紀』などの国史ができる。721年に信濃国を割き諏訪国(～731年)を置く。律令制の班田収受は、公民に口分田を与え、課役を課すことで成り立った。口分田の不足等は百万町歩の開墾計画、三世一身の法の施行を経て、全国的な規模での条里制(一里を六分割し、36等分を1町)へと進展する。しかしながら743年の墾田永年私財法は、国司に開墾地の古定許可権を認めたことで、貴族や寺社が畿外へ進出する契機をつくったとされる。一方で本貫を離れる浮浪人が増加し、墾田と出挙の制による統制の拡大、736年には浮浪人帳の作成に至る。729年長屋王の変。733年に大飢饉、734年には大地震が勃発、735年天然痘の流行が記録されている。740年藤原広嗣の乱。743年には国分寺・国分尼寺造営の詔が出され、天平の經典書写事業の開始、743年大仏造立の詔が發布される。この頃より平城京内では行基による布教活動が活発化する。

(2) 8世紀(古代Ⅲ期)の「さらしな」

①「さらしな」の遺跡

【時期区分のポイント：古代Ⅲ期8世紀第2四半期頃～8世紀代、非ロクロ土師器は消滅し、黒色土器A類が登場。須恵器に糸切り離し手法が出現し、ヘラ切り手法と交代する段階】

奈良時代の貯蔵具は、甕類の分化が進み、該期にはD類(凸部付四耳壺)が出現する。瓶類の形態変化(A類からB類へ)と集約化が急激に進み、これに小壺(B類平底)が組成する。煮沸具では古墳時代よりの非ロクロ系長胴甕(A類ハケ調整)に加えて、ロクロ系の外来器種(武蔵甕)が搬入され、新たにロクロ丸底の甕(砲弾甕)が登場してくる。数は少ないが、鍋の存在も認められる。食膳具ではロクロ使用の内面黒色処理した黒色土器(A類)の環が登場する。

東條遺跡(第20図)では、住居跡数がやや減少する。中央地区にあった住居跡のまともは、ほぼ同数が継続するが、西地区では消滅、東地区でも2軒程度に減少する。ただし西地区では、掘立柱建物跡が7棟に増加し、居住施設をもたない掘立柱建物跡群のみの空間として整備されてくる。中型規模の竪穴住居跡(SB70からSB71へ)や3間×4間の掘立柱建物跡(ST35からST36へ)など、いずれも近い位置への建て替えが想定される点は、社司司遺跡の建て替えの在り方と同様であり、8世紀代の集落構造の変化を考える上で重要である。中央地区は中型程度の住居跡が2軒(SB17・SB71)あり、これに小型例が

組み合わさる構成を引き継ぐ。2～3戸を推定することができ、遺跡全体では10～15戸、100～150人、3～5戸（郷戸）程度が存在した仮定計算となる。しかし設定した該期の時間幅はおおよそ70年近くを含んでおり、同時性という意味では集落規模は半減した姿となる。多少大きく見積もったとしても、2つ程度の戸で60人前後、周知化された包蔵地全体では5～12戸戸ほどで、2～4戸（郷戸）が考えられるか。また古代Ⅱ期に親られた小型で方形指向の住居跡のまとまりがなくなり、集落編成の変化さらには居住者の移動などの要因が予想される。社宮司遺跡における集落構造の変化、施設の改築や増設等と関連させて考えていく必要がある。この時期、信濃国において、国分寺・国分尼寺の造営が開始されたのであれば、造営への労役もあったろうし、口分田の不足もあり浮浪人が多発、あるいは墾田開発に伴う集落規模の拡大や分散化、さらには東国支配に向けての移住政策など、政治的・社会的要因も参考にすべきである。今後、追究していくべき課題ではあるが、ここ「さらしな」の地における社宮司遺跡や北稲付遺跡の在り方を見ると、むしろ律令体制の整備と充実に向けて、更級郡内が活況を呈してくる時期のように捉えられる。郡衙機能の整備・拡充に向けて、組織的な地域づくりを推進した結果と考えておきたい。

社宮司遺跡では、「社宮司1期3小期」に相当し、施設の改築と増設が進む段階。集排水設備を持つ大型の竪穴住居跡（SB14へ）や2間×6間の大形建物（ST11へ）も改築される。特記すべきは、いずれの建物も東側に1mないしは2mずらして再構築されていることである。また増設の建物は掘立柱建物跡を中心とし、竪穴住居跡（SB11）は南区の建物群中に1軒のみ設置され、以後、ほぼ同じ位置にて改築されていく。出土遺物には墨書の土器（「洒か」「坂主」「守部」「中」など）や習書木簡「鍼」があるほか、奈良二彩や奈良三彩陶器の出土がある。古代Ⅲ期は、律令体制の形成と展開の時期にあたり、様々な政治的制度が具体化された天平文化の最盛期である。倉や庫といった建物跡を中心とし、特殊な設備を持つ大型の竪穴住居跡をもった社宮司遺跡、竪穴式の建物と掘立柱建物跡をもつ北稲付遺跡や稲付遺跡、そして農業生産の単位として集落構成を再編成した東條遺跡など、律令国家を担う地域社会の在り様を考究していくに極めて重要な遺跡群が捉えられたと評価したい。

ここに歴史上記録された文字資料にして、該期の様子を端的に表現していると思われる史料が2つあるので、以下に示しておく。

『続日本紀』巻二十九に記された更級郡に住む建部大垣の記事は、神護景雲二年五月とあり、まさにこの頃、768年のことである。その読み下し文は以下のようである。

「信濃国更級郡の人 建部大垣 人となり恭順にして 親につかえて孝あり。～その田租を免じて身を終えしむ」

しかしその一方で、904年に選集された『古今和歌集』巻十七のよみ人しらずの和歌にこめられた想いは、当時の社会情勢を捉まえているようにも感じられる。

「わが心 なくさめかねつ 更級や をばすて山に てる月を見て」

②歴史的な背景（国政：律令国家の展開）

キーワード：国司・郡司の退廃 東国支配の徹底・蝦夷の大征討 健児の制 平安京

764年藤原仲麻呂の乱。唐では安祿山（755年）の変が起り、玄宗皇帝が長安を追われる。朝鮮半島では新羅が内紛状態となり、日本への移民が続出する。桓武天皇の治世は、蝦夷征討と施設等造作に代表される。780年伊治公若麻呂の反乱により、陸奥国府・多賀城が焼失。784年長岡京に遷都、平城京と難波宮の複都制を廃止。甲子革命（世の中が改まる年の意味）の年、藤原種継の暗殺事件が起こる。この頃に調庸の粗悪品が納入され、さらには国司・郡司の怠慢がみられたため国が規制を行う。790年頃、信濃国府が移転したとされる。774年～789年に蝦夷の大征討を行い失敗。790年には駿河・東山道・

東條遺跡古代Ⅲ期 (8世紀)



SB63



須恵器環 A



非ロクロ土師器環

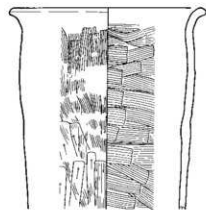
SB71



黒色土器 A 環



飯



土師器ハケ裏

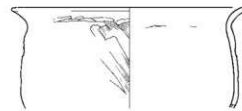
SB77



須恵器環 A



土師器ケズリ裏



土師器ハケ裏

東海道の諸国に革甲二千領を作るように命じ、791年には東海道・東山道の諸国に兵士・武器の検閲、征箭を製造させている。794年坂上田村麻呂（征夷大將軍）の征討により、802年ついに阿弓流為が降伏、三十八年戦争に決着をみる。胆沢城・志波城を築く。蝦夷との戦争で、騎馬兵力の戦闘能力の高さが具現化され、歩兵主力の軍団が廃止される。792年「郡司子弟」を登用する健児設置令が出され体制化される。794年に平安京へ遷都。805年の徳政の相論により造営の中止・終了となる。

3. 古代社会の展開

(1) 9世紀前半(古代Ⅳ期)の「さらしな」

①「さらしな」の遺跡

【ポイント：古代Ⅳ期9世紀前半頃、高台付の椀や皿が出現し、黒色土器B類や灰軸陶器が登場する段階】

平安時代の貯蔵具は、瓶類の形態分化（平瓶、広口瓶、小瓶、瓶、取手付瓶など）が進み、新たな焼き物（陶器）が出現する。瓶類には大・中・小の法量が併存する。須恵器甕類や壺類は前段階より継承された器種構成をなす。煮沸具は概ね継承されるが、ロクロ土師器では武蔵型甕の出土が該期でなくなる。食膳具は須恵器坏類が消滅してゆき、内外面黒色処理したB類が登場、黒色土器A類は盛行を極める。灰軸・緑軸の陶器類も組成してくる。

東條遺跡（第21図）は、該期の特徴とされる灰軸陶器の出土が少ないことが挙げられる。食膳具の中心をなすのは黒色土器である。前段階の古代Ⅲ期の集落構成は、中型を中心に小型の住居跡が加わり、それらが10m内の至近で2～3軒まとまって生活の単位を構成し仮定上の房戸を編成していた。これに対し該期では1～2軒の中型もしくは小型規模（住居跡の構造は支柱穴を持たず、カマドの上部構造も判然としない例が主体）に近い住居跡が10m以上の間隔を隔てて独立して設置されているように観える。房戸の再編成が進められ、その構成員に何らかの社会的変化（農民の自立性の高まりなど）が起こった結果なのだろうか。中央地区で確認した中型規模の住居跡（SB52とSB53）は、唯一同一場所で改築されており、次期にいたっても同じ場所にて改築され続ける点は集落構造を考える上で特筆すべき事例である。本集落を担う特別な階級の成長を考えておきたい。

峯認坂遺跡（第22図）は、該期に至り再び集落形成が始まる。実際にはヘラ切り難し手法の須恵器坏A類の消失した段階、8世紀終末段階を少し含む時期である。中型規模の竪穴住居跡が中心となって生活の単位が編成されている。中型の住居跡はほぼ同一場所で重複しており、時期として複数段階のあることは確かだが、その判別は厳密には行いきれない。10m程度の間隔を置いて住居が建築されている点や小型例が少ない点は、東條遺跡の場合と同様である。住居跡の設置位置のみを俯瞰すれば、発掘区の中真にあるSB12を中心に、東と西にそれぞれ住居跡のまとまりがあるように観られる。2軒ないし3軒ほどのまとまりを房戸と仮定すれば2～3単位程度を想定でき、20人から30人規模、1戸（郷戸）が存在していた計算になる。この戸の中心的な住居施設がどれなのか、SB12にそれを求めるならば、陰刻花紋のある緑軸陶器の椀（第38図34）、あるいは底部に「人（ひとばしら）」に「井」の合わせ字」あるいは「高床式倉庫の絵か？」（第38図29）と考えられる印刻のある土師器坏など、特殊な遺物が挙げられる。また遺跡内で特筆できる出土資料として、須恵器円面甕と長頸瓶D類（壺G類）がある。いずれも該期の初頭期に位置づけられると考えられるが、残念ながら押し出し状の堆積物中（SD02内）より出土しているため、正確な時期判断は難しい。墨書土器には「岑」がある。緑軸陶器や灰軸陶器類が比較的豊富なことから、特別な階級による集落の設置、居住（移住）を考えておきたい。

社宮司遺跡は、「社宮司Ⅱ期」と呼称した段階が概ね該当する。該期では古代Ⅱ期・Ⅲ期と続いた集排水施設をもつ大型住居跡が消失し、これとともに南北方向の溝（SD53）も機能を失う。北区は掘立柱建

物跡が中心となるものの、前段階に観られた列状の配置は弛緩される。南区には竪穴式の住居跡と掘立柱建物跡が配置され、南と北の施設設置の在り方に明瞭な違いが現れてくる。南区の中央部には2間×3間の総柱建物跡（ST28）がしっかりと築かれ、その脇には一辺4m規模の竪穴住居跡が南北に対峙して存在する。特定空間内でのこうした施設造営の在り様は、本遺跡を担う特別な階級の誕生（あるいは発展か）を考えさせる。該期の後半期には、遺跡内を区画していた東西南北の溝が機能を消失していき、北区と南区を仕切る南側の東西溝（SD03）のみが残る。この溝内からは付札状木簡や出挙返納帳と考えられる断片（「十月十一日正税廿束」と記された漆紙文書断片）が出土している。この出挙返納帳反古紙は、本遺跡が更級郡家と直接関わった証左であるとともに、そこに記された額稲での返納は、少なくとも律令税制に基づいた正税出挙の証と考えられる。旧暦10月は、今日の11月にあたる。11月初旬には嫉捨にも雪が来る。返納期としては最も遅い時期にあたり、その意味をどのように捉えるか。飢饉ゆえの遅納なのか、あるいは農民退廃の結果なのであろうか。いずれにせよ、極めて重要な歴史的事実を示す資料として特筆できる。

北稲付遺跡・稲付遺跡は、佐野川扇状地の中央部北端に位置し、南端の社宮司遺跡と対峙（社宮司からは北方へ約1000m）して扇状地の両翼を担う位置関係にある。部分的な調査であり、全体像はまだ解らない。古代Ⅲ期末から該期にかけての遺跡と考えられ、一辺2mほどの小型の竪穴建物跡1棟と埋没流路、掘立柱建物跡が存在する。出土遺物には「□三繩」と墨書された付札状の木簡や「春」と書かれた灰釉陶器、青銅製の帯金具などがある。生産や居住に関わる遺跡というよりは、調査報告書の示唆する「官衙に関連する施設」の可能性が高い。付符状木簡の出土と現在の地名「稲付」は、歴史的な意味をもつと考えたい。

②歴史的な背景（国政：律令国家の変質）

キーワード：源平藤橘の誕生 都「みやこ」と鄙「ひな」 鎮護国家と密教文化 公営田制 有力農民の登場

807年諸国に桑や漆を植えさせる。811年陸奥・出羽両国百姓の墾田の収公を禁止。蝦夷と準人も次第に公民化され、班田農民となっていく。嵯峨天皇は皇子たちに「源朝臣」や「平朝臣」の姓を与える。この頃より中国風の名「排行」にならい2字4音を付ける習慣が根づく。学識や能力のある良吏が出現、公卿が増加する。「藤原氏」登用の比重が高まり、藤原冬嗣が蔵人頭（810年蔵人所設置）となる。令外官「檢非違使」の設置。官人層の都への集住化が進み、「畿内」・「畿外」から「みやこ」・「ひな」へと概念が転換していく。最澄そして空海による密教文化が開花し、現世利益と即身成仏、鎮護国家の思想が天皇から農民までを包みつつ社会に浸透していく。この頃太政官符にて、税の粗悪・逾期・未進を是正させている。823年小野岑守の提案により、大宰府官内に「公営田」制（国衙の正税を用いて調庸を買い上げるシステム）が施行される。この制度の基盤は、地域社会の中で次第に力をつけてきた「郡司子弟」らの有力農民（富豪層）であり、「力田の輩」「殷富の輩」などと呼ばれた人達である。この頃の荒田の開発は、有力農民と弱小農民の上下関係により成り立っていたと考えられている。「郡司子弟」は健児の制度化により身分化され、一部の有力農民には下級官職を買うような状況さえ生まれたらしい。いわゆる「弓馬の士」が社会的にも認知され、国家権力に対抗する勢力として増大していったと考えられる。820年に最澄は神坂峠に宿院を設けて旅人の難を救ったとされる。823年科野から都へ初めて貢馬をおくる。834年～848年頃、平安京を中心に「群盗」が活躍。842年承和の変が起こり、藤原良房が台頭。天皇と外戚関係を結び、太政大臣へと昇進する。このころ盗賊が出没、飢饉がおこる。嘉祥年間（848年～851年頃）に加賀郡傍示札が立つ。811年農民の魚酒慣行を禁止。古代Ⅳ期は、確立したかに見えた律令国家の枠組みが変質し、地方社会に住まう人々が、自らの手法で生きる術を身につけていく時期である。

東條遺跡古代Ⅳ期 (9世紀前半)



- 古墳Ⅴ期(7C前半)
- 古墳Ⅰ期(7C後半)
- 古墳Ⅱ期(8C前半)
- 古墳Ⅲ期(8C代)
- 古墳Ⅳ期(9C前半)
- 古墳Ⅴ期(9C後半)
- 不明

西地区の住居群

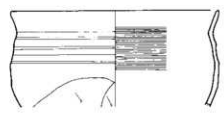
中央地区の住居群

東地区の住居群

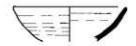
SB56



黒色土器 B 皿



ロクロ裏



須恵器環 A

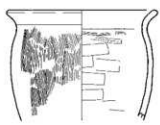
SB53



須恵器環 A



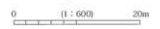
黒色土器 A



ハケ裏

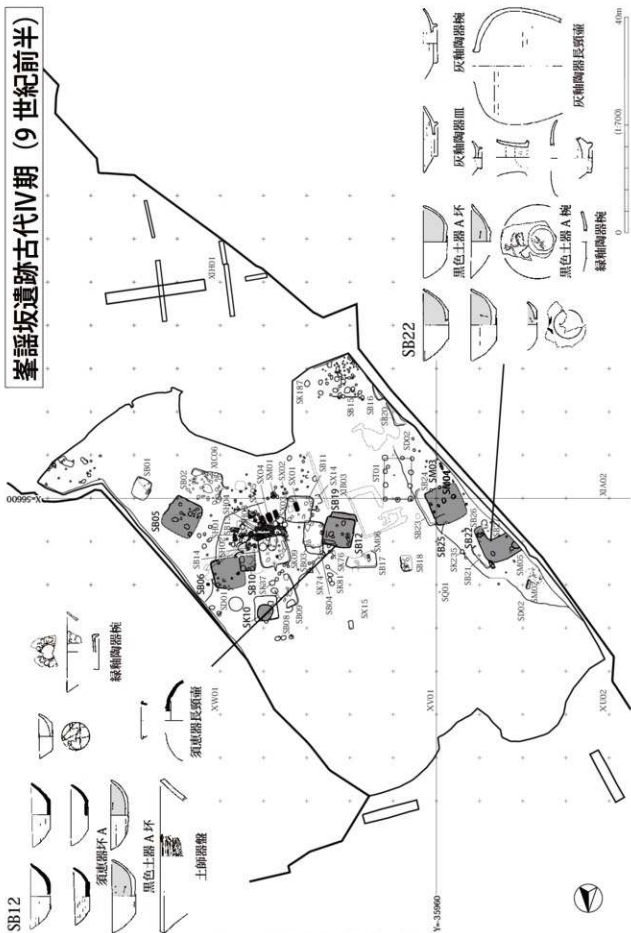


(土師器)
灰釉の模造品



第21図 東條遺跡の古代Ⅳ期の集落

峯謡坂遺跡古代Ⅳ期 (9世紀前半)



第22図 峯謡坂遺跡の古代Ⅳ期の集落

(2) 9世紀後半(古代V期)の「さらしな」

①「さらしな」の遺跡

【ポイント：古代V期9世紀後半頃、須恵器環類の消滅と土師器環・椀類が登場する段階】

平安時代の貯蔵具は、前段階の古代IV期の様相を概ね継承するが、煮沸具では古墳時代以降主役を担った非ロクロ系長胴甕(A類ハケ調整)が消失し、ロクロ調整の砲弾形甕・小甕が残るのみとなる。食膳具では須恵器環類に代わり、ロクロ成形の土師器環・椀・皿などが登場してくる。黒色土器も依然として盛行し、灰釉や緑釉陶器の組成も続く。

東條遺跡(第23図)では、食膳具の土師器がほとんど出土しておらず、該期でも前半までの集落跡と考えることができる。墨書土器には「万」や「今」がある。遺跡内には、竪穴住居跡が2軒と該期の可能性のある掘立柱建物跡が6棟存在する。中央地区にある竪穴住居跡1軒(SB54とSB76は同一遺構の可能性が高い)は、一辺7m近くある壁際に石垣状の礎石列を伴う特殊な構造であり、前時期より住居跡が改築され続けた同一場所にある。礎石列をもつ建物跡は、千曲川の対岸に位置する千曲市五輪堂遺跡でも発見されており、所属時代も9世紀後半代と同様で、そこでは集落内の堂跡を想定している。本遺跡でも一般の居住施設以外の機能を考える必要があるか。この施設の東側には2間×4間を中心とした5棟もの掘立柱建物跡が造られ、西地区には1軒の住居跡に1棟の掘立柱建物跡が組成するように存在する。調査区外の様子は皆目見当がつかないが、集落の構造的な変化は急激に進展したのと考えられる。東條遺跡が該期をもって古代集落の終焉を迎えることも、大きな画期の一側面を意味しているように思える。

峯塚遺跡(第24図)では、中型規模の竪穴住居跡が中心となり、古代IV期の集落構成をほぼ継承する。同一場所での建て替えは、安定した比較的長期間にわたる居住の姿を想定できる。前時期と同様に発掘区のほぼ真ん中にあるSB17(SB12の北側に隣接して建築される)を中心に東と西に住居跡はまとまっている。やはり2つ程度の単位、房戸を想定でき20人程度の規模、1戸(郷戸)が存在した仮定になるか。SB17には灰釉陶器の椀類に加えて赤彩のある土師器環の出土があり、やはり特殊性がある。集落遺跡全体の出土物は、食器類に占める土師器の割合が高いことから、古代V期でも後半に近いものと考えられる。

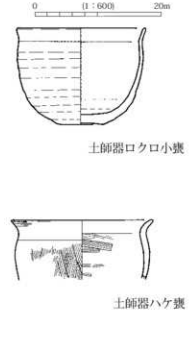
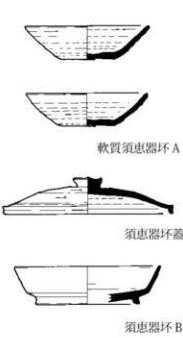
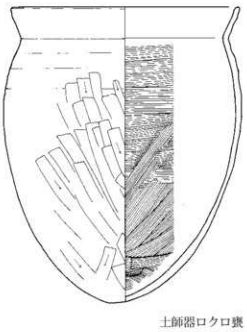
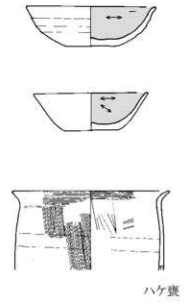
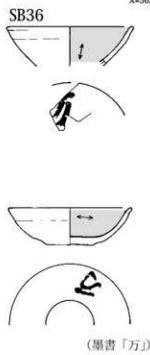
社宮司遺跡は、「社宮司Ⅲ期」に該当する。竪穴住居跡の改築が覗かれた南区を中心に新たな展開が進む。遺跡を南北に分けた南側の東西大溝(SD03)は、南区の私的空間を取り巻くようにL字形に掘削される。公的空間内の施設は、ほとんどが消失する。南区での居住中心の空間形成(25m四方)がいつそう図られ、大型の竪穴住居跡1軒(SB01)と中型規模の住居跡2軒(SB12ほか)、これに掘立柱建物跡1棟(ST44)が設営され、「屋敷地」的な配置が出現する。この空間の東には1間×1間の建物跡が南北に立ち並ぶ。該期も終末の段階(古代VI期にもかかる時期か)に至ると、再び南区の空間内で竪穴住居跡の改築が図られる。これについては遺構の所属時期が微妙でもあり、次期(古代VI期)にて扱う。古代V期は、律令体制の転換期にあたる。このことは農業生産集落として栄えた東條遺跡の解体に端的に表現されているようにも看られ、社宮司遺跡や峯塚遺跡にみる集落構造の一大変化も同様な事象であると考えられる。改めて挙げるまでもないが、社宮司遺跡に覗る公的実務空間の放棄、私的空間の拡充・整備は、律令支配からの完全なる脱皮と、新しい価値観の萌芽を表現しているように思える。大溝(SD03)に打ち捨てられた大量の灰釉陶器類や、少なくない緑釉陶器の出土を見れば、遺跡としての終息感では微塵も感じられない。食膳具に必要以上に固執し「八千」の文字を書くことも、社会的な変化の一側面として捉えられるか。

②歴史的な背景(国政：摂関政治の開始と荘園制の成立)

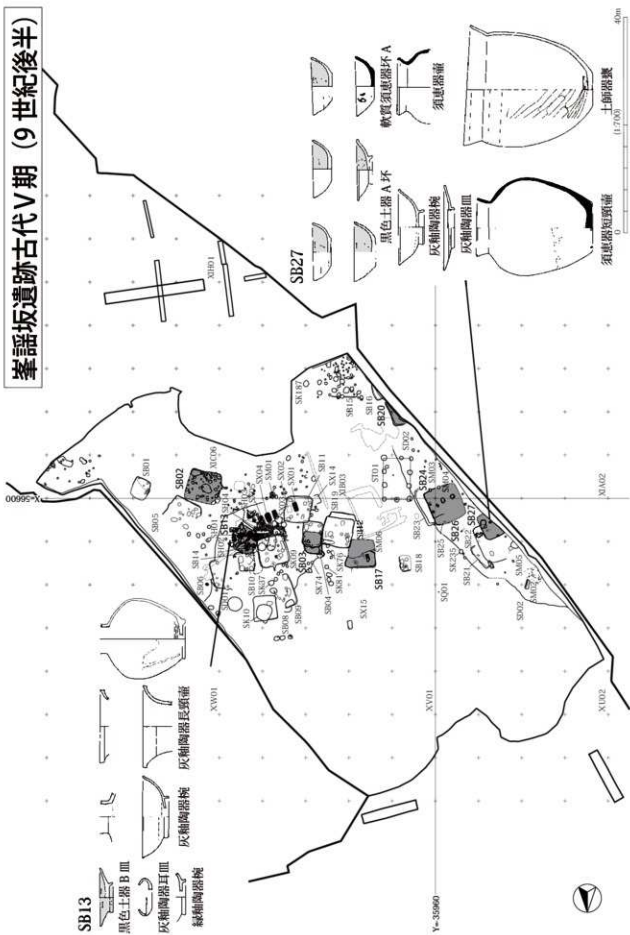
キーワード：疾病流行 藤原氏 摂政・関白 富豪層 荘園の成立 群盜蜂起 遣唐使廃止 災害

853年天然痘流行、863年流行性感冒が京ではやる。神泉苑の御霊会、市民に開放され水門が開かれる。

東條遺跡古代V期 (9世紀後半)



第23図 東條遺跡の古代V期の集落



第24図 峯謡坂遺跡の古代V期の集落

859年京都の石清水に宇佐より八幡宮を勧請する。866年伴善男、応天門の変にて失脚し、藤原氏による紀氏、伴氏、夏井氏の排斥が進む。同年千曲市の武水別神社、従二位に叙せられる。藤原良房が清和天皇の摂政となる。872年藤原基経右大臣となり、887年「阿衡事件」が起こる。「天下の政を摂行」し、「万機の巨細、百官の愆己、皆太政大臣に関わり白し」する政治体制、藤原氏による前期摂関政治の成立が進む。この頃地方において郡司などの職を私的にゆずることを禁じている。871年を前後し、京の都で大洪水、地震が頻発する。887年に八ヶ岳の大崩落と洪水が起こり、更級・埴科郡域に多大な爪あとを残す。『扶桑略記』、『日本略記』や『類聚三代格』では、888年とするが、年輪年代値から887年の可能性が高い。894年遣唐使の廃止。897年醍醐天皇の即位、「延喜・天曆の治」。889年「東国強盗首」物部氏永が蜂起する。この年、高望王は「平」の姓を与えられ上総介となる。895年頃より坂東富豪層「蹴馬の党」が、陸路の調庸物を襲い、信濃・上野・甲斐・武蔵を荒しまわったために、相模国足柄坂と上野国碓氷坂(899年)に関門が設置される。900年ころ饗宴群飲が禁止される。

4. 古代社会の終焉

(1) 10世紀前半(古代VI期)の「さらしな」

①「さらしな」の遺跡

【ポイント：古代VI期10世紀前半頃、黒色土器A類環の消滅傾向と漬け掛け灰陶器の登場段階】

今回の発掘調査では、灰陶器(大原2号窯産ほか)との良好な伴出関係を把握できていない。在地土器の様相から区分を行うが、古代V期の特徴である須恵器環類の消滅傾向と、さらしなは黒色土器環類の減少傾向の推移が漸移的であり、絶対的な区分として採用できない難点がある。食膳具に占める土師器環・椀類の増加傾向(半数以上)から、古代VI期の幕開けを捉えておきたい。したがって本書に示す古代VI期とは、10世紀前半でも、その初頭期までを対象としており、概ね黒色土器環類の消滅まで、9世紀終末から10世紀第1四半期頃を扱う。

峯崎坂遺跡(第25図)は、古代IV期そしてV期と継続した集落形成の後、住居跡の重複関係から該期に位置つけた住居跡が2軒(SB21・SB23)ある。ともに調査区の西側にあり、後世の破壊を受けて部分的にしか残存していない。食膳具における黒色土器の割合が決して低くないため、古代V期の終末とすべきなのかもしれない。住居跡のほか、土坑3基(SK74・SK76・SK81)も該期に含めて考えたが、集落跡の全体像は不鮮明である。しかしながら、東條遺跡や社宮司遺跡で該期相当の遺構が希薄となる中、焼捨土石流台地上の本遺跡地で集落が継続されていく意味は大きいといえる。

社宮司遺跡では、古代V期の終末段階(古代VI期にかかる時期か)に至ると、南区の空間内(25m四方の規模敷地内)において竪穴住居跡の改築・再構成が計られる。建物配置を見る限り、移築の位置や建物の規模・数等に外観上の大きな変化は見られない。住居跡には大型例と中型例があり、大型の竪穴住居跡(SB02・壁立ち建物と考えられる)は一辺が7mもあり、竪穴内には規模の大きな土坑が3箇所に設けられ、黒色土器と土師器の環類が大量に廃棄されている。SB01からSB02への移築は、住居構造さらには出土遺物の内容の点において大きな変化を伴っている。この時期、浮浪・逃亡者、群盗が横行したとされる。饗宴群飲の禁止が出された記述(類聚三代格)もあり、そのような振る舞いが都では行われていた証でもある。SB02の性格を想定するひとつの材料となるか。該期に掘立柱建物跡の大半が消失していく傾向と絡めて考えると、班田制の変質や崩壊が進み、新たな社会的な秩序(荘園制のような)が育っていたように思われる。郡司子弟らを含め、一部の農民層が次第に体力をつけ、有力農民や富豪層などと呼ばれる階層に成長していった経緯が、遺跡内の西区(私的空間)に現れていると考えたい。今後、類例を検索し追究していくべき最重要課題のひとつである。



第25図 峯謡坂遺跡の古代VI期の集落

一方で特筆すべき事例として、大型の竪穴住居跡（SB02）の西側30mほどの所に地鎮の遺構がある。斎庭跡と考えられる正方位区画の遺構（一辺5m）の中心部に猿投産緑釉取手付瓶が埋納され、土師器の腕や環が定期的に配置される。在地で使い続けられた黒色土器をまったく使用せず、高級食器である緑釉陶器と新世界の土師器を用いる。政治的色彩の極めて強い祈禱施設を想定できる。まさに「八ヶ岳の崩落・仁名の大洪水」（887年頃）の時期にあたり、この施設の示す歴史的な意義は重要であり、貴重かつ稀有な考古学的記録であるといえる。

②歴史的な背景（国政：新秩序と「初期権門体制」）

キーワード：公民制崩壊（浮浪・逃亡） 班田制の終焉 税体系の変貌 富豪層の台頭 荘園の発達
承平・天慶の乱 武士の登場 負名体制 「市聖」 志多良神 神社規定 疫病の流行

10世紀初頭は律令制からの脱却、土地制度をめぐる変革の時代である。律令制は公民制と官僚制によって支えられてきたが、9世紀後半以後、公民の浮浪・逃亡が増大し、籍帳自体のシステムが瓦解し、地方行政の麻痺は深刻化する。土地を離れた公民は有力富豪層に囲い込まれ、荒田開発が有力農民と弱小の農民（あるいは土人・浪人）による新たな上下関係の中で進められていく。公民制の崩壊は調庸制の変質、財政破綻とともに進んだ。官僚制は「天皇・太政官—国郡司—公民」という律令体制から、「院宮王家・諸司—富豪層—非公民」という「初期権門体制」へと移行していったと考えられている。該期の様相は、まさに古代国家の転換期にあたる。901年右大臣菅原道真は左遷され、左大臣藤原時平が政権を掌握する。927年には「延喜式」が完成し神社が規定される。905年に『古今和歌集』撰進、土佐日記、『竹取物語』、『伊勢物語』、『日本霊異記』なる。いわゆる「国風文化」の時代が開幕。902年には延喜の荘園整理令で新立荘園を禁止し、班田を12年に1度とし、事実上、最後の班田となる。この頃より額納から穀納へ転換が図られる。悪銭での取引を禁止し、銭での流通促進を図った破銭法の施行。914年三善清行は末法の世（世俗での農民の落髪・有力農民の官職売買など）を意識し、律令制下の国政改革を「意見封事十二箇条」として奉呈する。907年唐の滅亡。936年高麗が朝鮮半島を統一する。938年空也は「阿彌陀号」を唱え座禅練行、「市聖」と呼ばれる。この頃、京周辺で羽織群飛、大風暴雨、天候不順が続き、群盗が多発したという。927年頃、延喜式と妙法從に信濃の記事が登場する。945年志多良神の入京（石清水八幡宮）。平将門が935年に常陸掾国香を殺害、938年には信濃国分寺周辺で戦闘を行い、翌年上野国府にて「新皇」を名乗る。世に言う「坂東の大乱・天下の大騒動」が起こる。940年には藤原純友による天慶の乱が勃発する。平貞盛・藤原秀郷が将門を、小野好古・源経基が純友を討伐し鎮圧。軍記物『将門記』作られ、『後撰和歌集』の選集が始まる。

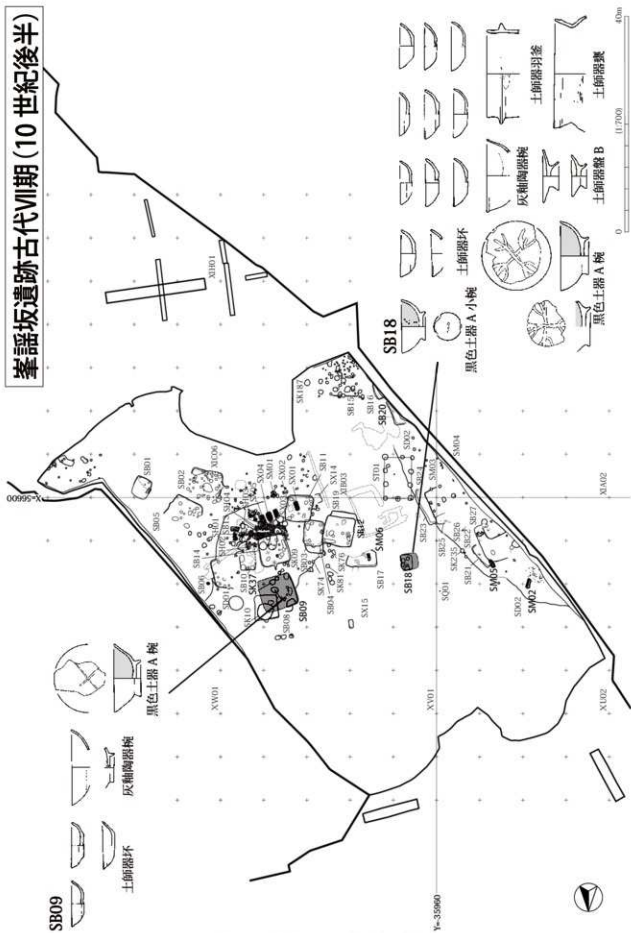
（2）10世紀後半（古代Ⅶ期）の「さらしな」

①「さらしな」の遺跡

【ポイント：古代Ⅶ期10世紀後半頃、土師器環の2法量分化と羽釜の登場段階】

平安時代前期も10世紀中頃に至ると、貯蔵具に大きな画期が訪れる。須臾器甕類や壺そして瓶類がごとごとく消滅していく。灰陶陶器も同様に瓶類や壺が消滅に向かうが、広口瓶と短頸の壺のみが、後半期まで継続していく。古墳時代の終末より古代にかけて継続してきた煮沸具が一期に解体・消滅する。

峯読坂遺跡（第26図）では10世紀後半以降に位置づけられる住居跡2軒と土坑2基（SK37・SK78）がある。前時期の9世紀終末から10世紀初頭の集落構成も、調査対象地内に限れば2軒のみの確認であったことから、10世紀代における集落構造の一端を示すものと考えたい。また調査地の西側に土壌墓2基を確認し、遺構の重複関係からSM05はⅤ期以降、SM06はⅥ期以降と判断した。人骨の炭素年代測定の結果は、SM05が1156±40年（12世紀）、SM06が1536±30年（16世紀）の値を示し推定時期はかなり新しい。古代Ⅶ期以降に属する集落遺跡の墓地として、当地が使用されたものなのか、今回の発



第26図 峯謡坂遺跡の古代Ⅶ期の集落

掘区内だけでは結論づけられない。古代更級郡内には、10世紀に至って集落規模が拡大していく坂城町の上下五明条里水田址や長野市南宮遺跡があり、地域社会の歴史的動態は、それら遺跡の調査成果をひいて検討を進めていく必要がある。今回の事業対象地域から外れるので、これについては別の機会に検討したいと考える。

社宮司遺跡は、前述した古代Ⅵ期から該期まで、10世紀代に位置づけられる明確な遺構は厳密には決定できない。古代Ⅴ期、9世紀終末から10世紀初頭頃で集落が断絶した可能性もある。実際には発掘で検出した遺構間に重複関係があり、少なくとも古代Ⅵ期以後と推定できる建物跡を幾つか挙げることで、それらを新旧に序列して相対的な年代推移を当てはめている。「社宮司Ⅴ期（10世紀終末）」とした遺構がそれに該当する。総柱式の高床式建物跡が東西方向に2棟（ST50・ST51）併設して存在する。このほか、井戸跡と観られる土坑が2基（SK590・SK454）、さらには井泉状の遺構と見られる土坑（SK870）も1基あるが、検出状況が悪く、出土遺物にも混在が観られ不確定な部分が多い。しかしながら、これらの遺構は南区（25m四方）の私的空間内に築かれ、整然とした建物の配置は有力者の屋敷地を彷彿とさせるに十分なものがある。

さらには該期の終末（994±30年AD）と考えられる木棺墓が1基（SK740）あり、屋敷地内の北端で検出されていることから、想定した高床式建物跡との関連は濃厚である。検出状況から判断して、いわゆる「屋敷墓」と判断してよいと考えられる。墓への副葬品は、木製の刀形（大と小）各1本と弓形1本の形代のみである。木棺の作りは粗雑で、武器としての刀と弓を形代に変えて副葬している点に特徴がある。さらには棺材が遺骸ごと横転して埋められ、その結果なのであろうか、北枕そして西向き姿勢をとっている。臨終の仏教的作法を具現化した埋葬時の意識的な所作と考えたいが、どうであろう。あるいは何らかの要因による再埋葬（悪意ある墓荒らしではない）の結果とも解釈できる。本跡の性格究明は、「屋敷墓」の成立はもとより、新興の有力者層、さらには中世的社会の成立を検討できる極めて重要な考古学的事例と考えられる。これについては、次期（古代Ⅶ期）にて少し詳しく扱うこととする。

②歴史的な背景（国政：荘園制と「権門体制」）

キーワード：安和の変 摂関政治と荘園制 負名体制 農民の抵抗 疫病

958年最後の皇朝十二銭「乾元大宝」の鋳造が行われる。960年宋（北宋）の建国。藤原実朝、関白となり、源高明が左大臣となる。969年安和の変。日本略記は「ほとんど天慶の大乱の如し」と説明する。974年藤原道綱の母『蜻蛉日記』を記す。985年恵心僧都源信が『往生要集』を著す。986年枯買法を定める。994年疱瘡の大流行。10世紀半ば以後、律令制の脱却から摂関政治、院政へと国政は向かう。公民制の崩壊と官僚制の変質は、地方律令制下にあった地方氏族、郡司あるいは郡司子弟の階層に大きな影響を与えた。彼らは受領あるいは院宮王臣家と結託して、地域社会に継続して根ざした。ここに公田と荘園の対立、荘園制の基礎があると考えられている。国司四等官の上級者が、裁量権を拡大し、「負名体制」を採用して、次第に国の権力を掌握していった結果が受領と考えられている。やがて「国令」に基づく受領の横行を田堵百姓らが訴える事件が続出する。988年「尾張国郡司百姓等解文」では三十一箇条にわたり訴え、翌年藤原元命は罷免される。994年には九州より疫病がはやり、全国に蔓延、1000年前後にも疫病が多発。藤原道長、998年納経発願し金峯山の神社に金剛製の経筒を奉納する。

（3）11世紀（古代Ⅶ期）の「さらしな」

①「さらしな」の遺跡

【ポイント：古代Ⅶ期11世紀代、土師器の坏や椀類、羽釜のみが存続し、黒色土器は椀のみとなり、煮沸具や貯蔵具は消滅していく段階】

煮沸具は羽釜のみとなり、貯蔵具の大半は消失し、灰釉や緑釉陶器の瓶や壺類が消えていく。食膳具は

土師器が盛行し、黒色土器は椀類のみが存続する。

社宮司遺跡には、該期に位置づけることのできる明確な遺構はない。10世紀終末（古代Ⅶ期）に比定した高床式建物跡（ST50・ST51）の後に、床面積90㎡ほどにもなる建物跡（ST52）を想定したが、出土遺物に恵まれず時期決定の根拠に欠ける。あくまでも遺構の新旧関係から推定した相対的な位置付けに過ぎない。同様に井泉状の遺構と見られる土坑（SK696）や井戸跡と考えられる土坑（SK3560）1基も該期に推定されるものの叙述するまでには至らない。「社宮司Ⅵ期」が該当する。南区で展開した私的空間内での改築を想定し、前時期に位置付けた木棺墓（SK740）に再埋葬（改葬）を仮定すれば、副葬品の弓形木製品（1005年～1015年AD）または棺材（底板1040年～1150年AD・天井板1045年～1155年AD）の年代値との整合性は取れるか。木棺墓が11世紀に改葬された場合、課題となるのが六角木幢との関連性である。六角木幢の遺立は、笠（ケンボナシ1020年AD）や幢身（エノキ1025年・1035年AD）の炭素年代値から11世紀前半を推定するが、鍬手や風鐸、風招に製作の粗雑（作り替え）なものがあり、同様に作り替えの疑われる宝珠（クリ材）の年代値（1070年から1160年）を参考にすると、11世紀から12世紀までの間で捉えるべきものである。いずれにせよ、六角木幢遺立と木棺墓（改葬）との時間的な近接性は濃厚である。報告では木棺墓の被葬者は有力農民（富豪層）等、屋敷の初代当主であり、木幢は当主の法要に第二世代が建てた供養塔で、それがやがて年忌法要をへて、民間の信仰対象物へと変わっていったと結論付ける。屋敷の初代とは、古代Ⅶ期の10世紀終末から11世紀初頭に位置づけられる屋敷地の主であり、第二世代とは、古代Ⅷ期の11世紀前半に位置づけられる屋敷地の主を指す。年忌法要明けは、社宮司遺跡にて「社宮司Ⅵ期（11世紀前半）」とした建物跡が終焉を向かえる時期をあて、屋敷の放棄と六角木幢の機能転換が、ほぼ期を同じくした事象と考えられている。

ところで木棺墓の被葬者は、自ら武装した軍事的側面の強い人物だったのだろうか。まだ地方では定着の少ない木棺墓に埋葬されたこともさることながら、九体阿弥陀の描かれた木幢（笠塔婆）を遺立している点などを積極的に評価すれば、屋敷の主人と中央（摂関家あるいは摂関家とつながりのある貴族層）との関係は強かったものと考えられる。藤原道長は1020年無量寿院に九体の阿弥陀如来像を安置し、頼道は1053年宇治平等院鳳凰堂を建立する。国衛の受領（郎従等）と結びつき、中央への進出を謀った人物なのか、むしろ受領一族や郎従一族そのものを考えてみるべきなのかも知れない。残念ながら考古学的証拠は何も得られていない。1069年延久の荘園整理令で設置された記録荘園券契所の調査で、1072年石清水八幡宮領34の内の13の荘園が停止となったが、そこに信濃国小谷庄の記録はない。この時点ではまだ当該地域の耕田は八幡宮領とはなっていないと判断できる。延久の荘園整理は、藤原摂関家に大きな影響を与えた。石清水家文書によれば、1158年12月の宮宣旨に信濃国小谷庄が初見でき、12世紀半ばまでには小谷庄荘園が成立していたと考えられる。おそらくは白河院政期（1086年以降）になって神社領として新立された荘園なのであろう。つまり木棺墓の被葬者は荘園成立前夜の更級郡公領に係る人物であり、その出自には在地性あるいは外来性の2面を考える必要もあるが、郡司層相当の人物であり、俗に「田堵」あるいは「大名田堵」などと呼ばれた有力者層よりも上位の階級を考えるべきかも知れない。11世紀国衛領の減少は極限に達し、このころ、「別名」や「保」が成立していたとされる。別名は、荒廃田の開発を国衛が許可し、生産権を与え、納税義務を賦課させる仕組みである。社宮司遺跡の周辺地に、それが成立し、名や保内の農民層を支配する仕組みが出来上がっていた可能性は十分あるが、荘園整理の進む中で、いわば摂関政治の衰退とともに社宮司遺跡で屋敷地が断絶する意味を考えておく必要がある。

荘園整理令の20年余り後には、更級郡小谷郷域にある開発領地は石清水八幡宮（領家）に奇進され荘園となる。既知のように武水別神社は八幡社でもある。その成立は京都岩清水への八幡神の勧請後、差ほど時期を経ない9世紀の半ば、從二位に叙せられた頃と考えられる。更級郡家が古来より密接に関わりの

あった武水別神社へ、その本家筋ともなった京都石清水八幡宮へ領地を寄進することは、それほど不思議なことではないのかもしれない。郡衙の解体さらには摂関勢力の衰退とともに田地を寄進し、摂関家から八幡宮への転換が、自らが開拓した領地の保護を求め、あるいは自らの地盤を保持していくための手段であったとも考えられる。その結果が小谷庄荘園の成立なのであろうか。荘園の成立以後、領地寄進の立役者は、開発領主として地域に根ざし、君臨していたと考えたい。荘園を直接管理する領主(荘官)、預所または預所代の屋敷地は、おそらくは武水別神社(八幡宮)の神社地内に築かれていたと推定したい。

東條遺跡には残念ながら該期の様子を示す遺構と遺物がない。しかし武水別神社の存在と小谷庄荘園の成立は、当該の遺跡地周辺に埋もれた遺跡の存在を暗示する。

②歴史的な背景(国政;摂関政治の盛行と衰退、院政の開始)

キーワード:摂関政治 末法の世 院政開始 荘園整理令と記録荘園券契所設置 北面の武士

一条天皇の治世、左大臣藤原道長は1016年摂政となる。『御堂閏白記』。1001年『枕草子』、1004年『紫式部日記』なる。1006年興福寺僧による強訴が起こる。1008年凶作により信濃国の正税出挙数を3年間減少することを許可する。この頃より『源氏物語』。1017年藤原頼通が摂政、1019年閏白となる。この年に刀伊の入寇がある。1020年道長が無量寿院(法成寺)を建立し、9体の阿弥陀如来像を安置する。1028年平忠常の乱、源頼信による鎮圧。1031年頃、『上野国交代夷録帳』になる。1051年～1062年前九年の役。1052年末法到来(源信は1017年と考えていた)、浄土信仰が盛んになる。1053年頼道、宇治平等院鳳凰堂を建立。1058年平安京内裏焼失。菅原孝標の女、『更級日記』。11世紀前半、「夷をもつて夷を征する」政策が始まり、東国支配の拡充が進む。1063年鶴岡八幡宮の建立。1068年後三条天皇即位、大江匡房の登用。1069年延久の荘園整理令で記録荘園券契所を設置する。1083年後三年の役が始まり、源義家が清原武衡を討伐し平定。1072年に即位した白河天皇は、1086年讓位し院制(親政期)が始まる。院政期には院の財源確保のために荘園を集め、寺社や神社の名で新立するようになる。荘園の開発と寄進により、都と地方を結ぶ交通が開け、各地の交通の要所に「津や宿・市」が作られていく。1087年頃より藤原宗忠が『中右記』を、源師時が『長秋記』を記す。1090年頃北面の武士を設置。1099年閏白師道が死亡し、摂関家の空白。白河上皇の力が増強される。

5. 中世的社会の形成

(1) 12世紀(中世I期)の「さらしな」

①「さらしな」の遺跡

【ポイント:中世I期12世紀、古代型の食器は12世紀前半でほぼ消滅し、輸入陶磁器の碗に常滑・珠洲の甕や壺が中心を占め、中世型の食器への過渡的な段階】

食膳具はロクロ土師器や足高台が消滅していき、手づね、柱状高台に変わる。煮沸具は羽釜から把手付羽釜へ主体が移る。灰陶陶器(大原10号窯)は山茶碗へ移行し、白磁、龍泉窯青磁が登場する。

社宮司遺跡には、該期に位置づけることのできる明確な遺構はないが、調査地内の遺構の新旧関係から該期以降と推定される東西・南北方向の溝跡がある。溝跡の性格は判断されていないが、屋地に係る施設の可能性もある。ただし溝以外の遺構は発見されておらず、東西流路(SD03)の埋設土層から農具の「コロバシ」(炭素年代測定の結果から11世紀後半から12世紀を推定)が出土した点を評価し、耕作地の可能性が指摘されている。12世紀半ば頃までには小谷庄荘園が成立してくるので、社宮司遺跡を含めた周辺の耕作地は、該期に荘園化した可能性もある。六角木輪は1052年の末法到来前後、すなわち11世紀前半頃に造立され、宝珠や垂飾の作り替え、さらには炭素年代測定の結果から12世紀前後までの存立が

考えられている。まさに小谷庄荘園の成立期にあたり、社宮遺跡の屋敷地に築かれた墓と係る建造物であったにしても、屋敷の廃絶とともに廃棄されずに、その後も存立したのと思われる。調査報告書の想定では、木輪の用途が変わり、田地に立つ庶民の信仰対象物へと変化したことを仮定している。『吾妻鏡』には、1189年に奥六部の覇者、藤原清衡が白河から外浜まで、金色の阿弥陀如来を描いた町石卒塔婆を造立したとの記事がある。善光寺式の阿弥陀三尊像が各地で製作され始めるのは1195年以降のことである。阿弥陀如来の描かれた六角木輪、12世紀には地域・民衆と深く関わっていたものと考えたい。木輪の最終的な姿は、長野市松代町に現在もなお立つ石造笠塔婆（鎌倉時代作）と同じ状況ではなかったかと考える。その歴史的、今日的評価こそが、木輪の終焉を考えるひとつのヒントとなろう。

東條遺跡には残念ながら該期のもとの確実に判断できる遺構はない。おそらくは13世紀の建物跡群の設営時期がどこまで遡りうるかということに係ると思われる。武水別神社の存在と小谷庄荘園の成立は、本遺跡地周辺に、まだ埋もれた遺跡のあることを示唆している。荘園の発達による交通網の整備は、各地に津や宿、市を形成する。市はもともと河原の市屋で品物が売買された形態である。更級川を挟んで「西川原」の地籍名が残り、ことに県道横捨停車場線以北から更級川までの調査地は「八日市場」の地籍名があり、武水別神社門前近傍における市の有力候補地であったが、残念ながら現代の攪乱を受けており発掘調査では遺構が確認できなかった。「八日市場」地籍名は近世以降とされるが、「八日市場」から「西川原」一帯の河原地に中世の定期市の開かれた可能性は十分ある。今後の調査に期待したい。

②信濃国の動向

キーワード：鎌倉幕府の成立 木曾義仲 善光寺 信濃守護（比企氏） 信濃武士（村上氏・村山氏・栗田氏・笠原氏・中野氏ほか）

笠原頼直が村山義直を襲撃、1180年木曾義仲が挙兵する。義仲、麻績御厨、会田御厨を襲撃。平氏方の笠原頼直が源氏方の村山義直・栗田範覚と市原（長野市市村か？）にて戦う。翌年義仲は横田河原の戦いで越後平氏（城資職）を破り、1183年平維盛に義仲軍は俱利伽羅峠で大勝する。その後、京都にて後白河法皇を幽閉し征夷大將軍となる。1184年義仲は源頼朝に追われ近江栗津で戦死する。鎌倉幕府の有力な御家人に更級郡の村上氏がある。村上氏は1184年頃に幕府の御家人となり、以後頼朝の側近として活躍したとされる。1190年村上経業と頼時は、頼朝に伴って石清水八幡宮に参詣。1191年の幕府の大火で村上邸宅も類焼したとされる。1192年（建久2年）村上経業は、後白河法皇より中務権大輔に任じられている。1179（治承3年）善光寺が焼失。頼朝は信濃国目代や御家人に勸上人に協力して善光寺の復興に努めるよう厳命。竣工期は定かではないが、1196年に頼朝が参詣したとの記録から、それまでには完成したものと考えられる。その時、頼朝に随行したのが小笠原長清・村山義直・望月重隆・海野幸氏・村上義国である。1199年（正治元年）に頼朝が死去すると、村上氏の勢力は次第に後退していく。頼朝の死後、2代頼家は呪詛衆を5人おいて独裁政治を進めたが、その中に高井郡出身の中野五郎の名がある。また5人衆の比企三郎と比企弥三郎は、信濃守護となった比企能員の子である。

③歴史的な背景（国政・院政と武士の台頭・源平合戦）

キーワード：院政 大飢饉 念仏 保元・平治の乱 平氏台頭と滅亡 源氏の台頭 荘園公領制

南部・北嶺（興福寺・延暦寺）の悪僧が京にたびたび出沒する。強訴の多発。京武者や検非違使が活躍。1106年京の大火、田楽が流行する。1108年源義親の追討宣旨が因幡守平正盛（伊勢平氏）に与えられ追討、政治の舞台は河内源氏から伊勢平氏へと移る。為義以後、源氏の内紛状況は続き、1155年源義賢は源義平の手により秩父で滅ぼされる。摂関政治の衰退、藤原忠実の失墜。1113年「京中騒動」が起こる。1113年（長承3年）と1135～41（保延年間）に大飢饉が起こる。1117年京の大火。浄土経の普及。

法然・栄西・重源の活躍。『往生拾因』にて専修称名念仏を永観が説く。1124年良忍の「融通念仏」。一人の念仏と衆人の念仏が融合する必要があると説く。この頃、平泉中尊寺金色堂が建立される。1129年鳥羽上皇が即位。1156年保元の乱、武力を用いての本格的な政権争いの開始。平氏は播磨(清盛)・安芸(経盛)・常陸(頼盛)・淡路(教盛)の4カ国を授かる。平氏勢力の増大。1159年平治の乱。平氏の治業国は全国の1/6程度にまで増大。清盛は平家一門の繁栄を願い1164年厳島神社に法華経32巻を納める(『平家納経』)。瀬戸内海沿岸の道を整備。1177年京の大火。鹿ヶ谷の事件が起こり、西光は斬首。1179年善光寺焼失(1187年頼朝が再興を命ずる)。この頃『梁塵秘抄』なる。1180年高倉天皇退位し、安徳天皇即位。以仁王の乱失敗に終わる。平氏の南都焼き討ち。源頼朝追討の宣旨。石橋山の戦い。1180年木曾義仲の挙兵。1183年平維盛に俱利伽羅峠で大勝するが、翌年に近江粟津で戦死。1182年頃、養和の飢饉。源頼朝が公文所・問注所を設置。1185年平家、屋島にて大敗、壇ノ浦にて滅亡。源頼朝は、侍所(和田義盛が別当)、公文所、問注所を設置し、1185年諸国に守護(警備検察・大番役)を、公領・荘園に地頭(土地の管理・年貢徴収・検断)を置いて反別五升の兵糧米を貸す。北陸そして信濃支配の目的で比企一族(能員)を信濃守護・目代とする。鎌倉御家人(頼朝の下文により成立・所領を安堵される)の中心は、「大名」であり東国の有力豪族たちであった。幕府の許可なく、御家人の任官を禁止。1189年奥州合戦。1192年頼朝、征夷大将軍となる。1195年善光寺式の阿弥陀三尊像、各地で製作が始まる。1198年『選択本願念仏集』を法然が著す。1199年頼朝逝去。源頼朝が2代将軍となり13人合議制始まる。

6. 中世社会の成立

(1) 13世紀(中世Ⅱ期)の「さらしな」

①「さらしな」の遺跡

【ポイント: 中世Ⅱ期 13世紀, 在地生産と観られる食器は消滅していき、輸入陶磁器の碗や山茶碗、須惠器系の播鉢、古瀬戸の壺やこね鉢などが中心を占め、中世型への過渡期が終わる段階】

食膳具はロクロや手づくねによる土師器の皿や山茶碗が残り、こね鉢や播鉢などが登場する。把手付羽釜は消失していく。白磁、龍泉窯青磁の碗・皿類は引き続き使用される。

東條遺跡(第27図)では、中世第2検出面が該期もしくは次期の14世紀に該当すると考えられる。東條遺跡(中世面)の開始期にあたる。13世紀の中頃、幕府は鎌倉に屋地を定め、町屋などの散在を禁じた。おそらく武水別神社門前の開発は、この頃に進展したものと推定される。狭捨山麓の一本松峠より武水別神社までの道路(街道)を整備し、道路沿線に仮設的な掘立柱建物建設、不定期な市が開かれたと考えたい。中世第2検出面で捉えた柱穴群の中に、13世紀でも古い段階の掘立柱建物跡を予想したいが、調査結果として決定できる資料に欠ける。調査区内の南地区と北地区では地形上の高低差があり、北地区が-2mから-5mも低い。低湿地とまではいかないまでも、湿地性の強い北地区に排水の地業が行われた可能性はある。市の痕跡は、前述のように攪乱のため確認できていないが、更級川右岸域の「八日市場」あるいは「内西河原」地籍一帯に存在したものと考えたい。1253年の撫民の法令は百姓を保護した。しかし諸国を浮浪・遍歴する輩(「道々の輩」あるいは「遊手浮食の輩」などと呼ばれる)が、神社門前のいわゆる「仏神の地」・「無縁の地」に寄宿し、交易活動を行っていた時代でもある。東條遺跡に町屋が設営され、「遊手浮食の輩」が寄宿し始める時期も、該期もしくは14世紀頃であったと推定したい。遺構の連続性から、詳細は該期を含め次期にて扱う。

②信濃国の動向

キーワード: 信濃守護(薩摩氏・北条氏) 信濃武士(村上氏・泉氏・小坂氏・仁科氏など)
 銭の流通(宗銭の流入) 交通の発達(街道整備) 都市と農村 踊念仏(一遍)

1203年比企能員が北条氏に討たれる。比企氏とともに惟宗(島津)忠久も失脚。1213年信濃国の住人、泉小次郎親平は北条義時の打倒を企て失敗に終わる。1221年仁科次郎盛遠は後鳥羽上皇より西面の武士に取り立てられるが、幕府の許可(1185年以降)を得ずに任官したことにより所領を没収される。島津忠久は承久の乱の勲功により、再び信濃国太田庄の地頭となる。乱後、幕府は薩摩氏を信濃国坂木の地頭職(新補地頭)に任じ、1333年(建武2年)村上信貞により滅ぼされるまでの間、地頭職を務める。屋代郷は屋代仲盛(村上経業の子)以後に地頭職、船山郷は北条基時が1303年頃より地頭職を務める。船山郷に関しては地頭の一部を更級郡小坂の諏訪(小坂)時光も受け持つ。信濃国守護は北条(名越)朝勝が務め、信濃国府近くに留守所が置かれ、目代が駐在したと思われる。13世紀末頃にはすでに守護所が埴科郡船山郷に存在した可能性がある。交通網の掌握は国政の要件であり、街道のみならず千曲川水運の整備を行い、年貢・官物をはじめとする物資の運送が進められたと考えられる。また12世紀後半、国内には宋銭が大量に輸入されて「私鑄銭」の流通を禁じる一方、13世紀には銭が市や宿で使用され、田畠・家地などの売買、年貢の納入などが進展していったとされる。この頃の東国武士は、荒野を開拓して館(屋敷)を構え、「開発領主」として幕府より「一所懸命の地」を安堵されていた。1265年幕府は鎌倉に屋敷を定め、散在などの町屋を禁じる。この頃に町屋の整備が図られる。農村は自給自足的な生活を基盤とし、いまだ農工商の分業は未発達であった。1279年一遍は信濃国伴野庄で踊念仏を始める。1280年弘安の役。蒙古襲来以後、異国警固を進めると守護が国衛の機能を吸収していくようになる。1282年北条時宗が円覚寺を建立。1285年霜月騒動の際、佐久の伴野氏が失脚する。1296年には鶴岡八幡宮が焼失。1299年『一遍上人絵伝』が完成する。

③歴史的な背景(国政;幕府の成立と院政、貨幣経済の発達)

キーワード:幕府政治と院政開始 御家人 守護・地頭 執権政治(北条氏の台頭) 武士団の形成
貨幣経済 土地売買 幕府法の成立 撫民の法 宗教活動の活発化 承久の乱 蒙古襲来
南宋 得宗制

1200年梶原景時の追放。1203年比企能員の乱にて比企氏滅亡。実朝が将軍となり、北条時政が執権、頼家は修善寺に幽閉後、1204年時政により殺害される。1205年北条時政が富山重忠を討ち、他氏の排斥が進む。1194年栄西の「達磨宗」、1207年法然の「念仏宗」を停止する。1205年興福寺奉持で法然は流罪、親鸞も配流となる。親鸞、東国での布教活動を開始する。1203年運慶・快慶の東大寺南大門の仁王像。1205年藤原定家『新古今和歌集』選進。1211年頃より、幕府は諸国に「大田文」を作成させる。1212年鴨長明『方丈記』なる。1213年泉小次郎親平の乱。和田合戦で和田義盛敗死。1219年源実朝は頼家の次男(公暁)に暗殺される。執権は評定の合議を取り仕切る役目として成長。1225年評定所を設置。西国の有力武士を院(後鳥羽上皇)が西面の武士として組織化。1218・19年京都で大火が起こる。慈円の『愚管抄』。1219年鎌倉の大火。1221年承久の乱。後鳥羽上皇と北条義時の戦い。1224年頃、親鸞『教行信証』を著す。1231年寛喜の大飢饉。1233年には京都で猿楽が流行る。1253年撫民の法、1254年質人の法にて百姓を保護(抵抗権と居住権)する。1232年御成敗式目51カ条成る。「武家の習い、民間の法」を重視。1244年道元が永平寺を開く。1246年善光寺の供養。1249年引付衆の設置。北条時頼が専制政治を開始。時頼、宋より蘭溪道隆を招き、鎌倉に建長寺を築く。日蓮の布教活動再開。1256年頃、鎌倉で暴風や地震、諸国でも発生。1259年正嘉の飢饉・疫病流行る。1264年時宗が将軍となり、正村が執権となり連署。越訴機関を新設し、金沢実時、安達泰盛が引付頭人となる。1260年日蓮は時頼に『立正安国論』を献上。1271年日蓮、佐渡に配流。1269年モンゴル・高麗の使、対馬に至る。1272年二月騒動にて名越時章と北条義時が討たれ、評定衆の筆頭一門が排除される。同年後醍醐法皇死去、後深草天

皇(持明院統)と亀山天皇(大覚寺統)に皇統の分裂が始まる。1275年紀伊国阿低河荘百姓らの言上書。1273年一向が宇佐八幡宮で48夜の踊念仏を、1279年一遍が信濃国伴野で踊念仏を始める。蒙古襲来。1274年文永の役。元史は蒙古軍の撤退を神風ではなく「官軍整わず矢つきる」とする。異国警固番役の開始。1280年弘安の役。1282年北条時宗が円覚寺を建立する。得宗による惣領制支配。安達泰盛「弘安の改革」。1285年霜月騒動。安達泰盛一族、平頼綱(得宗御内人)に滅ぼされ、関東の御家人の多くが滅ぶ。北条氏、28ヶ国の守護を独占する。1293年『蒙古襲来絵詞』。1296年鶴岡八幡宮焼失。1297年永仁の徳政令。1299年『一遍上人絵伝』完成する。

(2) 14世紀(中世Ⅲ期)の「さらしな」

①「さらしな」の遺跡

【ポイント: 中世Ⅲ期14世紀、在地産の食器の消滅に加え、山茶碗が消失、輸入陶磁器の碗や珠洲の摺鉢、古瀬戸の碗や皿などが中心を占める段階】

山茶碗は消滅し、白磁、青磁(龍泉窯)の碗・皿類、古瀬戸の碗・皿類などが盛行する。

東條遺跡(第27図)では、中世第2検出面が前時期を含めて該当する。武水別神社の門前は、13世紀頃より道路(一本松街道の前身)の整備とともに、次第に開発されていったと推定され、ことに該期では河原の市、さらにその発展した常設的そして定期的な市が開設されていた可能性が高い。加えて「遊手浮食の輩」が道路沿いに寄宿し、売買・交易活動を進めたことも十分予想される。発掘調査地内の南地区と北地区ともに石積み井戸を単位として掘立柱建物が設置されていたと考えられるが、調査所見は建物跡の推定に至らず、集落構造には積極的に踏み込めていない。あくまで想定域を出ないが、一案として私見を提示しておきたい。南地区のXVII B区及びXVII C区に確認された柱穴群を、石組井戸跡(SK2744・SK2745・SK1886)を単位として造られた、ほぼ南北に軸を持つ長屋的な建物跡(STaを想定)の柱穴と考えてみたい。井戸跡1つに対して個別の間仕切り空間を持つ建物構造と捉えてはどうだろうか。門前に向けての道路にほぼ平行する建物群とみるわけである。これの東側は空地になっており、広場ないしは畠跡が存在していた可能性があり、さらにその東には、井戸跡(SK2686)を単位とした建物跡が2棟(南北棟・東西棟)存在した可能性がある。南北棟にSTc、東西棟にSTbを想定したい。これには農民層(いわゆる「地百姓」?)の建物跡を推定できるのか。北地区のXVII C区には、井戸跡(SK844・SK1111・SK1123・SK1400)を単位として建物跡が設置されていた可能性がある。ことに井戸跡(SK1123・SK1400)は方形板組・曲げ物を伴う本遺跡の中では特殊な構造であり、これの北側にある柱穴の配列も庇付きの建物構造(STeを想定)を推定することのできる要素を持っている。またこれの北側には木桁墓が1基確認されていることも見逃せない要素である。館ないしは御堂のような特殊な建物跡を考えてはどうだろうか。さらに北側に確認されたSH11やSK1299などには石積み墓跡等の機能を追究してみてもよいのではないだろうか。14世紀前半、南北朝期までには、本遺跡の第2検出面の建物跡群は建設されていたと考えたい。武水別神社東方の千曲川渡河点の対岸には、守護所の置かれた埴科郡船山郷がある。筑摩・麻績方面より武水別神社門前を通じた道が、千曲川より守護所へ向かう経路として使われていた可能性は十分予想できる。想像遅くすれば、この道沿いの山腹に発達した棚田の起源が、「遊手浮食の輩」などに給された「給而田畠」のような田地であるようにも思える。該期の生産経済は、農村がいまだ自給自足的な生活基盤にあり、農工商の職業分離は未分化であったと捉えられている。その平面、すべては「土倉」が現れ、河内交野五座商人(石清水神人の資格)の閉籠事件など、守護に反して生産・流通機構の自主的な運営を守る主張が始まったなどとされている。非農業の民である供御人や神人なども広域経済活動を担い、一部には「悪党」となって統幕(南朝)に参画したともいわれている。二毛作の開始や農業経営の集約化が進み、商品生産の請負など、生産機構が複雑化していく方向が醸成された時代でもある。



第27図 東條遺跡中世第2検出面の集落

②信濃国の動向

キーワード：守護所（船山郷・平芝） 守護（小笠原氏・諏訪氏・上杉氏・斯波氏）と国人・信濃武士（市河氏・保科氏・四宮氏・諏訪氏・高梨氏） 宗良親王

中世の前半期は、主要な道沿いの要地に「市町」（市場在家・新市・土倉など）が発達したとされる。広島県の草戸千軒町遺跡では、「草市」記術の木簡が出土し、「草市」の存在やその盛行がわかる。輸送は主に陸路（馬借や車借）と海上（舟運）が発達したとされるが、信濃国においては、考古学的資料として、それを裏付けることは今のところできない。船山郷は信濃国守護北条基時が地頭職を務め、地頭の一部として諏訪（小坂）時光もいた。諏訪時光は神氏（更級郡小坂氏）の出とされる。幕府滅亡後、小坂氏は雑訴決断所の一員として東山道を担当する立場となる。この頃の国人（地頭荘官級の武士）は、「讒」（支配所領の地域）を持ち、守護との主従関係により台頭する者もあり、反面、在地の土豪や荘官が「悪党」として成長していく場合もあったとされる。北条氏排斥の進む中、1334年頃には信濃国守護として小笠原貞宗が任命され、船山郷の地頭職を引き継ぐ。この時点ですでに船山郷には守護所が設置されている。足利尊氏・直義は後醍醐天皇に反したとき、東山道沿いでは信濃勢小笠原貞宗・市河孫十郎・村上信貞らが戦勝する。1333年信濃国大法寺三重塔建立。1335年中先代の乱。北条時行（高時の子）が信濃で挙兵し、足利直義を破る。守護小笠原氏と市河氏（高井郡）は、北条側の保科弥三郎（高井郡）、四宮左衛門太郎（更級郡）と、千曲川を挟んで八幡河原・篠井小四宮河原・埴科郡福井河原等で戦う。この後、北条時行を足利尊氏・直義らが追討し時行は敗走。この時、諏訪頼重が自害する。信濃の北条残党（坂木地頭であった薩摩氏ほか）は、守護小笠原氏により敗退。さらに1336年清滝城の戦い（保科氏・閨屋氏の可能性が高い）、牧城（香坂氏）にて村上信貞による追撃が進む。足利尊氏は光明天皇を京都（北朝）で擁立し、年号は建武のまま、後醍醐天皇は吉野（金峯山）に逃れ、年号を延元として吉野朝（南朝）が始まる。信濃武士は、小笠原貞宗・村上信貞が北朝方となる。1313年善光寺焼失。1316年京に「土倉」の記述がある。1342年河内交野五座商人（石清水神人の資格）の閉籠事件が起こる。守護に反し生産・流通機構の自主的な運営を守る主張が始まる。非農業の民である供御人や神人は、広域経済活動を担い、一部は「悪党」となって統幕（南朝）に参画していった。南北朝の内乱期には、惣荘一揆（惣百姓申状）などの訴訟問題が激化する。農民は荘園領主の民として地頭に抵抗、税免除ばかりか領主（代官）の交代も要求した。時には逃散を実行する。この頃には、農業経営の集約化が一段と進み、商品生産の請負など、生産機構が複雑化していく。農民の権利意識や利益の追求が醸成。視応の擾乱起こり、関東管領や奥州管領の戦闘、全国的な内乱状態となる。このころ直義は信濃守護小笠原政長を罷免し、諏訪直頼を守護に任命。直頼は船山守護所に放火するが、翌年、直義が尊氏に敗れると小笠原政長が復職する。その後、上杉朝房（鎌倉公方足利基氏の管領）が守護職となる。信濃国は幕府直轄ではなく、鎌倉公方の管轄にあった。上杉の後に幕府重鎮の斯波義将・義種が守護職となり、現地には二宮氏康が守護代として職務に当たった。幕府は守護所を直属の支配地とし、斯波氏（南朝方につく）により守護所を移転させる。貞治の政変で斯波氏は失脚。1355年宗良親王が信濃諏訪訪と戦う。1374年には吉野へ逃れる。信濃武士、正月の弓始めの射手として活躍する（小笠原・屋代・村上）。1370年信濃国善光寺焼ける。村上・小笠原・高梨氏、善光寺で挙兵。斯波義種と合戦する。村上氏、平芝にて守護所を攻める。この時点では、信濃守護所は水内郡平芝にあり、これより以前に守護所は移転したものと考えられる。善光寺には信濃国府の支庁（後庁）が設置されており、善光寺周辺に守護所を設置したほうが、政治・経済的に有利であったと考えられている。1387年漆田原の戦い。斯波守護・二宮守護代と小笠原長基・高梨朝高・村上頼国・鳥津国忠らの合戦。二宮氏泰（種氏の父）は北陸道から糸魚川に入り、市河頼房（糸魚川周辺）に迎えられ、高梨氏を攻める。善光寺横山

城の戦い。二宮氏泰と村上頼国が対戦し、生仁城の戦いで村上は敗戦する。幕府は守護職を斯波氏より小笠原氏に移すが、信濃国人層の反発を受ける。大塔合戦（仮称「信濃南北戦争」）。信濃国人層（村上満信、平賀・伴野・望月、海野・会田・大草・田沢、高梨、井上の諸氏）と信濃守護（小笠原長秀、片桐、飯田、藤澤、市河の諸氏）の戦い。1398年小笠原長秀（長基の子）が信濃守護となる。1400年小笠原氏は横田城に陣取り、塩崎城、四之宮の戦い、大塔古要害攻防の後、守護小笠原長秀は京都に退散。

③歴史的な背景（国政：南北朝合一と院政の終焉、商業の発達）

キーワード：幕府政治の継承 足利氏台頭 建武新政 御家人制・惣領制の衰退 悪党 半済令
 観応の擾乱 南北朝争乱 荘園制の崩壊と守護国制 商業・交通の発達 日元貿易
 院政の終焉

1308年瀬戸内海に海賊が蜂起。1311年北条貞時没し、高時(9歳)継承するも幕府の空洞化は進行する。1313年善光寺焼失。1317年文保の和談の後、後醍醐天皇が即位、後宇多法皇の院政始まる。1321年正中の変後、日野資朝は佐渡にて殺害される。建長寺船。1325年石山寺縁起なるか。この頃に夢窓疎石活躍、吉田兼好「徒然草」記す。1331年元弘の乱。後醍醐天皇隠岐に配流、日野俊基は相模国にて殺害される。1331年楠木正成が挙兵、足利高氏(33年尊氏と改名)、新田義貞が挙兵する。1333年尊氏が六波羅をおとし、新田義貞が鎌倉を攻略する。北条高時、仲時(探題)、英時(鎮西探題)の敗死。鎌倉幕府の滅亡。後醍醐天皇の建武新制。天皇主導の新政が始まる。戦乱後、護良親王(後醍醐天皇の子)は征夷大將軍に任命、武士への所領問題・恩賞問題がしこりとして残る。1335年中先代の乱。足利尊氏・直義は後醍醐天皇と戦闘、京を追われ九州にて巻き返す。西園寺公宗の謀反。北条時行(高時の子)が信濃で挙兵し足利直義を破る。この時、護良親王は直義により斬殺される。足利尊氏と直義は北条時行を追討。1338年尊氏は征夷大將軍となる。尊氏は光明天皇をたて「建武式目条々」を制定、室町幕府を開く。後醍醐天皇は吉野(金峯山)に逃れ、年号を延元として吉野朝(南朝)が始まる。北畠顕家(鎮守府將軍)の敗死。しかし兄弟の亀裂から1350年観応の擾乱が起こる。関東管領や奥州管領を巻き込み、全国的な内乱状態に入る。足利直義一門は失脚、斯波、細川、畠山氏の台頭。1339年北畠親房『神皇正統記』を著す。1351年足利尊氏は南朝方に帰順し、三種の神器は南朝方へ移る。1360年代貴族・寺社・本所の所領安堵が進む(『御判御教書』)。1368年半済令は、さらに武家領と在地領主領の整備体制化を図る。1369年鎌倉大仏、風で倒壊。1370年善光寺焼ける。このころ世阿弥が活躍。1378年足利義満、花御所・室町殿に移る。1381年洪武帝、日本国王と將軍の非礼を責める。1392年義満は南朝方に和睦。幕府勢力による南朝の解消、南北朝の合一。南朝後龜山天皇より後小松天皇へ神器が戻り、天皇が即位、院政は終わる。幕府は公家を伝奏と称し幕府への官吏化を図り、王朝権力を支配するようになる。將軍義満(北山殿)は1394年太政大臣となり、直後に將軍職を義持に譲り出家。

7. 中世社会の展開

(1) 15世紀(中世IV期)の「さらしな」

①「さらしな」の遺跡

【ポイント：中世IV期15世紀、新たに内耳鍋や火鉢などが登場し、中世型の食器を形成する段階】

内耳鍋や火鉢、風呂・釜などの器種が登場し、白磁、青磁に青花(中国産染付)の碗・皿類が加わる。

東條遺跡(第28図)は中世第1検出面の時期がほぼ該当する。発掘調査地内の南地区と北地区ともに石積み井戸を単位として掘立柱建物が発見される点は、前時期とほぼ同様であるが、掘立柱建物跡に加えて新たに方形の積石穴遺構が造られてくる点に該期の特徴がある。中世第2検出面同様、調査所見には

建物跡の推定がないため、集落構造には深く踏み込めない部分もあるが、やはり一案として推定される遺構群の私見を提示することにした。南地区のXVII B区及びXVII G区に確認された柱穴群が、石組井戸跡(SK1679・SK1678・SK1814)を単位として造られた、南北軸方向の建物跡(STiを想定)の柱穴跡と推定したい。井戸跡1基に明確な1軒を対応できない難点はある。さらに竪穴構造で積み石を壁際に持つ建物跡が新たに登場し、掘立柱建物跡よりもむしろ礎石立建物跡が中心となっている。XVII B区で確認した礎石立建物跡(ST38)などは、井戸跡(SK1679)と対応するのかが否か、さらには方形積石竪穴建物跡(SX11)と一体となる遺構なのか否か、重要な検討事項であるが、残念ながら今回の調査では判断がつかない。方形積石竪穴建物跡、掘立柱建物跡よりも西側(門前の道路推定地)方向に主に構築されている点は、何らかの機能性を示すものなのだろうか。集落の構造は、少なくとも礎石立建物跡と方形積石竪穴建物跡が中心に設営されていると整理できる。

②信濃国の動向

キーワード：大文字一揆 信濃武士(村上氏・倉科氏・市河氏) 幕府料国 小笠原内紛

14世紀南北朝期～15世紀頃は、一般民衆の散在意義が高揚し、土一揆の発生、地縁・惣村組織の発展(結合)とともに、生産力の向上や技術開発、社会的分業が進んだ時代とされる。都市と農村の分化が進展し、商業のみならず、農業と工業が分離されていく。広島県草戸千軒町遺跡では「鍛冶・鋳物氏・塗師」などの手工業者の存在が明確化し、町並みが形成されていたことが発掘調査により確認され、「都市集落」の発達を見ることができる。また中国陶磁器、備前・常滑・瀬戸などの焼き物が数多く出土し、地域間の流通が比較的遠隔地まで及んでいたことが分っている。室町幕府下の支配構造は、守護職の相伝化、在地領主の嫡子相続制、所領の一円化として理解されている。1400年小笠原長秀、信濃守護として入部。村上満信らの大文字一揆により敗北。1401年斯波氏が守護となる。1402年信濃国を幕府料国(守護をおかずに幕府直轄)とする。船山郷は守護領から幕府の料所(將軍領)となり、倉科氏と市河氏が直接運営を預かる。政治の中心は千曲川右岸域にあったものと考えられる。1417年上杉禪秀の乱の後、農民層の分解、惣領制の解体など、東国の社会構造に変質が起こる。1440年結城合戦を契機に、小笠原政康の信濃国統制が進む。更級郡の塩崎城・桑原・四之宮をめぐり、小笠原政康と村上頼清が争う。しかし政康の死後、小笠原家は3つに内紛し、信濃は戦乱状況となる。

③歴史的な背景(国政：幕府政治の展開と海外貿易、守護大名と一揆)

キーワード：室町幕府 守護大名 日明貿易 応仁の乱 徳政一揆と国一揆 惣村組織の発達
農工分離と分業の発達 地域間交易 都市機能の拡充

1394年將軍足利義持の時代となる。1398年三官領・四職。1403年足利義満、明使に「日本国王」の書を託す。翌年明使より「日本国王之」、永楽勘合符を受ける。1407年義満、朝鮮に使を派遣する。1416年上杉禪秀の乱が勃発し、將軍と鎌倉公方の対立が表面化。幕府は越後守護(上杉房方)、駿河守護(今川範政)、信濃守護(小笠原政康)を持氏方に派遣、武蔵守護上杉氏憲(前官領)、足利義詞(義持の弟)方の敗戦となる。この時、上杉氏憲方の東国武士(甲斐・常陸・東北の豪族層)を「京都扶持衆」として軍事的に組織した。後の1438年永享の乱では、上杉憲実方として活躍。1423年義持、義量に將軍職を譲る。2年で病死し、出家していた義円が還俗して義教となる。1428年正長の土一揆を契機に、大徳政一揆(1441年嘉吉の一揆・1457年山城の一揆など)が始まる。民衆の力の増大による年貢減免闘争。義教は評定衆ほかを整備し、幕府組織の建て直しを図る。1432年明との貿易再開。1438年永享の乱が起こり、鎌倉公方足利持氏敗死。1439年上杉憲実、足利学校を再興する。1440年結城合戦。1441年嘉吉の乱により將軍義教の失脚。義教は赤松満祐により殺害される。赤松氏や細川氏など、幕府に反旗する守護層の下国

が起るようになる。1452年足利成氏(持氏の子)、下総国古河(古河公方)に移る。この頃、各地で大雨・洪水が多発。1467年応仁の乱。1485年山城の国一揆、1488年加賀の一向一揆が起る。

8. 中世社会の終焉

(1) 16世紀(中世V期)の「さらしな」

①「さらしな」の遺跡

【ポイント: 中世V期16世紀、内耳鍋と輸入陶磁器の碗や大窯の甕が中心を占める段階】

前段階に登場した火鉢や風呂・釜が衰退し、白磁や青花の碗・皿類が引き続き使用される。珠洲は消滅し、古瀬戸より大窯へと移る。該期の終末には内耳鍋から焙烙へと変化する。

東條遺跡(第28図)は中世第1検出面の時期が該当する。方形の積石竪穴建物跡のSX03とSX04に明瞭な重複関係があり、確実に新旧がある。また出土遺物には内耳鍋も少なからず存在している。しかしながら15世紀代の遺構と時期的な区別が明確にできないため、集落構造に関しては、両時期を合わせ中世IV期にて記述した。

②信濃国の動向

キーワード: 川中島の戦い(武田氏・上杉氏) 信濃武士(屋代氏・桑原氏・塩崎氏・小田切氏・仁科氏など) 守護(小笠原氏)の信濃撤退 検地 信濃武士の移封 信濃支配(武田氏・織田氏・豊臣氏・徳川氏)

16世紀の信濃史は武田氏と上杉氏の勢力争い、いわゆる川中島合戦の時代といっても過言ではない。以下、簡単に経過をまとめる。1553年武田晴信の先方(8つの部隊)が更級郡八幡にて村上・上杉連合軍と最初の戦闘となる。葛尾城の於曾源八郎が戦死。晴信は刈屋城まで退却し、武田軍は青柳城・麻績城・大岡城を守護、篠ノ井布施にて再び上杉軍と対戦する。この時、上杉軍は青柳城へ放火、虚空蔵山城を攻略。武田軍は荒砥城と麻績城に放火し撤退。1542年武田晴信、諏訪頼重を討つ。1543年長窪城の大井光台(貞隆)を破り、望月一族を滅ぼす。志賀城の笠原清繁も敗戦。1545年晴信、高遠城の攻略(今川・北条の援軍)、諏訪頼継の敗戦。1548年上田原の戦いにて村上義清と対戦し大敗。この時、村上氏は諏訪大社下社に放火。塩尻峠の戦い。1550年晴信、林城を攻略し、野々宮の戦いにて小笠原長時大敗する。同年いわゆる「戸石崩」にて村上義清に敗戦。1553年晴信は刈屋原城(太田長門守)を攻略し、虚空蔵山城に放火、猿ヶ馬場峠をへて佐野城(更級郡と筑摩郡を隔てる猿ヶ馬場峠の直下にあり川中島を一望)に入る。桑原氏・塩崎氏、香坂氏・屋代氏等の帰順を受ける。更級郡域の支配なる。長野市綱島付近で武田と上杉の第2回戦闘が起る。1557年晴信は葛山城を攻略。第3回戦闘が起る。晴信は足利義輝の仲裁で影虎と和睦し「信濃守護」に補任される。1558年上杉影虎の上洛、翌年上杉憲政より関東管領職を受ける。1561年(永禄4年)第4回戦闘が起る。この戦いを一般に「川中島の合戦」と呼ぶ。武田信繁、山本勘助の戦死。海津城の築城。上杉政虎(輝虎)の「血染めの感状」。1562年上杉輝虎、更級郡八幡宮にて武田氏・北条氏の撃退と信濃平定を願文する。同年越後に善光寺建立、門前町が形成される。1564年江馬輝盛・三木良頼(飛騨洞城主)の救援のため上杉輝虎が川中島へ出陣するが戦闘に至らず終息。1573年武田信玄(晴信)、下伊那にて死亡。1578年上杉謙信(輝虎)病死する。1582年武田氏滅亡。織田信長、武田の支配領地を国割り、信濃四郡(高井・水内・更級・埴科)を森勝三長可に拝領する。森氏は海津城に入るが、本能寺の変にて上洛。上杉景勝、信濃に侵入し川中島周辺地を平定、旧武田臣下(清水三河守ら)に所領を知行。村上景国を海津城代とし、屋代秀正を副将とした。板屋佐波守光胤に更級郡桑原御料所を宛がい、猿ヶ馬場の龍王城を清野左衛門尉に守らせる。屋代秀正に塩崎・八幡を、村上庄内に坂木を、上杉氏

が知行する。麻績城にて小笠原貞慶と交戦し大勝。1584年秀正、景勝に叛き海津城を退去、徳川家康に服す。この時、城主村上景国は罷免となる。景勝、麻績城・青柳城を攻略し、稲荷山に築城、八幡宮祠官松田民部助、保科豊後守、小田切左馬助を在城とする。さらに仁科盛直に八幡宮領を与え、祭礼等を行わせる。1598年豊臣秀吉、上杉景勝を会津に移封。これに従い信濃武士（特に北信地方に領地を持つ芋川氏・平林氏・島津氏・岩井氏など）も東国へ移る。この時、八幡宮祠官松田（仁科）盛直も会津へ移封となっている。伊勢国より田丸中務大輔直昌が海津城に移り知行。1600年徳川家康、川中島（約14万石）を森忠政に知行させ、忠政は海津城に入る。

③歴史的な背景（国政：戦国大名と織豊政権 封建制の成立 西欧文化流入）

キーワード：戦国大名の台頭（下克上） 領国制の展開 室町幕府滅亡と織豊政権 太閤検地 金貨の
 鑄造 日明貿易 鉄砲とキリスト教伝来 西欧（南蛮）文化の流入

中世社会の大きな転機である応仁の乱は、1477年諸将（畠山氏・土岐氏・大内氏）の帰国により終結を迎える。加賀にて守護富樫政親が一揆にて自害して間もない1495年、北条早雲（伊勢氏）が小田原城を攻める。早雲は家訓21か条を策定し領国の支配を強化していく。今川氏や大内氏、伊達氏や浅井氏等の戦国大名が台頭。1505年選銭令。三浦の乱にて釜山浦を攻略、1536年天文法華の乱。1543年種子島に鉄砲伝来（ポルトガル人）し、1549年鹿児島にキリスト教が伝わる。1558年川中島の合戦（上杉謙信・武田信玄）。1560年桶狭間（今川義元）の戦い。1570年姉川の戦い、1573年室町幕府滅亡（足利義昭の追放）。1575年長篠の戦い。信長は近江に安土城を築き、市・座の整備（楽市楽座）、諸国の関を撤廃する。1582年信長、本能寺にて没。同年豊臣秀吉は山城国にて検地を始める（太閤検地の開始、1590年には全国的な検地）。1583年賤ヶ岳の戦い（柴田勝家）、小牧・長久手の戦いの後、1585年秀吉、関白となる。秀吉は、戦国大名（長宗我部氏・島津氏・北条氏）を抑え、1590年京に入る。1588年刀狩令。1582年ローマ法王に使節派遣（天正遣欧使節）。1592年～1598年文禄・慶長の役に朝鮮出兵。天正年間は大判・小判等の鑄造があり、慶長年間には丁銀等の銀貨鑄造が行われる。1600年関が原の戦い。徳川家康、征夷大將軍となり江戸幕府を開く。1614年大坂冬の陣、1615年大坂夏の陣にて豊臣氏の滅亡。同年武家諸法度、禁中並公家諸法度の制定。徳川政権と幕藩体制の樹立。

引用・参考文献

※本章に記述した歴史的な背景は、主に以下の文献を参考にまとめたものです。

- 1975年 黒田俊雄ほか『岩波講座 日本歴史5 中世1』岩波書店
- 1975年 浅香山木ほか『岩波講座 日本歴史6 中世2』岩波書店
- 1975年 網野善彦ほか『岩波講座 日本歴史7 中世3』岩波書店
- 1975年 石井 進ほか『岩波講座 日本歴史8 中世4』岩波書店
- 1988年 吉田 隆『体系 日本の歴史3 古代国家の歩み』小学館
- 1988年 棚橋光男『体系 日本の歴史4 王朝の社会』小学館
- 1988年 五味文彦『体系 日本の歴史5 鎌倉と京』小学館
- 1992年 鎌倉能之編『律令国家の展開過程』
- 2002年 佐藤 信編『日本の時代史4 律令国家と天平文化』吉川弘文館
- 2002年 吉川真司編『日本の時代史5 平安京』吉川弘文館
- 2002年 加藤友康編『日本の時代史6 摂関政治と王朝文化』吉川弘文館

第4章 成果の活用と展望

第1節 成果の公開、報告と展示

第2節 成果の利活用、まちづくり



第4章 成果の活用と展望

第1節 成果の公開、報告と展示

1. 公開の必要性

文化財保護法（昭和25年法律第240号）は、文化財の所有者のみならずその他の関係者に対し、文化財を「公共のために大切に保存」し、「できるだけこれを公開する等その文化的活用を努める」（第四条2項）ことを誡う。なぜなら文化財は「わが国の歴史・文化等の正しい理解のために欠くことのできないもの」であり、「将来の文化の向上発展の基礎をなすもの」（第三条）だからである。この極めて重要な使命の根源こそが、文化財のもつ「本質的な価値」そのものである。

柳田國男は『郷土生活の研究』の中で、「自分たちの生活の過去に向かって、何らの知識欲も抱かず、また証拠のない解説に満足して、もうそれ以上の発見を望まない」人や社会を憂い、悲惨な歴史は「人間の無知、知っておらねばならぬことを知らなかった結果」（P15, 柳田1967）であると評し、「郷土研究」の必要性を説いた。同書の中で、大藤時彦は「将来の計画をたてるには過去に対する正確なる知識」が必要であり、それにより「無用の錯誤を避けることができ、現代の矛盾の由ってきたるべき原因を明らか」にし、「この世の中をより良くするための方策を考えることができる」（P251, 柳田1967の解説）とする。まさに文化財のもつ「本質的な価値」を追究し、それを正しく伝え、郷土文化の質的向上に資する行為が、平和で豊かな国土を維持し、ひいては「世界文化の進歩に貢献」（第一条）することに繋がるのである。

柳田國男 1967年『郷土生活の研究』筑摩叢書79。

2. 公開の手法

文化財（ここでは埋蔵文化財のことを指す）の保存には、現状保存と記録保存の二者がある。行政的判断である記録保存の措置は、「発掘調査」という考古学的手法により執り行われる。文化庁は、「発掘調査」を発掘作業と整理等作業、報告書の刊行の3つに分け、それぞれが連続した作業であると説明する（P7, 文化庁2004）。その上で発掘調査現場（注1）の積極的公開を義務づけ、調査成果の国民への還元を促す。「住民が地域の歴史への興味関心と埋蔵文化財行政に対する理解を深める」ために「現地説明会等による発掘調査現場の公開」（P18, 文化庁2007）が必要であり、また一方で「発掘調査は行政の施策として行われるものであるから、その成果は国民・地域住民に還元される必要」（P12, 文化庁2007）もあり、現地説明会のみならず「講演会、シンポジウム、展示会」などを行うものとする。つまり一般的な手法として、文化財の公開には報告と展示の二つがある。

注1) 発掘調査現場とは発掘作業を行っている場所を指すのが一般的であり、ここでの使用もその意味であると考えられる。しかしながら、埋蔵文化財の保存と活用が、これからの埋蔵文化財行政の視点（P3, 文化庁2007）として位置づけられるのであれば、「発掘調査」を構成する連続した3つの過程に於いて、適宜、積極的な公開を行うことが望ましいと判断される。

文化庁2004年「1 記録保存のための発掘調査に関する基本的事項」『行政目的で行う埋蔵文化財の調査についての標準（報告）埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会』

文化庁2007年「1.埋蔵文化財行政に求められる保存と活用のあり方」3.保存と活用を進めるための具体的施策」埋蔵文化財の保存と活用標準（報告）埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会

3. 公開の実践

(1) 発掘作業及び整理等作業時の公開

長野県埋蔵文化財センター（以下、当センターとする）の業務には、「埋蔵文化財保護思想の普及に關する事業」（第15条、註2）がある。記録保存の対象となった埋蔵文化財の公開は、この条項に基づき実施される。具体的には、発掘作業や整理等作業をホームページで公開するとともに、遺跡の「現地説明会」（1項）や「公開展示（速報展）」（2項）を積極的に開催し、さらには発掘調査の「成果の発表（報告会）」（2項）や「講座（講演会）」（3項）などを行っている。国道18号坂城更埴バイパス線関連の発掘調査に於いても、発掘作業を通じて、それらの業務を適宜行ってきた。主な経過は本書の第1章第2節2（4）発掘の公開に記してある。整理等作業を通じて、発掘作業と同様に公開の業務を進めてきており、その主なものには以下がある。



開催年月日	報告の内容	報告会・展示会の名称及び場所
2008年4月5日	発掘からみえる中世の社会 ～礎石・木簡そして土馬～	信州ふれあい歴史講座 於：長野県立歴史館
2009年6月6日	祈りの造形 ～六角木幢を考える～	信州ふれあい歴史講座 於：長野県立歴史館
2011年3月19日	中世の街道と門前集落 ～千曲市東條遺跡～	県埋蔵文化財センター遺跡調査速報展 於：長野県立歴史館
2011年7月10日	中世の街道と門前集落 ～千曲市東條遺跡～	県埋蔵文化財センター遺跡調査速報展 於：長野県伊那文化会館

註2）長野県埋蔵文化財センター 1998年「第15条 第3章埋蔵文化財調査技術の指導等に関する事務」長野県埋蔵文化財センター業務運営規定

(2) 報告書刊行時の公開

文化庁は「発掘調査」を連続した3つの業務に分けて考える。これまで当センターが実施してきた一連の公開事業も、その最終的な総括は、やはり3つ目に挙げられた発掘調査報告書の刊行にある。記録保存の対象となった遺跡の「歴史的価値」を地域住民に直接還元する目的に於いて、遺跡の所在する地域（ここでは千曲市）で、その地域の博物館や公民館等（森将軍塚古墳館及び長野県立歴史館、八幡公民館等）を利用して、成果の報告会や展示会を行うことは公開の望ましいあり方である。平成23年度の報告書刊行に伴い、平成12年度より開始された国道18号線（坂城更埴バイパス）改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の総括的報告会を、以下のように実施した。

開催年月日	講演・展示の内容	講演会・展示会の場所
2011年9月1日 ～10月10日	企画展 六角宝幢に祈りをささげた人々 ～八幡地区の古代から中世～	森将軍塚古墳館 (千曲市)
2011年9月10日	講演会 六角宝幢の遺立とその後 ～国道18号線関連遺跡の発掘調査～	長野県立歴史館 (千曲市)

4. 公開の概要（報告書刊行時の概要）

平成23年9月10日の総括的報告会では、調査成果からみた地域史（古代・中世史）について発表した。ここでは国内唯一とされた「六角木輪」（県宝名称「六角宝輪」）の造立に絡めた古代社会に関わる部分の骨格を示しておく。

（1）古代更級郡と古代集落、更級郡衙の成立と解体過程の地域史

①古墳社会の終焉（7世紀前半）

・聖徳太子や遣隋使が活躍した頃、八幡の地域では幾つかの農業集落が誕生し、それらを統括する中核的な村として東條遺跡がある。遺跡近傍には埴捨古墳群が築かれ、氏族制社会における地域支配の実態を追究できる素材を提供することができた。

②古代的社会的形成（7世紀後半）

・大化の改新は地域社会にも大きな影響を与えた。東條遺跡では氏族の長を想定させる大型の竪穴住居跡は認められなくなり、埴捨の台地上に峯謡坂遺跡が登場する。クニを分けて「評」を設置する政治的改革の一端が八幡の地域で実行された可能性があり、「更級評家」の存否、東山道支道の開道など、地域支配の変質を追究できる素材を提示できた。

③古代社会の成立1（8世紀前半）

・大宝律令の施行、平京城に遷都、「信濃国」が呼称される。古代国家の仕組みづくりは地域へ及び、計画的な集落編成と「更級郡家」が成立する。峯謡坂遺跡で集落が消失する一方で、東條遺跡に正方位指向の企画的な住居群が構築され、社宮司遺跡では2間×6間の長大な掘立柱建物群が築かれる。古代国家における地域支配の実態と地域での古代社会の成立を追究できる好素材を提供できた。

④古代社会の成立2（8世紀代）

・国分寺・国分尼寺の設置、平安京遷都、「信濃国府」が移転する。八幡の地域では、「郡衙関連施設」と想定される稲付遺跡や北稲付遺跡が新たに登場。社宮司遺跡では櫓状施設を持つ特殊な竪穴住居や長大な掘立柱建物などが改築され、東條遺跡でも住居群の改築が進む。墨書土器や木簡などを出土する前2者と、それを持たない東條集落では明らかな機能差、役割の違いがみられる。更級郡内には南宮遺跡や上五明条里水田址などの農業集落が新設され、峯謡坂でも再び集落が設営される。「更級郡衙」の増強と郡を支える農業集落の明確化等、古代社会の実態を追究できる素材を提供できた。

⑤古代社会の展開1（9世紀前半）

・郡で藤原氏が台頭し、密教文化が開花した頃、租税の未進や逾期などが表面化する。社宮司遺跡では公的実務空間から竪穴住居と数棟の掘立柱建物による私的な空間が区別・抽出されてくる。私的な空間構成の点では、峯謡坂遺跡や東條遺跡でも、集落内の竪穴住居のまとまり単位が一定程度の間隔を置いて独立して建設されるようになる。ことに峯謡坂に於いては、そうした単位の中心となる住居から印刻花紋の緑釉陶器や印刻のある土師器など特殊な遺物が出土する。律令国家における地域支配の蔭に、有力者（有力農民）層の出現を示す資料を提供することができた。

⑥古代社会の展開2（9世紀後半）

・藤原氏による摂関政治が常態化する中、京都石清水に八幡宮が勧請される。社宮司遺跡では掘立柱建物群を中心とした公的空間が消失し、私的空間が継続する。東條遺跡や篠ノ井遺跡群では居住域が急速に終息し、農業集落の移転が想定される。この頃、八幡の武水別神社は従二位に叙せられ、仁名年間には八ヶ岳崩落・千曲川の氾濫が起こる。社宮司遺跡の地鎮祭の遺構は極めて政治色の強い祭祀行為である。更級郡衙に関わる遺跡群の変化は、「更級郡家」の衰退と新たな地域支配層（富豪層・郡司子弟）の成長を暗示し、律令国家の変質を地域史から捉えることのできる重要な素材を提供できた。

⑦古代社会の終焉1（10世紀前半）

・藤原氏を頂点とする権門体制は、新たな土地制度を築いていく。律令制から初期荘園制への移行期、最後の班田と荘園整理が進む。このころ地方で承平・天慶の乱が起こる。社宮司遺跡では私的空間内に饗宴群飲を示唆する大量食器が出土し、有力層による公民（浮浪・逃亡）の囲い込み、さらには荒田の開発（娘捨土石流台地の開拓）が見えつつある。土地の私的所有は「荘園」の寄進により保護され、有力層は「負名」または荘園の「下司」として権門体制に取り込まれていったと考えられる。新秩序が形成される中、地域社会の動態を検討できる材料を提供できた。

⑧古代社会の終焉2（10世紀後半）

・峯誦坂遺跡では竪穴住居2軒の単位が継続し、土壌墓2基がある。社宮司遺跡の私的空間では、竪穴住居から高床住居に建築構造が変わり、井戸や井泉状の施設、屋敷地が形成される。屋敷当主の墓とみられる木棺墓が1基のみ構築され、木製の刀形及び弓形の形が副葬される。住居構造の変化や新たな埋葬形態は、屋敷地への新文化の流入を伺わせるとともに、当主の出自を問える要素である。地方氏族と新興勢力、地域社会での支配構造の転換を追究できる材料を提供できた。

⑨古代社会の終焉3（11世紀）

・「望月の歌」の主人、藤原道長の世となり、無量寿院の九体阿弥陀、さらには平等院鳳凰堂が完成する。後三年の役を経て、後半期には白河天皇の院政が始まる。院政期の新立荘園は地域間交通を活発にした。峯誦坂の集落は終焉を迎え、社宮司遺跡では屋敷地内の高床住居が改築、前代につくられた木棺墓の近傍に九体阿弥陀を描いた六角木幢が造立される。その後の屋敷地消失は、荘園公領制に伴う支配層の転換に起因する可能性がある。小谷郷地の荘園支配は、摂関家等有力貴族から石清水八幡宮家へと向かい、中世「小谷庄荘園」が成立したと考えられる。この時期に至り、六角木幢は民間信仰の宝塔へと機能転換をはかるものの、神社勢力の拡大と平氏政権が樹立される渦中で解体されたと想像される。古代律令社会から中世社会への転換を思考できる題材を提供できた。

⑩中世社会の形成から中世社会の成立（12世紀～14世紀）

・保元・平治の乱にて平氏台頭するも、壇ノ浦をへて源氏の世となる。木曾義仲は八幡の八幡宮で戦勝祈願し横田川原の戦いで勝利する。この頃の記録に六角木幢はみつからない。

・鎌倉幕府が成立し、体制下で各地に地頭を設置するが、小谷庄は地頭不設置の荘園とみられる。この頃、一本松街道の前身と考えられる道が栄え、更級川と宮川沿いの社地の河原に市が開設された可能性は高いが、農業生産集落の存在はつかめていない。13世紀の後半から14世紀までには道の南側に東條遺跡中世第2検出集落（町屋の形成）がつけられる。集落の機能はやや不明確だが、交通の発達と農工商人（「浮手浮食の輩」）の往来・寄宿、「給免田」の成立などを追究できる素材を提供できたと考える。



第2節 成果の利活用、まちづくり

1. 文化立国（文化立県）をめざして

平成7年文化政策審議会は、文化を次のようにまとめた。「文化は、国民一人一人にとって、人として生きるあかしであり、生きがいであるとともに、一国にとってはそのよって立つ最も重要な存立基盤の一つ」（注1）である。高度経済成長を遂げた戦後の日本は、今日「精神的な豊かさ」や「生きる喜び」を尊重する文化振興の時代へと移り、地方分権の推進によって、そのことを地域の中で実現させる地方文化再生の時代へと向かいつつある。文化政策審議会は、こうした動向を踏まえて新たな国家形成、「文化立国」を目指した施策を提示した。その骨子は6つにまとめられる。1 芸術創造活動の活性化、2 伝統文化の継承と発展、3 地域文化・生活文化の振興、4 文化を支える人材の養成と確保、5 文化による国家貢献と文化の発信、6 文化発信のための基盤整備である。

もとより文化財は、「歴史・文化等の正しい理解のために欠くことのできないもの」であり、「将来の文化の向上発展の基礎をなすもの」（文化財保護法第三条）と位置づけられており、「文化立国」形成を担う重要な素材と考えられる。平成19年文化審議会企画調査会は、このような文化財の、保存と活用をよりいっそう推進するための方策を提示した。その骨子は、①文化財を総合的に把握すること、②社会全体で文化財を継承していくことである（注2）。この2つの施策方針は、各々に「必要性」と「対応の方向性」でまとめられ、具体的な方策として提言された。

①文化財を総合的に把握する

○関連する文化財とその周辺環境を一体としてとらえるための方策

文化財の総合的な把握と保存・活用により地域の歴史・文化を保護する枠組みづくり

・地方公共団体による「歴史文化基本構想」の策定

「関連文化財群」と「歴史保存活用区域」の設定、保存・活用の体制整備

・「歴史文化基本構想」に対する支援

○文化財の保存・活用を適正化するための方策

国指定文化財を総合的に保存・活用する

・文化類型ごとの保存・活用の方針の明確化

・保存活用（管理）計画の策定の促進

・文化財に関する情報の的確な把握

②社会全体で文化財を継承していく

○文化財に対する親しみを深めるための方策

○文化財保護にかかわる人材を確保するための方策

○文化財保護に対する支援を充実させるための方策

注1）平成7年文化政策審議会（文化庁長官の諮問機関）提言。「新しい文化立国をめざして - 文化振興のための当面の重点施策について」

注2）平成19年『文化審議会文化財分働会企画調査会報告書』

2. 歴史文化基本構想と地域活性化

地域の文化財を周辺環境も含めて総合的に把握し、その保存・活用を図り、地域の魅力の増進、地域アイデンティティの創出等、歴史・文化の薫り高い地域づくりを推進する基本的な考え方が「歴史文化基本

構想」であり、具体的な施策方針が地方公共団体に求められる（P9、註2）。基本構想では、種々の文化財を歴史のあるいは地域的な関連性に於いて「関連文化財群」として捉え、その集中する地域について、周辺環境と一体化させた文化的空間づくり、「歴史文化保存活用区域」の設定を位置づける。この区域の特質は、文化的な環境の保護にあり、あくまで「人々の心を豊かにする文化的な空間の創出」（P11）にあり、「歴史的風致」の理念を目指すところにある。文化的な空間づくりは、都市計画法下でのまちづくりマスタープランや景観法下での景観保全計画の策定などと連動することで、より効果的に行い得る。国道18号坂城更埴バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財の記録保存の措置は、本書第3章にて総括したように、古代社会の成立より中世社会の終焉まで、実に1000年間に亘る間断のない地域史を再構築した。ことに稲荷山より八幡、姉捨の地域に於いての埋蔵文化財の持つ歴史的な意義は大きく、その成果の活用は今後さらに期待されるところである。平成23年5月と9月に報告書完了（本書）に伴う成果報告会を地元の千曲市で開催し、当該地域に於ける文化的活用の一案を示した（註3）。ここでは、そうした活用の理念に従い、地域に於ける「歴史文化基本構想」さらには「歴史まちづくり」の構築に向け、現状で捉えうる構成要素を提示し、「文化立県」の一翼を担う千曲地域の、魅力的で活力ある「まちづくり」への題材にしたいと思う。

註3) 5月15日2011年度長野県考古学会総会報告会「中世の街道と門前集落」於：長野県立歴史館
9月10日森将軍塚古墳館企画展講演会「六角宝輪の造立とその後」於：長野県立歴史館

「歴史・文化的風致」を構成すると考えられる主な要素

①継承すべき主な自然環境

- ・冠着山・三峯山、姉捨土石流台地（奇岩群含む）、弁財池の湧水、更級川・佐野川・千曲川、佐野川扇状地、動植物群（森林域・棚田域・河川域）など
- ・ため池（大池・治田池）、板清水、棚田・四十八枚田、扇状地上の水田、武水別神社社叢など
- ※【日本の棚田百選】（H11.25ha、農林水産省選定）
- ※【姉捨（田毎の月）】（H11.5.10、名勝）
- ※【姉捨の棚田】（H22.2.22、重要文化的景観）
- ※【武水別神社社叢】（S40.2.15、長野県天然記念物）
- ※【姉捨長楽寺桂ノ木】（H6.3.31、千曲市天然記念物）

○自然環境を活用する施設

- ・聖高原権平保養地、大池（市民の森・自然の家・キャンプ場）、姉捨サービスエリア、姉捨駅、公園（姉捨・月見畑・句碑）、姉捨観光会館、千曲川サイクリングロードなどの施設群
- 自然環境を守り育む施策と活用へのロゴ
- ・県立自然公園、名勝地、文化的景観、天然記念物、各種調査報告書、各種保存会など
- ・善光寺平の夜景、日本三大車窓、姉捨十三景、田毎の月など

②継承すべき主な歴史環境

○古代を中心としたもの

- ・古代集落（大道遺跡・峯諺坂遺跡・東條遺跡・湯屋遺跡・下古野遺跡など）、郡衙推定地、官衙関連遺跡（北稲付遺跡・稲付遺跡・社宮司遺跡・青木遺跡など）
- ・経塚・火葬墓（矢崎山経塚・堂城山経塚・小丸山経塚、上ノ田遺跡・平田遺跡など）
- ・古代の道（東山道支道推定地）と条里（八幡条里的遺構推定地）、荘園（小谷庄）
- ・寺社（青木庵寺・武水別神社（八幡宮）・笹焼神社？など）
- ※【木造六角宝輪】社宮司遺跡（H23.3.31、長野県宝）

- ・文書ほか（建部大垣、続日本紀・古今和歌集・中右記・石清水家文書等の関連記事）
- 中世を中心としたもの
 - ・中世門前集落（東條遺跡など）
 - ・中世以降の道（猿ヶ馬場峠・一本松街道など）
 - ・寺社（長楽寺・大雲寺など）
 - ・文書ほか（木曾義仲・諏訪時光、大文字一揆など）
- 近世以降を中心としたもの
 - ・城郭・宿場（稲荷山城跡・桑原宿・稲荷山宿、松林家住宅・関家武家住宅など）
 - ・道（北国西街道（善光寺道））
 - ※【龍洞院架道橋】（H18.10.18、登録有形文化財）
 - ※【滝沢川橋梁】（H18.10.18、登録有形文化財）
 - ※【荏沢川石堰堤】（H21.1.18、登録有形文化財）
 - ・寺社ほか（斎の森神社、松田家住宅、芭蕉翁面影塚等の句碑、霊静山石仏群など）
 - ※【松田家住宅主屋】（H16.11.22、長野県宝）
 - ※【武水別神社主松田家館跡】（H18.4.20、長野県史跡）
 - ※【木造愛染明王坐像】長雲寺（M39.4.14、重要文化財）
 - ・文書ほか（上杉家文書・真田家文書・松田家文書、信濃奇勝録・更科紀行・善光寺名所図会、上杉輝虎・真田信之・松尾芭蕉など）
- 歴史環境を活用する施設
 - ・県宝松田家住宅主屋や登録文化財の荏沢川石堰堤などが保存されているが、これらの活用を推進していくための付帯施設はまだ整っていない。
- 歴史環境を守る施策と活用へのロゴ
 - ・重要文化財、登録文化財、県宝（県指定文化財）、県史跡、各種の調査報告書など
 - ・更級郡衙、国内唯一の六角木輪（宝輪）、木曾義仲や上杉輝虎の願い、一本松街道と武水別神社（お八幡さん）、松尾芭蕉と更科紀行、善光寺道と桑原・稲荷山の宿、嫉捨十三景、田毎の月と旅人
- ③継承すべき主な民俗環境ほか
 - 衣食住に関わるもの
 - ・服飾習俗、飲食習俗（武水別神社うずら餅）、居住習俗（水利慣行、坂のある町【須永恵一の絵】）
 - 生産・生業に関わるもの
 - ・農耕（棚田農業）、漁労（千曲川つけば漁）、食品（みそ・醤油）、リンゴ（八幡中原の国光の原木）
 - 口頭伝承に関わるもの
 - ・伝説、昔話（雑宝蔵経・嫉捨伝説）
 - 信仰に関わるもの
 - ・祭祀（大頭祭・神楽）、法会、祖霊信仰、田の神信仰等
 - ※【頭人行事】武水別神社の頭人行事（大頭祭）（S46.11.11、選択無形民俗文化財）
 - ※【伎楽面】武水別神社（S53.3.24、千曲市有形文化財）
 - ※【金銅六角釣燈籠】武水別神社（S48.3.15、千曲市有形文化財）
 - ※【銅製釣燈籠】武水別神社（S45.4.13、長野県宝）
 - 年中行事等に関わるもの
 - ・誕生、育児、年祝い、婚姻、葬送、正月、節分、節句、盆等【治田神社の茅の輪】

○民俗環境を活用する施設

- ・選択文化財の頭人行事を行うための齋の森神社、武水別神社、笹焼神社等、関連施設群は、今のところ保全されている。

○民俗環境を守る施策と活用へのロゴ

- ・選択無形文化財、県宝（県指定文化財）、各種の調査報告書、各種保存会など
- ・大頭祭、棚田の田植え、棚田オーナー制度、つけ場漁

3. 歴史・文化的まちづくりにむけて（第29図）

A. 重要文化的景観（姨捨棚田）をゆく

姨捨棚田を取り巻く景観形成については、平成20年に報告された文化的景観に関する保存計画書第2章第5節（P47～P54）及び第3章（P56～P66）に的確にまとめられている（註4）。ことに第2章第5節での文化的景観の保全に関する提言は、文化的なまちづくり形成に関する理念が適切に表現されており、当該地域でのまちづくりプランにとって拠り所となる指針である。三峯山を頂点に県立公園縁辺部までの森林地帯は、大自然を満喫できる憩いの空間である。大池より下り、八幡の名水（板清水）の湧く地を過ぎて、水の流れに導かれる景観は、やがて人と自然とが織りなす文化的な空間へと至る。集落と棚田は細く曲がりくねった坂道そして水路により連なり、高所から低所へ、低所から高所へと、人々の生への躍動がひしひしと感じられ、元気の出る空間がそこにある。現在、高速交通網の整備が進み、中央自動車道長野線とJR篠ノ井線が長野と松本を短時間で結び、そこを往来するすべての人々の目に、大河・千曲川と広大な善光寺平、そして眼下に広がる棚田が飛び込んでくる。姨捨サービスエリア（スマートIC）や姨捨駅（スイッチバック方式で明治33年開駅）からの遠望はまさに絶景であり、「夜景百選」をも堪能できる視座にある。これもまた今日的な意味での生の躍動を体感できる空間形成のひとつであろう。棚田周辺を散策すれば、姨石や姪石などの奇岩群が現れ、姨捨土石流台地誕生の歴史を目の当りに大自然の強大な力を痛感する。姨捨の棚田周辺は人知れた月の名所である。芭蕉を始め数々の歌人が訪れ、あるいは想いを馳せて歌詠みをした場所であり、今日なお俳句（「おぼすて観月祭」）が読み継がれている。句碑の並ぶ長楽寺一帯は、まさに文学的な、知的感性を豊かにする空間である。とともに歌川広重の描く「田毎月」（たごとのつき）から『善光寺名所図絵』、さらには須永恵一の絵画、現代写真に至るまで芸術的な心性までも広げてくれる空間である。棚田には水口分けした用水に水が留まることなく流れ下る。棚田は更級川に沿い、また更級川には一本松街道が寄り添い、門前の集落を経て武水別神社へと至る。

B. 選択無形民俗文化財（頭人行事）を味わう

一本松街道は中世物流の動脈であり、武水別神社に近い八日市場地帯周辺には、中世の市が開設されていた可能性が高い。今回の発掘調査で、東條遺跡（中世面）を確認したことで、これまで不鮮明であった中世社会の一端が見出され、当該地域の中世形成期を考える上で極めて重要な成果となった。今後、遺跡調査地とそこに隣接する齋の森神社、一本松街道を一体のものとして体感できる工夫が求められてこよう。武水別神社は諏訪大社と肩を並べ古代には從二位に叙せられた神格を持つ。「お八幡さん」と呼ばれて親しまれ、暮れの12月10日から14日までの間、頭人行事が執り行われる。およそ400年間、絶えることなく続けられてきた稀有な民俗行事である。齋の森神社より出でて街道を下り、武水別神社、さらには笹焼神社へと「お練り」は続く。祭礼を行うべき神聖な空間であり、今日では交通安全祈願、誕生や年祝い、厄払いなどの宗教的行為が武水別神社で行われている。祭りでの出店は欠かせないが、境内で売られる「うずら餅」は名物のひとつであり、11月初旬には商工会議所主催で「大菊花展」が催され、数千鉢の大輪が境内を包む。

C. 長野県史跡（松田家館跡）を訪ねる

平成21年千曲市は前年の保存計画書の歴史的評価の部分を補足する目的で歴史的調査報告書を作成した（註5）。これにより土石流台地裾部に展開する古代以降の生活史、人々の営みの歴史がクローズアップされ、文化的景観を構成する重要な柱が、またひとつ整理された。その端緒となったのが国道18号線の改築事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査の成果（記録保存の措置）である。仮称、坂城更埴バイパスは、埴捨土石流台地裾部を横断して長野と上田を結ぶ高規格道路である。現国道の慢性的な交通渋滞を緩和する目的で進められた本事業は、これまで開発の少なかった当該地域に新たな風を吹き込んだ。日常生活の利便性は飛躍的に向上し活力は再起したといえる。発掘調査は低地部にかけて広域にわたって実施され、古代社会から中世社会まで1000年間の地域史を語る膨大な資料が蓄積された。その結果が既刊の2冊（註6）及び本書である。聖高原に端を発する佐野川により形成された扇状地には、古くから更級郡衙や東山道支道の所在が推定されており、これに関連すると考えられる北稲付遺跡や社宮遺跡などが知られる。古代信濃国で最も多い9郷を抱えた郡の中心地が、ここには存在するのである。ことに社宮遺跡は、この郡衙が解体する9世紀後半から10世紀に、遺跡の構造的な変化が観られ、小谷庄荘園の成立とも相俟って、律令社会から封建社会への転換を語ることで重要な遺跡であることが解ってきた。遺跡の終焉期に築かれた方形区画の屋敷地、九体阿弥陀の描かれた六角木幢（宝幢）造立後の行方は、一本松街道と武水別神社門前に形成された東條遺跡（中世面）の集落を垣間見たとき、武水別神社西方にある方形土塁を持った松田家館跡の時間的な遡及問題に行き当たる。今のところ、発掘調査で中世前期に迫る確証は得られていないが、今後の考古学的追究には目が離せない。松田家館跡は宮司松田家の住宅主屋と合わせ、それぞれ長野県史跡、長野県史の指定を受け公開されている。一步その中に踏み込むと歴史の重みを肌で感じる空間が広がり、一見の価値がある。佐野川扇状地に分布する遺跡（註7、八幡遺跡群を中心とする）は、決して単独で評価されるものではなく、すべてが一体化して初めて大きな歴史的意味を持つ。歴史の流れを歩き訪ねて体感できる極めて知的な空間を創出する工夫が求められている。

D. 歴史的風致（善光寺道と桑原・稲荷山宿）を楽しむ

「歴史的風致」とは、「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地の環境」（第一条 平成20年法律第40号）をいう。これの維持向上のための施策を通して、「個性豊かな地域社会の実現」と「都市の健全な発展及び文化の向上」が図られる。当該地域は近世に至り物流の大動脈が佐野川に沿う北国西街道、いわゆる「善光寺道」に移る。街道は稲荷山宿を経て、篠ノ井追分まで北国街道（北国往還）と合流し善光寺へと至る。稲荷山宿は江戸時代に西街道随一の宿場（家屋約500軒）として栄え、明治時代には生糸や絹織物を扱う商都でもあった。町割りには新町（荒町）・五日町（中町）・横町（中町）・柳町（八日町）があり、横町（現在の稲荷山郵便局あたり）に今も枳形が残る。街道沿いの建造物は消滅しつつあるが、街路はよく残り、一步小路に入ると漆喰やなまこ壁の蔵がある。ガン封じで知られた長雲寺には重要文化財の愛染明王坐像もあり、ふる里漫画館（近藤日出造の作品）や蔵し館（松林家住宅修復）等を拠点に、近世の宿場街路を散策し、近代の蔵などを楽しむ空間がここにはある。しかし見所はそればかりではない。稲荷山宿を南西方向に佐野川を遡れば、松代藩の宿場町、桑原宿（問宿）がある。緩やかな坂道に寄り添う街並みは、稲荷山宿では味わうことのできない、街道のもうひとつの風情である。こうし戸を持つ旧家のたたずまいを通り過ぎるとき、数百年の時の流れは消えさる。本陣跡や番所跡、伴月楼記念館（関家武家住宅）などは活用の拠点として大事にすべき場所であろう。「善光寺道」を北にそって畠中を歩けば、延喜式内社として知られた治田神社がある。お宮は桑原宿近くと稲荷山宿近くにあり、それぞれ上の宮と下の宮と呼ばれている。上の宮周辺にはリンゴ果樹園（中原地区は国光の原木が生き続け

る)が広がり、下の宮は治田池に接し桜の名所として写真コンテストなどが催される。現在を生きる人々の営みとともに、憩い、癒しの空間が共生する。街道と宿場町を核として形成された歴史的な風致は、生活文化の発展とともに現代的視点で維持し向上させていくことが重要な課題である。

註4) 2008年『姚捨糶田の文化的景観保存計画書』千曲市教育委員会

註5) 2009年『姚捨糶田の文化的景観歴史的調査報告書』千曲市教育委員会

註6) 2006年『一般国道18号(坂城更埴バイパス)埋蔵文化財発掘調査報告書1ー千曲市内その1ー 社宮司遺跡ほか』長野県埋蔵文化財センター

2010年『一般国道18号(坂城更埴バイパス)建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書2ー千曲市内その2ー 社宮司遺跡六角木輪保存修復編』長野県埋蔵文化財センター

註7) 2008年『長野県千曲市遺跡分布図』千曲市教育委員会

註8) 千曲市総合計画は2007年(平成19年)より2016年(平成28年)までの10カ年で進められる長期計画であり、「基本構想」・「基本計画」、「実施計画」により構成される。千曲市の「まちづくりの基本理念」は、「共生」、「交流」、「協働」のまちづくりで、6つの基本目標がある。

基本目標1. 支え合い、元気に暮らすまち

基本目標2. ふるさと自慢を未来に継ぐまち

基本目標3. 市民が憩い、心穏やかに暮らせるまち

基本目標4. のびのびと社会にはばたく人が育つまち

基本目標5. 千曲の魅力が交流と活力をはぐくむまち

基本目標6. 信頼と連携で力を合わせる市民主体のまち



第29図 「歴史・文化的風致」を構成すると考えられる主な要素と空間

報告書抄録

ふりがな	いっばんこうどう 18 古う (さきさこうしよくばいばす) まいぞうふんかざいはくつちようさほうこくしよ 3-ちくましない その 3-1
書名	一般国道 18 号 (坂城更埴バイパス) 埋蔵文化財発掘調査報告書 3-1 千曲市内その 3-1
調査名	東條遺跡ほか
巻次	3
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	92
編者名	町田勝剛 市川桂子 岡村秀雄
編集機関	(財) 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4 ☎026-293-5926

発行年月日		2012年3月21日		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	コード						
		市町村	遺跡番号					
家説取道跡	長野県千曲市 八幡字益坂	20216	105	36°30'45"	138°5'44"	20030708 ～20031010 20040413 ～20040817 20061010 ～20061025	5,190 m ²	一般国道 18 号 (坂城更埴バイパス) 建設に伴う発掘調査
西中曽根道跡	長野県千曲市 八幡字西中曾根		106	36°30'41"	138°5'52"	20020422 ～20020918 20040629 ～20040817	4,401 m ²	
東中曽根道跡	長野県千曲市 八幡字東中曾根		89	36°30'49"	138°5'57"	20020422 ～20021216	5,146 m ²	
東條道跡	長野県千曲市 八幡字東條		118	36°30'38"	138°6'16"	20020422 ～20021125 20030414 ～20030725 20050801 ～20051209 20060403 ～20061215 20070402 ～20071130	15,666 m ²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
家説取道跡	集落跡 墓跡	古墳時代終末～ 平安時代前半	竪穴住居跡 26、掘立柱建物跡 1、 土坑 237、墓 6、溝跡 2、集石 4、 遺物集中 1、焼土跡 1、性格不明 遺構 14	弥生時代の土器・石器、古代の 土師器・須恵器・灰輪陶器・緑輪 陶器、鉄製品	弥生前期と後期の土器箱、9 世 紀前後の須恵器土師 C 類・円面 硯、鉄製鍔先など
西中曽根道跡	集落跡 墓跡	古墳時代前期末 ～中期初頭	竪穴住居跡 5、掘立柱建物跡 2、 土坑 45、溝跡 3	古墳時代前期～中期の土器・石器	小型丸底土器・球脚甕、有枚高 環など
東中曽根道跡	集落跡	弥生時代後期 後半～終末 古墳時代前期 前半	竪穴住居跡 13、掘立柱建物跡 4、 土坑 135、溝跡 7	弥生時代後期の土器・石器、古墳 時代前期の土器	弥生後期の赤彩大形甕、繻羅文 の甕、磨製石包丁など
東條道跡	集落跡	古墳時代後期～ 平安時代中期 鎌倉時代後期～ 室町時代中期	竪穴住居跡 75、掘立柱建物跡 51、溝跡 31、欄列 3、墓 3、方 形竪穴建物跡 15、焼土跡 14、遺 物集中 5、敷石遺構 17、土坑 2670	古墳時代後期の土器・石器、古代 の上野器・須恵器・灰輪陶器・緑 輪陶器、石器、鉄製品、木製品、 中世の陶磁器・石製品・漆器類・ 木製品・鉄製品	古墳時代の緑彩織・初期須恵器 杯、8 世紀から 9 世紀の墨土器 ・円面硯・漆紙様付着物、13 世紀から 16 世紀の青磁・漆器類、 皿、櫛、梨杵木桶・鳥帽子など
要約			家説取道跡は、三峯山の土流堆積物上に立地し、眼下に八幡道跡を望む。古墳時代終末に集落形成がなされ、奈良時代の空白期を経て、奈良末から平安時代に入り再び集落が形成され 10 世紀まで存続する。間置期と顧られる鉄製鍔先を持ち、かつ豊富な緑輪陶器を保有した生産集落である。西中曽根道跡・東中曽根道跡・東條道跡は、いずれも峡谷上流堆積物上に立地する。田ごと観音で知られる四十八枚田の眼下に西中曽根道跡と東中曽根道跡はあり、弥生時代後期終末と古墳時代前期末～中期初頭の集落である。弥生後期の住居跡は東中曽根道跡に中心があり、1 軒の大型住居跡と 2～3 軒の中・小型住居跡、掘立柱建物跡で単位が形成される。古墳中期初頭の居住域は西中曽根道跡に中心があり、中・小型の住居跡 2～3 軒で集落の単位が形成される。名勝「峡谷の棚田」の眼下に位置するのは東條道跡であり、広域にわたり古墳時代終末から平安時代までの集落が営まれる。当地地の拠点となる農業生産集落であり、古墳時代終末は大型型竪穴住居跡 1 軒と中・小型の住居跡 2～3 軒の単位が 3～4 つ組み合わさって、ひとつの生産集落を構成する。奈良時代以降、ことに更替期前後の整備が進む時期に至ると、東條道跡の住居跡数は減少し、集落規模を縮小して 9 世紀末まで存続する。その後に 300 年の空白期を経て、中世前期に入り再び集落形成がなされる。鎌倉時代の集落は掘立柱建物跡と井戸跡を中心に町屋的な形成がなされ、武水明神社の門前、一本松街道脇に集落が発達する。室町時代には集落構造が変化し、礎石建物跡や石垣の井戸、方形竪穴建物跡、さらには石敷きの道路施設などが作られる。漆器の櫛・皿類や輸入陶磁器、渡来銭などが豊富に出上し、呪符木函(蘇民持未符など)の出土もある。有力者の屋敷地が形成され、門前の集落が整備される。		

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 92

一般国道 18 号（坂城更埴バイパス）
埋蔵文化財発掘調査報告書 3

—千曲市内その 3—

東條遺跡ほか〈本文編〉

発行 平成 24（2012）年 3 月 21 日

発行者 国土交通省関東地方整備局長野国道事務所
（財）長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター

〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4

Tel 026-293-5926 Fax 026-293-8157

E-Mail info@naganomaibun.or.jp

印刷 カシヨ株式会社

〒381-0037 長野県長野市西和田 1-27-9

Tel 026-251-0510 Fax 026-251-0500